

石江遺跡群

発掘調査報告書Ⅶ

-石江土地区画整理事業に伴う発掘調査-

(第3分冊：新田(1)・(2)遺跡本文編,
石江遺跡群補遺編・分析編5・総括編)

平成25年度

青森市教育委員会

青森市埋蔵文化財調査報告書 第116集-3

石江遺跡群

発掘調査報告書Ⅶ

-石江土地区画整理事業に伴う発掘調査-

(第3分冊：新田(1)・(2)遺跡本文編，
石江遺跡群補遺編・分析編5・総括編)

平成25年度

青森市教育委員会

例 言

1. 本書は、青森市（担当：都市整備部石江區画整理事務所）より委託を受け、青森市教育委員会が平成15～25年度に発掘調査を実施した石江遺跡群に関する発掘調査報告書である。
2. 本書に掲載される内容は、石江土地區画整理事業に係る新田（1）遺跡（青森県遺跡台帳番号01078）と新田（2）遺跡（青森県遺跡台帳番号01080）の本文、石江遺跡群の補遺資料および分析結果ならびに総括についてまとめたものである。
3. 新田（1）遺跡の本文は既刊の青森県埋蔵文化財調査報告書（以下青市埋報とする）青市埋報第106集第2分冊で遺構図、第3分冊で遺構に関する情報、青市埋報第107集第1分冊で遺物実測図と遺物に関する情報が掲載されている。新田（2）遺跡については青市埋報第107集第2分冊で遺構図と遺構に関する情報、第3分冊で遺物実測図と遺物に関する情報が掲載されている。また、両遺跡の縄文時代の遺物については青市埋報第108集の第1分冊で縄文時代遺物編として報告されている。
4. 本書の作成および編集は青森市教育委員会が行い、木村淳一・児玉大成・井上奈穂子が担当した。担当は総括編第V章第1節の記述を児玉が、第IV章の編集の一部を井上が、執筆依頼原稿や分析結果に関する内容を除くその他の部分の執筆および編集を木村が担当した。
5. 補遺編に掲載した遺物は平成22年度に青森県埋蔵文化財調査センターから譲与を受けた新田（1）遺跡（青森県埋蔵文化財調査報告書第472集）と新田（2）遺跡（青森県埋蔵文化財調査報告書第471集）の未掲載資料も含まれる。
6. 分析編5については、次の方々から玉稿を賜った。深謝の意を表する。
能城修一（森林総合研究所木材特性研究領域）、大山幹成（東北大学学術資源研究公開センター植物園）、小口雅史（法政大学文学部）、森勇一（金城学院大学）、松本建速（東海大学文学部）、山口博之（山形県立博物館）、竹内孝・中村和之（函館工業高等専門学校）、中村隼人（日本建築学会）
7. 分析編5は依頼原稿のほか、分析委託業務を実施し、下記受託者の分析結果について掲載した。
株式会社吉田生物研究所、株式会社パレオ・ラボ
8. 掲載した資料に関する原因・データ等は、一括して青森市教育委員会が保管している。
9. 本報告に係る発掘調査および報告書作成にあたって、下記の諸氏・機関等からご指導・ご協力を頂いた。記して感謝申し上げる次第である。（順不同・敬称略）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、青森県教育庁文化財保護課、青森県埋蔵文化財調査センター、浅井和春、五十嵐祐介、伊藤武士、井上雅孝、岩井浩介、岩井清人、岩田安之、宇部剛保、小口雅史、加藤陸則、藤江宏之、北野博司、工藤清泰、小松隆史、齋藤淳、榎原悠高、彼川真一、佐々木由香、島口天、白鳥文徳、杉野森淳子、鈴木和子、鈴木歌則、瀬川悠、田中珠美、田中広明、出越茂和、長尾正義、中野晴久、中村隼人、新山隆男、齋元洋、羽柴直人、原明芳、藤澤良祐、藤原正明、船木義勝、古川淳一、増山頼之、松本建速、水澤幸一、村田淳、百瀬正恒、八重樫忠昭、八木光則、安井俊則、渡辺晃宏

凡 例

1. 図版番号および表番号は、本分冊中の通し番号で表記した。表記方法としては種別ごとの番号とともに分冊番号である3を先頭に付した。具体的には「図3-〇」、「表3-〇」という形にした。なお、分析編5および総括編では執筆者の表記に従った。

2. 遺構の掲載について

(1) 方位は国土地理院第X系平面直角座標系に基づく座標北である。座標系は旧日本測地系(TOKYO)に基づいている。

(2) 各図の縮尺は以下の縮尺を基本とし、それ以外のものについてはスケールを付して図示した。

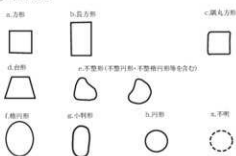
1/2,500 1/1,200 1/1,000 1/800 1/600 1/500 1/300 1/200 1/100 1/60 1/30

(3) 水平基準は海拔高をメートル(m)で表示した。

(4) 遺構の略号・番号は石江遺跡群に関する既報告の報告書の表記に則った。具体的には、SI=堅穴住居跡・堅穴遺構、SK・SKa=土坑、SE・SEa=井戸跡、STP・STPa=溝状土坑(Tピット)、SA=冊列、SB・SBa=掘立柱建物跡、SP=ピット、SD=溝跡、SN=カマド状遺構・炉跡・焼土状遺構、SC=埋設土器遺構、SX=その他の遺構、SF=道路跡で、遺跡単位で表記方法が異なるものがある。本報告内に含まれる石江遺跡群補遺編で修正報告された内容については本書の記述が優先する。

(5) 堅穴建物(住居)跡、土坑やピットの形態について本報告総括編中で整理しているが、基本的には当委員会が平成18年度に刊行した『石江遺跡群発掘調査報告書第94集』で提示した分類に基づき提示している。形状の分類については下記に提示する。

① 平面プラン



② 断面プラン



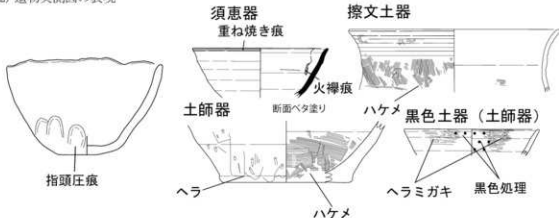
3. 遺物の掲載について

(1) 各図の縮尺は以下のとおりである。なお、一部の資料については下記に提示した以外の縮尺で取り扱ったものもあり、スケールで表記している。

土器・陶磁器 1/3 石器・石製品 1/2・1/3 土製品 1/2・1/3

木製品 1/2・1/3 古銭 1/1

(2) 遺物実測図の表現



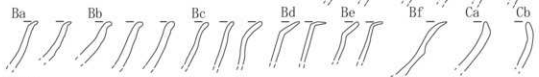
(3) 新田 (1) 遺跡および新田 (2) 遺跡本文編において分類に使用した口縁部形態の区分は青森県埋蔵文化財調査報告書第244集『隠川 (4) 遺跡・隠川 (12) 遺跡 I』(青森県教育委員会 1998) 第V章3 (1) (pp.17-19) で提示の分類を基に一部追加・変更したものを利用した。また、底部資料の分類については独自の区分で下図の通り区分した。

食器具 (大文字と小文字の組み合わせで表記)

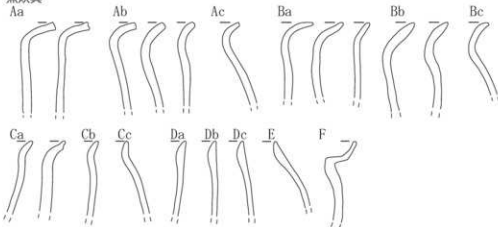
- A. 直線的なもの
 a. 口唇部が先細り気味のもの
 b. 口唇部が丸みを帯びるもの
 c. 口唇部の内面側が面取りされるもの
 B. 外反・外傾するもの
 a. 口唇端部が外に屈曲するように折れ、口唇部が先細り
 b. 口唇端部が外に屈曲するように折れ、口唇部が丸みを帯びるもの
 c. 口縁下部から緩やかに外反するもの
 d. 口縁部で屈曲するように外反させ、口唇部が先細り
 e. 口縁部で屈曲するように外反させ、口唇部が丸みを帯びるもの
 f. 体部側に明確な段を持ち、口縁部は外反するもの
 C. 内湾するもの
 a. 口唇部が先細り気味のもの
 b. 口唇部が丸みを帯びるもの

煮炊具 (大文字と小文字の組み合わせで表記)

- A. 口唇部に平滑な面をもつもの
 B. 口唇部が丸みを帯びるもの
 C. 頸部が短い資料
 D. 無頭気味で、直線的な器形
 F. 受け口状 (二段口縁)
 a. 口径が体部最大径を上回るもの
 b. 口径と体部最大径がほぼ同じもの
 c. 体部最大径が口径を上回るもの



煮炊具



A 木炭痕

Aa 平行痕 (柵目状・板目)

Ab 平行痕 (控葉)

Ac 網状痕

B 砂底

C 編物痕

Ca 弧編痕

Cb 編物 A タイプ

D 回転糸切

Da 右回転 (幅狭)

Db 右回転 (幅広)

Dc 左回転・無

Dd (詳細不明)

E 静止糸切

F 工具調整

Fa ヘラ削り・ヘラナデ・ハケメ

Fb ヘラミガキ

Fc 菊花削り

Fd タタキ

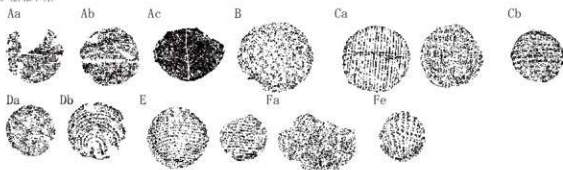
Fe ヘラ描き糸織

G 無調整・指ナデ

H 中空 (順)

I 丸底

J 目孔付 (順)



目 次

例言 凡例 目次

(新田(1)遺跡本文編)

第I章 新田(1)遺跡

第1節 縄文時代

1. 遺構	1
-------	---

第2節 古代

1. 遺構	5
2. 遺物	10

第3節 中世以降

1. 遺構	20
2. 遺物	26

(新田(2)遺跡本文編)

第II章 新田(2)遺跡

第1節 縄文時代

1. 遺構	38
-------	----

第2節 古代

1. 遺構	44
2. 遺物	49

第3節 中世以降

1. 遺構	57
2. 遺物	60

(石江遺跡群補遺編)

第III章 補遺資料

第1節 内容訂正資料	73
------------	----

第2節 追加資料	78
----------	----

第3節 追加資料2 (H.25 新田(1)遺跡)	121
--------------------------	-----

(石江遺跡群分析編5)

第IV章 分析5

第1節 高間(6)遺跡出土木製品樹種同定結果	153
------------------------	-----

第2節 高間(1)遺跡出土木材の年輪年代測定	154
------------------------	-----

第3節 新城平岡(4)遺跡から出土した大型植物遺体	158
---------------------------	-----

第4節 高間(1)遺跡放射性炭素年代測定	172
----------------------	-----

第5節 高間(1)遺跡出土炭化木製品の樹種同定	174
-------------------------	-----

第6節 石江遺跡群から出土した土器の胎土材料と基盤層等の薄片分析	176
----------------------------------	-----

第7節 石江遺跡群出土土器胎土の蛍光X線分析	190
------------------------	-----

第8節 青森市石江遺跡群から出土した木製品類と自然木の樹種とその意味	198
------------------------------------	-----

第9節 新田(1)・(2)遺跡出土のガラス製品の成分分析	201
------------------------------	-----

第10節 青森市石江遺跡群出土土器および遺跡周辺土壌の化学分析	202
---------------------------------	-----

第11節 青森市高間(1)遺跡から発見された昆虫化石と古環境	214
--------------------------------	-----

第12節 石江遺跡群で検出された掘立柱建物跡の機能と特徴	223
------------------------------	-----

第13節 古代相輪の諸相	254
--------------	-----

第14節 石江遺跡群の歴史的背景とその展開	276
-----------------------	-----

(石江遺跡群総括編)

第V章 総括

第1節 縄文時代・弥生時代	277
---------------	-----

第2節 古代	294
--------	-----

第3節 中世以降	342
----------	-----

引用参考文献	346
--------	-----

結語	351
----	-----

石江遺跡群総括一覧表	352
------------	-----

報告書抄録	357
-------	-----

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧	
----------------	--

第1章 新田(1)遺跡

新田(1)遺跡は、昭和54年に青森県教育委員会によって201-078として台帳登録された西バイパス(2)遺跡と201-081として登録された西バイパス(5)遺跡が、平成13・14年度に実施された石江地区埋蔵文化財包蔵地試掘・確認調査の結果で統廃合され、新田(1)遺跡(遺跡台帳番号201-078)として登録された。

平成15年度から平成19年度にかけて土地区画整理事業に伴う発掘および東北新幹線建設に伴う調査が青森市教育委員会(以下市教委)で実施され、新幹線部分の調査成果は平成18年度に青森市埋蔵文化財調査報告書第94集『石江遺跡群発掘調査報告書』で報告されている。土地区画整理事業の遺構に関する情報は、平成21年度に青森市埋蔵文化財調査報告書第106集『石江遺跡群発掘調査報告書II』で遺構図、計測情報等の遺構観察表・写真図版が報告されている。また、新田(2)遺跡を含む掘立柱建物跡について調査員であった故高島成俊氏によって検討されている。遺物についての情報は縄文時代の遺物について平成22年度刊行の『石江遺跡群発掘調査報告書IV』の第1分冊中で報告し、古代以降の資料は同年度に刊行された『石江遺跡群発掘調査報告書III』の第1分冊中で遺物図と観察表および写真図版を掲載した。

その他、平成17年度に市教委が試掘調査を実施した国道7号青森西バイパス(以下西バイパス)の北側の東北新幹線建設工事部分は青森県埋蔵文化財調査センター(以下県埋文)が調査を実施し、平成19年度に青森県埋蔵文化財調査報告書第472集『新田(1)遺跡』として報告されている(青森県教育委員会2009)。

県埋文の調査資料は隣接する新田(2)遺跡の県埋文調査資料とともに平成22年度に譲与され、市教委の管轄資料となった。なお、一部の資料は、本報告第III章第2節の中で追加資料として掲載した。

遺跡についての総括や隣接する新田(2)遺跡と併せた内容は、本報告第V章中で検討することとし、本章では平成15年度から平成19年度まで発掘調査を実施し、遺構情報と遺物情報のみ報告された土地区画整理事業に伴う新田(1)遺跡の市教委調査区(一部新幹線調査区を含む)について報告を行う。

なお、遺構情報や遺物の個別情報については既報告資料に掲載され、一部内容の訂正や解釈の変更箇所については本報告第III章第1節で行い、県埋文資料主体の追加資料は第III章第2節に掲載した。

また、縄文時代の情報は遺物について青市埋報第108集-1で報告済みで、本報告第V章第1節

中で詳述することとし、本項目では遺構のみとした。

第1節 縄文時代

1. 遺構

詳細時期不明の遺構を含め出土遺物・形状・堆積状況等から33基を縄文時代帰属の遺構として認定し、5基が可能性のある遺構として取り扱った。そのうちB-5区STP-0001は東側の部分のみ新田(1)遺跡として精査され、西側の部分を別年度に新田(2)遺跡のSTP-007として精査されている。実質的に同一遺構であるが、リスト上はそれぞれの精査内容で掲載した。

検出した遺構で時期特定できたものは縄文時代後期前葉十腰内I式期の資料で、遺跡内から出土した縄文時代前～中期にかけての資料が単独で出土した遺構は本調査区内では存在していない。第II章で報告する新田(2)遺跡側では縄文時代前・中期の資料が単独で出土する竪穴住居跡が検出されている。また、バイパス北側の県調査の新田(1)遺跡B区からは縄文時代後期後葉の竪穴住居跡や縄文時代中期の遺物などが出土した土坑が検出されている。

a. 竪穴住居跡

調査区内から検出したのはB-4区のS1-25だけで、古代に帰属する竪穴建物跡や溝跡と重複し、詳細は時期不明である。平面形は不整形円形を呈し、壁溝が残存している。削平された地点で、詳細な土層堆積図が不足し、当初は重複する古代の竪穴建物跡と連続する取扱いであったが、遺構周辺の遺構の配置状況や平面形等を含め、本項目で取り扱った。

b. 土坑

調査区内から21基検出した。時期特定できたのは4基で、新幹線調査区内が2基、隣接部のB-4区から2基の検出で、残りは詳細時期不明扱いである。このほか、B-4区B4-SK-43・B4-SK-131・B4-SK-144、B-6区SK-166・167については、縄文土器単独の出土や形状がフラスコ状で近接地点に類似の土坑が存在するなど縄文時代に帰属する可能性がある。

新幹線調査区にも接するB-1区のSK-303は、縄文時代後期の十腰内I式期の土器片が出土しているが、重複する古手の土坑であるSK-304の堆積土から火葬された人骨の四肢骨が出土している(青市埋報第106集-1第II章第5節参照)。人骨は隣接するSK-302から頭骨と四肢骨が出土しており、こちらは土器である。本遺跡からはB-4区B4-SK-110から洪武通寶が下限資料

区	遺構名	時期	詳細時期	備考
新幹線	SK-306	後期	十腰内Ⅰ	
新幹線	SK-312	後期	十腰内Ⅰ	
新幹線	SK-116	詳細不明		溝状土坑 (Tpit)
B-1	SK-303	後期	十腰内Ⅰ	SK-303(十腰内Ⅰ)>SK-304(人骨有)
B-1	SK-304	詳細不明		プラスチック状土坑, SK-303(十腰内Ⅰ)>SK-304(人骨有)>SK-329
B-1	SK-319	詳細不明		溝状土坑 (Tpit)
B-1	SK-323	詳細不明		プラスチック状土坑
B-1	SK-329	詳細不明		プラスチック状土坑, SK-329<SK-304
B-4	SI-25	詳細不明		不整楕円形の堅穴遺構
B-4	B4_SK-108	詳細不明		プラスチック状土坑
B-4	B4_SK-109	詳細不明		プラスチック状土坑
B-4	B4_SK-114b	詳細不明		プラスチック状土坑
B-4	B4_SK-116	詳細不明		プラスチック状土坑
B-4	B4_SK-118	詳細不明		プラスチック状土坑
B-4	B4_SK-127	詳細不明		プラスチック状土坑, 土師器・須恵器混入
B-4	B4_SK-128	詳細不明		プラスチック状土坑, 土師器・陶器混入
B-4	B4_SK-132	詳細不明		プラスチック状土坑
B-4	B4_SK-135	後期	十腰内Ⅰ	SK-009<SK-008
B-4	B4_SK-136	詳細不明		プラスチック状土坑
B-4	B4_SK-153	詳細不明		プラスチック状土坑
B-4	Ska-06	詳細不明		プラスチック状土坑
B-6	SK-162	詳細不明		プラスチック状土坑
B-6	SK-164	詳細不明		プラスチック状土坑
B-4	STP-01	詳細不明		プラスチック状土坑
B-4	STP-101	詳細不明		溝状土坑 (Tpit)
B-4	STP-102	詳細不明		溝状土坑 (Tpit)
B-4	STP-111	詳細不明		溝状土坑 (Tpit)
B-4	STP-112	詳細不明		溝状土坑 (Tpit)
B-4	STP-113	詳細不明		溝状土坑 (Tpit)
B-5	SK-0006	詳細不明		プラスチック状土坑
B-5	STP-0001	後期	十腰内Ⅰ	溝状土坑 (Tpit), 新田(2)STP-007と同一遺構(後期・十腰内Ⅰ)
B-5	STP-0002	詳細不明		溝状土坑 (Tpit)
B-5	STP-0003	詳細不明		溝状土坑 (Tpit)
B-4	B4_SK-43	※		プラスチック状土坑
B-4	B4_SK-131	※		プラスチック状土坑, B4_SK-135と重複
B-4	B4_SK-144	※		プラスチック状土坑, B4_SK-132と重複
B-6	SK-166	※		プラスチック状土坑
B-6	SK-167	※		プラスチック状土坑

表 3-1 新田(1)遺跡縄文時代遺構一覧表

で共伴した土葬の女性人骨が出土(青市報第106集-1第II章第2節参照)しており、火葬資料については古代末期～中世にかけての資料がある。SK-304出土資料についても後世の掘り返しや混入等の可能性があり、遺構と遺物との関係に時期的差違が生じている可能性がある。

形態的にプラスチック状土坑の形態がほとんどで、坑内の底面上に小ピットが伴う資料がほとんどないのが特徴である。

c. 溝状土坑 (Tピット)

一部遺構略号が土坑の取扱いのものが含まれてい

るが、調査区内から11基検出した。前述のとおり、B-5区STP-0001は新田(2)遺跡STP-0007と同一遺構で、周辺に配置するB-5区STP-0002・0003、B-6区B6_STP-113も含め新田(2)遺跡側で展開する遺構の配置状況と関連性が見られる。遺物が伴った資料は1基のみで、土坑同様縄文時代後期前葉十腰内Ⅰ式の土器が伴っている。

B-1区、B-4区検出の資料については、付近から土坑が検出しており、軸線に共通性が認められないが、2基程度のまとまりが見られる。

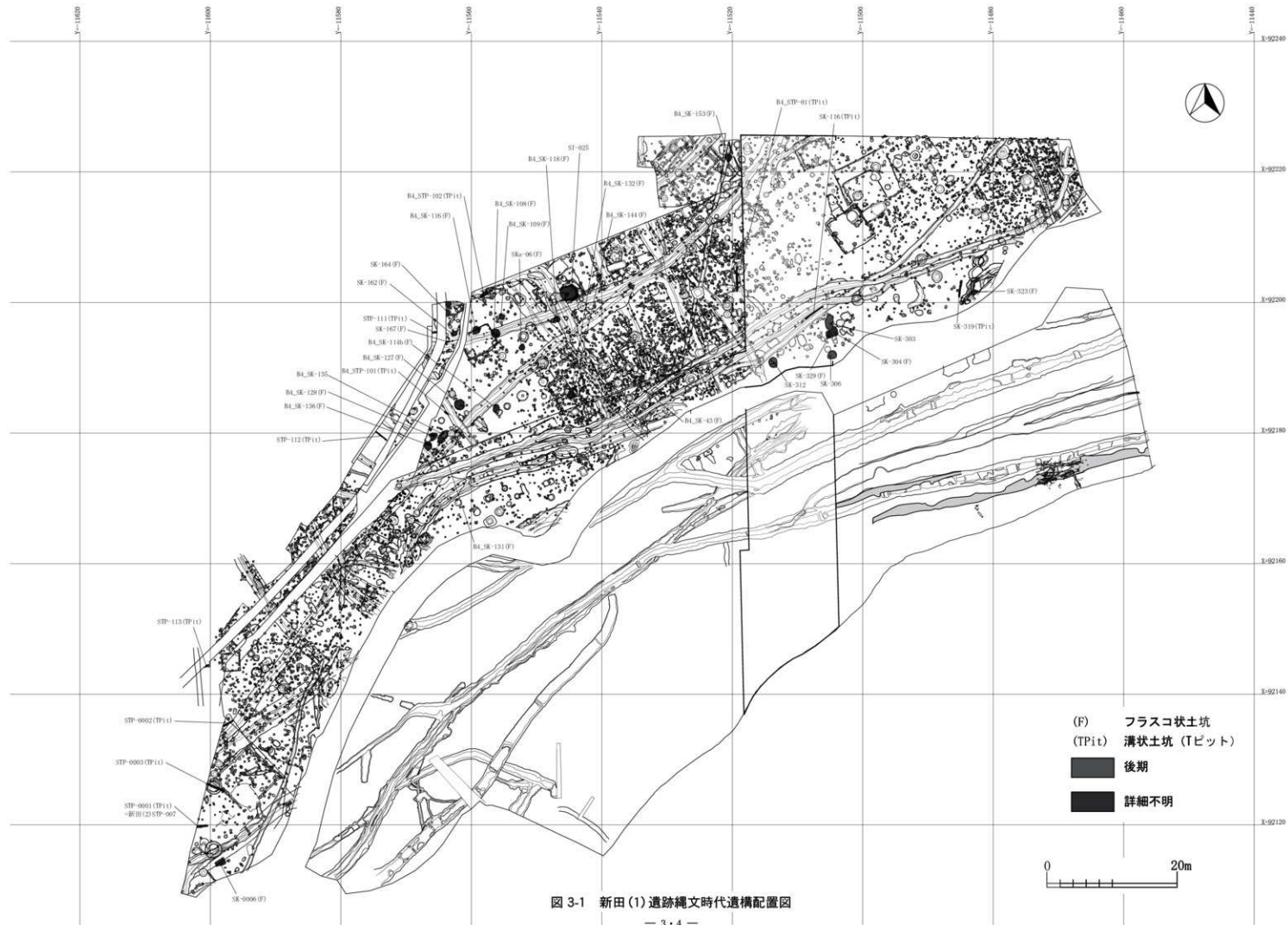


図 3-1 新田(1)遺跡縄文時代遺構配置図

第2節 古代

1. 遺構

古代以降の遺構については同一地点の土地利用の継続に伴う掘り返しの連続で、後世の耕作や土地改良の影響が強く、特に丘陵地上では削平が顕著であった。そのため土坑・井戸跡や溝跡などある程度の掘削深度を持つ資料には、遺物の出土が見られる程度の帰属時期が判断できた。しかし、中世以降に帰属したと推定される資料から出土した遺物が縄文土器や古代に帰属する資料だけという事例も多く、厳密に時期区分ができない事例も含まれる。その場合、遺構の配置状況、堆積土の特徴や重複関係等も踏まえ、判断できる資料について帰属時期を特定したが、中世に帰属する可能性のある資料でも古代以降という取り扱いで区分されているものが存在することを予め断っておきたい。

A. 竪穴建物跡

丘陵上の調査区から35軒を竪穴建物(住居)跡と認定し、青市埋報第106集第2・3分冊で遺構図・遺構情報を報告している。前述の縄文時代に帰属する可能性のあるS I-25以外に、S I-23については重複する土坑のみの情報で、竪穴建物としての情報が完備されていない。また、B-1区S I-06についてはB-1区から検出したS I-08・09、更にSN-45・46を切って構築されているカマドを持たない竪穴で最も新しい段階の資料である。土師器(青市報第107集-1図P-1-042)などとともに手づくねかわらが混入して出土している(青市報第107集-1図P-1-117参照)。なお、手づくねかわらは12世紀後半の資料であるが、重複する前段階のSN-45・46中からも破片が出土しており、SN-45・46の埋没時点で既に破片化した資料と判断できる。かわらけの年代は竪穴の年代とは直接結びつかないものである。床面検出の炭化材の放射性炭素年代測定の結果(青市報第106集-1第II章第6節参照)、12世紀後半~13世紀後半(3点分析。まとまった側の2の資料は13世紀代が主体)の値を得ており、鎌倉時代に帰属する可能性が高い竪穴で、第3節中で取り扱う内容である。ただし、この竪穴遺構についてはSN-45・46との関係について検討すべき点が残されており、「D. 焼土状遺構・灰跡」の項目で再度触れることとする。

B-4区S I-15についても重複する古代の遺物主体のB4__SE-14より新しい遺構で、本遺構を切るB4__SE-13中には15世紀代の青磁端反碗や珠洲焼片なども出土し、新しい要素がある。また、B-5区から検出したS I-0001とB-3区とB-6区にまたがって検出したS I-

01、B-3区から検出したS I-02、B-6区S I-031については、前述の縄文時代の溝状土坑のケースと同様に新田(2)遺跡側に展開する遺構の構成と同一に考えた方が妥当で、新田(1)遺跡側の構成として検討すべき資料は、B-1・2・4・7区検出の資料である。

以上の理由で、35軒のうち、新田(1)遺跡内の古代の竪穴建物跡としては28軒を認定し、述べることとする。尚、規模等の図については前述の除外対象についても一部参考資料として掲載したものが含まれる。

第II章の新田(2)遺跡でも同一の手法で検討するが、その内容中でB-3・5・6区の資料については改めて触れることとする。

a. 平面形

28軒中A:方形12、B:長方形12、D:台形1、N:不明2で、方形とともに長方形の資料が多い。また、張出を持つ(ないしは可能性を有する)資料が6軒(S I-04・07・09・26・30・003)ある。

b. 断面形

削平を受けた資料が13軒と半数近くあり、残存している資料も不明瞭な資料が多い。a垂直に近い形で立ち上がる:3、a+d垂直に近い形+緩やかに立ち上がる1、c壁上部の一部で緩やかに立ち上がる:7、d緩やかに立ち上がる:4。

c. 平面規模・面積

長・短軸の規模の相関を表したものを図3-2に表した。検出部分が限定的な資料も含まれるが、面積は小(15㎡未満)7、中(15㎡~25㎡未満)1、大(25~40㎡未満)5、特大(40㎡~60㎡未満)2、超特大(60㎡以上)3である。

超特大タイプは調査区の東側にあたるB-1区およびB-4区の東側周辺に展開し(S I-07・08・30)、近接した位置関係となっている。また、付近には4~6m前後の中・大型の竪穴が展開している。

一方、一辺が3m前後の小型の竪穴が一定量存在しているが、この資料のほとんどは、丘陵地上のB-4区を中心に展開した溝跡の最終段階以降に新たに構築されたものであり、新段階の資料である。

d. 主軸方位

竪穴の主軸方位について図3-3に図示したが、平安時代の青森平野内に展開した集落で見られる主軸方位とほぼ同一の南東方向主体の構成で、一部が南西・東北東の軸線のものがある。

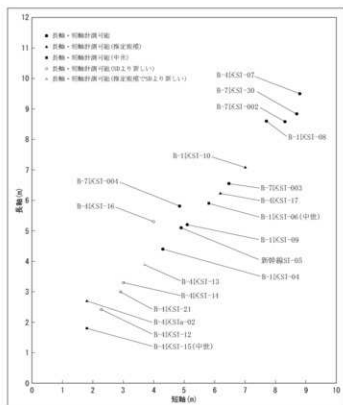


図 3-2 新田(1)遺跡跡穴建物跡規模

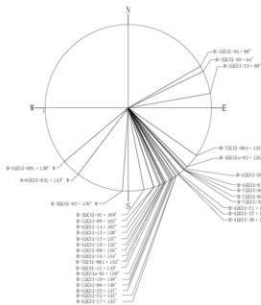


図 3-3 新田(1)遺跡跡穴建物跡主軸方位

e. 主柱配置

重複する遺構の影響で不明瞭な資料がほとんどで(N=不明:20)、区分した資料についても他の分類に属する要素は排除できない。内訳は、A(柱穴なし):1、B(柱穴中央4本柱):1、D(竪穴中央2本、壁面2本):1、D+H:1、H(竪穴壁際10本以上):2、I(竪穴中央1、壁面3本)1、L(2本柱):1である。

f. 壁溝

28軒中21軒から検出し、掘削率が高い状況である。内訳はa(ほぼ全周):1、b(断続的に全周):5、c(コの字状に残存):4、d(2壁に残存):2、e(部分的に残存):9、f(壁溝なし):7である。

g. 火山灰

竪穴内から検出したのはSI-07(内SP-647)、SI-09、SI-10、SI-16、SI-27、SI-031の6軒からB-Tm火山灰を主体に検出している。ただし、火山灰の検出=補属時期と規定できる資料はなく、降灰後の二次的な混入の要因が強く、火山灰降灰前の資料と認定できる資料はT-o-a火山灰が介在したB-4区SI-27以外ない。堆積土中からB-Tm火山灰を検出したB-4区SI-16については、埋め戻し土の中にB-Tm火山灰等が含まれる溝跡の最終変遷後の竪穴建物に相当し、埋没に際し、火山灰が降灰・堆積していた周辺の土が堆積していることが想定される。

火山灰の堆積については、完全に廃絶・放棄された集落での状況はともかく、継続する集落での変遷過程では二次的要因が多々存在する訳で、既報告の報文中(青市埋報第112集第1章第3節)でも触れたが、安易な火山灰の検出=時期決定は慎むべきで、遺跡の継続状況や堆積状況の精査が必要である。

h. カマド

カマドは削平のため明瞭でない資料がほとんど(21軒)で、検出した資料についても火床面のみ残存する事例が5例である。また、煙道や構架材の判明する事例はSI-04とSI-07の2例となっている。煙道を検出した事例は限られるが半地下式のみで、新幹線調査区のSI-05(青市報第94集第90図)以外は短煙道タイプである。

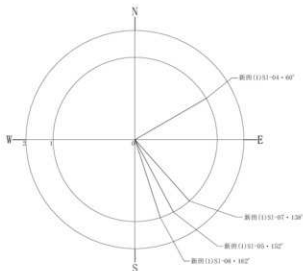


図 3-4 新田(1)遺跡カマド主軸方位

i. 建替・拡張

同一地点での拡張や建替がなされたのは、新幹線調査区SI-05(2回)、B-1区SI-04、(SI-06)、SI-09→SI-08、B-4区SI-07(4回)、SI-14→SI-13(2回)、SI-20→SIa-01、B-7区SI-004→SI-003→SI-30→SI-002などである。建物単独の変遷としては4段階のものが最多である。溝の埋没後の場所を利用する点では後述する新田(2)遺跡の様相ともリンクする。

なお、後述する新田(2)遺跡も同様であるが、集落の変遷については新田(1)遺跡エリア単独、新田(2)遺跡エリア単独だけではなく、双方のエリアが同一の溝跡で囲まれ継続する時期が存在するため、単独の遺跡に関する部分では記述せず、第V章総括編中で提示することとする。

B. 土坑

検出した土坑271基のうち、古代に帰属するないしは古代以降に帰属すると認定できた資料は117基である。前述のとおり、出土遺物は縄文土器や土師器、擦文土器などの破片主体で、中世以降の遺構についても古代以前の遺物のみ包含しているケースが多い。

平面形は表3-2にまとめたが、不整形が93基でほとんどが形のいびつな形状である。不整形の資料について、指向した形を細分してみると楕円形(31基)と円形(35基)が多い傾向にある。また、断面形については垂直に近い形で立ち上がる円筒形や鍋底形の資料が多い傾向で、段状に立ち上がる形が続く。長短軸の相関図を図3-5に掲載したが、

平面形

c	隅丸方形	11	
e	ea	不整形	12
	eb	不整形長方形	3
	ec	不整形隅丸方形	6
	ef	不整形楕円形	31
	eg	不整形小判形	2
	eh	不整形円形	35
ex	不整形	4	
f	楕円形	2	
g	小判形	5	
h	円形	6	

断面形

a	ほぼ垂直	36
a+d	垂直・緩やか	1
b	壁上部で緩やかな傾斜	9
c	壁上部の一部で緩やかな傾斜	5
d	緩やかに立ち上がる	11
e	段状に立ち上がる	22
f	袋状	5
g	V字状	1
h	竈鉢状	14
i	凹凸を持つ	13
j	柱穴状	0

表3-2 新田(1)遺跡土坑形状(古代)

欠測や調査区外に延びる資料以外は相関性の高い形状で、120cm以下に集中する傾向である。

検出した土坑の中で、注目される資料はB-2区から検出したSK-10である。平面形が隅丸方形を呈し、底面側はやや丸みの強い掘りこみがなされ

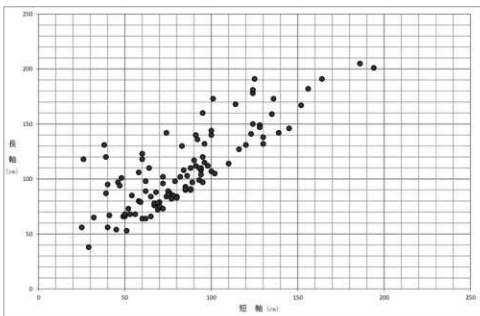


図3-5 新田(1)遺跡土坑規模(古代)

ているが、底面から土師器碗7点上向きの状態で配置し、埋められていた。土師器碗は、色調が白みを帯びた胎土でほぼ同一色で、回転糸切が太い系の資料3点〔第107集-B-1図P-1-047-1195・1197・1199〕とやや細めの資料4点〔同図P-1-047-1193・1194・1196・1198〕で、口唇内面の面取が意識された資料が多い傾向にある。配置状況が方形基調で北西隅を突出させ、柄杓のような北斗七星状でもあり、妙見信仰の要素を想起させる。

SK-10遺物出土位置図

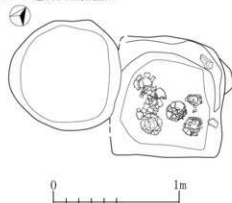


図 3-6 B-2区 SK-10 遺物出土状況

C. 井戸跡

調査区内から46基検出し、うち半分の23基が古代ないしは古代以降に属すると認定した。土坑同様の遺物の出土状況で、上面に中世の遺物が混入する事例もある。古代以降と認定した資料の中には中世に帰属した可能性のある資料が含まれる。

平面形は不整形の資料が多いが、不整形形も含め円形が最も多く、次いで楕円形、方形基調となる。断面形は円筒形が主体を占め、素掘りの井戸が主体である。井戸側が検出された事例はB-1区SEa-03で、柱材・板材の出土状況から縦板組隅柱横棧止め(宇野1982)と考えられるが、深さが他の井戸跡に比べ浅い(※出土遺物は古代主体であるが、時期的に下る可能性がある)。

深さは、安全面のため一部底まで掘削できなかった資料が含まれるが、150cm前後と200cm前後、250cm前後の3段階にまとまりがある傾向にある。最深の井戸跡はB-4区のSE-102で井戸枠材や年輪年代測定結果の良好な資料が得られた板材などとともに(仏)手、水瓶、畜車、「笠蓑辛口」の書かれた曲物、挽物碗、挽物未製品粗形、

平面形

c		隅丸方形	1
e	ea	不整形	2
	ef	不整形楕円形	5
	eh	不整形円形	7
	ex	不整形	0
f		楕円形	2
h		円形	6

断面形

a		円筒形	16
a+c		円筒形+壁上部の一部緩やかに立ち上がる	2
b		壁上部で緩やかな傾斜が見られる	1
e		段状に立ち上がる	4

表 3-3 新田(1)遺跡井戸跡形状(古代)

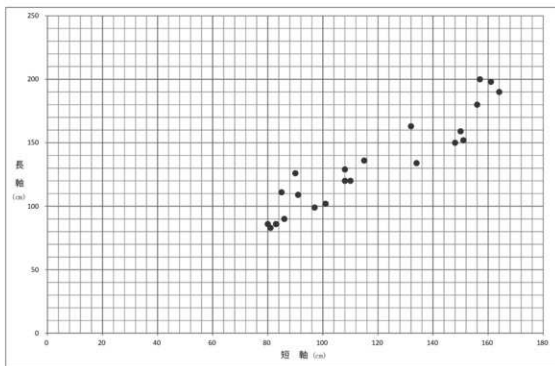


図 3-7 新田(1)遺跡井戸跡規模(古代)

アスナロ削片などが出土している。

その他、深さ272cmを測るB-1区SE-12からは男性神像、鏡形が出土し、下層からはツキノワグマの幼獣の大歯が出土している。

D. 炉跡・焼土状遺構

炉跡や焼土状遺構、カマド状遺構等焼成関連遺構について、略号をSNとして精査した。SNの総数は67基で、古代ないしは古代以降と認定されたのは11基で、中世以降の資料の方が圧倒的に多い状態である。これは焼成坑や製土坑の場合、土坑に区分された資料となっており、単独の炉跡として認定できる資料が少ないことと、古代以降と認定されたものの中に他の種別同様土師器・須恵器・搬土器等古代主体の出土遺物のみで中世に帰属したとしても判別がつかない資料が含まれる点にある。

なお、本報告第2分冊で報告した鉄生産関連炉としてC区SN-01、B-4区B4_SN-14が本分冊に含まれている。

また、中世に帰属すると認定したB-1区SI-06に切られているSN-45・46については半地下式の炭窯と考えられるが、それぞれ覆土中からかわらけが出土しており、埋没途中は明らかに中世段階である。しかし、放射性炭素年代測定の結果(青市埋報第106集-1第II章第6節、分析番号8~11参照)としては最も下った資料としては10世紀後半~11世紀前半代の資料となり、古代の範疇に収まるものである。SI-06は明確にSN-45・46より新しく、かわらけの出土状況や床面の放射性炭素の年代測定結果などを踏まえると中世に帰属する遺構と認定しているが、SN-45・46の検出位置はSI-06の北壁と東壁それぞれの中央付近から突出するように掘削されている。最終的なSI-06の床面の下からSN-45・46の構築面が検出していることで、新旧関係について変わりはないが、SN-45とSN-46の軸線はほとんどSI-06の軸線と同一で作られていることは前段階にSI-06の軸線が存在していた可能性も考慮され、青市埋報第106集-1図2-99で提示した土層堆積図のA-Bライン上でSN-45との重複部分で、最終的なSI-06の下にSN-45の土層堆積面、さらにその下に第45・46層の竅穴に伴う土層があることが確認できる。このようにSN-45・46についてはSI-06の古段階の存在を意識した可能性が残され、最終的な中世段階での利用より前の時点で構築されていた可能性が残されることから古代以降の取り扱いとした。その他の資料については被熱主体の資料で、遺物が古代主体以外は明瞭な根拠がない。

E. 性格不明遺構

遺構略号SXとした性格不明遺構については73基検出し、古代ないしは古代以降と認定した資料は40基と半数以上を占める。不整形な土坑状の浅い掘りこみを持つものや焼成が伴うものなど多岐にわたる。遺物の出土状況は他の遺構と同様の状況で、中世以降に帰属する可能性を持つ。

F. 道跡・その他

道跡として遺構略号SFを付したのは神積地上のA区からSF-01・02、丘陵上のB-2区SF-03の3遺構である。このうち中世の溝跡であるSD-55の上粘土を充填しているSF-03は中世以降の帰属であるが、神積地上のSF-01・02については古代に帰属する可能性を持つ。

古代に帰属する可能性のある二つを個別に検討すると、SF-01・02ともいづれも同一軸線上で、黒色土の検出部分に黄褐色の地山粘土が充填されており、識別は容易である。軸線はSD-08と類似している。特にSF-01はSD-08と併行した状態で、SF-01木組遺構とした木材の集中出土地点が伴っており(青市埋報第106集-1図2-7)、北側の部分はSD-08の上面に倒れかかるように堆積している。このことからSD-08の埋没途中まで、構築物が覆された可能性が高い。また、SF-02はSD-08上に構築されており、このSF-02の検出地点の西側でSD-08の流路が北側のSD-08a・b・cに接続する形となっている。SF-02の構築は、SF-01の木組遺構が倒落したSD-08の埋没後にSD-08の流路部分だった地点を意識し、SD-08b・c側への流路替えに伴い構築されたものと判断される。

遺構略号SMとした円形周溝状遺構について丘陵上のB-1区から1基(青市埋報第106集-1図2-124)、B-5区から2基(青市埋報第106集-1図2-514・515)検出している。B-1区側の資料は断続的な逆L字ないしは馬蹄形状で、B-5区の資料は235~260cmと小規模ながら全周する円形状の溝跡で隣接する新田(2)遺跡ではSX-028・048などが展開している。

G. 溝跡

148条検出したが、調査地点ごとに分断して精査しており、一つの溝としては地点ごとの複数の溝を連結した状態で解釈することとなる。丘陵上の部分では開郭を基本とする大溝として機能している溝がそのまま神積地上の一段下がった地点まで連結している。神積地上では、A区のSD-01・08の底面で見られるように低い部分とテラス状に若干高い部分を交互に繰り返す(比高差は2~30cm程

度)水量の調節機能を持たせた部分が見られるなど、開削時点では水量があまり発生しないことを想定しているようである。

溝の開削状況は新田(1)遺跡側だけで説明できず、新田(2)遺跡での溝の変遷も含め検討しなくては実際の動態は把握できないため、本項目中では詳述せず第V章の地括編中で述べることとする。

ただし、溝の開削は、新田(1)遺跡側の堅穴建物跡の構築エリアを意識した掘削となっており、新田(2)遺跡側から丘陵部分を通って新田(1)遺跡側に連結する段階では、新田(1)遺跡側の堅穴建物跡の継続部分のエリアの手前でL字状に曲がり沖積地上側に延びていく形となっている。溝の廃絶後の時点でその溝の部分の上面に新たな小規模な堅穴建物跡が構築されており、段階ごとの場のあり方に配慮可能な構築となっていた。

発掘調査地点で一段低いA・C区の部分と丘陵のB区との境界には現代まで使用していた用水が走っていたが、境界地点の状況を確認すると遺構が欠損した状態で見られる事例がある。B-3区S1-O2などを確認するとともに2m程度東側に丘陵部分が延びていたことが考えられる。また、C区検出のSKa-O1(青市埋報第106集-1図2-3)についても元々は丘陵側から掘削された井戸跡の基部である可能性が高い。A・C区間で浅い溝が丘陵地上の深い溝と連結する事例が多いことなどを含めると原地形はA・C区のある程度の地点まで丘陵が延びていたことが十分想定できる。

全資料	資料数	%	個体数	%
陶器類				
緑釉陶器(輪花画)	2	0.13	0.12	0.06
灰釉陶器(深溝)	1	0.07	0.05	0.02
須恵器	18	1.18	1.11	0.53
鉢・瓶類	23	1.51	2.68	1.27
鉢	3	0.20	0.64	0.30
壺	6	0.39	1.43	0.68
黒色土器	30	1.97	5.65	2.68
非黒色磨き鉢	1	0.07	0.09	0.04
小皿	1	0.07	0.38	0.18
広口壺	3	0.20	0.33	0.16
土器類	655	43.12	106.62	50.50
甕(7系)	52	3.42	11.21	5.31
甕	22	1.45	5.81	2.75
小鉢・小皿	4	0.26	2.08	0.99
甕(ロクソ系)	5	0.33	0.43	0.20
甕(非ロクソ)	466	30.68	46.03	21.80
小鉢(ロクソ)	22	1.45	3.08	1.46
小鉢(非ロクソ)	96	6.25	13.18	6.24
出雲	7	0.46	0.51	0.24
出雲	3	0.20	0.18	0.09
鉢	5	0.33	0.48	0.23
広口壺	1	0.07	0.23	0.11
鉢・瓶類	4	0.26	0.63	0.30
小鉢	16	1.05	2.43	1.15
埴輪土器	1	0.07	0.09	0.04
埴文土器	73	4.81	5.64	2.67
埴文土器	73	4.81	5.64	2.67
合計	1,519	100.00	2,111	100.00
埴器類				
埴器類	3	0.20	0.17	0.08
須恵器	50	3.29	5.86	2.78
黒色土器	35	2.30	6.45	3.06
土器類	1,358	89.40	192.99	91.42
埴文土器	73	4.81	5.64	2.67
合計	1,519	100.00	2,111	100.00

2. 遺物

石江土地区画整理事業に伴う新田(1)遺跡から出土した遺物については青市埋報第107集第1分冊中で、選別資料の実測図および遺物観察表を掲載し、情報を報告した。遺構情報と同様に本報告第III章で記載内容の訂正等の情報を掲載したが、本項では、種別ごとの概要について触れることとする。

A. 土器

新幹線部分の調査で出土した遺物(7,850点)を除く85,770点の土器の出土があった。接合・選別し青市埋報第107集-1で掲載した2,951点と青市埋報第94集で報告した新幹線調査区の掲載資料138点のうち、口縁部残存計測法で1,519点、底部残存計測法で1,092点を対象に組成比を検討した。なお、第II章で後述する新田(2)遺跡の口縁部資料については市教委担当の調査区から出土した全ての口縁部資料を対象として組成比を算出したが、新田(1)遺跡側は出土量が多く、計量は行ったものの入力作業が対処できず、部分的な成果となった。また、部分的な残存資料が多く、時期細分ができない資料が占めたため、遺跡内の総数として算出した。結果として、10世紀中葉以降10世紀後半～11世紀前半にかけて主体を成す本遺跡の全体が傾向を表す内容である。口縁部残存計測法については大型品より小型品の方が組成率が高くなる傾向にあるので、実態を必ずしも裏付けるものにはならないが、時期的な要素と同様にある程

	資料数	%	個体数	%
食器類	786	51.74	133.12	63.06
煮炊具	671	44.17	69.05	32.71
貯蔵具	61	4.02	8.85	4.19
取皿土器	1	0.07	0.09	0.04
合計	1,519	100.00	2,111	100.00
食器類				
緑釉陶器				
緑釉陶器(輪花画)	2	0.25	0.12	0.09
灰釉陶器(深溝)	1	0.13	0.05	0.04
須恵器	18	2.29	1.11	0.53
黒色土器	30	3.82	5.65	2.68
非黒色磨き鉢	1	0.13	0.09	0.07
小皿	1	0.13	0.38	0.29
土器類	655	83.33	106.62	80.09
甕(R系)	52	6.62	11.21	8.42
甕	22	2.80	5.81	4.36
小鉢・小皿	4	0.51	2.08	1.56
小計	786	100.00	133.12	100.00
煮炊具				
土器類				
甕(ロクソ系)	5	0.75	0.43	0.62
甕(非ロクソ)	466	69.45	46.03	66.66
小鉢(ロクソ)	22	3.28	3.08	4.46
小鉢(非ロクソ)	95	14.16	13.18	19.09
出雲	3	0.44	0.51	0.73
小鉢	3	0.45	0.18	0.26
埴文土器	73	10.88	5.64	8.17
小計	671	100.00	69.05	100.00
貯蔵具				
須恵器				
鉢・瓶類	23	37.70	2.68	30.28
鉢	3	4.82	0.64	7.23
壺	6	9.84	1.43	16.16
黒色土器				
広口壺	3	4.92	0.33	3.73
土器類				
鉢	5	8.20	0.48	5.42
広口壺	1	1.64	0.23	2.60
鉢・瓶類	4	6.56	0.63	7.12
小鉢	16	26.23	2.43	27.46
小計	61	100.00	8.85	100.00

表3-4 新田(1)遺跡古土器組成表(口縁部残存計測法による)

度の傾向を抽出した参考資料として見ていただきたい。

表3-4に掲載した全資料を対象にした内容を確認すると須恵器・黒色土器の組成比が非常に少ない土師器(非黒色土器)主体の構成となっている。また、前述のとおり小型品が強く出る傾向がある前提を踏まえても食膳具の比率が非常に高い傾向で、全資料上で6割を超える。そのうちロクロ使用の碗について個体数の組成比では5割を占める傾向で、従前言われていた10世紀後葉以降食膳具がなくなり、土師器については煮炊具主体の構成という傾向とは異なる様相である。(※この傾向は津軽平野側の沖積地上の遺跡での傾向と類似し、丘陵地上に展開する集落や太平洋側の集落での構成とは異なる傾向である。)個別の資料を概観してみると全体的に腰の弱い胎土を用いた資料が一定量存在し、巻上げ成形の後にロクロ整形で作出されているが、器形が成形時の様相を保つだけの資料が多い。五所川原市十三盛遺跡で見られた木器写しのな段段を際立たせる器形については、同時期ながら新田(2)遺跡同様ほとんど無い。むしろ石上神社遺跡(青森県教育委員会1977)、久米川遺跡(青森県教育委員会1994)、水木館遺跡(青森県教育委員会1995)出土資料と親和性を示す器形が多い。

ロクロ使用の資料の底部切離しは、再確認した結果、全て右回転糸切で、左回転は第三章で掲載する

追加資料以外存在しなかった。表3-7の底部の種別ごとの組成比で表記したが、D bとした系の幅が広い(太い)回転糸切が多い傾向で、10世紀前半代まで主体であった系の幅の狭い(細い)タイプより太いタイプが多用されている傾向にある。

器形がいびつで回転糸切も前代の様相とは異なる製作手法で、図3-8で提示した法量の揃ったデータに対して行った散布図上で確認すると機能的に必要とされる器種の規格に収めようとする傾向はありながらも、まとまりが弱く散逸的な状態で、規格外の資料の出現率が高い傾向となっている。これは青森平野内の南側の丘陵上に立地する新町野遺跡の成果(青市埋報第98集第3分冊で報告、B-Tm以後と取り扱った資料)のまとまり、青森市教育委員会2008と比較すると、本遺跡の資料はまとまりがない資料であることが際立つ。

本遺跡および後述する新田(2)遺跡の資料は大量生産・消費を志向した規格性の低い粗雑な資料である。また、全体数の抽出はしていないため感覚的な要素も含まれるが、灯明痕の残る資料や炭化物のこびりつきが残る資料なども多く、底部資料を円盤状に打欠き、破断面を面取り調整している資料も多く見受けられる。食膳具として製作されてから二次的・三次的使用の頻度が高い状態で、廃棄に至るまで様々な使用がなされている。

非ロクロは全体で5%、種別ごとに8%程度の組

野木(1)遺跡北地区全資料

種別	器種	個体数	個体数%
黒色土器	碗	42.0	1.443111
	碗口	0.4	0.053747
	非ロクロ碗・鉢	0.1	0.013437
	皿	0.4	0.053747
	壺	0.4	0.089625
	土師	0.4	0.107494
	灰口蓋	0.0	0.067184
	小蓋	1.0	0.134367
	小計	45.9	0.1540115
	土師器	碗	291.2
碗口		0.4	0.089625
非ロクロ碗		2.4	0.349354
碗小鉢		0.9	0.12993
耳瓶		0.53	0.071213
小蓋		16.6	2.24993
ロクロ系壺		53.1	7.298133
非ロクロ系壺		181.4	24.74119
ロクロ系小蓋		23.7	3.184499
非ロクロ系小蓋		71.9	9.669992
鉢		13.2	1.773645
壺		0.1	0.094057
灰口蓋		0.4	0.107494
鉢		0.1	0.013437
小蓋		1.4	0.188114
小計	659.93	88.672857	
須恵器	碗	21.1	2.853145
	皿	1.5	0.201551
	壺	2.0	0.268734
	大壺	0.4	0.053747
	灰口蓋	10.5	1.410854
	灰口蓋	0.1	0.013437
	灰口蓋	0.1	0.013437
	鉢	2.4	0.325228
	小計	38.5	5.173132
	総計	744.23	100
種別計	個体数	個体数%	
食膳具計	377.93	50.78134	
煮炊具計	345.9	46.47577	
貯蔵具計	20.4	2.741088	
総計	744.23	100	

食膳具

種別	器種	個体数	個体数%
黒色土器	碗	42.0	11.11312
	碗口	0.4	0.10584
土師器	非ロクロ碗・鉢	0.1	0.02646
	皿	0.4	0.10584
	壺	291.2	77.05131
	土師	0.4	0.10584
	非ロクロ碗	2.4	0.087958
	碗小鉢	0.9	0.238139
須恵器	皿	0.53	0.140239
	壺	16.6	4.392348
総計	碗	21.1	3.083044
	鉢	1.5	0.369899
総計	377.93	100	

煮炊具

種別	器種	個体数	個体数%
黒色土器	土師	0.6	0.173461
	土師	0.8	0.21281
土師器	ロクロ系壺	54.3	15.69818
	非ロクロ系壺	181.4	52.4429
	ロクロ系小蓋	23.7	6.851991
	非ロクロ系小蓋	71.9	20.28523
	鉢	13.2	3.816173
総計	345.9	100	

貯蔵具

種別	器種	個体数	個体数%
黒色土器	灰口蓋	0.5	2.45998
	小蓋	1.4	9.01961
土師器	碗	0.7	3.43373
	灰口蓋	0.9	3.921699
	鉢	0.1	0.490196
	小蓋	1.4	6.862745
須恵器	壺	2.9	8.03922
	大壺	0.4	1.969784
	灰口蓋	10.5	31.42059
	可動蓋	0.1	0.490196
総計	灰口蓋	0.1	0.490196
	鉢	2.8	13.72549
総計	20.4	100	

表 3-5 (参考) 野木(1)遺跡古代土器組成表(青市埋報第54集-4掲載、口縁部残存計測法)

1-2
新田(1)遺跡
古代

R土器器種	資料数	%	個体数	%
A	386	58.93	84.48	60.48
Aa	132	20.15	19.95	18.71
Ab	179	26.41	25.36	23.78
Ac	81	0.00	19.18	0.00
Ax	0	0.00	0	0.00
B	258	39.39	41.21	38.65
Ba	55	8.40	9.63	9.03
Bb	42	6.41	5.23	4.91
Bc	124	18.93	20.98	19.68
Bd	24	3.66	3.1	2.91
Be	7	1.07	1.46	1.37
Bf	6	0.92	0.81	0.76
Bx	0	0.00	0	0.00
C	11	1.68	0.93	0.87
Ca	5	0.76	0.4	0.38
Cb	6	0.92	0.53	0.50
Cx	0	0.00	0	0.00
小計	655	100.00	106.62	100.00

T土器器種	資料数	%	個体数	%
A	33	63.46	5.28	47.14
Aa	20	38.46	2.54	22.68
Ab	12	23.08	1.93	17.23
Ac	1	1.92	0.61	5.53
B	18	34.62	5.87	52.41
Ba	4	7.69	1.19	10.63
Bb	6	11.54	0.74	6.61
Bc	5	9.62	1.89	16.88
Bd	3	5.77	2.05	18.30
Be	0	0.00	0	0.00
Bf	0	0.00	0	0.00
Bx	0	0.00	0	0.00
C	1	1.92	0.05	0.45
Ca	1	1.92	0.05	0.45
Cb	0	0.00	0	0.00
小計	52	100.00	11.20	100.00

T土器器種	資料数	%	個体数	%
A	22	4.72	2.32	5.04
Aa	7	1.50	0.65	1.41
Ab	11	2.36	1.34	2.91
Ac	4	0.86	0.33	0.72
Ax	0	0.00	0	0.00
B	93	19.96	9.91	21.52
Ba	14	3.00	1.64	3.56
Bb	53	11.37	5.4	11.73
Bc	26	5.58	2.87	6.23
Bx	0	0.00	0	0.00
C	303	65.02	28.87	62.89
Ca	94	20.17	9.88	21.45
Cb	125	26.82	10.98	23.84
Cc	84	18.03	8.01	17.39
Cx	0	0.00	0	0.00
D	44	9.44	4.35	9.45
Da	4	0.86	0.3	0.65
Db	38	8.15	3.91	8.49
Dc	2	0.43	0.14	0.30
E	1	0.21	0.29	0.63
Ec	1	0.21	0.29	0.63
F	3	0.64	0.31	0.67
Fa	3	0.64	0.31	0.67
小計	466	100.00	46.05	100.00

R土器器種	資料数	%	個体数	%
A	4	80.00	0.4	75.47
Aa	1	20.00	0.18	33.96
Ab	2	40.00	0.09	16.98
Ac	1	20.00	0.13	24.53
B	0	0.00	0	0.00
Ba	0	0.00	0	0.00
Bb	0	0.00	0	0.00
Bc	0	0.00	0	0.00
Bx	0	0.00	0	0.00
C	1	20.00	0.13	24.53
Ca	0	0.00	0	0.00
Cb	1	20.00	0.13	24.53
Cc	0	0.00	0	0.00
D	0	0.00	0	0.00
Da	0	0.00	0	0.00
小計	5	100.00	0.53	100.00

R土器器種	資料数	%	個体数	%
A	16	76.19	5.01	86.68
Aa	8	38.10	3.05	52.77
Ab	7	33.33	1.36	23.53
Ac	1	4.76	0.6	10.38
Ax	0	0.00	0	0.00
B	3	14.29	0.4	6.92
Ba	1	4.76	0.12	2.08
Bd	2	9.52	0.28	4.84
C	2	9.52	0.37	6.40
Ca	1	4.76	0.08	1.38
Cb	1	4.76	0.29	5.02
小計	21	100.00	5.78	100.00

T土器器種	資料数	%	個体数	%
A	1	100.00	0.03	100.00
Aa	1	100.00	0.03	100.00
小計	1	100.00	0.03	100.00

黒色・赤褐色土器	資料数	%	個体数	%
A	18	58.06	4.2	73.04
Aa	9	29.03	2.62	45.57
Ab	8	25.81	1.33	23.13
Ac	1	3.23	0.26	4.35
B	12	36.71	1.42	24.70
Ba	2	6.45	0.5	8.70
Bb	5	16.13	0.48	8.35
Bc	5	16.13	0.44	7.65
C	1	3.23	0.13	2.26
Ca	1	3.23	0.13	2.26
小計	31	100.00	5.75	100.00

T土器器種	資料数	%	個体数	%
A	0	0.00	0	0.00
Aa	0	0.00	0	0.00
Ab	0	0.00	0	0.00
Ac	0	0.00	0	0.00
Ax	0	0.00	0	0.00
B	5	5.26	0.61	4.62
Ba	1	1.05	0.13	0.99
Bb	4	4.21	0.48	3.64
Bc	0	0.00	0	0.00
Bx	0	0.00	0	0.00
C	75	78.95	10.56	80.06
Ca	25	26.32	4.11	31.18
Cb	25	26.32	2.92	22.14
Cc	25	26.32	3.53	26.76
Cx	0	0.00	0	0.00
D	15	15.79	2.02	15.31
Da	0	0.00	0	0.00
Db	15	15.79	2.02	15.31
Dc	0	0.00	0	0.00
E	0	0.00	0	0.00
Ec	0	0.00	0	0.00
小計	95	100	13.19	100

R土器器種	資料数	%	個体数	%
A	4	0.00	0.36	11.69
Aa	3	13.64	0.28	9.09
Ab	1	4.55	0.08	2.60
Ax	0	0.00	0	0.00
B	3	13.64	0.36	11.69
Ba	0	0.00	0	0.00
Bb	2	9.09	0.32	10.39
Bc	1	4.55	0.04	1.30
Bx	0	0.00	0	0.00
C	14	63.64	2.33	75.65
Ca	4	18.18	0.41	13.31
Cb	3	13.64	0.58	18.83
Cc	7	31.82	1.34	43.51
D	1	4.55	0.03	0.97
Da	1	4.55	0.03	0.97
小計	22	100.00	3.08	100.00

表 3-6 新田(1)遺跡食膳具および煮炊具形態別組成比(口縁部残存計測法)

成を占める。底面は10世紀前半時点で非ロクロ資料で多く見られた木葉痕(Aa・Ab)の資料が8%弱と少ない傾向で、Ca・Cbとした編物痕が5割を超え、菰編のCaが29%、特殊な編み方でCbとしたタイプが25%を占める。Cbタイプは筆者が石江遺跡群の概要報告で資料紹介したとおり、青森県平川市の遺跡からも同時期の発掘資料で類似の圧痕が認められる(木村2010)。このことから遺跡内限定という訳で無く、地域内での共通性が窺える資料である。

須恵器や黒色土器は9世紀後半～10世紀中葉まで継続し、10世紀初頭～前半が主体である野木(1)遺跡〔調査時野木遺跡〕北地区(青森市教育委員会2001)では食膳具の組成において、黒色土器が11%、須恵器が5%程度占めていたが、新田(1)遺跡側では須恵器が1%以下、黒色土器が5%未満の傾向となっている。須恵器については五所川原窯の供給時期ではない时期的な要因が強い。また、黒色土器については時期が下った段階でもごく少数ではあるが、定数は存在している状態で、胎土の選択性や法量が非黒色の土器とは異なり、精製品の資料が多い。その他、黒色化せず褐色の資料なども若干存在する。

煮炊具については、底部残存側の資料は選別時に特徴の少ない無調整資料などがはじかれている関係で、量比に影響が生じている。また、把手付小甕は体部資料の確認が取れないと把手付とは認定できない資料であるため、組成上では小甕の範疇となっている。同様に羽釜についても鈔部分が伴った資料は分類可能であるが、甕に鈔を付けた資料が基本であるため部分的な資料は甕に分類されている。甕も底部側が中空であるとしても口縁側側では甕器形であることから残存率が少ない資料は甕側に属する。内耳土器について耳の出土は認められるが、意図的に打ち欠け耳部分のみを廃棄している資料であったことから元々の土器としては鉢形ないしは場として分類された資料に含まれることが想定されるなど、別分類すべき内容が特定の分類に寄せられる状態となっている。

結果として、非ロクロの甕が全体ではロクロ碗の次に占める量で、煮炊具の中では2/3を占める結果となった。ロクロ系(成形は輪積で、整形時に回転台もしくはロクロを利用した回転運動を伴う資料をロクロ系と取り扱った。底面は無調整や粒子の細かい砂底となる資料)は0.62%で回転運動の伴う大型品は極端に少ない状態である。その一方口唇端部を平滑な面取のA型とする非ロクロの資料が2点あり、器形はロクロ系をしながらも製作は回転運動が伴わない手法で作られた資料がある。小甕は全体では7%程度の量で、煮炊具の中ではロクロ

使用が1%、非ロクロが19%程度占めている。野木(1)遺跡では煮炊具中でロクロ使用6.8%、非ロクロ20.7%と量比が多い傾向と比較すると、野木(1)遺跡北地区内でロクロ土器の生産が定量化行われていた影響もあるが、後述する新田(2)遺跡でもほぼ類似した量比となっていることから煮炊形態の変化(羽釜や甕・把手付土器といった分化した器種の存在)など时期的な差が現れているものと考えられる。

擦文土器については全資料を対象とした組成比上で2.6%、煮炊具8.1%と量的に少ない。後述する新田(2)遺跡では全体で1%未満、煮炊具中で1.9%と更に少ない傾向で、胎土分析の結果でも在地の胎土を利用しており、擦文土器を製作し、使用していたのは事実であるが、一部全く異なる胎土のものもあり客体的な要素が強い。擦文土器の文様施文の構成が厳密な北方の規格とは外れること(諸氏からの教示による)、土器器側の製作手法中に擦文土器で用いられる幅広のハケメ工具が使用される事例(青市埋報第107集-1図P-1-1-023-0578など)など、土器製作者の表象条件で、部分的な表出可能な状態や模倣等の要因が想定され得る。本遺跡および新田(2)遺跡出土の擦文土器・土器器側については折衷土器の範疇に収まる資料も存在しており、本遺跡のみの情報だけでは足りない部分もある。総括編で改めて述べることとする。

一部前述で触れたが、食膳具の法量について再度若干触れることとする。前述のとおり散逸的で、機能的に必要とされる規格のおおまかな範疇に収めようとする傾向が認められながらも粗雑である。国家の領域外で規範性の低い大量消費的な要素がある一群で、法量分化は認められるものの小皿の存在や口径の縮小化といった流れとは逆の径の大型化の流れがある。この動向は津軽地域では類似の傾向が認められ、弘前市域では10世紀後半～11世紀前半かけて底径比の増大が指摘されている(岩井2009)が、本遺跡の資料は該当する資料が含まれるものの主体は前代からの規格の延長線上にある。

非ロクロの食膳具の規格はロクロ食膳具の規格の中に収まる資料がほとんどで、ロクロ食膳具よりさらに規格が散逸的である。ロクロ側の規格では存在しない小型の資料や底径幅の大きな深身の資料など規格外の資料が存在する。

B. 石製品

青市埋報第107集-1図S-1-1-3で図示した資料のうち古代に帰属する可能性のある資料は砥石と碁石の一部のみである。

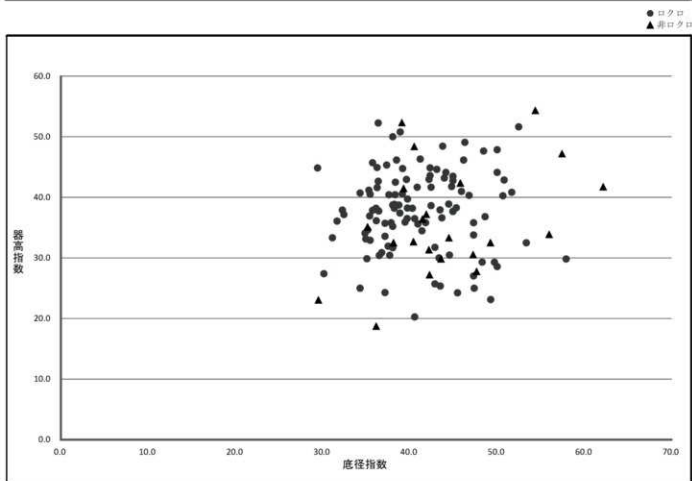
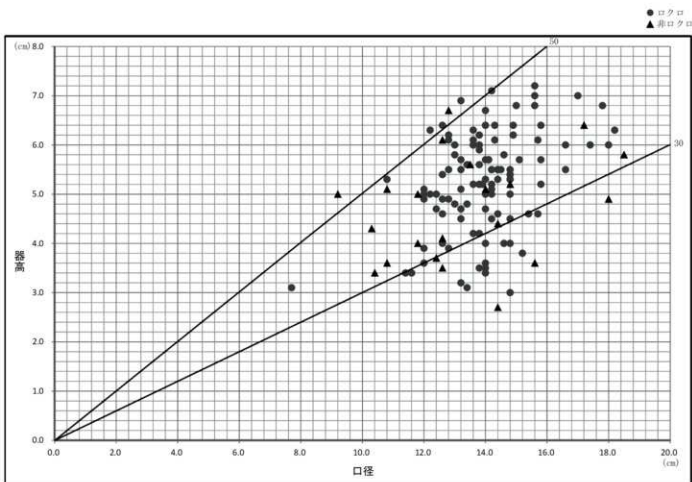


図 3-8 新田(1)遺跡食膳具相関図(上段:器高/口径、下段器高指数/底径指数)

C. 木製品

新幹線調査区出土730点、土地区画整理事業調査区から5,912点の木製品・加工木・自然木が出土した。塗膜資料のみの2点を含め1,377点の遺物実測図と遺物情報等を青市埋報第107集-1で報告した。そのうち、古代の資料は大部分を占め1,149点である。樹種同定については保存処理に併せて検屑、木簡、形代等の資料222点は(株)吉田生物研究所に委託し、結果は青市埋報第108集-2第1章第9節中に掲載した。掲載外資料を含むその他の新田(1)遺跡出土品と新田(2)遺跡出土資料を含む1,747点について、森林総合研究所木材特性研究領域の能城修一氏に鑑定頂き、青市埋報第108集-2第1章第1節に掲載した。

用途の不明瞭な資料が多いが、建築部材、施設材・器具材が続く。建築材として利用された資料が坑などに転用して利用された資料があり、部分的な加工状況だけでは判断のつかない資料が多い。

農耕具は鋸3点、鋤3点、堅杵1点である。また、田下駄の踏み板のような両端が寄り差し込みないしは紐かけ可能な形状を呈する田下駄状木製品はSD-01・04・06・08から13点出土し、中には青市埋報第107集-1図W-1-10-157のように刻書が施される資料と同図W-1-22-475・476のように墨絵や墨痕が見られる資料があり、用途的に別である可能性が残る。

編み具・紡織具のうち、木遺跡では紡錘車の出土は認められるが糸巻具の出土はない状態である。その他、菰編みの菰槌(木錘)、織機部材の可能性のある資料が出土している。

漁具は船の櫂が2点、ヤス状木製品が6点出土している。また浮子?とした2点は出土状況は荷札状木製品と取り扱った資料と共存しており、形状が類似し別器種とした資料が共存している。

服飾具はSD-08から笄と考えられる資料が1点出土している(青市埋報第107集図W-1-30-653)。SD-08からは新幹線調査区から検屑1点(青市埋報第94集第61図-141)が出土し、隣接するSD-01から7枚1セットの検屑が出土している(青市埋報第94集第49図-65)など付近から出土が集中している。下駄はSD-08を中心に9点出土した。SD-08の砂層の上面から出土した青市埋報第107集-1図W-1-31-671については歯のみの出土で、時期に下る資料の可能性が含まれるが、他は全て連筒式である。使用頻度が高く同図W-1-31-669に図示したSD-08出土資料のように右足使用の後、前穴を埋め、新たに左足用の前穴を穿ち使用している資料がある。また、同図W-1-11-170で図示したSD-01出土資料は天側の部

	点数	%
木簡	56	4.8%
服飾具	20	1.7%
編み具・紡織具	18	1.5%
漁具	10	0.8%
農耕具	10	0.8%
空箱	48	4.1%
木製品	3	0.3%
検屑	114	9.9%
文書類	29	2.5%
道具	2	0.1%
浮子	5	0.4%
織機	3	0.3%
糸巻具	1	0.09%
建築部材	332	28.9%
施設材・器具材	251	21.8%
加工木	33	2.8%
竹葉	21	1.8%
竹筒	3	0.2%
用途不明	183	15.9%
合計	1,149	100.0%

表3-8 新田(1)遺跡木製品組成比(古代)

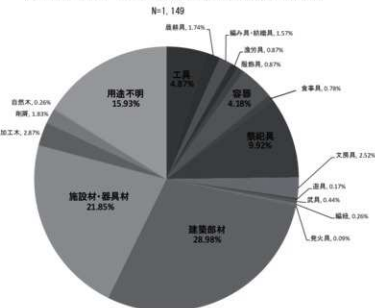


図3-9 新田(1)遺跡木製品組成比(古代) 分に線刻で文様が彫り込まれている。類似の線刻事例は新幹線調査区のSD-01から出土している。(青市埋報第94集第54図-98)

容器は漆器類がSD-01出土(青市埋報第107集図W-1-8-138)、漆器皿はSD-04から1点出土している(同図W-1-19-413) SD-04と類似の漆器皿は新幹線調査区のSD-01からも出土している(青市埋報第94集)。分析の結果(新幹線調査区資料=青市埋報第94集第VIII章第2節、区画整理事業調査区青市埋報第108集-2第1章第10節)下地に柿渋と木炭粉が混和された炭粉渋下地が施され、その上に透明漆が1層分だけ塗られている。白木の資料は底面に「西」の刻書がされたSD-03(青市埋報第107集-1図W-1-18-381)出土資料と、B-4区SE-102出土資料(同図W-1-58-1228・1229)の3点で、同図W-1-58-1229は未製品の粗形である。SD-03出土資料とSE-102出土の粗形の樹種がトチノキで共通しており、SE-102の完成品の樹はヤナギ属である。完成品2点については底部の肥厚化

に共通性があり、実測図上ではあまり表現されていないが、体部下半側の稜段を顕著にさせようとする点など類似性が認められる。土器の食膳具側にも類似する器形があり、木遺跡内では土師器食膳具の組成比が高い点など木製食器の利用頻度が少ないのか、あるいはSD-0-3出土資料が一部炭化していた状態などを踏まえると、焼成の影響以外に燃料材として利用されたことも否定できない。朝物はSD-0-4(同図W-1-19-416)とSD-0-8(同図W-1-27-607)の2点のみでいずれも欠損している。雑物の側板はSD-0-8出土資料2点(同図W-1-30-664・665)、B-4区SE-1-02出土資料1点(同図W-1-60-1280)で、木釘や紐通しの跡とみられる痕跡が確認できる。また習書木簡扱いで別分類とされたSD-0-1出土資料(同図W-1-17-352)は表面に柿渋のようなものが塗られ容器の可能性が残る。曲物は留紐3点を含む34点出土した。底ないしは蓋板のみや側板のみという資料も多く、流動した時点で朽ちた資料も見受けられる。平面形は円形以外にB-4区SE-1-02出土資料(同図W-1-58-1233)のように隅丸長方形(ないしは長楕円形)形の形状も存在する。なお、この資料は側板表面に「笠筭竿口」の文字が記入されており、青市埋報第108集-2第1章第1節で学習院大学の鐘江氏によって釈文と解説が掲載されている。その他、蓋の内面側に柿渋状の黒色附着物(ないしは漆)が塗られる資料が存在する。柄杓はSD-0-1から1点のみ出土している(同図W-1-8-141)。その他、容器の把手と考えられる資料がSD-0-4・0-8内の同一遺構から類似した形態のものがそれぞれ2点ずつ出土している。(同図W-1-19-414・415、同図W-1-27-608・609)

食事具は11点のみで、箸状木製品は棒状の木製品は一定量の出土は認められるが、木針やその他の製品になる可能性のある資料が多く、端部の残存状況が確認でき形状の特定できる資料を中心としたため、点数が少ない状況である。

祭祀具については、(仏)手や光背等仏教関連資料と神像、畜車、形代、物忌礼など多岐にわたる内容を含むものである。畜車については圭頭状の類似の加工を行った細長い棒状の資料等も含めた。形代は馬形2点(うち2点鳥形・2点蛇形の可能性有)、鳥形7点(うち2点が馬形の可能性有)、蛇形2点(うち1点馬形の可能性有)、刀形11点、鏝形6点と動物形と武器形が多く、特に馬と刀が多い傾向にある。

文房具扱いとした木簡、荷札状木製品のうち木簡は、前述の曲物容器や祭祀具扱いの物忌礼を含む文

字資料について、前述の鐘江氏に新幹線調査区の資料を含め青市埋報第94集第Ⅶ章第5節と第108集-2第1章第1節で釈文等を執筆頂いている。また、文部科学省異文化学術研究高度化推進事業学術フロンティア「異文化研究としての『日本学』サブプロジェクト」③「日本の中の異文化」の研究報告書『古代末期の境界世界-城久遺跡群と石江遺跡群を中心として-』(ヨゼフ・クライナーほか編2010)の中で、奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏によって検討されている(渡辺2010)。

SD-0-1から出土した荷札状木製品については形態的に見ると荷札(付札)木簡に類似した規格・形状を呈している資料で、いくつかの資料には墨痕が残存し、木簡の部類に含まれている資料もある。ただし、渡辺氏のご指摘どおり、形状の出現=荷札と限定できない事例もあり、本資料については明確な文字資料も見当たらないことから紐かけ状の形態を持つ一群として解釈しておきたい。類似の形状はSD-0-1の新幹線調査区部分からも出土して青市埋報第94集第1~53図に掲載したが、新幹線調査区側の資料は第52図-82で最も顕著な資料であるが、上半部中央に目穴を入れ、その部分から二分割するように割れ目を入れている。一部資料は完全に二分割してしまったものも含まれるが、切り込みが入ることが有意である資料であることが想定され、荷札状としての機能より別な要素が存在した可能性がある。

その他、道具としての独案がSD-0-4・0-8から、武器として木鏃や刀柄、弓等が出土しているが、量的にわずかである。

沖積地上の溝跡からの出土が主体を占めたが、丘陵地上のB-4区SE-1-02からは(仏)手、畜車、水瓶、投物桶、楕圓形、アスナロ削削、ケヤキ自然木等がまとまって出土し、板材の年輪年代が11世紀前半のまとまった数値を得られている(年輪年代分析については青市埋報第94集第Ⅶ章第1節および青市埋報第108集-2第1章第4節で報告)。(仏)手について、一部研究者が寄木造の資料とし、「十一世紀半ばの京都で仏師定朝によって確立された「寄木造り」の技法を持った仏像が、ほぼ同時代いち早く外ヶ浜のこの地に導入されると」(齊藤利男氏は主張している(齊藤2011))。氏の資料認識は問題のある点が多々あるので、本文編中で取り扱うべき話ではない話ではあるが、反例について触れると岩手県二戸市浄法寺町天台寺に現存する制作年代が11世紀代と想定される複数の一木造の神仏像で、左手の側の部分はソケット状に彫り込みが行われ、手を差し込み可能な形状となっている(図3-10参照)。青山学院大学浅井和春氏のご教示によると一木造の資料としてこのような形態が存在する



図 3-10 【参考】岩手県二戸市天台寺所蔵
如来立像（岩手日報社 2001）

ことは問題ないとのことで、外ヶ浜の地域で京都と同等に最新の技術導入という流れとするには根拠がなく、むしろ11世紀代の北東北の神仏像の製作手法の系譜から辿った方が、本遺跡出土の神像と仏教関連資料との関係などを知る上で妥当性があるものと考えられる。

B-4区SE-102から出土した水瓶と類似した加工を持つ塔身が一段下がった沖積地上のC区のSD-08上層（調査時SD-01a）の砂層上から出土している（青市埋報第107集-1図W-1-37-808）、付近の同一層から火炎光背（同図W-1-37-809）が出土し、両資料は埋没や流動の影響か器面の侵食が顕著な部分が存在する。類似の塔身状の資料（本報告第IV章第13節では相輪状木製品）がC区のSD-04の下層から出土（同図W-1-20-425）している状況などを踏まえると、廃棄時点でSD-08がある程度埋没していたという要因以外に流動で高い位置で埋没した要素も残る。仏教関連資料についてはSE-102のアスナロの削層の出土などを含めると木器碗の加工同様、遺跡内で製作を行っていた可能性が高い。

D. 土製品・ガラス製品

土製品については青市埋報第107集-1図CLE-1-1-5で掲載しているが、出土地点が遺構外資料のものが含まれ、時代的に下る資料が含まれる。古代に帰属した可能性の高い資料でも中世以降の遺構中から混入して出土する事例もあり、明確な時期判断が付かない資料が含まれる。

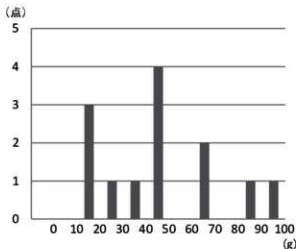


図 3-11 新田(1)遺跡出土土鍾重量分布図

管状土鍾については、28点出土したが、前述のとおり遺構外資料や中世の遺構から出土した資料も含まれるため、厳密に古代の遺構出土資料と認定できた資料は17点のみとなる。破損資料が多く全体形の分かる資料は半分以下の13点となる。重量の度数分布に付いて図3-11に図示したが、20gと50gが若干多く、90g前後の資料も2点存在するが、この資料2点は遺構外と中世の遺構の可能性が高い資料であるため時代的な差違の可能性もある。

土玉はいずれも古代の遺構から5点が出土した。長さが8~16mm、幅が9.5~16mm、重量が0.7~2.4gと小型の部類に入る資料である。

土製紡錘車はSD-51出土資料が古代の資料で、18.0×19.0×4.0mmと小型な資料である。

土製支脚は完形品の出土はなく、破片資料が主体で棒状の資料がほとんどで、10世紀前半までの集落内で多く出土した円筒形の資料は青市埋報第107集-1図CLE-1-4-113~115の3点のみで限定的である。

焼成粘土塊には布目や網目、靱圧痕が伴う資料が存在する。

その他、青市埋報第107集-1図CLE-112-G-2として図示した新幹線調査区S1-05カマド第6層出土（遺構情報は青市埋報第94集で報告）のガラス玉はカマド第6層が煙道煙出の上面に相当する位置からの出土である。色調は淡緑色を呈する（分析結果は、本報告第IV章第9節に所収した）。

第3節 中世以降

1. 遺構

中世以降の遺構は古代の項目でも触れたが、同一地点の土地利用の連続と後世の耕作や土地改変の影響が大きく不明瞭な情報が多い。掘立柱建物跡の柱穴の可能性のあるピットは建物と認定された資料以外に多数存在することから、実数に対し切り切れていないが、認定できた資料を中心に報告する。

A. 竪穴建物跡・竪穴遺構

古代の項目で触れたとおり、S1-06についてSN-45・46の配置状況等の問題も含まれるが、かわらけの出土や床面検出の放射性炭素年代測定の結果等も含め、12世紀後半～13世紀前半にかけて床面直上まで開口していた可能性が高い。なお、隣接する地点にSBa-01・02が配置しており、類似した軸線であることも踏まえると下限は13世紀代に及ぶものとする。B-4区S1-15についても古代の項目で既に記述済の資料であるが、重複する井戸跡との関係から15世紀以降と考える。

B. 掘立柱建物跡

前八戸工業大学教授故高島成侑氏の検討の結果中世～近世にかけての掘立柱建物跡4棟が認定され、青市埋報第106集-1第1章第1節で検討結果が報告されている(高島2010)。本報告第IV章中で、門下の中村車人氏が石江遺跡群の掘立柱建物跡について検討した内容を掲載したが、新田(1)・(2)遺跡についての中村氏の理解は概ね同一であり、当委員会の掘立柱建物跡としての認定も故高島氏の検討内容が成果である。

古代の遺物の項目で斉藤利男氏の見解について触れた関係上、この項目でも改めて氏の指摘内容について取り上げることとする。(仏)手に関する記述内容が掲載された2011年刊行『古代中世の蝦夷世界』中の「安部・清原・奥州藤原氏と北の辺境」という論文中(斉藤2011)で新田(1)遺跡の掘立柱建物跡に触れ、「出土陶磁器が「平泉セット」を構成していることからみても、十二世紀後半の平泉の建物とするのが適切なものである」としている。(なお、本文中でこの引用の際、担当者である筆者がそのように見ているという記述も申し添える形をとっている。)この本文中の基になった情報は非公表で開催された平泉関連の検討会中で筆者が発表した検討途中の情報をベースに組み上げられており、本文176頁5行目で「青森県内では浪岡城跡の約20キログラムに次ぐ、約5キログラムの「手づくねかわらけ」が出土していること」という内容は同3行目で「小口氏や木村氏がほとんど注目していないが」としているが、実際はその研究会上で筆

者が口頭発表した検討途中の情報そのものである。この情報、元々は羽柴直人氏が集成したデータからのご教示内容がベースで、発表当時には建物の時期同様検討途中のデータであった。なお、羽柴氏の正式集成データは皮肉なことと同じ『古代中世の蝦夷世界』に掲載された「北奥における奥六群・平泉文化の流入過程」(羽柴2011)の244頁に「各遺跡の土師質土器・かわらけデータ」の表が示されており、青森県内は浪岡城の12kg、二番目で弘前市中崎館遺跡で6.5kg、三番目で新田(1)遺跡の4.8kg(約5kg)という数字が提示されている。よって、新田(1)遺跡が「浪岡城に次ぐ」とはならない。また、この重量計ロクロかわらけをも含む情報で、計測をしに来た訳でもない斉藤氏のいう約5キログラムの「手づくねかわらけ」という事実は存在しない(斉藤氏の論文文176頁11行目で「(以上は八重樫忠郎氏のご教示によるという)」という記載が見られる。研究会は八重樫氏の主催で、当然八重樫氏が聞き得た情報であり、伝聞の情報であると推測される)。同179頁11行目で「研究者間のオープンで活発な議論が切に求められている」といった表現は単に非公表の検討会で発表した情報を入力し、引用不能なデータであることをいいことに自分が知り得ていると表現した行為にしか過ぎない。氏の新田(1)遺跡に対する行為は他にも、北海道大学で2004年に開催された「シンポジウム蝦夷からアイヌへ」の発表要旨「高地性防御集落・環濠集落出現の背景と古代東北北部における生産・流通との関係」(斉藤2004)の本文中に当委員会が開催した現地見学会で氏が撮影した遺物写真をそのまま図版として無断掲載するなど資料の取り扱い上問題がある。そのような前提の中、検討された情報は妥当性のない情報が含まれるため、本項であえて触れさせていた。

前段が長くなったが、故高島氏が13世紀前半としたSBa-01・02について生前高島氏はSBa-02側の方が古い可能性を筆者に伝えていた。SBa-02とSBa-01は隣接する類似した軸線で、近接した段階と考慮できた。12世紀後半と考えられる手づくねかわらけと珠洲1期の四耳蓋(青市埋報第107集-1図P-1-123-M A424)が出土した溝はSD-201で、図3-12のとおりSBa-01と重複し、SBa-01のピットが新しく、同時併存しない。因みに、故高島氏12世紀後半と認定したSBa-04は干渉しない隣接した位置にある。珠洲四耳蓋MA424は破片化し複数遺構から出土し、流動要因が高い。SD-201廃棄の時点でも時間幅が想定される。SBa-01を平泉期とするには少々無理がある。



図 3-12 新田(1)遺跡検出掘立柱建物跡およびSD-201との位置関係(S=1/500)

C. 土坑

中世・中世以降と考えられる土坑は92基、近世以降と考えられる土坑は4基、詳細時期不明は33基検出した。

中世・中世以降と考えられる資料について古代同様平面形・断面形、及び長短軸の分布傾向について提示した。長短軸の散布図について完形でない資料が含まれるが長軸側の突出する資料がいくつか存在し、B-1区SK-164とB-4区B4_SK-112については焼成が伴っておりカマド状遺構である可能性がある。

また、古代よりも浅い井戸跡が存在するケースが多く、B-1区SK-64のように深さ79cmと1m未満の資料でも四隅に柱痕が検出する事例があり、井戸跡が調査の分類SKとして取り扱われた資料が含まれている。

中世以降の資料に多く見られる特徴は堆積土中に灰の混入が顕著となる点である。その他、骨粉の混入が認められる事例や塗膜ないしは漆紙状の資料が出土する事例があり、後述するSN扱いはあるが、B-2区SN-02の上面からは灰と骨片と古銭(北宋銭主体)とともに漆紙が面的に出土した(出土状況図は青市埋報第106集-2図2-194参照)。また、B-3区SK-29は土坑扱いとなった方形基調の資料で、塗膜のみが残存した漆器椀2点が出土し、脆弱な資料であったため、青市埋報第107集-1では写真図版131で1379・1380として掲載したのみである。

平面形

a	方形	1	
c	隅丸方形	6	
e	ea	不整形	8
	eb	不整形長方形	1
	ec	不整形隅丸方形	4
	ef	不整形楕円形	17
	eg	不整形小判形	3
	eh	不整形円形	26
ex	不整形	5	
f	楕円形	6	
g	小判形	3	
h	円形	12	

断面形

a	ほぼ垂直	29
a+d	垂直・緩やか	2
b	壁上部で緩やかな傾斜	3
c	壁上部の一部で緩やかな傾斜	9
d	緩やかに立ち上がる	12
e	段状に立ち上がる	10
f	碗状	3
g	V字状	1
h	覆鉢状	8
i	凹凸を持つ	12
j	柱穴状	3

表 3-9 新田(1)遺跡土坑形状(中世)

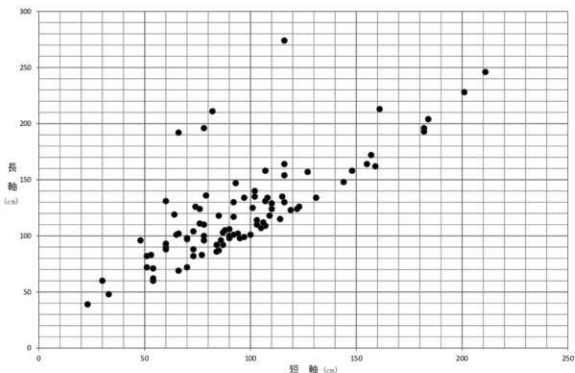


図 3-13 新田(1)遺跡土坑規模(中世)

D. 井戸跡

丘陵地上の調査区から23基検出した。前述の土坑の項目のとおり、比較的浅い土坑の中に井戸跡として機能した可能性があるものが含まれるため実数は検出遺構以上である。深さは230cm以下で、古代の井戸のように3mを超える資料はない。形状は古代の井戸同様円形基調で、円筒形に掘り込まれた素掘りの井戸跡が多く、井戸側が設けられた資料はB-1区SEa-01とB-4区B4__SE-04のみである。B-4区SEa-04(調査時B4__SK-107)は第2層中からB-Tm火山灰を多量検出したと記録されているが、出土遺物を見ると15世紀代の青磁線描蓮弁文の碗や珠洲焼の破片が上層・中層から出土しており、埋め戻しの土の中に堆積済のB-Tm火山灰が混入したものと判断される。

平面形

c		隅丸方形	2
e	ea	不整形方形	0
	ef	不整形円形	2
	eh	不整形円形	11
	ex	不整形	1
h		円形	7

断面形

a		円筒形	11
b		壁上部で緩やかな傾斜	3
c		壁上部の一部で緩やかに立ち上がる	1
d		緩やかに立ち上がる	3
e		段状に立ち上がる	4
g		V字状に立ち上がる。	1

表 3-10 新田(1)遺跡井戸跡形状(中世)

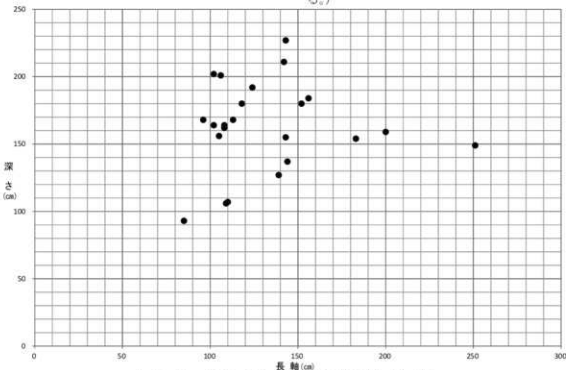


図 3-14 新田(1)遺跡井戸跡規模(中世)

E. カマド状遺構・炭窯・焼土状遺構等

焼成関連の遺構の略号であるSNの遺構略号が付された遺構67基のうち、中世以降の遺構として56基認定しており、古代より多い状況である。カマド状遺構ないしはカマド状遺構と考えられる遺構が40基と大部分を占める。カマド状遺構は茅野嘉雄氏によって集成と形態分類がなされており(茅野2008)、その後も青森市米山(2)遺跡で45基の検出が報告され(青森県教育委員会2009-青森県報第473集)、県教委調査の新田(1)遺跡からも丘陵部からのZ区から5基検出報告されている(青森県教育委員会2009-青森県報第472集)。本調査区検出資料については削平が著しく、基部のみの検出事例や煙出部分の不明瞭な事例が多く、茅野氏の分類上ではE類の「削平などにより分類や検討が難しい物。」がほとんどである。ただ、長・短軸の規模については、新田(1)遺跡の県調査区から検出したものの規模(第1号全長146cm・全幅65cm、第2号現存長125cm・現存幅53cm、第5号全長146cm・全幅65cm)に対し、本調査区検出の資料については同規模の検出以外に2mを超える長さの資料も伴っており、米山(2)遺跡で検出頻度の高かった2m以上の規格(長さ2.05~2.7m、幅0.55~0.9m)とも比較可能である。(なお、計測値について本調査区検出資料については掘り方部分を含めた数値も存在し、幅が大きくなってしまう資料が含まれている。また、削平などにより残存部分の計測値についても図3-15の散布図上ではプロットしているため、最小値が小さく出ているものが含まれる。)

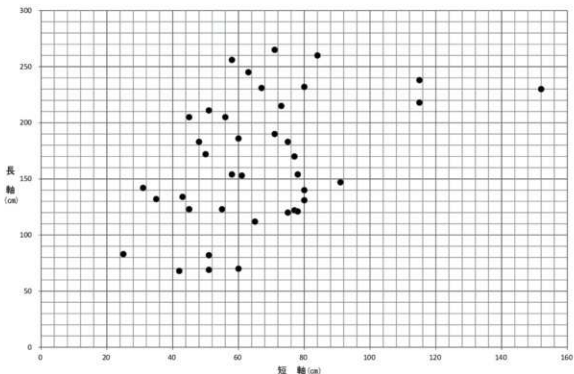


図 3-15 新田(1)遺跡カマダ状遺構の規模

B-2区SN-04・05・06、SN-20、B-3区SN-14はカマダ状遺構よりも規模が大きく3mを超える遺構で、炭窯としての可能性が高い資料である。B-2区SN-04・05はSD-52の上面に掘削されたSN-05bとした方形の製炭土坑を切る形で作られた炭窯でいずれの遺構もSN-05bより新しいがSN-04・05の新旧関係については不明であるが、いずれの遺構からもクロかわらけのみが出土し、手づくねかわらけは出土していない。SN-05の南側には軸線を挟んだSN-06が配置しており、東側にはSD-52・57半円状遺構とした溝跡と重複するSN-20が配置しており、溝跡の上面に構築されているケースが多い。この構築状況はB-3区のSN-14、更には新田(2)遺跡内で検出したSN-002等にも当てはまり、選地性が共通である。

土坑の項目で若干触れたがB-2区から検出したSN-02は漆紙や灰・骨片等が検出した遺構であるが、当初の掘りこみは井戸跡状に円筒状の掘りこみが成されており、中段からの再掘削で、方形状の掘りこみとし、焼成の伴う面として再利用された堆積状況を呈している。青市埋報第106集-1第II章第5節中で検出した骨の分析結果が掲載されており、第2・4層から検出したのはヒトの四肢骨、第2・6層からはフサカサゴ科の骨と魚類の骨が出土しており、いずれも焼骨である。また、B-2区SN-a-02(SX-26)はヒトの焼骨がまとまって出土し、火葬墓である可能性がある。ただし、分析の結果ではかなり細片化した状態であったことが指

摘されている。なお、ピット資料であるがB-3区SP-348・958からもまとまった成人の焼骨が出土しており、小規模ながら火葬墓の可能性が高い。B-4区SN-110については骨片を面的に検出しており、焼成面も残存している。出土遺物は土器・陶磁器の出土はなく、古銭が伴う事例があり、SN-02は開元通寶のほかは元祐通寶(初鑄1086年)を下限とする北宋銭主体、SN-a-02(SX-26)は開元通寶のほかは永樂通寶(初鑄1408年)が伴っており、青市埋報第106集-1第II章第6節中で掲載した放射性炭素年代測定結果についてSN-02(No. 17・18)は第26層で、2σでAD1034-1215(100%)、1σで1045-1094(44.5%)、1147-1187(33.4%)、1120-1141(17.9%)、1200-1206(4.2%)、第7層出土資料で2σで、AD1261-1317(71.3%)、1353-1389(28.7%)、1σで1261-1317(71.3%)、1353-1389(28.7%)、SN-a-02は第3層から出土した3点分析し(No. 28~30)28は2σでAD1431-1522(80.3%)、1573-1628(19.7%)、1σ1440-1492(89.3%)、1602-1612(10.7%)、30は2σで1465-1643(100%)、1σ1551-1603(46.0%)1490-1528(33.1%)、1609-1634(20.9%)など、古銭の年代にも対応した年代差が得られている。

F. 性格不明遺構

中世ないしは中世以降と認定した遺構は21基、近世以降と認定した遺構は5基、詳細時期不明7基である。古代と同様に不整形な資料が中心で溝状気味の資料や焼成の伴うカマド状遺構に類するような資料も含まれる。

G. 遺跡・その他

古代の項目で記述したがSF-03についてはSD-55上に検出しており、少なくともSD-55の継続時期以降の所産である。粘土の充填は一部隣接するSX-11などにも及んでおり、ピットの掘削痕が少なく、故高島氏が認定した掘立柱建物跡についてもSF-03と重複する部分には建物が認定されていない。

沖積地上の調査区では青市埋報第106集-2図2-8上で図示した畦畔の痕跡とSL-01とした島状の地山土の充填範囲を検出している。図の着色破線で表現した地割と同一の畦も存在するが、地割が調査前よりも小さい資料もあり、さらに軸線の異なる資料なども含まれる。C区側の北側のSG-18~30とした部分は地山を切り崩し畦畔としており、東側のSG-01~17の地点は黒色土の上に地山土混じりの土を貼った形で検出しており、丘陵地部分の開削状況と沖積地部分の盛土状況が確認できた。古代の遺構検出面より上部(遺物取り上げの層位としては「耕作土下」と表記されることが多い)では複数の時期の遺物が混在した堆積層となっており、江戸時代の煙管や寛永通寶等も出土している。

H. 溝跡

古代同様新田(2)遺跡側との関連性が認められる資料が含まれるため、総括編側での記述が優先される。近世以降の用水として機能した溝跡が若干残る以外は沖積地上の溝跡はSD-03b・c(新幹線調査区内)など限られた部分となり、一段高い丘陵地上に掘削される溝跡が主体となる。ただし、古代の段階の開削溝と異なる点は掘削が浅い溝が多く幅も狭い資料が多いのが特徴である。掘立柱建物跡の項目で触れた手づくねがわらけと珠洲焼四耳壺が共伴したSD-201は古代からの丘陵に沿ったなしいしは直交させた溝の軸線とは全く異なる軸線を持つ溝跡で、その後の丘陵に沿った軸線に展開する溝跡や掘立柱建物跡の軸線と比較すると異なる存在である。

近世以降は一段低い沖積地部分の拡張が伴っており、溝についても古代から継続した溝部分と重複する形で掘削しており、SD-006などが大正期ごろまで使用されていたようである。

2. 遺物

古代の遺物同様青市埋報第107集第1分冊中で、選別資料の実測図および遺物観察表を掲載した。本報告第Ⅲ章中で記載内容の訂正等の情報を掲載したが、種別ごとの概要について触れることとする。

A. 土器

古代の遺物に比べると削平や耕作の影響により残存率・接合率が低く、陶磁器類は碎片の資料が多い。このため、図化可能な資料が限定され、中世陶磁器は487点、近世以降の陶磁器は50点図化した。個別の観察情報等は既刊の青市埋報第107集-1掲載の遺物観察表を参照頂きたいが、中世では12世紀後半~16世紀代にかけて、近世以降では17世紀後半~19世紀後半(一部20世紀の資料も有)にかけての資料が出土しており、故高島氏の掘立柱建物跡の変遷案の成果を踏まえると一部断続しながらも生活の継続が認められる状況となっている。計量的な傾向の比較が可能なほどの残存状況ではないため、主観的要素を排除することができないが、12世紀後半~13世紀前半代以外に15世紀代~16世紀にかけての遺物の出土傾向が高いように思える。

本項目では12世紀後半~13世紀前半主体のかわらけ資料について取り上げることとする。

前述の羽柴氏によって提示された重量情報では5キロ弱の重量のうち手づくね・ロクロ使用の判別がつかない資料61.9gを除く重量比では手づくね資料が3.2kg(77.1%)、ロクロ資料が967g(22.9%)を占める。この情報以外に口縁部残存計測表による口縁部資料の量比、底部残存計測法による底部資料の量比について表3-11に提示した。手づくね資料は底部が丸底に近い形の資料も含まれ、底径の算出が明瞭でない資料も含まれる。また、資料数上では量が多くても残存率の低いものは当然組成比が下がるので、比率に差違が生じる。口縁部・底部残存それぞれの比率は重量比よりも若干差が縮まり手づくね:ロクロ=68:32、67:33程度の比率となる。ただ、溝跡で出土した資料は混在した状態であったが、SN-04・05はロクロのみ、SD-201は手づくねのみと種別ごとに限定される出土事例もあり、使用差や時期差が生じた可能性がある。

	手づくね	ロクロ	合計	備考
口・底数	76.0	50.0	126.0	
口・底数%	60.3	39.7	100.0	
口・底体積	15.5	7.3	22.8	
口・底体積%	68.0	32.0	100.0	
底・底数	37.0	23.0	60.0	
底・底数%	61.7	38.3	100.0	
底・底体積	13.0	8.5	21.5	
底・底体積%	60.7	39.3	100.0	
重量	3255	967	4222	(※種類不明19gを引)
重量%	77.1	22.9	100.0	

※重量のみの計算(2011)による

表3-11 かわらけ組成比

手づくねかわらけは一段なで、面取り有りの資料が多く、口径の最小が7.4、最大が15.4で、平均が10.9である。度数分布の数値は資料数および個体数とも13.0cm以上14.0cm未満の範囲の資料で、次いで8.0cm以上9.0cm未満の範囲の資料となる。規格上明瞭に寸法で区切れる訳でなく、8~9cm前後の資料と13~14cm前後の基本の規格とその間を埋める資料が一定量存在

口径	個数	個数%	個体数	個体数%
7.0-8.0未満	6	7.9	187	10.8
8.0-9.0未満	15	19.7	523	33.7
9.0-10.0未満	10	13.2	497	42.2
10.0-11.0未満	8	10.5	493	60.0
11.0-12.0未満	7	9.2	453	34.4
12.0-13.0未満	11	14.5	211	13.6
13.0-14.0未満	18	21.1	358	23.7
14.0-15.0未満	2	2.6	431	2.0
15.0-16.0未満	1	1.3	0.1	0.6
16.0以上	0	0.0	0	0.0
平均	76	100.0	355	100.0
最小	10.9			
最大	7.4			
標準偏差	15.4			
	2.14			

口径	個数	個数%	個体数	個体数%
2.0-3.0未満	2	5.4	0.29	2.2
3.0-4.0未満	6	16.2	2.64	20.3
4.0-5.0未満	10	27.0	3.73	28.7
5.0-6.0未満	7	18.9	3.82	14.0
6.0-7.0未満	8	21.6	2.49	19.2
7.0-8.0未満	2	5.4	0.88	6.8
8.0-9.0未満	1	2.7	1	7.7
9.0-10.0未満	1	2.7	0.13	1.0
平均	37	100.0	13.0	100.0
最小	5.1			
最大	2.0			
標準偏差	9.0			
	1.56			

器高 (36資料)	口径
平均	2.3
最小	1.4
最大	3.6
標準偏差	0.59
平均	0.51
最小	0.19
最大	0.75
標準偏差	0.10

表 3-12 手づくねかわらけ法量別組成比

する形である。底径については前述のとおり、手づくね資料の影響が生じているが4.0cm以上5.0cm未満の資料が最も高く、次いで3.0cm以上4.0cm未満と6.0cm以上7.0cm未満が続く形である。器高は平均が2.3cmで、底径/口径の平均値は0.51となっている。法量の情報の揃った資料の相関状況について器高指数/底径指数について図3-16で、器高/口径について図3-17で図示した。前述のとおりある一定の規格への集中はみせるものの厳密な精度管理のもと製作された資料群ではないことがわかる。

次にロクロかわらけについて取り上げるが、口径部資料では資料数的には13.0cm以上14.0cm未満の資料が最も量が多い扱いとなるが、口径部残存計測法上では9.0cm以上10.0cm未満の資料が最も多い形となり、次いで10.0cm以上11.0cm未満の資料が続く。この規格は手づくね資料では一段小さい8~9cmの規格の量が多い

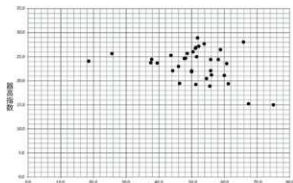


図 3-16 手づくねかわらけ指数散布図

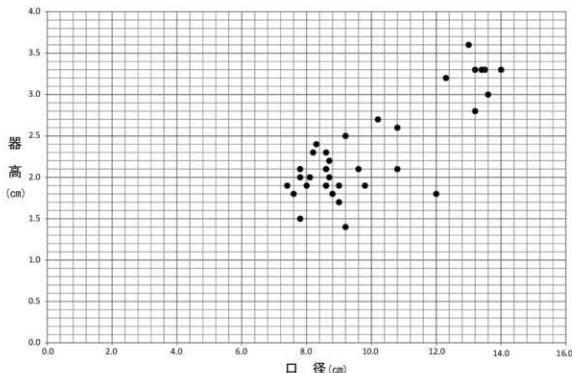


図 3-17 手づくねかわらけ器高/口径散布図

状態で、ロクロかわらけの規格は手づくねかわらけより若干大きな規格が小型品として選択されている。また、手づくねかわらけの規格で最も量が多かった1.3～1.4cmの規格についても資料数上では最も多く、個体数上でも3番目の量比となり、中型の規格品としては1.3～1.4cmの資料が手づくね・ロクロとも好まれる傾向にある。器高の平均は2.0cm、底径/口径の比率は0.71が平均で、手づくねに比べると底径幅が広い状態である。羽柴氏

口径	個数	個数%	個体数	個体数%
7.0-8.0未満	1	2.0	0.1	1.4
8.0-9.0未満	1	2.0	0.36	4.9
9.0-10.0未満	7	14.0	2.02	27.7
10.0-11.0未満	5	10.0	1.63	22.3
11.0-12.0未満	7	14.0	0.48	6.6
12.0-13.0未満	8	16.0	0.5	6.8
13.0-14.0未満	9	18.0	0.93	12.7
14.0-15.0未満	8	16.0	0.56	7.7
15.0-16.0未満	3	6.0	0.39	5.3
16.0以上	1	2.0	0.33	4.5
平均	90	100.0	7.3	100.0
最小	12.3			
最大	7.4			
標準偏差	16.2			
	2.07			

底径	個数	個数%	個体数	個体数%
4.0-5.0未満	1	4.3	0.08	1.2
5.0-6.0未満	1	4.3	0.15	2.3
6.0-7.0未満	7	30.4	2.23	34.5
7.0-8.0未満	6	28.1	2.86	45.7
8.0-9.0未満	4	17.4	0.98	13.6
9.0-10.0未満	1	4.3	0.17	2.6
平均	23	100.0	6.5	100.0
最小	7.1			
最大	4.6			
標準偏差	9.8			
	1.05			

器高 (15資料)		底径/口径	
平均	2.0	平均	0.71
最小	1.6	最小	0.58
最大	4.1	最大	0.78
標準偏差	0.64	標準偏差	0.05

表 3-13 ロクロかわらけ法量別組成比

がまとめたロクロかわらけの変遷(羽柴2001、また井上2009でもまとめられている)の数値と比較すると底径/口径の比率は小さいものから大きなものへ変化し、その後また小さくなる傾向とすることで、3期(11311～1145年頃)は0.45、4期(1146～1160年頃)は0.84、5期(1161～1175年頃)は0.51、6期(1176年頃～1189年)0.52～0.55としているが新田(1)遺跡の資料は0.71と4期以降の扱いとなることが想定される。

法量等の揃った資料について図3-18で器高指数/底径指数、図3-19で器高/口径の相関図を图示した。中型品の資料の点数が少なく、分的な傾向で一部規格外の資料が含まれているが、非ロクロに比べると若干まとまりが高く、規格として手づくねの小型の規格より若干大きい特定の規格を指向したことは明瞭である。

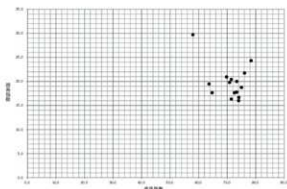


図 3-18 ロクロかわらけ指数散布図

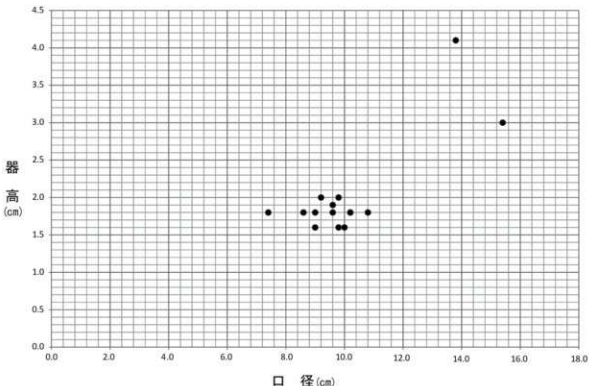


図 3-19 ロクロかわらけ器高/口径散布図

胎土の選択性についてロクロ使用のものは元々の土師器と同様に砂粒の混入するザラザラした胎土を使用しているが、手づくねについては粉っぽい白みを帯びる胎土を好んで使用しており、胎土の選択性が明らかに異なっている。

また、出土したかわらけ資料は口唇部の一部が打欠かされたり、青市埋報第107集-1図P-1-118-MA242のように一方が口唇部周辺、対角線上の部分は体部下半までU字状に打欠きが行われた資料などもあり、手づくね・ロクロかわらけとも使用後直ちに廃棄されたような使用方法ではなく、灯明具等も含め二次的に再利用された資料が一定量存在する。

B. 石製品

青市埋報第107集-1図S-1-1~3に掲載した資料のうち、中世以降の資料として考えられるのは基石の一部（遺構外資料等も含め特定不能なものが多い）と硯（図S-1-2-51・52）、石臼（同53・54）、五輪塔の水輪（図S-1-3-55）、地輪（図S-1-3-56）である。このうち五輪塔については梵字が水輪では1ヶ所、地輪では4ヶ所記されていたもとの推定できるが、打ち欠かれており不明瞭である。

C. 木製品

中世の木製品は掲載資料1,377点中、塗膜資料2点を含め180点図示した。古代の資料に比べるとバリエーションが少なく、断片的な要素が多い。また、箸状木製品は古代同様用途不明としたものが多く、棒状の木製品は一定量出土しているが、箸状

	点数	%
工具	6	3.33%
農耕具	1	0.56%
編み具・紡織具	0	0.00%
漁労具	0	0.00%
服飾具	1	0.56%
容器	14	7.78%
食事具	7	3.89%
祭祀具	2	1.11%
文房具	4	2.22%
遊具	0	0.00%
武器	0	0.00%
編物	1	0.56%
発火具	0	0.00%
建築部材	36	20.00%
施設材・器具材	22	12.22%
加工木	4	2.22%
削屑	4	2.22%
自然木	0	0.00%
用途不明	78	43.33%
	180	100.00%

表3-14 新田(1)遺跡木製品組成比(中世)

木製品は分類上非常に少ない。その他、近世・近世以降および時期不明資料48点を図示したが、中世以上に断片的な状況である。

D. 土製品・その他

古代の項目で記述したとおり、遺構外出土資料が多く、詳細時期が不明なものも多く含まれる。青市埋報第107集-1図CLE-1-1-37で図示したB-3区遺構外出土の土製基石は褐色気味の色調であるが、非常に精緻な焼成で、1点のみの出土であったが、明確に基石と判断できる資料である。また金属製品であるが、B-4区遺構外から出土した図CLE-1-6-A-1として図示した球状の資料は鉄砲玉で、規格的には4匁玉相当であるが、重量が1g程度と軽量過ぎる。B-1は新幹線調査区から検出したSK-112（青市埋報第94集第97図）から出土した骨角器で、手づくねかわらけや骨片なども併せている。青市埋報第106集-1第II章第5節の分析結果のとおり骨織やヤス等の刺突具の可能性の高い焼骨である。

E. 古銭

青市埋報第107集-1では現代の資料も含め133資料図示、1点写真図版のみの提示を行った。主に12世紀後半~13世紀前半代と想定される遺構には下限を北宋銭とする資料、15世紀代以降の資料は模銭銭と考えられる資料を含む洪武通寶や永楽通寶などが多く含まれる状態である。B-6区SK-174から出土したM-134（青市埋報第107集-1図CLE-1-1-11）は挿し状に50枚前後の束が3つ重なった状態で一部が溶かされ融着した状態で出土している。文字等は判読できなかった。

F. ガラス製品

青市埋報第107集-1では、2点図示した。古代の項目で前述の新幹線調査区S1-05カマド出土資料以外にA区遺構外出土の円形の欠損品をCLE-1-12-G-1として図示した。青みの強いガラスで、片面の中央が凹んだ形状を呈する（分析結果は、本報告第IV章第9節に所収した）。

調査番号	調査日	遺構番号	形状	位置		形状	面積	用途	備考	調査者	調査年度
				X	Y						
2-100-101-11	9-1	25a-101-11	円形	8034.53	11075.60	円形	1.74	土	新田(1)遺跡 11号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-10	9-1	25a-101-10	円形	8036.50	11086.00	円形	1.86	土	新田(1)遺跡 10号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-12	9-1	25a-101-12	円形	8033.14	11088.30	円形	1.82	土	新田(1)遺跡 12号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-13	9-1	25a-101-13	円形	8035.26	11101.87	円形	1.89	土	新田(1)遺跡 13号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-14	9-1	25a-101-14	円形	8035.90	11103.63	円形	1.92	土	新田(1)遺跡 14号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-15	9-1	25a-101-15	円形	8031.27	11106.22	円形	1.81	土	新田(1)遺跡 15号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-16	9-1	25a-101-16	円形	8033.63	11116.22	円形	1.82	土	新田(1)遺跡 16号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-17	9-1	25a-101-17	円形	8033.93	11121.33	円形	1.83	土	新田(1)遺跡 17号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-18	9-1	25a-101-18	円形	8035.28	11124.28	円形	1.84	土	新田(1)遺跡 18号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-19	9-1	25a-101-19	円形	8036.36	11131.43	円形	1.85	土	新田(1)遺跡 19号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-20	9-1	25a-101-20	円形	8037.19	11137.43	円形	1.86	土	新田(1)遺跡 20号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-21	9-1	25a-101-21	円形	8038.27	11144.48	円形	1.87	土	新田(1)遺跡 21号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-22	9-1	25a-101-22	円形	8039.35	11151.53	円形	1.88	土	新田(1)遺跡 22号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-23	9-1	25a-101-23	円形	8040.43	11158.58	円形	1.89	土	新田(1)遺跡 23号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-24	9-1	25a-101-24	円形	8041.51	11165.63	円形	1.90	土	新田(1)遺跡 24号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-25	9-1	25a-101-25	円形	8042.59	11172.68	円形	1.91	土	新田(1)遺跡 25号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-26	9-1	25a-101-26	円形	8043.67	11179.73	円形	1.92	土	新田(1)遺跡 26号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-27	9-1	25a-101-27	円形	8044.75	11186.78	円形	1.93	土	新田(1)遺跡 27号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-28	9-1	25a-101-28	円形	8045.83	11193.83	円形	1.94	土	新田(1)遺跡 28号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-29	9-1	25a-101-29	円形	8046.91	11200.88	円形	1.95	土	新田(1)遺跡 29号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-30	9-1	25a-101-30	円形	8048.00	11207.93	円形	1.96	土	新田(1)遺跡 30号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-31	9-1	25a-101-31	円形	8049.08	11214.98	円形	1.97	土	新田(1)遺跡 31号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-32	9-1	25a-101-32	円形	8050.16	11222.03	円形	1.98	土	新田(1)遺跡 32号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-33	9-1	25a-101-33	円形	8051.24	11229.08	円形	1.99	土	新田(1)遺跡 33号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-34	9-1	25a-101-34	円形	8052.32	11236.13	円形	2.00	土	新田(1)遺跡 34号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-35	9-1	25a-101-35	円形	8053.40	11243.18	円形	2.01	土	新田(1)遺跡 35号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-36	9-1	25a-101-36	円形	8054.48	11250.23	円形	2.02	土	新田(1)遺跡 36号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-37	9-1	25a-101-37	円形	8055.56	11257.28	円形	2.03	土	新田(1)遺跡 37号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-38	9-1	25a-101-38	円形	8056.64	11264.33	円形	2.04	土	新田(1)遺跡 38号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-39	9-1	25a-101-39	円形	8057.72	11271.38	円形	2.05	土	新田(1)遺跡 39号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-40	9-1	25a-101-40	円形	8058.80	11278.43	円形	2.06	土	新田(1)遺跡 40号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-41	9-1	25a-101-41	円形	8059.88	11285.48	円形	2.07	土	新田(1)遺跡 41号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-42	9-1	25a-101-42	円形	8060.96	11292.53	円形	2.08	土	新田(1)遺跡 42号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-43	9-1	25a-101-43	円形	8062.04	11299.58	円形	2.09	土	新田(1)遺跡 43号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-44	9-1	25a-101-44	円形	8063.12	11306.63	円形	2.10	土	新田(1)遺跡 44号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-45	9-1	25a-101-45	円形	8064.20	11313.68	円形	2.11	土	新田(1)遺跡 45号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-46	9-1	25a-101-46	円形	8065.28	11320.73	円形	2.12	土	新田(1)遺跡 46号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-47	9-1	25a-101-47	円形	8066.36	11327.78	円形	2.13	土	新田(1)遺跡 47号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-48	9-1	25a-101-48	円形	8067.44	11334.83	円形	2.14	土	新田(1)遺跡 48号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-49	9-1	25a-101-49	円形	8068.52	11341.88	円形	2.15	土	新田(1)遺跡 49号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-50	9-1	25a-101-50	円形	8069.60	11348.93	円形	2.16	土	新田(1)遺跡 50号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-51	9-1	25a-101-51	円形	8070.68	11355.98	円形	2.17	土	新田(1)遺跡 51号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-52	9-1	25a-101-52	円形	8071.76	11363.03	円形	2.18	土	新田(1)遺跡 52号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-53	9-1	25a-101-53	円形	8072.84	11370.08	円形	2.19	土	新田(1)遺跡 53号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-54	9-1	25a-101-54	円形	8073.92	11377.13	円形	2.20	土	新田(1)遺跡 54号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-55	9-1	25a-101-55	円形	8075.00	11384.18	円形	2.21	土	新田(1)遺跡 55号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-56	9-1	25a-101-56	円形	8076.08	11391.23	円形	2.22	土	新田(1)遺跡 56号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-57	9-1	25a-101-57	円形	8077.16	11398.28	円形	2.23	土	新田(1)遺跡 57号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-58	9-1	25a-101-58	円形	8078.24	11405.33	円形	2.24	土	新田(1)遺跡 58号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-59	9-1	25a-101-59	円形	8079.32	11412.38	円形	2.25	土	新田(1)遺跡 59号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-60	9-1	25a-101-60	円形	8080.40	11419.43	円形	2.26	土	新田(1)遺跡 60号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-61	9-1	25a-101-61	円形	8081.48	11426.48	円形	2.27	土	新田(1)遺跡 61号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-62	9-1	25a-101-62	円形	8082.56	11433.53	円形	2.28	土	新田(1)遺跡 62号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-63	9-1	25a-101-63	円形	8083.64	11440.58	円形	2.29	土	新田(1)遺跡 63号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-64	9-1	25a-101-64	円形	8084.72	11447.63	円形	2.30	土	新田(1)遺跡 64号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-65	9-1	25a-101-65	円形	8085.80	11454.68	円形	2.31	土	新田(1)遺跡 65号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-66	9-1	25a-101-66	円形	8086.88	11461.73	円形	2.32	土	新田(1)遺跡 66号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-67	9-1	25a-101-67	円形	8087.96	11468.78	円形	2.33	土	新田(1)遺跡 67号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-68	9-1	25a-101-68	円形	8089.04	11475.83	円形	2.34	土	新田(1)遺跡 68号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-69	9-1	25a-101-69	円形	8090.12	11482.88	円形	2.35	土	新田(1)遺跡 69号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-70	9-1	25a-101-70	円形	8091.20	11489.93	円形	2.36	土	新田(1)遺跡 70号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-71	9-1	25a-101-71	円形	8092.28	11496.98	円形	2.37	土	新田(1)遺跡 71号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-72	9-1	25a-101-72	円形	8093.36	11504.03	円形	2.38	土	新田(1)遺跡 72号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-73	9-1	25a-101-73	円形	8094.44	11511.08	円形	2.39	土	新田(1)遺跡 73号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-74	9-1	25a-101-74	円形	8095.52	11518.13	円形	2.40	土	新田(1)遺跡 74号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-75	9-1	25a-101-75	円形	8096.60	11525.18	円形	2.41	土	新田(1)遺跡 75号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-76	9-1	25a-101-76	円形	8097.68	11532.23	円形	2.42	土	新田(1)遺跡 76号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-77	9-1	25a-101-77	円形	8098.76	11539.28	円形	2.43	土	新田(1)遺跡 77号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-78	9-1	25a-101-78	円形	8099.84	11546.33	円形	2.44	土	新田(1)遺跡 78号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-79	9-1	25a-101-79	円形	8100.92	11553.38	円形	2.45	土	新田(1)遺跡 79号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-80	9-1	25a-101-80	円形	8102.00	11560.43	円形	2.46	土	新田(1)遺跡 80号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-81	9-1	25a-101-81	円形	8103.08	11567.48	円形	2.47	土	新田(1)遺跡 81号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-82	9-1	25a-101-82	円形	8104.16	11574.53	円形	2.48	土	新田(1)遺跡 82号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-83	9-1	25a-101-83	円形	8105.24	11581.58	円形	2.49	土	新田(1)遺跡 83号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-84	9-1	25a-101-84	円形	8106.32	11588.63	円形	2.50	土	新田(1)遺跡 84号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-85	9-1	25a-101-85	円形	8107.40	11595.68	円形	2.51	土	新田(1)遺跡 85号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-86	9-1	25a-101-86	円形	8108.48	11602.73	円形	2.52	土	新田(1)遺跡 86号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-87	9-1	25a-101-87	円形	8109.56	11609.78	円形	2.53	土	新田(1)遺跡 87号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-88	9-1	25a-101-88	円形	8110.64	11616.83	円形	2.54	土	新田(1)遺跡 88号土坑	新田(1)遺跡	1998
2-100-101-89	9-1	25a-101-89	円形	8111.72	11623.88	円形	2.55	土	新田(1)遺跡 89号土坑	新田(1)遺跡	1998

第Ⅱ章 新田(2)遺跡

新田(2)遺跡は、新田(1)遺跡と同様に昭和54年に青森県教育委員会によって登録された西バイパス(4)遺跡(青森県遺跡台帳番号201-080)が当初の登録遺跡名で、平成13・14年度の試掘・確認調査に伴って新田(2)遺跡として範囲が拡張登録された。

範囲拡張・名称変更が行われた時点でも実質的な掘削が新田(2)遺跡内で実施されることはなく、本報告第1分冊で報告した上下水道の調査が平成17・18年度に実施され、既に先行して本調査が実施されていた新田(1)遺跡の成果とともに西側方向に遺跡範囲が延びることが把握されてきた。

平成19年度に新田(2)遺跡の区画整理事業実施部分について全面発掘調査が実施された。

青市埋報第106集-1の調査概要編中で報告したとおり、平成18年度中に調整協議した結果、平成19年度に新田(2)遺跡の北側を青森県に発掘調査を委託し(調査担当：果里蔵文化財調査センター)、調査成果は平成20年度に報告書作成業務として青森県に委託し、青森県埋蔵文化財調査報告書第471集で報告されている。なお、果里蔵の調査資料は隣接する新田(1)遺跡の果里蔵文調査資料とともに平成22年度に譲与される形で返却された。(新田(2)遺跡は新田(1)遺跡の果里蔵文調査部分と異なり、市教委の発掘調査の委託業務として実施したのが実際であったが、果教委との契約上では通常の原因者負担同様の契約手続を行ったため、遺物の所有権を放棄という手続をとることとなった。結果的に譲与の形で返却された。)本報告第Ⅲ章第2節に追加資料を掲載している。

南側半分について市教委側が直営で発掘調査を実施し、発掘調査の遺構に関する遺構図および遺構観察表について平成22年度に刊行した青市埋報第107集-2で報告し、縄文時代の遺物について青市埋報第108集-1中で、古代以降の遺物について青市埋報第107集-3で報告した。

本項では報告済み及び本報告第Ⅲ章第1・2節で行った訂正および追加資料の情報も含め、前章の新田(1)遺跡同様、新田(2)遺跡の本文編としての報告内容を掲載することとする。

なお、新田(1)遺跡同様新田(2)遺跡についても縄文時代の遺物に関する記載事項は報告済であるため、縄文時代については遺構に関する概略を取り扱い遺跡全体としての様相については第Ⅴ章の総括編中で全体を取り扱うこととした。

また、古代以降の溝跡は新田(1)遺跡で触れたとおり、連結して変遷する部分があり、それぞれの遺跡単位での説明では成り立たない部分がある。

新田(1)遺跡で触れたとおり、縄文時代同様第Ⅴ章の総括編中で触れることとし、本項目中では個別の記載内容を優先して掲載した。

第1節 縄文時代

1. 遺構

詳細時期不明の遺構を含め、出土遺物・形状・堆積状況等から130基(別に1基は果側でS101として全面精査、2基は果側で別土坑番号が付与されている)の遺構を検出した。北側の果側の調査区は国道7号青森西バイパス北側の新田(1)遺跡の果里蔵文調査区や区画整理事業の発掘調査事業で本調査を実施した新城平岡(4)遺跡B・C区及びH区の東側の地点同様沢地地形が深く入り込んでおり、黒色土中に縄文土器が包含し、その上位に砂層と砂粘質土が堆積し、砂層の上面が古代以降の遺構面となっている。砂層の下からは新城平岡(4)遺跡のB・C区から弥生時代前期後半の年代値が得られた埋没林等も検出しており、少なくとも砂層の堆積はそれ以降の所産であると言える(青市埋報第112集-1・3参照)。

南側の市教委が担当した調査区は砂の堆積がない地点で、地山の面が遺構検出面で、古代以降の遺構検出面とレベル的にあまり差がない状態である。そのため、後世の土地利用による視乱や破壊による影響も強く、遺物の混入についても上面が後世の遺物の混入が顕著という新田(1)遺跡で見られた様相と同一の状況であった。縄文時代の遺構と推定される資料から複数の時期の縄文土器が出土する事例もあり、絞り込めない資料も含まれるが、縄文時代として認定した遺構について表3-20・21にまとめ、市教委側の遺構配置状況を図3-20、果教委の調査区の遺構配置状況(青森県2013『青森県史資料編2縄文後期・晩期編』掲載中の成果を含む)と合わせた資料を図3-21に掲載した。

縄文時代前期表層式・早稲田6式段階の資料、円筒下層d₁式、中期円筒上層c式、大木10式併行期、縄文時代後期十腰内I式、縄文時代晩期の資料が見られる。十腰内I式が量的に多く主体を占める。果側の成果を見ると同様に十腰内I式が量的に多い状況であるが、他に円筒上層b式や複林式なども伴っており、新田(1)遺跡の青森西バイパス北側では十腰内V式の土器が伴う竪穴住居跡が検出するなど、石江遺跡群の他の遺跡と比較可能な資料が揃っている。

a. 竪穴住居跡

遺構略号S1の付された資料のうち、縄文時代の

区	遺構名	時期	詳細時期	備考
S・T-18	SI-047	前期	表館	
S-16	SI-083	前期	表館	
X-21	SK-009	前期	表館	プラスチック土坑, SK-009<SK-008
Z-7	SK-073	前期	表館?	プラスチック土坑
Y-18	SX-017	前期	表館	
W-20	SK-097	前期	表館～早稲田	
S-19	SK-207	前期	早稲田 6or 表館	プラスチック土坑, SK-207<STP-009
Z-14・15	SK-005	前期	円筒下層	
X-21	SK-007	前期	円筒下層	プラスチック土坑
S-21・22	SK-201	前期	円筒下層 d ₁	プラスチック土坑
W・X-12	SK-003	前期		
Aa-17	SK-013	前期		
W-14	SK-071	前期		
Y・Z-13	SK-077	前期		
Aa・Ab-7	SK-078	前期		
W-14	SK-133	前期		プラスチック土坑, SK-133<SK-134
V・W-14	SK-134	前期		プラスチック土坑, SK-134<SK-133
Z・Aa-11	SK-164	前期		プラスチック土坑
Aa-12	SK-165	前期		
Z-12	SK-166	前期		
Y-11	SK-169	前期		
S-17	SK-239	前期		SK-239<SK-233
S-13・14	SK-254	前期		
W・X-11	STP-001	前期		
U-15	STP-010	前期		
Ab-11	STP-013	前期		
U・V-22	SI-002	中期	円筒上層 c	
T-16	SI-073	中期	円筒上層 c+ 表館 (前期)	
S-22	SI-087	中期	円筒上層 c	
X-19・20	SK-038	中期	円筒上層 c	プラスチック土坑, SK-038<SI-014
W-15	SK-050	中期	円筒上層 c	
Y-18	SX-029	中期	円筒上層 c	
T-5	SX-108	中期	円筒上層 c以降	
S-17	SI-071	中期	大木 10	
S-16・17	SI-077	中期	大木 10	
V・W-8	SI-045	後期	十層内 I	土坑+埋設
X-21	SK-008	後期	十層内 I	プラスチック土坑, SK-008<SK-009
Z-20	SK-026	後期	十層内 I	プラスチック土坑
X-5	SK-049	後期	十層内 I	
X-7	SK-090	後期	十層内 I	プラスチック土坑
S-22・23	SK-111	後期	十層内 I	
S-22	SK-197	後期	十層内 I	
S-22	SK-198 (県 SK12)	後期	十層内 I	プラスチック土坑
S-22	SK-199	後期	十層内 I	
S-22	SK-203	後期	十層内 I	県 SK11 と関連か
S-22	SK-204	後期	十層内 I	プラスチック土坑
V-10・11	SK-226	後期	十層内 I	プラスチック土坑
T・U-15	SK-241	後期	十層内 I	プラスチック土坑
T-15	SK-248	後期	十層内 I	
X・Y-4・5	STP-003	後期	十層内 I	
Aa-10	STP-004	後期	十層内 I	
Y-3	STP-005	後期	十層内 I	
Y-4	STP-006	後期	十層内 I	
X-21	STP-007	後期	十層内 I	新田(1)STP-0001 と同一遺構
S-19	STP-009	後期	十層内 I	
U-12・13	STP-012	後期	十層内 I	
W-13	SX-016	後期	十層内 I	プラスチック土坑
Ad-12・13, Ae-13	SX-039	後期	十層内 I	プラスチック土坑
Ae-17	SX-056	後期	十層内 I	
Y・Z-5・6	SX-111	後期	十層内 I	プラスチック土坑, 遺物はかなりまとまって埋塞
Y-14・15	SP-0145	後期	十層内 I	プラスチック土坑
S-18	県 SI01	後期	十層内 I 以降	
U-15	SD-045	詳細不明		溝状土坑 (Tpit)
W・X-22	SI-001	詳細不明		
W-18	SI-013	詳細不明		

表 3-20 新田(2)遺跡縄文時代遺構一覧表 -1

区	遺構名	時期	詳細時期	備考
X-19・20	SI-014	詳細不明		SK-038/SI-014(中期円筒上層c式以前)
U・V-22	SI-025	詳細不明		
V-15・16	SI-069	詳細不明		
X-17	SI-086	詳細不明		
Y-15	SK-004	詳細不明		
Aa-16・17	SK-012	詳細不明		フラスコ状土坑
Aa・Ab-17	SK-014	詳細不明		フラスコ状土坑
W-21	SK-016	詳細不明		
Aa-17	SK-021	詳細不明		フラスコ状土坑
Y-19	SK-031	詳細不明		フラスコ状土坑
Z-19	SK-032	詳細不明		フラスコ状土坑
Z-19	SK-032b	詳細不明		
Z-19	SK-033	詳細不明		フラスコ状土坑
Aa-19	SK-039	詳細不明		
Aa-19	SK-040	詳細不明		フラスコ状土坑
X-17	SK-042	詳細不明		フラスコ状土坑, SK-042/SK-053
Aa-19	SK-043	詳細不明		
X・Y-6	SK-045	詳細不明		フラスコ状土坑
X-17	SK-053	詳細不明		フラスコ状土坑, SK-053/SK-042
Aa-10	SK-065	詳細不明		フラスコ状土坑
Y-17・18	SK-070	詳細不明		フラスコ状土坑
Y-17	SK-079	詳細不明		
X・Y-6・7	SK-086	詳細不明		フラスコ状土坑
X・Y-7	SK-088	詳細不明		
W-20	SK-096	詳細不明		フラスコ状土坑
Ac-13	SK-098	詳細不明		
Ac-13	SK-099	詳細不明		
Ac-14	SK-100	詳細不明		
Ac-14	SK-101	詳細不明		
Ab-13・14	SK-102	詳細不明		フラスコ状土坑
Ac-12	SK-115	詳細不明		
Ac-12	SK-116	詳細不明		
Ac-13	SK-117	詳細不明		
S-22	SK-119	詳細不明		
W-14	SK-132	詳細不明		
Z-5	SK-152	詳細不明		フラスコ状土坑
S-19	SK-155	詳細不明		フラスコ状土坑
X・Y-11	SK-170	詳細不明		
W-7	SK-171	詳細不明		
W-8・9, X-9	SK-172	詳細不明		
Aa-13	SK-177	詳細不明		Pit1:24×(20)×12cm
Ac-17	SK-179	詳細不明		
Ac-17	SK-180	詳細不明		
Ac-17	SK-181	詳細不明		
Y-10・11	SK-182	詳細不明		フラスコ状土坑
Ac・Ad-16	SK-193	詳細不明		
X-5	SK-196	詳細不明		フラスコ状土坑
V・W-4・5	SK-210(SI-036SK-01)	詳細不明		調査時SI-036SK-01, 上面古代
T-21	SK-215	詳細不明		フラスコ状土坑
S-22	SK-216	詳細不明		
Y-14	SK-229	詳細不明		フラスコ状土坑
S-17	SK-233	詳細不明		
U-16	SK-235	詳細不明		
T-18	SK-237	詳細不明		
U-10・11	SK-238	詳細不明		フラスコ状土坑
U-8	SK-240	詳細不明		
T-16	SK-247	詳細不明		フラスコ状土坑
T-9	SK-250	詳細不明		フラスコ状土坑, 第1層に土師器 散じり
T-10	SK-251	詳細不明		フラスコ状土坑
T-15	SK-252	詳細不明		
Z-8	STP-002	詳細不明		
Z・Aa-12	STP-008	詳細不明		
S-13	STP-011	詳細不明		
T・U-22	SX-100	詳細不明		
T・U-7	SX-106	詳細不明		

表3-21 新田(2)遺跡縄文時代遺構一覧表-2

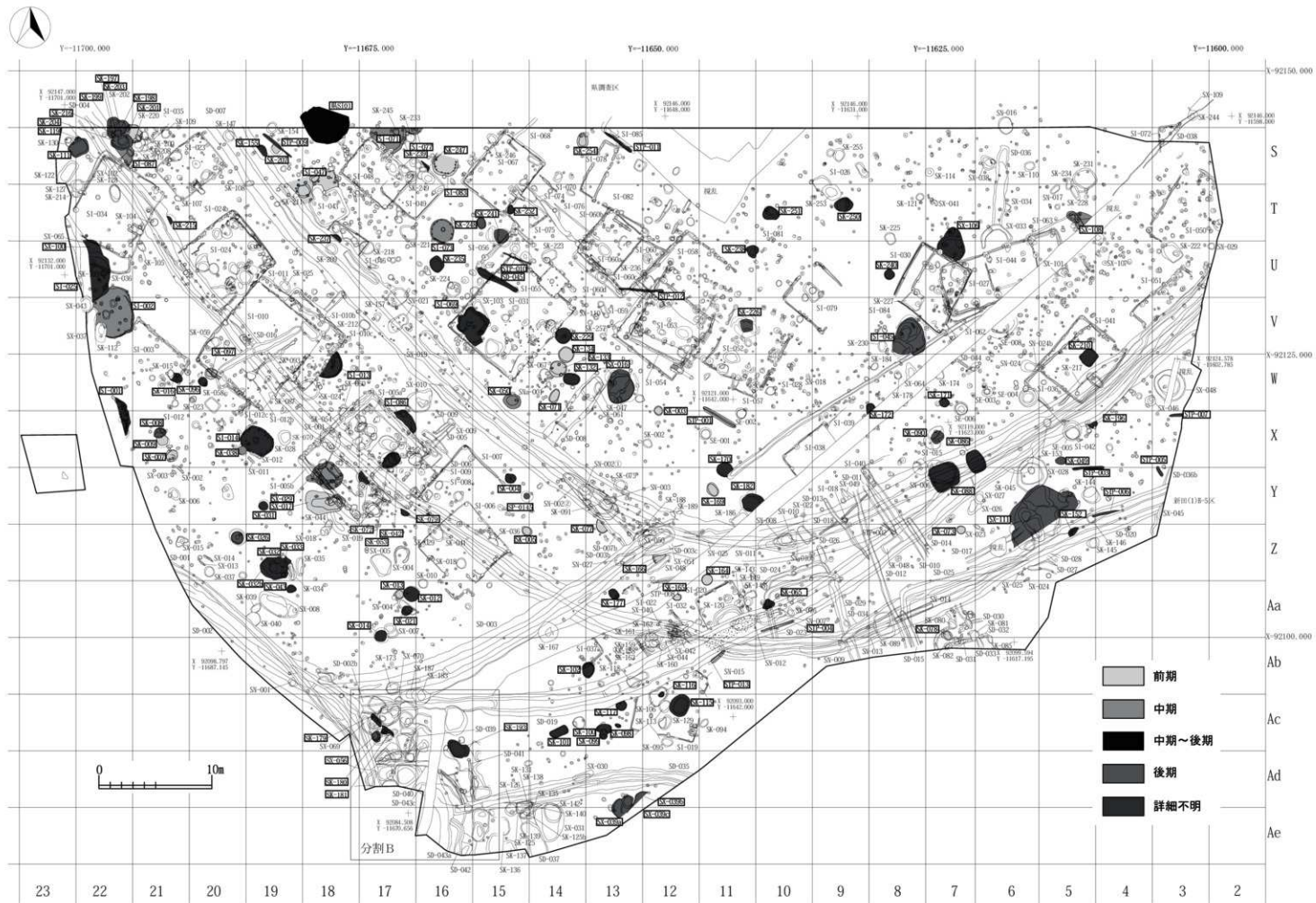


図 3-20 新田(2)遺跡縄文時代遺構配置図(S=1/300)

新田(2)遺跡遺構配置図(市教委調査区+県調査区) S=1/600

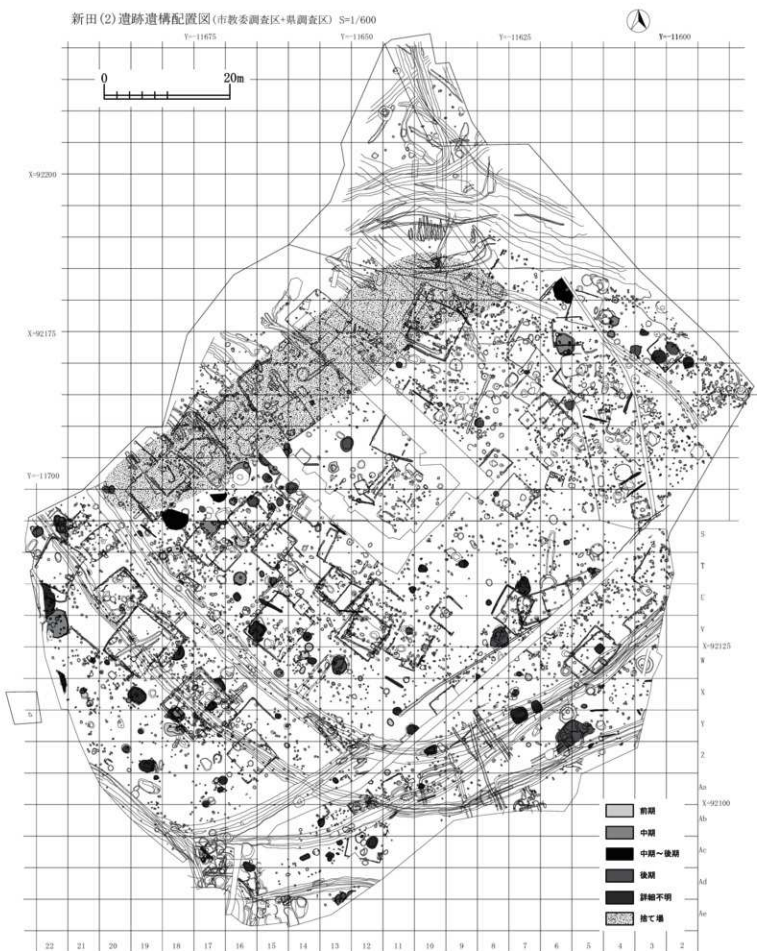


図 3-21 新田(2)遺跡縄文時代遺構配置図〔市調査区+県調査区〕(S=1/600)

竪穴住居跡として認定した資料は14軒で、他に埋設土器遺構と土坑を含めてS1を付した遺構が1基ある(S1-045)。小規模な円形の掘りこみにS1-083のように小規模な壁柱穴に伴う資料に表館式の土器が単独で出土する事例があり、近隣ではS1-073のように後代の資料が混入する事例も若干認められるが、ほぼ該期に帰属する可能性が高い。中期以降の資料はS1-002のように楕円形状を呈するものがあり、出土遺物が認められなかったことから詳細時期の認定がされていない資料が多いが、重複するS1-025などを含めると斜面の落ち際の部分で複数時期変遷する土地利用が行われていたものと考え、大木10式の土器が重複するS1-071・077から出土しており、該期に帰属する可能性が高いが、古代の竪穴建物跡や果側の調査区に延びる形で部分的な様相であったことから詳細は不明である。縄文時代後期の十腰内I式期については遺物量やフラスコ状土坑の検出数が最も多いが、竪穴住居跡は不明瞭で果埋文調査のS101(第1号竪穴住居跡)が市教委の調査区内から検出している程度である。

b. 土坑

遺構略号SKとした遺構のうち90基を縄文時代に帰属する資料とした。半数近くの42基がフラスコ状土坑である。県との調査区境界部分でも検出しており、SK-198が果側ではSK12、SK-199が果側ではSK11として精査されている。前期の資料が20基、中期が2基、後期が14基であるが、前期の資料は体部資料が多く詳細時期が判然としない資料が多く、場合によって中期帰属資料になる可能性のある資料が13基ある。その他詳細時期不明の資料が56基あり、SK-004については中央部分に小ピットを検出しており、円筒形の陥し穴の可能性がある。また、SK-250については最上層の第1層から土器・須恵器が出土している。他に後述するSX扱いの資料やSP扱いの資料の中にもSP-0145はピット扱い精査されているが、明確にフラスコ状土坑である。

c. 溝状土坑(Tピット)

一部溝跡として取り扱われた資料が存在する(SD-045)が14基検出した。前期の可能性のある体部資料が出土したものが3基、後期十腰内I式の土器片が出土した遺構が7基、詳細時期不明の遺構が4基である。古代以降の遺構と重複する事例が多く、残存状況の悪い資料が多いが、新田(1)遺跡や果埋文調査区同様2・3程度度が近接する状況で配置している。なお、STP-007は新田(1)遺跡B-5区STP-001の西側にあった。

d. 土器埋設遺構

北側の果調査区では縄文時代中期の土器埋設遺構が2基検出している(青果埋報第471集)が、市教委側では中期の土器埋設遺構の検出はなく、S1-045としたS1扱いの遺構から縄文時代後期前葉十腰内I式の土器埋設遺構が検出している(遺構図青市埋報第107集-2図2-184、遺物青市埋報第108集-1第12図-4)。

e. その他の遺構

遺構略号SXとした資料のうち縄文時代に帰属する資料は9基検出した。うち、2基は竪穴住居跡の掘り方相当の規模である。また、6基は土坑と同程度の規模で、2基はフラスコ状を呈する。残りの1基はSX-111とした遺構で、複数の掘削が行われた痕跡で、一部はフラスコ状を呈している。時期は前期が1基、中期が2基、後期が4基、時期不明が2基である。

第2節 古代

1. 遺構

古代以降の遺構については新田(1)遺跡同様同一地点の土地利用の継続に伴う掘り返しの連続で、後世の耕作や土地改変の影響が強く、特に標高の高い部分では鉄筋コンクリートの既存建物の基礎によって破壊された部分や削平が顕著であった。遺構検出が部分的なものが多く、明確な時代区分ができない資料も含まれ、新田(1)遺跡同様古代以降という取り扱いとなる資料が含まれることを予め断っておきたい。

A. 竪穴建物跡

丘陵上の調査区から86軒を竪穴建物(住居)跡と認定し、青市埋報第107集-2で遺構図・遺構観察表を報告している。前述の縄文時代に帰属する資料が14軒(うち1基は土坑と埋設土器遺構の集合体)、古代の資料が65軒、中世が7軒である。本報告74頁第三章中で報告したとおり、S1-036とS1-042が統合され、遺構数の変更が生じており、古代は64軒が竪穴建物扱いとなる。

この64軒については更に壁溝やカマドのみの部分的な検出資料が2軒含まれ、北側の果教委調査資料と同一資料が2軒(うち1軒は果側では溝扱い)存在する。

また、新田(1)遺跡B-3・5・6区の資料4軒(B-3区S1-01・02、B-5区S1-0001、B-6区S1-031)については配置上新田(1)遺跡検出の竪穴建物跡との関連性より新田(2)遺跡内で検出した竪穴建物跡との関連性が認められ、本項目内でも触れることとする。

a. 平面形

新田(1)遺跡資料4軒を含む68軒中、A:方形14、B:長方形28、D:台形4、N:不明(部分的検出含む)22で、長方形の資料が多い。また、張出を持つ資料が3軒(SI-006・010c・057)ある。

b. 断面形

68軒中、削平を受けた資料が半数近くの32軒あり、残存している資料も不明瞭な資料が多い。a:垂直に近い形で立ち上がる:14、a+d垂直に近い形+緩やかに立ち上がる:2、b壁上部で緩やかな傾斜が見られる:1、c壁上部の一部で緩やかに立ち上がる:2、d緩やかに立ち上がる:17。

c. 平面規模・面積

長・短軸規模の相関を表したものを図3-22に表した。なお、この図は前述の新田(1)遺跡資料、県埋文資料および中世の堅穴建物跡についても含んだ資料である。検出部分が限定的な資料も含まれるが、面積は小(15㎡未満)17、中(15㎡~25㎡未満)11、大(25㎡~40㎡未満)22、特大(40㎡~60㎡未満)7、超特大(60㎡以上)3で、大の軒数が最も多く、小が17軒で続く。超特大についても新田(1)遺跡同様3軒存在する。

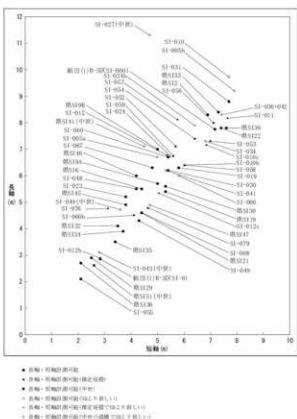


図3-22 新田(2)遺跡堅穴建物跡規模

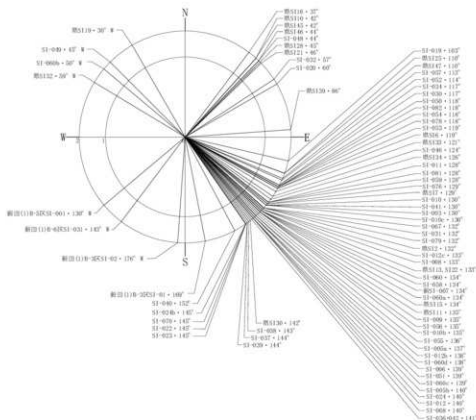


図3-23 新田(2)遺跡堅穴建物跡主軸方位

d. 主軸方位

堅穴の主軸方位について図3-23に図示したが、新田(1)遺跡検出の堅穴建物跡と類似する資料が存在する一方対角の北西・北東方向側の軸線をとる資料が若干存在する。

e. 主柱配置

新田(1)遺跡と同様不明瞭な資料が含まれる(N=不明31)が、区分できた資料の中でも他の分類に属する可能性は排除できない。内訳はA(柱穴なし):4、B(柱穴中央4本柱):1、D(堅穴中央2本、壁面2本):3、G(堅穴壁際9本柱):1、H(堅穴壁際10本以上)2.5、I(堅穴中央1本、壁面3本):1、J(堅穴中央壁際4本):1、L(2本柱):1。

f. 壁溝

6.8軒中5.4軒から検出。うち5.1軒の壁溝内にピットが伴う。内訳はa(ほぼ全周):9、b(断続的に全周):5、c(コの字状に残存):1.2、d(2壁に残存):9、e(部分的に残存):1.9、f(壁溝なし):1.4である。

g. 火山灰

堅穴内から検出したのはB-Tm火山灰がSI-019・030・046・054・057・059と新田(1)B-6区SI-031の7軒である。SI-054は掘り方中に混入し、重複関係のある前段階のSI-059のカマド堆積土中にB-Tm火山灰が見られることからSI-059の廃絶後に堆積し、SI-054の資料は混入物である。(SI-059 Pit 4からも検出しているが、SI-054との重複部分に相当し、SI-054側の帰属要素が高い)。SI-019・046は堆積土中層～上層にかけてある程度まとまった層的な堆積を示す資料であるが、いずれも床面検出のピットの上面からも検出しているなど、堆積後の二次的影響か、二次堆積の要素が残る。また、SI-057 Pit 5については堅穴建物の柱穴列とは軸線が異なり、屋外側に飛び出した地点から検出したピットであるため、帰属資料として記録しているが、帰属外の可能性が高い。

T₀-a火山灰を検出した資料は土層記録上はなく、検出範囲の記録のみでSI-030・031の2軒のみである。拡張が行われた建物で、軸線が近似しているなど共通性が認められ、二次的要因で混入していたものと考えられる。

このように一部の堅穴建物跡はT₀-a火山灰が混入する資料があり、B-Tm火山灰降灰時には廃絶していた建物跡が認められる。該期には本遺跡南

側の高間(1)遺跡や西側の新城平岡(4)遺跡などでの検出数も多く、集落の主体はその部分にあったものと考えられるが、一部は既に新田(2)遺跡内で建物が存在していたようである。

h. カマド

削平のため明瞭でない資料が多く、火床面だけの検出事例が1.4基含まれるが、3.3軒から3.6基のカマドを検出した。構造のわかる資料のうち半地下式が2.0基、地下式が2.5基で、半地下式は煙道長が2.0cm未満の資料が1.1基、2.0cm以上が9.5基で、煙道の短い資料が多い傾向である。県埋文調査資料を含めた主軸方位について図3-24に掲載した。南東方向が主体を占め、その対角の北西方向、軸線を90度振り替えた北東方向が存在する。

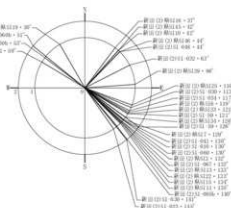


図3-24 新田(2)遺跡カマド主軸方位
i. 建替・拡張

同一地点での拡張や建替がなされたのは削平によって不明瞭な地点が多いが、丘陵頂部側グリッドV-W-10・11～S-T-17周辺に展開する堅穴建物跡が2～6軒の建物の建替が認められる。この延長線上の県側の調査区でも県調査区グリッドIM-4.0～IN-4.5グリッド周辺に展開する堅穴が3～6軒の重複が認められる。市教委の調査区内では西側のSD-004の上に構築された堅穴建物跡が2～4軒の重複が認められ、溝の流路替えの時点で複数段階の変遷を経ていることが窺える。北側の県埋文の調査区上では市教委調査区SD-004に関連するSD59上にはSI41・47の重複一ヶ所のみで、その重複部分もSI41が中世扱いであることから古代については実質的に1軒のみの重複である。SD59の外側に展開する堅穴建物は古代の時点でSI47とSI45のみで、SD59より内側の地点で重複展開する傾向が強い。

なお、新田(1)遺跡同様集落の変遷については県埋文調査区を含めた情報や新田(1)遺跡から検出した情報を併せた検討が必要であり、第V章総括編中で提示することとする。

平面形			
b	長方形	1	
c	隅丸方形	3	
e	ea	不整形	15
	eb	不整長方形	3
	ec	不整隅丸方形	0
	ef	不整楕円形	42
	eg	不整小判形	0
	eh	不整円形	30
ex	不整形	4	
f	楕円形	9	
g	小判形	6	
h	円形	3	
x	不明	6	

断面形		
a	ほぼ垂直	19
a+d	垂直+緩やか	1
a+f	垂直+傾伏	3
a+i	垂直+凹凸	8
b	壁上部で緩やかな傾斜	1
c	壁上部の一部で緩やかな傾斜	3
c+i	壁上部の一部で緩やか+凹凸	1
d	緩やかに立ち上がる	32
d+i	緩やかに立ち上がる+凹凸	15
e	段状に立ち上がる	4
f	段状	5
f+i	段状+凹凸	1
h	竪鉢状	9
h+i	竪鉢状+凹凸	6
i	凹凸を持つ	8
j	柱穴状	1
x	不明	5

表 3-22 新田(2) 遺跡土坑形状(古代)

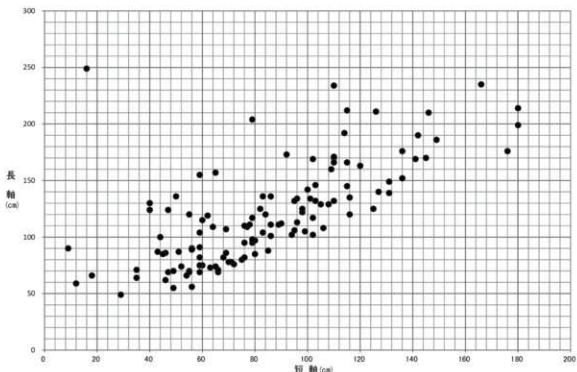


図 3-25 新田(2) 遺跡土坑規模(古代)

B. 土坑

検出した242基のうち、古代に帰属するないしは古代以降に帰属すると認定できた資料は約半分の122基である。新田(1)遺跡同様古代の遺構に縄文土器が混入していたり、縄文時代の遺構の上に古代以降の遺物が混入するケースが認められ、時期判断が不明瞭な資料も含まれている。

平面形は表3-22にまとめた。不整形が94基ではほとんどがいびつな形状である。不整形の資料について指向した形を細分してみると新田(1)遺跡同様楕円形(42基)と円形(30基)が多い傾向にある。また、断面形については凹凸の顕著な資料が多く、壁の形状と組み合わせられた分類が多くなっているが、緩やかに立ち上がる形状が多く、円筒形や垂直に近い形で立ち上がる形状が続く。長短軸の相関を図3-25に掲載したが、新田(1)遺跡同様穴測や調査区外に延びる資料以外は相関性の高い形状で、120cm以下に集中する形状である。

C. 井戸跡

丘陵地上の調査区から7基検出し、うち6基が古代ないしは古代以降と認定した。平面形は円形基調

平面形			
e	ah	不整円形	2
h		円形	4

断面形			
a		ほぼ垂直	3
b		壁上部で緩やかな傾斜	2
c		壁上部の一部で緩やかな傾斜	1

表 3-23 新田(2) 遺跡井戸跡形状(古代)

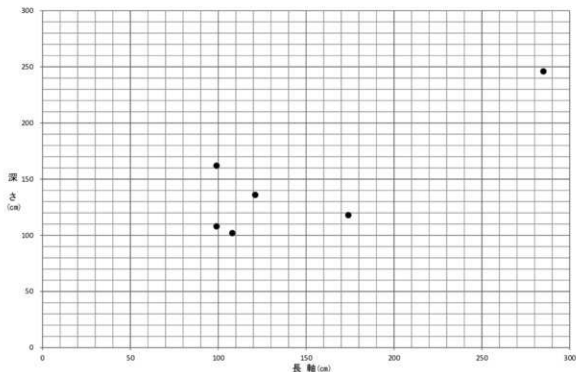


図 3-26 新田(2) 遺跡井戸跡規模 (古代)

で断面形が円筒形を呈する素掘りの井戸跡である。深さはSE-008以外は1m台と浅めで、長軸規模も土坑と大差のない資料がほとんどである。

D. 炉跡・焼土状遺構・炭窯

炉跡や焼土状遺構、カマド状遺構等焼成関連遺構について略号をSNとして精査しており、新田(2)遺跡では27基を検出した。

古代ないし、古代以降と認定した遺構は24基であるが、B-Tm火山灰が介在した焼成土坑であるSN-024(上面に堆積する第8層中に擦文土器が出土するなど、時期的に下る資料が混入する)などの資料以外はSN-002・007などの資料が、古代の囲郭溝である溝の埋没後の上面に掘削された長楕円形状の形態を有する炭窯である。さらにその資料には土坑状の焼成関連遺構が重複している。

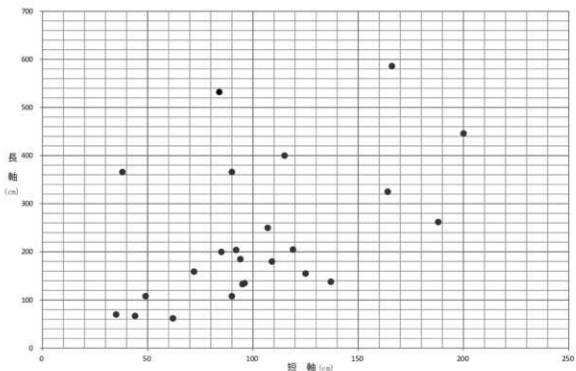


図 3-27 新田(2) 遺跡焼土状遺構・炉跡・炭窯規模 (古代)

新田(1)遺跡ではB-2区から検出したSN-04・05・05b(青市埋報第106集-2図2-196~199)が同様に溝上に構築されており、出土遺物はロコロかわらけ主体(青市埋報第107集-1図P-1-117)で、12世紀後半以降の所産であるが、新田(2)遺跡内から検出された溝上に構築された遺構からはかわらけ等が出土せず、土師器・須恵器・撤土器・縄文土器など古代以前の土器が主体となっている。溝上の構築であるため、溝の埋没の最終段階に廃棄された資料の混入が主体であることが想定され、一部の資料は溝跡出土資料との接合関係が認められるなど、遺物の初出については遺構の構築前の資料が一定量含まれる。焼成関連施設を意図的に溝の埋没地点を利用している点は新田(1)側の中世の資料でも認められることで、古代の溝の変遷(SD-004=SD-020→SD-007→SD-019)それぞれの埋没後の地点を利用していることなど、選地として溝の上であったことが重視されているようである。

E. 性格不明遺構

遺構略号SXとした性格不明遺構については106基検出し、古代ないし古代以降と認定した資料は32基である。新田(1)遺跡では遺構略号でSMとした円形周溝状の掘り込みについても本遺跡ではSX扱いとなっており、2基含まれる。遺物は縄文土器単独や土師器等平安時代の土器が単独で出土する事例でも、重複で古い方の遺構から近世以降の陶磁器が混入する事例もあり、時期不明扱いの資

料が59基と大部分を占める。

F. 溝跡

溝跡は50条検出したが、新田(1)遺跡同様調査地点ごとに分断して調査しており、果狸文の調査区で検出した溝跡とも連結するものも含まれる。さらに新田(1)遺跡側で調査された溝跡と連結する資料も存在する。集落を開削する溝として認定できる資料があり、時期が下るに従って外側に流路替えが行われたと認定できる資料が存在する。ただ、この項目での詳述はせず、新田(1)遺跡の項目で記述したとおり、第V章の総括編中で述べることとする。

2. 遺物

石江土地区画整理事業に伴う新田(2)遺跡から出土した遺物については青市埋報第107集第3分冊中で、選別資料の実測図および遺物観察表を掲載し、情報を報告した。遺構情報と同様に本報告第III章で記載内容の訂正等の情報を掲載したが、本項では、種別ごとの概要について触れることとする。

A. 土器

市教委の調査区からは68,426点の土器の出土があった。接合・選別し、青市埋報第107集-3で掲載した資料1,206点と口縁部のみの資料2,327点を加え、口縁部残存計測法では3,533点(個体数322.2個体)、底部残存計測法で379点(246.97個体)を対象とし組成比

全資料	資料数	%	個体数	%	
須恵器	併	0	0.23	1.31	0.41
	漆・灰類	6	0.17	2.14	0.66
	鉢	1	0.03	0.29	0.09
	壺	1	0.03	0.09	0.03
黒色土器	甕	22	0.62	1.8	0.50
	非黒色磁土類	15	0.42	2.66	0.83
	灰口壺	3	0.08	0.29	0.08
土師器	甕(口縁部)	1,881	53.24	153.05	47.50
	甕(口縁部)	81	2.29	7.89	2.45
	皿	15	0.42	3.46	1.07
	小鉢・小皿	3	0.08	0.33	0.10
	壺(口縁部)	17	0.48	1.32	0.41
	壺(非口縁部)	1,043	29.52	97.31	30.20
	小壺(口縁部)	24	0.68	3.45	1.07
	小壺(非口縁部・把手付合)	329	9.31	37.42	11.61
	壺	4	0.11	0.14	0.04
	壺	2	0.06	1.48	0.46
	羽蓋	4	0.11	0.38	0.12
	鉢	4	0.11	0.39	0.12
	灰口壺	5	0.14	0.7	0.22
	小壺	13	0.42	1.82	0.54
	撤土器	14	0.40	0.74	0.23
縄文土器	壺	35	0.99	2.79	0.87
	小杯	1	0.03	1	0.31
合計	3,533	100.00	322.21	100.00	

種別ごと	資料数	%	個体数	%
須恵器	16	0.45	3.83	1.19
黒色土器	40	1.13	4.51	1.40
土師器	3,441	97.40	310.08	96.24
縄文土器	36	1.02	3.79	1.18
合計	3,533	100.00	322.21	100.00

資料数	%	個体数	%	
須恵器	2,026	57.35	171.9	53.23
黒色土器	1,458	41.27	144.29	44.78
撤土器	35	0.99	5.68	1.76
製法土器	14	0.40	0.74	0.23
合計	3,533	100.00	322.21	100.00

資料数	%	個体数	%		
須恵器	併	0	0.39	1.31	0.78
黒色土器	甕	22	1.09	1.6	0.93
	非黒色磁土類	15	0.74	2.66	1.55
土師器	甕(口縁部)	1,881	52.84	153.05	89.24
	甕(口縁部)	81	4.00	7.89	4.60
	皿	15	0.74	3.46	2.02
	小鉢・小皿	3	0.15	0.33	0.21
縄文土器	小杯	1	0.05	1	0.58
小計	2,026	100.00	171.9	100.00	

資料数	%	個体数	%		
須恵器	壺(口縁部)	17	1.17	1.32	0.91
	壺(非口縁部)	1,043	71.54	97.31	67.44
	小壺(口縁部)	24	1.65	3.45	2.39
	小壺(非口縁部)	329	22.57	37.42	25.93
	壺	4	0.27	0.14	0.10
	壺	2	0.14	1.48	1.03
	羽蓋	4	0.27	0.38	0.26
縄文土器	壺	35	2.40	2.79	1.83
小計	1,458	100.00	144.29	100.00	

資料数	%	個体数	%		
須恵器	漆・灰類	6	17.14	2.14	37.68
	鉢	1	2.86	0.29	5.11
	壺	1	2.86	0.09	1.58
黒色土器	灰口壺	3	8.57	0.25	4.40
土師器	甕	4	11.43	0.39	6.97
	灰口壺	5	14.29	0.71	12.32
	小壺	15	42.86	1.82	32.04
小計	35	100.00	5.68	100.00	

表 3-24 新田(2)遺跡古代土器組成表(口縁部残存計測法による)

を検討した。

集落としてはB-Tm火灰層灰前の10世紀初頭～前半にかけての資料が若干含まれるが、主体は新田(1)遺跡と同様10世紀中葉以降10世紀

後半から11世紀前半にかけての資料が主体となる。種別ごとの構成を見てみると新田(1)遺跡とは異なり軸輪陶器が含まれず、土師器が全体の96%以上を占める形で、新田(1)遺跡より

土師器類	資料数	%	個体数	%
A	889	47.89	89.4	46.15
Aa	552	29.61	42.84	23.35
Ab	336	18.03	26.73	17.77
Ac	0	0.00	0	0.00
Ax	1	0.05	0.03	0.02
B	956	51.29	79.79	53.06
Ba	168	9.01	14.93	9.93
Bb	95	5.10	7.41	4.93
Bc	598	32.08	48.7	32.38
Bd	72	3.86	7	4.65
Be	18	0.97	1.54	1.02
Bf	1	0.05	0.08	0.05
Bx	4	0.21	0.13	0.09
C	19	1.02	1.2	0.80
Ca	10	0.54	0.37	0.38
Cb	8	0.43	0.61	0.41
Cx	1	0.05	0.02	0.01
小計	1,864	100.00	150.39	100.00

土師器類	資料数	%	個体数	%
A	40	49.38	4.18	52.84
Aa	29	35.60	3.11	39.32
Ab	9	11.11	0.96	10.97
Ac	2	2.47	0.21	2.65
B	33	40.74	3.03	38.31
Ba	6	7.41	0.42	5.31
Bb	2	2.47	0.28	3.54
Bc	15	18.52	1.47	18.58
Bd	8	9.88	0.68	8.60
Be	0	0.00	0	0.00
Bf	1	1.23	0.13	1.64
Bx	1	1.23	0.05	0.63
C	8	9.88	0.7	8.85
Ca	7	8.64	0.37	4.68
Cb	1	1.23	0.33	4.17
小計	81	100.00	7.91	100.00

土師器類	資料数	%	個体数	%
A	120	11.51	11.19	11.53
Aa	30	2.88	3.22	3.32
Ab	29	2.78	4.71	4.85
Ac	25	2.40	1.58	1.63
Ax	36	3.45	1.68	1.73
B	538	51.58	46.97	48.38
Ba	117	11.22	9.99	10.29
Bb	137	13.14	18.4	18.88
Bc	153	14.67	15.04	15.49
Bx	131	12.56	5.54	5.71
C	333	31.93	33.6	34.61
Ca	130	12.46	11.94	12.30
Cb	70	6.71	8.55	8.81
Cc	118	11.31	12.46	12.83
Cx	15	1.44	0.65	0.67
D	51	4.89	5.19	5.35
Da	2	0.19	0.1	0.10
Db	42	4.03	4.59	4.73
Dc	7	0.67	0.5	0.52
E	1	0.10	0.13	0.13
Ec	1	0.10	0.13	0.13
小計	1,043	100	97.08	100

土師器類	資料数	%	個体数	%
A	5	29.41	0.37	27.82
Aa	3	17.65	0.25	18.80
Ab	1	5.88	0.08	6.02
Ax	1	5.88	0.04	3.01
B	10	58.82	0.71	53.38
Ba	1	5.88	0.03	2.26
Bb	5	29.41	0.48	36.09
Bc	0	0.00	0	0.00
Bx	4	23.53	0.2	15.04
C	1	5.88	0.18	13.53
Ca	1	5.88	0.18	13.53
Cb	0	0.00	0	0.00
Cc	0	0.00	0	0.00
D	1	5.88	0.07	5.26
Da	1	5.88	0.07	5.26
小計	17	100	1.33	100

土師器類	資料数	%	個体数	%
A	11	71.33	3.42	81.82
Aa	5	33.33	0.78	18.66
Ab	5	33.33	1.8	43.06
Ba	0	0.00	0	0.00
Ax	0	0.00	0	0.00
B	4	26.67	0.76	18.18
Ba	2	13.33	0.48	11.48
Bb	2	13.33	0.9	20.93
Bc	2	13.33	0.28	6.70
小計	15	100.00	4.18	100.00

黒色・非黒色 色磁器土器	資料数	%	個体数	%
A	15	40.54	2.23	53.71
Aa	8	21.82	1.26	48.23
Ab	6	16.22	0.29	6.84
Ax	1	2.70	0.03	0.71
B	18	48.65	1.38	32.55
Ba	8	21.82	0.54	12.74
Bb	2	5.41	0.22	5.19
Bc	8	21.82	0.62	14.62
C	4	10.51	0.58	13.63
Ca	3	8.11	0.57	13.44
Cb	1	2.70	0.01	0.24
小計	37	100.00	4.24	100.00

土師器類	資料数	%	個体数	%
A	14	4.26	1.02	2.72
Aa	4	1.22	0.2	0.53
Ab	4	1.22	0.44	1.17
Ac	0	0.00	0	0.00
Ax	6	1.82	0.38	1.01
B	137	41.64	14.17	37.83
Ba	20	6.08	2.35	6.27
Bb	45	13.68	5.16	13.77
Bc	35	10.64	4.37	11.67
Bx	37	11.25	2.29	6.11
C	145	44.07	19.49	52.03
Ca	59	17.93	7.14	19.06
Cb	32	9.73	4.71	12.57
Cc	48	14.59	7.43	19.83
Cx	6	1.82	0.21	0.56
D	31	9.42	2.4	6.41
Da	0	0.00	0	0.00
Db	30	9.12	2.36	6.30
Dc	1	0.30	0.04	0.11
E	2	0.61	0.38	1.01
Ec	2	0.61	0.38	1.01
小計	329	100	37.46	100

土師器類	資料数	%	個体数	%
A	0	0.00	0	0.00
Aa	0	0.00	0	0.00
Ab	0	0.00	0	0.00
Ax	0	0.00	0	0.00
B	12	50.00	1.23	35.65
Ba	2	8.33	0.45	13.04
Bb	5	20.83	0.45	13.04
Bc	2	8.33	0.13	3.77
Bx	3	12.50	0.2	5.80
C	11	45.83	2.09	60.58
Ca	2	8.33	0.82	23.77
Cb	7	29.17	0.99	28.70
Cc	2	8.33	0.28	8.12
D	1	4.17	0.13	3.77
Da	1	4.17	0.13	3.77
小計	24	100	3.45	100

表 3-25 新田(2)遺跡食膳具および煮炊具形態別組成比(口縁部残存計測法)

も高い比率となっている。また、黒色土器・須恵器・埴文土器については一定量存在するものいづれも1%程度で、客体的な存在形態である。用途別の組成比は食膳具が個体数上で5.3%、煮炊具が4.4%、貯蔵具が1.7%程度で、新田(1)遺跡で食膳具が6.3%、煮炊具が3.2%、貯蔵具が4%程度と食膳具が上回っていた構成に比べると野木(1)遺跡北地区の構成(食膳具5.0%、煮炊具4.6%、貯蔵具2.7%)に近似した状況である。

この背景は、新田(1)遺跡に比べると古手の時期が含まれるのと堅穴建物跡の軒数が多く、溝も丘陵上に掘り込まれた資料のみで、流動の規模が限定的という要素が想定されるが、地点ごとの様相差であることには変わりはない。

食膳具はロクロ使用の碗形のタイプが9割近い組成を占め、皿形や手づくねの資料も新田(1)遺跡の組成比に比べると半減している。

一方、煮炊具については非ロクロ製の率は新田(1)遺跡と同様全体の2/3を占める比率で、次いで非ロクロ小甕が続く構成は変化がないが、非ロクロ小甕の組成比が5%程度多く、甕や羽釜等10世紀後半以降組成が増加する器種も若干量が多い。埴文土器は煮炊具単独で見ても2%未満(1.9.3%)で、破片としては各遺構から出土しているが、個体的に見た場合、量的に少ない。

貯蔵具は大品型である須恵器などの組成比が下がる傾向が避けられないが、壺・瓶類が3.7%と新田(1)遺跡(3.0%)同様定量的な傾向である。広口壺については黒色土器4.4%、非黒色土器1.2.3%と新田(1)遺跡例(黒色3.7%、非黒色2.6%)よりも多い傾向にあり、五所川原窯の生産停止以降も継続した集落内での貯蔵具の様相としては妥当な組成比である。

口縁部残存計測法で、新田(1)遺跡と同様に口縁部の形態ごとの組成比を表3-2-5に示したが、食膳具のロクロ土器器種について、新田(1)遺跡では直線的なタイプであるAaが最も多いが、新田(2)遺跡では端反形態のBcが最も多い。皿形の資料は器形のバリエーションが少なく、直線的な口唇部が丸みを帯びるAbが主体を占める。手づくね資料については新田(1)遺跡同様直線的な器形で口唇部が先細りを呈するAaが最も量が多いが、量比は新田(1)遺跡の二倍近い差で全体の4割近い組成を占めている。黒色土器など磨きが伴う資料は大差がなく、新田(1)・(2)遺跡とも同様の傾向である。

煮炊具については表3-2-5の下段にまとめているが、非ロクロ土器器種について新田(1)遺跡側では頭部幅の狭いC型が量的に最も多い(6.2%)傾向に対し、新田(2)遺跡側では頭部幅のあるB

型側の方が量的に多い傾向(4.8%)で、C型が続く(3.4%)。ロクロ系甕は口唇端部を面取して角張った形状とするA型側が新田(1)遺跡では7.5%を占めているが、新田(2)遺跡側では頭部幅のあるB型側の方が量的に多く(5.3%)主体を占める形状に差が生じている。小甕については量比に若干の差が認められるものの、双方の遺跡とも主体を占める形状が類似した傾向を示している。

次に表3-2-6に示した底部残存計測法による組成比についても触れたい。同様の組成表は新田(1)遺跡側でも表3-7で表している。個体識別上で底部のみ残存の資料については分類が難しい資料が多く含まれ、器種が口縁部残存計測法よりも減る傾向がある。新田(2)遺跡の資料については新田(1)遺跡の資料に比べると前述の影響が若干あるものの器種や切離し技法の種類のバリエーションが少なく、シンプルな構成となっている。

食膳具の構成は新田(1)遺跡と同様に回転系切が最も多く、使用された糸(紐)の太さが太いDbのタイプが最も多く、10世紀前半まで主体を占めたDaの細い紐が利用されるタイプは2割程度である。静止系切も新田(1)遺跡で8%、新田(2)遺跡で9%と回転系切が主体を占めながらも静止系切の組成比が多い傾向である。また、非ロクロ資料について新田(1)遺跡側では木葉痕が存在していたが、新田(2)遺跡ではなく、編物痕が3%程度、ヘラなどの工具調整や無調整が2%程度となっており、種別ごとでは新田(1)遺跡側では最も多かった編物痕より静止系切の方が勝る傾向である。

煮炊具については、新田(1)遺跡では編物痕のCaが最も多く(22.7.2%)、次いで工具調整のFaがほとんど差がない状態(22.6.4%)で続き、以下G→D b→Bの順番であったが、新田(2)遺跡では工具調整のFaが最も多く(33.1.4%)、次いで編物痕Ca(20.6.8%)で、以下G→B→D bとなっている。10世紀前半まで多く見られた木葉痕や砂底は細分を合計してもそれぞれ10%程度で量的には少なくなる。

貯蔵具は回転系切が行われた小甕の残存率が高くなる傾向にあり、影響が生じているが、新田(2)遺跡については工具調整のFaが約半数を占め、次いでロクロ使用の回転系切が続く(Da: 22.6.4→D b: 18.6.6)。

質量の揃った食膳具について107点資料が存在し、口径と器高、器高指数と底径指数の相関図について図3-2-8に図示した。同様の形で図示した新田(1)遺跡の資料(図3-8)に比べると器高指数が5.0を超えるのは埴文系統の小型土器(青市埋報第107集-3図P2-067-1135、厳密な埴文土器の坏とは見えないがハケム状の痕跡が

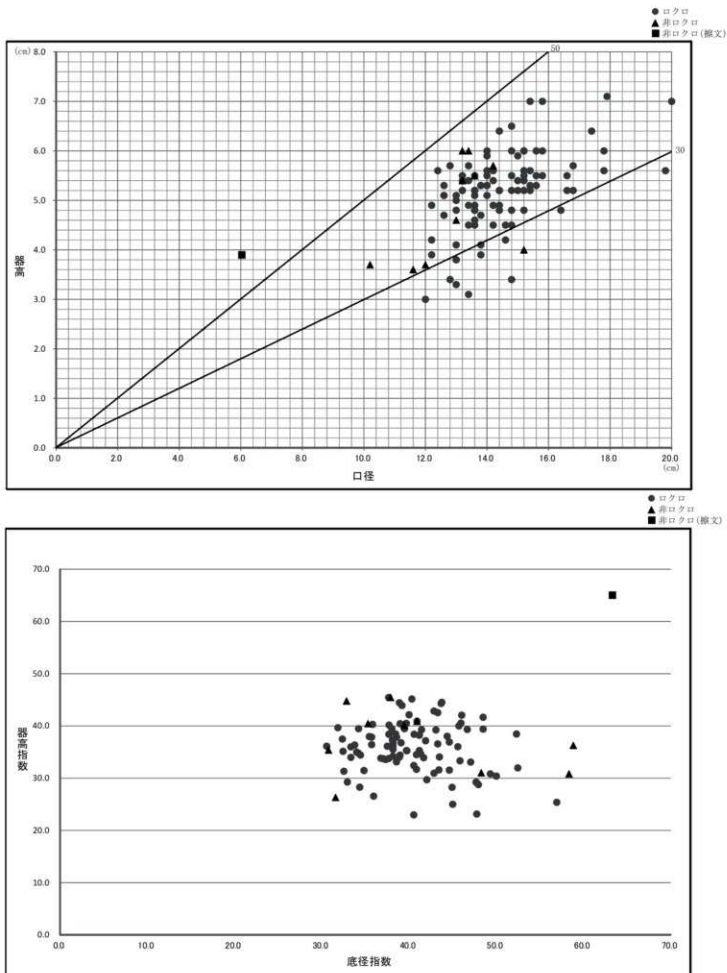


図 3-28 新田(2)遺跡食膳具相關図(上段:器高/口径、下段器高指数/口径指数)

R: ロクロ, T: 非ロクロ

	個体数	%	A: 木葉痕			B: 砂底		編物痕			回転系切				静止系切		工具調整		無調整・ナテ	中空	丸底	磨滅不明
			Aa	Ab	Ac	B	B+Ca	Ca	Cb	Da	Db	Dc	Dx	E	Fa	Fb	G	H	I	X		
須恵器	坏壺・瓶類	1.81	0.73																			
		3.69	1.49									0.43	1.38									
		2.39	0.97									0.43	1.39									
黒色土器	椀	4.32	1.75									0.90	2.46		0.04	0.46						
	壺・甕	1.00	0.40				0.29			0.50			1.00									
土師器	R椀	145.75	59.02									31.78	102.94		0.62	10.33						0.08
	皿	4.40	1.78									0.80	3.10		0.50							
	小坏	0.27	0.11																			
	T椀	12.39	5.02																			
	T甕	39.64	16.05																			
	R甕	0.42	0.17																			
	T小甕	11.77	4.77																			
	R小甕	6.90	2.79										0.52	6.38								
	甗	2.29	0.93																			
	広口壺	0.13	0.05																			
	小壺	2.00	0.81																			
模文土器	小坏	1.00	0.40																			
	甕	4.01	1.62	1.00			1.30															
製塩土器	2.00	0.81	2.00																			
	246.97	100.00																				

	個体数	%
Ca	2.93	1.72
Cb	2.62	1.54
Da	33.91	19.95
Db	109.88	64.66
Dx	1.16	0.68
E	16.07	9.46
Fb	2.02	1.19
G	1.27	0.75
X	0.08	0.05
	169.94	100.00

	個体数	%	種別毎%	種別毎総数
ロクロ口食膳具	Da	33.91	19.95	21.83
	Db	109.88	64.66	70.73
	Dx	1.16	0.68	0.75
	E	10.33	6.08	6.65
	X	0.08	0.05	0.05
非ロクロ口食膳具	Ca	2.93	1.72	20.10
	Cb	2.62	1.54	17.97
	E	5.74	3.38	39.37
	Fb	2.02	1.19	13.85
	G	1.27	0.75	8.71
	169.94			

	個体数	%
Aa	1.00	1.54
Ab	4.00	6.15
B	6.93	10.66
B+Ca	0.90	1.38
Ca	13.45	20.68
Da	0.52	0.80
Db	6.38	9.81
Fa	21.55	33.14
Fb	0.29	0.45
G	7.30	11.23
H	2.29	3.52
X	0.42	0.65
	65.03	100.00

	個体数	%
B	0.29	1.80
Ca	0.50	3.11
Da	3.64	22.64
Db	3.00	18.66
Fa	8.00	49.75
Fb	0.07	0.44
G	0.58	3.61
	16.08	100.00

表 3-26 新田（2）遺跡食膳具および煮炊具底部種別ごと組成比（底部残存計測法）

残る工具で磨きが施されており、土師器の範疇で捉えられないことから撤文土器扱いとした。)以外なく、器高指数が4.0以下でまとまっている傾向にある。底径指数はやや幅が広い資料が含まれるが概ね4.0前後に集中する傾向となっている。新田(1)遺跡ではロクロ使用の土器の規格に非ロクロ土器が万遍なく収まり更に、規格外の部分に非ロクロの資料が配置した状態であったが、新田(2)遺跡の資料は口径が16cm未満を最大とし、規格外の大型品は存在しない傾向で、18cm程度の規格が存在する新田(1)遺跡と差異が生じている。浅身で口径の中型以下の形態が主体を占める。

その他、特記事項として遺物観察表にも観察項目を記載したが、青市埋報第107集-3の表紙の口絵としても掲載した撤文土器と中表紙に掲載された須恵器広口壺について触れていることとする。

青市埋報第107集-3図P-2-022-304として掲載した撤文土器は青市埋報第471集で報告済の果理文調査の新田(2)遺跡第39号住居SK02とSD-73堆積土出土の遺構間接合資料(図170-6に掲載)と市教委調査のSI-049Pit12上層(調査時名称、青市埋報第107集-2の図版中では図2-202でカマド灰溜めPitとして報告)とSI-049下層出土資料との遺構間接合資料である。全般的に摩滅が顕著で、一部被熱により黒色化と褪色が生じている。外面側は地文をハケム調整で調整し、頸部と口縁部直下に沈線を入れ形作った上に籠状の工具で樹木状のモチーフと二頭の馬を描いている。馬の表現としては鬣の表現と尾毛の表現がされており、顔を突出させているなど、簡素な表現ながら馬と判断できるものである。青森県内では青森市浪岡(旧浪岡町)野尻(4)遺跡SK0423覆土出土の非ロクロ小壺(浪岡町教育委員会2004)、弘前市笹森館遺跡1

号野穴建物跡からロクロ土師器に描かれた資料が1点出土している(弘前市教育委員会2008)。野尻(4)遺跡は縦方向のウグイスや刺突・格子文が用いられているなど撤文土器の要素が強い資料であるのに対し、笹森館遺跡の資料はロクロ使用の小型品にあたり、本遺跡の製作の系譜列としては野尻(4)遺跡と比較可能である。また、撤文土器における線刻画のある資料としては北海道奥尻町青苗遺跡の『奥尻町青苗遺跡図版編』(奥尻町教育委員会1979)のP1、IXに掲載された「山本発掘区出土 線刻画のある撤文土器」でも左手に二足歩行らしき刻線と右側に四足歩行らしき像が刻まれており四足歩行側の背中には鬣のような刻線が刻まれている。筆者は類似についての知見が乏しい状態で、他に存在する可能性があるが、線刻画に関しては一定量存在し、動物をモチーフにした表現が存在することには変わりない。

次に中表紙の口絵として掲載した資料は青市埋報第107集-3図P-2-029-0421に掲載した須恵器広口壺で頸部直下の体部上半に「夫」とその右側に矢羽根状の刻線が突出部を上下と交互に配置し三箇所入れ、更にその横方向には頸部側に乱雑な「大」状の刻線とその下に「◎」状の刻線が施されていた。なお、図はロクロ目の配置状況などを基に図上復元したものである。

刻書が多様される五所川原産須恵器については文字・記号の他鬣歯状の文様が巡らされる資料もあり、本資料のように横方向に展開する事例は、前述の野尻(4)遺跡SD170出土資料や野辺地町二十平(1)遺跡遺構外出土資料(野辺地町教育委員会2007、特にこの資料については矢羽根状のモチーフが本遺跡出土資料同様横展開されているようである。)、五所川原市川崎遺跡表採品(五所川原市教委藤原氏のご教示による)などでも見られ、前述

青森県弘前市笹森館遺跡(弘前市教育委員会2008) 表土線画



青森県野辺地町二十平(1)遺跡(野辺地町教育委員会2007)



青森県青森市(旧浪岡町)野尻(4)遺跡(浪岡町教育委員会2004)

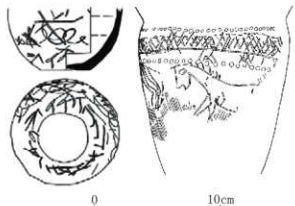


図3-29 (参考) 青森県内出土刻線画土器

の佐倉館遺跡出土の馬の絵が描かれた線刻土器についても馬の左側に「×」右側に細い線で「%」が刻まれており、横展開のモチーフとなっている。10世紀中葉以降の時点で、従前の製作表現が崩れ、文様の展開化が一部で存在しているようである。

B. 石製品

該当なし。

C. 木製品

市教委の調査区からは361点の木製品・加工木・自然木が出土した。そのうち選別・実測を行った87点について青市埋報第107集-3で報告した。そのうち、古代の資料は大部分を占め74点である。樹種同定については新田(1)遺跡と同様に保存処理に併せて3点が(株)吉田生物研究所に委託し、結果は青市埋報第108集-2第1章第9節中に掲載した。掲載外を含むその他の資料は森林総合研究所木材特性研究領域の能城修一氏に鑑定頂き、青市埋報第108集-2第1章第9節に掲載した。北側の果埋文の調査区では110点出土しており、青果埋報第471集で報告されている。古代の資料は105点である。

新田(1)遺跡の同一項目中で提示した内容に即して報告すると資料数が少ないため0点という資料が多い。ただ、構成比を比較すると欠損資料があるため、一部資料の量比に変化はあるが、「祭祀具」・「建築部材」・「施設材・器具材」の量は概ね新田(1)遺跡と同一で、全重量が少ないながらも比率的には比較可能な内容となっている。

新田(2)遺跡は丘陵上に構築された竪穴建物跡と囲郭溝主体の集落で、新田(1)遺跡のように一段低い低湿地上での溝跡がほとんどない。市教委側の調査区で最も出土したのは外周側の囲郭溝であるSD-002、果調査区でも最も出土したのは外周側のSD73からで、井戸跡の深さについても浅い資料が多く水を含む要因が少ない埋没環境である。木製品の保存条件としては劣悪な影響が考慮される。SD-002から出土した内外面とも黒漆が塗られた漆器椀(図W-2-1)は底部直上まで均等に削られ、見込み中央が孔が穿たれており、紡錘車として転用された可能性が高い。同じくSD-002からは馬形(図W-2-2-20・21)や神像(図W-2-2)など新田(1)遺跡で出土した資料と同様の祭祀具等の資料が出土している。馬形は2点とも類似した形態で、尾側の部分は欠損しているが新田(1)遺跡出土資料に比べるとやや大形である。神像については新田(1)遺跡同様素朴な造りで頭部の表現等が確認できるが、顔の表現などは不明瞭なものである。また、図W-2-3-

	点数	%
工具	2	2.70%
農耕具	0	0.00%
編み具・紡織具	0	0.00%
漁労具	0	0.00%
服飾具	0	0.00%
容器	12	16.22%
食事具	1	1.35%
祭祀具	8	10.81%
文房具	1	1.35%
遊具	0	0.00%
武具	0	0.00%
編紐	0	0.00%
発火具	0	0.00%
建築部材	20	27.03%
施設材・器具材	16	21.62%
加工木	6	8.11%
削屑	0	0.00%
自然木	1	1.35%
用途不明	7	9.46%
	74	100.00%

表 3-27 新田(2)遺跡木製品組成比(古代)



図 3-30 新田(2)遺跡木製品組成比(古代)

49・50は切妻造の妻側の屋根に近い部分の板材と考えられる資料で、類似の形状が一對の形で同一遺構内から出土している。その他曲物容器の側板や椀などが出土しているが、新田(1)遺跡同様箸状木製品の出土が少ない状態である。

D. 土製品

土製品については青市埋報第107集-3図CLE2-1~4で掲載しているが、新田(1)遺跡同様遺構外出土資料も含まれ、时期的に下る資料も含まれる。

管状土鐘は4点出土し、その他1点(図CLE2-1-5)は孔が貫通していない資料である。重量は管状土水が13.9、27.1、30.1、40.3gと新田(1)遺跡で確認された50gまでの範囲に収まる資料群に入る。70g以上の重量

をもつ資料はなく、内水面対象の利用形態が想定される。土製勾玉は2点出土した。(図CLE-2-1-6・7)小形な資料で、他に土玉が5点出土しているが、孔径は2mm前後にまとまっており、別々の遺構から出土した資料ではあるが、同一資料の一部であるものが多い。

県埋文調査区のSD73から土馬が1点出土している(青県埋第471集図175-1)が、その脚部と類似資料がSD-007とSX-106から1点ずつ出土している。類似した資料であるが、接点はなく、同一個体の判断はできなかった。

土製支脚は新田(1)遺跡と同様関係資料がなく、棒状の資料が主体を占める。円筒形の資料もSI-030から1点出土しており(図CLE-2-3-78)、SI-054からは円柱形の資料も出土している(図CLE-2-4-79)。

羽口は鉄関連遺物の選別から漏れた2点を図示した(図CLE-2-4-80・81)。

焼成粘土塊は16点図示した。新田(1)遺跡出土資料同様布目や縄目、稜圧痕が伴う資料が存在する。

第3節 中世以降

1. 遺構

中世以降の遺構は、新田(1)遺跡同様同一地点の土地利用の継続と後世の耕作や土地改変の影響が大きいため不明瞭な情報が多い。掘立柱建物跡の柱穴の可能性のあるピットは建物と認定された資料以外に多数存在することから、実数に対し追り切れていないが、認定できた資料を中心に報告する。

A. 竪穴建物跡・竪穴遺構

古代の項目で一部規模等について提示しているが、新田(1)遺跡に比べると新田(2)遺跡では中世の竪穴建物跡や竪穴遺構が検出されている。出土遺物が少なく、帰属時期の不明な資料も含まれるが、SI-043(青市埋報第107集-2図2-179~181)のように出入口施設をもつ小形の建物やSI-027のように間仕切り溝が設けられる資料がある。SI-027については信楽の陶器片(青市埋報第107集-3図P2-070-MA12)や珠洲のI~II期(同MA09)、IV期の播鉢(同MA10)など、時期的に幅のある資料が混在している。青市埋報第108集-2第1章第3節で報告したウィグルマッティング試料の年代測定結果では14世紀前半の数値が集中する結果が得られている。また、重複する古代の竪穴であるSI-063部分の結果でも混在した結果が得られており、10世紀後半~15世紀前半の数値が得られている。実質的にはSI-027の実年代に近い試料が古代の遺構内に混在している状況である。

B. 掘立柱建物跡

新田(1)遺跡と同様に前八戸工業大学教授故高島成侑氏の分析結果(青市埋報第106集-1第II章第1節)19棟(SBa-53は欠番扱い)を当委員会の認定としている。その他、青県埋報第471集で報告された県埋文調査区の中から12棟の掘立柱建物跡が認定されており、合計31棟の建物を認定した。年代は12世紀後半~17世紀後半まで年代幅が広く、一部空白が認められるが、隣接する新田(1)遺跡や高間(1)遺跡を含め、継続した土地利用がなされていたものと判断される。

主軸方位は北西-南東軸をなすものが多く、前述の県埋文の調査報告書上(第5章第4節掘立柱建物跡の項目中)では、県埋文調査の新田(1)遺跡の調査成果(青県埋報第472集『新田(1)遺跡』)でも同様の傾向があるものとし、「両遺跡間で明確に連続性を持つ区画遺構が確認されないことから考えると、両遺跡は異なる境界意識を持っていたと考えるべきで、先行する区画遺構に建物配置を対応さ

新田(2)遺跡掘立柱建物跡配置図

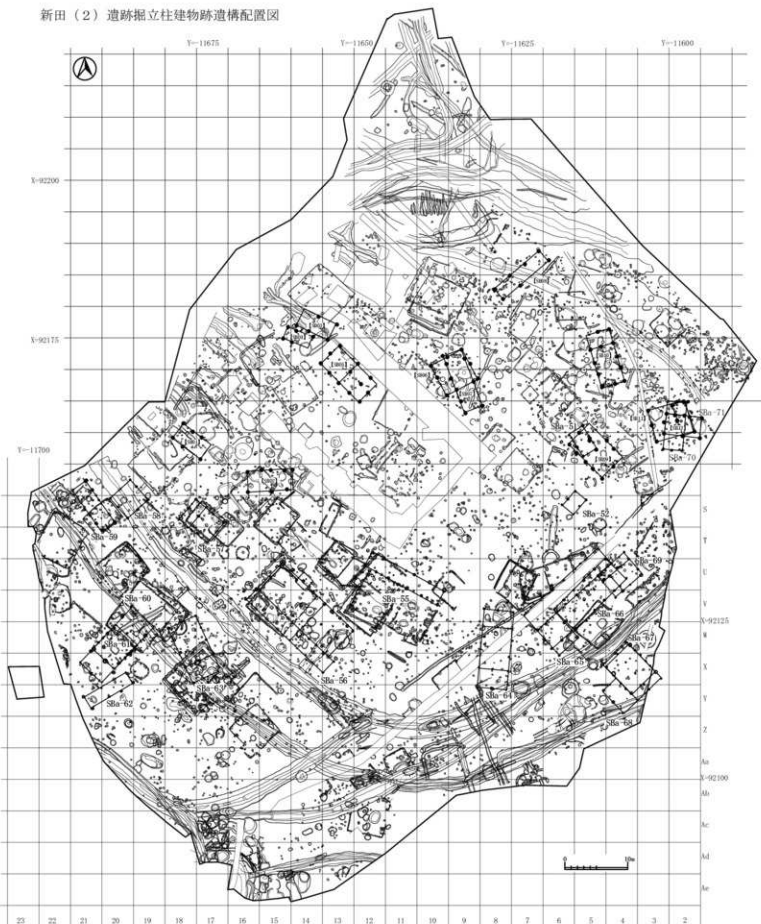


図 3-31 新田(2)遺跡掘立柱建物跡配置図

せた結果生じた後天的な類似性と解釈することは難しい。このことから考えると同様の気候条件や地貌をもつ両遺跡が、何らかの自然環境に対応された選択した判断が類似性として認識されるにいたったと考えるのが妥当である。沖積地上に立地した両遺跡の建物が、北面する陸奥湾からの風雪に適應するために南北に傾斜する切妻屋根を選択したことは極めて合理的な判断といえる。両遺跡は区画意識を共有していたわけではない。しかし自然環境への適應という共通の問題を抱え、これを解消するために同様の回答を提示したと考えるべきだろう。」と記述されている。

新田(1)遺跡、新田(2)遺跡は現在の埋蔵文化財包蔵地として分割登録されたものであって、厳密に当時の人々の生活単位そのものを前提とした範囲認定として遺跡が登録されている状態ではない。(これは発掘調査前の現状などで、遺跡内容の十分な把握がなされず、既存の登録範囲を踏襲した内容が大きな原因である。)時代時代の人々の生活の移り変わりに伴い、生活圏の単位も異なる内容となり、ある時期は新田(1)・(2)遺跡がそれぞれ単位の単位で、ある時期は新田(1)・(2)遺跡が双方のエリアを含めた単位で生活が行われるなど消長関係が存在するのは事実で、隣接する時期幅のある資料を現在の行政上の手続きの区分である埋蔵文化財包蔵地(遺跡)単位で区分してしまうのは少し問題がある。

両遺跡の掘立柱建物跡は北西—南東軸の共通する軸線の建物が存在するのは事実で、津軽地方の冬期間の季節風に適應した軸線ということは間違いないと理解できるが、ある時期の建物跡については新田(1)遺跡の範囲内—新田(2)遺跡の範囲内にまたがった遺構での生活が行われていたのは事実である。全てに当てはまる話であるが、県史文・市教委の調査成果ごとに区分するのではなく、一つの遺跡として理解すべき内容と同一の話で、新田(1)遺跡・新田(2)遺跡を含めた土地の利用状況の変遷として理解すべきである。

切妻屋根については古代の最外周側の溝から出土した木製品の中に切妻屋根に近い部分の板材が出土しており(図W-2-3-4-9・50)、裏付ける内容となっている。

C. 土坑

中世以降と認定できた資料は15基と少数で掘立柱建物跡の棟数などを踏まえると実数との差が大きいものとする。これは調査前の地表面から遺構確認面までの高さが浅く、工場等の建物が建っていた関係で、元々の堆積層の除去と砂利の敷設などで、浅い遺構が削平されていたことも一因である。認定できた資料についても不明瞭な資料が多く形状や規

模に関する比較情報は提示しないが、不整形で浅く小規模な資料が主体である。

D. 井戸跡

中世の井戸跡として認定できた資料はかわらけの出土したS E-005の素掘りの井戸1基のみである。規模は172×165×132cmと浅めの資料である。土坑同様掘立柱建物跡に対比した数としては非常に少ない状態であるが、古代以降扱いの井戸跡も6基で、県史文調査区の中世以降の遺構からも井戸跡は報告されていない。このことから新田(2)遺跡内では井戸跡は非常に少ない検出状況である。平面形状は円形、断面形状は緩やかに立ち上がる形状である。

E. カマド状遺構・炭灰・焼土状遺構等

古代の項目で溝の上面から検出した炭灰状の施設については古代扱いとしたが、中世以降の資料として明確に認定できたのはS D-001と重複したS N-001(青市埋報第107集-2図2-350)のみで、古代の遺物が下限の資料は軒並み古代扱いとなっている。これは土坑の部分で説明したおりの検出状況の問題や遺物の包含状況が古代以前の遺構の再掘削に伴い堆積相にも古代以前の遺物の混入が多くなる影響が第一となる。土坑・井戸跡も同様で、新田(2)遺跡のエリア内は掘立柱建物跡に対する井戸跡やカマド状遺構のセット状況や配置の変遷過程などが把握しにくい状況である。

F. 性格不明遺構

中世ないし中世以降と認定した遺構は5基(S X-033・054・058・059・063)のみである。S Xの略号が付された遺構106基中詳細時期不明の資料が59基と半数以上を占め、遺物の包含や他の遺構との関連性が不明瞭な資料が多いことが上げられる。S X-033のように半円の弧状の溝跡のような資料や土坑状の掘りこみの資料などが含まれる。

G. 溝跡

古代の溝跡を断ち切る細い溝跡や最外周側から検出した溝跡などが含まれる。古代のような明瞭な区画溝として認定できる資料は含まれないが、S D-043など外周側の溝跡は丘陵地の形状に沿った配置を呈しており、区画と認定はできないものも開いている要素は残る。

新田(1)遺跡を含め掘立柱建物跡に高間(1)遺跡で見られた掘立柱建物跡に雨落ち溝が伴うケースが認められない。时期的な差や削平の問題も含まれるが、系譜の異なる要素が考慮される。

2. 遺物

古代の遺物同様青市埋報第107集3分冊に選別資料の実測図および遺物観察表を掲載した。

古代に比べると量的に非常に少なく、破片資料が多い状況で、詳細時期が不明の資料もある。前述のとおり包含状況の影響や継続した土地利用に伴う流動の要因が多々存在する。

A. 土器

23点図示した。破片が多く、全体形のわかる資料も少ない状態である。新田(1)遺跡の資料の様には計量的な情報を行うには量的に少ない状況である。かわらけは8点のみで、古代など時期の異なる遺構に混入するケースや遺構外出土資料が多い状態、全体形のわかる資料は井戸跡であるSE-005出土と新田(1)遺跡B-5区SD-0005覆土との遺構間接合資料である手づくねかわらけ(青市埋報第107集-3図S-2-1-M A02)1点のみである。煤が付着した状態で破片化した状態で別地点へ廃棄が生じたものと推定される。共存した漆紙様資料(図CLE-2-5)の放射性炭素年代測定結果(青市埋報第108集-2第1章第2節)によると西暦1200年前後(AD1155~1225)の数値を示し、かわらけの年代とも照合しない状態であった。SE-005の周辺には故高島氏によって12世紀後半とした掘立柱建物跡SBa-68が配置し、井戸跡との距離も整合性がある。

珠洲施は3点でSI-027についてはいずれも掘跡で、中層出土のMA09がI~II期にかけての破片、MA10がピット覆土出土のIV期の体へ底部にかけての資料でピット出土のIV期の方が遺構の帰属時期に近い資料である。SD-020中層の資料についてはピット等の再掘削に伴う混入が想定される資料で、III~IV期にかけての資料である。

信案はSI-027覆土出土の資料が唯一、壺の口縁部資料で15世紀前半に帰属する。その他は破片資料主体で摩滅している。

瀬戸は新田(1)遺跡で見られた灰釉瓶子の破片がSI-050Pit56から出土しており、新田(1)遺跡同様火熱により釉が発泡している。14世紀後半~15世紀前半代に帰属する資料である。SI-050は古代の堅穴建物跡であるが、ピットが多数重複しており、中世に帰属するピットが多数存在していたものと判断され、Pit57から詳細産地不明の褐釉の壺破片が出土している。

その他、擾乱資料ではあるがSK-186から天目碗の破片が1点出土している。火熱により一部変色しているが、胎土の特徴は瀬戸の可能性が高い資料である。

B. 木製品

SBa-65P17に相当するSP-1827出土資料(青市埋報第107集-3図W-2-1-7)1点とSD-043出土資料(青市埋報第107集-3図W-2-5-76~87)の12点、合計13点を中世以降の帰属資料とした。杭と考えられる資料がほとんどで、図W-2-5-76の棒状木製品が1点ある程度で、容器などの日常生活具が出土していない状況である。新田(1)遺跡に比べ丘陵地上のみの調査であるため、木製品の埋蔵環境が悪く、朽ちてしまった可能性が高い。

C. 漆紙様資料

SE-005から出土した。前述の土器の項目で記述したとおり、放射性炭素年代測定の結果12世紀後半~13世紀前半の年代値が得られている。新田(1)遺跡B-2区SN-02等で出土した漆紙と同様に非常に薄手で、色調も同様(赤味を若干帯びた黒漆気味の塗膜の色調)である。本遺構出土の資料は重なりが他の遺構出土資料に比べて多く、ミルフィーユ状になっており、厚みは2.5cmを超える(保存処理前)。ただ、非常に薄い膜であり、紙部分の残存状況や文字の有無の詳細については不明であり、文字らしき資料があった新田(1)遺跡の資料とは区分し、「様」という文字を加え、区分した。

D. 古銭

SI-027から9枚重なった状態で出土し、CLE-2-5-M-1~9として図示した。判読不能が1点含まれるが、下限は北宋銭(「元豊通寶」)である。その他、図示していないが、9枚重ねの側面に付着していた判読不能の資料が1点別に存在し、重量等の情報は遺物観察表中に記載した。

また、M-11は古代以降に帰属する可能性の高いSX-001の覆土に混入していた昭和31年製造の50円菊穴無しのニッケル貨である。発行枚数は91,300,000枚で製造された4年間の中では最も多く発行された年である。

E. ガラス製品

SX-081覆土出土と遺構外出土の2点について図CLE-2-7に図示した。SX-081はビー玉の可能性が高い。遺構そのものもSD-002より新しい資料である。遺構外出土の資料についても比較的新しい段階の資料である(分析結果は、本報告書第4章第9節に所収した)。

表 3-29 再掲新田(2)遺跡 SK 遺構観察表

図号	調査区	遺構名	時期	位置		重畳	新田関係	規模(m)			平面形	断面形	備考
				X	Y			長軸	短軸	深さ			
2-288	F-17	SK-001a	古代	9211.242	-11673.680	SI-001b・SK-001a・001c・001d・001e・SP-0381・0396	SP-0381・0396/SK-001a/SI-001b・SK-001c・001d・001e	142	100	60	ef	c	F11:121×15×25cm
2-288	F-17	SK-001b	古代	9211.656	-11674.367	SI-001b・SK-001a・001c・001d	SK-001a・001b/SK-001b/SI-001b・SK-001c	100	143	30	ab	d	
2-288	F-17	SK-001c	古代	9211.758	-11674.279	SI-001b・SK-001a・001c・001d	SK-001a・001b・001c/SK-001c/SI-001b	89	120	40	aa	a	
2-288	F-17	SK-001d	古代	9211.250	-11673.615	SI-001b・SK-001a・001c・001e・001f・SP-0381・0396	SK-001a・SP-0381・0396/SK-001c/SI-001b・SK-001e・001f	131	96	23	ef	a	
2-288	F-17	SK-001e	古代	9210.805	-11673.962	SI-001b・SK-001a・001d	SK-001a・001b/SK-001c/SI-001b	55	89	40	ab	f	
2-289	F-12	SK-002	-	92117.102	-11649.517	-	-	81	76	16	ab	i	
2-289	F-12	SK-003	縄文	92119.184	-11648.669	-	-	83	77	14	aa	j	
2-289	F-15	SK-004	縄文	92114.030	-11661.630	-	-	99	81	114	aa	a	
2-289	F-15	SK-005	縄文	92109.301	-11660.200	-	-	100	81	81	ab	a	
2-289	F-21	SK-006	-	92112.611	-11691.303	SP-0049	SK-006/SP-0049	119	81	6	f	d	
2-289	X-21	SK-007	縄文	92115.902	-11691.543	SP-0028・0401	SK-007/SP-0028・0401	115	100	40	ab	f	F11:117×15×15cm
2-290	X-21	SK-008	縄文	9218.031	-11692.571	SK-008・SP-0401・0402・0403/SK-008	SP-0401/SK-001/SK-008/SK-009・SP-0401	111	100	42	ab	i	
2-290	X-21	SK-009	縄文	92117.359	-11692.345	SK-009・SP-0032・0033	SK-009/SK-009・SP-0032・0033	99	100	40	ab	f	
2-290	Z・Aa-16	SK-010	古代	92104.758	-11669.245	-	-	85	80	19	b	i	
2-290	X-16・17	SK-011	古代	92115.727	-11609.979	SI-001b・008・009/SK-0513・SK-006	SK-011/SI-001b・008・009/SK-0513・SK-006	129	108	15	ab	d	
2-290	Aa-16・17	SK-012	縄文	92103.928	-11670.383	SK-013	SK-012/SK-013	40	31	20	b	a+f	F11:116×12×6cm
2-290	Aa-17	SK-013	縄文	92103.797	-11671.425	SK-012・SP-0161	SK-013/SK-012・SP-0161	103	81	86	aa	a	
2-291	Aa・Ab-17	SK-014	縄文	92100.148	-11673.090	SK-007	SK-014/SK-007	103	101	55	ab	f	
2-291	F-21	SK-015	古代	92123.297	-11691.652	SI-003・SK-016・SP-0417・0418	SP-0417/SK-015/SI-003・SK-016・SP-0418	82	100	20	aa	a+f	
2-291	F-21	SK-016	縄文	92122.945	-11691.094	SI-003・SK-015・SP-0408・0402・0403	SK-015・SP-0408・0402・0403/SK-016	100	85	25	ef	a	
2-291	F-16	SK-018	-	92106.316	-11665.996	SI-006	SK-018/SI-006	86	80	82	b	a	
2-291	F-18	SK-019	古代	92113.930	-11678.800	SI-005a・005b・SK-029	SK-019/SI-005a・005b・SK-029	87	51	70	ef	d	
2-292	Aa-17	SK-021	縄文	92102.375	-11670.819	SK-014・SP-0169	SK-000/SK-021/SP-0169	72	121	66	ab	a+f	
2-292	X-F-18	SK-022	古代	92115.328	-11678.222	SI-005a・005b・SK-020・029	SK-022/SI-005a・005b・SK-020・029	95	76	21	aa	d	
2-292	F-20	SK-023	古代	92120.477	-11685.931	SI-012	SK-023/SI-012	131	101	24	c	a+f	
2-292	F-18・19	SK-024	縄文	92117.839	-11679.539	SI-010a・010c・SP-0404・SP-0551・0552・242(SI-010a/F114)	SP-242/SI-010a・010c・SP-0404・SP-0551・0552/SK-024/SI-010b・010c・SK-004・SP-0551・0552	199	100	36	ab	a+f	F11:121×20×17cm/F12:19×19×6cm
2-293	F-19	SK-025	古代	92130.938	-11681.535	SI-011	SI-023/SI-011	111	89	32	ef	d	
2-293	F-20	SK-026	縄文	92108.820	-11685.701	-	-	115	110	46	ab	f	F11:126×21×5cm
2-293	F-17	SK-027	古代	9210.883	-11675.249	SI-005b	SK-027/SI-005b	109	64	49	ef	e	
2-293	X-19	SK-028	古代	92117.656	-11681.550	-	-	132	103	62	ef	a+i	
2-294	Z-B6	SK-029	古代	92109.258	-11668.163	SI-006・007・SK-041・SK-004	SI-006/SK-029/SI-007・SK-041・SK-004	166	115	22	ef	a+i	F11:130×26×15cm/F12:23×21×26cm
2-295	F-16	SK-030	古代	9212.438	-11668.992	SI-007・SK-004	SI-007/SK-030/SK-004	107	69	27	c	j	F11:126×24×15cm/F12:23×21×26cm
2-295	F-19	SK-031	縄文	92111.637	-11683.432	-	-	82	80	41	ab	f	
2-295	F-19	SK-032	縄文	92106.148	-11682.316	SK-032b・033・SP-0481	SK-032/SK-032b・033・SP-0481	114	88	65	ef	a+f	
2-295	F-19	SK-032b	縄文	92106.164	-11682.184	SK-032・033・034・SP-0481・0489	SK-032b/SK-032・033・034・SP-0481・0489	215	182	65	ef	b+i	
2-295	F-19	SK-033	縄文	92106.231	-11681.743	SK-032・032b・SP-0489	SK-032・SP-0489/SK-033/SK-032b	94	30	86	ef	a+f+j	F11:120×16×5cm
2-295	F-19	SK-034	-	92105.266	-11680.933	SK-032b・035	SK-034/SK-032b・035	153	86	43	ef	e	
2-295	F-19	SK-035	古代	92106.188	-11680.219	SK-034・SP-0486・0488	SK-034/SK-035/SP-0486・0488	157	65	30	g	a+i	
2-296	Z-15	SK-036	-	92108.438	-11663.126	SI-006・SK-004	SK-036/SI-006・SK-004	102	163	24	g		
2-297	F-20	SK-037	-	92105.781	-11688.215	-	-	104	87	16	ab	i	
2-298	X-20	SK-038	縄文	92116.531	-11685.277	SI-014	SK-038/SI-014	86	75	52	ef	f	
2-298	Aa-19	SK-039	縄文	92102.609	-11681.124	SK-040	SK-039/SK-040	104	64	20	ef	d	
2-298	Aa-19	SK-040	縄文	92104.641	-11684.353	SK-039・SP-0501	SK-001/SK-040/SK-039	121	86	17	ab	a+f	
2-298	F-16	SK-041	-	92109.055	-11667.450	SI-006・007・SK-029・SK-004	SK-041/SI-006・007・SK-029・SK-004	81	54	20	e	h	
2-299	X-17	SK-042	縄文	92115.742	-11671.841	SI-005a・005b・008・SK-033・062・SP-0408・0510・0519	SI-005a・005b・008・SK-033・062・SP-0408・0510・0519/SK-042/SK-051・062	105	96	40	aa	f	
2-300	Aa-19	SK-043	縄文	92104.305	-11681.030	-	-	86	72	27	aa	b+i	
2-300	F-Z-18	SK-044	-	92109.992	-11677.671	SK-018・019・SP-0549	SK-018・SP-0549/SK-044/SK-019	163	80	15	g	i	

図録号	調査区	遺構名	時期	位置		重畳	新旧関係	規模(m)		平面形	断面形	備考	
				X	Y			長軸	短軸				
2-300	Ⅱ-7-6	SK-045	縄文	92115.266	-11616.470	SD-019・SX-028・SP-0678	SK-045-SD-019・SX-028・SP-0678	150	50	9	ah	f	
2-301	Ⅱ-13	SK-047	古代	92122.976	-11633.917	SD-008・SK-061	SK-047-SK-061・SD-008	106	77	25	ef	h+	
2-301	2-8	SK-048	古代	92108.242	-11628.005	SD-011・019	SK-048-SD-011・019	204	79	14	g	h+	
2-301	Ⅱ-5	SK-049	縄文	92113.609	-11613.023	-	-	101	66	34	ef	h	
2-301	Ⅱ-15	SK-050	縄文	92120.906	-11661.496	SP-0618・0622・0623	SK-050-SP-0618・0622・0623	157	130	25	ah	h+	
2-302	Ⅱ-18	SK-052	古代	92116.805	-11677.537	SI-005a・005b・SD-004・SX-001・020	SK-001-SI-052/SI-005a・005b・SD-004・SX-020	75	68	57	ef	d	
2-299	Ⅱ-17	SK-053	縄文	92115.391	-11672.340	SI-005a・005b・008・SK-042・062・SP-0508・0510・0519・0522・SK-053	SI-005a・008・SK-042・SP-0508・0510・0519・0522・SK-053	185	114	45	f	d	
2-302	Ⅱ-3-18	SK-054	古代	92119.906	-11676.442	SI-005b・SK-060	SI-005b/SK-054/SK-060	86	180	27	ef	l	
2-302	Ⅱ-17-18	SK-055	古代	92117.389	-11675.967	SI-005a・005b・SK-056・068・SD-001	SI-005a・005b/SK-055/SK-056・068・SD-001	90	56	11	ef	d	
2-302	Ⅱ-17	SK-056	古代	92117.864	-11674.488	SI-005a・005b・SK-055・057・066・068・SD-004・SP-0503	SI-005a・005b・SK-055・057・066・068・SP-0503/SK-056/SD-004	132	110	82	aa	h+	
2-302	Ⅱ-17	SK-057	-	92117.727	-11673.722	SI-005a・005b・SK-056・066	SI-005a・005b/SK-057/SK-056・066	66	55	9	ef	d	
2-303	Ⅱ-20	SK-058	古代	92122.680	-11695.160	SI-010・012・012b	SK-058/SI-010・012・012b	132	95	19	ef	h+	
2-303	Ⅱ-28	SK-059	縄文	92126.080	-11692.847	SI-010・011	SK-059/SI-010/SK-059/SI-011	125	82	31	ah	h+	
2-302	Ⅱ-18	SK-060	-	92126.328	-11676.348	SI-005b・SK-054	SK-060/SI-005b・SK-054	136	50	23	f	a+h	
2-303	Ⅱ-13	SK-061	古代	92122.008	-11654.487	SK-047・SD-008・SP-0607・0608・0614	SK-061/SK-047・SD-008・SP-0607・0608・0614	211	126	89	ah	a+h	
2-299	Ⅱ-17	SK-062	古代	92113.602	-11672.200	SI-005a・005b・008・SK-042・053・SP-0501・0508・0510・0519・0521・0522・0531・0735	SI-005a・005b・008・SK-042・053・SP-0501・0508・0510・0519・0521・0522/SK-062/SP-0731・0735	190	142	45	ef	d	
2-304	Ⅱ-17	SK-063	古代	92117.109	-11672.263	SI-005a・005b・008・SK-064	SK-063/SI-005a・005b・008・SK-064	163	120	49	f	a	
2-304	Ⅱ-17	SK-064	古代	92116.945	-11671.933	SI-005a・005b・008・SK-063	SI-005a・005b・008/SK-064/SK-063	69	160	45	ah	d	
2-304	Aa-10	SK-065	縄文	92103.039	-11638.910	SD-019・023・SP-0720	SD-023・SP-0720/SK-065/SD-019	68	61	96	aa	f	
2-302	Ⅱ-17	SK-066	古代	92118.305	-11674.042	SI-005a・005b・SK-056・057・069	SI-005a・005b・SK-057・069/SK-066/SK-056	100	99	32	ah	h	
2-304	Ⅱ-14	SK-067	古代	92123.109	-11658.687	SK-061/SK-065・SP-0646・0647・0648・0612・0615	SK-067/SKa-061/SK-065・SP-0646・0647・0648・0612・0615	122	98	16	g	a	
2-302	Ⅱ-17-18	SK-068	古代	92116.961	-11674.853	SI-005a・005b・SK-055・056・SD-004・SP-0763	SI-005a・005b・SK-055/SK-068/SK-056・SD-004・SP-0763	89	56	25	ah	h+	
2-302	Ⅱ-17-18	SK-069	古代	92118.602	-11674.809	SI-005a・005b・SK-066・092	SI-005a・005b/SK-069/SK-066・092	90	56	45	ah	a	
2-304	Ⅱ-17	SK-070	縄文	92114.102	-11674.589	SI-005a・005b・008・SK-072・SD-004・SP-0389・0391	SK-070/SI-005a・005b・008・SK-072・SD-004・SP-0389・0391	122	170	39	h	f	
2-305	Ⅱ-14	SK-071 (SP-0861)	縄文	92121.305	-11657.729	-	-	130	81	16	ef	h+	調査時SP-0861
2-305	Ⅱ-17	SK-072	古代	92113.328	-11674.714	SI-005a・005b・SK-070	SI-005a・005b/SK-072/SK-070	78	72	36	aa	d	
2-305	2-7	SK-073	縄文	92108.481	-11621.975	-	-	73	70	20	h	f+h	
2-305	Ⅱ-13	SK-075	古代	92113.398	-11654.883	SD-007・SP-0364	SP-0364/SK-075/SD-007	120	84	106	ef	f	
2-305	Aa-10	SK-076	古代	92102.219	-11636.880	SD-019	SK-076/SD-019	74	52	47	ef	a	
2-305	Ⅱ-2-13	SK-077	縄文	92109.789	-11633.603	SD-007・SP-0291	SP-0291/SK-077/SD-007	132	169	15	ah	d	
2-305	Aa-7	SK-078	縄文	92100.172	-11623.097	SD-030・SP-0876	SK-078/SD-030・SP-0876	92	75	16	ef	d	
2-306	Ⅱ-17	SK-079	縄文	92111.076	-11676.948	SD-004・SP-0772	SK-079/SD-004・SP-0772	90	50	5	ah	a	
2-306	Aa-7	SK-080	中世	92101.133	-11622.656	SD-010・030	SK-080/SD-010・030	71	21	22	aa	d	
2-306	Aa-7	SK-081	中世	92100.195	-11620.682	SD-032・033・SP-0889	SD-033・SP-0889/SK-081/SD-032	100	81	24	aa	a+d	
2-306	Aa-7	SK-082	中世	92099.273	-11623.026	SD-032	SK-082/SD-032	160	154	26	f	f	
2-306	Aa・Aa-6	SK-083	古代	92099.859	-11619.325	SD-032	SK-083/SD-032	71	35	14	ef	l	
2-306	Ⅱ-7-6・7	SK-086	縄文	92115.814	-11620.462	SD-007・019	SK-086/SD-007・019	204	154	28	ef	f	
2-306	Ⅱ-3-19	SK-087	古代	92120.076	-11691.620	SD-004	SK-087/SD-004	162	86	15	ah	h	
2-307	Ⅱ-7-7	SK-088	縄文	92114.500	-11623.379	SD-007・019・SK-066・SP-0608・0700・0669	SK-088/SD-007・019・SK-066・SP-0608・0700・0669	250	239	15	aa	h	
2-307	Aa-8	SK-089	古代	92101.078	-11628.682	SD-020・031・SK-013	SK-013/SK-089/SD-020・031	220	166	81	ah	h+	
2-307	Ⅱ-7	SK-090	縄文	92117.609	-11624.418	SP-0183・0184・0894	SK-090/SP-0183・0184・0894	116	100	85	aa	f	
2-308	Ⅱ-13	SK-091	古代	92111.680	-11653.369	SD-007・007b・SK-002	SK-092/SD-007・007b/SK-091/SD-007	125	98	20	ef	h+	
2-302	Ⅱ-18	SK-092	古代	92118.391	-11673.002	SI-005a・005b・SK-069	SK-092/SI-005a・005b・SK-069	66	118	27	ah	f	
2-308	Ⅱ-19	SK-093	古代	92123.250	-11680.744	SI-010・010b・010c・SD-004	SI-010/SK-093/SI-010b・010c・SD-004	124	160	13	h	h	
2-308	Aa-11	SK-094	古代	92092.439	-11644.553	SI-019	SK-094/SI-019	91	59	30	f	f	

図号	調査区	遺構名	時期	位置		重畳	新旧関係	規模(m)			平面形	断面形	備考
				X	Y			長軸	短軸	深さ			
2-309	Ae-12	SK-095	古代	92090.736	-11617.813	-	-	104	83	15	ah	d	
2-309	F-20	SK-096	縄文	92122.625	-11698.767	SI-012	SK-096/SI-012	90	79	41	ah	a+T	
2-309	F-20	SK-097	縄文	92123.320	-11698.058	SI-010・012	SI-010/SK-097/SI-012	111	109	21	ah	a+1	
2-309	Ae-13	SK-098	縄文	92091.981	-11653.389	SK-099・SP-092D	SK-098/SK-099・SP-092D	136	82	27	f	d	
2-309	Ae-13	SK-099	縄文	92091.469	-11653.400	SK-098	SK-099/SK-098	86	72	96	ef	a+e	
2-309	Ae-14	SK-100	縄文	92092.130	-11653.562	SP-092T・092B	SK-100/SP-092T・092B	110	107	11	ah	d	
2-309	Ae-14	SK-101	縄文	92091.672	-11657.336	-	-	165	77	20	e	d+1	
2-310	Aa-13・14	SK-102	縄文	92097.136	-11654.799	SI-037・SP-1022	SK-102/SI-037・SP-1022	120	100	99	ah	f	
2-310	F-22	SK-103	-	92132.364	-11697.549	SI-025・SX-036	SK-103/SI-025・SX-036	62	57	21	ah	a+1	
2-310	F-21	SK-104	古代	92138.625	-11693.094	SK-094	SK-104/SP-094	71	66	31	ah	a	P(11.29×22×15cm)
2-310	F-21	SK-105	中世	92134.438	-11694.192	SI-034・SP-1114・1197	SK-105/SI-034・SP-1114・1197	85	55	10	ef	d	
2-311	Ae-12	SK-106	古代	92094.844	-11648.542	SI-019・SK-113・116・SD-019	SI-019・SD-019/SK-106/SK-113・116	192	114	48	ef	a+0	
2-312	F-21	SK-107	古代	92138.734	-11690.994	SI-023	SK-107/SI-023	49	47	29	ef	a+T	
2-312	S・T-19	SK-108	古代	92140.063	-11684.678	SK-097	SK-108/SP-097	85	45	14	f	d	
2-312	S-21	SK-109	中世	92144.445	-11692.045	SP-2194	SK-109/SP-2194	90	74	12	ah	d	
2-312	S-6	SK-110	古代	92141.094	-11643.791	-	-	95	79	21	ah	a	
2-312	S-22	SK-111	縄文	92143.148	-11699.755	SK-119・130・SD-004	SK-094・SK-130/SK-111/SK-119・SP-1201	(186)	131	25	ah	a+1	
2-312	S-22	SK-112	古代	92127.305	-11697.932	SI-002(BN・B)	SK-112/SI-002(BN・B)	(173)	92	14	a	d+1	
2-311	Ae-12	SK-113	古代	92093.984	-11648.829	SI-019・SK-106	SK-113/SI-019・SK-106	110	170	20	ah	b	
2-313	S-7	SK-114	古代	92141.055	-11624.652	-	-	80	73	26	h	b	
2-311	Ae-12	SK-115	縄文	92093.984	-11648.600	SI-019	SK-115/SI-019	201	165	50	ef	d+1	
2-311	Ae-12	SK-116	縄文	92094.922	-11648.320	SI-019・SK-106	SK-116/SI-019・SK-106	57	81	16	ef	d	
2-313	Ae-13	SK-117	縄文	92093.984	-11654.852	SD-019・SP-1209	SK-117/SD-019・SP-1209	99	170	28	h	b	
2-313	Ae-13	SK-118	古代	92095.955	-11656.767	SI-019・SD-019・SP-1207	SK-1207/SK-118/SI-019・SD-019	132	95	21	ef	d	
2-312	S-22	SK-119	縄文	92143.906	-11699.757	SK-111	SK-119/SK-111	(55)	200	25	ah	d	
2-313	Aa-11	SK-120	古代	92101.758	-11642.149	SI-020・SK-143・SD-019	SD-019/SK-120/SI-020・SK-143	212	113	70	f	a+1	
2-314	F-8	SK-121	古代	92136.967	-11625.494	-	-	74	65	16	h	b	
2-314	S-22・23	SK-122	古代	92141.055	-11700.691	-	-	234	180	20	e	a	
2-314	Ae-14・15, Ae-15	SK-123	古代	92085.047	-11660.532	SD-035・037・SK-120a・126・131・136	SK-120a・131・SD-035/SK-123/SK-120・SD-037	155	89	40	e	a	
2-314	Ae-14, Ae-14・15	SK-125a	古代	92084.586	-11660.185	SD-037・SK-125・131・135・138・139・SP-1221	SK-131/SK-125a/SK-125・138・139・SD-037/SK-125a/SK-135・SP-1221	170	(50)	22	f	d	
2-315	Ad・Ae-15	SK-126	古代	92084.867	-11661.562	SD-035・SK-125・SP-1220	SK-126/SK-125・SD-035・SP-1220	129	85	29	ah	b+1	
2-316	T-21	SK-127	古代	92138.781	-11700.480	SK-128・214	SK-127/SK-128・214	87	(43)	28	ah	a	
2-316	F-2・22・23	SK-128	古代	92139.875	-11699.783	SI-034・SK-127・214・SP-1777・1779	SK-127/SK-128/SI-034・SK-214・SP-1777・1779	(108)	106	23	ah	a+1	
2-316	Ae-12	SK-129	古代	92092.484	-11647.984	SI-019	SK-129/SI-019	136	86	35	ef	a	
2-316	S-23	SK-130	中世	92143.766	-11700.629	SI-111・SP-1113・130・SD-1221	SK-111・SP-1113/SK-130・SD-1221	87	(54)	5	eg	e	
2-315	Ad-14, 15	SK-131	中世	92089.234	-11662.422	SD-035・037・SK-125・125a・136・139・SP-1221	SK-035/SK-131/SK-125・125a・136・139・SD-037/SK-131/SP-1221	(100)	36	20	e	d	
2-316	F-14	SK-132	縄文	92122.844	-11656.179	-	-	149	105	36	f	e	
2-316	F-14	SK-133	縄文	92123.922	-11657.280	SK-134・SP-0803・0804・0823・1264	SK-134・SP-0803・0804・0823/SK-133/SP-1264	151	144	38	ah	a	
2-316	T・R-14	SK-134	縄文	92124.928	-11656.734	SK-133	SK-134/SK-133	140	140	46	ah	a	
2-314	Ae-15	SK-135	古代	92084.375	-11658.886	SD-037・SK-125a・139・140・SX-031・SP-1221	SK-135/SK-031・SK-125a・139・140・SD-037/SK-139/SK-135・SP-1221	(90)	(9)	-	e	a	平面図のみ
2-317	Ae-15	SK-136	中世	92083.269	-11662.127	SP-1228	SK-136/SP-1228	80	(81)	36	f	a+1	
2-317	Ae-15	SK-137	古墳	92080.561	-11667.400	SP-1228	SK-137/SP-1228	(104)	(96)	38	aa	d	
2-315	Ad-14・15, Ae-15	SK-138	古代	92085.109	-11660.460	SD-035・037・SK-125・125a・131・139	SK-138/SK-125・125a・131・139・SD-035/SK-138/SP-037	138	129	50	ef	a+1	
2-315	Ae-15	SK-139	古代	92084.258	-11660.240	SD-037・SK-125a・131・135・138・140・SP-1221	SK-125a・131/SK-139/SK-138・140・SD-037/SK-139/SK-135・SP-1221	(120)	(55)	50	ef	a+1	
2-315	Ad・Ae-14	SK-140	古代	92084.484	-11658.643	SD-037・SK-135・139・142・SX-031	SK-140/SK-139/SK-140/SK-135・142・SD-037・SK-142/SK-031/SK-142/SK-140	(111)	(61)	-	e	a	平面図のみ
2-315	Ad・Ae-14	SK-142	古代	92084.570	-11657.910	SK-140・SX-031	SK-142/SK-031/SK-142/SK-140	136	152	-	ef	a	平面図のみ
2-317	Aa-11	SK-143	古代	92102.281	-11644.334	SI-020・SK-120・SD-019	SK-143/SI-020・SK-120・SD-019	(39)	(12)	16	a	d	
2-318	F-4・5	SK-144	古代	92112.046	-11610.336	-	-	149	131	100	aa	f	
2-318	F-4・5	SK-145	古代	92108.344	-11610.219	SD-020	SK-145/SD-020	112	90	142	aa	h	
2-319	F-5	SK-146	古代	92110.452	-11610.380	SD-020・STP-006	SK-146/SD-020・STP-006	82	76	11	ah	d	
2-319	S-20	SK-147	古代	92144.258	-11666.494	SD-007	SK-147/SD-007	102	102	51	ah	e	
2-319	Aa-11	SK-148	古代	92103.680	-11640.531	SI-020・SK-149	SK-148/SI-020・SK-149	119	82	6	ah	d	
2-319	Aa-11	SK-149	古代	92103.963	-11640.722	SI-020・SK-148	SI-020/SK-149/SK-148	88	85	5	ah	1	
2-319	T-5	SK-152	縄文	92108.555	-11641.960	SD-020	SK-152/SD-020	100	73	42	f	d	

図号	調査区	遺構名	時期	位置		重畳	新旧関係	規模(m)			平面形	断面形	備考
				X	Y			長軸	短軸	深さ			
2-119	S-5	SK-153	古代	92118.945	-11614.255	SD-007・019	SK-153/SD-007・019	78	71	16	ah	d	
2-119	S-5	SK-154	古代	92114.992	-11682.710	-	-	102	94	10	ah	d	
2-119	S-19	SK-155	縄文	92142.875	-11685.391	SD-007	SK-155/SD-007	135	147	48	ah	f	
2-320	E-Y-17	SK-157	古代	92129.969	-11671.621	SD-007・SP-0573・0074・1238・1241・1244・1920・1921・1929	SP-1238・1241・1244/SD-157/SD-007・SP-0573・0074・1238・1241・1920・1921・1929	186	149	30	ef	d+h	
2-320	Ab-12	SK-156	古代	92099.516	-11649.296	SI-032・SK-159・161・163・SX-040・SP-0998・1504	SI-032・SK-159・161・163・SX-040・SP-0998・1504	124	117	31	g	e	
2-320	Aa・Ab-12	SK-159	古代	92099.936	-11636.081	SI-032・SK-159・161・SD-004・020・SX-040	SI-032・SK-159・161・SD-004・020・SX-040	82	68	18	a	d	P111:32×29
2-320	Ab-12	SK-160	古代	92099.211	-11648.177	SI-032・SD-019・SX-040・044	SK-160/SI-032・SX-040・044/SX-160/SD-019	69	59	30	aa	d	
2-320	Aa・Ab-12	SK-161	古代	92100.063	-11649.161	SI-032・SK-158・159・162・163・SD-004・020・SX-040	SI-032・SK-159/SD-161/SX-158・159・162・163・SD-004・020・SX-040	117	79	41	ef	a+h	
2-320	Aa・Ab-12	SK-162	古代	92100.117	-11649.151	SI-032・SK-161・163・SD-004・SX-040	SI-032・SK-161・163・SX-040/SX-162/SD-004	56	56	26	aa	d	
2-320	Ab-12	SK-163	古代	92099.477	-11648.920	SI-032・SK-158・161・162・SX-040・SP-1504	SI-032・SK-158・161・162・SX-040・SP-1504/SX-163/SD-040	86	69	12	ef	d	
2-321	T-Aa-11	SK-164	縄文	92165.028	-11614.282	-	-	90	97	20	h	f	
2-321	Ab-12	SK-165	縄文	92163.903	-11646.943	-	-	73	60	12	ah	i	
2-321	T-12	SK-166	縄文	92167.068	-11648.512	SD-003・003c・007・SX-047	SK-166/SD-003・007/SX-047	120	133	12	ah	f	
2-321	Aa・Ab-11	SK-167	古代	92100.406	-11638.281	SD-003	SK-167/SD-003	176	176	222	aa	a	
2-322	T-11	SK-169	縄文	92173.923	-11643.795	-	-	129	93	26	ef	a	
2-323	X-Y-11	SK-170	縄文	92114.965	-11642.737	SD-028	SK-170/SD-028	129	120	27	ah	a	
2-323	T-7	SK-171	縄文	92126.980	-11623.353	SP-1655	SK-171/SP-1655	98	80	12	ah	b	
2-323	T-8・9・X-9	SK-172	縄文	92126.250	-11628.841	-	-	94	171	39	ef	a	
2-323	Ab-17	SK-173	古代	92095.508	-11672.059	SD-003	SK-173/SD-003	120	116	15	ah	d	
2-323	T-7	SK-174	-	92123.211	-11623.784	-	-	84	154	13	aa	d	
2-323	Ab-17	SK-175	古代	92090.992	-11673.522	SD-002b・019・SX-060・066	SK-175/SD-002b・019・SX-060・066	110	127	16	ca	d+h	
2-323	Ab-17	SK-176	中世	92091.734	-11670.618	SD-002b・SX-054・085	SK-176/SX-070/SD-002b・SX-053/SX-176/SX-059/SD-054	116	100	10	g	i	調査時SK-079
2-324	Aa-13	SK-177	縄文	92103.820	-11632.524	SI-022	SK-177/SI-022	190	79	22	f	i	P111:24×(20)×12m
2-324	T-8	SK-178	-	92123.109	-11627.464	SX-052・SP-1716・1736・1737	SX-052・SP-1716/SX-1736・1737	79	62	24	ef	a	
2-325	Ab-17	SK-179	縄文	92092.617	-11673.481	SD-002b・SX-055・060・068・074	SK-179/SD-002b・SX-055・060・068・074	113	150	32	g	i	
2-325	Ab-17	SK-180	縄文	92091.756	-11672.735	SK-181・SX-074・075	SK-180/SX-181/SX-180/SX-074・075	71	169	32	a	d+h	
2-325	Ab-17	SK-181	縄文	92091.680	-11672.535	SK-180・SX-061・062・071・075	SK-181/SX-180/SX-181/SX-061・062・071・075	193	163	8	ef	d	
2-325	T-10・11	SK-182	縄文	92111.955	-11640.365	-	-	182	180	79	ah	f	
2-325	Aa・Ab-17	SK-183	古代	92094.820	-11669.421	SD-003・019・SK-187	SK-183/SX-187・SD-003・019	169	141	145	ah	e+h	
2-326	T-8	SK-184	古代	92123.994	-11629.494	-	-	73	58	12	ah	a	
2-326	T-11	SK-186	中世	92110.336	-11641.339	SD-007	SK-186/SD-007	162	100	-	ah	a	平面図のみ
2-325	Ab・Ac-17	SK-187	古代	92094.953	-11670.560	SD-003・019・SK-183	SK-183/SX-187/SD-019/SX-183/SD-003	115	115	69	ef	a+h	
2-326	T-13	SK-188	古代	92109.102	-11636.233	SD-003・003b・007・067b・SK-050・SP-1591	SK-050・SP-1591/SX-188/SD-003・003b・007・067b	130	161	62	ah	a+h	
2-327	Ad-13	SK-190	中世	92087.117	-11664.744	SD-041・SX-095・SP-1909	SK-190/SD-041・SX-095・SP-1909	64	52	15	ef	h	
2-327	Ab-13	SK-192	古代	92083.969	-11661.233	SK-206・SD-035・SP-1649	SK-206・SP-1649/SX-192/SD-035	1210	186	45	ef	i	
2-327	Ac・Ad-16	SK-193	縄文	92090.094	-11666.311	-	-	215	128	32	ef	h	d+h
2-327	Ab-13	SK-194	古代	92085.633	-11662.096	-	-	169	162	78	f	d	
2-327	Ab-13	SK-195	古代	92084.547	-11661.240	SD-035	SK-195/SD-035	98	56	48	ef	f	
2-328	X-5	SK-196	縄文	92118.844	-11610.266	SI-042・SP-1808	SK-196/SP-1808/SX-196/SI-042	78	153	26	ah	f	
2-229	S-22	SK-199	縄文	92144.797	-11606.152	SI-035・087(SX-104)・SK-198・SK-199・201・202・203・204・216	SI-035・SK-202/SX-104/SX-197/SI-087(SX-104)・SK-198・199・201・202・203・204・216	180	160	36	ah	b	
2-229	S-22	SK-198	縄文	92145.109	-11606.935	SI-035・SK-197・199・201・203	SI-035・SK-197・203/SX-198/SX-199・201	130	120	42	ah	a	SK-198・SK-199(原遺跡)
2-229	S-22	SK-199	縄文	92144.984	-11606.540	SI-087(SX-104)・SK-197・198・203・204・216	SK-197・198・203・204・204/SX-199/SI-087(SX-104)・SK-216	191	170	36	ef	a	SK-199・SK-199(原遺跡)
2-229	S-21	SK-200	古代	92144.258	-11603.978	SI-035・SK-201・219・220・SP-2195	SK-200/SI-035・SK-201・219・220・SP-2195	78	170	16	ah	d+h	
2-229	S-21・22	SK-201	縄文	92144.508	-11604.928	SI-035・SK-197・SK-198・200・204・219・220・SP-2195	SK-201/SI-035・SK-197・198・200・204・219・220・SP-2195	178	121	58	ah	f	

図号	調査区	遺構名	時期	位置		重畳	新旧関係	規模(m)		平面形	断面形	備考	
				X	Y			長軸	短軸				
2-329	S-22	SK-202	古代	9213.828	-11695.862	SI-087(S3-104)・SK-197・204	SK-202・SI-087(S3-104)・SK-197・204	102	147	80	ah	e	
2-329	S-22	SK-203	縄文	92144.436	-11696.382	SI-087(S3-104)・SK-197・199・201・204	SK-197・204(SK-203)・SI-087(S3-104)・SK-199・SK-199・216	102	147	32	ah	s	
2-329	S-22	SK-204	縄文	92143.797	-11695.968	SI-035・087(S3-104)・SK-197・199・201・202・203・216・219・220-004	SI-035・SK-197・202・SK-204・SI-087(S3-104)・SK-199・201・202・216・219(SK-204)	199	133	88	ef	f	
2-331	4a-15	SK-205(SX-191)	古代	92083.828	-11664.075	SP-035・041・SI-078・095	SK-078・SK-205(SX-191)・SK-205(SX-191)750-035・041・SI-095	160	100	69	ef	d	調査時SK-191
2-327	4a-15	SK-206	古代	92082.967	-11664.455	SK-192・SI-093・SP-001	SP-164(SX-206)SK-192・SI-093	170	110	41	ef	d	
2-331	S-19	SK-207	縄文	92143.168	-11692.328	SP-009	SK-207・SP-009	81	80	49	aa	f	
2-329	S-21	SK-208	古代	92143.172	-11693.933	SI-035・SK-219	SK-208・SI-035・SK-219	73	63	24	ef	h	
2-332	S-18	SK-209	古代	92134.313	-11677.425	SI-046・SD-007	SK-209・SD-007SK-2097・SI-046	113	96	6	f	d	
2-332	V・R・1・5	SK-210(SI-030(SX-011))	縄文	92124.095	-11610.636	SI-036・041	SK-210(SI-030SK-011)・SI-036・041	191	130	79	c	f	調査時SI-036(SX-011)・上面古代
2-332	T-18	SK-211(1979年)	近世	92129.388	-11679.920	SI-047・SP-1288・2188	SK-211・SI-047・SP-1288・2188	119	95	20	ah	d+1	
2-333	T-17	SK-212	古代	92127.506	-11674.497	SD-007	SK-212・SD-007	97	80	26	f	i	
2-333	T-23	SK-214	古代	92138.180	-11699.986	SK-127・128・SP-1779	SK-127・128(SX-214)・SP-1779	169	55	16	g	f+1	
2-332	T-21	SK-215	縄文	92138.820	-11691.640	SD-004	SK-215・SD-004	82	130	37	ah	f	
2-329	S-22	SK-216	縄文	92144.422	-11696.728	SI-087(SX-104)・SK-197・199・201・204	SK-197・199・201・204(SX-216)SI-087(SX-104)	61	39	34	ef	a	
2-333	S-5	SK-217	古代	92122.287	-11810.643	SI-036・041・SD-007・SP-1889	SK-217・SI-036・041・SD-007SK-217SP-1889	249	163	21	s	a	
2-335	U-17	SK-218	古代	92134.339	-11674.339	SI-046	SK-218・SI-046	135	116	18	ah	b+1	
2-329	S-21	SK-219	古代	92143.469	-11694.505	SI-035・087(S3-104)・SK-200・201・204・208・228	SI-035・SK-200・201・204・208・228(SX-219)SI-087(S3-104)・SK-201	123	125	52	ah	e	
2-329	S-21	SK-220	古代	92144.039	-11694.460	SI-035・SK-200・201・219・SP-2195	SK-200・SK-220・SI-035・SK-201・219・SP-2195	70	69	52	f	a	
2-333	T-17	SK-221(1979年)	古代	92135.680	-11678.608	SP-2137・2150・2214	SK-221・SP-2137・2150・2214	176	136	16	ef	d+1	
2-335	U-3	SK-222	中世	92134.000	-11663.293	SI-050・SP-1950・1961	SP-1958・1964(SX-222)・SI-050	181	150	30	e	d+1	P111:60×54×5cm
2-335	U-4	SK-223	古代	92133.693	-11658.215	SI-050	SK-223・SI-050	148	103	20	ef	d	
2-335	U-6	SK-224(1979年)	古代	92130.656	-11666.683	SI-056・SP-2081・2082	SK-224・SI-056・SP-2081・2082	139	121	-	ah	e	平面図のみ
2-335	T-D-8	SK-225	古代	92135.273	-11628.065	-	-	111	86	10	ef	i	
2-335	V-11	SK-226	縄文	92127.508	-11648.831	SI-052・057	SK-226・SI-052・057	110	104	46	ef	d	
2-335	U-F-8	SK-227	古代	92129.719	-11625.979	SI-030	SK-227・SI-030	170	145	49	aa	d	
2-334	T-5	SK-228	古代	92139.227	-11611.790	SK-231・234	SK-228・SK-231・234	136	50	39	ef	b+1	
2-336	V-15	SK-229	縄文	92128.617	-11657.031	SI-031・SP-2061・2062・2063・2064	SK-229・SI-031・SP-2061・2062・2063・2064	140	139	55	h	f	
2-336	V-8	SK-230	古代	92125.660	-11628.842	SP-2049	SK-230・SP-2049	98	79	35	ef	a	
2-334	S・T-5	SK-231	古代	92148.422	-11611.058	SK-228・234・SP-1965・1988	SK-228・SP-1965・1988(SX-231)SK-234	214	180	41	ef	a	P111:21×21×1cmP12:121×20×5cm
2-336	S-19	SK-233	縄文	92144.109	-11670.472	SI-071・077・SK-229・SP-2269・2293	SK-233・SI-071・077・SK-229・SP-2269・2293	87	86	12	h	d	
2-334	S・T-5	SK-234	古代	92138.961	-11612.310	SK-228・231・SP-1899	SK-234・SK-228・231・SP-1899	194	190	20	ef	i	
2-336	U-16	SK-235	縄文	92132.922	-11668.243	-	-	135	119	41	aa	ef	
2-337	U-12	SK-236	古代	92131.180	-11649.340	SI-051・054・058・059・STP-012	SK-236・SI-051・054・058・059・STP-012	166	110	56	aa	d+1	
2-338	T-18	SK-237	縄文	92135.227	-11677.912	SI-046・SD-007	SK-237・SI-046・SD-007	110	123	32	e	i	
2-338	U-10・11	SK-238	縄文	92134.259	-11649.469	SI-081	SK-238・SI-081	115	136	70	ef	f	
2-338	S-17	SK-239	縄文	92143.914	-11671.148	SI-071・SK-233・SP-2293	SK-233・SK-239・SI-071・SP-2293	163	142	14	ef	d	
2-339	U-8	SK-240	縄文	92132.055	-11628.161	-	-	97	94	72	ah	f	
2-339	T-E-15	SK-241	縄文	92135.209	-11662.480	SI-056	SK-241・SI-056	140	125	91	ah	f	
2-339	U-3	SK-244	中世	92146.047	-11601.400	SD-038・SK-100	SD-038(SX-244)SK-100	85	150	50	ef	d	
2-339	S-17	SK-245	古代	92144.904	-11671.715	SI-071	SK-245・SI-071	66	54	32	ef	d	
2-340	S-15	SK-246	古代	92143.945	-11663.264	SI-067・SP-2265	SK-246・SI-067・SP-2265	111	79	62	ef	d	
2-340	T-16	SK-247	縄文	92141.547	-11669.315	SI-049	SK-247・SI-049	89	123	35	e	f	
2-340	T-15	SK-248	縄文	92138.963	-11664.186	-	-	80	76	20	f	a	
2-340	S-17	SK-249	古代	92148.578	-11670.350	SI-048・049	SK-249・SI-048・049	117	102	36	ah	a	
2-340	S-9	SK-250	縄文	92138.328	-11632.183	SI-026・SK-253・SP-2393	SK-250・SI-026・SK-253・SP-2393	145	130	49	ah	e	
2-341	T-10	SK-251	縄文	92137.508	-11638.177	SP-2394	SK-251・SP-2394	149	114	95	ef	d	
2-341	T-15	SK-252	縄文	92137.883	-11661.713	SI-067・070	SK-252・SI-067・070	72	55	20	f	a	
2-341	T-5	SK-253	古代	92138.273	-11633.258	SI-026・SK-250	SK-253・SI-026・SK-250	173	180	80	ef	d	
2-341	S-13・14	SK-254	縄文	92143.444	-11655.309	SP-2287・2288	SK-254・SP-2287・2288	181	99	15	ef	j	
2-341	S-9	SK-255	古代	92142.031	-11632.649	SI-026・SP-2401	SK-255・SI-026・SP-2401(SI-026地上掘削)	106	95	70	aa	a	

図号	調査区	遺構名	時期	位置		重覆	新旧関係	規模(m)			平面形	断面形	備考
				X	Y			長軸	短軸	深さ			
2-341	F-13	SE-237	-	92126.917	-11632.871	SI-039・SP-0395・2074・23308-2577	SK-257-SP-0395・2074・23308-2577	115	157	35	多	多	

表3-30 再掲新田(2)遺跡SE遺構観察表

図号	調査区	遺構名	時期	位置		重覆	新旧関係	規模(m)			平面形	断面形	備考
				X	Y			長軸	短軸	深さ			
2-342	S-11	SE-001	古代	92117.922	-11644.141	-	-	108	104	102	円形	円筒形	遺物出土のみ
2-343	F-X-11	SE-002	古代	92119.832	-11641.207	SP-0152	SP-002/SP-0322	99	93	108	円形	円筒形	遺物出土のみ
2-344	F-6	SE-003 (SK-150)	古代	92121.600	-11619.525	SP-1706	SP-003(SK-150)/SP-1706	99	80	162	不整形円形	円筒形・断面の一部は緩やかに立ち上がりが見られる	調査時SK-150
2-347	F-6	SE-004	古代	92123.141	-11615.935	SI-036・SP-1495	SI-036/SE-004/SP-1495	174	164	118	円形	底辺円筒形・置き気味に立ち上がる	調査時SK-150
2-348	S-5	SE-005 (SK-156)	中世	92118.102	-11612.975	SI-030・042・SD-019・SP-2420(SI-030P130)	SE-005(SK-150)/SI-030・042・SD-019・SP-2420(SI-030P130)	172	165	132	円形	緩やかに立ち上がる	調査時SK-150
2-349	F-7	SE-006 (SK-022)	古代	92120.133	-11621.881	-	-	121	116	136	円形	円筒形	調査時SK-022
2-349	F-6	SE-008	古代	92127.711	-11618.303	SP-1678・1679・1686・1688・1701・1702・1709	SI-008/SP-1678・1679・1686・1688・1701・1702・1709	285	281	216	不整形円形	中非まで円筒形・置き気味に立ち上がる	

表3-31 再掲新田(2)遺跡SN遺構観察表

図号	調査区	遺構名	時期	位置		重覆	新旧関係	規模(m)			平面形	断面形	備考
				X	Y			長軸	短軸	深さ			
2-350	Aa-19	SN-001	中世	92095.953	-11690.898	SN-001・002	SD-001/SN-001/SD-002	89	67	26	不整形円形	一部緩やかに立ち上がる	遺上で検出
2-350	F-13・14	SN-002 (①)	古代	92112.814	-11638.016	SP-007・SK-002②・003・SP-027③・029④・0901	SN-002・SP-027③・029④/SN-002②/SP-0901	138	137	21	不整形円形	緩やかに立ち上がる	遺上で検出
2-350	F-13・14	SN-002 (②)	古代	92112.508	-11634.887	SK-091・SD-007・SP-0204・SK-002①・003・SP-0204・0205・0271・0272・0273・0274・0275・0298・0299・0302②/SK-091・SD-007・097③・SP-0847・0850・0901	SN-002①・003・SP-0204・0205・0271・0272・0273・0274・0275・0298・0299・0302②/SK-091・SD-007・097③・SP-0847・0850・0901	586	466	76	カマド状	一部緩やかに立ち上がる	遺上で検出
2-359	F-13	SN-003	古代	92112.063	-11632.751	SE-001・SD-007・SN-002①・0802②	SN-003/SK-081・SD-007・SN-002①・0802②	198	49	31	不整形	隅内があり一部緩やかに立ち上がる	遺上で検出
2-359	Aa-17	SN-001	古代	92102.814	-11671.099	SK-021・SP-0165・0169	SN-004/SK-021・SP-0165・0169	159	72	28	小判形	緩やかに立ち上がる	遺上で検出
2-360	X-F-7	SN-006	古代	92114.531	-11625.643	SI-015・SK-008・SD-002・018・SP-0692・0698・0700・0809	SI-015・SP-0692/SK-008/SK-008・SD-002・019・SP-0698・0700・0809	262	188	12	不整形方形	緩やかに立ち上がる	遺上で検出
2-362	Aa-10	SN-007	古代	92101.922	-11638.536	SD-019・023・SI-012・SP-0721・0724・0726/SK-007/SK-019・SI-012	SD-023・SP-0721・0724・0726/SK-007/SK-019・SI-012	1183	94	21	カマド状	隅内があり緩やかに立ち上がる	遺上で検出
2-363	F-10	SN-008	古代	92108.632	-11627.346	SD-007・SK-010・010a・011	SN-008/SD-007・SK-010・010a・011	135	100	19	不整形円形	緩やかに立ち上がる	遺上で検出
2-369	Aa-9・10	SN-009	古代	92098.992	-11634.289	SD-020・034・SP-1252	SD-034・SP-1252/SN-009/SD-020	1325	164	61	カマド状	緩やかに立ち上がる	遺上で検出
2-365	F-10	SN-010	古代	92108.495	-11637.655	SD-007・SK-008・010a・011・SP-0716	SN-008・SP-0716/SK-010/SK-007・SK-010a・011	205	119	15	不整形	緩やかに立ち上がる	遺上で検出
2-365	F-10	SN-010a	古代	92108.961	-11638.228	SD-007・SK-008・010・011	SN-008・010/SK-010/SK-007・011	170	130	-	不明	-	遺上で検出 反転のみ
2-365	F-10	SN-011	古代	92108.688	-11637.232	SD-007・SK-008・010・010a・SK-022・SP-0716・0716a・0728・0729	SN-008・010・010a・SK-022・SP-0716・0716a・0728・0729/SK-011/SD-007	1460	200	55	カマド状	一部緩やかに立ち上がる	遺上で検出
2-362	Aa-11	SN-012	古代	92101.227	-11641.021	SI-020・SD-018・SK-007・015	SN-007/SN-012/SI-020・SD-018・SK-007・015	1250	107	35	カマド状	一部緩やかに立ち上がる	遺上で検出
2-373	Aa-9・9	SN-013	古代	92106.539	-11629.939	SK-089・SD-020・024・SP-0740	SD-033・SP-0740/SK-013/SK-089・SD-020	1180	109	37	(カマド状)	一部緩やかに立ち上がる	遺上で検出
2-373	Aa-7・8	SN-014	古代	92102.180	-11628.225	SD-012・015・020・025	SD-012・015・025/SK-014/SD-020	360	38	19	横状	緩やかに立ち上がる	遺上で検出
2-382	Aa-Aa-11	SN-015	古代	92099.797	-11643.147	SI-020・SD-019・020・SK-013・SP-013 (SK-124)	SN-012/SN-015/SI-020・SD-019・020・SP-013/SK-124	532	181	45	(カマド状)	緩やかに立ち上がる	遺上で検出 反転・カマド面・反転のみ
2-375	F-6	SN-016	古代	92145.078	-11617.942	SP-1095	SN-016/SP-1095	155	125	10	不整形円形	緩やかに立ち上がる	
2-375	F-5	SN-017	不明	92139.300	-11613.579	-	-	104	54	19	小判形	一部緩やかに立ち上がる	

図号	調査区	遺構名	時期	位置		重積	新旧関係	規模(m)		平面形	断面形	備考	
				X	Y			長軸	短軸				深さ
2-288	1・1-5・6	Ⅲ-028	古代*	92114.422	-11615.533	Ⅲ-045・Ⅲ-111(Ⅲ-017・Ⅲ-096)・Ⅲ-019	Ⅲ-028・Ⅲ-045・Ⅲ-019(Ⅲ-028・Ⅲ-111(Ⅲ-017・Ⅲ-096))	320	270	18	階段	緩やかに立ち上がる	
2-288	1・1-18	Ⅲ-029	縄文	92118.297	-11677.899	Ⅲ-005a・005b・Ⅲ-019・022・Ⅲ-020・Ⅲ-0203・0528・0531・0532・0775・0776	Ⅲ-029・Ⅲ-005a・005b・Ⅲ-019・022・Ⅲ-020・Ⅲ-0203・0528・0531・0532・0775・0776	328	225	91	不整形	凹凸があり緩やかに立ち上がる	
2-288	Ⅲ-13・14	Ⅲ-030	古代*	92087.686	-11655.212	Ⅲ-035	Ⅲ-030・Ⅲ-035	192	68	21	小凹形	中央凹凸がある階段状	
2-288	Ⅲ-14・Ⅲ-14	Ⅲ-031	古代	92083.734	-11658.189	Ⅲ-140・142・Ⅲ-037	Ⅲ-142・Ⅲ-031・Ⅲ-037(Ⅲ-037Ⅲ-037Ⅲ-135・140)	343	230	96	不整形内凹	凹凸がある	
2-300	-	Ⅲ-032	不明	-	-	-	-	-	-	10	-	凹凸がある	セクション図のみ
2-300	1・0-6	Ⅲ-033	中世*	92136.130	-11618.034	Ⅲ-036・Ⅲ-1079・1086	Ⅲ-033・Ⅲ-036・Ⅲ-1079・1086	284	(176)	12	階段	緩やかに立ち上がる	
2-300	1-6	Ⅲ-034	古代*	92137.961	-11617.844	Ⅲ-036・Ⅲ-1036	Ⅲ-034・Ⅲ-036・Ⅲ-1036	75	(53)	14	(不整形)	凹凸がある	
2-300	1-22	Ⅲ-036	古代	92132.195	-11696.416	Ⅲ-025・034・Ⅲ-103	Ⅲ-103・Ⅲ-036・Ⅲ-025・034	362	114	14	階段	階段状	
2-300	1-22	Ⅲ-037	古代	92127.703	-11698.611	Ⅲ-002(Ⅲ・Ⅲ)・Ⅲ-043	Ⅲ-043・Ⅲ-037・Ⅲ-002(Ⅲ・Ⅲ)	(130)	82	88	階段	緩やかに立ち上がる	
2-300	1-6	Ⅲ-038	古代	92141.875	-11618.475	Ⅲ-030・Ⅲ-1034・1068・1305	Ⅲ-038・Ⅲ-036・Ⅲ-1034・1068・1305	136	111	24	不整形	一段段状に立ち上がる	
2-301	Ⅲ-13	Ⅲ-039a	縄文	92085.047	-11632.222	Ⅲ-039a・039b・Ⅲ-1223・1224	Ⅲ-1223・1224・Ⅲ-039a・039b	354	(122)	61	(不整形)	ほぼ直線に立ち上がる箇所と緩やかに立ち上がる箇所がある	
2-301	Ⅲ-13・13	Ⅲ-039b	縄文	92085.445	-11650.473	Ⅲ-039a・039b・Ⅲ-1222	Ⅲ-039a・Ⅲ-1222・Ⅲ-039b・Ⅲ-039a	260	(53)	32	不明	不明	
2-301	Ⅲ-13	Ⅲ-039c	縄文	92085.531	-11654.297	Ⅲ-039a・039b・Ⅲ-1218・1219	Ⅲ-039a・Ⅲ-039b・Ⅲ-1218・1219	114	90	20	不整形内凹	一部農家に入り込む	
2-302	Ⅲ-13・12	Ⅲ-040	古代*	92099.508	-11618.239	Ⅲ-022・Ⅲ-136・139・161・161・162・163・Ⅲ-019・019・020・Ⅲ-042・044・Ⅲ-0994・0993・0998・1381・1382・1383・1504	Ⅲ-022・Ⅲ-136・161・Ⅲ-019・019・020・Ⅲ-042・044・Ⅲ-0994・0993・0998・1381・1382・1383・1504	(273)	270	29	(不整形)	凹凸があり緩やかに立ち上がる	
2-302	1-7	Ⅲ-041	不明	92138.445	-11624.223	Ⅲ-1090・1215	Ⅲ-041・Ⅲ-1090・1215	(64)	29	9	不整形	字状に立ち上がる	
2-302	Ⅲ-12	Ⅲ-042	不明	92099.813	-11648.239	Ⅲ-052・Ⅲ-020・Ⅲ-040・044・Ⅲ-0993・0994・0995	Ⅲ-042・Ⅲ-052・Ⅲ-020・Ⅲ-040・044・Ⅲ-0993・0994・0995	(143)	(91)	13	不明	凹凸に立ち上がる	セクション図・駐土範囲のみ
2-303	1-22	Ⅲ-043	不明	92128.414	-11699.087	Ⅲ-002(Ⅲ・Ⅲ)・025・Ⅲ-027・065	Ⅲ-043・Ⅲ-002(Ⅲ・Ⅲ)・025・Ⅲ-027・065	(12)	(54)	36	(不整形)	緩やかに立ち上がる	
2-302	Ⅲ-12	Ⅲ-044	古代	92106.172	-11647.886	Ⅲ-032・Ⅲ-160・Ⅲ-020・Ⅲ-040・042・Ⅲ-1501・1503・1504	Ⅲ-032・Ⅲ-040・042・Ⅲ-1501・1503・1504・Ⅲ-044・Ⅲ-160(Ⅲ-047・Ⅲ-020)	133	(112)	19	(不整形)	緩やかに立ち上がる	
2-304	1-3	Ⅲ-045	古代	92111.141	-11664.213	Ⅲ-020・036	Ⅲ-036a・Ⅲ-045・Ⅲ-020	180	(53)	47	(不整形)	階段に立ち上がる	
2-304	1-3・4	Ⅲ-046	不明	92120.922	-11605.155	Ⅲ-1485	Ⅲ-046・Ⅲ-1485	95	80	26	不整形	凹凸がある	縄文土露出土
2-304	1-12	Ⅲ-047	古代*	92106.367	-11618.610	Ⅲ-166・Ⅲ-1507	Ⅲ-1507・Ⅲ-047・Ⅲ-166	258	50	14	階段	緩やかに立ち上がる	
2-304	1-3	Ⅲ-048	古代*	92122.130	-11603.416	-	-	268	259	12	階段	凹凸があり緩やかに立ち上がる	階段状
2-304	1-9	Ⅲ-049	古代	92112.438	-11631.981	Ⅲ-007・Ⅲ-1589	Ⅲ-049・Ⅲ-1589(Ⅲ-049・Ⅲ-007)	(130)	63	37	(階段)	緩やかに立ち上がる	
2-305	1-12	Ⅲ-050	古代	92108.648	-11648.847	Ⅲ-188・Ⅲ-003・003b・003c・007・Ⅲ-180・1809	Ⅲ-050・Ⅲ-188・Ⅲ-003・003b・003c・007・Ⅲ-180・1809	328	197	18	不整形内凹	緩やかに立ち上がる	
2-305	1-12	Ⅲ-051	古代*	92108.365	-11646.969	Ⅲ-003・003b・007	Ⅲ-051・Ⅲ-003・007(Ⅲ-051・Ⅲ-003)	(123)	(80)	33	不明	ほぼ直線に立ち上がる	
2-306	Ⅲ-16	Ⅲ-052	古代*	92092.719	-11666.621	Ⅲ-019	Ⅲ-052 (Ⅲ-019) >Ⅲ-019	279	205	57	不整形内凹	凹凸がある	
2-306	1-8	Ⅲ-053	不明	-	-	Ⅲ-178・Ⅲ-038・Ⅲ-1716	Ⅲ-038・Ⅲ-1716(Ⅲ-038・Ⅲ-1716)	-	-	86	-	階段に立ち上がる	セクション図のみ
2-307	Ⅲ-17	Ⅲ-054	中世*	92092.383	-11671.178	Ⅲ-176(Ⅲ-079)・Ⅲ-053・058・059	Ⅲ-054・Ⅲ-053・058・059(Ⅲ-054・Ⅲ-176(Ⅲ-079))	(93)	(88)	15	不明	緩やかに立ち上がる	
2-307	Ⅲ-17	Ⅲ-055	不明	92092.078	-11672.712	Ⅲ-178・Ⅲ-054・057・060	Ⅲ-054・Ⅲ-055・Ⅲ-057・060(Ⅲ-057・Ⅲ-178)	(152)	(76)	14	(不整形)	凹凸がある	
2-307	Ⅲ-17	Ⅲ-056	縄文	92091.297	-11673.022	Ⅲ-073・074・075	Ⅲ-056・Ⅲ-073・074・075	99	73	28	不整形内凹	ほぼ直線に立ち上がる箇所と緩やかに立ち上がる箇所がある	
2-308	Ⅲ-17	Ⅲ-057	不明	92092.844	-11672.941	Ⅲ-055・060	Ⅲ-055・Ⅲ-057・Ⅲ-060	52	66	19	不整形内凹	字状に立ち上がる	
2-308	Ⅲ-17	Ⅲ-058	中世*	92092.820	-11676.896	Ⅲ-002b・Ⅲ-054・059	Ⅲ-054・Ⅲ-058・Ⅲ-059(Ⅲ-058・Ⅲ-002b)	86	47	24	不整形内凹	ほぼ直線に立ち上がる	
2-308	Ⅲ-17	Ⅲ-059	中世*	92092.323	-11676.611	Ⅲ-002b・Ⅲ-054・058・060・063	Ⅲ-054・058・060・Ⅲ-059・Ⅲ-063(Ⅲ-058・Ⅲ-002b)	135	116	23	不整形内凹	階段に立ち上がる	

図号	調査区	遺構名	時期	位置		重複	新旧関係	規模(m)			平面形	断面形	備考
				X	Y			長軸	短軸	深さ			
2-388	Ae-17	SX-060	不明	92093.133	-11672.403	SX-175・179・SD-002b・019・SX-055・057・058・063・066・067	SX-175・SX-055・057・SX-060・SD-019・SX-039・SX-067/78・179・SD-002b・SX-063・066・067	231	82	26	不整形円形	陥凹があり縁や小に立ち上がる	
2-392	Ae-17	SX-061	不明	92091.695	-11671.883	SX-181・SX-062	SX-061・SX-062・SX-067・SX-181	54	180	14	不整形円形	下字状に立ち上がる	
2-397	Ae-17	SX-062	不明	92091.227	-11672.148	SX-181・SX-061・073	SX-062・SX-061・SX-067・SX-181・SX-073	73	87	11	(不整形円形)	陥凹があり縁や小に立ち上がる	
2-398	Ae-17	SX-063	中世	92092.633	-11670.711	SD-002b・019・SX-089・060	SX-059・SX-063・SD-019・SX-062/70・002b・SX-060	179	184	24	(不整形円形)	陥凹や小に立ち上がる	
2-400	F-8	SX-064	不明	92123.406	-11626.319	-	-	1134	93	35	(不整形)	下字状に立ち上がる	
2-400	E-22・23	SX-065	古代	92133.063	-11699.477	SI-025・034・SX-043・100・SP-1289	SX-041・SP-1289・SX-063/51・025・SX-100/53・067/51・024	710	1183	89	(溝状)	(縁や小に立ち上がる)	
2-399	Ae-17	SX-066	古代	92093.563	-11672.788	SX-175・SD-002b・019・SX-060・067	SX-175・SX-060・SX-067・SX-060/70・002b・019・SX-060	172	64	15	(不整形円形)	下字状に立ち上がる	
2-399	Ae-17	SX-067	古代	92093.509	-11671.795	SD-002b・019・SX-080・066	SX-067・SX-060/63・067・SD-002b・019・SX-060	107	90	23	不整形円形	陥凹がある	
2-397	Ae-17	SX-068	不明	92092.477	-11673.769	SX-178・SX-069・072	SX-060・SX-069・072/63・067/58・178	104	92	37	不整形円形	陥凹がありほぼ直線に立ち上がる	
2-397	Ae-17	SX-069	不明	92092.289	-11674.415	SI-088・072	SX-060・SX-069・SX-072	159	172	36	不整形円形	ほぼ直線に立ち上がる	
2-398	Ae-17	SX-070	不明	92094.576	-11671.519	-	-	63	26	5	不整形	一段高状に入り込む	
2-401	Ae-16	SX-071	不明	92088.219	-11666.760	SD-035・040・9Ca・SI-076・SP-1642・1905・1906・1908	SX-071・SX-076・SP-190/53・071/70・035・040・9Ca・SP-1643・1906・1908	1260	220	12	不明	不明	
2-398	Ae-17	SX-072	不明	92092.180	-11673.850	SX-068・069	SX-072・SX-068・069	59	56	12	不整形円形	縁や小に立ち上がる	
2-399	Ae-17	SX-073	不明	92091.650	-11672.852	SX-056・062・074	SX-073・SX-074・SX-073・SX-056・062	173	65	23	不整形円形	段状に立ち上がる	
2-399	Ae-17	SX-074	不明	92091.641	-11673.310	SX-178・180・181・SX-056・073・075	SX-075・SX-074・SX-073・SX-071/78・179・180・181・SX-056	165	70	20	不整形	陥凹がある	
2-398	Ae-17	SX-075	不明	92091.833	-11673.910	SX-180・181・SX-056・074	SX-075・SX-074・SX-075・SX-180・181・SX-056	109	63	15	不整形円形	陥凹がある	
2-401	Ae-16	SX-076	不明	92091.719	-11667.840	SD-035・040・043a・043b・043c・SX-071・080・095・SP-1642・1643・1645・1648・1905・1906・1908	SD-035・043a・SP-1642/53・070・SD-043b・043c・SX-073・076/77・SD-040・SX-080・095・SP-1643・1645・1648・1905・1906・1908	370	206	37	不明	縁や小に立ち上がる	
2-402	Ae・A・d・15・16	SX-077	古代	92089.908	-11664.660	SX-078	SX-077・SX-078	180	193	107	(不整形)	陥凹があり段状に立ち上がる	
2-402	Ae-15	SX-078	古代	92087.875	-11664.102	SI-205(SX-191)・SX-067	SX-077・SX-078・SX-205(SX-191)	1253	174	79	(不整形円形)	(縁や小に立ち上がる)	
2-403	Ae-16	SX-080	不明	92088.719	-11667.277	SD-010・SX-076・085・SP-1650・1902・1912	SX-080・SP-1650・1902・1912/53・080・080/70・040・SX-076・095	1280	177	67	(不整形円形)	陥凹がある	
2-397	Ae-18	SX-081	不明	92087.664	-11673.938	SD-002	SX-081・SD-002	147	78	14	不整形	溝線状	
2-397	Ae・Ae-17	SX-082	不明	92090.070	-11670.479	SD-039・040・SX-085・087・088・SP-1638・1639	SX-082・SX-085・087/53・082/70・039・040・SX-099・SP-1638・1639	1218	85	20	不整形円形	溝線状	
2-398	Ae・Ae-17	SX-085	不明	92090.719	-11670.903	SX-178(SX-070)・SD-009・SX-082・SP-1638・1639	SX-085・SX-178(SX-070)・SD-070・SX-082・SP-1638・1639/53・085/70・039	190	154	27	不整形円形	縁や小に立ち上がる	
2-397	Ae-17	SX-086	不明	92087.859	-11671.028	SD-002・040・SX-092・094・096・099・SP-0560	SX-086・SX-092・096・099/53・096/70・002・040・SX-094・SP-0560	230	200	26	不整形円形	縁や小に立ち上がる	
2-399	Ae-17	SX-087	不明	92089.586	-11670.863	SD-010・SX-082・088・091・096・098	SX-087・SX-088・087・SX-093/53・087/70・040・SX-096・098	86	76	35	隅丸方形	段状に立ち上がる	
2-397	Ae-17	SX-088	不明	92089.531	-11671.724	SD-040・SX-087・089・090・091	SX-088・SX-087・089・090・091/53・088/70・040	99	93	12	不整形	陥凹がある 溝線状	
2-397	Ae-17	SX-089	不明	92089.422	-11672.490	SX-088・090・091	SX-089・SX-090・SX-090・091	59	42	20	不整形円形	陥凹がある	
2-398	Ae-17	SX-090	不明	92089.586	-11672.341	SD-002・040・SX-088・089・091・SP-0570	SD-002・SX-088・089・SP-0570/53・080/53・091/53・092/50・040	1251	111	30	不整形	陥凹がある	
2-399	Ae・Ae-17	SX-091	不明	92089.242	-11672.630	SD-002・040・SX-087・088・089・090・094・SP-0570	SX-091・SX-087・088・089・090・SP-0570/53・091/50・002・040・SX-094	180	1160	34	(不整形円形)	段状に立ち上がる	
2-397	Ae-17	SX-092	不明	92087.896	-11672.994	SX-086・094・SP-0569	SX-092・SX-086/53・092・SX-094・SP-0569	90	152	19	(隅内形)	縁や小に立ち上がる	
2-403	Ae-15・16	SX-093	古代	92081.492	-11665.476	SI-206・SD-042・SP-1913・1923	SX-093・SX-206/53・SD-042・SP-1913・1923	2080	117	55	(不整形円形)	縁や小に立ち上がる	
2-399	Ae-17	SX-094	不明	92088.109	-11672.667	SD-002・040・SX-086・091・092・SP-0560	SX-094・SP-0569/53・094/70・002・040・SX-086・091・092	1180	130	17	不整形円形	陥凹がある	

図録号	調査区	遺構名	時期	位置		重複	新旧関係	規模(m)			平面形	断面形	備考
				X	Y			長軸	短軸	深さ			
2-003	Aa-16	SX-095	不明	92007.250	-11605.670	SK-190・205(SK-191)・SD-040・041・SX-076・080・SP-1013・1017・1030・1906・1967・1908・1909	SX-095-SK-190・SD-041・SP-1643・1647・1650・1906・1907・1908・1909S3-0057S3-203(SK-191)・SD-040・SX-076・080	(251)	805	27	不整形四角形	緩やかに立ち上がる	
2-308	Aa-17	SX-096	不明	92007.812	-11670.764	SD-040・SX-086・087	SX-096-SX-090S3-0907S0-040・SX-087	245	(120)	29	(不整形)	凹凸があり 垂直に近い形で立ち上がる	
2-307	Aa・Ad-17	SX-097	不明	92090.301	-11608.215	SX-098	SX-097-SX-090	112	86	28	不整形	楕圓状	
2-307	Ad-17	SX-098	不明	92089.695	-11609.918	SD-040・SX-082・087・087	SX-090-SX-097S3-0907SD-040・SX-082・087	115	(120)	19	楕圓状	凹凸があり 緩やかに立ち上がる	
2-307	Ad-17	SX-099	不明	92087.047	-11672.227	SD-002・SX-086	SX-099-SX-090S3-0907S0-002	140	(134)	10	(楕圓形)	楕圓状	
2-800	T・E-22	SX-100	縄文	92133.578	-11699.185	S1-025・034・SX-065	SX-100-S1-025・034・SX-065	(580)	(134)	52	(不整形)	凹凸があり 段状に立ち上がる	
2-001	D-5	SX-101 (S1-027 P1180)	不明	92132.023	-11613.295	S1-027・063	SX-101(S1-027P1180) S1-027・063	(34)	31	34	(小判状)	緩やかに立ち上がる	調査時S1-027 P1180
2-004	S-22	SX-102	古代	92142.750	-11695.230	S1-087(S3-104)	SX-102-S1-087(S3-104)	75	50	30	楕圓形	凹凸があり 緩やかに立ち上がる	
2-005	V-15	SX-103	不明	92128.409	-11664.030	S1-031・056・069	SX-103-S1-031・056・069	235	69	25	楕圓状	段状に立ち上がる	
2-005	T・D-7	SX-106	縄文	92134.367	-11622.730	S1-027・030・SP-1041・1046・1092・1318	SP-1041・1046・1092・1318 SX-106-SX-106/S1-030S3-1007S1-027	289	185	42	不整形	凹凸があり 緩やかに立ち上がる	P11134×(32) ×10cmP112:26 ×2.2×2.1cm P112:35×30×15cm P113:28×20×10cm
2-005	D-4	SX-107	不明	92134.000	-11608.622	-	-	36	15	9	楕圓状	垂直に近い形で立ち上がる	
2-005	T・4・3, D-4	SX-108	縄文	92136.362	-11616.970	S1-063・SP-2008・2415(S1-063P120)・2416(S1-063P121)・2417(S1-063P122)	SX-108/S1-063・SP-2008・2415(S1-063P120)・2416(S1-063P121)・2417(S1-063P122)	612	135	75	不整形四角形	緩やかに立ち上がる	
2-005	R-3	SX-109	古代	92146.555	-11601.758	SK-241	SX-109/SK-241	92	90	32	不明	緩やかに立ち上がる	
2-005	V-13	SX-110	不明	92128.766	-11655.377	SP-2009・2315・2317	SP-2009・2315/SX-110/SP-2317	(114)	89	11	楕圓状	凹凸があり 垂直に近い形で立ち上がる	
2-006	V-5・6 ~112	SX-111 (S1-017・ SK-060)	縄文	92110.797	-11614.677	SD-017・020・SX-028・SP-1148・1451	SD-020・SP-1148/SX-111(S1-017・SK-060) SP-1451S3-111(S1-017・SK-060)7SD-017・SX-028	670	(226)	120	(不整形)	凹凸があり 一段段に立ち上がる	調査時S1-017・SK-060

第Ⅲ章 補遺資料

第1節 内容訂正資料

報告書番号	ア・ブ・エ と	分冊	頁	図表番号	訂正箇所	誤	正
第94集	I	—	207	第30表	ピット(SP・観察表9・Spa-01) 新田間係	Spa-01<SK-301	Spa-01>SK-301
第94集	I	—	271	第34表	No.24 遺物観察表残存率	口縁部残存率6/12	底部残存率6/12
第106集-2	Ⅱ	2分冊	189-190	図2-181	B-2区配置図内の遺構名	SK-24	下図のとおり訂正 SK-04(SK-24)
第106集-2	Ⅱ	2分冊	189-190	図2-181	B-2区配置図内の遺構名	SK-40	下図のとおり訂正 SK-04
第106集-2	Ⅱ	2分冊	189-190	図2-181	B-2区配置図内の遺構名	SK-31	下図のとおり訂正 SK-07
第106集-2	Ⅱ	2分冊	189-190	図2-181	B-2区配置図内の遺構名	SK-27	下図のとおり訂正 SK-03(SK-27)
第106集-2	Ⅱ	2分冊	189-190	図2-181	B-2区配置図内の遺構名	SK-26	下図のとおり訂正 SK-02(SK-26)
第106集-2	Ⅱ	2分冊	189-190	図2-181	B-2区配置図内の遺構名	SK-16	下図のとおり訂正 SK-04(SK-16)
第106集-2	Ⅱ	2分冊	189-190	図2-181	B-2区配置図内の遺構名	SK-03	下図のとおり訂正 SK-03(SK-12)
第106集-2	Ⅱ	2分冊	189-190	図2-181	B-2区配置図内の遺構名	SK-01	下図のとおり訂正 SK-01(SK-10)
第106集-2	Ⅱ	2分冊	189-190	図2-181	B-2区配置図内の遺構名追加		下図のとおり訂正 SK-04(SK-28)
第106集-2	Ⅱ	2分冊	189-190	図2-181	B-2区配置図内の遺構名追加		下図のとおり訂正 SK-75
<p>2. B-2区(正)</p>							
第106集-2	Ⅱ	2分冊	224	図2-214	ピット分列図I遺構名	SK-28	SK-01(SK-28)
第106集-2	Ⅱ	2分冊	223	図2-223	ピット分列図N遺構名	SK-24	SK-04(SK-24)
第106集-2	Ⅱ	2分冊	240	図2-230	ピット分列図P遺構名	SK-03	SK-04(SK-24)
第106集-2	Ⅱ	2分冊	247	図2-227	ピット分列図M遺構名	SK-27	SK-03(SK-27)
第106集-2	Ⅱ	2分冊	254	図2-244	ピット分列図T遺構名	SK-03	SK-03(SK-12)
第106集-2	Ⅱ	2分冊	254	図2-244	ピット分列図T遺構名	SK-04	SK-04
第106集-2	Ⅱ	2分冊	257	図2-247	ピット分列図I遺構名	SK-01	SK-01(SK-15)
第106集-2	Ⅱ	2分冊	271	図2-755	タイトル	R5D-52東棟(E)・55石跡・石製品	R5D-52東棟(E)・55石跡・石製品
第106集-2	Ⅱ	2分冊	829	報告書挿絵	主な遺構	井戸47基	井戸46基
第106集-3	Ⅲ	3分冊	20	写真3-171	タイトル	SK-23a	B4 SK-23a
第106集-3	Ⅲ	3分冊	20	写真3-172	タイトル	SK-23a	B4 SK-23a
第106集-3	Ⅲ	3分冊	20	写真3-173	タイトル	SK-23a	B4 SK-23a
第106集-3	Ⅲ	3分冊	46	表3-4	B-1区SK観察表のSK-67遺構	110	126(110)
第106集-3	Ⅲ	3分冊	47	表3-4	B-1区SK観察表のSK-301新田間係	SK-301>Spa-01	SK-301<Spa-01
第106集-3	Ⅲ	3分冊	51	表3-9	B-1区SP観察表のSP-2122備考	※S1-10	削除
第106集-3	Ⅲ	3分冊	51	表3-9	B-1区SP観察表のSP-2123備考	※S1-10	削除
第106集-3	Ⅲ	3分冊	55	表3-9	B-1区SP観察表のSP-2814備考	※S1-10	削除
第106集-3	Ⅲ	3分冊	57	表3-11	B-2区SK観察表のSK-55別称	130	162
第106集-3	Ⅲ	3分冊	71	表3-23	B-4区S1観察表のS1-25重畳	SD-20	SD-207
第106集-3	Ⅲ	3分冊	71	表3-23	B-4区S1観察表のS1a-02(SX-103)特記事項	調査時:SK-113	調査時:SK-103
第106集-3	Ⅲ	3分冊	74	表3-25	B-4区STP観察表のSTP-01特記事項	調査時:SP-2499・2851	削除
第106集-3	Ⅲ	3分冊	74	表3-25	B-4区STP観察表のSTP-02特記事項	空欄	調査時:SP-2499・2851
第106集-3	Ⅲ	3分冊	74	表3-26	B-4区SE観察表のB4_SE-08特記事項	調査時:SK-110, 中位の第7層は炭化物質	削除
第106集-3	Ⅲ	3分冊	75	表3-27	B-4区SN観察表のSN-13遺構番号	SN-13	B4 SN-13
第106集-3	Ⅲ	3分冊	75	表3-27	B-4区SN観察表のSN-13新田間係	SK-42, SK-13	B4 SK-42, B4 SK-13
第106集-3	Ⅲ	3分冊	108	表3-50	辻地埴SD観察表のSD-78新田間係	SD-78(B-4区)	SD-78(B-2区)
第106集-3	Ⅲ	3分冊	108	表3-50	辻地埴SD観察表のSD-93区名	B-1	B-2
第107集-1	Ⅰ	1分冊	47	図P-1-047	遺構名追加		図1193のとおりSK-10と遺構名を互に入れ(1193～1199はSK-10)
第107集-1	Ⅰ	1分冊	173	図8-1-43	遺物発掘図920-921	宝溝遺差し替えシール	宝溝内再掘削(穴ページ920-921)
第107集-1	Ⅰ	1分冊	351	表1-1	No.0170・備考	訂正シール	外面直削付着, 内外面炭化物付着, 観察面一部剥離
第107集-1	Ⅰ	1分冊	352	表1-1	No.0210・部位	口縁部	口縁部
第107集-1	Ⅰ	1分冊	356	表1-1	No.0330・部位	底部	口縁部

報告書番号	シテラビ 番号	分冊	頁	図表番号	訂正箇所	誤	正
第107集-1	■	1分冊	358	表1-1	No.0400・器種	壺	小壺
第107集-1	■	1分冊	362	表1-1	No.0533・器種	壺	壺
第107集-1	■	1分冊	362	表1-1	No.0533・口縁	23.0	26.0
第107集-1	■	1分冊	363	表1-1	No.0562・底部調整	左回転糸切	右回転糸切
第107集-1	■	1分冊	365	表1-1	No.0651・口縁	15.2	15.0
第107集-1	■	1分冊	366	表1-1	No.0643・口縁部	1.3/12	1.1/12
第107集-1	■	1分冊	371	表1-1	No.0786・部位	口縁～体部	口縁部
第107集-1	■	1分冊	371	表1-1	No.0791・器種	壺	大口壺
第107集-1	■	1分冊	376	表1-1	No.0953・部位	底部	体～底部
第107集-1	■	1分冊	382	表1-2	No.1111・内外面調整	口ロナダゲ、口ロナダゲ	ナダゲ、ナダゲ
第107集-1	■	1分冊	383	表1-2	No.1133・底部調整	左回転糸切	右回転糸切
第107集-1	■	1分冊	387	表1-2	No.1244・器種	壺	壺
第107集-1	■	1分冊	389	表1-2	No.1285・器種	壺	小壺
第107集-1	■	1分冊	391	表1-2	No.1324・器種	壺	小壺
第107集-1	■	1分冊	392	表1-2	No.1348・器種	壺	小壺
第107集-1	■	1分冊	393	表1-2	No.1381・層位	土層P-16・19・116・117・X、覆土P-5・6・X、B4、SK-110(SV-106)	覆土上層P-16・19、覆土P-X、SD-111上層P-116・117、覆土上層P-X、覆土P-5・6、SD-79
第107集-1	■	1分冊	393	表1-2	No.1385・内外面調整	口ロナダゲ、口ロナダゲ	ナダゲ、ナダゲ
第107集-1	■	1分冊	402	表1-2	No.1614・内外面調整	口ロナダゲ、口ロナダゲ	ナダゲ、ナダゲ
第107集-1	■	1分冊	412	表1-2	No.1884・口縁	9.6	19.6
第107集-1	■	1分冊	417	表1-2	No.2015・器種	壺	陶甕
第107集-1	■	1分冊	423	表1-2	No.2283・内外面調整	口ロナダゲ	ナダゲ
第107集-1	■	1分冊	435	表1-2	No.2499・器種	壺	小壺
第107集-1	■	1分冊	438	表1-2	No.2579・底部調整	網代圧痕・ヘラ	本量痕(縦目状圧痕)
第107集-1	■	1分冊	440	表1-2	No.2623・器種	小壺	羽釜
第107集-1	■	1分冊	441	表1-2	No.2663・部位	体部	口縁部
第107集-1	■	1分冊	441	表1-2	No.2668・部位	体部	口縁部
第107集-1	■	1分冊	446	表1-2	No.2807・底部調整	網代圧痕	静止糸切
第107集-1	■	1分冊	450	表1-2	No.2907・内外面調整	ヘラ、ヘラ	口ロナダゲ、口ロナダゲ
第107集-1	■	1分冊	468	表1-3	No. MA424・層位	SD-201中層-	SD-201、覆土上層P-X、中層-
第107集-1	■	1分冊	468	表1-3	No. MA424・整理番号追加	05-2096-14	05-2096-14
第107集-1	■	1分冊	496	表5	CLF-1-8・初狩年	訂正シール	960
第107集-1	■	1分冊	499	報告書挿録	主な遺構	井戸47基	井戸46基
第107集-1	■	1分冊	499	報告書挿録	主な遺構	堀穴住居跡 34軒	堀穴住居跡 35軒
第107集-1	■	1分冊	499	報告書挿録	主な遺構	土坑 272基	土坑 271基
第107集-1	■	1分冊	499	報告書挿録	主な遺構	溝跡 147基	溝跡 148基
第107集-1	■	1分冊	499	報告書挿録	主な遺構	ピット 622基	ピット 621基
第107集-2	■	2分冊	141	図2-117	SI-S2P111注記・第1層	強化錠(φ1～2mm)	強化錠(φ1～2mm)
第107集-2	■	2分冊	204	図2-168	遺構名	SI-036カマド	SI-041カマド
第107集-2	■	2分冊	205	図2-169	遺構名	SI-036カマド	SI-041カマド
第107集-2	■	2分冊	214	図2-178	遺構名	SI-042	SI-036 + SI-042(下面参照)

第107集-1 図W-1-43	
SI-036+042 (正)	<p>※SI-036とSI-042は同一遺構の可能性大</p>
第107集-2 図2-211	<p>図2-211 SI-83注記・第29層</p> <p>多量 20mm 煎量、</p>
第107集-2 図2-208	<p>図2-208 SP-1905注記・第7層</p> <p>1φ40mm大) 煎入</p>
第107集-2 図2-726	<p>写真2-84 タイトル</p> <p>SI-049P112セクション(S→)</p>
第107集-2 図2-736	<p>写真2-325 タイトル</p> <p>作業風景(W→)</p>
第107集-2 図2-794	<p>表8 遺跡(SD)縦断表</p> <p>縦断表の一部が未掲載</p>
第107集-2 図2-795	<p>報告書挿録 主な遺構</p> <p>堀穴住居跡 86軒</p>
第107集-3 図3-5分冊	<p>図P-2-017 遺構名</p> <p>SI-035</p>
第107集-3 図3-5分冊	<p>図P-2-049 遺物発源図0793</p> <p>実測図表1替止シール</p>

報告書番号	シラビモ	分冊	頁	図表番号	訂正箇所	誤	正
第107集-3	Ⅲ	3分冊	89	図P-2-069	遺物実測図 1168	矢線図差し替之シール	矢線図内掲載(下図)
第107集-3	Ⅲ	3分冊	132	表1-1	No. 0246・遺構名	S1-035	S1-035 = Ⅲ S104
第107集-3	Ⅲ	3分冊	137	表1-1	No. 0235・器種	鏝	小鏝
第107集-3	Ⅲ	3分冊	144	表1-1	No. 0476・構成	中央	中央半角
第107集-3	Ⅲ	3分冊	144	表1-1	No. 0485・口径	—	14.6
第107集-3	Ⅲ	3分冊	161	表1-1	No. 0845・出土地区	F-13区	V-17区
第107集-3	Ⅲ	3分冊	166	表1-1	No. 0907・出土地区	F-8区	F-13区
第107集-3	Ⅲ	3分冊	166	表1-1	No. 0970・出土地区	F-8区	F-13区
第107集-3	Ⅲ	3分冊	169	表1-1	No. 1014・器種	鏝	鏝
第107集-3	Ⅲ	3分冊	173	表1-1	No. 1114・器種	鏝	鏝
第107集-3	Ⅲ	3分冊	174	表1-1	No. 1138・口縁部	2.0/12	2.2/12
第107集-3	Ⅲ	3分冊	174	表1-1	No. 1138・底部調整	字鏝	回転糸切
第108集-1	Ⅳ	1分冊	193	報告書挿録	土佐遺構	壱穴住居跡 86 射	壱穴住居跡 86 射
第108集-1	Ⅳ	1分冊	193	報告書挿録	土佐遺構	壱穴住居跡 86 射	壱穴住居跡 85 射
第108集-2	Ⅳ	2分冊	137	報告書挿録	土佐遺構	壱穴住居跡 86 射	壱穴住居跡 85 射
第108集-2	Ⅳ	2分冊	137	報告書挿録	土佐遺構	壱穴住居跡 86 射	壱穴住居跡 85 射
第112集-1	V	1分冊	9		左段上 2 行目	壱穴住居跡 17 射	壱穴住居跡 19 射
第112集-1	V	1分冊	9		左段上 2 行目	土坑 66 基	土坑 55 基
第112集-1	V	1分冊	9		左段上 2 行目	溝跡 5 条	溝跡 4 条
第112集-1	V	1分冊	9		左段上 3 行目	ピット 142 基	ピット 139 基
第112集-1	V	1分冊	110		左段上 10 行目	142 基	139 基
第112集-1	V	1分冊	432	図 1-369	SX-05 注記・第 3 節	(厚さ 0.5 cm 長さ 15cm)	(厚さ 0.5 cm 長さ 15cm)
第112集-1	V	1分冊	512		右段下から 4 行目	顕化可能な出土遺物はない	削除
第112集-1	V	1分冊	513		左段下から 8・9 行目	図示できる出土遺物の出土は無い	削除
第112集-1	V	1分冊	515	図 1-442	SN-001 メッシュ配設図	表の数字で 13 が 2 つある	下図のとおり訂正
第112集-1	V	1分冊	520	報告書挿録	遺構名補綴	15, 052	15, 057
第112集-1	V	1分冊	529	報告書挿録	土佐遺構	壱穴住居跡 68 射	壱穴住居跡 69 射
第112集-1	V	1分冊	529	報告書挿録	土佐遺構	溝跡 17 条	溝跡 18 条
第112集-1	V	1分冊	529	報告書挿録	土佐遺構	その他の遺構 32 基	その他の遺構 34 基
第112集-2	V	2分冊	144	表 2-24	タイトル	G 区 SX 欄表	G 区 STP 欄表
第112集-2	V	2分冊	156	表 2-44	SK-18・図版番号	1-64	1-63
第112集-2	V	2分冊	156	表 2-44	SK-19・図版番号	1-64	1-63
第112集-2	V	2分冊	159	表 2-44	遺構外・番号 151 図版番号	1-93	1-92
第112集-2	V	2分冊	160	表 2-45	S1-22・No.	85	12
第112集-2	V	2分冊	161	表 2-45	SK-75・No.	124	193
第112集-2	V	2分冊	162	表 2-45	SP-149・No.	44	272
第112集-2	V	2分冊	166	表 2-45	SX-07・No.	116	497
第112集-2	V	2分冊	168	表 2-45	遺構外・No.	65	558
第112集-2	V	2分冊	180	表 2-46	S1-43・No.	168	52
第112集-2	V	2分冊	181	表 2-46	S1-43・No.	180	59
第112集-2	V	2分冊	182	表 2-46	S1-012・No. 140 図版番号	1-373	1-460
第112集-2	V	2分冊	182	表 2-46	S1-012・No. 144 図版番号	1-372	1-461
第112集-2	V	2分冊	184	表 2-46	ST-09・No.	206	43
第112集-2	V	2分冊	192	表 2-46	H 区遺構外・図版番号と No.	1-463, 184	1-390, 90
第112集-2	V	2分冊	195	表 2-47	遺構外・番号 27, 28 図版番号	1-96	1-95
第112集-2	V	2分冊	195	表 2-47	遺構外・番号 43, 44 図版番号	1-97	1-96
第112集-2	V	2分冊	195	表 2-47	遺構外・番号 57, 58 図版番号	1-98	1-97
第112集-2	V	2分冊	195	表 2-47	遺構外・番号 65, 66 図版番号	1-99	1-98
第112集-2	V	2分冊	199	表 2-48	I 区遺構外・番号	185	184
第112集-2	V	2分冊	200	表 2-49	SK-10・番号 385 図版番号	1-252	1-253
第112集-2	V	2分冊	205	表 2-51	A 区遺構外・番号	102	22

報告書番号	シラビモ	分冊	頁	図表番号	訂正箇所	誤	正
第112集-2	V	2分冊	205	表2-51	B区遺構外・番号680誤版番号	1-277	1-278
第112集-3	V	3分冊	29	図3-24	図番号	新城平岡(2)遺跡 SK-5	新城平岡(2)遺跡 SK-6
第112集-3	V	3分冊	30	図3-25	図番号	新城平岡(2)遺跡 SK-6	新城平岡(2)遺跡 SK-7
第112集-3	V	3分冊	31~32	図3-26・27	方位	下図	下図のとおり訂正
第112集-3	V	3分冊	110	表3-12	番号6・順位	SI-01内SK-01第1層	SI-01内SK-01第1層
第112集-3	V	3分冊	110	表3-12	番号7・順位	第1層P7・8	第1層P7・7・8
第112集-3	V	3分冊	307	報告書抄録	土佐遺構	土坑20基	土坑21基
第113集-1	VI	1分冊	5		右路上9行目～24行目	一部タストピースを…	削除
第113集-1	VI	1分冊	132	図1-117	注記タイトル	STPa-06	STPa-06
第113集-1	VI	1分冊	229		右路上6行目	出土した跡は…	出土した跡は…
第113集-1	VI	1分冊	233		左路上3行目	調査区内から201基	調査区内から201基
第113集-1	VI	1分冊	345	報告書抄録	土佐遺構	堀穴住居跡24射	堀穴住居跡22射
第113集-1	VI	1分冊	345	報告書抄録	土佐遺構	土坑172基	土坑173基
第113集-1	VI	1分冊	345	報告書抄録	土佐遺構	ピット909基	ピット941基
第113集-1	VI	1分冊	345	報告書抄録	土佐遺構	環跡46条	環跡45条
第113集-2	VI	2分冊	71	図2-62	SI-30P130注記・第3層	(φ100大)	(φ100mm大)
第113集-2	VI	2分冊	85	図2-74	SI-54注記・第10層	(φ1～4m)	(φ1～4m)
第113集-2	VI	2分冊	86	図2-75	SI-54P12注記・第6層	パミスブロック(φ10～30m)	パミスブロック(φ10～30mm)
第113集-2	VI	2分冊	90	図2-78	方位	下図	下図のとおり訂正
第113集-2	VI	2分冊	103		右路上2行目	調査時に292基の…	調査時に291基の…
第113集-2	VI	2分冊	103		右路上3行目	除外した289基を…	除外した278基を…
第113集-2	VI	2分冊	108	図2-93	SK-113注記・第4層	(φ1～5mm)	(φ1～5mm)
第113集-2	VI	2分冊	122		SK-225注記・第6層	(φ10m)	(φ10m)
第113集-2	VI	2分冊	199		左路上2行目	地区内から1521基…	地区内から1520基…
第113集-2	VI	2分冊	243	図2-190	Sh-14注記・第2層	(φ13m)	(φ13m)
第113集-2	VI	2分冊	249	図2-205	Sh-13注記・第4層	(φ1～5mm)	(φ1～5mm)
第113集-2	VI	2分冊	287		左路上2行目	調査区内から90条…	調査区内から80条…
第113集-2	VI	2分冊	290		SD-105注記・第2層	炭化粒(φ1～5mm)	炭化粒(φ1～5mm)
第113集-2	VI	2分冊	309	図2-300	SD-27注記・第2層	(φ30～40m)	(φ30～40mm)
第113集-2	VI	2分冊	324	図2-275	SD-72注記・第2層	炭化粒(φ2～4mm)	炭化粒(φ2～4mm)
第113集-2	VI	2分冊	431	報告書抄録	土佐遺構	堀穴住居跡34射	堀穴住居跡30射
第113集-2	VI	2分冊	431	報告書抄録	土佐遺構	土坑279基	土坑278基
第113集-2	VI	2分冊	431	報告書抄録	土佐遺構	ピット1521基	ピット1520基
第113集-2	VI	2分冊	431	報告書抄録	土佐遺構	環跡82条	環跡80条
第113集-3	VI	3分冊	134	図3-114	P16注記・第3層	パミス粒(φ1～9m中量)	パミス粒(φ1～9mm)中量
第113集-3	VI	3分冊	170	図3-145	SK-111注記・第8層	焼土粒(φ1～2m)	焼土粒(φ1～2mm)
第113集-3	VI	3分冊	194	図3-166	SK-111注記・第8層	焼土粒(φ1～2m)	焼土粒(φ1～2mm)
第113集-3	VI	3分冊	291	図3-257	SK-601注記・第7層	ロ…土粒(φ1～9mm)多量	ロ…土粒(φ1～9mm)多量
第113集-3	VI	3分冊	295	報告書抄録	土佐遺構	堀穴住居跡37射	堀穴住居跡36射
第113集-4	VI	4分冊	251	表4-114	番号1071・順位	欄上KP-24	欄上P-24
第113集-4	VI	4分冊	256	表4-114	番号E156・順位	カマドKP-5・9～22	カマドP-5・カマド3層KP-9～21・カマド6層KP-22
第113集-4	VI	4分冊	277	表4-114	番号G004・順位	…15層P7,8,3	…15層P7,8,3
第113集-4	VI	4分冊	375	報告書抄録	土佐遺構	堀穴住居跡95射	堀穴住居跡88射
第113集-4	VI	4分冊	375	報告書抄録	土佐遺構	ピット2882基	ピット2883基
第113集-4	VI	4分冊	375	報告書抄録	土佐遺構	環跡146条	環跡143条

第 107 集 -2 P. 794 表 8 新田 (2) 追跡溝跡 (SD) 観察表追加

試掘番号	遺構名	調査区	位置		範囲 (cm)		層位	断面材料	機能	前後関係 (溝のみ)	備考
			X	Y	延長	幅					
2-514- 529-542- 574	SD-019	F・Z・9	92115.629	-16326.136	5540	17	9	埋跡石	SD-007・011・012・013	SD-011・012・013-SD-016-SD-017	
2-524- 530-540- 545-552- 559-560- 568-575- 589-592	SD-019	F・F・R・S・M・R・F・L・ S・Y・Z・T・Z・F・Z・Z・ Aa・9・Aa・7a・Aa・8a・9・9・ Aa・12・10・Aa・13・Aa・14・ 15・16・17	92094.889 ~92121.639	-16174.008 -16090.631	18,428	80	87	埋跡石 土	SD-002・002b・003・ 004・010・011・012・ 013・014・020・023・ 024・029	SD-010・011・012・013・ 014・022・023-SD-019・ SD-007・020・022-SD-019 SD-002・002b・003	一部調査区03・05・ 溝跡(1)埋跡石-SD030 以上確認。
2-529- 530-542- 545-547- 549-554- 575-576- 582	SD-020	F・S・F・Z・Z・F・S・Z・ Aa・6・T・Aa・8a・9・9・9・ 11・12・10・10	92106.930 ~92113.250	-16089.472 -16004.121	14,949	154	162	F・Z・Z	SD-004・010・012・014・ 015・019・025・027・ 028・029・034・036	SD-011-SD-040-SD-010 SD-014・015・019・ 025・028・034・036-SD- 007-SD-017・028	SD-001, 溝跡(1)埋跡 石-SD030-12上確認。
2-530- 543-550- 575	SD-023	F・S・Z・Aa・10	92105.711 ~92106.164	-16032.740 -16036.230	14,945	33	14	埋跡石 土	SD-019・024	SD-023-SD-019・024	
2-534- 539-539	SD-024	F・S・Z・Aa・10	92105.773 ~92104.250	-16033.236 -16036.900	8721	42	14	埋跡石 土	SD-019, 023・026	SD-024-SD-019・023・026	
2-538- 543-545- 546-572- 575	SD-023	F・S・Z・Aa・T・Aa・8	92098.220 ~92106.977	-16033.480 -16038.423	14,979	79	65	F・Z・Z 土	SD-011・012・014・013・ 019・030-SD-017-SD-010・ 014	SD-011-SD-012-SD-013- SD-019・030-SD-017-SD-010・ 014	
2-544- 539-539- 543	SD-026	Z・9	92105.670 ~92106.711	-16034.240 -16033.910	108	56	10	埋跡石 土	SD-007・024	SD-026-SD-007・024	
2-543-547 549	SD-027	F・S・6	92106.734 ~92106.094	-16033.944 -16033.650	2475	45	13	埋跡石 土	SD-020・028	SD-027-SD-020-SD-027 SD-020	
2-545-547 549	SD-028	F・S・6	92107.184 ~92106.900	-16034.160 -16034.400	1941	79	82	埋跡石 土	SD-020・027	SD-028-SD-027-SD-028 SD-020	
2-539- 542-543- 575	SD-019	F・Aa・8a・9	92105.670 ~92098.430	-16033.261 -16031.281	2713	43	38	埋跡石 土	SD-019, 020・034	SD-019-SD-019-SD-019・ 020	
2-539- 543-543- 545-547	SD-031	Aa・8a・T	92099.623 ~92101.523	-16024.021 -16026.162	1327	36	14	埋跡石 土	SD-014	SD-030-SD-014	
2-539- 543-545- 547	SD-031	Aa・8a・T	92106.293 ~92099.500	-16024.704 -16022.020	80	21	8	埋跡石 土	SD-032	SD-031-SD-032	
2-539- 543-545- 547	SD-032	Aa・6・T	92099.977 ~92106.219	-16023.282 -16019.861	812	29	29	埋跡石 土	SD-031・033	SD-011-SD-032-SD-031	埋跡石埋跡石
2-545-547 549	SD-033	Aa・6・T	92110.809 ~92098.339	-16026.852 -16026.123	192	33	10	埋跡石 土	SD-032	SD-033-SD-032	
2-539- 542-573	SD-034	Aa・T・8a・Aa・9	92099.664 ~92103.898	-16023.611 -16023.142	4843	74	37	埋跡石 土	SD-010・012・014・020・ 023・029	SD-012・023-SD-034- 029・020-SD-034-SD-010・ 014	
2-539- 555-556- 560-562	SD-035	Aa・12・13・14・Aa・Aa・ 15・16	92094.252 ~92097.359	-16066.641 -16066.802	12,030	79	165	埋跡石 土	SD-027・040・041・042・ 043a・043b	SD-041-SD-027-SD-027・ 043a・043b・043c-SD-040・ 042・043b	
2-523-567 569	SD-036	S・F・6	92143.113 ~92136.521	-16017.950 -16018.730	8949	97	24	埋跡石 土	-	-	
2-545-547 549	SD-036	F・Z・Z・3	92114.909 ~92106.250	-16050.260 -16050.780	1620	183	82	埋跡石 土	SD-020	SD-036-SD-020	
2-534- 535-536	SD-007	Aa・14・15	92098.439 ~92080.813	-16060.440 -16039.143	4993	137	64	埋跡石 土	SD-035	SD-027-SD-021	調査時01-021埋跡 石
2-522- 533-534- 539-544- 569	SD-028	R・S・S・T・A・F・6・F・8・ 9・9・10・A・F・11	92114.123 ~92142.326	-16045.230 -11306.600	53,647	34	28	埋跡石 土	-	-	
2-531-537 539	SD-039	Aa・16・Aa・8a・17	92094.620 ~92086.859	-16060.900 -16076.720	311	24	12	埋跡石 土	SD-042	SD-042-SD-042	
2-551-552 554	SD-040	Aa・16・17	92096.945 ~92096.419	-16073.490 -16068.723	14,119	37	17	埋跡石 土	SD-002・025・042・044a	SD-040-SD-002・025・ 042・044a	
2-551-552 557-558	SD-041	Aa・15・16	92096.123 ~92098.563	-16065.253 -16064.360	5803	13	7	埋跡石 土	SD-035	SD-041-SD-035	
2-551- 557-558	SD-042	Aa・Aa・16	92097.119 ~92088.908	-16064.970 -16066.321	8729	58	58	埋跡石 土	SD-035・040・043a・043b	SD-042-SD-035・043a-SD- 042-SD-035・040	
2-551- 557-558	SD-043a	Aa・Aa・16	92097.969 ~92113.829	-16060.010 -16051.293	1783	185	80	埋跡石 土	(埋跡石)SD-040・042・ 043a・043b	SD-042-SD-043a-043b・ 043c-SD-042-SD-043	
2-559	SD-043b	Aa・Aa・16・Aa・16	92094.914 ~92106.925	-16061.925 -	-	-	22	埋跡石 土	SD-043a・043b	SD-043b-SD-043a-SD-043a SD-043b	埋跡石埋跡石
2-559- 561	SD-043c	Aa・16	92096.671 ~92095.686	-16060.223 -16066.460	9433	1089	84	埋跡石 土	SD-035・042・043a・043b	SD-043c-SD-043a・043b・ 043c・043b	
2-539-544 557-558	SD-044	R・T	92113.291 ~92113.829	-16073.063 -16071.293	1891	23	16	埋跡石 土	-	-	
2-529- 530-570- 573	SD-045 SD-046	F・15	92113.323 ~92126.522	-16064.600 -16061.096	427	43	75	埋跡石 土	-	-	調査時01-021埋跡 石

第一
補遺資料
資料訂正
資料

第2節 追加資料

平成22年度に青森県埋蔵文化財調査センターから新田(1)遺跡(青森県埋蔵文化財調査報告書第472集、2009年刊行)と新田(2)遺跡(青森県埋蔵文化財調査報告書第471集、2009年刊行)の資料が譲与された。譲与後、当委員会では報告書掲載外資料以外も全て再点検し、古代以降の資料で図化可能な資料について本項目に掲載することとした。また、第1分冊の試掘・確認調査編で触れたが、新城平岡(4)遺跡の確認調査資料について既報告の新城平岡(4)遺跡報告書(青森県埋蔵文化財調査報告書第112集第1分冊、2012年刊行)中の1区で遺構図の情報を掲載したが、出土資料について確認調査扱いで整理作業が分離されていた。そのため、選別された遺物は本報告とは別系列の作業で整理され、報告時は選別漏れの図化不可な資料のみしか残っていない状態で、遺物資料が非掲載となっていた。そこで本節中で図化可能な資料について掲載することとした。

個別の資料について詳述しないが、ここでは、追加資料の各遺跡の概観といくつか特徴的な資料について取り上げることとする。また、他遺跡の調査成果も含む見直しの必要性のある内容についても指摘することとした。

県調査新田(1)遺跡(図3-33~40)

土師器・須恵器・撤土器・かわらけ・製塩土器等の土器144点、土製品6点、鉄製品9点、古銭5点を図示した。土器については破片資料主体であるが、食膳具についてはN1-044・059・064・085。その他、墨書や刻書が認められる資料がある。煮炊具については短頸気味の資料が多く、N1-107のように直胴の資料も含まれる。甔はN1-109に図示した多孔の資料が遺構外から出土している。その他、N1-108のように広口壺状の器形の資料、N1-119に図示した製塩土器などが含まれる。

土製品のうちN1-149・150は、近世の泥人形でN1-149は頭部、150は体部以下の残存である。金属製品については棒や煙管などが出土している。

古銭は、明治十年の半銭青銅貨(N1-160)や大正九年の桐一銭青銅貨(N1-161)など古代以降の資料が含まれるが、Z区S1-01(第1号堅穴住居跡)の第6層N1-162が二枚重なっ

た状態で、表面が確認できる資料は北宋銭の至道元寶(初铸995年)、覆土からN1-163に図示した元豊通寶(1078年)が出土している。S1-01は縄文時代の堅穴住居として精査されており、第1~6層中には土師器等の遺物が出土しているという記述が県教委の報告書中で報告されており、本資料も縄文後期以降の埋没過程・再掘削等の影響による混入が想定される資料と認定できる。新田(1)遺跡内では本資料と同一の古銭が出土しており、B-2区SN-02などの検出状況を踏まえて古代よりは平泉期以降の流入の可能性が高いものとする。青森県教育委員会が刊行した野辺地町向田(35)遺跡(青森県埋蔵文化財調査報告書第373集)では平安時代の堅穴住居跡の床面上12cmの地点から本遺跡の資料と同様の至道元寶と「□□元□」の2枚の古銭が出土したと報告している(青森県教育委員会2004)。

報告書中では、第2分冊中第6章第7節中で平安時代の堅穴住居跡に伴った資料としての考察も行われており、遺跡全体の考察も11世紀前半までの古代の資料のみで中世以降の資料が伴わない古代の集落跡として考察されている。

しかしながら、遺構外出土の図208-26(第1分冊P.280)は12世紀後半の瀬美産と推定される片口鉢であるという羽柴直人氏の指摘がある(羽柴2011)。羽柴氏の指摘した資料以外に、筆者も内容を確認したところ、第36号住居跡の図106-1(第1分冊P.169)に掲載されていた須恵器の甕とされた資料(図3-32)について、器壁の厚さと器面調整の状況が須恵器の甕の範疇として判断するには問題のある資料と判断し、古代以外の資料である可能性を考えた。事実関係を確認するため、野辺地町の譲与された資料を確認したところ、中世陶器の可能性が高い資料である。第36号住居跡は丘陵頂部の溝状の掘削痕が一部だけ検出されており、所謂防御性集落の上北型の首長層居住域として想定されている(三浦2006)。近隣の蟹田(11)遺跡(野辺地町教育委員会2003)か



図3-32 [参考] 県埋文向田(35)遺跡第36号住居跡出土陶器(青森県教育委員会2004第1分冊図106より転載 S=1/3)

らは「かわらけ様土器」が出土した円形周溝を検出しているなど溝状の遺構が必ずしも古代だけで帰結しない可能性が高い。場合によっては向田(35)遺跡の第36号住居跡についても同様の遺構である可能性があり、遺跡そのものの解釈について11世紀前半まで全てが帰結する話とするにはいささか無理がある。野辺地町周辺では現時点で明確なかわらけの出土はないものの東海地方産の陶器や「かわらけ様土器」、時期が下る可能性の高い円形周溝が伴っており、着眼点を意識することにより今後類例が増加する可能性がある(なお、この陶器は第V章中で再述する)。

本遺跡群の成果や窪田大館遺跡の成果(櫻井・菊池編1987)などで古代の集落に平泉期〜鎌倉時代にかけての資料が重複する事例があり、古代の拠点的な地点を平泉期に利用する可能性は十分想定可能である。向田(35)遺跡の古銭は第3号住居跡であるため、直接の検証は現時点では難しいが、古代までの資料群のみという前提での出土条件の状況と平泉期以降の資料群が含まれる中での床面より上位での出土である資料と解釈する条件では、状況が全く異なる。時期の下った資料群が含まれる状況下では例えば遺構内出土資料だとしても他の様々な要因を踏まえないければ誤信を生む要因が高く注意が必要である。

市調査新田(1)遺跡(図3-4-1・4-2)

第2分冊の鉄関連遺物編の掲載遺物から漏れた55点について図示した。A・C区の資料は主に近世以降の資料で、水田の耕作土面の下部相当から出土した資料で溝跡に相当する位置から出土した資料も含まれる。N1-181に図示した資料は、S1-06の上層から出土した資料で環状の形状が確認でき、馬具などの要素も考えられるが、詳細は不明である。

県調査新田(2)遺跡(図3-4-3~50)

91点の土器、土製品3点、鉄製品38点を図示した。土器については古代の資料以外に中世の青磁碗(N2-052)と近世以降の白磁皿(N2-053)も図示した。

古代の土師器の傾向は新田(1)遺跡とほぼ同様であるが、N2-054・070~72・081の用に食膳具の底部部分を円盤状に切り、それを焼成したくないはN2-071・072のように内面側に一部器面が残存している状況があることから切り離しの失敗した資料を接着した部分が再剥離した可能性のある円盤状の資料が多く出土している。食膳具の打欠した転用資料は本資料群でも一定量存在していることから、後者の要因が高いものと考えられる。

鉄製品は、破片資料で詳細不明な資料が多く、土製品についてもS1-13から出土した円盤状土製品(N2-130)以外は破片資料である。

市調査新田(2)遺跡(図3-5-0下段)

鉄製品と土製品の2点のみ図示した。N2-133は、SD-019覆土出土の鉄製品で筒状の形状である。N2-134はS1-055第3層から出土した土製品で、立体的に楕円状の花の粘土が貼り付けられ焼成されている。S1-055は中世以降の堅穴の可能性が高く、本資料も該期以降の所産である。

新城平岡(4)遺跡(図3-5-1・5-2)

11点の土器、2点の土製品、9点の鉄製品を図示した。このうち土器と土製品については確認調査で出土した資料が中心でI区S1-017として遺構図を報告した資料の出土資料である。出土資料は五所川原産の可能性が高い須置器甕体部資料(S4-001)、黒色土器椀底部資料(S4-002)、土師器椀口縁〜体部資料(S4-003)、S4-004・005が非ロクロ甕、S4-006がロクロ小甕、S4-007が非ロクロ小甕である。また、S4-009はロクロのタタキ甕で体部下半にかけての資料は隣接するS1-018から出土しており(S4-012)底部側の部分は丸みを帯びた湾曲を呈している。しかし丸底であったかどうかについては不明であり、内面も当て具痕は確認できず、体部上半の調整も縦方向の筒による調整が加えられている。既報告のG区S1-43から同様のロクロのタタキ甕が出土しており(第112集-1 図1-335-58)、底面は平底である。

土製品のうちS4-008はS1-017の床面から出土した土玉で12mm程度の径の平らな円柱状である。遺構外出土の土管であるS4-013は破片資料の図上復元資料で、内径は28cmである。

鉄製品のうちS4-015はA区古代の堅穴建物跡であるS1-012から出土した鉄製品で馬具の尻繫である可能性が高い。出土位置が覆土と上層であり、厳密に本遺構に帰属したとは断言できない。

高間(1)遺跡(図3-5-3)

鉄製品のみ7点図示した。T1-001の蹄鉄とT1-005に図示した鋸については時期的に下る資料であると判断できるが、それ以外の遺構出土の資料について古代に帰属する可能性が高いものが多い。しかし、形状が断片的であるため、詳細は不明である。

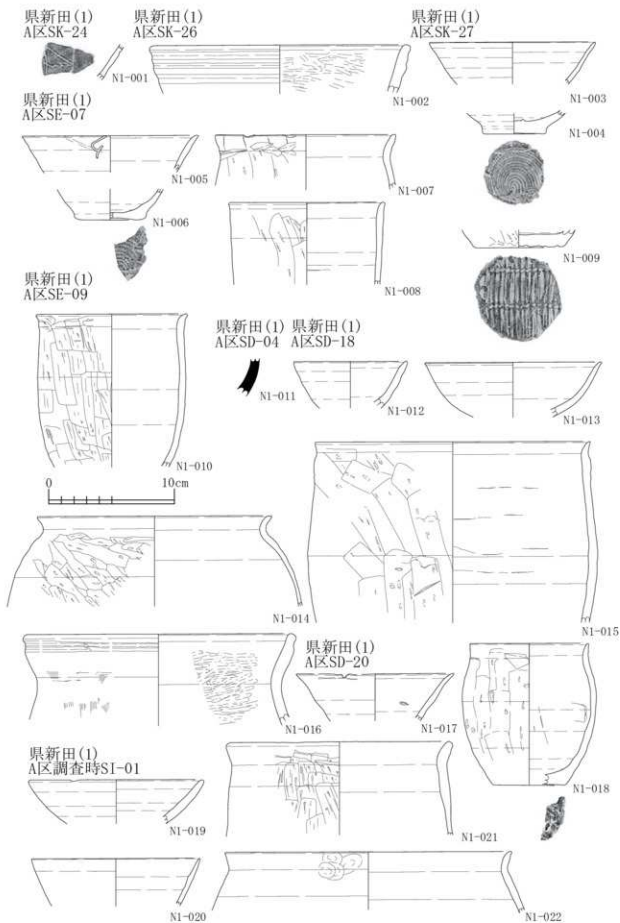


図 3-33 県埋文調査新田(1)遺跡追加資料-1

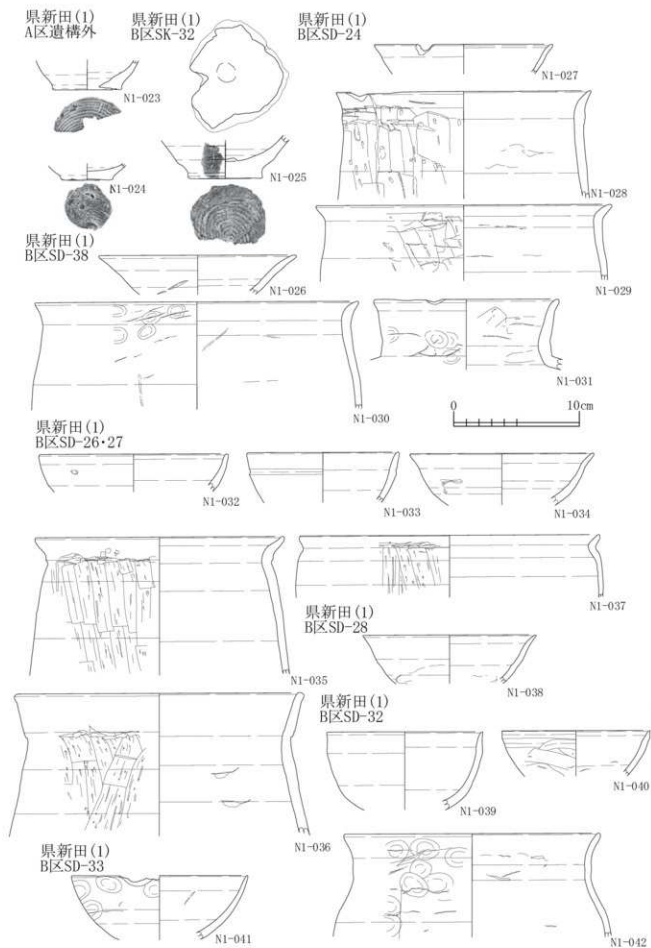
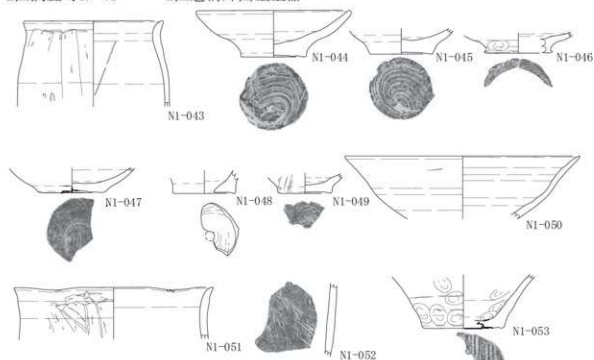


図 3-34 埋埋文調査新田(1)遺跡追加資料-2

県新田(1)
B区調査時SN-08

県新田(1)
B区遺構外出土土器



県新田(1)
C区P21(Pit21)

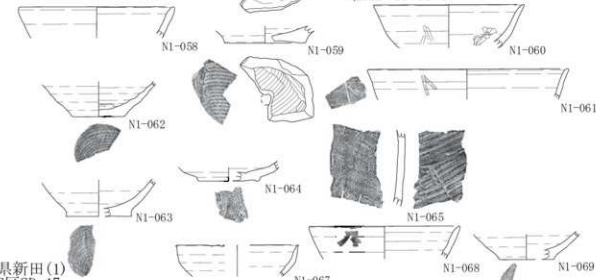
県新田(1)
C区SD-41

県新田(1)
C区SD-42



県新田(1)
C区SD-46

県新田(1)
C区SD-46・56・57



県新田(1)
C区SD-47

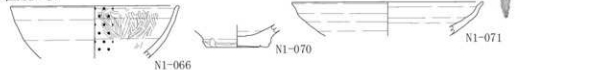


図 3-35 県埋文調査新田(1)遺跡追加資料-3

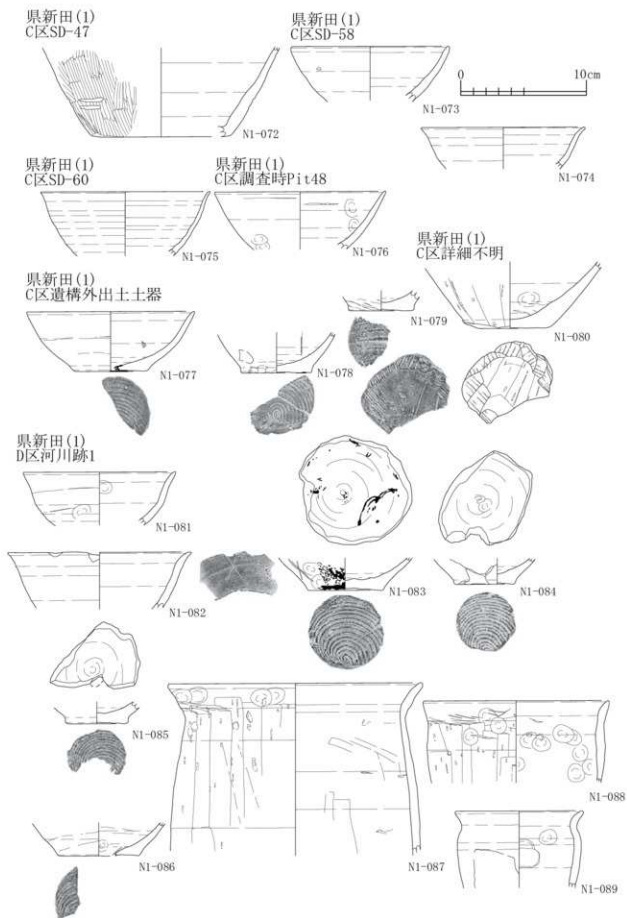


図 3-36 県埋文調査新田(1)遺跡追加資料-4

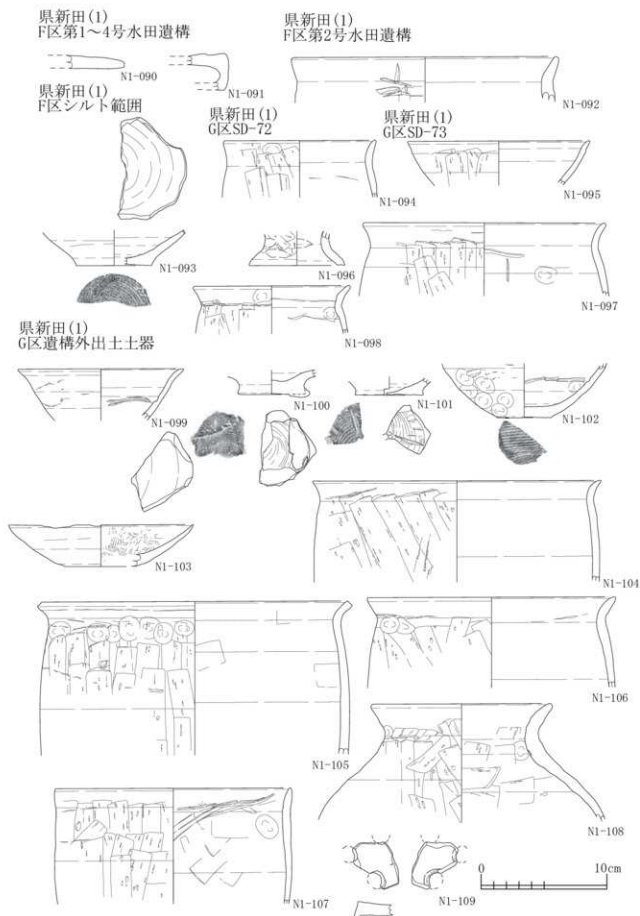
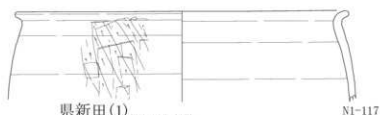
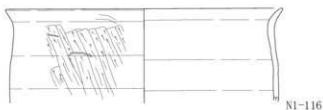
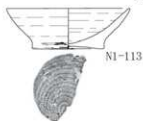
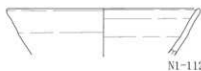


図 3-37 県埋文調査新田(1)遺跡追加資料-5

県新田(1)
H区SD-79



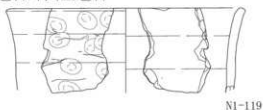
県新田(1)
H区河川跡1



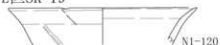
県新田(1)
H区遺物集中範囲



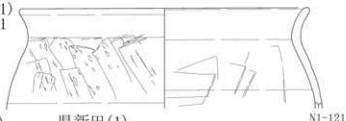
県新田(1)
H区遺物外出土遺物



県新田(1)
Z区SK-19



県新田(1)
Z区SE-01



県新田(1)
Z区SE-02



県新田(1)
Z区SE-04



県新田(1)
Z区SE-06



図 3-38 県埋文調査新田(1) 遺跡追加資料-6

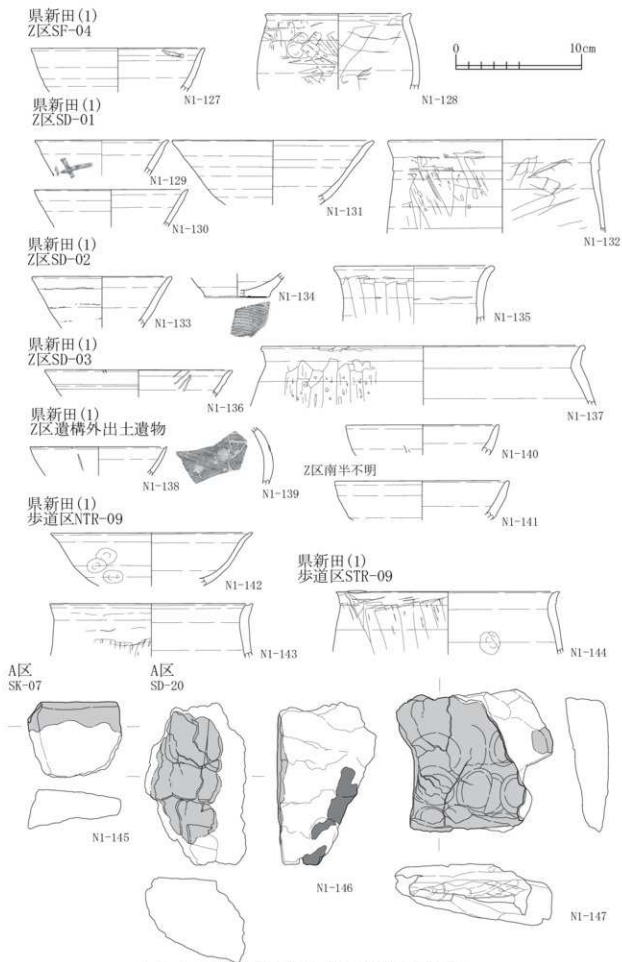


図 3-39 県埋文調査新田(1)遺跡追加資料-7

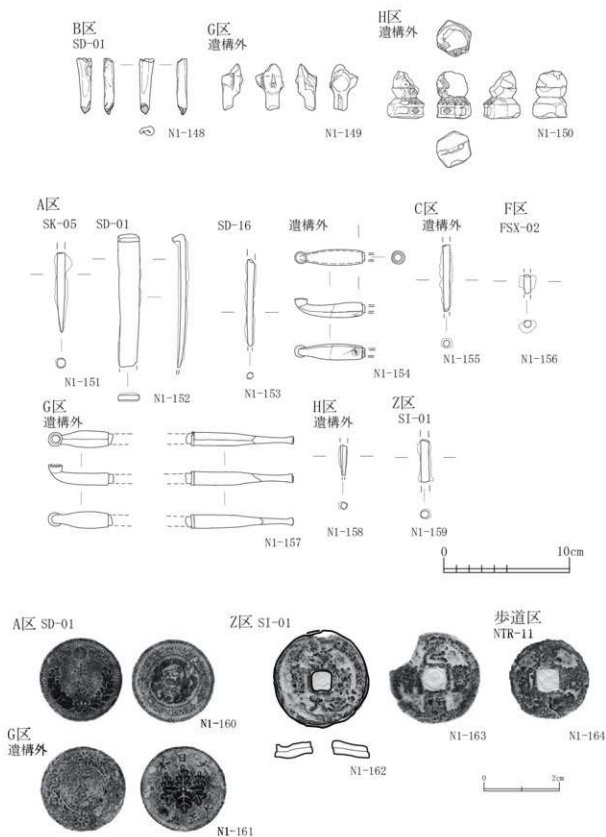


図 3-40 県埋文調査新田(1) 遺跡追加資料-8

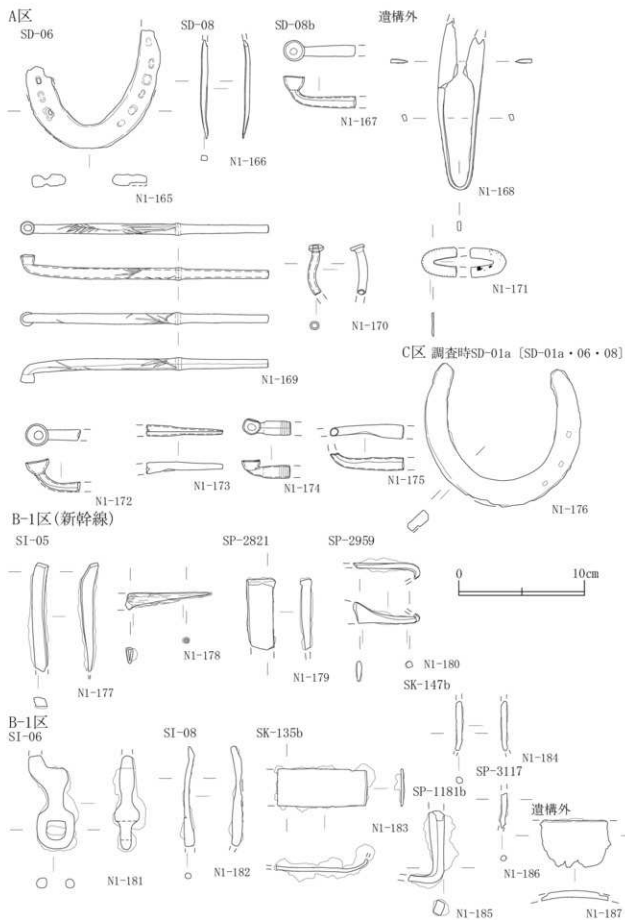


図 3-41 市教委調査新田(1)遺跡追加資料-1

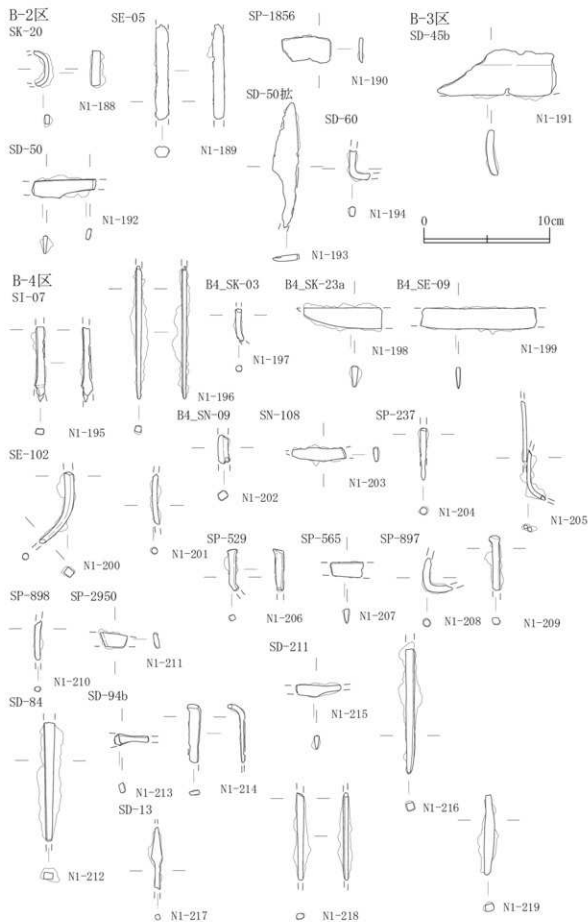


図 3-42 市教委調査新田(1)遺跡追加資料-2

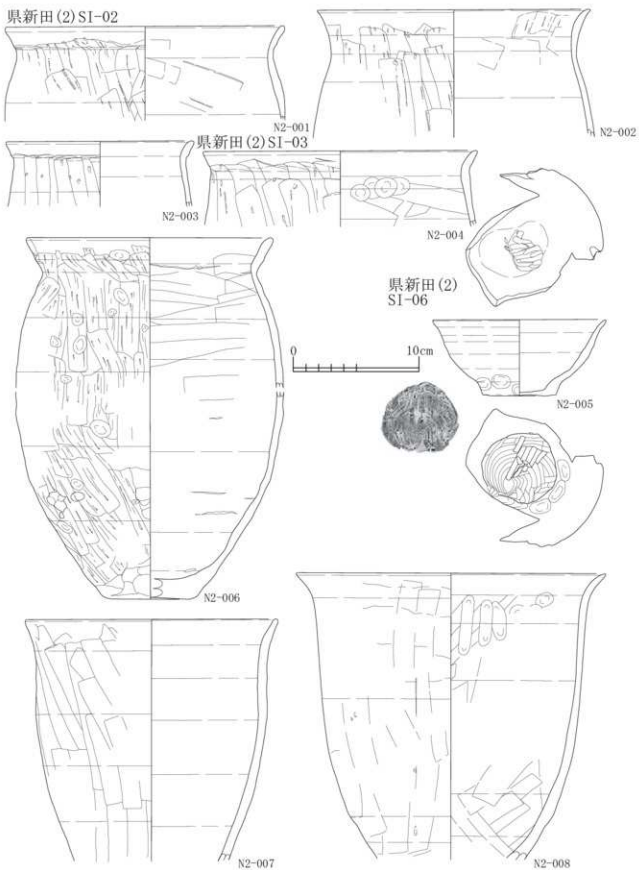
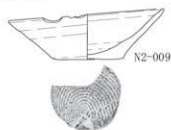
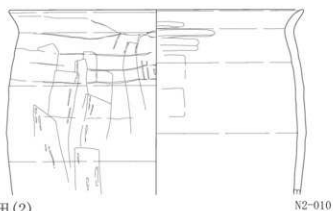


図 3-43 県埋文調査新田(2)遺跡追加資料-1

県新田(2)
SI-09

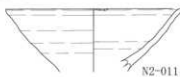


N2-009



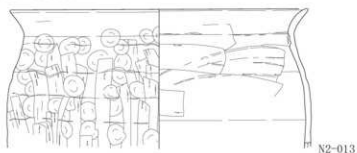
N2-010

県新田(2)
SI-10

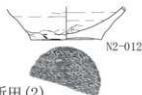


N2-011

県新田(2)
SI-10+SI-11



N2-013

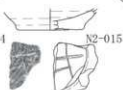


N2-012

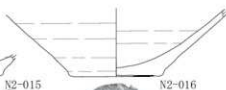
県新田(2)
SI-11



N2-014



N2-015



N2-016



N2-017



県新田(2)
SI-13

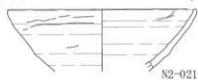


N2-019



N2-020

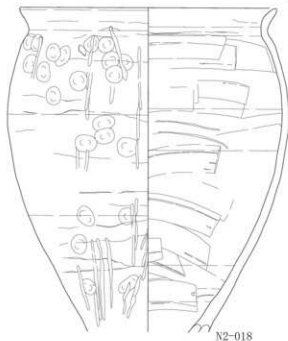
県新田(2)
SI-16



N2-021



N2-022



N2-018

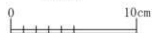


図 3-44 県埋文調査新田(2) 遺跡追加資料-2

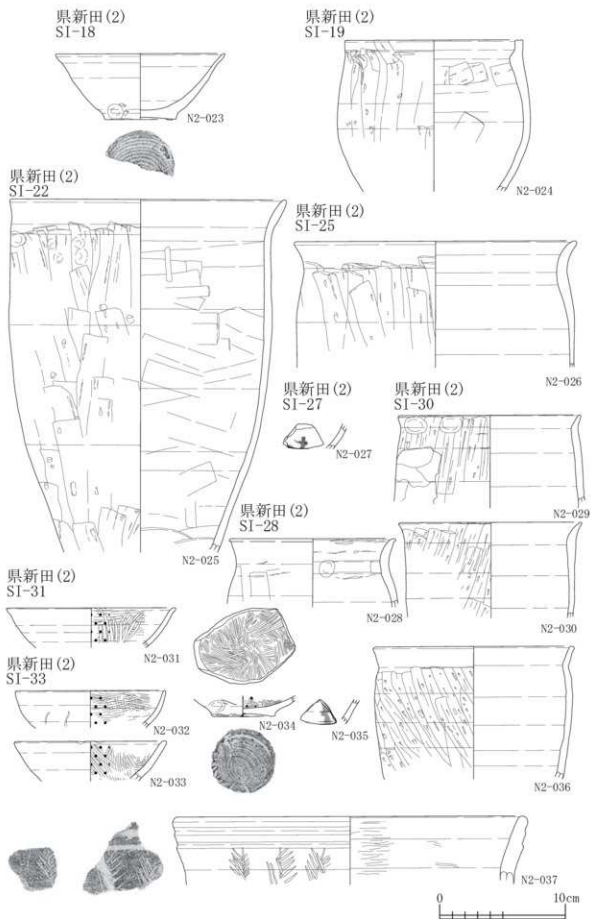
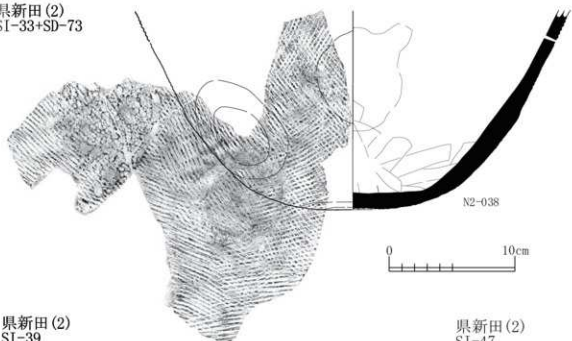


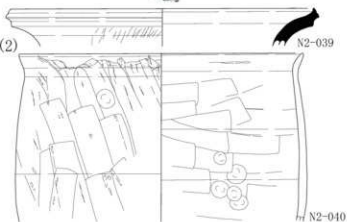
図 3-45 県埋文調査新田(2)遺跡追加資料-3

県新田(2)
SI-33+SD-73



県新田(2)
SI-39

県新田(2)
SI-45



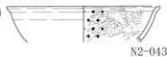
県新田(2)
SI-47



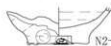
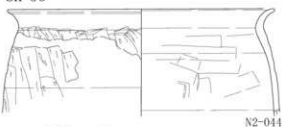
県新田(2)
SK-10(SD-02と重複)



県新田(2)
SK-42



県新田(2)
SK-56



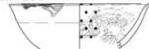
県新田(2)
SK-117



県新田(2)
SK-159



県新田(2)
SK-154



N2-046



N2-048

図 3-46 県埋文調査新田(2) 遺跡追加資料-4

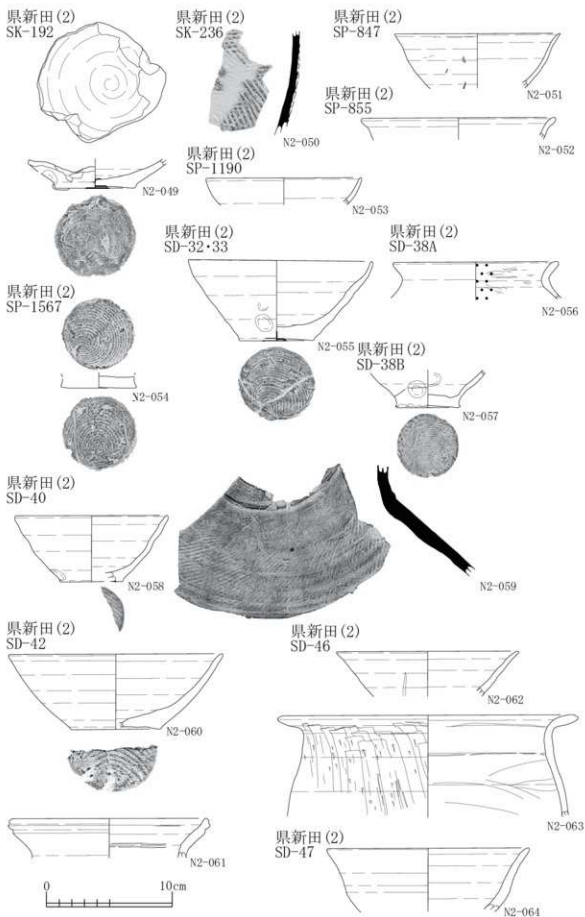
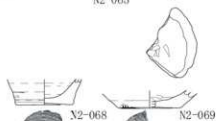
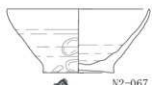
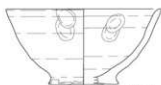


図 3-47 県埋文調査新田(2)遺跡追加資料-5

県新田(2)
SD-52



県新田(2)
SD-73



県新田(2)
SD-78



県新田(2)
SD-83



県新田(2)
SD-85



県新田(2)
遺構外出土土器(捨て場)

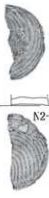
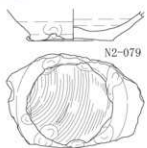
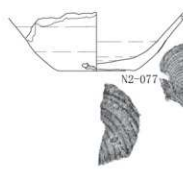


図 3-48 県埋文調査新田(2) 遺跡追加資料-6

第一編
補遺資料
追加資料

県新田(2)
遺構外出土器(捨て場)

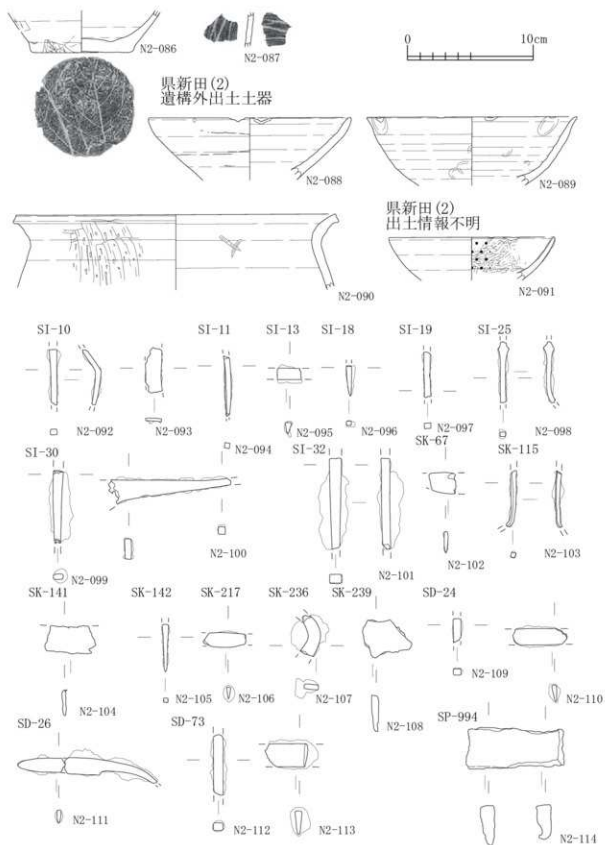


図 3-49 県埋文調査新田(2)遺跡追加資料-7

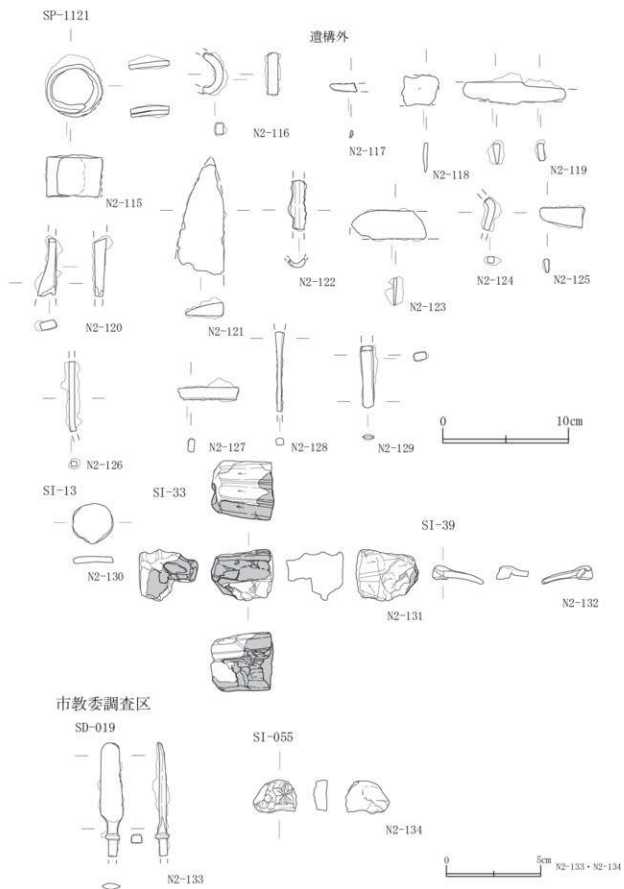


図 3-50 県埋文調査新田（2）遺跡追加資料-8、市教委調査追加資料

SI-017

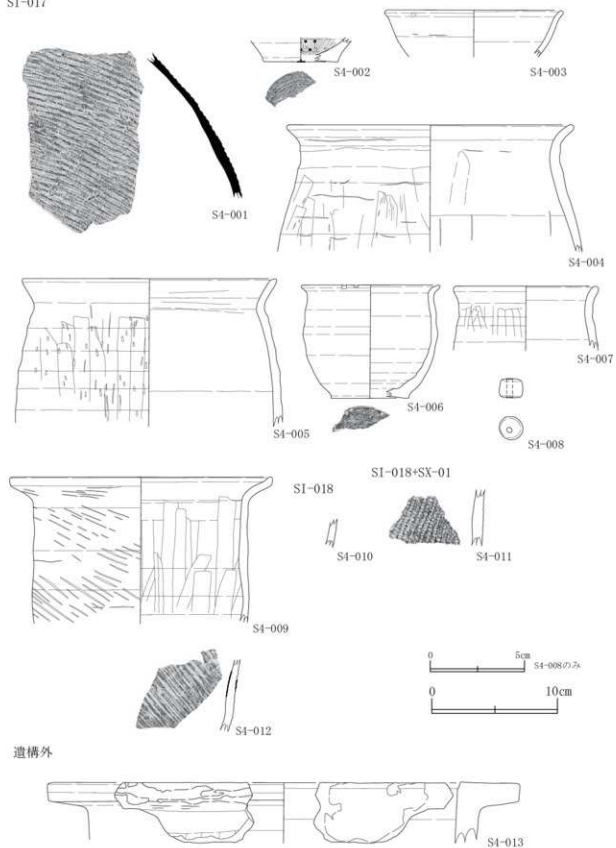


図 3-51 新城平岡(4)遺跡追加資料-1

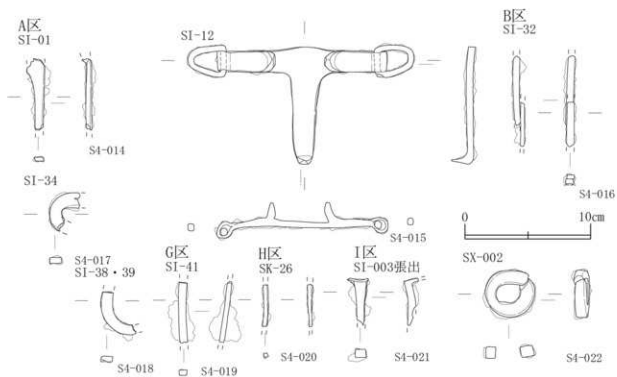


图 3-52 新城平岡（4）遺跡追加資料-2

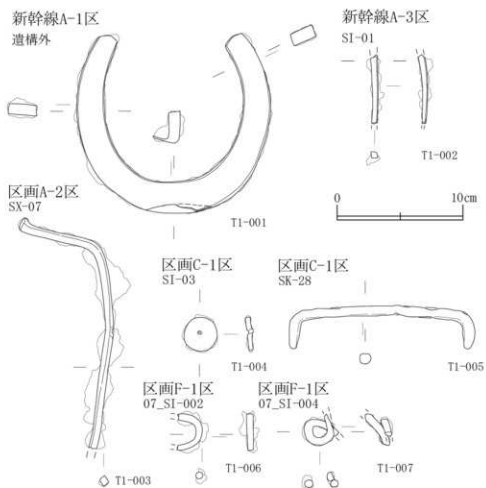


图 3-53 高間（1）遺跡追加資料

図版	番号	遺跡名	区	遺構名	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	器種	日付	整理 No.	実測者No
図3-40	NI-157	黒新田(1)	G	遺構外 II L-23	I	137.5	13.5	16.0	22	鉄製品(鍛造品) 煙管	07.06.13	7	あ-1301
図3-40	NI-158	黒新田(1)	H	遺構外 II X-a	H-1	7.0	24.0	6.0	1.6	鉄製品(鍛造品) 釘	-	8	あ-1302
図3-40	NI-159	黒新田(1)	Z	ZS1-01	覆土	13.0	34.0	8.0	3.2	鉄製品(鍛造品) 釘?	07.07.17	9	あ-1303

表 3-39 市新田(1)遺跡出土鉄製品観察表

図版	番号	遺跡名	区	遺構名	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	器種	日付	整理 No.	実測者No
図3-41	NI-165	市新田(1)	A(A-1)	SD-06	覆土F-X	104.5	93.0	9.0	82.0	鉄製品(鍛造品) 鋸鉄	03.10.01	32	あ-1257
図3-41	NI-166	市新田(1)	A(A-1)	SD-08	下層F-33	5.5	77.0	4.0	3.4	鉄製品(鍛造品) 釘	03.10.31	33	あ-1258
図3-41	NI-167	市新田(1)	A(A-1)	SD-08b	下層	56.5	25.0	16.0	7.8	鉄製品(鍛造品) 煙管	03.09.29	34	あ-1259
図3-41	NI-168	市新田(1)	A(A-1)	遺構外	耕作土下層	37.0	134.0	7.0	19.3	鉄	03.06.24	49	あ-1271
図3-41	NI-169	市新田(1)	A(A-1)	遺構外	耕作土下層 C-X	196.5	20.0	20.0	40.1	煙管	03.09.26	50	あ-1272
図3-41	NI-170	市新田(1)	A(A-1)	遺構外	耕作土下層	12.0	40.0	13.0	6.7	陶混製品?	03.08.04	51	あ-1273
図3-41	NI-171	市新田(1)	A(A-2)	遺構外 SD-04平面 (SD-04付近)	ポイント④ 近く	28.0	23.5	1.5	3.2	鉄製品(鍛造品) 鋼製品?	03-	47	あ-1269
図3-41	NI-172	市新田(1)	A(A-2)	遺構外	耕作土下層	43.0	26.0	18.0	4.7	煙管	03.06.19	52	あ-1274
図3-41	NI-173	市新田(1)	A(A-2)	遺構外	耕作土下層 F-X	60.0	9.0	10.0	2.7	煙管	03.09.04	53	あ-1275
図3-41	NI-174	市新田(1)	A(A-2)	遺構外	耕作土下層 C-X	38.0	14.0	12.5	6.2	煙管	03.10.22	54	あ-1276
図3-41	NI-175	市新田(1)	A(A-2)	遺構外	耕作土下層	57.5	14.0	11.5	6.2	煙管	03.10.22	55	あ-1277
図3-41	NI-176	市新田(1)	C	SD-01a [調査時]	上層Fe-X	122.0	114.0	8.0	150.0	鉄製品(鍛造品) 鋸鉄	03.09.09	31	あ-165
図3-41	NI-177	市新田(1)	B-1 (拡・新)	SI-05	床直	16.0	85.0	16.0	38.0	鉄製品(鍛造品) 角棒状不明	04.11.18	1	あ-1238
図3-41	NI-178	市新田(1)	B-1 (拡・新)	SI-05	床直F-3	68.0	13.0	9.0	5.6	鉄製品(鍛造品) 刀子,木部付き	04-	2	あ-1239
図3-41	NI-179	市新田(1)	B-1 (拡・新)	SP-2821	覆土F-X	23.0	57.0	10.0	31.2	鉄製品(鍛造品) 楔	04.11.08	27	あ-1255
図3-41	NI-180	市新田(1)	B-1 (拡・新)	SP-2959	1層C-6	52.5	18.0	17.0	5.8	鉄製品(鍛造品) 刀子?	04.11.10	29	あ-1256
図3-41	NI-181	市新田(1)	B-1(拡)	SI-06	上層F-2	37.0	74.0	19.5	64.0	鉄製品(鍛造品) 馬具または金具	04.11.10	3	あ-154
図3-41	NI-182	市新田(1)	B-1(拡)	SI-08Ptt 21	覆土F-X	8.0	78.0	9.0	8.0	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	04.12.14	6	あ-155
図3-41	NI-183	市新田(1)	B-1(拡)	SK-135b	3層F-3	71.0	30.0	3.0	28.8	鉄製品(鍛造品) 鎌?	04.12.01	11	あ-158
図3-41	NI-184	市新田(1)	B-1(拡)	SK-147b	3層F-2	5.0	38.5	5.0	2.0	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	04.12.02	12	あ-157
図3-41	NI-185	市新田(1)	B-1(新)	SP-1181b	下層	39.0	61.0	14.0	26.0	鉄製品(鍛造品) 釘?	04.08.06	25	あ-1254
図3-41	NI-186	市新田(1)	B-1(拡)	SP-3117	覆土, 1層F-X	4.5	27.0	4.5	1.1	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	04-	30	あ-164
図3-41	NI-187	市新田(1)	B-1	遺構外	盛土	55.0	38.5	8.0	31.0	鉄製品(鍛造品) 鉄錐?	04.06.18	48	あ-1270
図3-42	NI-188	市新田(1)	B-2	SK-20	4層F-X	15.5	29.5	12.5	3.0	鉄製品(鍛造品) 鋸片	04.09.22	9	あ-1243
図3-42	NI-189	市新田(1)	B-2	SE-05 (SK-05)	1層,下位 F-1	10.0	74.0	8.5	14.1	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	04.07.02	8	あ-156
図3-42	NI-190	市新田(1)	B-2	SP-1856	1層F-X	40.0	21.0	5.0	6.0	鉄製品(鋳造品) SBa-40 P1	04.10.01	26	あ-162
図3-42	NI-191	市新田(1)	B-3	SD-45b	上層F-X	93.0	40.0	10.0	60.0	鉄製品(鋳造品) 羽釜の鏝	04.10.04	38	あ-1261
図3-42	NI-192	市新田(1)	B-3	SD-50	中層S-44	50.0	18.0	10.0	9.0	鉄製品(鍛造品) 刀子	04.09.06	39	あ-1262
図3-42	NI-193	市新田(1)	B-3	SD-50拡	東側崩落土 F-X	22.0	98.0	4.0	14.0	鉄製品(鍛造品) 鉄	04.10.20	40	あ-168
図3-42	NI-194	市新田(1)	B-3	SD-60	上層F-X	18.0	25.0	8.0	3.0	鉄製品(鍛造品) 鋸片	04.09.10	41	あ-1263
図3-42	NI-195	市新田(1)	B-4(-9)	SI-07 (SK-01)	床直F-1	12.0	59.0	9.0	10.0	鉄製品(鍛造品) 棒状不明・鏝?	05.11.01	4	あ-1240

図版	番号	遺跡名	区	遺構名	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	器種	日付	整理 No.	実測者No
図3-42	NI-196	市新田(1)	B-4(-9)	SI-07 (SX-01)	床直F-2	14.5	104.0	5.0	10.7	鉄製品(鍛造品) 棒状不明・鏝?	05.11.01	5	あ-1241
図3-42	NI-197	市新田(1)	B-4(-3)	B4_SK-03	覆土F-X	8.0	26.0	5.0	1.0	鉄製品(鍛造品) 釘?	05.09.03	7	あ-1242
図3-42	NI-198	市新田(1)	B-4(-12)	B4_SK-23a	覆土F-X	62.0	23.0	5.0	16.0	鉄製品(鍛造品) 刀子	05.10.27	10	あ-1244
図3-42	NI-199	市新田(1)	B-4(-28)	B4_SE-09	6層F-1	91.0	22.0	4.0	15.0	鉄製品(鍛造品) 刀子?	05-	13	あ-1245
図3-42	NI-200	市新田(1)	B-4(-41)	SE-102	中層F-1	29.0	56.0	9.0	10.0	鉄製品(鍛造品) 釘?	06-	14	あ-1246
図3-42	NI-201	市新田(1)	B-4(-41)	SE-102	中層F-2	8.5	40.0	5.0	2.4	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	06-	15	あ-1247
図3-42	NI-202	市新田(1)	B-4(-16)	B4_SN-09	27層F-X	9.5	23.0	8.0	2.0	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	05.11.10	16	あ-1248
図3-42	NI-203	市新田(1)	B-4(-54)	SN-108	覆土,下層 F-1	43.0	10.0	4.0	4.6	鉄製品(鍛造品) 刀子	06-	17	あ-1249
図3-42	NI-204	市新田(1)	B-4(-8)	SP-237	覆土F-1	8.5	41.0	5.0	2.0	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	05.10.11	18	あ-1249
図3-42	NI-205	市新田(1)	B-4(-8)	SP-237	1層F-X	20.0	77.5	6.0	5.0	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	05.10.07	19	あ-1250
図3-42	NI-206	市新田(1)	B-4(-23)	SP-529	覆土F-X	8.0	32.5	8.0	4.0	鉄製品(鍛造品) 釘	05.10.26	20	あ-1250
図3-42	NI-207	市新田(1)	B-4(-26)	SP-565	1層F-X	26.0	13.0	6.0	3.1	鉄製品(鍛造品) 刀子	05.10.26	21	あ-1251
図3-42	NI-208	市新田(1)	B-4(-21)	SP-897	覆土FT-X	24.0	28.5	7.0	3.5	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	05.11.07	22	あ-1252
図3-42	NI-209	市新田(1)	B-4(-21)	SP-897	覆土FT-X	9.0	43.0	9.0	4.8	鉄製品(鍛造品) 釘	05.11.07	23	あ-1251
図3-42	NI-210	市新田(1)	B-4(-21)	SP-898	覆土F-X	7.0	31.0	4.0	1.2	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	05.11.04	24	あ-1253
図3-42	NI-211	市新田(1)	B-4(-38)	SP-2950	覆土F-X	22.0	12.0	10.0	2.5	鉄製品(鍛造品) 刀子?	06-	28	あ-1253
図3-42	NI-212	市新田(1)	B-4(-36)	SD-84	下層F-7	20.0	93.0	11.0	21.0	鉄製品(鍛造品) 鏝?	06.05.24	42	あ-1264
図3-42	NI-213	市新田(1)	B-4(-48)	SD-94b	中層F-26	27.0	9.0	5.0	1.0	鉄製品(鍛造品) 刀子?	06.06.07	43	あ-1265
図3-42	NI-214	市新田(1)	B-4(-49)	SD-94b	覆土,上層 F-2	46.5	11.0	14.0	4.0	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	05.11.01	44	あ-1266
図3-42	NI-215	市新田(1)	B-4(-35)	SD-211	下層F-36	35.0	12.0	7.0	4.0	鉄製品(鍛造品) 刀子?	06.05.18	45	あ-1267
図3-42	NI-216	市新田(1)	B-4(-35)	SD-211	床面F-41	19.0	103.0	8.0	18.1	鉄製品(鍛造品) 釘?	06.06.15	46	あ-1268
図3-42	NI-217	市新田(1)	B-5(-10)	SD-13	中層F-2	9.0	48.5	4.5	4.0	鉄製品(鍛造品) 鉄鏝?	06.07.14	35	あ-1266
図3-42	NI-218	市新田(1)	B-5(-13)	SD-13	上層F-4	13.5	69.0	10.5	6.6	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	06.07.20	36	あ-1266
図3-42	NI-219	市新田(1)	B-5(-16)	SD-13	上層F-8	8.0	63.0	6.0	10.0	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	06.07.20	37	あ-1267

表3-40 県新田(2)遺跡出土鉄製品観察表

図版	番号	遺跡名	区	遺構名	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	器種	日付	整理 No.	実測者No
図3-49	N2-092	県新田(2)	-	SI-10	覆土	11.0	44.0	15.0	3.7	鉄製品(鍛造品) 釘	07.06.01	1	あ-1304
図3-49	N2-093	県新田(2)	-	SI-10	覆土	13.0	36.0	4.0	1.7	鉄製品(鍛造品) 薄板状不明	07.05.30	2	あ-1305
図3-49	N2-094	県新田(2)	-	SI-11	覆土	7.0	48.0	5.0	3.9	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	07.06.01	3	あ-1306
図3-49	N2-095	県新田(2)	-	SI-13	覆土	20.0	15.0	7.0	8.7	鉄製品(鍛造品) 刀子	07.06.27	4	あ-1307
図3-49	N2-096	県新田(2)	-	SI-18	掘り方	7.5	25.0	5.0	1.0	鉄製品(鍛造品) 釘?	07.08.01	5	あ-1308
図3-49	N2-097	県新田(2)	-	SI-19	床面	8.0	36.0	4.5	1.5	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	07.07.04	6	あ-1309
図3-49	N2-098	県新田(2)	-	SI-25	覆土	9.0	48.5	10.0	7.6	鉄製品(鍛造品) 鉄鏝?	07.07.26	7	あ-1310
図3-49	N2-099	県新田(2)	-	SI-30	覆土	19.0	58.0	11.5	14.2	鉄製品(鍛造品) 鉄鏝?	07.08.22	8	あ-1311

図版	番号	遺跡名	区	遺構名	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	器種	日付	整理 No.	実測者No
図3-49	N2-100	県新田(2)	-	SI-30	覆土	97.0	21.0	9.0	14.9	鉄製品(鍛造品) 刀子	-	9	ホ-1312
図3-49	N2-101	県新田(2)	-	SI-32	覆土	24.0	73.0	21.0	24.0	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	07.09.04	10	ホ-1313
図3-49	N2-102	県新田(2)	-	SK-67	覆土	21.0	17.0	4.0	2.2	鉄製品(鍛造品) 刀子?	07.07.04	11	ホ-1314
図3-49	N2-103	県新田(2)	-	SK-115	覆土	9.0	4.5	10.0	3.4	鉄製品(鍛造品) 釘	-	12	ホ-1315
図3-49	N2-104	県新田(2)	-	SK-141	覆土	40.5	22.0	4.0	2.9	鉄製品(鍛造品) 薄板状不明	07.08.24	13	ホ-1316
図3-49	N2-105	県新田(2)	-	SK-142	覆土	7.0	37.0	5.0	1.2	鉄製品(鍛造品) 釘	07.08.24	14	ホ-1317
図3-49	N2-106	県新田(2)	-	SK-217	覆土	34.0	13.0	9.0	4.9	鉄製品(鍛造品) 刀子	07.09.18	15	ホ-1318
図3-49	N2-107	県新田(2)	-	SK-236	覆土	30.0	33.0	16.0	14.5	鉄製品(鍛造品) 釘?	07.10.02	16	ホ-1319
図3-49	N2-108	県新田(2)	-	SK-239	覆土	39.0	30.0	6.0	10.5	鉄製品(鑄造品) 鏃?	07.10.04	17	ホ-1320
図3-49	N2-109	県新田(2)	-	SD-24	覆土	8.0	19.0	6.0	1.1	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	07.06.29	18	ホ-1321
図3-49	N2-110	県新田(2)	-	SD-24	覆土	43.0	17.0	9.0	6.9	鉄製品(鍛造品) 刀子?	07.06.22	19	ホ-1322
図3-49	N2-111	県新田(2)	-	SD-26	覆土	111.0	27.0	6.5	21.4	鉄製品(鍛造品) 刀子	07.06.28	20	ホ-1323
図3-49	N2-112	県新田(2)	-	SD-73	覆土	14.0	48.0	9.0	7.5	鉄製品(鍛造品) 釘?	07.10.11	21	ホ-1324
図3-49	N2-113	県新田(2)	-	SD-73	上層	42.5	24.0	16.0	10.9	鉄製品(鍛造品) 刀子	07.10.05	22	ホ-1325
図3-49	N2-114	県新田(2)	-	SP-994	覆土	78.0	33.0	12.0	68.1	鉄製品(鍛造品) 未製品	07.09.13	23	ホ-1326
図3-50	N2-115	県新田(2)	-	SP-1121	覆土	46.0	49.0	34.0	74.8	鉄製品(鍛造品) 締具(環状)	07.09.20	24	ホ-1327
図3-50	N2-116	県新田(2)	-	SP-1121	覆土	20.0	34.0	12.5	9.7	鉄製品(鍛造品) 締具(環状)	07.09.20	25	ホ-1328
図3-50	N2-117	県新田(2)	-	遺構外 IP-44	I	22.0	7.0	2.5	0.6	鉄製品(鍛造品) 刀子?	07.05.10	27	ホ-1330
図3-50	N2-118	県新田(2)	-	遺構外 IP-44	I	30.0	25.0	3.0	2.9	鉄製品(鍛造品) 薄板状不明	07.07.13	29	ホ-1332
図3-50	N2-119	県新田(2)	-	遺構外 IS-35	I	82.0	25.0	14.0	27.7	鉄製品(鍛造品) 刀子	07.08.22	38	ホ-1341
図3-50	N2-120	県新田(2)	-	遺構外 IN-44	II	22.0	48.0	16.0	10.8	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	07.05.10	26	ホ-1329
図3-50	N2-121	県新田(2)	-	遺構外 IP-43	II	39.0	87.0	17.0	82.3	鉄製品(鍛造品) 刀?	07.05.30	28	ホ-1331
図3-50	N2-122	県新田(2)	-	遺構外 IQ-39	II	15.0	41.0	7.5	6.1	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	07.07.24	30	ホ-1333
図3-50	N2-123	県新田(2)	-	遺構外 IQ-42	II	59.0	31.0	14.0	16.2	鉄製品(鍛造品) 鏃	07.06.26	31	ホ-1334
図3-50	N2-124	県新田(2)	-	遺構外 IR-41	II	15.0	27.0	7.0	2.5	鉄製品(鍛造品) 釘	07.06.15	32	ホ-1335
図3-50	N2-125	県新田(2)	-	遺構外 IR-42	II	36.0	19.0	5.5	10.3	鉄製品(鍛造品) 刀子?	07.06.19	33	ホ-1336
図3-50	N2-126	県新田(2)	-	遺構外 IR-42	II	17.0	56.0	8.0	7.0	鉄製品(鍛造品) 棒状不明	-	34	ホ-1337
図3-50	N2-127	県新田(2)	-	遺構外 IR-43	II	48.0	19.0	6.0	8.8	鉄製品(鍛造品) 刀子	07.06.26	35	ホ-1338
図3-50	N2-128	県新田(2)	-	遺構外 IS-35	II	7.0	63.0	6.0	2.2	鉄製品(鍛造品) 鏃?	07.09.07	36	ホ-1339
図3-50	N2-129	県新田(2)	-	遺構外 IS-35	II	14.0	49.0	8.0	5.3	鉄製品(鍛造品) 距状不明	07.09.07	37	ホ-1340

表 3-41 市新田(2)遺跡出土鉄製品観察表

図版	番号	遺跡名	区	遺構名	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	器種	日付	整理 No.	実測者No
図3-50	N2-133	市新田(2)	F-1	SD-019	覆土F-X	20.0	90.0	13.0	20.0	槍頭?砲状	07.09.18	8	ホ-1294

表 3-42 新城平岡(4)遺跡出土鉄製品観察表

図版	番号	遺跡名	区	遺構名	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	器種	日付	整理 No.	実測者No
図3-52	SA-014	新城平岡(4)	A(-1)	SI-01	確認面F-X	19.0	56.0	10.0	4.0	鉄鏝?	03.06.17	1	赤-1278
図3-52	SA-015	新城平岡(4)	A(-2)	SI-12	覆土、上層 F-X	181.0	94.0	30.0	132.0	馬具・灰繫?	03.07.01	2	赤-1279
図3-52	SA-016	新城平岡(4)	B(-35)	SI-32	上層F-1	10.0	72.0	10.0	6.0	棒状不明	06.08.08	3	赤-1280
図3-52	SA-017	新城平岡(4)	B(-36)	SI-34	覆土F-X	25.0	31.0	7.0	4.0	覆状不明	06.09.07	4	赤-1281
図3-52	SA-018	新城平岡(4)	B(-2・6)	SI-38・39	覆土F-1	28.0	40.0	5.0	2.0	覆状不明	06.09.28	5	赤-1282
図3-52	SA-019	新城平岡(4)	G	SI-41内 PI14	2層FT-1	21.0	48.0	4.0	16.0	棒状不明	07.06.19	6	赤-1283
図3-52	SA-020	新城平岡(4)	H	SK-26	上層F-1	19.0	37.0	12.0	4.0	飾り釘	08.05.22	8	赤-1285
図3-52	SA-021	新城平岡(4)	I	SI-003張 出	下層F-2	7.0	33.5	6.0	1.0	釘?	08.08.04	7	赤-1284
図3-52	SA-022	新城平岡(4)	I (-D-12)	SK-002	上層F-2	41.0	40.0	15.0	22.0	覆状不明	08.06.05	9	赤-1286

表 3-43 高間(1)遺跡出土鉄製品観察表

図版	番号	遺跡名	区	遺構名	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	器種	日付	整理 No.	実測者No
図3-53	T1-001	高間(1)	新幹線 A-1	遺構外	表土F-X	157.0	141.0	25.0	392.0	踏鉄	04.06.17	1	赤-1287
図3-53	T1-002	高間(1)	新幹線 A-3	SI-01	10層F-1	55.0	13.0	12.0	6.0	棒状不明 (鉄鏝?)	04.10.12	3	赤-1289
図3-53	T1-003	高間(1)	A-2	SK-07	3層F-X	88.0	183.0	12.0	60.0	火箸	09.-	2	赤-1288
図3-53	T1-004	高間(1)	C-1	SI-03	覆土F-X	27.5	30.0	7.0	8.0	円盤状不明	04.07.23	4	赤-1290
図3-53	T1-005	高間(1)	C-1	SK-28	確認面F-X	145.0	34.0	8.5	48.0	鏝	04.07.15	5	赤-1291
図3-53	T1-006	高間(1)	F-1	07_S1- 002 カマノ2	1層F-1	25.0	33.0	15.0	4.0	釣針?	07.09.20	6	赤-1292
図3-53	T1-007	高間(1)	F-1	07_S1- 004	4層F-4	29.0	25.0	22.0	10.0	覆状不明	07.11.16	7	赤-1293

県新田(1)
A区SK-24



N1-001

県新田(1)
A区SK-26



N1-002

県新田(1)
A区SK-27



N1-003



N1-004

県新田(1)
A区SE-07



N1-005



N1-006



N1-007



N1-008



N1-009

県新田(1)
A区SE-09



N1-010

県新田(1)
A区SD-04



N1-011

県新田(1)
A区SD-18



N1-012



N1-013



N1-014

N1-015

県新田(1)
A区SD-20



N1-016



N1-017

N1-018

県新田(1)
A区調査時SI-01



N1-019



N1-020



N1-021



N1-022



N1-023



N1-024

県新田(1)
A区遺構外

県新田(1)
B区SK-32



N1-025

県新田(1)
B区SD-38



N1-026

県新田(1)
B区SD-24



N1-027



N1-028



N1-029



N1-030



N1-031

県新田(1)
B区SD-26・27



N1-032



N1-033



N1-034



N1-035



N1-036



N1-037

県新田(1)
B区SD-32



N1-038



N1-039

県新田(1)
B区SD-33



N1-040



N1-041

写真 3-1 県埋文調査新田(1) 遺跡追加資料(土器) -1

県新田(1)
B区調査時SN-08



N1-043

県新田(1)
B区遺構外出土土器



N1-044



N1-045



N1-046



N1-047



N1-048



N1-049



N1-050



N1-051



N1-052



N1-053

県新田(1)
C区P21(Pit21)



N1-054

県新田(1)
C区SD-41



N1-055

県新田(1)
C区SD-42



N1-056



N1-057

県新田(1)
C区SD-46



N1-058



N1-059

県新田(1)
C区SD-46・56・57



N1-060



N1-061



N1-062



N1-063



N1-064



N1-065



N1-066



N1-067

県新田(1)
C区SD-47



N1-068



N1-069



N1-070

県新田(1)
C区調査時Pit48



N1-076

県新田(1)
C区遺構外出土土器



N1-077



N1-078



N1-079

県新田(1)
C区詳細不明



N1-080

県新田(1)
D区河川跡1



N1-081



N1-082



N1-083



N1-084



N1-085



N1-086



N1-087



N1-088



N1-089

写真 3-2 県埋文調査新田(1)遺跡追加資料(土器)-2

県新田(1)
F区第1~4号水田遺構



県新田(1)
F区第2号水田遺構



県新田(1)
F区シルト範囲



県新田(1)
G区SD-72



県新田(1)
G区SD-73



県新田(1)
G区遺構外出土土器



県新田(1)
H区SD-79



県新田(1)
H区河川跡1



県新田(1)
Z区SK-19



県新田(1)
Z区SE-01



県新田(1)
Z区SE-02



県新田(1)
Z区SE-04



県新田(1)
Z区SE-06



県新田(1)
Z区SF-04



県新田(1)
Z区SD-01



写真 3-3 県埋文調査新田(1) 遺跡追加資料(土器) -3



写真 3-4 県埋文調査新田(1)遺跡追加資料(土器)・4・(石製品・土製品・金属製品・古銭)



写真3-5 市教委調査新田(1)遺跡追加資料(金属製品)

県新田(2)SI-02



N2-001



N2-002



N2-003

県新田(2)SI-03

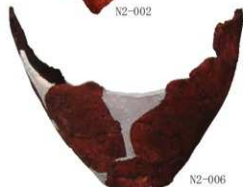


N2-004

県新田(2)
SI-06



N2-005



N2-006



N2-007



N2-008

県新田(2)
SI-09



N2-009

県新田(2)
SI-10



N2-011



N2-012



N2-010

県新田(2)
SI-10+SI-11



N2-013

県新田(2)
SI-11



N2-014



N2-015



N2-018



N2-016



N2-017

県新田(2)
SI-13



N2-019



N2-020

県新田(2)
SI-16



N2-021



N2-022

写真 3-6 県埋文調査新田(2)遺跡追加資料(土器) -1

県新田(2)
SI-18



県新田(2)
SI-19



県新田(2)
SI-22



県新田(2)
SI-25



県新田(2)
SI-27



県新田(2)
SI-28



県新田(2)
SI-30



県新田(2)
SI-31



県新田(2)
SI-33



県新田(2)
SI-39



県新田(2)
SI-33+SD-73



県新田(2)
SI-45



県新田(2)
SI-47



写真 3-7 県埋文調査新田(2) 遺跡追加資料(土器) -2



写真 3-8 県埋文調査新田(2)遺跡追加資料(土器) -3

県新田(2)
SD-78



N2-073

県新田(2)
SD-83



N2-074

県新田(2)
SD-85



N2-075

県新田(2)
遺構外出土土器(捨て場)



N2-076



N2-077



N2-078



N2-079



N2-080



N2-081



N2-082



N2-083



N2-084



N2-085

県新田(2)
遺構外出土土器(捨て場)



N2-086



N2-087

県新田(2)
遺構外出土土器



N2-088



N2-089



N2-090

県新田(2)
出土情報不明



N2-091



N2-092



N2-093



N2-094



N2-095



N2-096



N2-097



N2-098



N2-099



N2-100



N2-101



N2-102



N2-103



N2-104



N2-105



N2-106



N2-107



N2-108



N2-109



N2-110



N2-111



N2-112



N2-113



SP-994

N2-114

写真 3-9 県埋文調査新田(2) 遺跡追加資料(土器)-4・(金属製品)-1



写真 3-10 埋文調査新田(2)遺跡追加資料(金属製品)-2・(土製品),
市教委調査新田(2)遺跡追加資料(金属製品,新城平岡(4)遺跡追加資料(土器・金属製品)

新幹線A-1区
遺構外



新幹線A-3区
SI-01



区画A-2区
SX-07



区画C-1区
SI-03



区画C-1区
SK-28



区画F-1区
07_SI-002



区画F-1区
07_SI-004



写真 3-11 高間（1）遺跡追加資料（金属製品）

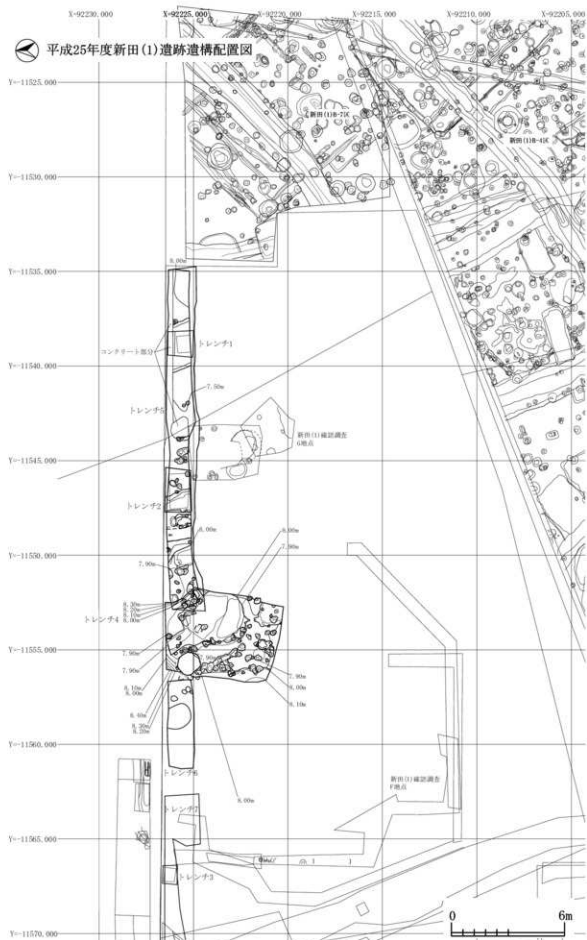


図 3-54 新田(1)遺跡平成25年度調査遺構配置図1

第3節 追加資料2(H.25 新田(1)遺跡)

本報告第1分冊第1章第2節の調査経過の報文中で掲載したが、平成25年度に土地区画整理事業施工地内の新田(1)・(2)遺跡の未調査部分に家電量販店の建設計画があり、新田(1)遺跡内に所在した既存店舗の解体撤去(平成25年4月25・26日)の後に建物および関連施設の建設が進められた。建設予定地の建物本体部分は土地区画整理事業に伴う発掘調査で調査済の地点で建設上発掘調査の必要性は新たに発生しなかったが、国道7号青森西バイパス沿いの駐車場予定地及び看板・外灯設置部分の一部については前述の既存店舗が存在していたため土地区画整理事業の調査時には部分的な調査に留まり、未調査部分が存在していた。

青森市教育委員会では開発事業者と協議の上、地下の埋蔵文化財包蔵地に影響のない工事を依頼するとともに、工事に際し立会いとし、地下の包蔵地に影響が生じる場合、適宜調査する方向性とし、開発事業者側の青森県教育委員会への工事届の進捗および県教育委員会からの工事立会いの回答を事業者側に通知した。工事工程に併せ平成25年7月18日に看板設置予定箇所の3地点(トレンチ1~3)について立会い調査を実施し、遺構・遺物確認の後、破壊される部分5.2m²について本発掘調査を実施した。

その後、開発事業者がJR側と協議した結果、建設予定地に隣接する東北新幹線の高架橋と看板建設予定箇所が近接し過ぎた問題が発生し、一部の看板の建設地点を当初予定の箇所から変更する必要性が生じた。新規設置地点について別途工事届が提出され、8月27日に立会い調査を実施し、結果的に25.5m²を8月30日まで本調査することとなった(トレンチ4)。また、付帯工として外灯の新設と側溝の新設が必要となり、外灯については10月7日、側溝については10月2日に立会いを実施した。側溝設置箇所については掘削深度55cmより上面の50cm程度の部分で遺構確認面を検出する地点があり、急遽本調査に切り替え10月23日まで4.21m²を調査した(トレンチ5~7)。なお、側溝部分の調査は前述のトレンチ1~4までの地点と重複しており、調査にあたっては、緊急的な対応であったことから、工事によって破壊される深度までの掘削確認とし、一部のトレンチでは確認した遺構についても破壊が及ばない部分は平面範囲の一部の確認のみに留め精査しないものも含まれる。また、一部については同一地点を掘り返し、調査ごとに遺構番号を付したものが含まれる。

調査成果について『市内遺跡発掘調査報告書22』で掲載されるものであるが、土地区画整理事業施工地内の調査地にあたる参考資料として本項目

中でも掲載した。なお、遺構名の表記については本報告第1分冊第Ⅱ章第5節と同様に確認順の通し番号とした。

1. 竪穴建物跡

13-0114・0115(図3-62・63・65・69)

トレンチ5の部分で検出した。トレンチ5の調査より先行して実施されたトレンチ2の調査時に13-0003として取り扱われた遺構の精査時には本遺構の下層に存在する溝跡としての認定が先行したため、竪穴建物としての認定はされておらず、13-0003の第4・5層が本遺構の堆積土であったことを13-0114・115の精査に伴い追認した状況である。トレンチ5の遺構確認時も当初13-0114は溝の上に構築されたカマド状遺構として精査開始し、13-0115についてはトレンチ2の精査時に13-0003とした溝の東壁に相当するものと精査した。精査時点で13-0115の部分で溝である13-0003の東壁ではなく、13-0114がカマドで、そのカマドの竪穴部に相当することが判明し、最終的に同一遺構として精査を行った。そのため、調査経過に伴い13-0114出土扱いと13-0115出土扱いのものに分けられているが、実質的には13-0114・0115と同一軒の竪穴建物跡の出土建物ということになる。なお、トレンチ5の精査時に13-0003の溝跡に相当する部分は13-0140と付し精査している。そのため掲載図について13-0114がカマドに相当する部分、13-0115が竪穴建物に相当する部分と分けた状態で掲載した。

竪穴建物跡の規模については南北方向は調査区外に延び、不明瞭である。東西方向の規模については西壁のみが明瞭で、東壁については13-0003の立ち上がり部分相当とすると260cm程度、壁溝跡の13-0106部分までの規模とすると550cm程度の規模となる。主軸方位はN-173°-Eである。溝跡に相当する13-0003(=13-0140)の上面に構築された竪穴建物跡で、溝の影響で一部沈下しているが深さは18~39cm程度である。13-0003(=13-0140)はB-4区の調査区内ではSD-78と呼称された溝跡の延長部に相当し、B-4区内でもSD-78の埋没後に竪穴建物跡が構築されるなど、溝の閉塞過程としては初期のものに相当し、本遺構も溝の閉塞の変遷過程に応じた竪穴建物の構築に伴う所産である。出土遺物は図3-65・69に図示したが、カマドの支脚として用いられた小皿状の土師器(25N1-001)や浅身の椀や皿(25N1-002~005)などが出土しており、その他棒状支脚

(25N1-111)や短頸の甕(25N1-011等)が出土している。

2. 土坑

13-0008 (図3-56・57・66)

トレンチ4で検出した縄文時代のフラスコ状土坑である。規模は開口部が124×112cm、底面側で136×134cm、深さは57cmを測る。堆積土は8層に分層し、一部崩落の伴う堆積状況を呈している。出土遺物は土師器の混入が見られ、同一地点での土地利用の連続に伴う影響が生じている。

13-0018 (図3-58・66)

トレンチ4で検出した土坑であるが、大部分が調査区外に延びており詳細は不明である。検出部分は不整楕円形を呈し、(209)×(38)×21cmを測る。砕片化した土師器などが出土している。

13-0041 (図3-59・66)

トレンチ4で検出した土坑で、東・南壁側が調査区外に延びるため詳細は不明である。検出部分は不整楕円形を呈し、(123)×(109)×25cmを測る。断面形は壁上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。出土遺物の中には手づくねかわらけ(25N1-029)1点が含まれる。

13-0043 (図3-56・57・66・67・69)

トレンチ4で検出した。ピット以外に13-0045とした溝状の遺構と重複し、本遺構が新しい。非常に大型の不整楕円形状の土坑で、342×260×99cmを測る。断面形はフラスコ状を呈し、底面の一部が段状を呈している。須恵器・土師器・擦文土器など古代の遺物が出土し、南東壁の中間の位置から鉄刀が出土した(25N1-116)。鉄刀は、長さ46.9cm、幅5.6cm、厚さ1.9cmを測る。柄の端部が錫杖状鉄製品の頭部の双(円)環部分と同様に双環が作出されている。野田村教育委員会井上雅孝氏のご教示によると双環の伴う刀子形のタイプは福島県笹目平遺跡に伴うが双環の向きが本遺跡出土資料とは異なり持ち手に対し横方向に付けられている。また時間的にも本遺跡よりも古手の9世紀代の資料であるという(井上2002)。胎内市教育委員会水澤幸一氏のご教示によると柄の部分に屈曲しているのが戴手刀ペーサの考えで、柄頭の意匠として錫杖状鉄製品のデザインが取り入れられた可能性を指摘している。また、東海大学文学部松本建彦氏から長野県立歴史館原明芳氏からのご教示内容と併せ錫杖状鉄製品の延長線上で祭器的な役割を果たしていたのではないかというご教示を受け

た。類例の少ない資料であり、今後の類例の増加を待った解釈が必要になるが、時間的に10世紀後葉以降の下った段階の廃棄資料であり、変容した要素の一端であることには変わりないと判断される。

13-0117 (図3-63・68・69)

トレンチ5で検出した。南側が調査区外に延びているため詳細は不明であるが、平面形は小判形状を呈し、(131)×87×32cmを測る。断面形は垂直に近い形で立ち上がる部分と緩やかに立ち上がる部分が見られる。堆積土は2層に分層し、ブロックが多量含まれる埋め戻しに伴う堆積である。出土遺物は北海道式石冠(25N1-109)と台石(25N1-110)、摩滅が顕著であるが、至和元寶(北宋、1054年初鑄)の篆書体の資料が出土している。(25N1-117)

13-0130 (図3-64)

トレンチ6で確認した。工事による破壊深度より深い地点で確認し、破壊を免れたため、遺構精査には至っていない。確認部分の規模は(131)×121cmを測る。

3. 焼土状遺構

13-0106 (図3-61)

トレンチ5で検出した。コンクリートの基礎によって大部分が破壊されており、部分的な検出に留まったが、50×(21)cmを測る。地山面が焼土化しており、焼土の厚さは最大19cmほどになっている。

4. ピット

13-0130同様破壊を免れたプラン確認のみの4基を含む合計14基を検出した。個別の情報では観察表に集約した。精査した110基の深さの平均は28cmであるが、最大72cmの資料もあり、掘立柱建物の柱穴として機能した資料も含まれる。調査地点が限定的で建物として認定した資料はないが、ある程度面的に調査をしたトレンチ4の状況では北西軸方向に延びる軸線であることが考えられる。

また、出土遺物については図3-67～69に図示したが、縄文土器や土師器・擦文土器等が主体で、陶磁器等の出土は13-0083から出土した珠洲焼播鉢などごく一部に限られている。

5. 溝跡

13-0003 (=13-0140) (図3-56・63・67)

トレンチ2の調査時に13-0003として、トレンチ5の調査時に13-0140として精査され

た。前述の13-0114・0115で記述したとおり、B-4区ではSD-78として精査した溝跡の延長部分に相当し、堅穴建物跡である13-0114・0115より本遺構の方が古い。

トレンチ2の精査時には底面まで掘削し、深さ104cmを測る。トレンチ5の掘削時には確認面から深さ25cmの地点で掘削を止めている。双方を含めた幅は200cmを測る。

13-0007 (=13-0102) (図3-56・67)

トレンチ1の調査時に13-0007、トレンチ5の調査時には13-0102として精査している。トレンチ1の掘削時には底面まで掘削し、深さ117cmを測る。看板の基礎部分のみの掘削であったため溝としての遺構認定には至らなかった。トレンチ5の掘削時に全体形が分かる状況となり、幅253cm、長さ(95)cmを測る。側溝敷設の工事であったため、確認面から深さ60cmで調査を止めている。B-4区調査時のSD a-94 a・bの延長線上に相当する。

13-0045 (図3-56・57・67)

トレンチ4で検出した。ピットとの重複以外に前述のとおり13-0043と重複しており、本遺構の方が古い。調査区内では長さ178cm、幅75cm、深さ73cmを測る。堆積土は4層に分層したが、溝の埋没に伴った土層は3層で、ロームブロック混じりの埋め戻しに伴う堆積である。軸線はN-30°-Wである。

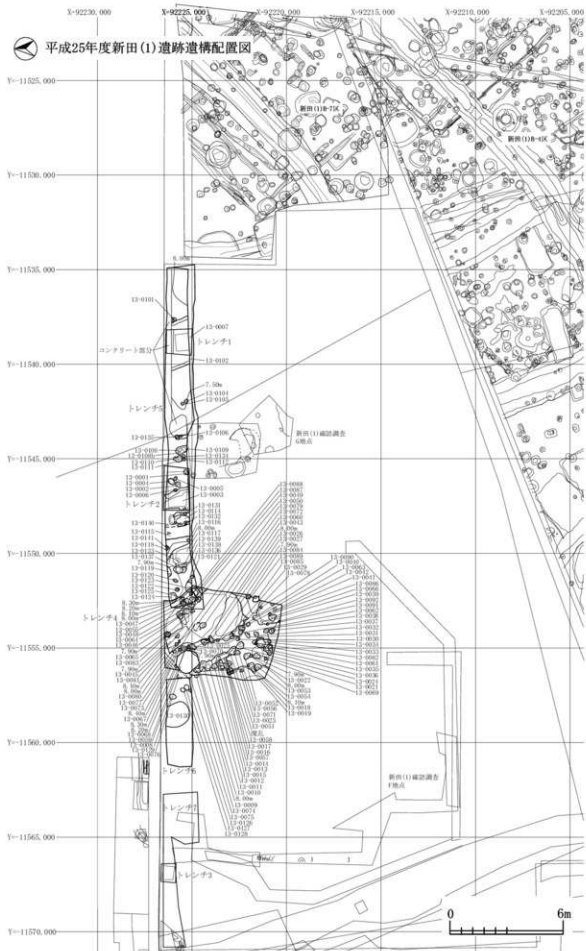
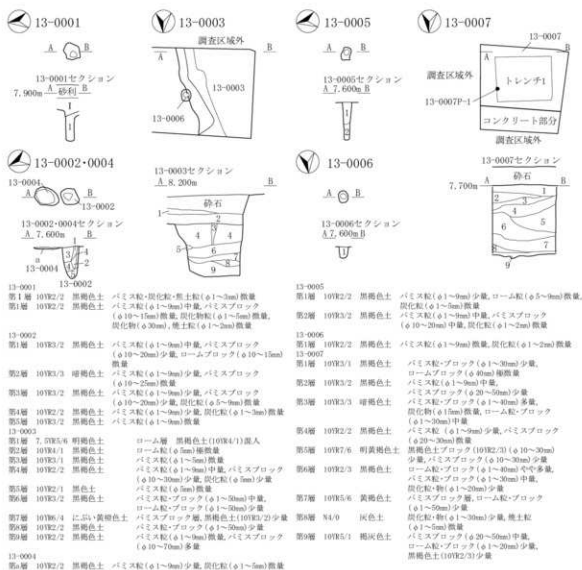


図 3-55 新田(1)遺跡平成25年度調査遺構配置図2



13-0008-0026-0027-0028-0029-0030-0043-0045-0046-0059-0064-0065-0067-0089

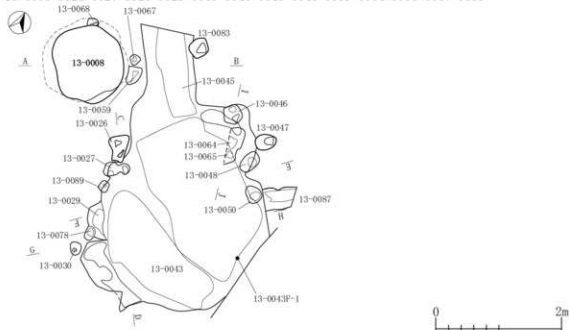


図 3-56 新田(1) 遺跡平成 25 年度調査遺構図 1

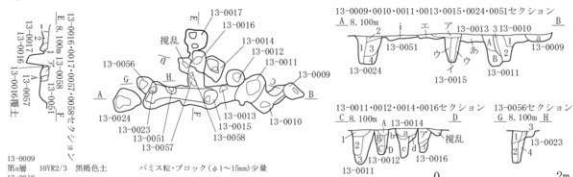


13-0008				
第1層 101R2/3	黒褐色土	バミス灰(φ5~9cm)少量,炭化灰(φ3~5cm)少量		
第2層 101R2/2	黒褐色土	バミス灰(φ1~5cm)少量,炭化灰(φ1~5cm)少量,焼土粒(φ3~5cm)少量		
第3層 101R2/2	灰黄褐色土	ローム灰(φ1~9cm)少量		
第4層 101R3/3	暗褐色土	バミス灰・ローム灰(φ1~5cm)少量		
第5層 101R6/4	にぶい黄褐色土	ローム・ゾロップ層		
第6層 101R2/1	黒色土	ローム灰・ゾロップ(φ1~15cm)少量		
第7層 101R2/2	黒褐色土	ローム灰(φ1~9cm)多量		
第8層 101R1, 7/1	黒色土	ローム灰(φ1~5cm)中量		
13-0026				
第A層 101R3/2	黒褐色土	バミス灰・ゾロップ(φ1~15cm)中量		
第B層 101R6/8	明黄褐色土	バミスゾロップ層		
第C層 101R2/3	黒褐色土	バミス灰・ゾロップ(φ1~30cm)多量		
13-0043				
第A層 101R2/3	黒褐色土	炭化灰(φ1~9cm)少量,焼土粒(φ1~9cm)中量		
第B層 101R2/2	黒褐色土	ローム・ゾロップ(φ20~50cm)中量		
第C層 101R1, 7/1	黒色土	炭化灰(φ1~5cm)中量,炭(φ1~3cm)中量		
第D層 101R3/2	黒褐色土	バミス灰(φ1~9cm)中量,炭化灰(φ1~5cm)少量		
13-0046				
第1層 101R2/3	黒褐色土	バミス灰・ゾロップ(φ1~30cm)中量		
第2層 101R2/2	黒褐色土	バミス灰(φ5~9cm)少量,炭化灰(φ5~9cm)少量,焼土粒(φ5cm)少量		
第3層 101R3/1	黒褐色土	バミス灰(φ5~9cm)少量,炭化灰(φ1~5cm)少量		
第4層 101R3/2	黒褐色土	バミス灰・ゾロップ(φ1~15cm)少量		
第5層 101R3/3	黒褐色土	バミス灰(φ5~9cm)少量		
第6層 101R7/8	黄褐色土	バミス灰		
第7層 101R3/2	黒褐色土	バミス灰・ゾロップ(φ1~30cm)多量,ローム・ゾロップ(φ20~30cm)少量		
13-0043(北)				
第A層 101R3/2	黒褐色土	ローム灰(φ1~5cm)少量,炭化灰(φ1~5cm)少量		
第B層 101R3/2	黒褐色土	ローム灰・ゾロップ(φ1~15cm)多量		
13-0043(南)				
第1層 101R3/2	黒褐色土	炭化灰(φ5cm)少量,焼土粒(φ1~5cm)中量		
第2層 101R2/3	黒褐色土	バミス灰・ゾロップ(φ1~15cm)少量,焼土粒(φ5cm)少量		
13-0029				
第A層 101R2/3	黒褐色土	バミス灰(φ1~9cm)少量,焼土粒(φ5cm)少量		
13-0043(E-F)				
第1層 101R3/1	黒褐色土	炭化灰(φ5cm)少量,焼土粒(φ1~5cm)少量		
第2層 101R3/2	黒褐色土	バミスゾロップ(φ15~20cm)少量,焼土粒(φ1~5cm)少量		
第3層 101R7/8	黄褐色土	バミス灰		
第4層 101R3/2	黒褐色土	バミス灰・ゾロップ(φ1~30cm)多量,ローム・ゾロップ(φ20~30cm)少量		
13-0030				
第A層 101R3/2	黒褐色土	ローム灰(φ1~5cm)少量		
第B層 101R3/2	黒褐色土	ローム灰・ゾロップ(φ1~15cm)多量		

13-0043(G-H)				
第5層 101R2/2	黒褐色土	しまり層		
第6層 101R5/4	にぶい黄褐色土	バミスゾロップ層,黒色土(101R2/1)少量		
第7層 101R2/2	黒褐色土	バミス灰(φ1~5cm)少量,ローム灰(φ1~5cm)少量,ローム・ゾロップ(φ10~30cm)少量,炭化灰(φ5cm)少量,焼土粒(φ1~5cm)少量		
13-0043(I-J)				
第2層 7.51R3/1	黒褐色土	ローム灰(φ1~9cm)少量,ローム・ゾロップ(φ10~30cm)層状に中量,炭化灰・物(φ1~20cm)少量,焼土粒・ゾロップ(φ1~30cm)層状に中量,焼土粒(φ1cm)少量		
第4層 7.51R4/1	褐灰色土	ローム灰・ゾロップ(φ1~50cm)層状に中量,焼土粒(φ5~9cm)少量		
第5層 101R3/2	黒褐色土	バミスゾロップ(φ50~200cm)層状に多量,ローム・ゾロップ(φ50~300cm)中量,炭化灰(φ5~9cm)少量,焼土粒(φ5~9cm)少量		
第6層 101R3/2	黒褐色土	焼土・ゾロップ(φ30cm)少量,炭(φ1~3cm)層状に多量		
第7層 101R6/8	明黄褐色土	バミスゾロップ層,黒褐色土(101R3/2)中量		
第8層 7.51R3/1	黒褐色土	ローム灰・ゾロップ(φ1~20cm)層状に中量,炭化灰・物(φ1~20cm)少量,焼土粒・ゾロップ(φ1~20cm)少量		
第9層 101R4/1	褐灰色土	バミス灰(φ5~9cm)少量,炭化灰(φ1~5cm)少量,焼土粒・ゾロップ(φ1~20cm)少量		
第10層 101R6/4	にぶい黄褐色土	ローム・ゾロップ(φ300cm)混じりバミス層		
第11層 101R3/3	暗褐色土	バミスゾロップ(φ50cm)少量,ローム・ゾロップ(φ1~30cm)多量		
第12層 7.51R5/3	にぶい褐色土	バミスゾロップ(φ50cm)とローム・ゾロップ(φ50cm)の混合土,13層との境界に黒色灰層		
第13層 101R5/3	にぶい黄褐色土	バミス灰(φ5~9cm)多量		
第14層 101R2/3	黒褐色土	ローム灰・ゾロップ(φ1~30cm)中量,炭化灰(φ5~9cm)少量		
13-0043(K-L)				
第5層 101R3/1	黒褐色土	バミス灰(φ1~5cm)少量,炭化灰(φ5cm)少量,焼土粒(φ1~5cm)少量		
第6層 101R3/2	黒褐色土	バミス灰(φ1~5cm)少量,バミスゾロップ(φ15cm)中量		
第7層 101R5/8	黄褐色土	バミスゾロップ・ゾロップ層,黒褐色土(101R3/2)少量		
第8層 101R7/8	黄褐色土	バミス層		
第9層 101R2/1	黒色土	焼土粒(φ5cm)少量		
第10層 101R5/4	にぶい黄褐色土	バミスゾロップ層,暗褐色土(101R3/4)中量		
第11層 101R1, 7/1	黒色土	ローム灰(φ5~9cm)少量		
13-0046				
第1層 101R3/2	黒褐色土	バミス灰(φ1~5cm)多量		
第2層 101R4/4	褐色土	ローム・ゾロップ層,暗褐色土(101R3/4)中量		
第3層 101R5/4	にぶい黄褐色土	バミス灰・ゾロップ(φ1~15cm)多量,ローム灰・ゾロップ(φ1~15cm)多量		
13-0064				
第A層 101R2/3	黒褐色土	バミス灰(φ1~9cm)中量,炭化灰(φ1~5cm)少量		
13-0065				
第7層 101R3/2	黒褐色土	バミス灰(φ1cm)少量		

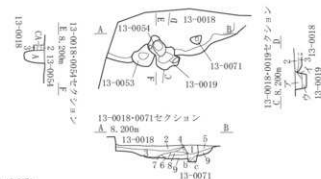
図 3-57 新田(1)遺跡平成 25 年度調査遺構図 2

13-0009-0010-0011・0012-0013-0014・0015-0016-0017-0023-0024-0051-0056-0057-0058



- | | |
|---------------------------------|--|
| 13-0009
第1層 10YR2/3 黒褐色土 | バミス灰・ブロック(φ1~15mm)少量 |
| 13-0010
第1層 10YR2/3 黒褐色土 | バミス灰(φ4~5mm)少量,バミスブロック(φ10~15mm)少量,焼土粒(φ5mm)少量 |
| 第2層 10YR2/2 黒褐色土 | バミス灰・ブロック(φ1~20mm)多量,ローム灰・ブロック(φ1~20mm)多量 |
| 第3層 10YR3/3 暗褐色土 | バミス灰・ブロック(φ1~15mm)少量,炭化粒(φ5mm)少量 |
| 13-0011
第1層 10YR2/2 黒褐色土 | バミス灰・ブロック(φ1~20mm)少量,ローム灰・ブロック(φ1~20mm)少量 |
| 第2層 10YR2/4 にぶい黄褐色土 | 黒褐色土(10YR3/2)少量 |
| 13-0013
第1層 10YR2/2 黒褐色土 | バミス灰(φ5~9mm)少量 |
| 13-0015
第1層 10YR2/3 黒褐色土 | バミス灰(φ5~9mm)中量 |
| 第2層 10YR2/3 暗褐色土 | しまり厚,バミス灰(φ1~5mm)少量 |
| 第3層 10YR2/4 黄褐色土 | 黒褐色土(10YR3/2)少量 |
| 第4層 10YR3/3 にぶい黄褐色土 | バミス灰・ブロック(φ1~20mm)多量 |
| 13-0024
第1層 10YR2/3 黒褐色土 | バミス灰(φ1~3mm)中量,バミスブロック(φ15~20mm)少量,炭化粒(φ15mm)微量 |
| 第2層 10YR2/2 黒褐色土 | バミス灰・ブロック(φ1~20mm)少量 |
| 第3層 10YR2/6 明黄褐色土 | バミス・ロームブロック層,黒色土(10YR2/1)少量 |
| 第4層 10YR2/8 黄褐色土 | バミスブロック層 |
| 13-0051
第1層 10YR2/3 黒褐色土 | バミス灰(φ5~9mm)少量 |
| 13-0056
第1層 10YR3/3 暗褐色土 | ローム灰(φ1~9mm)中量,炭化粒(φ1~3mm)少量 |
| 第2層 10YR2/2 黒褐色土 | ローム灰(φ1~3mm)極微量 |
| 第3層 10YR3/4 暗褐色土 | ローム灰(φ1~9mm)少量,ロームブロック(φ10~30mm)中量 |
| 13-0012
第1層 10YR4/1 暗灰色土 | |
| 第2層 10YR2/2 黒褐色土 | バミス灰(φ1~3mm)中量 |
| 第3層 10YR2/3 黒褐色土 | バミス灰(φ3~5mm)少量 |
| 第4層 10YR2/2 黒褐色土 | ローム灰(φ3~5mm)少量 |
| 13-0014
第1層 10YR2/2 黒褐色土 | バミス灰(φ3~5mm)微量 |
| 第2層 10YR2/2 黒褐色土 | ローム灰(φ1~5mm)微量 |
| 第3層 10YR3/4 にぶい黄褐色土 | ローム灰・ブロック(φ1~30mm)極多量 |
| 13-0016 C-D
第1層 10YR2/2 黒褐色土 | ローム灰(φ1~3mm)少量 |
| 第2層 10YR2/3 黒褐色土 | ローム灰(φ1mm)微量 |
| 視査 10YR2/4 灰黄褐色土 | 木炭屑入,ローム灰(φ1~5mm)少量 |
| 13-0016 E-F
第1層 10YR2/3 黒褐色土 | |
| 13-0017
第1層 10YR2/2 黒褐色土 | バミス灰(φ5~9mm)少量 |
| 第2層 10YR2/3 黒褐色土 | バミス灰(φ1~5mm)少量,炭化粒(φ3~5mm)微量,焼土粒(φ1~5mm)少量 |
| 13-0057
第1層 10YR2/3 黒褐色土 | バミス灰(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~5mm)微量 |
| 13-0058
第1層 10YR2/3 黒褐色土 | バミス灰(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~5mm)微量 |
| 第2層 10YR2/2 黒褐色土 | バミス灰(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~5mm)微量 |
| 第3層 10YR2/2 黒褐色土 | バミス灰(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~5mm)微量 |
| 第4層 10YR2/3 暗褐色土 | バミス灰(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~5mm)微量 |
| 13-0018
第1層 7.5YR2/1 黒褐色土 | 炭化粒(φ5mm)少量,焼土粒(φ1~2mm)微量 |
| 第2層 10YR4/2 灰黄褐色土 | バミスブロック(φ10~30mm)多量,焼土粒(φ5mm)少量 |
| 13-0018
第1層 7.5YR2/1 黒褐色土 | 炭化粒・物(φ5~15mm)少量,焼土粒(φ5~9mm)微量(13-0071)少量 |
| 第2層 10YR3/1 黒褐色土 | ローム灰(φ5~9mm)少量,炭化粒(φ5~9mm)少量,焼土粒(φ5~9mm)少量 |
| 第3層 10YR2/2 黒褐色土 | ローム灰(φ5~9mm)少量,炭化粒(φ5~9mm)少量,焼土粒(φ5~9mm)少量 |
| 第4層 7.5YR2/1 黒褐色土 | ローム灰(φ5~9mm)少量,炭化粒(φ5~9mm)少量,焼土粒(φ1~5mm)少量 |
| 第5層 7.5YR2/1 黒褐色土 | 炭化粒(φ5~9mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)少量,焼土ブロック(φ20mm)微量 |
| 第6層 7YR2/2 暗赤褐色土 | 焼土粒(φ1~5mm)少量 |
| 第7層 7.5YR2/1 黒褐色土 | バミス灰(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~5mm)中量 |
| 第8層 7YR5/4 にぶい赤褐色土 | 炭化粒(φ10~15mm)中量 |
| 第9層 7YR5/6 明赤褐色土 | 炭化粒・物(φ1~15mm)少量,焼土層 |
| 13-0018
第1層 10YR3/1 黒褐色土 | ローム灰(φ5~9mm)少量,炭化粒(φ5~9mm)微量,焼土粒(φ5~9mm)少量 |
| 第2層 10YR2/2 黒褐色土 | ローム灰(φ5~9mm)少量,炭化粒(φ5~9mm)少量,焼土粒・ブロック(φ1~15mm)少量 |
| 13-0019
第1層 10YR2/3 黒褐色土 | バミス灰(φ3~5mm)少量,炭化粒(φ5mm)少量 |
| 第2層 10YR2/2 黒褐色土 | バミス灰(φ3~5mm)少量,炭化粒(φ5mm)少量 |
| 第3層 10YR6/8 明黄褐色土 | 黒褐色土(10YR3/2)少量 |
| 13-0018
第1層 10YR3/1 黒褐色土 | ローム灰(φ5~9mm)少量,炭化粒(φ5~9mm)微量,焼土粒(φ5~9mm)少量 |
| 第2層 10YR2/2 黒褐色土 | ローム灰(φ5~9mm)少量,炭化粒(φ5~9mm)少量,焼土粒・ブロック(φ1~15mm)少量 |
| 13-0054
第1層 10YR3/2 黒褐色土 | バミス灰(φ1~3mm)微量,炭化粒(φ3~5mm)中量,焼土粒(φ1~3mm)多量 |

13-0018-0019-0054・0071



- | | |
|------------------------------|--|
| 13-0071
第1層 7.5YR2/1 黒褐色土 | 炭化粒(φ5mm)少量,焼土粒(φ1~2mm)微量 |
| 第2層 10YR4/2 灰黄褐色土 | バミスブロック(φ10~30mm)多量,焼土粒(φ5mm)少量 |
| 13-0018
第1層 7.5YR2/1 黒褐色土 | 炭化粒・物(φ5~15mm)少量,焼土粒(φ5~9mm)微量(13-0071)少量 |
| 第2層 10YR3/1 黒褐色土 | ローム灰(φ5~9mm)少量,炭化粒(φ5~9mm)少量,焼土粒(φ5~9mm)少量 |
| 第3層 10YR2/2 黒褐色土 | ローム灰(φ5~9mm)少量,炭化粒(φ5~9mm)少量,焼土粒(φ5~9mm)少量 |
| 第4層 7.5YR2/1 黒褐色土 | ローム灰(φ5~9mm)少量,炭化粒(φ5~9mm)少量,焼土粒(φ1~5mm)少量 |
| 第5層 7.5YR2/1 黒褐色土 | 炭化粒(φ5~9mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)少量,焼土ブロック(φ20mm)微量 |
| 第6層 7YR2/2 暗赤褐色土 | 焼土粒(φ1~5mm)少量 |
| 第7層 7.5YR2/1 黒褐色土 | バミス灰(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~5mm)中量 |
| 第8層 7YR5/4 にぶい赤褐色土 | 炭化粒(φ10~15mm)中量 |
| 第9層 7YR5/6 明赤褐色土 | 炭化粒・物(φ1~15mm)少量,焼土層 |
| 13-0018
第1層 10YR3/1 黒褐色土 | ローム灰(φ5~9mm)少量,炭化粒(φ5~9mm)微量,焼土粒(φ5~9mm)少量 |
| 第2層 10YR2/2 黒褐色土 | ローム灰(φ5~9mm)少量,炭化粒(φ5~9mm)少量,焼土粒・ブロック(φ1~15mm)少量 |
| 13-0019
第1層 10YR2/3 黒褐色土 | バミス灰(φ3~5mm)少量,炭化粒(φ5mm)少量 |
| 第2層 10YR2/2 黒褐色土 | バミス灰(φ3~5mm)少量,炭化粒(φ5mm)少量 |
| 第3層 10YR6/8 明黄褐色土 | 黒褐色土(10YR3/2)少量 |
| 13-0018
第1層 10YR3/1 黒褐色土 | ローム灰(φ5~9mm)少量,炭化粒(φ5~9mm)微量,焼土粒(φ5~9mm)少量 |
| 第2層 10YR2/2 黒褐色土 | ローム灰(φ5~9mm)少量,炭化粒(φ5~9mm)少量,焼土粒・ブロック(φ1~15mm)少量 |
| 13-0054
第1層 10YR3/2 黒褐色土 | バミス灰(φ1~3mm)微量,炭化粒(φ3~5mm)中量,焼土粒(φ1~3mm)多量 |

13-0018焼土範囲1・炭範囲



13-0018焼土範囲2



図 3-58 新田(1) 遺跡平成 25 年度調査遺構図 3



図 3-60 新田(1)遺跡平成 25 年度調査遺構図 5

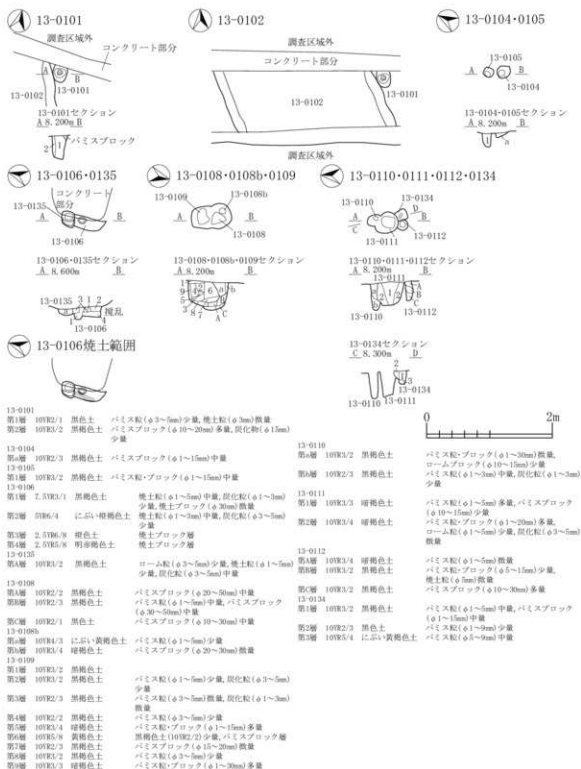
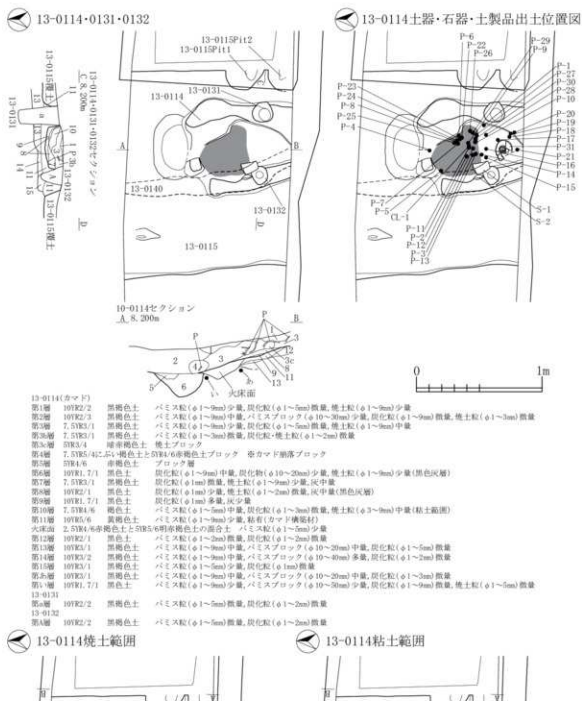
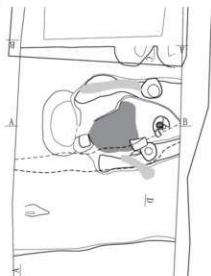


図 3-61 新田(1)遺跡平成25年度調査遺構図6



13-0114焼土範囲



13-0114粘土範囲

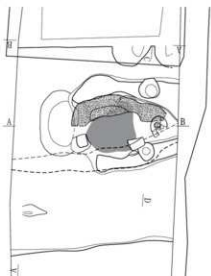


図 3-62 新田(1) 遺跡平成 25 年度調査遺構図 7

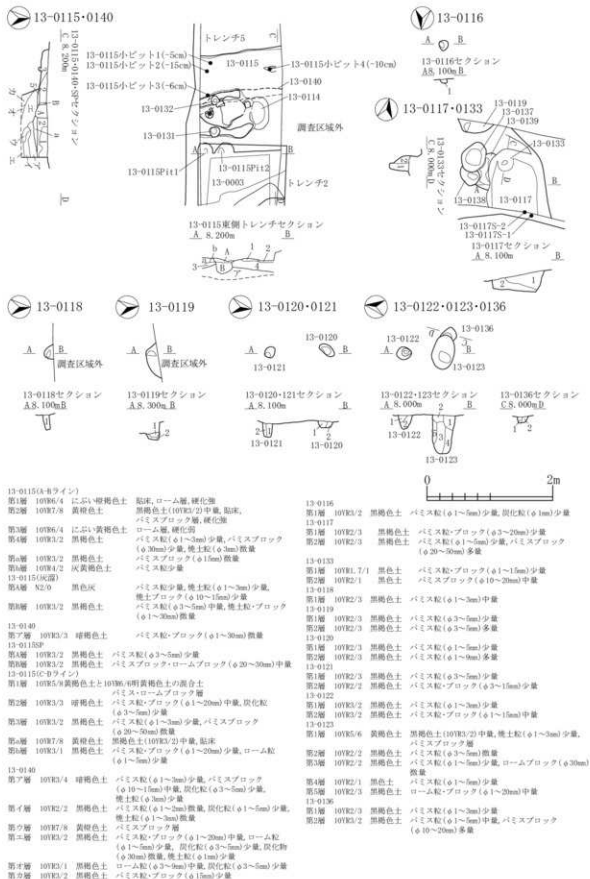


図 3-63 新田(1)遺跡平成25年度調査遺構図 8

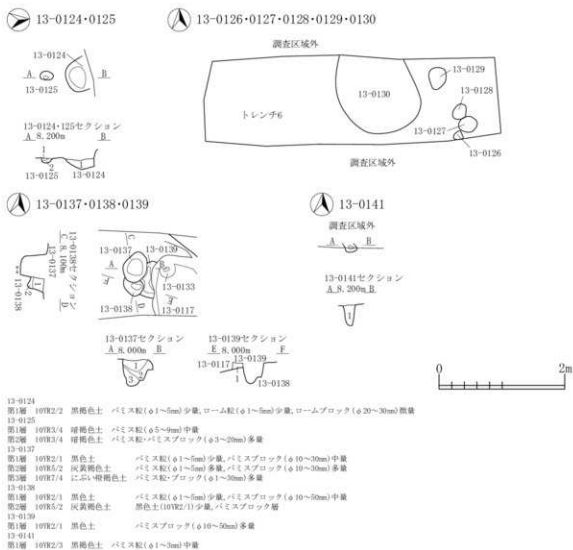


図 3-64 新田(1)遺跡平成25年度調査遺構図9

13-0114・0115-SI(竪穴建物跡) ※25N1-016のみ13-0115+0140

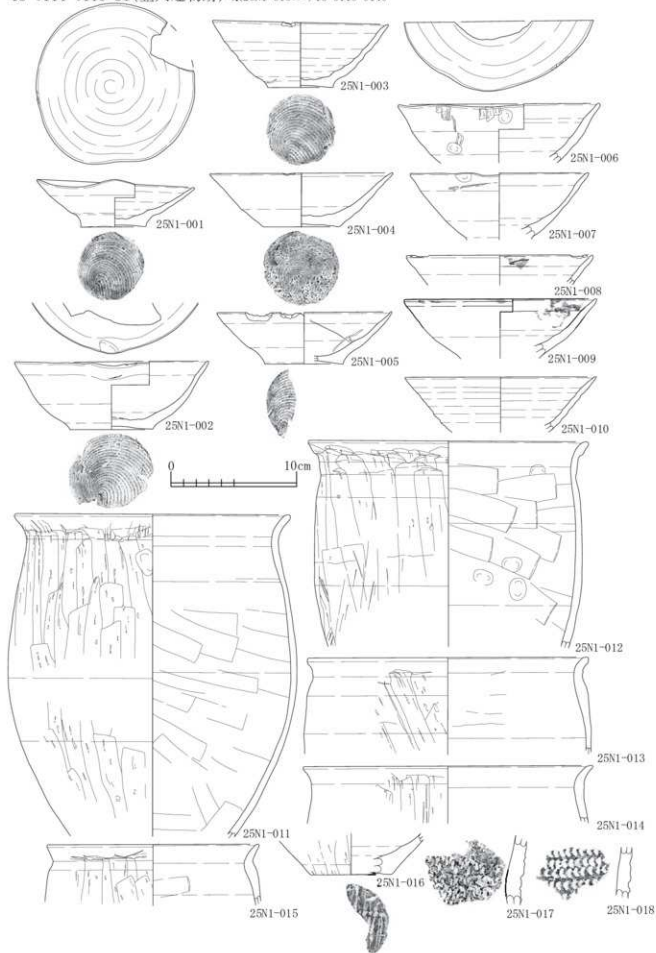
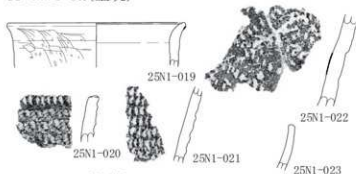


図 3-65 新田(1)遺跡平成25年度調査出土遺物1

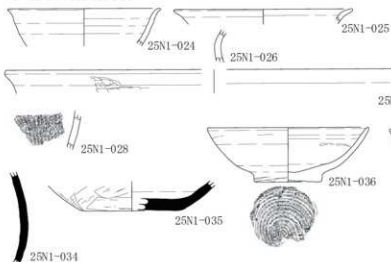
13-0008-SK(土坑)



13-0041-SK(土坑)



13-0018-SK(土坑)



13-0043-SK(土坑)

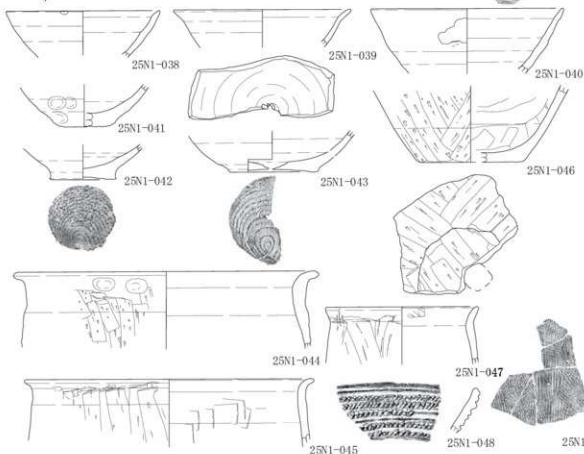
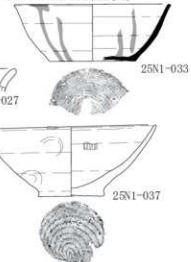
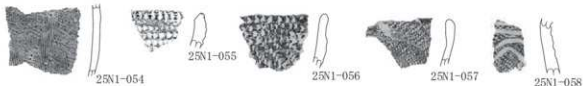


図 3-66 新田(1)遺跡平成 25 年度調査出土遺物 2

13-0043-SK(土坑)



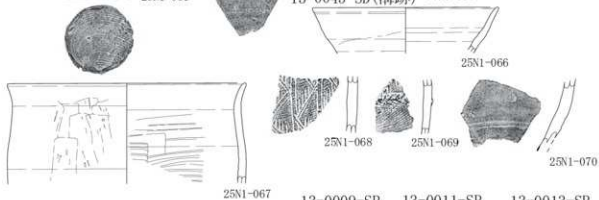
13-0003・0140-SD(溝跡) =B-4区SD-78



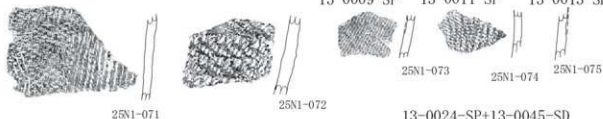
13-0007・0102-SD(溝跡)
=B-4区SDa-94a・b



13-0045-SD(溝跡)



13-0009-SP 13-0011-SP 13-0013-SP



13-0014-SP 13-0015-SP 13-0020-SP 13-0022-SP



13-0024-SP+13-0045-SD

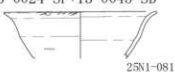


図 3-67 新田(1)遺跡平成25年度調査出土遺物3

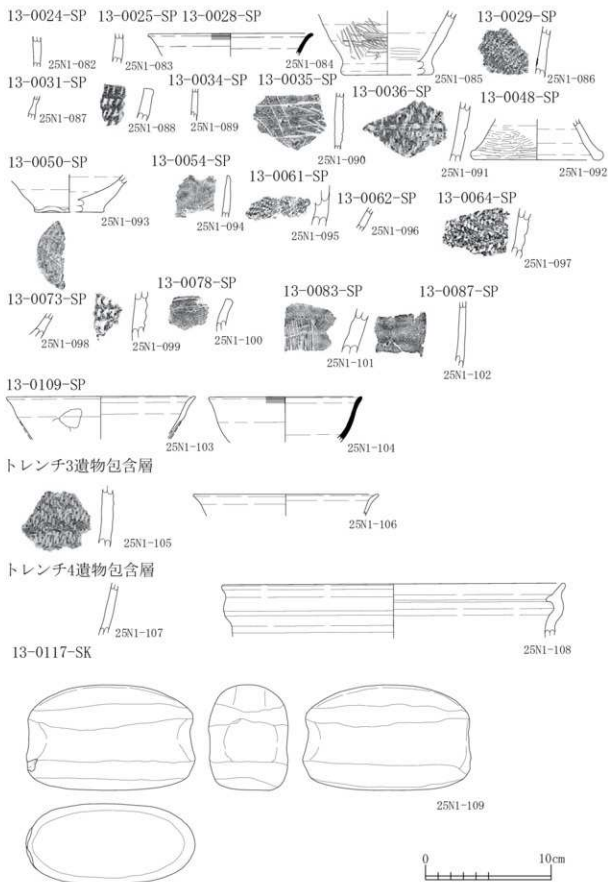
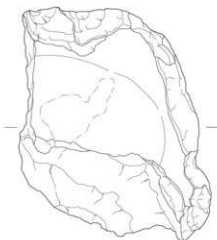


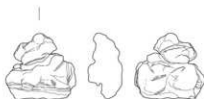
図 3-68 新田(1)遺跡平成25年度調査出土遺物4

13-0117-SK



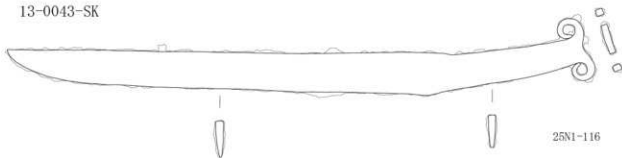
13-0087-SD

25N1-110



25N1-115

13-0043-SK



25N1-116



0 10cm

※25N1-117・118のみ原寸

13-0114-SI



25N1-111

13-0043-SK



25N1-112



25N1-113

13-0045-SD



25N1-114

13-0117-SK



25N1-117

13-0111-SP



25N1-118

図 3-69 新田(1)遺跡平成25年度調査出土遺物5

表3-44 平成25年度新田(1)遺跡遺構観察表

調査番号	遺構番号	遺構品目	調査区	位置		面積	新田遺跡	規模(m)			平面形	断面形	備考					
				X	Y			長	幅	高さ								
新3-36	13-0001	SF	トレンチ2	91225.267	-11545.796						29	23	21	+	+			
新3-36	13-0002	SF	トレンチ2	91235.741	-11546.353						26	24	52	+	+			
新3-36	13-0003	SB	トレンチ2	91225.761	-11547.179	13-0006	13-0001+13-0140+13-0006	(140)	(80)	64	溝状	(B)				トレンチ5調査時に13-0001、3+5、5a+94の調査範囲に相当		
新3-36	13-0004	SF	トレンチ2	91228.672	-11546.236						49	27	3	F	+			
新3-36	13-0005	SF	トレンチ2	91225.679	-11546.041						22	14	60	+	+			
新3-36	13-0006	SF	トレンチ2	91225.671	-11546.654	13-0003	13-0006+13-0003	36	15	18	F	+						
新3-36	13-0007	SB	トレンチ1	91225.511	-11538.815						-	-	117	-	-			
新3-36	13-0008	SB	トレンチ4	91225.156	-11555.690	13-0059+0068	13-0008+13-0059+0068	124	112	27	+	F				アラスカ式土坑		
新3-36	13-0009	SF	トレンチ4	91224.763	-11526.214	13-0010	13-0009+13-0010	34	20	11	+	+						
新3-36	13-0010	SF	トレンチ4	91224.450	-11525.981	13-0009+0011	13-0009+13-0010+13-0011	45	26	42	+	F						
新3-36	13-0011	SF	トレンチ4	91224.335	-11526.063	13-0010+0013	13-0010+13-0011+13-0013	58	23	30	+	+						
新3-36	13-0012	SF	トレンチ4	91223.823	-11526.883						33	29	40	+	+			
新3-36	13-0013	SF	トレンチ4	91223.726	-11527.729	13-0014+0015	13-0012+13-0014+0015	35	30	14	+	+						
新3-36	13-0014	SF	トレンチ4	91223.626	-11526.939						42	26	47	+	+			
新3-36	13-0015	SF	トレンチ4	91223.578	-11525.476	13-0013+0015	13-0015+13-0014+0015	45	35	45	+	+						
新3-36	13-0016	SF	トレンチ4	91223.570	-11525.967	13-0017+0018	13-0017+13-0018+13-0018	36	25	28	+	+						
新3-36	13-0017	SF	トレンチ4	91222.960	-11526.245	13-0016	13-0017+13-0016	26	22	12	+	+						
新3-36	13-0018	SB	トレンチ4	91222.134	-11526.225	13-0019+0023+0054+0057	13-0017+13-0018+13-0019+13-0019+13-0024	(286)	(282)	23	+	+					13-0020と同ーで本遺跡に統合	
新3-36	13-0019	SF	トレンチ4	91221.602	-11525.964	13-0018+0014	13-0019+13-0018+13-0019+13-0024	58	27	18	+	+						
新3-36	13-0020	SB															13-0018と同ー	
新3-36	13-0021	SF	トレンチ4	91221.598	-11525.432						40	29	23	+	+			
新3-36	13-0022	SF	トレンチ4	91221.865	-11525.453	13-0022	13-0022+13-0022	18	12	10	F	+						
新3-36	13-0023	SF	トレンチ4	91222.726	-11525.220	13-0026	13-0023+13-0026	15	12	10	+	+						
新3-36	13-0024	SF	トレンチ4	91222.831	-11524.817	13-0021	13-0024+13-0021	41	26	44	+	+						
新3-36	13-0025	SF	トレンチ4	91225.036	-11524.974	13-0029	13-0025+13-0029	69	24	8	+	+						
新3-36	13-0026	SF	トレンチ4	91224.384	-11524.790	13-0043	13-0026+13-0043	42	29	26	+	+						
新3-36	13-0027	SF	トレンチ4	91223.811	-11524.684	13-0028	13-0027+13-0028	34	19	25	+	+						
新3-36	13-0028	SF	トレンチ4	91223.842	-11524.415	13-0027+0043	13-0027+13-0029+13-0043	-	-	22	-	+					セクション内	
新3-36	13-0029	SF	トレンチ4	91223.687	-11524.422	13-0043+0029	13-0029+13-0029+13-0043	52	25	30	+	+						
新3-36	13-0030	SF	トレンチ4	91222.524	-11524.225						23	12	26	+	+			
新3-36	13-0031	SF	トレンチ4	91222.648	-11524.277						22	19	72	+	+			
新3-36	13-0032	SF	トレンチ4	91221.366	-11524.287						22	25	18	+	+			
新3-36	13-0033	SF	トレンチ4	91223.251	-11524.687	13-0034+0015+0052	13-0031+13-0033+13-0025+0052	29	22	9	+	+						
新3-36	13-0034	SF	トレンチ4	91220.925	-11524.628	13-0033+0025	13-0031+13-0033+13-0025	24	22	66	+	+						
新3-36	13-0035	SF	トレンチ4	91221.675	-11525.020	13-0032+0034+0036+0061	13-0034+13-0032+13-0025+0052+13-0025+13-0061	26	24	69	+	+						
新3-36	13-0036	SF	トレンチ4	91220.690	-11525.244	13-0035+13-0061	13-0036+13-0025+13-0061	28	23	27	+	+						
新3-36	13-0037	SF	トレンチ4	91220.752	-11524.089						20	25	11	+	+			
新3-36	13-0038	SF	トレンチ4	91221.678	-11524.676						20	22	20	+	+			
新3-36	13-0039	SF	トレンチ4	91221.108	-11523.624	13-0040+0041	13-0039+13-0040+0041	24	23	20	+	+						
新3-36	13-0040	SF	トレンチ4	91221.620	-11523.420	13-0039+0041	13-0040+13-0039+13-0040+13-0041	24	20	26	+	+						
新3-36	13-0041	SB	トレンチ4	91220.845	-11523.891	13-0039+0040+0066+0086+0090+0091+0092	13-0039+0040+0086+0091+0092+13-0041	(122)	(100)	25	+	+						
新3-36	13-0042	SF	トレンチ4	91221.821	-11523.726						23	18	79	+	+			
新3-36	13-0043	SB	トレンチ4	91222.285	-11522.203	13-0027+0028+0029+0040+0047+0048+0050+0065+0069	13-0043+2層+13-0028+13-0027+0045+13-0043+13-0029+13-0043+13-0040+0047+0048+0050+0065+0069+0065+0069	243	260	99	+	F+						溝状土上
新3-36	13-0044	SB																
新3-36	13-0045	SB	トレンチ4	91225.763	-11524.890	13-0043+0044+0079+0080+0091+0092	13-0045+0046+0047	178	22	72	溝状	+						
新3-36	13-0046	SF	トレンチ4	91225.823	-11523.228	13-0045	13-0046+13-0043	26	27	21	+	+						
新3-36	13-0047	SF	トレンチ4	91225.569	-11522.686	13-0043	13-0047+13-0043	25	22	30	+	+						

図説番号	遺構番号	遺構名	調査区	位置		築 造	新田遺跡	規模(m)			平面形	断面形	備 考
				X	Y			長軸	短軸	厚さ			
図 3-30	13-0018	溝	トレンチ 4	9225.090	-1552.717	13-0018	13-0018(13-0018)	25	25	28	■	○	
図 3-30	13-0019	溝	トレンチ 4	9224.972	-1552.615			28	23	26	■	○	
図 3-30	13-0020	溝	トレンチ 4	9224.821	-1552.492	13-0043	13-0020(13-0043)	26	23	69	■	○	
図 3-30	13-0021	溝	トレンチ 4	9223.892	-1553.361	13-0024-0025	13-0021(13-0024・13-0025)	32	25	8	■	○	1
図 3-30	13-0022	溝	トレンチ 4	9222.186	-1553.456	13-0022	13-0022(13-0022)	40	26	31	■	○	
図 3-30	13-0023	溝	トレンチ 4	9221.529	-1553.687	13-0014-0014	13-0023(13-0014・13-0014)	29	28	35	■	○	
図 3-30	13-0024	溝	トレンチ 4	9221.735	-1553.116	13-0014-0023	13-0024(13-0014・13-0023)	32	23	30	■	○	
図 3-30	13-0025	溝	トレンチ 4	9225.347	-1552.581			23	30	28	■	○	1
図 3-30	13-0026	溝	トレンチ 4	9222.563	-1553.236	13-0023	13-0026(13-0023)	25	23	31	■	○	
図 3-30	13-0027	溝	トレンチ 4	9223.246	-1553.622	13-0024-0026	13-0027(13-0024・13-0026)	17	7	11	■	○	
図 3-30	13-0028	溝	トレンチ 4	9223.366	-1553.717	13-0026-0027	13-0028(13-0026・13-0027)	26	20	13	■	○	
図 3-30-1	13-0029	溝	トレンチ 4	9225.405	-1553.063	13-0028	13-0029(13-0028)	30	19	22	■	○	
図 3-30	13-0030	溝	トレンチ 4	9224.402	-1552.792	13-0043-0072	13-0030(13-0043・0072)	36	27	17	■	○	
図 3-30	13-0031	溝	トレンチ 4	9226.942	-1554.952	13-0025-0026	13-0031(13-0025・0026)	32	23	22	(a)		
図 3-30	13-0032	溝	トレンチ 4	9222.486	-1554.146	13-0043	13-0032(13-0043)	23	23	20	■	○	1
図 3-30	13-0033	溝	トレンチ 4	9222.300	-1554.906	13-0043	13-0033(13-0043)	29	23	24	■	○	
図 3-30-2	13-0034	溝	トレンチ 4	9225.235	-1553.859	13-0043-0046-0065	13-0034(13-0043・0046-0065)	35	23	10	(a)	(b)	
図 3-30-2	13-0035	溝	トレンチ 4	9225.622	-1553.989	13-0043-0064	13-0035(13-0043・0064)	21	16	9	(a)	(b)	
図 3-30	13-0036	溝	トレンチ 4	9228.703	-1553.364	13-0043-0066	13-0036(13-0066・13-0066)	30	27	19	■	○	1
図 3-30	13-0037	溝	トレンチ 4	9225.675	-1553.114			17	14	-	■	○	平面図のみ
図 3-30	13-0038	溝	トレンチ 4	9225.876	-1553.922	13-0008	13-0038(13-0008)	18	16	20	(a)		
図 3-30	13-0039	溝	トレンチ 4	9223.112	-1553.588			20	19	18	■	○	1
図 3-30	13-0070	溝	トレンチ 4	9225.368	-1554.862	13-0023	13-0070(13-0023)	16	16	8	■	○	
図 3-30	13-0071	溝	トレンチ 4	9222.371	-1553.204	13-0038	13-0071(13-0038)	17	13	13	■	○	
図 3-30	13-0072	溝	トレンチ 4	9224.663	-1553.763	13-0060-0073	13-0072(13-0072・13-0073)	21	18	27	■	○	
図 3-30	13-0073	溝	トレンチ 4	9224.792	-1553.391	13-0072	13-0073(13-0072)	23	28	45	■	○	
図 3-30	13-0074	溝	トレンチ 4	9224.789	-1553.427			20	17	40	■	○	1
図 3-30	13-0075	溝	トレンチ 4	9225.137	-1553.367			27	17	13	■	○	
図 3-30	13-0076	溝	トレンチ 4	9225.662	-1553.494			22	18	16	■	○	
図 3-30	13-0077	溝	トレンチ 4	9225.979	-1553.267			17	14	25	■	○	1
図 3-30	13-0078	溝	トレンチ 4	9222.368	-1554.440	13-0029	13-0078(13-0029)	23	17	18	■	○	
図 3-30	13-0079	溝	トレンチ 4	9225.667	-1554.649	13-0043	13-0079(13-0043)	16	9	5	■	○	1
図 3-30	13-0080	溝	トレンチ 4	9225.826	-1554.862	13-0043	13-0080(13-0043)	20	16	8	■	○	1
図 3-30	13-0081	溝	トレンチ 4	9225.769	-1554.411	13-0043	13-0081(13-0043)	23	12	9	■	○	1
図 3-30	13-0082	溝	トレンチ 4	9221.854	-1554.735	13-0082	13-0082(13-0033)	36	19	42	■	○	1
図 3-30	13-0083	溝	トレンチ 4	9228.284	-1554.247	13-0043	13-0083(13-0043)	29	27	36	■	○	1
図 3-30	13-0084	溝	トレンチ 4	9222.888	-1552.278			26	23	47	■	○	1
図 3-30	13-0085	溝	トレンチ 4	9221.634	-1552.344			32	30	54	■	○	1
図 3-30	13-0086	溝	トレンチ 4	9220.867	-1553.203	13-0041-0066	13-0086(13-0066・13-0041)	21	14	9	■	○	1
図 3-30	13-0087	溝	トレンチ 4	9224.821	-1552.863	13-0043	13-0087(13-0043)	49	33	12	(b)		
図 3-30	13-0088	溝	トレンチ 4	9225.625	-1552.145			20	15	17	■	○	1
図 3-30	13-0089	溝	トレンチ 4	9223.661	-1554.596	13-0043	13-0089(13-0043)	17	14	17	■	○	1
図 3-30	13-0090	溝	トレンチ 4	9221.327	-1552.840	13-0041	13-0090(13-0041)	12	11	31	■	○	1
図 3-30	13-0091	溝	トレンチ 4	9221.043	-1553.734	13-0041	13-0091(13-0043)	13	10	17	■	○	1
図 3-30	13-0092	溝	トレンチ 4	9220.266	-1552.612	13-0041	13-0092(13-0043)	13	9	54	■	○	1
13-0093	溝												
13-0094	溝												
13-0095	溝												
13-0096	溝												
13-0097	溝												
13-0098	溝												
13-0099	溝												
13-0100	溝												
図 3-41	13-0101	溝	トレンチ 2	9225.975	-1552.622			26	22	18	■	○	
図 3-41	13-0102	溝	トレンチ 2	9225.626	-1553.364			23	16	16	溝状	○	トレンチ上の調査時は平面図のみ、トレンチ下の調査で 13-0087 に付属
13-0103	溝												

区間番号	路線番号	路線名	階数	位置		業種	新設路線	距離(m)			平面積	断面積	備考		
				X	Y			区間	初期	増分					
区3-01	13-0004	法													
区3-01	13-0005	法	トンナシ	9225.507	-1042.104					17	16	21	e	e	ビラツの駅から西、平塚 モーション設置
区3-01	13-0006	法	トンナシ	9225.569	-1043.834	13-0135	13-0006/13-0135			30	211	19	e	e+f	コンクリート基礎によって 大断面の構築
	13-0007	法													
区3-01	13-0008	法	トンナシ	9225.673	-1044.513	13-0100-0009	13-0008/13-0100- 0109			23	26	22	e	e	
区3-01	13-0009	法	トンナシ	9225.699	-1044.626	13-0100-0009	13-0009/13-0100,13- 0100/13-0009			29	18	19	e	e	
区3-01	13-0009	法	トンナシ	9225.637	-1044.449	13-0100-0009	13-0009/13-0009,13- 0100/13-0009			25	29	40	d	e+f	
区3-01	13-0110	法	トンナシ	9225.866	-1044.967	13-0111	13-0109/13-0111			10	16	42	e	e	
区3-01	13-0111	法	トンナシ	9225.660	-1044.860	13-0110	13-0111/13-0110			14	32	17	e	e	
区3-01	13-0112	法	トンナシ	9225.628	-1045.029					17	15	14	h	h	
	13-0113	法													
区3-02-03	13-0114	法-既	トンナシ	9225.836	-1046.187	13-0115-0112-0112	13-0114/13-0115,13- 0110/13-0002/13- 0114/13-0112-0112			100	36	29	e	e	13-0115のカナメに相当
区3-02-03	13-0115	既	トンナシ	9225.761	-1046.431	13-0114-0110	13-0114/13-0115/13- 0110			(260)	(132)	18	h	h	13-0114は車庫棟のラッ ド、13-0106はビルまで敷 地が出た。最古東洋軌 550m程度
区3-03	13-0116	法	トンナシ	9225.368	-1049.389					15	19	7	e	h	
区3-03	13-0117	法	トンナシ	9225.552	-1050.177	13-0120-0120	13-0117/13-0120-0120			(130)	87	32	e	e+h	
区3-03	13-0118	法	トンナシ	9226.292	-1049.720					19	14	24	e	d	
区3-03	13-0119	法	トンナシ	9226.205	-1050.184					40	10	12	e	d	
区3-03	13-0120	法	トンナシ	9225.967	-1051.439					27	14	11	f	e	
区3-03	13-0121	法	トンナシ	9224.977	-1051.197					17	15	22	f	d	
区3-03	13-0122	法	トンナシ	9225.755	-1051.967					24	19	22	h	e	
区3-03	13-0123	法	トンナシ	9225.173	-1051.675	13-0130	13-0123/13-0130			14	24	41	f	e	
区3-04	13-0124	法	トンナシ	9225.996	-1052.520					36	35	15	e	d	
区3-04	13-0125	法	トンナシ	9225.686	-1052.351					29	14	7	f	h	
区3-04	13-0126	法	トンナシ	9225.937	-1052.267					15	11	-	e	-	プラン確認のみ
区3-04	13-0127	法	トンナシ	9225.281	-1052.096					30	25	-	e	-	プラン確認のみ
区3-04	13-0128	法	トンナシ	9225.987	-1052.213					36	18	-	e	-	プラン確認のみ
区3-04	13-0129	法	トンナシ	9226.025	-1052.585					36	28	-	e	-	プラン確認のみ
区3-04	13-0130	法	トンナシ	9225.837	-1052.565					(110)	(11)	-	e	-	プラン確認のみ
区3-02	13-0131	法	トンナシ	9225.360	-1047.504	13-0114	13-0131/13-0114			17	15	32	e	e	
区3-02	13-0132	法	トンナシ	9225.260	-1048.412	13-0114	13-0132/13-0114			15	12	17	f	e	
区3-03	13-0133	法	トンナシ	9225.770	-1050.373	13-0117	13-0133/13-0117			36	25	10	f	e	
区3-03	13-0134	法	トンナシ	9225.673	-1044.869	13-0111-0112	13-0134/13-0111-0112			17	15	22	d	e	
区3-03	13-0135	法	トンナシ	9225.784	-1043.823	13-0106	13-0135/13-0106			25	20	10	f	e	
区3-03	13-0136	法	トンナシ	9225.139	-1051.494	13-0125	13-0136/13-0125			22	14	10	e	e	
区3-04	13-0137	法	トンナシ	9225.741	-1050.868	13-0130-0130	13-0137/13-0130- 0130			30	37	41	f	e+f	
区3-04	13-0138	法	トンナシ	9225.632	-1050.842	13-0127-0129	13-0138/0127,13-0130- 13-0129			18	22	26	f	e	
区3-04	13-0139	法	トンナシ	9225.563	-1050.630	13-0127-0127-0136	13-0139/13-0127,13- 0129/13-0128/13-0127			27	17	10	e	e	
区3-03	13-0140	法	トンナシ	9225.772	-1048.082	13-0114-0115	13-0140/13-0115			(12)	99	25	調伏	e	トンナシ、13-0103と同 一、全体の幅200m
区3-04	13-0141	法	トンナシ	9226.377	-1049.877					17	15	32	e	d	

表 3-46 平成25年度新田(1)遺跡出土石器観察表

図版	番号	出土地区	遺構名	層位	中分類	小分類	最大計測値(cm)			重量(g)	番号	整理番号
							長さ	幅	厚さ			
図3-68	25N1-109	トレンチ5	13-0117	覆土	礎石器	北海道式石冠	13.4	8.4	6.4	1,220	1	と-1
図3-69	25N1-110	トレンチ5	13-0117	覆土	礎石器	台石	18.4	15.3	7.0	2,120	2	と-2

表 3-47 平成25年度新田(1)遺跡出土土製品観察表

図版	番号	年度	出土地区	遺構名	層位	種別	器種	法量			重量(g)	調整等	No.	実測番号
								長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)				
図3-69	25N1-111	025	トレンチ5	13-0114	3階C-1	土製品	支脚	139.0	67.0	61.0	486.6	外面へラ,内面-	1	と-1
図3-69	25N1-112	025	トレンチ4	13-0043	覆土F-X	土製品	支脚	39.0	45.0	25.0	30.1	外面へラ,内面ナブ	55	No.と-55
図3-69	25N1-113	025	トレンチ4	13-0043	上覆土D 跡F-X	土製品	埴成 粘土塊	70.0	41.0	30.5	60.8	内外面紅目紋江敷	56	No.と-56
図3-69	25N1-114	025	トレンチ4	13-0045	覆土F-X	土製品	支脚	36.0	40.0	21.0	22.5	外面へラ,内面ナブ	64	No.と-64
図3-69	25N1-115	025	トレンチ4	13-0087	-	土製品	埴成 粘土塊	58.0	52.0	22.0	35.6	-	76	No.と-76

表 3-48 平成25年度新田(1)遺跡出土鉄製品観察表

図版	番号	年度	出土地区	遺構名	層位	遺物番号	遺物名	法量			重量(g)	備考	No.
								長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)			
図3-69	25N1-116	025	トレンチ4	13-0043	東壁中層	F-1	鉄製品・刀	409	56	19.0	156.7	柄端部に有線	1

表 3-49 平成25年度新田(1)遺跡出土古銭観察表

図版	番号	年度	出土地区	遺構名	層位	遺物番号	直径(cm)	穿孔(cm)	外輪幅(cm)	内輪幅(cm)	重量(g)	銭名	国名	治政年	書体	備考	整理番号
図3-69	25N1-118	025	トレンチ4	13-0114	覆土	M-X	2.2	0.5	-	0.13	1.9	-	-	-	-	摩滅不明	1



写真3-12 13-0003・0140セクション東側(N→)



写真3-13 13-0003・0140, 13-0115セクション西側(N→)



写真3-14 13-0007・0102セクション1(N→)



写真3-15 13-0007・0102セクション2(N→)



写真3-16 13-0008セクション(SE→)



写真3-17 13-0008完掘(SE→)



写真3-18 13-0018, 13-0071セクション(E→)



写真3-19 13-0018, 13-0071完掘(S→)



写真3-20 13-0041掘方完掘(S→)



写真3-21 13-0043作業風景(E→)



写真3-22 13-0043鉄製品出土状況1(W→)



写真3-23 13-0043鉄製品出土状況2(W→)



写真3-24 13-0043セクション(SE→)



写真3-25 13-0045セクション(SE→)



写真3-26 13-0043東壁(W→)



写真3-27 13-0043・13-0045完掘(E→)



写真3-28 トレンチ4調査区風景(S→)



写真3-29 13-0114セクション(W→)



写真3-30 13-0114遺物出土状況(N→)



写真3-31 13-0114, 13-0115完掘(N→)



写真3-32 調査後風景(E→)

13-0114・0115-SI(竪穴建物跡) ※25N1-016のみ13-0115+0140



13-0008-SK(土坑)



13-0018-SK(土坑)



13-0041-SK(土坑)

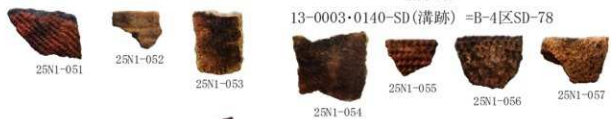


写真 3-33 新田(1)遺跡平成25年度調査出土遺物写真-1

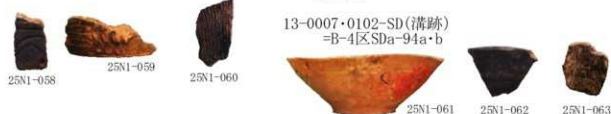
13-0043-SK(土坑)



13-0043-SK(土坑)



13-0003-0140-SD(溝跡) =B-4区SD-78



13-0007-0102-SD(溝跡)
=B-4区SDa-94a・b



13-0045-SD(溝跡)



写真 3-34 新田(1)遺跡平成25年度調査出土遺物写真-2



写真 3-35 新田(1)遺跡平成25年度調査出土遺物写真-3

13-0043-SK



25N1-112

13-0045-SD



25N1-113



25N1-114

13-0087-SD



25N1-115

13-0043-SK



25N1-116

13-0117-SK



25N1-117

13-0111-SP



25N1-118

第IV章 分析5

第1節 高間(6)遺跡出土木製品の樹種 同定調査結果

(株)吉田生物研究所 汐見 真
京都造形芸術大学 岡田 文男

1. 試料

試料は青森市高間(6)遺跡から出土した文房具
1点である。

2. 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柀目(放射断面)、板目(接
線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作
製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定
した。

3. 結果

樹種同定結果(針葉樹1種)の表と顕微鏡写真を
示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) スギ科スギ属スギ(*Cryptomeria japonica* D. Don)

(遺物 No. 1)

(写真 No. 1)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は
やや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並

んでいた。柀目では放射組織の分野壁孔は典型的な
スギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織
はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむ
ね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として
太平洋側に分布する。

◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出
版(1988)

島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社(1982)

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載I~V」京都大
学木質科学研究所(1990)

北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編I・II」保育
社(1979)

深澤和三「樹体の解剖」海青社(1997)

◆使用顕微鏡◆

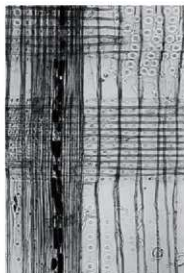
Nikon
MICROFLEX UFX-DX Type 115

表1 高間(6)遺跡樹種同定結果一覧表

番号	図版番号	調査年	遺跡	遺構名	層位	W番号	器種	樹種		備考
1	1-7-007	01	高間(6)	トノリ6内遺構外	腐食土	—	木簡	スギ科	スギ属スギ	木簡研究24号(1)



1. スギ属スギ×40, 木口



1. スギ属スギ×100, 柀目



1. スギ属スギ×40, 板目

第2節 高間(1)遺跡出土木材の年輪年代測定

大山 幹成

(東北大学学術資源研究公開センター植物園)

1. はじめに

高間(1)遺跡は、青森市新成川右岸の沖積地及び丘陵地上に位置する石江遺跡群の一つで、北側には新田(1)・(2)遺跡、南東側に高間(6)遺跡が隣接している。同遺跡が位置するのは、新成川右岸の河岸段丘に相当する丘陵の一部で、標高は4.8~12.2mである。同遺跡では縄文時代~近・現代の遺構が検出されている。この遺跡では出土した木材の一部で既に年輪年代測定が実施されているが(光谷2007)、本稿においては、同遺跡の古代及び中世の遺構で出土した木質遺物15点について、既往の年輪年代測定の遺試を含めた年輪年代学的解析を行うことを目的とした。

2. 試料と方法

2.1. 試料

青森市教育委員会に水浸状態で保管されていた出土アスナロ材から年輪数が70~80層以上ある試料15点を選別した。選別した試料の概要を表1に示す。試料のうち1点(AOTM001, E698)は、最外年輪の年輪年代が、西暦1493年と報告されている試料である(光谷2007)。AOTM001は、この報告時の年輪年代測定の際に切断されていたが、他の試料について新たに切断と切断面の切削を実施し、木口面の計測と辺材の有無の確認を行った。なお、切断は原則として最も外側の年輪が残存している箇所で行った。

2.2. 方法

試料の木口面表面を、実体顕微鏡下で観察しながら0.01mm単位で年輪幅を測定した。クロスデーティング⁽¹⁾は年輪考古学で一般に広く用いられている方法(例えば、Baillie, 1982; 奈良国立文化財研究所, 1990; English Heritage, 2004)に従い、年輪解析用ソフトウェアPAST4(SCIEM Inc.)を用いて年輪曲線をプロットしたグラフの目視評価と統計評価を併せて行った。統計評価は、スチューデントのt値(t_{90} ; Baillie and Pilcher, 1973)、およびGleichläufigkeit(Gl; Eckstein and Bauch, 1969)を用いた。クロスデーティングの具体的な方法については、紙幅の制限があるので米延ほか(2010)を参照されたい。

クロスデーティングは、まず各試料間相互で行い、次に各試料が複数の試料に対して矛盾の無い年代関係となるかどうか反復検証(Replication)⁽²⁾を

行った。クロスデーティングできた試料は同じ年代グループとし、重なり合う年の年輪幅をアンサンブル平均⁽³⁾して、高間(1)遺跡の標準年輪曲線(コード名:AOTM)を作製した。さらに、この標準年輪曲線と各試料間でのクロスデーティングも行った。得られた高間(1)遺跡の標準年輪曲線(AOTM)と暦年代既知⁽⁴⁾の新田(1)遺跡の標準年輪曲線(コード名:AONT, AD681-1048)(斎崎ほか2010)との間でクロスデーティングを行い、高間(1)遺跡試料の暦年代を決定した。

3. 結果と考察

3.1. 年輪年代測定結果

年輪幅を計測した試料15点のうち、個体間のクロスデーティングによって、グループ1として7点(AOTM004, 007, 009, 010, 011, 012, 013)、グループ2として2点(AOTM005, 008)の相対年代⁽⁵⁾を確定することができた。グループ1の試料は、D区SE-001出土が6点、E区SEa-10出土が1点である。グループ2の試料は、2点ともE区SEa-05出土である。

グループ1の7点は、個体間および高間(1)遺跡の暫定的な標準年輪曲線との反復検証の結果、統計評価、目視評価とも十分に良好であったため、確定した年代関係でアンサンブル平均し、高間(1)遺跡における標準年輪曲線(AOTM)を構築した。AOTMの全長は270年であった。さらに、AOTMを新田(1)遺跡の標準年輪曲線(AONT)とクロスデーティングしたところ、西暦748-1017年の位置で照合が成立した。このときのt値は14.9と極めて高い値が得られた。

以上の結果をまとめたものが、表1および図1である。表1では、各試料の統計値と、作製した標準年輪曲線(AOTM、AONT)と各試料間のクロスデーティングに関する統計値を示した。各標準年輪曲線(AOTMとAONT)と各試料間とのクロスデーティングは、いずれも問題無く成立し、十分に高い値が得られている。また、各試料自身(α)が含まれないAOTM標準年輪曲線(表1:標準年輪曲線- α)と各試料(α)間のクロスデーティングも行ったが、いずれも問題無く成立した。図1では、グループ1に含まれる7試料の年輪曲線、そのアンサンブル平均である標準年輪曲線(AOTM)およびAONTを示しているが、目視評価も良好であると判断できる。

一方、グループ2は2試料しかないため反復検証の確認はできないが、試料間で $r=6.98$ (overlap=101年)と高いt値が得られ、目視でも全体を通した同調性が認められた。しかしながら、この2試料をアンサンブル平均した年輪曲線は、AOTMおよびAONTとは照合できず、暦年代を確定することはで

きなかった。

3.2. 前回報告との比較

試料 AOTM001 (E698, SEa-02 下層出土) は、既往の年輪年代測定 (光谷 2007) において、最外年輪の年輪年代が、西暦 1493 年と報告されている試料である。この年代値については、SEa-02 下層から相伴する漆器罐の年代観 (13 世紀中から後半) や初段の放射性炭素年代と整合的でないため、本報告で追試をおこなった。

試料としては、AOTM001 (E698) だけでなく、同じく下層から出土した AOTM002 (E699) も対象とした。切断されていた面で再度年輪幅を計測し、AOTM、AONT、青森県猿が森ヒバ埋没林から得られた標準年輪曲線 (AOSR) (箱崎 2011) など複数の標準年輪曲線とクロスデーティングを行ったが、照合は成立せず、年代値は得られなかった。

光谷 (2007) によれば、西暦 745 ~ 1329 年のヒバの暦年標準パターン (標準年輪曲線) と $r=6.3$ で照合が成立したとされている。しかしながら、標準パターンと重なり合う年数についての記述や年輪のグラフがないため、結果について検証することができなかった。

そのため、本報告と結果が相違した原因としては、参照した標準年輪曲線が異なる、ということ以外に挙げることはできない。今後、さらに同地域における年輪幅データを蓄積し、これらの試料の年代決定を将来的に可能としたい。

3.3. 推定される遺構の年代情報

本報告で年輪年代が得られた試料は、数が少ない上、すべて井戸の投棄材であるため、遺構の年代に結びつく証拠にはなりにくいが、測定結果に基づき、推定される遺構の年代情報について考察する。各遺構に含まれる試料の暦年代と相対的な年代関係は図 2 にバープロットと示した。

D 区 SE-001

SE-001 は、井戸の遺構で、20 層から出土した木材のうち、6 点で暦年代が得られた (表 1、図 5)。6 点は、井桁、板壁材、板杭のような板状の木材であり、本遺構に帰属した試料ではなく、廃棄時に一括して投棄された木材と推定されている。実際、これら 6 点は、樹皮型、辺材型、心材型をそれぞれ含んでおり、最外年輪の年代も、最も古いもので西暦 921 年 (AOTM13, 辺材型)、最も新しいもので 1017 年 (AOTM09, 辺材型) と大きな年代幅があるため、一連のものは考えにくく、複数の遺構の廃棄材由来と推定される。遺構の年代については、SE-001 の廃棄は、最も新しい年輪がある 1017 年以

降であると推定される。

E 区 SEa-10 (SK-358)

SEa-10 は、井戸遺構であり、一度廃絶された後に、再度掘削され、土坑として使用されている。最初の廃絶時に堆積した第 20 層から板材 1 点 (AOTM12, E1023) の年輪年代が得られた。得られた最外年輪の年代は、西暦 950 年であり、心材型であるため、遺構の年代に結びつく情報は極めて限定的である。試料より失われた辺材、心材部分は少なくとも数十年あると推定されるので、これを加算すると、SEa-10 の最初の廃絶は、10 世紀第 4 四半期以降になると推定される。

4. おわりに

本報告により、高間 (1) 遺跡出土木材を用いて、西暦 748-1017 年の新しいヒバ標準年輪曲線が構築され、限定的ながら 2 つの遺構について年代情報が得られた。光谷 (2007) の追試結果が得られなかったことは残念であったが、本報告のような事例を積み重ね、データを蓄積していくことで、東北北部における年輪年代測定の適用範囲を広げていく必要がある。

注

注 1: クロスデーティングとは、年輪幅の時系列を比較し、年輪の形成された年を正確に決定していく方法である。一般に統計的検証と目視による照合が併用される。

注 2: 反復検証 (Replication) とは、試料群、試料平均、および個々の測線での変動パターンのすべてを、試料間での年代関係に矛盾がないか、繰り返して照合し、結果の信頼性を評価する過程である。広い意味ではクロスデーティングの一部に含まれる。

注 3: アンサンブル平均とは、あるデータ集団を同一時間面で平均することであり、年輪年代学の場合、年輪幅時系列を同じ年代ごとに平均することを指す。

注 4: 著者の有するヒバの標準年輪曲線のうち、年代既知の曲線は、18 世紀～現代までであり (Onyama et al., 2007)、古代～中世の年代まで年代既知の連続した曲線は延長されていないのが現状である (箱崎 2011)。そのため、新田 (1) 遺跡の標準年輪曲線 (AONT) は、光谷 (2007) で報告されている、新田 (1) 遺跡の年代既知のヒバ個体を多数再計測し、年輪年代学的解析を行うことで暦年代を与えていた。Baillie (1995, p28) に記述されているように、本来、標準年輪曲線の正確さは、互いに独立した研究者が作成した標準年輪曲線間でクロスデーティングができた時点で保証されるべきであるが、現状では不可能である。そこで、本報告においても、光谷 (2007) で与えられた暦年代を基準に、クロスデーティングしたすべての試料に仮の暦年代を与えることとした。将来的にこれらの暦年代は、ヒバ標準年輪曲線、ある

いは東北地方日本海側のスギ標準年輪曲線の延長に伴って最終的に確定される必要がある。

注5: 年輪年代学での相対年代 (relative date) という用語は、試料間の相対的な年代は年単位で決定されているが、暦年代 (絶対年代) が定まっていない年代のことを指す。

引用文献

Baillie MGL. (1982) *Tree-Ring Dating and Archaeology*. The University of Chicago Press, 274p, Chicago.

Baillie MGL. (1995) *A slice through time: dendrochronology and precision dating*. B. T. Batsford Ltd, 176p, London.

Baillie MGL, Pilcher JR. (1973) A simple cross-dating program for tree-ring research. *Tree-Ring Bulletin*, 33: 7-14.

Eckstein D, Bauch J. (1969) Beitrag zur Rationalisierung eines dendrochronologischen Verfahrens und zur Analyse seiner Aussagegicherheit. *Forstwissenschaftliches Centralblatt*, 88: 230-250.

English Heritage. (2004) *Dendrochronology: guidelines on producing and interpreting dendrochronological dates*. <http://www.helm.org.uk/upload/pdf/Dendrochronology.pdf>

Fritts HC (1976) *Tree rings and climate*. Academic Press, 567p, London.

箱崎真隆. (2011) 完新世後期針葉樹埋没木の年輪年代学的研究. 東北大学大学院生命科学研究所博士論文.

箱崎真隆・大山幹成・星野安治・佐々木由香. (2010) 新田(1)遺跡出土木材の年輪年代測定と放射性炭素年代測定から推定される遺構間の年代関係. 青森市教育委員会編「石江遺跡群発掘調査報告書Ⅳ-石江土地区画整理事業に伴う発掘調査-」: 62-72pp. 青森市埋蔵文化財調査報告書第108集-2, 青森市教育委員会.

光谷拓実. (2007) 年輪年代法による新田(1)、高間(1)遺跡出土木材の年代測定. 青森市教育委員会編「石江遺跡群発掘調査報告書-東北新幹線建設事業に伴う発掘調査-」: 281-285pp. 青森市埋蔵文化財調査報告書第94集. 青森市教育委員会.

奈良国立文化財研究所(編). (1990) 年輪に歴史を読む-日本における古年輪学の成立-. 195p. 同朋舎.

Ohyama M, Ohwada M, Suzuki M. (2007) Chronology development of *Hiba arbor-vitae* (*Thujaopsis dolabrata* var. *hondae*) and dating of timbers from an old building. *Journal of Wood Science*, 53: 367-373.

米延仁志・大山幹成・星野安治・光谷拓実・Eckstein D. (2010) 年輪年代学におけるクロスデーティングのガイドライン-日本産材を用いた方法論の分析とモンテカルロシミュレーションによる統計的クロスデーティングの再検討-. *考古学と自然科学*, 60: 1-12.

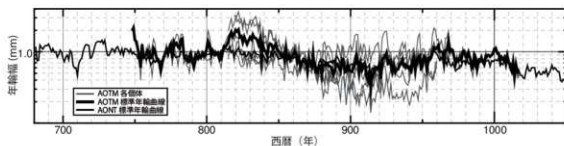


図1 グループ1の個体年輪グラフ(AOTM)と高間(1)遺跡(AOTM)、新田(1)遺跡(AONT)の標準年輪曲線

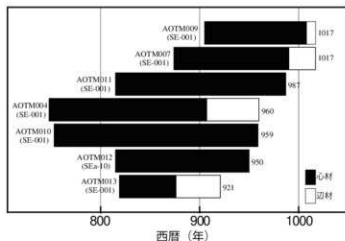


図2: 各遺構の試料のパープロット

表1: 高間(1)遺跡年輪試料データおよび年代測定結果

試料ID	試料番号	樹種	遺構	試料位置	試料名	種	用途	年代測定結果 ⁽¹⁾				年代測定結果 ⁽²⁾				年代測定結果 ⁽³⁾								
								測定値	標準誤差	標準偏差	標準誤差	測定値	標準誤差	標準偏差	標準誤差	測定値	標準誤差	標準偏差	標準誤差					
AOTM009	09-11	TS	2-147	0090	E-1	SE-02	30-01	下	樹材	887.024	1.50	0.23	0.18	-	-	-	-	243	-	-	41	283		
AOTM009	09-14	TS	2-147	0090	E-1	SE-02	30-01	下	樹材	131.037	2.87	0.43	0.30	-	-	-	-	188	-	-	17	248		
AOTM009	09-15	TS	2-162	0097	D-1	SE-02	30-04	24	樹材	116.014	2.29	0.38	0.29	-	-	-	-	20	-	-	0	-		
AOTM009	09-16	TS	1-184	0071	D-1	SE-02	30-08	30	樹材	876.018	2.17	0.41	0.28	11.80	67.10	5.71	10.10	1	740-800	213	8.22	64.8	10	210
AOTM009	09-18	TS	2-161	0105	E-1	SE-02	30-04	24	樹材	131.047	1.74	0.25	0.18	-	-	-	-	101	-	-	0	-		
AOTM009	09-17	TS	2-161	0108	E-1	SE-02	30-04	24	樹材	118.043	2.70	0.41	0.18	-	-	-	-	80	-	-	0	24	231	
AOTM009	09-23	AS	1-190	0081	D-1	SE-02	30-08	30	樹材(樹皮)	872.010	1.46	0.22	0.18	11.10	70.20	6.16	68.60	1	610-800	144	5.38	63.8	17	174
AOTM009	09-19	TS	2-161	0104	E-1	SE-02	30-04	24	樹材	137.043	3.04	0.54	0.18	-	-	-	-	102	-	-	0	10	210	
AOTM009	09-17	TS	1-165	0079	D-1	SE-02	30-08	30	樹材	877.041	1.21	0.19	0.17	11.80	60.70	1.80	71.60	1	600-800	113	4.30	71.8	0	3.8
AOTM010	09-10	AS	-	-	D-1	SE-02	30-08	30	樹材	888.017	1.60	0.31	0.21	9.80	70.80	3.20	50.20	1	710-800	207	7.3	61.2	0	-
AOTM011	09-3	AS	1-184	0070	D-1	SE-02	30-08	30	樹材	860.040	2.17	0.34	0.21	10.90	71.00	1.10	61.80	1	610-800	173	6.86	61.2	0	-
AOTM012	09-1	TS	2-173	0103	E-0+1+10	SE-10	30-08	30	樹材	108.018	3.84	0.79	0.23	10.80	73.80	1.06	40.80	1	810-800	130	1.80	60.1	0	-
AOTM013	09-4	AS	1-184	0076	D-1	SE-02	30-08	30	樹材	110.022	2.23	0.41	0.23	11.10	70.10	1.00	60.00	1	610-800	100	8.80	68.4	40	181
AOTM014	09-8	TS	1-180	0060	D-1	SE-02	30-08	30	樹材	841.016	2.80	0.44	0.17	-	-	-	-	180	-	-	0	-		
AOTM015	09-1	TS	1-184	0074	D-1	SE-02	30-08	30	樹材	881.022	2.81	0.42	0.21	-	-	-	-	232	-	-	0	-		

(註1) Mean Sensitivity (Fritts; 1976)

(註2) 年輪年代グループ1の試料の年輪曲線をアンサンブル平均した年輪曲線

(註3) 標準年輪曲線と各試料間のt値 (tBP: Baillie and Pilcher, 1973)

(註4) 標準年輪曲線と各試料間の Gleichlaufigkeit (GL: Eckstein and Bauch, 1969)

(註5) 標準年輪曲線から各試料自身(α)を除外した年輪曲線

(註6) 光谷(2007)の暦年代を基準として仮に与えた暦年代に基づいている

(註7) 試料タイプの分類: A: 樹皮直下年輪あり, B: 辺材の一部あり, C: 心材のみ

図-2
高間(1)遺跡
試料Aの
年輪年代推定
結果

第3節 新城平岡(4)遺跡から出土した 大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スタルジャン(パレオ・ラボ)
若山真由美(青森市教育委員会)

1. はじめに

新城川の右岸、標高5~8mの沖積地および丘陵地に立地する新城平岡(4)遺跡は、縄文時代から中世にかけて集落跡である。ここでは、縄文時代中・後期、弥生時代、古代~中世などの遺構や自然堆積層から産出した大型植物遺体の同定を行い、当時の植生や栽培・利用状況を明らかにする一端とした。

2. 試料と方法

試料は、発掘調査現場で採取された試料(現地採取試料)と堆積物を水洗して得られた試料(水洗試料)、計187試料である。

水洗試料は、水洗選別後に種実などが抽出済みの試料で、試料番号ごとにある程度分類されたサンプル管に保管されていた。試料堆積物の採取、水洗、分類までの作業は、青森市教育委員会によって行われた。水洗は、最小0.25mm目の篩を用いて行われた。試料の内訳、時期、水洗量については、表1~16を参照されたい。

大型植物遺体の抽出・同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。同定は、187試料ある試料のうち、青森市教育委員会で確定できない分類群や破片試料についてパレオ・ラボで同定を行い、青森市教育委員会で同定された試料と合算した。したがって、ここでは同一基準で同定を行っておらず、一部の分類群は上位の分類階級の同定になっている。計数の方法は、完形または一部が破損しても1個体とみなせるものは完形として1点と数え、1個体に満たないものは破片とした。同定された試料は、青森市教育委員会に保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物では31分類群、草本植物では81分類群の、計112分類群が見いだされた。結果を表1~16に示す。なお、表中に未炭化種実と炭化種実が併記してある分類群は、青森市教育委員会同定分で未炭化と炭化種実の区別がされていないため、一括して表記した。さらに、分類群名の後に一括とある分類群は、青森市教育委員会同定分でタイプ分けができなかった一群をさす。

木本植物では、針葉樹のイヌガヤ種子と、アスナロ葉・スギ葉・種子の3分類群、広葉樹のオニグルミ核・炭化核と、サワグルミ炭化核、ヤシヤブシ亜属-カバノキ属種子、アサダ(一括を含む)果実・

炭化果実、クリ炭化子葉、ブナ炭化殻斗、コナラ属クスギ節(以下、クスギ節)炭化子葉、ミズナラ-ナラガシワ炭化子葉、コナラ属炭化果実・炭化子葉・炭化殻斗、クワ属核・炭化核、ホオノキ種子、マタタビ属種子・炭化種子、モモ核、スモモ核、キイチゴ属核・炭化核、キハダ種子・炭化種子、ウルシ属-スルデ炭化内果皮、ミツデカエデ果実、イタヤカエデ果実・炭化種子、カエデ属種子、トチノキ果実・炭化果実・未熟果・種子・炭化種子、ブドウ属種子・炭化種子、ブドウ科(？を含む)種子・炭化種子、ミズキ核・炭化核、タラノキ核・炭化核、エゴノキ核、ニワトコ核・炭化核、タニウツギ属種子の28分類群が得られた。

草本植物では、アサ炭化核と、カナムグラ核、ミズ属炭化果実、ミズヒキ炭化果実、ヤナギタデ炭化果実、イヌタデ果実・炭化果実、タニツバ果実・炭化果実、サナエタデ-オオイヌタデ果実・炭化果実、ミノソウ果実、タデ属A炭化果実、タデ属B炭化果実、タデ属C炭化果実、タデ属一括果実・炭化果実、ギンギン属果実・炭化果実、タデ科炭化果実、スベリヒユ属種子・炭化種子、ノミノフスマ種子、ウシハコベ種子、ミドリハコベ種子、ハコベ属種子、アカザ属(？を含む)種子・炭化種子、キンボウグ属果実、オトギリソウ属種子・炭化種子、キケマン属種子、タネツケバナ属種子、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属果実・炭化果実、インゲンマメ炭化種子、マメ科A果実、カタバミ属種子・炭化種子、エノキグサ属種子・炭化種子、スミレ属種子・炭化種子、メロン仲間種子・炭化種子、アカバナ科果実、アリノトウグサ種子・炭化種子、ウド核、セリ果実、セリ科果実、オカトラノオ属種子・炭化種子、アカネ属炭化種子、キランソウ属炭化果実、トウバナ属果実、ナギナタコウジュ属果実・炭化果実、シソ属果実、イヌコウジュ属果実、エゴマ果実、シソ属果実、ナス属種子、メナムシ属炭化果実、キク科果実・炭化果実、ヘラオモダカ果実、オモダカ属果実、オモダカ科果実、ヒルムシロ属核・炭化核、コナギ種子、ツユクサ種子、ミクリ属果実、メヒシバ属果実、ヒエ炭化有ふ果・炭化種子、ヒエ属有ふ果・炭化有ふ果・炭化種子、イネ稃殻・炭化初殻・炭化小穂殻・炭化種子、キビ有ふ果・炭化有ふ果・炭化種子、アワ有ふ果・炭化有ふ果・炭化種子、エノコログサ属有ふ果・炭化有ふ果・炭化種子、キビ族有ふ果、ササ属炭化種子、イネ科(一括を含む)果実・炭化果実・炭化種子、テンツキ属果実、スゲ属Aゼズグ節果実、スゲ属A果実、スゲ属B果実・炭化果実、スゲ属C炭化果実、スゲ属D果実、スゲ属E果実、スゲ属一括果実・炭化果実、カヤツリグサ属果実、ハリイ属果実、ウケヤガラ果実、ホクリイ属果実・炭化果実、ツチアケビ種子の79分類群が得られた。破片や遺

表6 新城平岡(4) 遺跡から出土した大型植物遺体(6) (括弧内は破片数、時期の括弧は出土土器の主体となる年代を示す)

分類群	本表表列の	縄文		弥生		古墳		中世		近世		現代	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
オニグルミ	炭化種子												
キイチゴ属	炭化核												
クルミ	炭化種子												
ウルシ属・ヌルデ	炭化内果皮												
コナラノキ	炭化核												
コナラ	炭化核												
トチノキ	炭化果実												
ヤナギダマ	炭化果実												
オオヤマザサ	炭化果実												
ササニダザサ・オオヤマザサ	葉												
タデ属	炭化果実												
タデ属-根	葉茎・炭化果実												
アサ科	炭化種子												
ユキノギヤブ属	種子												
ユキノギヤブ属	炭化種子												
ゴウキヤブ	種子												
ヒメ	炭化種子												
ヒメ属	炭化種子												
イヌ	炭化種子												
アウ	炭化果実												
イヌ科	炭化種子												
イヌ科-根	葉茎・炭化果実												
木賊-根	葉茎・炭化果実												
木賊	炭化果実												
木賊	炭化果実												
根茎	炭化果実												
根茎-根	葉茎・炭化果実												
ノコギリ	炭化種子												

熟果)がわずかに得られた。

[C下]

埋没林(弥生時代):オニグルミとトチノキ(果実)、ヘラオモダガが少量、これら以外は産出数が10点以下であった。

[B-55下-2]

層位不明(縄文時代中期以前):ホオノキと、マタヒ属、ブドウ属、タラノキ、ニワトコ、スマレ属がわずかに得られた。

[遺構外]

A層(弥生時代):オニグルミが少量得られた。

C層(弥生時代):オニグルミがやや多く得られた。

C層(縄文時代中期以前):オニグルミとトチノキ(未熟果)がわずかに得られた。

包含層(縄文時代):トチノキ(種子)がわずかに得られた。

次に、主要な大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana* (Maxim.) Makino 核・炭化核 クルミ科

黄褐色で、完形ならば側面観は広卵形。壁は緻密で硬く、ときどき空隙がある。表面に縦方向の縦合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。角の尖った破断面が多い。炭化核の大きさは、残存長6.5cm、残存幅5.2cm、残存厚4.3cm。

(2) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* 炭化子葉 ブナ科

球形に近い円柱形。上下端は平坦。下端中央に浅い窪みがある。突出部は短い円錐状。縦方向に浅い皺がある。高さ14.4mm、幅13.3mm。

(3) ミズナラ-ナラガシワ *Quercus crispula* Blume - *Quercus aliena* Blume 炭化子葉 ブナ科

下半部が太い広卵形で、高さの中央部よりもやや下方に最大部がある。上下端部はやや平坦で、平坦部の面積がコナラよりも広い。下端部の中央に浅い窪みがある。高さ19.4mm、幅13.0mm。

(4) コナラ属 *Quercus* spp. 炭化果実・炭化子葉・炭化殻斗 ブナ科

果実は、全体形が不明で、縦方向に縦筋が入り、果皮が薄い。計測はしていない。子葉は、完形ならば卵形ないし広卵形、円柱状を呈すると考えられる子葉の破片をコナラ属とした。残存高10.8mm、残存幅6.8mm。殻斗は、完形ならば椀状で、状態が悪いが表面は卵形の鱗片に覆われる。残存長5.2mm、残存幅7.1mm。

(5) ウルシ属-ヌルデ *Toxicodendron* spp. - *Rhus javanica* L. 炭化内果皮 ウルシ科

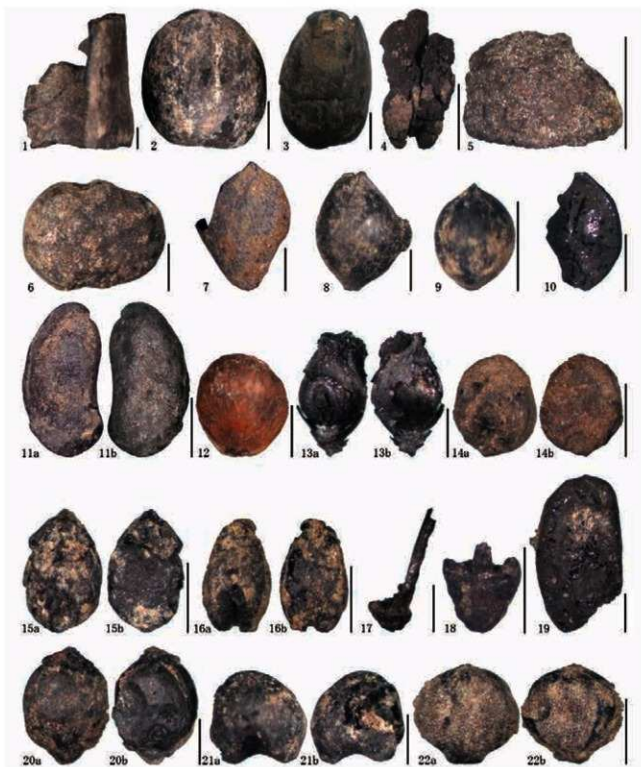
上面観は中央がやや膨らむ扁平、側面観は中央がややくびれた広楕円形。表面は平滑だが、ざらついた質感がある。表面および断面構造の詳細な検討が行えなかったため、ウルシ属-ヌルデの同定に留めた。長さ2.3mm、幅3.0mm、厚さ1.8mm。

(6) アサ *Cannabis sativa* L. 炭化核 アサ科

完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で側面に稜がある。下端にはやや突出した楕円形の大きな着点がある。表面には脈状の模様がある。残存長3.0mm、残存幅2.2mm。

(7) タデ属A *Polygonum* sp. A 炭化果実 タデ科
本来の上面観は三稜形だが現状は発泡して円形、側面観は卵形。先端と下端は突出し、下端には円形の着点がある。表面は平滑。光沢がある。長さ3.0mm、幅2.3mm。

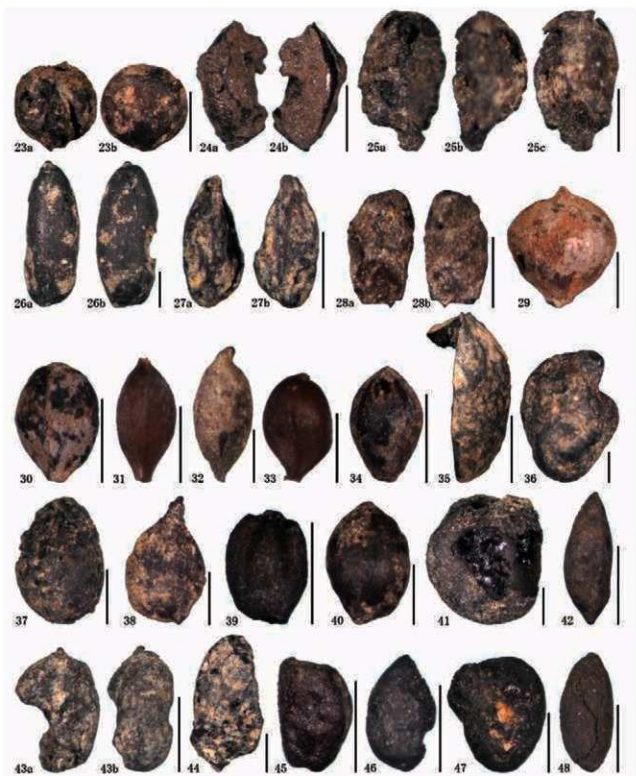
(8) タデ属B *Polygonum* sp. B 炭化果実 タデ科
上面観は円形、側面観は倒卵形。先端はわずかに



スケール 1, 6-10, 12-22:1mm, 2-5, 11:5mm

図版1 新城平岡(4)遺跡から出土した大型植物遺体(1)

1. オニグルミ炭化核 (SI-43, No. 133), 2. コナラ属クスギ節炭化種子葉 (SP-138, No. 164), 3. ミズナラ-ナラガシワ炭化種子葉 (SP-138, No. 164), 4. コナラ属炭化種子葉 (SI-21, No. 165), 5. コナラ属炭化殻斗 (SI-007, No. 104), 6. ウルシ属-スルデ炭化内果皮 (SI-007, No. 119), 7. アサ炭化核 (SI-007, No. 113), 8. タデ属A炭化果実 (SI-007, No. 113), 9. タデ属B炭化果実 (SI-007, No. 119), 10. タデ属C炭化果実 (No. 60), 11. インゲンマメ炭化種子 (SN-07, No. 149), 12. エゴマ果実 (SI-007, No. 113), 13. ヒエ炭化有ふ果 (SI-28, No. 28), 14. ヒエ炭化種子 (SI-21, No. 171), 15. ヒエ属炭化有ふ果 (SI-007, No. 104), 16. ヒエ属炭化種子 (SI-007, No. 117), 17. イネ炭化籾殻 (SI-43, No. 134), 18. イネ炭化小穂軸 (SI-04, No. 74), 19. イネ炭化種子 (SI-25, No. 2), 20. キビ炭化有ふ果 (SI-43, No. 134), 21. キビ炭化種子 (SI-007, No. 104), 22. アワ炭化有ふ果 (SI-007, No. 113)



スケール 23-34, 36-47: 1mm, 35: 5mm

図版2 新城平岡(4) 遺跡から出土した大型植物遺体(2)

23. アワ炭化種子 (SI-43, No. 134), 24. エノコログサ属炭化有ふ果 (No. 77), 25. オオムギ-コムギ炭化種子 (SI-011, No. 94), 26. ササ属炭化種子 (SI-011, No. 89), 27. イネ科炭化果実 (SI-007, No. 109), 28. イネ科炭化種子 (SI-007, No. 119), 29. スゲ属アゼスゲ節果実 (No. 78), 30. スゲ属A果実 (SI-007, No. 107), 31. スゲ属B果実 (No. 178), 32. スゲ属C炭化果実 (SI-21, No. 169), 33. スゲ属D果実 (No. 154), 34. スゲ属E果実 (No. 78), 35. 不明A炭化種実 (SI-01, No. 159), 36. 不明B炭化種実 (SI-04, No. 76), 37. 不明C炭化種実 (SI-007, No. 105), 38. 不明D炭化種実 (SI-007, No. 107), 39. 不明E炭化種実 (SI-007, No. 118), 40. 不明F炭化種実 (SI-007, No. 108), 41. 不明G炭化種実 (SI-007, No. 109), 42. 不明H炭化種実 (SI-42, No. 120), 43. 不明I炭化種実 (SI-011, No. 93), 44. 不明J炭化種実 (SI-42, No. 127), 45. 不明K種実 (No. 77), 46. 不明L炭化種実 (No. 185), 47. 不明M炭化種実 (SI-25, No. 2), 48. 不明N炭化種実 (No. 80)

第4節 高間(1)遺跡放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・
山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・
バンダリ スダルシヤン・菊地有希子

1. はじめに

青森市の高間(1)遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料は、E区のSEa-02(SK-97)のもみから層から採取されたイネの籾殻(PLD-23048)で、年代測定に必要な量を得るために14点をひとまとめにして測定を行った(図版1)。試料は、考古学的所見から13世紀代と考えられている。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS/NEC製1.5SDM)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}C$)、同位体分別効果の補正を行って暦年代校正に用いた年代値と校正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、図1に暦年校正結果をそれぞれ示す。暦年校正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年校正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年校正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年校正の詳細は以下のとおりである。

暦年校正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年)を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年校正にはOxCal4.1(校正曲線デー

タ: IntCal13)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

4. 考察

E区のSEa-02(SK-97)のもみから層から採取されたイネの籾殻(PLD-23048)は、 1σ 暦年代範囲(68.2%の確率)で1224-1255 cal AD(68.2%)、 2σ 暦年代範囲(95.4%の確率)で1209-1270 cal AD(95.4%)の暦年代範囲を示した。この年代は13世紀代で、鎌倉時代に相当する。

参考文献

- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Halldason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	考古学的手法による想定年代	前処理データ	前処理
PLD-23048	調査区：E-1IC 遺構：5B-02(SK97) 層位：もみごら層	種類：生の榎実(イネ籾殻14粒) 状態：dry	13世紀代	前処理前重量：20.36mg 燃焼量：3.83mg 精製炭重量：1.10mg 炭素回収率：0.99mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄(塩酸:1.2%, 水酸化ナトリウム:1.0%, 塩酸:1.2%)

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	測定回数	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{13}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{13}C 年代を暦年較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-23048	8	-27.89 \pm 0.15	802 \pm 20	800 \pm 20	1224AD(68.2%) 1255AD	1209AD(95.4%) 1270AD

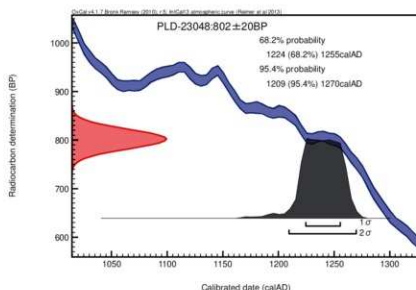


図1 暦年較正結果



図版1 年代測定を行ったイネ籾殻(PLD-23048)

第5節 高間(1)遺跡出土炭化木製品の樹種同定

黒沼 保子(バレオ・ラボ)

1. はじめに

青森市に所在する高間(1)遺跡から出土した、炭化した木製品2点の樹種同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は、土坑SK-106の2層から出土した曲物(樹種-1)と椀(樹種-2)である。2点とも炭化しており、高級アルコールを用いた保存処理が施されている。時期は、考古学的な所見から10世紀前半と考えられている。

樹種同定は、保存処理済みの試料で走査型電子顕微鏡での観察が行えなかったため、マイクロスコープを用いた。試料の一部を採取後、手あるいは剃刀を用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)を割り出し、マイクロスコープ(KEYENCE社製 VHX-1000)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

なお、曲物は針葉樹であったため、放射断面のみ走査型電子顕微鏡での観察を行った。手順としては、まず放射断面を割り出し、アセトンに浸けた。乾燥後、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VE-9800)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3. 結果

曲物は針葉樹のアスナロ、椀は広葉樹のニレ属であった。結果を表1に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、マイクロスコープ写真および走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) アスナロ *Thuopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 図版1 1a-1c (樹種-1)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。分野壁孔は小型のスパイ型～ヒノキ型で、1分野に不揃いに3～4個存在する。

アスナロは温帯に分布する常緑高木である。材は加工性と割裂性は中庸だが、耐朽性や保存性が高い。

(2) ニレ属 *Ulmus* ニレ科 図版1 2a-2c (樹種-2)

大型の道管が年輪のはじめに1列に並び、晩材部では小道管が集団をなして接線状から斜めに配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、3～5列幅程度である。

ニレ属は温帯から暖帯に分布する落葉高木で、アキニレとハルニレ、オヒョウの3種がある。代表的なハルニレの材は、中庸からやや重硬でやや粘り気があるが、狂いが出やすい。

4. 考察

曲物には、一般に割裂性が大きくて製材しやすい針葉樹を利用するが、青森県では特にアスナロの利用例が多くみられる。なお、青森県に多く分布しているのはアスナロの変種であるヒノキアスナロ(ヒバ)であるが、木材組織の観察ではアスナロは種までしか識別できないため、アスナロとした。

平安時代では、青森市の野木(1)遺跡[野木遺跡]やむつ市の高野川(2)遺跡、五所川原市の実取(2)遺跡などで曲物への利用が確認されている(伊東・山田編, 2012)。また、青森県内では、古代から中世にかけて、アスナロが木製品や建築材、土木材など多用途で優先的に使用されていたことがわかっており、遺跡の近くで比較的簡単に木材を採取できたと推測されている(能城, 2011)。

また、椀など挽物の容器には、一般にブナ属やトチノキなどの軽軟で加工容易な材が多用され、ケヤキやクリなどの重硬で靱性のある材が比較的薄い木地に利用される。ニレ属も比較的軽硬で靱性のある材であり、ケヤキやクリと同様に利用されたと思われる。ニレ属は、青森県内では容器の出土例は他に確認されていないが、青森市の高屋敷館遺跡や上北郡の向田(35)遺跡などでは、平安時代の建築材としての利用がみられる(伊東・山田編, 2012)。

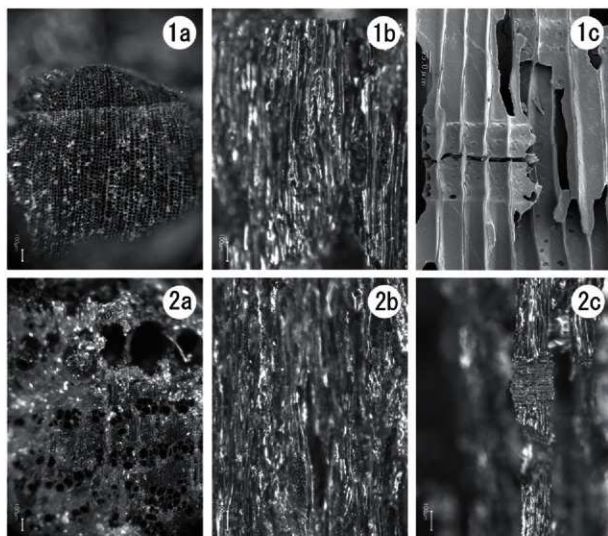
今回の分析試料は、曲物および椀の一般的な木材利用の傾向に則していると考えられる。

引用文献

- 伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学—出土木製品用材データベース—、449p、海青社。
 能城修一(2011)東北地方を中心にみたアスナロの木材利用史、日本植生史学会第26回大会実行委員編「日本植生史学会第26回大会講演要旨集」: 11-14。

表1 樹種同定結果

種別	遺物番号	調査区	遺構名	層位	器種	樹種
樹種-1	3-143-F-268	F-2-7-H	SK-106	2層	曲物	アスナロ
樹種-2	3-143-F-269	F-2-7-H	SK-106	2層	椀	ニレ属



図版1 高間(1) 遺跡出土炭化木製品のマイクロスコープ写真および走査型電子顕微鏡写真

1a-1c: アスナロ(樹種-1)、2a-2c: ニレ属(樹種-2)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第6節 石江遺跡群から出土した土器の胎土材料と基盤層等の薄片分析

藤根 久・米田 恭子 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

土器や土師器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の鉱物組成から、砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定するのは容易でない。土器などの焼物は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料が比較的良質とも思える粘土層から採取されていたことが、粘土採取坑の調査から推察される(藤根・今村, 2001)。また、粘土自体に珪酸化石や放射虫化石あるいは骨針化石が含まれている場合があり、材料粘土が堆積した際の堆積環境が分かる。

一方、混和材としての砂粒物は、粘土層から粘土を採取する際に、粘土層の上下層や隣接域の砂層などから採取されたと予想される。東海地域の弥生時代後期の採彩を施したパレススタイル土器では、3分の1程度の土器に、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれている(藤根, 1998; 車崎ほか, 1996)。これらの火山ガラスは、粘土採取場所の上下層や隣接域のテフラ層に由来と考えられる。このように胎土分析においては、粘土や混和材について微化石類およびテフラなどの鉱物を含めて検討する必要がある。

石江遺跡群の高岡(1)遺跡や新田(1)遺跡、新田(2)遺跡、新城平岡(4)遺跡の調査では、10世紀代の土師器と擦文土器、黒色土器、かわらけ、須恵器が出土している。ここでは、これら土師器と擦文土器、黒色土器、かわらけ、須恵器について、薄片の偏光顕微鏡観察による胎土材料の特徴について検討した。なお、高岡(1)遺跡の基盤粘土層および基盤層についても比較・検討した。なお、高岡(1)遺跡の須恵器№21と№22については蛍光X線分析も行っている(第IV章第7節を参照)。

2. 試料と方法

試料は、高岡(1)遺跡の基盤粘土層5点、新田(1)遺跡の擦文土器4点と土師器2点、黒色土器1点、新田(2)遺跡の擦文土器3点、新田(1)遺跡と新田(2)遺跡のかわらけ4点、新城平岡(4)遺跡の土師器1点、高岡(1)遺跡の須恵器3点、高岡(1)遺跡の基盤粘土層および基盤層15点の合計38点である(表1)。

分析方法は、土器薄片の偏光顕微鏡観察を行い、胎土中の粘土および砂粒の特徴について調べた。

試料は、はじめに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させた。全体にエポキシ樹脂

を含浸させ、固化処理を行った。これをスライドガラスに接着し、接着面と反対の面に平面を作製した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後、スライドガラスに接着した。その後、精密岩石薄片作製機を用いて試料を切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。薄片プレパラートは、偏光顕微鏡を用いて薄片全面にみられた微化石類(放射虫化石や珪酸化石、骨針化石など)と大型粒子の特徴およびその他の混和物について、観察と記載を行った。なお、基盤粘土層および基盤層は、電気炉を用いて750度6時間で焼成した後、土器と同様に薄片を作製した。

また、高岡(1)遺跡の基盤粘土層および基盤層(No. 24～No. 28, No. 30)と須恵器3点中の火山ガラスについて、横山ほか(1986)に従って温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率を測定した。火山ガラスは、須恵器は1g程度を乳鉢で粉砕した後、湿式篩分けして4φ篩残渣を用いた。基盤層も同様に処理して火山ガラスを抽出した。なお、テフラ層No. 24については、重液(テトラプロモエタン、比重2.96)を用いて重鉱物と軽鉱物と分離し、重鉱物組成について調べた。

なお、ここで採用した各分類群の記載およびその特徴などは、以下の通りである。

[放射虫化石]

放射虫は、放射飯足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放射虫化石は、海生浮遊性珪酸化石とともに外洋性堆積物に含まれる。

[珪酸化石]

珪藻は、珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは10～数百μm程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉(1988)や安藤(1990)は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪酸化石(海水種、淡水種)を分類した。

[骨針化石]

骨針は、海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状からなる。海綿動物の多くは海産であるが、淡水産としても23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

[植物珪酸体化石]

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10～50μm前後である。一

般にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

〔胞子化石〕

胞子は、直径約10～30 μ m程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積物中に多く見られるが、土壌にも含まれる。

〔石英・長石類〕

石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く、一括して扱う。

〔長石類〕

長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

〔雲母類〕

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などのケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

〔輝石類〕

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類やケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類にも産出する。

〔角閃石類〕

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類あるいは火山岩類に産出する。

〔ガラス質〕

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（パブル・ウォール型）や小

さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

〔片理複合石英類〕

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。

〔砂岩質・泥岩質〕

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質、約0.06mm未満のものを泥岩質とした。

〔複合石英類〕

複合石英類は、石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に、個々の石英粒子の粒径が0.01mm未満のものを微細、0.01～0.05mmのものを小型、0.05～0.10mmのものを中型、0.10mm以上のものを大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

〔斑晶質・完晶質〕

斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。

〔流紋岩質〕

石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、流理構造を示す岩石である。

〔凝灰岩質〕

ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、結晶度が低く、直交ニコルで観察した際に全体的に暗い粒子である。

〔不明粒子〕

開放ニコルと直交ニコルのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

3. 結果および考察

以下に、土器胎土薄片と基盤粘土層および基盤層の顕微鏡観察結果について述べる。胎土中の粒子組成については、微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度組成や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成、計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、表2における不等号は、おおまかな量比を示す。

(1) 微化石類による粘土材料の分類

各土器の薄片全面の観察の結果、放散虫化石や珪

図1-10
石江遺跡群
から出土した土器の胎土材料と基盤層の薄片分析

藻化石、骨針化石などの微化石類が検出された。微化石類の大きさは、放射虫化石が数100 μ m、珪藻化石が10～数100 μ m、骨針化石が10～100 μ m前後である(植物珪酸体化石が10～50 μ m前後)。一方、礫屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μ m以下、シルトが約3.9～62.5 μ m、砂が62.5 μ m～2.0mmである(地学団体研究会・地学事典編集委員会、1981)。主な堆積物の粒度分布と微化石類の大きさの関係から、微化石類は土器の粘土材料中に含まれると考えられる。このため、粘土材料中に含まれている植物珪酸体化石以外の微化石類の特徴は、粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれてはいるものの、土器製作の場で灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低い。

土器胎土は、粘土中に含まれていた微化石類により、a)海成粘土を用いた粘土、b)淡水成粘土を用いた粘土、c)水成粘土、d)その他粘土の4種類に分類された(表3)。表3において、◎は非常に多い、○は多い、△は検出、空欄は未検出であることを示す。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。なお、淡水種珪藻化石のほか放射虫化石や海水種珪藻化石も含む場合は淡水成粘土とし、放射虫化石や海水種珪藻化石のみ含む場合は海成粘土とした。

a) 海成粘土(25試料;高間(1)遺跡の基盤粘土層No.1とNo.5、新田(1)遺跡の椽文土器壺No.7と土師器椀No.11、黒色土師器No.12、新田(2)遺跡の椽文土器壺No.15、新田(1)・(2)遺跡のかわらけ(中型)No.18、新城平岡(4)遺跡の土師器壺No.20、高間(1)遺跡の須恵器壺No.21～23、高間(1)遺跡の基盤層No.24～37)

これら基盤粘土層、基盤層あるいは土器胎土中には、放射虫化石もしくは外洋指標種群の珪藻化石のみが検出された。なお、No.11やNo.12、No.15の胎土中には骨針化石が多く含まれていた。

b) 淡水成粘土(8試料;高間(1)遺跡の基盤粘土層No.4、新田(1)遺跡の椽文土器壺No.6とNo.8、No.9、土師器椀No.10、新田(1)遺跡のかわらけ(小型)No.16とかかわらけ(中型)No.17、かわらけ(小型)No.19)

これらの基盤粘土層あるいは土器胎土中には、淡水種珪藻化石が含まれていた。このうち、No.8～No.10およびNo.19の胎土中には、沼沢湿地付着生指標種群の珪藻化石が特徴的に含まれていた。なお、放射虫化石や海水種珪藻化石を含む胎土もある。

c) 水成粘土(3試料;新田(2)遺跡の椽文土器壺No.13とNo.14、高間(1)遺跡の基盤層No.38)

これらの基盤層あるいは土器胎土中には、不明珪藻化石や骨針化石が含まれていた。

d) その他粘土(2試料;高間(1)遺跡の基盤粘土層No.2とNo.3)

これらの基盤粘土層中には、堆積環境を指標するような珪藻化石もしくは骨針化石は含まれていなかった。

(2) 土器胎土中の砂粒組成による分類

本稿で設定した分類群は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。そのため、各胎土中の鉱物と岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。特に、深成岩類の可能性のある複合石英類の場合、構成する鉱物の粒度が大きく、細粒質の砂粒からなる土器胎土の場合には深成岩類と推定するのが困難となる。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った(表3)。岩石の推定は、片岩質が片岩類(A/a)、複合石英類が深成岩類(B/b)、複合石英類(微細)や砂岩質が堆積岩類(C/c)、斑晶質・完晶質が火山岩類(D/d)、凝灰岩質が凝灰岩類(E/e)、流紋岩質が流紋岩類(F/f)、ガラス質または軽石質がテフラ(G/g)である。ただし、斑晶質・完晶質の多くは結晶度が低く、凝灰岩類に属するものもある。砂粒組成は、表4の組み合わせに従って大きく6群に分類された。以下に、胎土中の砂粒組成の岩石組み合わせについて述べる。

a) 主に堆積岩類からなるC群(2試料;新田(1)遺跡の椽文土器壺No.9、高間(1)遺跡の基盤層No.34)

これら基盤層および土器胎土中には、砂岩や泥岩などの堆積岩類が特徴的に含まれていた。

b) 主にテフラからなるG群(4試料;新田(1)・(2)遺跡のかわらけ(中型)No.18、新田(1)遺跡のかわらけ(小型)No.19、新城平岡(4)遺跡の土師器壺No.20、高間(1)遺跡の基盤層No.32)

これら基盤層および土器胎土中には、主にバブル型火山ガラスからなるテフラを特徴的に含む。特に、No.19の胎土中には、特徴的に多く含まれていた。

c) 主に堆積岩類やテフラからなるCg群/Gc群(9試料;新田(1)遺跡の椽文土器壺No.6、高間(1)遺跡の須恵器壺No.21、No.22、No.23、基盤層No.26、No.33、No.36～No.38)

これら基盤層および土器胎土中には、砂岩などの堆積岩類やバブル型火山ガラスのテフラが特徴的に含まれていた。

d) 主に火山岩類と堆積岩類からなる Dc 群 (2 試料; 新田 (2) 遺跡の捺文土器甕 No. 13 と No. 14)

これらの胎土中には、黒色斑品質の火山岩類と砂岩などの堆積岩類が含まれていた。

e) 主に火山岩類とテフラからなる Dg/Gd 群 (5 試料; 新田 (1) 遺跡の捺文土器甕 No. 7 と No. 8、土師器碗 No. 10、高間 (1) 遺跡の基盤層 No. 28、No. 29)

これらの基盤層および土器胎土中には、淡黒色斑品質の火山岩類やバブル型火山ガラスが含まれていた。なお、土師器碗 No. 10 は全体的に粗粒の岩片が少ない。

f) 主にテフラや凝灰岩類からなる Ge/Eg 群 (15 試料; 高間 (1) 遺跡の基盤粘土層 No. 1 ~ No. 5、新田 (1) 遺跡の土師器碗 No. 11 と黒色土器碗 No. 12、新田 (2) 遺跡の捺文土器甕 No. 15 とかわらけ (小型) No. 16、かわらけ (中型) No. 17、高間 (1) 遺跡の基盤層 No. 24、No. 25、No. 27、No. 30、No. 31)

これらの基盤粘土層や基盤層および土器胎土中の砂粒は、主にバブル型火山ガラスからなるテフラや凝灰岩類が多い。特に、高間 (1) 遺跡の基盤粘土層の No. 2 と No. 3、No. 5、新田 (1) 遺跡のかわらけ (小型) No. 16 とかわらけ (中型) No. 17 では淡褐色を含むバブル型火山ガラスが特徴的に多く含まれていた (図版 4-2b, 3, 17)。なお、大型軽石が基盤粘土層 No. 5 や基盤層 No. 24 では多く含まれ、基盤粘土層 No. 4 にも少量含まれていた。

g) 主に凝灰岩類からなる E 群 (1 試料; 高間 (1) 遺跡の基盤層 No. 35)

これら基盤層中には、主に凝灰岩類が多く含まれ、堆積岩類や火山ガラスが少量含まれていた。

(3) 土師器と捺文土器、黒色土器、かわらけ、須恵器の胎土材料の特徴

土師器と捺文土器、黒色土器、かわらけ、須恵器の薄片の偏光顕微鏡観察を行った結果、粘土中に含まれていた微化石類により、粘土は、a) 海成粘土、b) 淡水成粘土、c) 水成粘土の 3 種類に分類された。なお、基盤粘土層および基盤層の粘土は、海成粘土が多く、淡水成粘土、水成粘土、その他粘土であった。

一方、胎土中の砂粒組成は、岩石種の推定とその組み合わせから、a) 主に堆積岩類からなる C 群、b) 主にテフラからなる G 群、c) 主に堆積岩類やテフラからなる Cg 群、d) 主に火山岩類と堆積岩類から

なる Dc 群、e) 主に火山岩類とテフラからなる Dg/Gd 群、f) 主にテフラや凝灰岩類からなる Ge/Eg 群の 6 群に分類された。なお、基盤粘土層および基盤層の砂粒組成は、Ge/Eg 群や Cg/Gc 群が多く、C 群、G 群、Dg 群/Gd 群、E 群であった。

土器材料の共通点について見ると (表 5)、新田 (1) 遺跡の捺文土器甕 No. 8 や No. 9、土師器碗 No. 10、かわらけ (小型) No. 19 は、沼沢湿地付着生指標種群からなる珪藻化石を多量に含む沼沢湿地成粘土が利用されている。ただし、砂粒組成は異なる。

新田 (1) 遺跡の捺文土器甕 No. 6 は、淡水成粘土で火山ガラスをやや多く含む。

新田 (1) 遺跡の捺文土器甕 No. 7 は、放散虫化石や海水種珪藻化石を多く含む海成粘土で火山岩類や火山ガラスを含むことから、淡水種珪藻化石を含まない点を除いて、新田 (1) 遺跡の土師器碗 No. 10 に似ている。

新田 (2) 遺跡の土師器碗 No. 11 や黒色土器碗 No. 12、新田 (2) 遺跡の捺文土器甕 No. 15 は、放散虫化石や海水種珪藻化石を特徴的に含む海成粘土で、骨針化石を非常に多く含むといった共通点が見られた。

新田 (2) 遺跡の捺文土器甕 No. 13 や No. 14 は、骨針化石をわずかに含む程度の水成粘土を用い、砂粒物として黒色火山岩類を特徴的に含んでいた。

高間 (1) 遺跡の須恵器 No. 21 ~ No. 23 は、海成粘土で Cg/Gc 群の砂粒組成を示しており、共通の材料を用いたと推定できるため、同じ工人により製作された須恵器の可能性が高い。なお、蛍光 X 線分析による化学組成では、須恵器 No. 21 (蛍光 X 線-3) と須恵器 No. 22 (蛍光 X 線-5) はほぼ同じ化学組成であった (蛍光 X 線分析を参照)。

土器全体としては、バブル型や軽石型の火山ガラスを特徴的に多く含む胎土が 15 点、また火山岩類を特徴的に含む胎土が 5 点見られた (表 5)。なお、多くの土器において火山ガラスが多く含まれていたが、これらの土器は、テフラが土器の混和材として利用された可能性も考えられる (藤根, 1998)。特に、新田 (1) 遺跡のかわらけ (小型) No. 16、かわらけ (中型) No. 17、かわらけ (小型) No. 19 は、砂粒物の大半が火山ガラスであったため、テフラ層を混和した可能性が高い。なお、新田 (1)・(2) 遺跡のかわらけ (中型) No. 18 や新成平間 (4) の土師器甕 No. 20 も火山ガラスが比較的多い。

なお、軽石型の火山ガラス (図版 4-24) を含む土器は、No. 8 ~ No. 12、No. 14、No. 16 ~ No. 19 である。

(4) 土器胎土中の火山ガラスの屈折率測定

石江遺跡群は、標高約 5 ~ 8m の沖積地から段丘面上に立地する遺跡である。遺跡の南側に段丘が隣

接し、さらに八甲田火山の第2期火砕流堆積物からなる丘陵地に続く。遺跡は、長森ほか(2013)の5万分の1地質図幅では、中位段丘堆積物(tm)、低位段丘堆積物(t1)および完新世堆積物に分類され(図1)、なだらかに北東方向に傾斜した地形を呈する。隣接する新城川沿いに段丘群が分布する地形が見られる。中位段丘堆積物は、砂礫・砂及びシルトを中心とする最終間氷期(酸素同位体ステージ5)の堆積物である。また、低位段丘堆積物は、細砂を挟む礫およびシルトからなる最終氷期最盛期(約2万年前)の堆積物である(長森ほか, 2013)。

高間(1)遺跡G区において採取された基盤粘土層に含まれる粘土類は、No.1が海水種珪藻化石をわずかに含む海成粘土で火山ガラスを含む粘土、No.2とNo.3が微化石類を含まない火山ガラスを多く含む粘土または粘土質シルト、No.4が淡水成粘土で火山ガラスを含む粘土、No.5が海水種珪藻化石をわずかに含む海成粘土で軽石などを多く含む粘土であった。

また、同様に層位的に連続して採取されたG区の基盤層では、No.24～No.37が海水種珪藻化石を含む海成粘土、No.38が水成粘土であった。なお、No.24以外では、火山ガラスをある程度含み、堆積岩類や火山岩類あるいは凝灰岩類を含む組成である。

No.24(1層)は、主に淡褐色を含む軽石型火山ガラス(軽石型繊維状・スポンジ状ガラス主体)からなり、斜方輝石や単斜輝石のほか角閃石や石英を含む。火山ガラスの屈折率測定では、1.5015-1.5085、平均値1.5053であった(図2)。こうした火山ガラスの形態や屈折率あるいは重鉱物組成等の特徴から十和田八戸テフラ(To-H, To-HP;15Ka, 町田・新井(2003))と考えられる。なお、No.25～No.28は、火山ガラスがやや少ないが、屈折率においてNo.24とほぼ同じ値を示すことから、同一起源のテフラと考えられる(図2)。

高間(1)遺跡の須恵器No.21～No.23は、火山ガラスを比較的含んでいたため、火山ガラスの屈折率測定を行った。なお、土器中の火山ガラスは、土器づくりの際、焼成によりその屈折率が変化すると考えられていたが、長い間土中に埋積することにより本来の屈折率に戻ることが示され、土器中の火山ガラスの同定が可能である(菅野ほか, 2010)。

屈折率を測定した結果、測定数は少ないものの、いずれの土器も平均値1.5112～1.5119とほぼ同じ値を示した(図2)。この火山ガラスの起源は、屈折率から十和田中取テフラ(To-Cu)や十和田大不動(To-Of)などが想定されるが、特定はできない。ただし、いずれの須恵器も同じ起源と思われる火山ガラスを含むため、同一材料を利用した須恵器であ

ることを裏付けている。

4. おわりに

4遺跡から出土した土師器と擦土器、黒色土器、かわらけ、須恵器の薄片の偏光顕微鏡観察を行い、胎土中の粘土および砂粒の特徴について調べた。その結果、土器の粘土材料は、a)海成粘土、b)淡水成粘土、c)水成粘土の3種類に分類された。砂粒組成は、a)主に堆積岩類からなるC群、b)主にテフラからなるG群、c)主に堆積岩類やテフラからなるCg群、d)主に火山岩類と堆積岩類からなるDe群、e)主に火山岩類とテフラからなるDg/Gd群、f)主にテフラや凝灰岩類からなるGe/Eg群の6群に分類された。

土器全体としては、バブル型や軽石型の火山ガラスを特徴的に多く含む胎土が15点、また火山岩類を特徴的に含む胎土が5点見られた。

なお、高間(1)遺跡の須恵器は、海成粘土で砂粒組成Cg/G群が共通する点や、火山ガラスの屈折率の平均値が1.5112～1.5119とほぼ同じ値を示した点、うち2点の化学組成が類似する点など、共通した材料を用いたことが示され、同じ工人により製作された須恵器の可能性が高い。

今後の課題としては、土器の材料や化学組成、あるいは火山ガラスの屈折率など、構成要素の特徴を正確に把握し、利用されたと予想される周辺粘土層との比較など、土器相互間あるいは比較粘土層の類似性についての精度の高い比較・検討が必要と考えられている。

引用・参考文献

- 安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42(2), 73-88。
 地学団体研究会・地学事典編集委員会編(1981)増補改訂地学事典, 1612p, 平凡社。
 藤根久(1998)東海地域(伊勢-三河湾周辺)の弥生および古墳土器の材料。東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会編「土器・墓が語る: 美濃の独自性 弥生から古墳へ」: 108-117, 東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会。
 藤根久・今村美智子(2001)第3節 土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「波志江中宿遺跡」: 262-277, 日本道路公団・伊勢崎市・群馬県埋蔵文化財調査事業団。
 菅野悠洋・嶋田有里奈・福岡孝昭・藤根久(2010)土器中軽石の起源—千葉県長平台遺跡と鹿児島県串川遺跡の場合—。日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨集, 126-127。
 小杉正人(1988)珪藻の環境指標群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究, 27, 1-20。
 幸崎正彦・松本 完・藤根久・藁田 量・植木美智子(1996)土器胎土の材料—粘土の起源を中心に—。日本考古学協会編

「日本考古学協会第62回大会研究発表要旨」: 153-156, 日本考古学協会.

町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス, 336p, 東京大学出版会.

長森英明・宝田晋治・吾妻 崇 (2013) 青森西部地域の地質. 地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅), 産総研地質調査総合センター, 67p.

横山卓雄・権原 徹・山下 透 (1986) 温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定. 第四紀研究, 25, 21-30.

表1 薄片観察を行なった土器および基盤層試料

試料番号	調査区名	遺構名または層位	遺構または層位	分類	番号	製作番号	時期	備考				
1				白色粘土	焼成サンプル	M005-030		薄片-1				
2				内頁状粘質土	焼成サンプル	M005-039		薄片-2				
3	高野 (I)	4区	基盤粘土層	内頁状粘質土	焼成サンプル	M005-032	不明	薄片-3				
4				内頁状粘質土	焼成サンプル	M005-035		薄片-4				
5				砂質粘土 (灰土上)	焼成サンプル	M005-038		薄片-5				
6				B-7区	SP-0066+0073, SP-003 (新)	壺		焼土土器	M005-040	2	薄片-6	
7				B-4区	SP-011	壺		焼土土器	M005-044	5	薄片-7	
8				壺	焼土土器	M005-049	10	薄片-8				
9	新田 (I)	A区	SP-01+04	壺	焼土土器	M005-050	12	薄片-9				
10					壺	土器類	M005-091	23	薄片-10			
11				B-4区	SP-06	壺	土器類	M005-102	8,4	薄片-11		
12				B-5区	SP-13	壺	灰土土器	M005-134	56	薄片-12		
13	新田 (II)	F-17	SI-049 壺	壺	焼土土器	M005-137	59	薄片-13				
14				F-13+14	SI-002 (壺)	壺	焼土土器	M005-139	101	薄片-14		
15				K-16, F-17, A-13, F-13+14	SI-005a+b, 006, 08+194, 05-002 (壺)	壺	焼土土器	M005-142	104	薄片-15		
16	新田 (I)	B-2区	SI-04	小型	小・中・小	M005-150	121	薄片-16				
17					小型	小・中・小	M005-160	122	薄片-17			
18	新田 (I)+ (II)	B-2	SI-0005, 新田 (I)+II-003	小型	小・中・小	M005-162	124	薄片-18				
19	新田 (I)	B-4区	SP-201	小型	小・中・小	M005-164	126	薄片-19				
20	新田 (II)	B-2区	SI-43	壺	土器類	M005-243	174	新田 (II) 壺				
21	新田 (I)	F-2区	SP-010a	壺	惣形器 (内面溝アウエ)	M005-240	-	惣形器土器土, 薄片-20				
22				F-2区	SP-020	壺	惣形器 (内面溝アウエ)	M005-241	-	惣形器土器土, 薄片-21		
23	高野 (I)	B区	SI-04, 層位不明, M004	壺	惣形器 (先頭7)	M005-244	332	薄片-22				
24				1層	高野赤粘質土, 砂土層上		M005-245		薄片-23			
25				2層	高野赤粘質土		M005-246		薄片-24			
26				3層			M005-247		薄片-25			
27				4層	桜原赤粘質土		M005-248		薄片-26			
28				5層	内川黒粘質土		M005-249		薄片-27			
29				6層	内川黒粘質土		M005-250		薄片-28			
30				7層	内川黒粘質土, 砂層上		M005-251		薄片-29			
31				高野 (I)	C区, 基盤層			赤褐色サンプル	M005-252		薄片-30	
32									8層	M005-253		薄片-31
33									10層	M005-254		薄片-32
34									13層	M005-255		薄片-33
35									12層	M005-256		薄片-34
36				11層	M005-257		薄片-35					
37				14層	M005-258		薄片-36					
38	15層	M005-259		薄片-37								

第一号
高野遺跡群
から採出した
土器の焼
成材料と焼
成層の薄
片分析

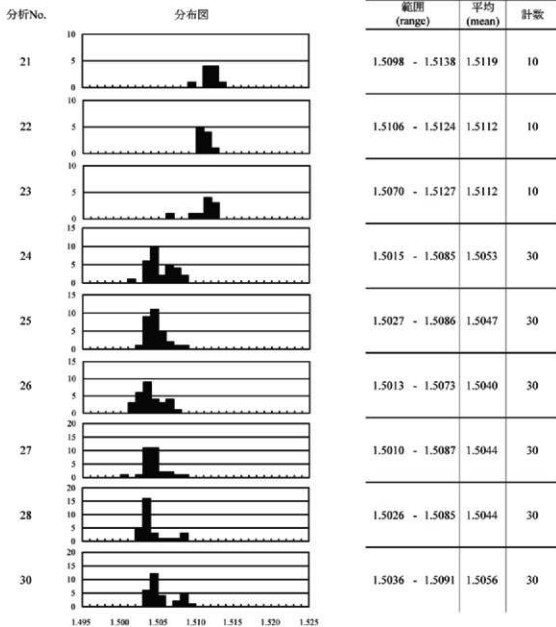
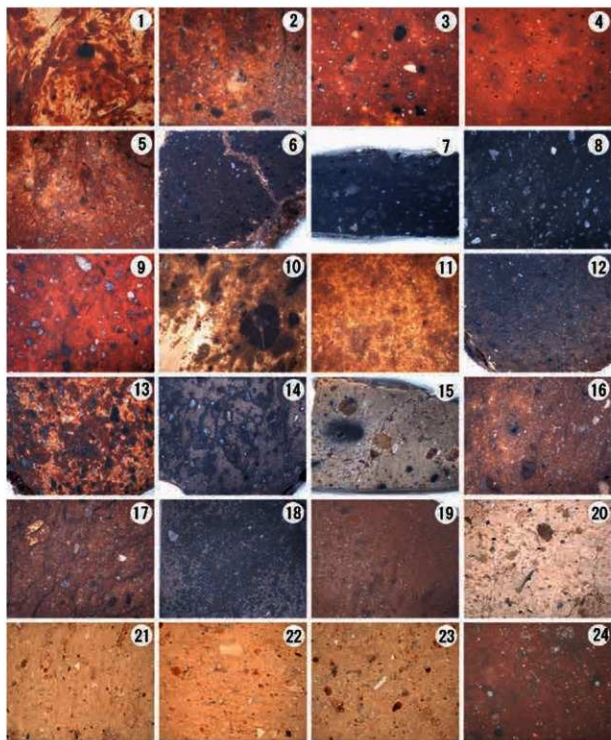
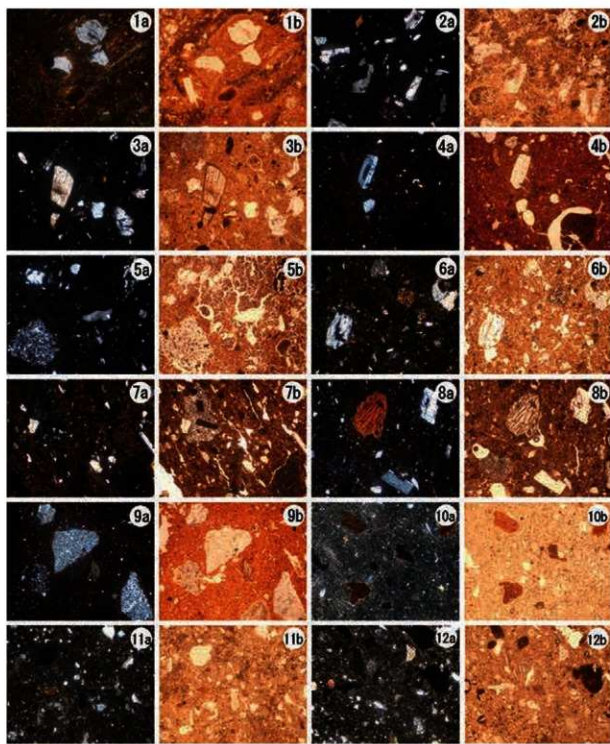


図2 須恵器胎土および基盤層中の火山ガラスの屈折率測定結果



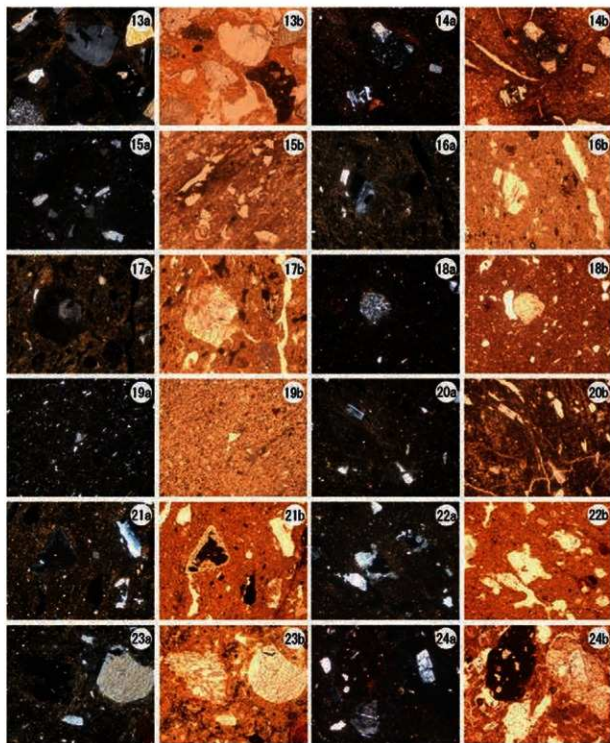
図版1 各試料の切断面の実体顕微鏡写真(スケール:2mm)

1. 焼成サンプル(高間(1)) 2. 焼成サンプル(高間(1)) 3. 焼成サンプル(高間(1))
4. 焼成サンプル(高間(1)) 5. 焼成サンプル(高間(1)) 6. 擦文土器(新田(1))
7. 擦文土器(新田(1)) 8. 擦文土器(新田(1)) 9. 擦文土器(新田(1))
10. 土師器(新田(1)) 11. 土師器(新田(1)) 12. 黒色土器(新田(1))
13. 土師器(新田(2)) 14. 擦文土器(新田(2)) 15. 擦文土器(新田(2))
16. かわらけ(新田(1)) 17. かわらけ(新田(1)) 18. かわらけ(新田(1)・新田(2))
19. かわらけ(新田(1)) 20. 土師器(新城平岡(4)) 21. 須恵器(高間(1))
22. 須恵器(高間(1)) 23. 須恵器(高間(1)) 24. 基盤層(1層)

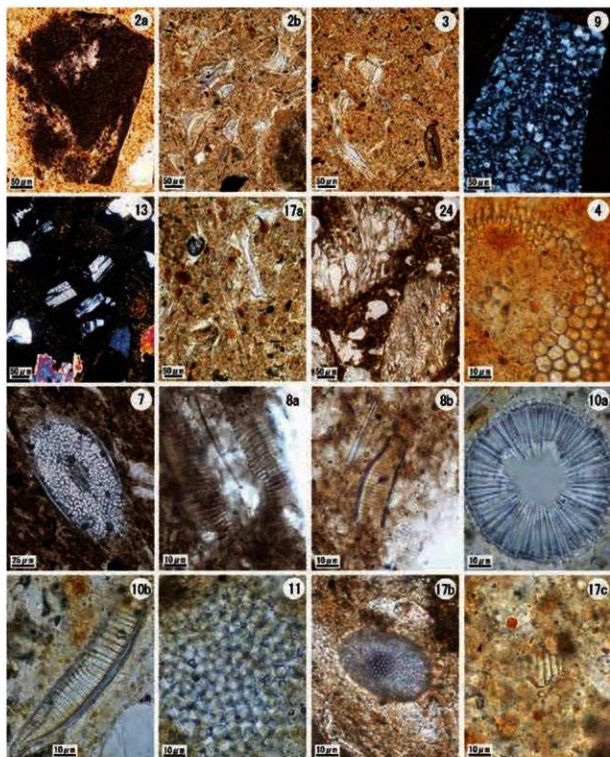


図版2 基盤粘土層および土器薄片の偏光顕微鏡写真 (a: 直交ニコル, b: 開放ニコル, スケール 0.5mm)
 1a-1b. 焼成サンプル (高間 (1)) 2a-2b. 焼成サンプル (高間 (1)) 3a-3b. 焼成サンプル (高間 (1))
 4a-4b. 焼成サンプル (高間 (1)) 5a-5b. 焼成サンプル (高間 (1)) 6a-6b. 擦文土器 (新田 (1))
 7a-7b. 擦文土器 (新田 (1)) 8a-8b. 擦文土器 (新田 (1)) 9a-9b. 擦文土器 (新田 (1))
 10a-10b. 土師器 (新田 (1)) 11a-11b. 土師器 (新田 (1)) 12a-12b. 黒色土器 (新田 (1))

第一巻
 石江遺跡群
 から出土し
 た土器の地
 質材料と地
 質発祥の地
 域分析



図版3 基盤粘土層および土器薄片の偏光顕微鏡写真 (a: 直交ニコル, b: 開放ニコル、スケール0.5mm)
 13a-13b. 撥文土器(新田(2)) 14a-14b. 撥文土器(新田(2)) 15a-15b. 撥文土器(新田(2))
 16a-16b. かむらけ(新田(1)) 17a-17b. かむらけ(新田(1)) 18a-18b. かむらけ(新田(1)・新田(2))
 19a-19b. かむらけ(新田(1)) 20a-20b. 土師器(新城平岡(4)) 21a-21b. 須恵器(高間(1))
 22a-22b. 須恵器(高間(1)) 23a-23b. 須恵器(高間(1)) 24a-24b. 基盤層(1層)



図版4 基盤粘土層および土器胎土中粒子の偏光顕微鏡写真(番号は分析番号に対応する)
 2a. 凝灰岩質 2b. ガラス質 3. ガラス質 9. 複合石英類(微細) 13. 斑晶質 17a. ガラス質
 24. ガラス質 4. 海水種珪藻化石 *Coscinodiscus marginatus* 7. 骨針化石
 8a. 淡水種珪藻化石 *Pinnularia viridis* 8b. 淡水種珪藻化石 *Eunotia praerupta* var. *bidens*
 10a. 放射虫化石 10b. 淡水種珪藻化石 *Epithemia turgida* 11. 放射虫化石 17b. 放射虫化石
 17c. 淡水種珪藻化石 *Tetracyclus* 属

第一号
 石江渡砂群
 から出土し
 た土器の胎
 土材料と基
 盤層中の薄
 片分析

第7節 石江遺跡群出土土器胎土の蛍光X線分析

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

青森市に所在する石江遺跡群から出土した須恵器と土師器について、波長分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、元素組成からみる材料の特徴を比較、検討した。

2. 試料と方法

分析対象は、高間(1)遺跡より出土した10世紀前半の須恵器5点(蛍光X線-1~3, 5, 6)と、新城平岡(4)遺跡より出土した10世紀初頭の土師器1点(蛍光X線-4)の薄片6である(表1)。なお、蛍光X線-4については、薄片観察も実施されている(薄片-20、詳細は第四章第6節)。

蛍光X線分析には、土器よりガラスビードを作製し、それを分析試料とするガラスビード法を用いた。まず採取した土器破片を、表面の汚れ等の影響を排除するため、岩石カッターで表面を削った後、さらに精製水で超音波洗浄を行った。試料をセラミック乳鉢で粉末にして、るつぽに入れ、電気炉で

750℃、6時間焼成した後、デシケータ内で放冷し、1.8000g秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウム $\text{Li}_2\text{B}_4\text{O}_7$ と、メタホウ酸リチウム LiBO_2 を8:2の割合で調製した融剤3.6000gと十分に混合し、白金製のるつぽに入れ、ビードサンプラーにて約750℃で250秒間予備加熱、約1100℃で150秒間溶融させ、約1100℃で450秒間揺動加熱してガラスビードを作製した。

分析は、フィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX(PW2424型)にて、検量線法による定量分析を行った。標準試料には、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所(NIST)の岩石標準試料計15種類を用いた。定量元素は、酸化ナトリウム(Na_2O)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化アルミニウム(Al_2O_3)、二酸化ケイ素(SiO_2)、酸化リン(P_2O_5)、酸化カリウム(K_2O)、酸化カルシウム(CaO)、酸化チタン(TiO_2)、酸化マンガン(MnO)、酸化鉄(Fe_2O_3)の主成分10元素と、バナジウム(V)、クロム(Cr)、コバルト(Co)、ニッケル(Ni)、銅(Cu)、亜鉛(Zn)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)、バリウム(Ba)の微量成分11元素の計21元素である。

表1 石江遺跡群粘土分析リスト

試料No.	遺跡名	地区	遺構名	器種	分類	番号	整理番号	時期
蛍光X線-1	高間(1)	D-4区	SI-01	甕	須恵器	AOMSN-238	B120	10世紀前半
蛍光X線-2		E-2区	SI-51・60カマド	長頸瓶	須恵器	AOMSN-239	B137	
蛍光X線-3		F-2区	SD-001a	甕	須恵器	AOMSN-240		
蛍光X線-4	新城平岡(4)	G区	SI-43	甕	土師器	AOMSN-243	174	10世紀初頭
蛍光X線-5	高間(1)	E-2区	SK-321	甕	須恵器	AOMSN-241		10世紀前半
蛍光X線-6		F-2区	SK-106	長頸瓶	須恵器	AOMSN-242	B166	

3. 結果

表2に、蛍光X線分析の測定結果を示す。

須恵器の甕(蛍光X線-1, 3, 5)は、酸化ナトリウム(Na_2O)が0.45~1.31%、酸化マグネシウム(MgO)が0.76~1.05%、酸化アルミニウム(Al_2O_3)が23.6~24.2%、二酸化ケイ素(SiO_2)が64.3~67.6%、酸化リン(P_2O_5)が0.031~0.057%、酸化カリウム(K_2O)が1.53~1.60%、酸化カルシウム(CaO)が0.70~0.83%、酸化チタン(TiO_2)が1.15~1.32%、酸化マンガン(MnO)が0.023~0.029%、酸化鉄(Fe_2O_3)が2.77~4.83%、バナジウム(V)が170~242ppm、クロム(Cr)が59~73ppm、コバルト(Co)が9~10ppm、ニッケル(Ni)が20~29ppm、銅(Cu)が1~8ppm、亜鉛(Zn)が92~97ppm、ルビジウム(Rb)が91~107ppm、ストロンチウム(Sr)が85~110ppm、イットリウム(Y)が28~34ppm、ジルコニウム(Zr)が182~210ppm、バリウム(Ba)が280~386ppmであった。

須恵器の長頸瓶(蛍光X線-2, 6)は、酸化ナトリウム(Na_2O)が1.41%と1.03%、酸化マグネシウム(MgO)が1.03%と1.11%、酸化アルミニウム(Al_2O_3)が23.9%と23.8%、二酸化ケイ素(SiO_2)が64.1%と65.5%、酸化リン(P_2O_5)が0.041%と0.045%、酸化カリウム(K_2O)が1.88%と2.04%、酸化カルシウム(CaO)が0.99%と0.54%、酸化チタン(TiO_2)が0.92%と1.02%、酸化マンガン(MnO)が0.020%と0.052%、酸化鉄(Fe_2O_3)が4.44%と4.27%、バナジウム(V)が179ppmと181ppm、クロム(Cr)が72ppmと77ppm、コバルト(Co)が9ppmと7ppm、ニッケル(Ni)が23ppmと20ppm、銅(Cu)が9ppmと2ppm、亜鉛(Zn)が90ppmと59ppm、ルビジウム(Rb)が127ppmと109ppm、ストロンチウム(Sr)が133ppmと100ppm、イットリウム(Y)が45ppmと30ppm、ジルコニウム(Zr)が161ppmと163ppm、バリウム(Ba)が357ppmと454ppmであった。

土師器の甕(蛍光X線-4)は、酸化ナトリウム

(Fe₂O₃)、バナジウム(V、図3)などのように、五所川原市の犬走窯と砂田D窯の化学組成の分布域からやや離れた値を示す元素が多少あり、全ての元素の分布は一致しないものの、高間(1)遺跡出土甕と長頸瓶ともに秋田県能代市や新潟県佐渡市の窯跡産須恵器よりも五所川原市産須恵器の化学組成に比較的近いと考えられる。

[土師器] (新城平岡(4)遺跡出土、土師器甕(蛍光X線-4))

松本の測定による化学組成を遺跡別にみてみると、各遺跡の土師器の化学組成のばらつきがかなり大きく、いずれの元素もほぼ分布域が重複していた。しかし、秋田県の遺跡(館の上遺跡と野形遺跡、湯ノ沢F遺跡)出土土師器は、青森県内の遺跡出土土師器に比べて酸化カルシウム(CaO、図2)とイットリウム(Y、図5)の分布域が比較的低い範囲にとどまっていた。今回分析した新城平岡(4)遺跡出土土師器甕は、これらの値がやや高いことから、少なくとも秋田県の遺跡出土土師器とは異なる特徴であるといえる。

5. おわりに

高間(1)遺跡より出土した須恵器5点と新城平岡(4)遺跡より出土した土師器1点の計6点の化学組成を比較、検討した。

高間(1)遺跡出土の須恵器は、甕の蛍光X線-3と5は非常に近い化学組成であり、材料的に極めてよく似ていると考えられた。また、五所川原市と秋田県能代市、新潟県佐渡市の窯跡出土須恵器と比較した結果、甕と長頸瓶ともに、五所川原市の窯跡出土須恵器に比較的近い化学組成であった。

新城平岡(4)遺跡出土の土師器の化学組成は、青森県内の遺跡から出土した土師器の化学組成の分布の範囲内であった。

引用・参考文献

- 馬淵久夫編(1994)元素の事典、66p、朝倉書店。
 松本建彦(2001)五所川原産須恵器の胎土分析、物質文化、71、1-21。
 松本建彦(2003a)東北西部産須恵器の胎土分析、考古学研究、50(3)、102-130。
 松本建彦(2003b)浪岡町野尻(4)遺跡出土土師器の成分分析、浪岡町教育委員会編「青森県浪岡町野尻(4)遺跡」：94-105、浪岡町教育委員会。
 松本建彦(2003c)誘導結合プラズマ蛍光分光分析(ICP-AES)による東北北部古代土師器の胎土分析、第四紀研究、42(1)、1-12。
 松本建彦(2007)赤平(2)・(3)遺跡出土土師器の胎土分析、青森県埋蔵文化財調査センター編「赤平(2)遺跡・赤平(3)遺跡」：108-113、青森県教育委員会。
 松本建彦(2009a)新田(2)遺跡出土土師器の化学成分、青森県埋蔵文化財調査センター編「新田(2)遺跡」：28-34、青森県教育委員会。
 松本建彦(2009b)出土土師器の胎土分析、青森県埋蔵文化財調査センター編「稲元遺跡(1)」：113-118、青森県教育委員会。
 中井 泉編(2005)蛍光X線分析の実践、242p、朝倉書店。

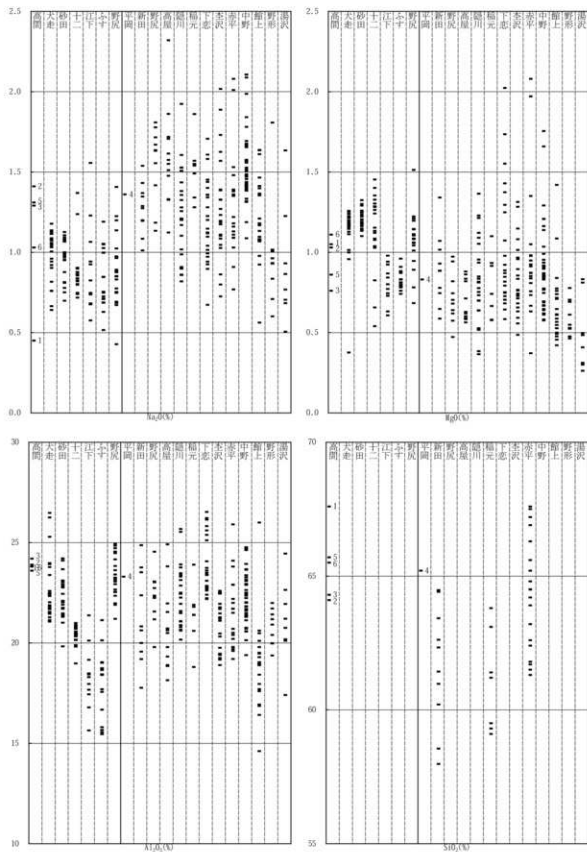


図1 各元素の遺跡別分布図 (1) (松本, 2001; 2003a; b; c; 2007; 2009a; bを基に作成)
 高間：高間(1)遺跡、大走：五所川原市大走窟、砂田：五所川原市砂田D室、十二：秋田県能代市十二林窟、江下：新潟県佐渡市江の下室、ふす：新潟県佐渡市ふすべ室、野尻：青森市野尻(4)遺跡、平岡：新城平岡(4)遺跡、新田：青森市新田(2)遺跡、高屋：青森市高屋敷館、福元：五所川原市福元(4)・(12)遺跡、志次：鶴田町福元遺跡、下志：弘前市下志塚遺跡、赤平：藤ヶ次町赤平遺跡、赤平：東北町赤平(2)・(3)遺跡、中野：おいらせ町中野平遺跡、館上：秋田県三種町館の上遺跡、野形：秋田市野形遺跡、湯沢：秋田市湯ノ沢F遺跡

野一
石江遺跡群
出土土器類
江の歴史
編年表

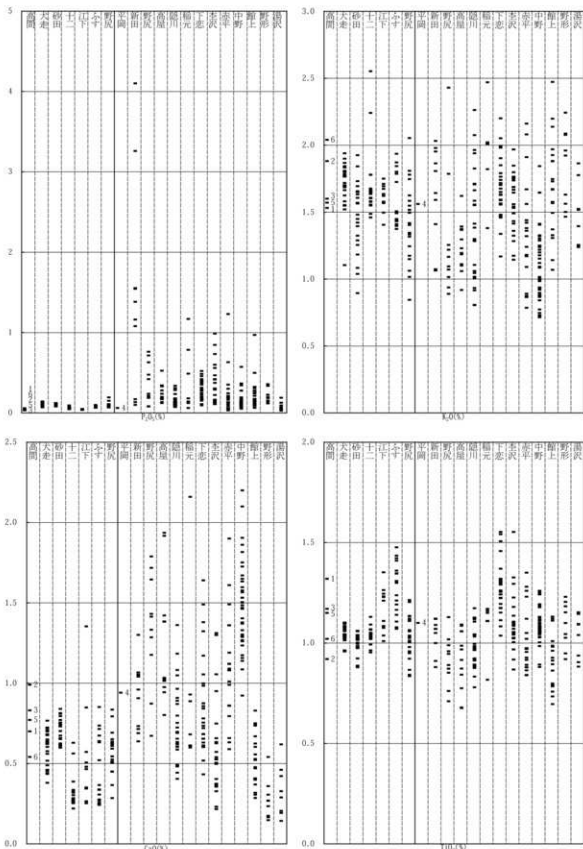


図2 各元素の遺跡別分布図(2) (松本, 2001; 2003a; b; c; 2007; 2009a; bを基に作成)
 高間: 高間(1)遺跡, 犬走: 五所川原市犬走窯, 砂田: 五所川原市砂田D窯, 十下: 秋田県能代市十二林窯, 江下: 新潟県佐渡市江の下窯, ふす: 新潟県佐渡市ふすべ窯, 野形: 青森市野形(4)遺跡, 平岡: 新城平岡(4)遺跡, 新田: 青森市新田(2)遺跡, 高屋: 青森市高屋飯館, 隠川: 五所川原市隠川(4)・(12)遺跡, 福元: 鶴田町福元遺跡, 下志: 弘前市下志塚遺跡, 赤平: 鯉ヶ沢町赤平遺跡, 赤平: 東北町赤平(2)・(3)遺跡, 中野: おいらせ町中野平遺跡, 館上: 秋田県三種町館の上遺跡, 野形: 秋田市野形遺跡, 湯沢: 秋田市湯ノ沢遺跡

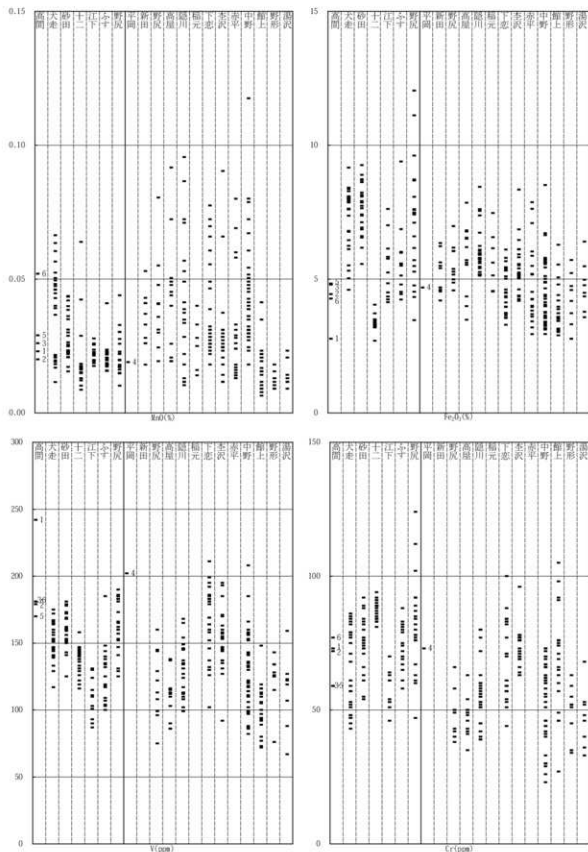


図3 各元素の遺跡別分布図 (3) (松本, 2001; 2003a; b; c; 2007; 2009a; bを基に作成)
 高間: 高間(1)遺跡, 犬走: 五所川原市犬走窯, 砂田: 五所川原市砂田D窯, 江下: 秋田県能代市十二林窯, 江下: 新潟県佐渡市江の下窯, ふす: 新潟県佐渡市ふすへ窯, 野尻: 青森市野尻(4)遺跡, 平岡: 新城市平岡(4)遺跡, 新田: 青森市新田(2)遺跡, 高屋: 青森市高屋敷館, 龍川: 五所川原市龍川(4), (12)遺跡, 稲元: 鶴田町稲元遺跡, 下恋: 弘前市下恋塚遺跡, 赤平: 鶴ヶ沢町赤平遺跡, 赤平: 東北町赤平(2), (3)遺跡, 中野: おひらせ町中野平遺跡, 野形: 秋田県三種町館の上遺跡, 野形: 秋田市野形遺跡, 高沢: 秋田市湯ノ沢D遺跡

野一ノ
石江遺跡群
出土土器類
江の歴史
編年表

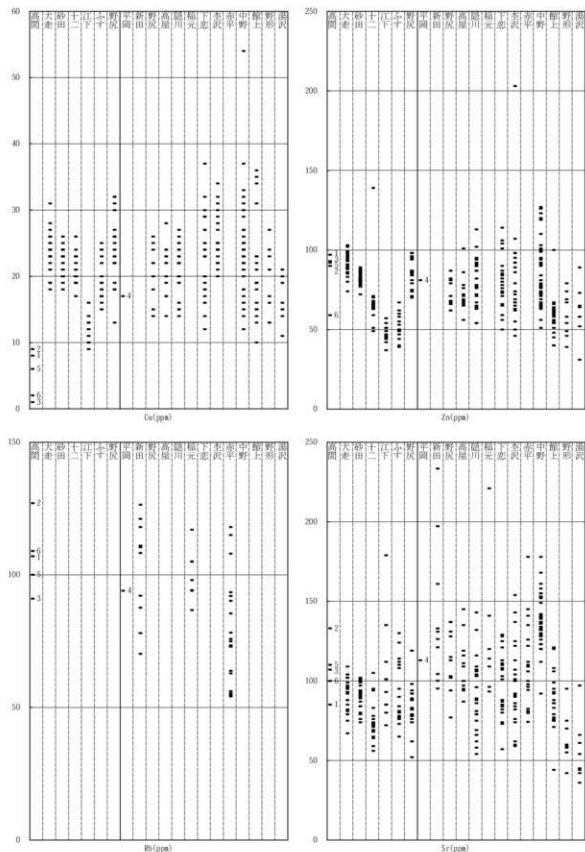


図4 各元素の遺跡別分布図(4) (松本, 2001; 2003a; b; c; 2007; 2009a; bを基に作成)

高間：高間(1)遺跡，犬走：五所川原市犬走窟，砂田：五所川原市砂田D窟，十二：秋田県能代市十二林窟，江下：新潟県佐渡市江の下窟，ふす：新潟県佐渡市ふすへ窟，野尻：青森市野尻(4)遺跡，平岡：新城市岡(4)遺跡，新田：青森市新田(2)遺跡，高屋：青森市高屋敷館，隠川：五所川原市隠川(4)・(12)遺跡，稲元：鶴田町稲元遺跡，下恋：弘前市下恋塚遺跡，赤平：柳ヶ沢町赤平遺跡，赤平：東北町赤平(2)・(3)遺跡，中野：おいらせ町中野平遺跡，館上：秋田県三種町館の上遺跡，野形：秋田市野形遺跡，濁沢：秋田市濁沢D遺跡

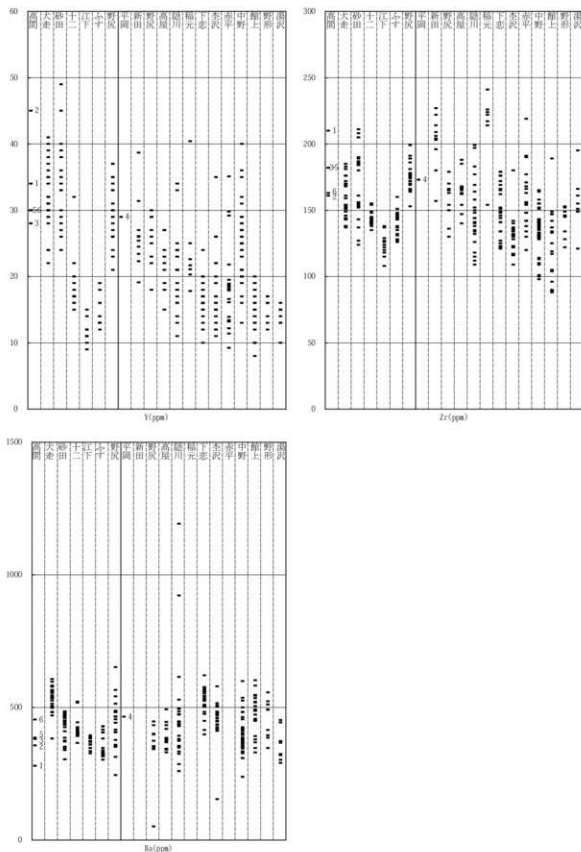


図5 各元素の遺跡別分布図 (5) (松本, 2001; 2003a; b; c; 2007; 2009a; bを基に作成)
 高間: 高間(1)遺跡, 大走: 五所川原市大走竈, 砂田: 五所川原市砂田B竈, 十二: 秋田県能代市十二林竈, 江下: 新潟県佐渡市江の下竈, ふす: 新潟県佐渡市ふす竈, 野尻: 青森市野尻(4)遺跡, 平岡: 新城市平岡(4)遺跡, 新田: 青森市新田(2)遺跡, 高屋: 青森市高屋敷館, 福元: 五所川原市福元(4)・(12)遺跡, 福元: 鶴田町福元遺跡, 全次: 弘前市下念塚遺跡, 全次: 藤ヶ次町全次遺跡, 赤平: 東北町赤平(2)・(3)遺跡, 中野: おいらせ町中野平遺跡, 館上: 秋田市三種町館の上遺跡, 野形: 秋田市野形遺跡, 湯沢: 秋田市湯ノ沢F遺跡

第一号
 石江遺跡群
 出土土器類
 江の歴史
 調査報告

第8節 青森市石江遺跡群から出土した木製品類と自然木の樹種とその意味

能城 修一（森林総合研究所木材特性研究領域）

青森県青森市の西部に位置する石江遺跡群では、新田(1)・(2)遺跡(能城, 2011)、新城平岡(2)・(4)・(7)遺跡(能城, 2012)、高間(1)遺跡(能城, 2013)で樹種を報告した。このうち古代から中世の木製品類や建築材を多産した新田(1)・(2)遺跡および高間(1)遺跡の資料を対象として、その樹種組成を周辺の遺跡と比較して、当時の青森平野周辺における樹種選択の様相について考察した。新田(1)・(2)遺跡では溝にそって四つの堆積のパターンが認められたが、ここではそれを一括し、古代と中世に大きく区分して検討した。

青森平野で木製品類が報告されている遺跡のうち、石江遺跡群とはほぼ同時期のものには、青森県が調査した新田(1)遺跡(鈴木ほか, 2009a, 2009b)と、近野遺跡(能城ほか, 2006)、野木(1)遺跡(能城・鈴木, 2000)がある。また津軽平野の岩木川流域では、青森県が調査した十三盛遺跡(株式会社パレオ・ラボ, 2013)と十三渡遺跡(小川ほか, 2005)、五所川原市が調査した十三盛遺跡(小林ほか, 2013)がある。また時代は異なるが、アスナロの利用が青森県内でもっとも最初に認められる遺跡として、石江遺跡群のすぐ南方に位置する三内丸山遺跡(Noshiro and Suzuki, 2006)の資料も比較対象とした。

石江遺跡群から出土した古代から中世の木製品類では、アスナロが75～90%を占め、高間(1)遺跡の13世紀の資料でスギが6%を占めるもの、それ以外ではスギは1%以下であった(表1)。新田(1)・(2)遺跡では、道跡SF-01や建築部材でアスナロの使用率が高く、それ以外の製品でも圧倒的にアスナロが多く、杭や樁、加工木などでは、アカマツやヤナギ属、クリ、モクレン属、カエデ属、トネリコ属などの比率が増えた(能城, 2011)。同じく青森平野の中にある近野遺跡(能城ほか, 2006)と野木(1)遺跡(能城・鈴木, 2000)では、アスナロは60～80%を占めており、石江遺跡群と同じく、土木材として使われたクリの比率がいずれの遺跡でも高かった。野木(1)遺跡のクリは水場の木枠と杭に使われたものに限られており、近野遺跡では杭として使われたものが多かった。いずれの遺跡でも、アスナロは曲物や箸、板、棒などに使われていた。

津軽平野を見ると、同時期の五所川原市十三盛遺跡でも祭祀具や容器、服飾具を中心として85%以上をアスナロが占めており(小林, 2013; 株式会社パレオ・ラボ, 2013)、アスナロの優先的な利用は青森平野だけでなく津軽平野にもおよんでいたこと

が明らかとなっている。中世の津軽平野でもアスナロの森林資源が豊かであったことが十三渡遺跡(小川ほか, 2005)の出土木材から確認できる。したがって古代から中世の青森平野から津軽平野にかけてはアスナロの豊かな森林資源があり、当時の人々はそれを集中的に活用していた。青森県におけるアスナロの変種であるヒバの現在の天然分布は、岩木山の南東および八甲田山、津軽半島、下北半島、夏泊半島とされている(林, 1960)。しかし、また近世の17世紀末においても、津軽藩領内の青森平野東部から八甲田山にかけてはアスナロの多い、人為の影響をあまり受けていない森林が広がっていたと文献史料から考えられており(長谷川, 2009)、古代～中世には青森平野から津軽平野の近傍にはアスナロの木材資源が十分あったと考えられる。

こうした木製品類や建築部材の樹種と比較して、新田(1)・(2)遺跡の自然木ではヤナギ属が29%を占め、アスナロ、ハンノキ属ハンノキ節、ニワトコが伴うという特異な組成を示していた。一方、津軽平野の十三盛遺跡では、ハンノキ属ハンノキ節とトネリコ属ソノジ節が優先し、ヤナギ属が伴う低地林が遺跡の周辺に成立していた(株式会社パレオ・ラボ, 2013)。おそらく青森平野でも、中心に近いところには同様の低地林が成立していたと考えられ、新田(1)・(2)遺跡の自然木の組成は丘陵部の流路沿い二次林の組成が反映されていたと考えられる。

アスナロが縄文時代前期には青森平野の周辺に生育していたことは、三内丸山遺跡の土木材の樹種から示されている(Noshiro and Suzuki, 2006)。三内丸山遺跡では東日本の縄文時代の特性として集落の周辺にはクリ林を擁しており(吉川ほか, 2006)、出土木材でもワリが優占するが、北の谷と第6鈿塔跡ではアスナロもほぼ同量出土しており、クリ林の外側にあった集落の周辺の二次林にはアスナロがかなり生育していたと考えられる。

新田(1)・(2)遺跡から出土した木製品類の器種と樹種を対比してみると、アスナロはほぼすべての器種で優先的に利用されていた(図2)。とくに祭祀具や箸状、籠、容器、建築部材、井戸材、板などでは90%以上を占めており、各種の用途に満遍なく利用されていた。一方、農具では、アスナロは柄や軸に使われており、ヤナギ属が蒔植、カエデ属が鋸に利用されていて、作業中に衝撃が加わる器種にはアスナロ以外の樹種を選択していたことが伺える。津軽平野の十三盛遺跡(小林ほか, 2013; 株式会社パレオ・ラボ, 2013)では、祭祀具にヤナギ属がアスナロについて多く、農具の本体にカエデ属とコナラ節が、またヤス状製品にノリウツギが多かった。しかし、いずれの器種も点数は少なく、こ

これらの遺跡から報告された樹種選択が、青森平野から津軽平野にかけての一般的な傾向であるのかは今のところ不明である。

引用文献

長谷川成一. 2009. 藩領における植生景観の復元とその変容: 近世津軽領を中心に. 弘前大学大学院地域社会研究科年報 6: 1-63.

林 弥栄. 1960. 日本産針葉樹の種類と分布. 農林出版.

小林克也・佐々木由香・能城修一. 2013. 十三盛遺跡出土木材の樹種. 「十三盛遺跡 (第2分冊)」, 73-89. 五所川原市教育委員会.

能城修一. 2011. 青森市新田 (1)・(2) 遺跡から出土した木製品類と自然木の樹種. 「石江遺跡群発掘調査報告書IV (第2分冊)」, 1-44. 青森県教育委員会.

能城修一. 2012. 青森市新城平岡 (2)・(4)・(7) 遺跡から出土した木製品類の樹種. 「石江遺跡群発掘調査報告書V (第3分冊)」, 196-209. 青森県教育委員会.

能城修一. 2013. 青森市高間 (1) 遺跡出土木材の樹種. 「石江遺跡群発掘調査報告書VI (第4分冊)」, 293-316. 青森県教育委員会.

能城修一・鈴木三男. 2000. 青森県野木遺跡出土木材の樹種. 「野木遺跡III (第6分冊)」, 21-34. 青森県教育委員会.

能城修一・鈴木三男・小川とみ. 2006. 青森県近野遺跡出土木材の樹種. 「近野遺跡」, 278-296. 青森県教育委員会.

Noshiro, S. and Suzuki, M. 2006. Utilization of forest resources in the Early Jomon Period at and around the Sannai-maruyama site in Aomori Prefecture, northern Japan. 植生史研究特別第2号: 83-100.

小川とみ・大山幹成・鈴木三男. 2005. 十三盛遺跡出土木材の樹種. 「十三盛遺跡 (第V分冊)」, 188-205. 青森県教育委員会.

株式会社パレオ・ラボ. 2013. 出土木製品類と自然木の樹種. 「十三盛遺跡 (第2分冊)」, 76-99. 青森県教育委員会.

鈴木三男・小川とみ・大山幹成. 2009a. 新田 (1) 遺跡出土木材の樹種. 「新田 (1) 遺跡 (第2分冊)」, 28-40. 青森県教育委員会.

鈴木三男・小川とみ・大山幹成. 2009b. 新田 (2) 遺跡出土木製品の樹種同定. 「新田 (2) 遺跡 (第2分冊)」, 15-22. 青森県教育委員会.

吉川昌伸・鈴木 茂・辻 誠一郎・後藤香奈子・村田泰輔. 2006. 三内丸山遺跡の植生史と人の活動. 植生史研究特別第2号: 49-82.

表1. 石江遺跡群と周辺の木製品類の樹種組成の対比

樹種	三内丸山		新田1・2 (山)			野木1		近野		高間		十三盛 (山)		十三盛 (谷)	
	縄文前期		古代		中期	古代		7-9世紀	7-9世紀	10世紀	古代		古代		中期
	新田1遺跡	北の谷	木製品類	自然木	14-15世紀			9層							
アカマツ			1.9%	2.4%	0.0%			0.6%							
スギ			0.2%	0.2%				0.4%	4.0%	2.2%	5.9%	1.2%		0.4%	8.2%
アズキナギ	17.2%	57.9%	65.4%	7.0%	88.4%	83.1%	62.6%	78.3%	76.3%	65.7%	91.7%	96.7%			
ヤナギ			2.2%	28.9%	1.2%			2.6%			2.9%	1.2%			
ハンノキ属ハシノキ類	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%					1.4%	0.6%	0.2%			
ブナ属			0.2%	1.9%	0.0%	1.0%		0.2%	0.2%	0.2%	0.1%				
ナギ	26.2%	33.2%	1.2%	2.8%	4.2%	2.0%	15.0%	6.2%	2.2%	0.2%			0.4%		
モクレン属	0.0%	0.0%	0.0%	2.4%	0.0%	0.4%	2.7%	1.0%	0.2%	0.2%	0.2%		0.1%		
カシワ属	7.4%		0.7%	2.2%	2.0%	2.1%	0.4%	0.2%	0.2%	0.3%	0.4%		0.4%		
トナリコ属	5.8%	0.2%	1.2%	4.7%	0.0%	0.8%	0.7%	1.2%	1.2%	1.6%	0.6%		0.4%		
その他	31.9%	7.9%	4.4%	38.9%	1.2%	0.6%	12.6%	9.8%	0.1%	5.4%	1.6%		1.6%		
総計	226	190	435	211	66	255	273	184	663	1191	2763	355			

新田 (1) 遺跡 (山) (鈴木ほか2009a), 新田 (2) 遺跡 (山) (鈴木ほか2009b), 野木 (1) 遺跡 (能城・鈴木2000), 近野遺跡 (能城ほか2006), 十三盛遺跡 (小川ほか2005)

自然木: 柱・杵材のみ

三内丸山遺跡: 木製品・加工木

図1-8
青森県石江遺跡群から出土した木製品類と自然木の樹種とその数値

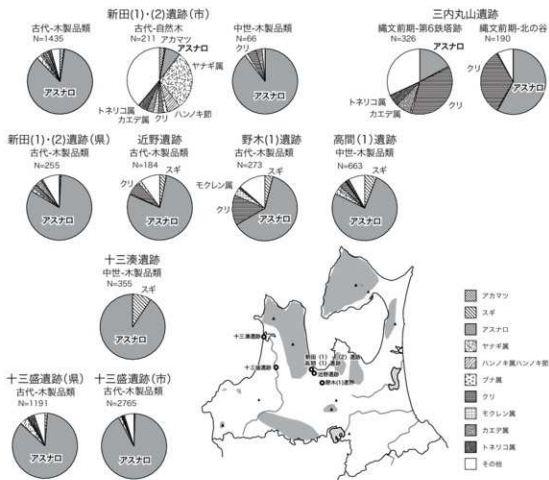


図1. 石江遺跡群と周辺遺跡の木製品類および自然木の樹種組成とヒバの現在の天然分布(林1960による)

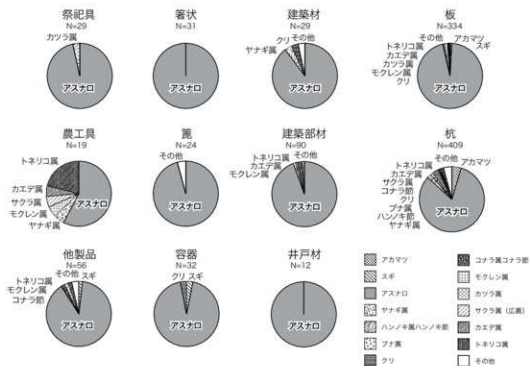


図2. 新田(1)・(2)遺跡から出土した木製品類の器種と樹種

第9節 新田(1)・(2) 遺跡出土のガラス製品の成分分析

竹内 孝・中村和之(函館工業高等専門学校)

1. ガラス製品の成分分析

この度、新田(1)・(2) 遺跡から出土したガラス製品4点の分析を行ったので、その成果を報告する。

1.1 分析方法

分析は、函館工業高等専門学校に設置されている分析走査電子顕微鏡(日本電子社製 JSM-6360LA に JED-2300 型エネルギー分散型 X 線分析装置付属)を用いて行った。この装置は、従来の高真空モードに加え、低真空モード下での元素分析が可能であるため、試料に導電処理膜を施すことなく非破壊分析を行うことができる。実際には粘着性カーボンテープを利用して、装置の試料台にガラス資料を着けて行った。分析は、ガラスの種類および着色元素の同定を目的として含有元素の定性・半定量分析を行った。定量方法は ZAF 補正法¹⁾による簡易酸化物定量である。測定は加速電圧: 20kV、照射電流: 1.3 ~ 2.2 nA、測定時間: 100 sec、面分析の条件で行った。

図1 分析したガラス製品の写真



表1 ガラス製品の半定量分析結果

No	試料名	F	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	SO ₃	Cl	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	FeO	ZnO	SnO ₂	Sb ₂ O ₃	CuO	As ₂ O ₃	BaO	PbO	Total	
1	新田No1_ミ-176 (第107集-1図CLE-1-126-2)	8.76	0.20	2.78	63.44	0.13	0.11	2.32	11.46				0.18	1.67	3.79	5.22	0.15		0.39			100.00
2	新田No2_ミ-177	10.04	0.49	4.49	63.51				2.06	9.52	0.14	0.16	0.49	0.45	3.20	4.63			0.24	0.59		100.01
3	新田No3_F-238	0.62	9.12	0.22	5.43	59.94	0.21	0.13	2.67	11.07	0.28	0.30	0.98		3.43	4.61	0.16		0.34	0.48		99.99
4	新田No4_F-239	1.39	11.27	0.07	6.26	61.05	0.02	0.69	2.71	8.57		0.32	0.43		3.07	3.62		0.12	0.36	0.65		100.00

表2 ガラス製品の組成成分比率

Sp No.	珪酸系成分				アルカリ系成分				鉛系成分		合計	ガラス種別		
	Al ₂ O ₃	SiO ₂	計	比率	Na ₂ O	MgO	K ₂ O	CaO	計	比率			PbO	比率
1	2.78	63.44	66.22	0.74	8.76	0.20	2.32	11.46	22.74	0.26	0.00	0.00	88.96	アルカリ石灰ガラス
2	4.49	63.51	68.00	0.75	10.04	0.49	2.06	9.52	22.11	0.24	0.59	0.01	90.70	アルカリ石灰ガラス
3	5.43	59.94	65.37	0.74	9.12	0.22	2.67	11.07	23.08	0.26	0.48	0.01	88.93	アルカリ石灰ガラス
4	6.26	61.05	67.31	0.74	11.27	0.07	2.71	8.57	22.62	0.25	0.65	0.01	90.58	アルカリ石灰ガラス

石灰ガラス	:	CaO が 3% 以上
カリガラス	:	K ₂ O が 3% 以上
カリ石灰ガラス	:	CaO, K ₂ O が 3% 以上
アルカリ石灰ガラス	:	CaO, Na ₂ O, K ₂ O が 3% 以上
鉛ガラス	:	PbO が 3% 以上
珪酸塩ガラス	:	Na ₂ O, K ₂ O, CaO, PbO がすべて3% 以下

1.2 分析結果

ガラス資料の半定量分析の結果を表1に示す。また、分析値から集計したガラスの成分比率を表2に示す。なお表2にある比率とは、珪酸塩系成分とアルカリ系成分、鉛系成分の合計に対する各成分の割合のことである。

ガラス成分比率より求めた判定基準からガラス玉資料の材質は、カリウム (K₂O) がやや少ないがナトリウム (Na₂O)、カルシウム (CaO) がそれぞれ10% 近く含まれておりアルカリ石灰ガラスと思われる。

ガラス製品の形状は新田_4 F-239 (No4) のガラスは玉形に成形したように見えるが、他の No1 ~ No3 の資料はガラス塊や板状ガラスである。

いずれのガラス資料もスズ (SnO₂) とアンチモン (Sb₂O₃) を 3 ~ 5% 含む。新田_1 ミ-176 資料 (No1) は緑色であり、鉄 (Fe)、亜鉛 (Zn)、銅 (Cu) 元素が着色に関わっている可能性がある。他の No2 ~ No4 資料は水色~紺色である。共通して Mn 元素を含むことから微量で検出できないが、コバルト (Co) を含んでいる可能性があり、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、コバルト (Co) 元素が着色に関わっている可能性がある。

註1): ZAF 補正とは、定量分析を行うときの補正法一つで、相対強度の値に原子番号補正 (atomic number Z)、吸収補正 (absorption A)、蛍光補正 (fluorescence F) を施して真の濃度を求める方法のことである。

第10節 青森市石江遺跡群出土土器および遺跡周辺土壌の化学分析

松本建速(東海大学)・市川慎一郎・中村利廣(明治大学)

1. はじめに

青森市石江遺跡群に含まれる高間(1)、新田(1)、新田(2)遺跡から出土した平安時代の土器器、ロクロ土器器、擦文土器器、須恵器、かわらけ、遺跡周辺から採取された土壌試料(以下では粘土試料と呼ぶ)の化学成分を分析した。各種土器の胎土や遺跡群内で採取される粘土の化学成分データの蓄積、土器の胎土の産地推定を目的とした。

試料の粉碎を、松本建速、東海大学大学院生林悠平、同大学菱川祐基がおこない、試料作製、実験は明治大学理工学部で市川慎一郎・中村利廣がおこなった。本稿は、分析および結果を市川が、他を松本が執筆した。

2. 試料と方法

(1) 試料

石江遺跡群出土の土器20点(擦文土器7点、ロクロ土器3点、黒色土器1点、ロクロかわらけ2点、手づくねかわらけ2点、須恵器5点)、粘土試料20点を試料とした。土器試料の出土遺跡名、器種、帰属時期、粘土試料の層準等は表4に記した。なお、粘土試料も、青森市教育委員会が調査・採取したものである。

なお、土器試料Na.6は新田(2)遺跡出土の擦文土器であるが、器面に馬の絵が刻まれている。

粘土試料のうち、5点については市教委の木村淳一氏が水道水を加え捏ねた後、電気炉を用いて800℃で焼成(焼成時間は不明)したものである。うちNa.1~4は、それぞれの層から採取したまま、Na.5はNa.1~4の粘土試料を任意の割合で混合して捏ね、焼成した。それらを以下では焼成粘土Na.1~5と呼ぶ。残りの15点はそれぞれの層から採取したままのものであり、粘土Na.1~15と呼ぶ。

(2) 方法

ガラスビード / 蛍光X線分析法で定量した。ビード作成は、Nippon Thermionics社製高周波誘導加熱装置 BEAD SAMPLER NT-2000 でおこない、分析は蛍光X線装置には Rigaku Rix 3100 を用いた。いずれも明治大学理工学部応用化学科設置である。

3. 実験

(1) ガラスビード作成

定量分析には、試料と融剤との質量比が1:10のガラスビードを用いた。土器の一部を折り取り、

器表面の風化した部分を電動やすりで削り、メノウ乳鉢を用いて、指先に粒子感を感じなくなるまで粉碎した。また、粘土試料については、電気炉(Yamato Drying Oven DX302)を用いて100℃で6時間加熱したものを土器と同様の方法で粉碎した。その後、電気炉(FUM312PA; Advantec Toyo Seisakusho Kaisha)で500℃、2時間加熱し、試料中の水分や有機物を除去した。融剤には、電気炉で700℃、8時間乾燥した無水四ホウ酸リチウムを用いた。融剤4.000gと試料粉末0.400gとを電子天秤で正確に秤量した後、薬包紙に移して竹製の匙で混合した。混合したものをPtるつぼ(CS-2型、Pt 95%—Au 5%)中に移し、高周波誘導加熱装置(BEAD SAMPLER NT-2000; Nippon Thermionics)で加熱・熔融した。混合物の熔融は、予備加熱800℃、120秒、本加熱1200℃、120秒、揺動加熱1200℃、120秒¹⁾で行った。その後、この熔融物を室温まで急冷してガラス化し、直径35mmのガラスビードとした。作製したガラスビードは、薬包紙で包みデシケーター中で保存した。

(2) 定量分析

蛍光X線装置には Rigaku RIX 3100 を用いた。X線管球には エンドウィンドウ型 Rh 管球を、分光結晶には LiF (200)、PET (002)、Ge (111)、TAP (001) を用いた。管電圧50kV、管電流80mAで動作し、主成分(Na, Mg, Al, Si, P, K, Ca, Ti, Mn, Fe)・微量元素(V, Cr, Ni, Rb, Sr, Y, Zr)の分析線(K α 線)を励起した。検出器には、ガスフロー型プロポーション・カウンター(軽元素測定用)とシンチレーション・カウンター(重元素測定用)を用い、プロポーション・カウンターにはPRガスを50cm³min⁻¹流した。測定は全て、測定室を数Pa程度の真空雰囲気にし、試料の不均一性を軽減するため、試料を30rpmで回転して行った。試料ホルダーからの散乱X線を遮断するために、分析試料であるガラスビードの下に厚さ5mmのアクリル板を敷いた。測定の際には、装置のドリフト補正を行うために、後述する検量用標準ガラスビードのうちの一枚を毎回測定し、検量線を標準化した。

検量線の作成には、頒布標準物質ではなく、試薬調合による検量用標準²⁾を用いた。検量用標準ガラスビード(試料:融剤=1:10)は、前掲の融剤および定量対象成分(Na₂O, MgO, Al₂O₃, SiO₂, P₂O₅, K₂O, CaO, TiO₂, MnO, Fe₂O₃; V, Cr, Ni, Rb, Sr, Y, Zr)を含有する特級試薬(Na₂CO₃, MgO, Al₂O₃, SiO₂, Na₂P₂O₇, KCl, CaCO₃, TiO₂, MnO₂, Fe₂O₃; V₂O₅, Cr₂O₃, NiO, RbCl, SrCO₃, Y₂O₃, ZrO₂)を混合(融剤4.000g、検量用試薬0.400g)して調製した³⁾。日本産の土器を定量できる検量範囲を推定し、可能な限り偏りがないように試薬の添加量を組み合わせた。分析線に妨害

線が重なる場合、妨害線の強度を差し引く必要がある。ここでは、VKa に TiK β , CrKa に VK β , YKa に RbK β , ZrKa に SrK β が重なったので、各々 TiKa, VKa, RbKa, SrKa の強度で補正した。微量成分元素では、分析試料間のマトリックスの違いを補正するために、各分析線近傍のバックグラウンド散乱線の強度を内標準とした。

4. 結果

検量用標準ガラスビードを用いて検量線を作成したところ、直線性はいずれも良好であり、相関係数は $r = 0.9992 - 0.9999$ であった。ブランク測定 ($n = 6$) の標準偏差の3倍から算出した検出下限値 (1:10 ガラスビード中の濃度で計算) は、Na₂O, 27 mass ppm; MgO, 21 mass ppm; Al₂O₃, 7.1 mass ppm; SiO₂, 89 mass ppm; P₂O₅, 22 mass ppm; K₂O, 13 mass ppm; CaO, 6.1 mass ppm; TiO₂, 6.0 mass ppm; MnO, 1.6 mass ppm; Fe₂O₃, 4.3 mass ppm; V, 0.7 mass ppm; Cr, 0.9 mass ppm; Ni, 0.5 mass ppm; Rb, 0.4 mass ppm; Sr, 0.1 mass ppm; Y, 0.1 mass ppm; Zr, 0.1 mass ppm であった。検量線の正確さを検証するために旧地質調査所発行の河川堆積物標準試料 (Jsd-2, Jsd-3) を定量したところ、定量値は推奨値¹⁾と概ね一致した(表1)。本法による土器片25点の分析結果を表2に、粘土15点の分析結果を表3に示す。

5. 考察

(1) 酸素を除去した数値の算出と考察法

考察に際し、最初に分析値を次のようにして整えた。表3で示したように、分析値はトータルが100%ではなく、92.9~98.1%の間でばらついていて、これは、1200度で加熱する前の試料中に含まれる水の量が一定でないことから起こる。しかし、これでは各試料の値を比較することができない。そこで、条件を同じにするために、まず、主要10元素の酸化物としての値の総計が100%となるように調整した。そして公表されている様々な分析値との比較をおこないやすくするため、酸素を除去した元素の値を算出し(表4)、Siと各元素との関係を見るために、全元素についてハーカー図を作成し(図1・2)、考察に用いた。ほかに、長石、輝石など、主要な造岩鉱物の化学組成を基本として、共存関係がある元素どうしの比を算出し、試料ごとの違いを見た。

それらの数値を用いた考察は、岩石の化学組成を基本として、それらとの比較を念頭に置いておこなった。岩石の分析データは、産業技術総合研究所発行の岩石標準資料を用いた(図3)。試料の類似・相違を考える際には、1枚の図だけで判断することはせず、できるだけ多くの図を総合しておこなった。

土器の原料は様々な鉱物で構成されているため、複数の元素どうしの関係を見なくてはならないのである。

(2) 土器原料の粒度組成と化学組成についての一一般論

1) 粒度組成

粘土鉱物は、地中での岩石の熱水変質、海底や湖沼底での堆積物の結成作用などによって生成する。いずれも様々な地質に由来することになるが、後者が一般的であり分布範囲が広い。したがって、先史時代の土器の原料とされた粘土層も水成堆積層に由来するものが多いことになる。愛知県立常滑窯業センター(1978)では、常滑周辺から瀬戸・美濃のあたりで利用される窯業原料の粒度組成が明らかにされているが、一般的な粘土層の粒度組成を知るのにはたいへん参考になる。粘土鉱物が25%、シルトが65%、砂が10%というのが45地点で採取された窯業原料の粒度組成平均値である。地域や時代が違っても、粘土層の粒度にかかわる生成条件は同じことになるので、粒度組成はほぼこの数字となるはずである。なお、ここで言うシルトは2~50 μ mの粒度である。そして、45地点の窯業原料とされた粘土層に含まれる砂は0.25mm(250 μ m)より小さい。

また、縄文土器破片からプレバートを作成し、0.05mm以上の粒子を計数した河西 学ほか(1989)など、氏の多くの分析によれば、そのような大きさの粒子は全体の20~30%でしかなく、残りの、すなわちシルト以下の細かい粒子が70~80%であった。プレバート自体の厚さが0.02~0.03mm(20~30 μ m)あるので、それよりも小さな粒子は重なっており観察できないので0.002mm(2 μ m)以下の粘土鉱物とシルトとを分離して識別することはできないが、シルト+粘土鉱物が70~80%ということになる。さきに示した粘土層の粒度組成では、シルト+粘土鉱物は平均で90%なので、粗砂や風化岩片などの混和材が10~30%ほど加えられることになる。

このように、土器には混和剤として砂や礫が10~30%添加されるのであるが、さきに見たように粘土層の粒度組成は、平均的にはシルト+砂が75%なので、調整済みの胎土の場合、シルト+砂(および礫)は77~81%になっており、さらに粘土鉱物以外の比率が高くなる。

先述した愛知県立常滑窯業センター(1978)に報告された愛知・岐阜県域の窯業原料用粘土層に含まれる砂の粒度は0.25mm(250 μ m)以下である。ある一定の条件下で粘土層は生成されるので、どこであれ粒度組成も砂の大きさもほぼこれと同じになるはずである。また、プレバートを作成し多くの土器の胎土の観察をおこなってきた清水は、土器胎土

に含まれる0.3mm以上の砂は添加されたものとする(清水1992)。土器胎土中に含まれる0.25～0.3mm以上の砂については、胎土の調整中に添加されたと考えてよかろう。もちろんそれ以上の大きさの砂を採取する際には、その前後の大きさの砂粒もある程度は含まれるであろうから、結果として、それよりも粒径の小さなものも添加されることにはなる。したがって、0.25mmよりも小さな砂粒について、添加されたものと本来の粘土層に含まれていたものを見分けるのは困難であるが、清水のように0.3mm以上のものを後に添加されたものとするのは、大筋では正しい。

2) 化学組成

以上に見てきたように、調整済みの土器の胎土の場合、その大部分、すなわち約80%はシルトと砂や礫である。そして、シルトは鉱物学的には砂であり、単に粒径が小さいだけなので両者の化学成分は基本的に同じである。砂は岩石が物理的に細かくなった物質である。すなわち、土器の胎土の大部分は、その原料となった粘土層が生じた地質であり、その源は基本的に岩石である。したがって、土器の胎土の化学組成の約8割は岩石由来だと考えてよいことになる。

ただし胎土は、約2割が粘土鉱物であることからわかるように、未風化の岩石試料そのままではない。岩石が風化して小型化する際に、石基部分のガラスや風化に弱い鉱物から順に変質し、ある元素は溶脱し、動きづらい元素が残るので、もとの岩石とは化学組成に違いが生じる。また、風化に強い石英やもともと存在度の高い長石類が結果としてさらに高い比率となるので、粘土層中にシルトや砂として含まれる鉱物の大部分は石英や長石類が占めることとなり、粘土層周辺の本来の地質の組成をそのまま反映しているわけではない。

それでも粘土原料の始発点は周辺の地質であり、地質の来歴が全く異なる別地域の岩石や砂が添加されることなどがない限り、化学成分に関しては、本来の地質が風化した場合の化学組成の変異の範囲内で考えればよい。次に、風化による変化の範囲、あるいは変化の傾向の一般論を述べておく。

概説的には、地表の岩石の化学成分の移動しやすさは、最も移動しやすいClを100としたとき、Caが3.00、Naが2.40、Mgが1.30、Kが1.25、Siが0.20、Feが0.04、Alが0.02である(松井1988)。また、新鮮な岩石や粘土層と風化した岩石やより古い時代の粘土層とを比較した場合、Mn濃度が低い。ほかに、K、Rb、Sr、Baなどはイオン半径が大きいために、Ti、Nb、Zrなどは価数が大きくイオン半径が小さいために、他の結晶には移りづらい。このようなことを総合すると、Ca・Na・Mg・Mnは、風化する際

にその減少率が大きく、Al、Fe、Siはそれが小さく、相対的には多少増加することになる。経験的にはAlの増加率が特に高い。そしてTi・K・Ba・Rb・Sr・Zr・Nb等は変化の度合いが小さいと推測できる。

ここに記した元素のうち、Al、Fe、Si、Ca、Na、Mg、Mn、Ti、Kは地殻を構成する主要元素の大部分であり、Sr、Rb、Baも微量元素のなかでは存在度が高い。したがって、これらの元素は、既に公開されている地質図や岩石データなどでも、分析値が載っている種類である。したがって、これらは化学組成を用いて胎土の産地を推定するうえで、既存の地質情報を踏まえながら考察するのに、非常に有効な元素である。

(3) Mn濃度から見た胎土の原料および粘土試料との関係

土器に含まれるMnは0.05%に満たないのが普通である(松本2011など)。そのような粘土は一般に白色系(褐色以外をこう呼んだ。実際には灰色あるいはベージュ色)である。それに対し、褐色系の粘土や地表に近い土には、Mnが0.05%以上含まれる。今回の試料も、その傾向を示しており、粘土試料は20点中2点すなわちNo.1と10以外はみなMn濃度0.05%以上、土器試料は20点中4点、すなわちNo.1(0.06%)、2(0.05%)、3(0.06%)、6(0.07%)以外は0.05%未満である(図1-9)。これらの4点も0.05%をわずかに上回るだけの数値である。したがってそれらといえども、白色系粘土層に近い部位であるか、そういった粘土層でも他の粘土層との境界に近い部位であると推測される。ただし、その4点がすべて諏訪土器なので、その4点は他の土器とはいくらか異なる流儀で作られた可能性はある。

また、粘土試料でMnが0.05%に満たないのは白色粘土No.1と白灰褐色粘質土No.10である。白色粘土のMn濃度が0.05%未満であることはこれまでの分析結果と同様である。

図1-9からも明らかであるが、大部分の粘土試料はMn濃度から、土器の原料とされた層のもではないことがわかる。白色粘土No.1と白灰褐色粘質土No.10はどうか。前者は図2-23・24など多くの関係でも土器群に近い位置にある。土器の胎土に利用された粘土層に比較的類似した層であると考えられよう。一方後者は図2-24で離れており、違う層だと考えるのが妥当である。

(4) Si・Alをもとにした原料地質の推定

火成岩の場合、Si・Na・Kの濃度によって岩石を分類できる。とくにSiO₂は有用であり、普通それが約52%(Siのみの値にして約24%)より小さい値のものを玄武岩・斑輝岩などのマフィック岩、63%(Siのみの値にして約29%)より大きい値の

ものをデイスাইト・流紋岩・花崗閃緑岩・花崗岩などのフェルシック岩、これらの中間の値を安山岩・閃緑岩に分類できる。ただし、それらの岩石の境界の値は52%や63%きっかりではなく、その前後の少し幅のある値である。産業技術総合研究所（以下では産総研と略す）発行の標準試料の推奨値を用いて、岩石の種類ごとの値をあらかじめ把握しておくで便利である（図3）。

さきに記したように、土器の胎土は粘土鉱物、シルト、砂で構成される粘土層から採取された土を基本とする。シルトや砂は岩石が物理的に風化したものであるが、粘土鉱物は物理的に小型化するだけでなく、化学的風化を経て生成し、基本となる元素はSi, Alである。したがって粘土層では、その源となった地質本来に比べ、Si, Alが増加し、Ca・Mg・Na・Mnなどが減少する。

ただし、新田遺跡のある津軽地方の砂や土壌の源となる火山岩、火山灰は、安山岩やデイスাইトが基本であり（青森県）、Ca・Mg等はトータルで数%、多くても10%ほどしか含まれないので（図3）、減少する幅も数%の範囲であり、SiやAlの変異の幅もその範囲内である。結果的に、土器試料のSiやAlの濃度は本来の地質よりも高くなることになるが、それぞれ数%以内である。なお、岩石と各地の焼き物の素地とを比較したデータによれば（内藤1969）、SiよりもAlの増加率が高い。

以上に見てきたように、土器の胎土は、各地の地質の風化で構成される。そして、粘土層から採取された土に砂を混和して調整された胎土の場合、シルトおよび砂がしたがってそのSi濃度は、岩石や火山灰本来の値そのものではないとはいえ、各地の砂の大部分はそれらの源となった火成岩が物理的に細粒になったシルトと砂で構成されるので、土器や粘土試料のものとなった岩石を、Si濃度である程度推測できることになる。図1-1によれば、土器の大部分はSiがデイスাইトなどのフェルシック岩の濃度に匹敵するのに対し、粘土試料は安山岩などの中性岩の濃度に当たる。

造岩鉱物や粘土鉱物を構成する元素のうち、Siの次に濃度が高いのがAlである。図3として、フェルシック岩からマフィック岩までの標準試料の主要元素を横軸にSiをとるハーカー図として示した。岩石の場合、最も濃度の高い斑輝岩や玄武岩ですら9.5%にも満たない。それに対し、土器や粘土試料は、最も低い濃度のものでも9.5%ほどはある（図1-1）。粘土鉱物が含まれるからである。したがって、粘土層が形成される場合、増加率が最も高い元素はAlである。

ただし、図3-1、図1-1とも、Siが増加するにつれてAlが減る傾向は同じである。そして、始

発地質が同じだとしても、化学的風化による粘土化が進む、あるいは粘土鉱物の含有比率が高い土層の場合、相対的にAlが多いことになる。

以上を基本として図1-1を見ると、Si濃度により、粘土試料の多くを中性岩タイプ、土器試料をフェルシック岩タイプに分けることができ、Si濃度はほぼ同じでも、Al濃度の違いにより、須恵器とそれ以外の土器試料とは土が多少異なることがわかる。さらに、椽文土器のなかでもNo.6はSi・Alともに低く、他試料とは異なる胎土である。ただしこの指標では、その原料採掘地域がどこであるかはわからない。

(5) Ca・Mg・Fe・Ti 濃度について

産総研の岩石標準試料の推奨値をもとに、火成岩に含まれる主要な元素の特徴を見ると（図3）、マフィック岩である玄武岩や斑輝岩はCa・Mg・Fe・Tiが高濃度である。本試料の土器試料はこれらの値はむしろ低い。また、Si濃度も全試料が26%以上なので、Ca・Mg・Feと総合して、土器だけでなく、粘土試料を含めても、本試料にマフィック岩由来のものはない。

ただし、土器No.6だけはCa・Mg・Feが他の試料に比べて高濃度であるが、Si濃度は安山岩などの中性岩の値である。また、風化して粘土鉱物が増加することによって増えたAlも10%にも満たず、他の試料に比べ低濃度であり、マフィック岩が風化により、Si・Alが増加したと考えることもできない。Mnも0.05%以上含まれているので、むしろCaやMgが高濃度なのは、風化の度合いが低いからと考えるべきなのかもしれない。そうだとすると、土器No.6が他の土器試料とは異なる層の土が利用されたことになり、土器製作にかかわる一連の作業過程に違いがあることにはなる。

そして、粘土試料は全体的にFe・Mnが高濃度である（図2-2・9）。Siが30%以下の場合、椽文土器の敷点を除けば粘土試料のほうが高い。共存することが多いFeとMgの比率を見ると土器と粘土試料の違いはほとんどないが（図2-24）、椽文土器のNo.1~3・6、須恵器の16・17・20は値が少し異なり、地質が違うと考えることもできる。

Fe・Ca・Mg濃度が高い土器No.6ではあるが、Tiは低い。この椽文土器の胎土が他とは異なる地質であることを物語る。

(6) Sr・Rb・Ca・K について

三辻（1983）などでは、CaとK、SrとRbが産地推定に利用されている。これらの元素は地殻の約6割を占める長石の主要元素である（地学団体研究会1995）。また、長石は固溶体なので、Ca、Na、Kの比率はよく地質の差を示す。

K/Na+Ca、Ca/Na+Kは長石を構成する主要元素の

うち Si と Al 以外の元素によって、マフィック岩、中性岩、フェルシック岩を区分できる指標であり、以下では「長石の指標」と呼ぶ。その指標を用いると図 3-12 のように、マフィック岩が左上、中性岩が真ん中、フェルシック岩が右下になる。フェルシック岩では、広義の花崗岩よりも狭義の花崗岩のほうが右に位置する。ただし、粘土層試料の場合、風化が進み、K よりも Ca・Na の溶解率が高いので、同じ地質であっても K 濃度が高まる。したがって、長石の指標で示されることは、岩石試料の場合は、グラフの左上から右下に向かって、マフィック岩⇒中性岩⇒フェルシック岩であり、粘土試料の場合は、右、あるいは下に向かって、粘土化が進んだ段階であることを、さらに読み取ることになる。

今回の試料の長石の指標は図 2-11 のようになり、擦文土器⇒ロクロ土器⇒須恵器の順にマフィック岩からフェルシック岩的になる、あるいはこの順に、風化、粘土化が進んだ原料が利用されたということになる。風化、粘土化は、Mn が減少し、Al が増える現象でもあり、その点からも、ここに書いたことが裏付けられる。

(7) P, Cr, Y について

土器試料には、P が 0.15% 以上のものが 11 点ある。一般にこのような値の P は、素焼きの土器が土中に堆積している間に沈着したものであり、その沈着の有無は土器が堆積していた環境を推測するのに利用できる。P は生物に多く含まれており、これらの試料も有機物が多い状態の土に堆積していたことがわかる。なお、高温で焼成された須恵器は普通、P が高濃度となるような例はないが、本試料でも同じである。

擦文土器 No. 06 は Cr が非常に高く、1716ppm もある。このような値は、カンラン岩、滑石などに見られるが、その場合 Ca、Mg、Ni も高濃度である。本試料の Ca、Mg は比較的高濃度だが、Ni は一般的な値であり、土器 No. 06 がどの地質に由来するかは簡単にはわからないが、Fe が高く、マフィック岩地域のものである可能性はある。Cu も他の試料の 3 倍ほどである。この試料は他の試料とは別地域の土で作られた可能性が高い。

図 1・2 で Si と Y の関係に近いグラフを探すと、K・Rb・Ni がある。Y はそれらの元素を含む鉱物に含まれている可能性があらう。図 2-7 では Y と Si の関係は大きく 3 つのグループに分けられる。粘土試料は二つに分かれ、どちらも土器試料とは異なる。これは、K、Rb、Ni の傾向とも一致しており、Y を含むこれらの元素からも、高間遺跡の地山粘土が新田遺跡の土器胎土として利用されていないことがわかる。

(8) 周辺地質・周辺遺跡出土土器との関係

粘土試料は、新田遺跡に隣接する高間遺跡の地山から採取された。長森ほか(2013)の地質図によると、そこは中段段丘であり、最終間氷期の堆積層である。これまで各地の土器試料を分析してきた結果、最終間氷期やそれより古い時代に海や湖沼に堆積した粘土が利用される場合が多いと考えられる(松本 2011)。したがって、遺跡周辺にそれに相当する白色系の粘土があれば、土器の原料として利用されたはずだが、今回の粘土試料は、Mn 濃度が 0.05% 以上のものがほとんどであり(図 1-9)、胎土に利用される粘土とはなかった。白色系の焼成粘土 Na.1 は比較的近い成分だが、採取された層厚が薄く、実用的とは言えない。

また、火成岩を区分する際の Si 濃度を利用すると、粘土試料は中性岩、土器試料の大部分はフェルシック岩ということになり、どちらも津軽地方にある火成岩ではあるが、土器の原料とされた粘土層と高間遺跡地山の中段段丘層とは、それらが成立した地質背景が異なることになろう。

ただし、長石の指標(図 2-12)では土器試料との違いは見られず、層厚は違うが原料の産地は遺跡周辺であったことを示唆する。前掲の地質図によると遺跡の 500m ほど西に前田野目層がある。そこには白色系の粘土が厚く堆積し、Mn は 0.05% に満たない(松本 2001)。胎土原料の候補になる。

そして Mg/Fe の値が粘土試料とも土器試料とも大きく異なる擦文土器 Na.1 ~ 3、6、なかでも Cr の値がまったく違う Na.6 は、器面に馬の絵が描かれたものであるが、地質の異なる場所の土である可能性がある。

青森県埋蔵文化財調査センターが調査した新田(2)遺跡調査区出土の擦文土器やロクロ土器(松本ほか 2009a)、また、津軽地方に所在する鶴岡町稲元遺跡出土の非ロクロ土器の化学成分(松本ほか 2009b) との比較をすると(図 4)、新田(2)遺跡出土の擦文土器には、土器 Na.6 に近い成分のものがある。Cr が測定されておらず、その比較ができないのは残念だが、Mn は 0.05% を超え、Mg、Ca、Fe といった有色鉱物を構成する元素を多く含む特徴が一致する。新田遺跡に、異なる地質由来の擦文土器が一定量あったことになろう。

(9) 須恵器の胎土

Na.16・17・20 は還元炎焼成の一般的な概観の五所川原産須恵器、Na.18・19 は、酸化炎焼成であり、しかもガラス化、ムライト化には至らない素焼き状態の製品である。980℃にも満たない温度での焼成ということになる。また、内面には当て具痕もあり、他の一般的な五所川原産須恵器とは異なる。しかし、化学成分を見ると、大部分の元素濃度は他の須恵器との違いはない。

唯一の違いと言えるのは、No.18・19のTiが幾分高濃度である点であるが、一般的五所川原製品であるNo.16もほぼ同様であり、また、土器No.14の手づくねかわらけも近い値である。五所川原市の南に位置する弘前市所在の下志塚遺跡出土の土師器（平安時代）は、Ti濃度が0.62～0.93%であり、試料7点中6点が0.70%以上である（松本2003）。同じく五所川原市の南に隣接する鶴田町稲元遺跡出土の非ロクロ土師器も試料5点すべてのTi濃度が0.70～0.75%である（松本ほか2009b）。したがって、五所川原市を含む津軽地方にNo.18・19須恵器くらい濃度のTiを含む粘土層がないわけではない。

しかし2点だけの分析なので、正確なことは言えない。No.18・19の須恵器も、No.16・17・20同様に五所川原産である可能性があるが、これらの須恵器と形態や器面調整等の類似事例を知らず、比較試料がないので、産地については、今回は結論を出せない。今後の課題である。

6. まとめ

青森市新田（2）遺跡から出土した平安時代の擦文土器、ロクロ土師器、土師器、かわらけ、須恵器、近隣の高間（1）遺跡から採取された地山粘土試料の化学成分を測定し、胎土原料の産地を考察した。

1) 粘土試料と土器試料

粘土試料と土器試料とはSi濃度が大きく異なっており、土器の原料とされた粘土層とは違う層であると判断した。ただし、白色系の粘土である焼成粘土No.1は、土器の値に比較的近かった。

2) 擦文土器

擦文土器のうちNo.1～3・6は他の土器と異なる胎土である。なかでも器面に馬の絵が刻まれたNo.6は様々な種類の元素の値が違ふ。Crは1716ppmもある。Crはマフィック岩地域で高濃度となる元素である。擦文土器No.6は他の試料とは異なる地域の原料と見るべきであろう。

3) ロクロ土師器・かわらけ

津軽地方の土の化学成分であると推定された。

4) 須恵器

ほとんどが五所川原産と推定された。酸化炎焼成の素焼き状態であるNo.18・19は、形態や器面調整の特徴では類似がないが、化学成分では、五所川原産須恵器と大きな差異はなかった。

7. おわりに：今後の課題

以上、新田遺跡出土の平安時代の各種の土器と近隣の高間遺跡地山の粘土試料の化学成分から考えられることを述べてきた。多くの土器は遺跡周辺の白色系の粘土層を利用してたと予想したが、最終氷期に水底に堆積した白色系粘土層や、前田野目層

をその候補として、今後、その土を採取して分析し、データを蓄積する必要がある。

土器についても、今後の課題2点を記しておく。

1) 擦文土器には器面に馬が描かれたNo.6のように、他の土器と異なる産地のものである可能性の高い製品がある。マフィック岩地域のもので推測できたが、北海道の製品も含め、擦文土器の分析を続け、製品の移動があるとすれば、その産地を確かめねばならない。

2) 素焼き状態の須恵器については、さらに類例を探し、その産地を考えねばならない。

註

- 1) K. Nakayama, Y. Shibata, T. Nakamura: *X-Ray Spectrom.*, 36, 130 (2007).
- 2) K. Nakayama, T. Nakamura: *X-Ray Spectrom.*, 37, 204 (2007).
- 3) S. Ichikawa, K. Nakayama, T. Nakamura: *X-Ray Spectrom.*, 41, 22 (2012).
- 4) N. Imai, S. Terashima, S. Itoh, A. Ando: *Geostandards Newsletter*, 20, 165 (1996).

引用・参考文献

- 愛知県立常滑商業センター 1978『工業原料利用の手引き』
河西 学・藤原功一・大村昭三 1989『八ヶ岳南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期末土器群の胎土分析』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第1集 1-64頁
地学団体研究会(1995)『新版地学教育講座9 地表環境の地学』
東海大学出版会
内藤 匡 1969『新訂古陶磁の科学』雄山閣
長森秀明・宝田晋治・吾妻 崇 2013『青森西部地域の地質』
産業技術総合研究所
松井 健 (1988)『土壌地理学序説』築地書館
松本建速 (2001)『五所川原産須恵器の胎土分析』『物質文化』
71号 1-21頁 物質文化研究会
松本建速 (2003)『誘導結合プラズマ発光分光分析による東北北部古代土器の胎土分析』『第四紀研究』42巻1号 1-12頁 日本第四紀学会
松本建速 (2011)『化学成分からみた縄文～平安時代の土器の胎土』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』15集 31-48頁
松本建速・市川慎太郎・中村利廣 (2009a)『新田（2）遺跡出土土器の化学成分』『新田（2）遺跡』28-34頁 青森県教育委員会
松本建速・市川慎太郎・中村利廣 (2009b)『稲元遺跡出土土器の化学成分』『稲元遺跡』113-118頁 青森県教育委員会
三辻利一 (1983)『古代土器の産地推定法』ニュー・サイエンス社

表1 分析結果 主要元素(重量%) 微量元素(ppm)

Analytical results of major oxides (in mass%) and minor elements (in mass ppm) in the Geological Survey of Japan river sediment reference samples, determined by X-ray fluorescence analysis of glass beads with a 1.0 sample-to-flux ratio.

Element	Ftd-1 (river sediment)		Ftd-3 (river sediment)	
	Present method	Recommended value ^a	Present method	Recommended value ^a
Na ₂ O	2.38 (1.1)	2.44	0.416 (13.3)	0.413
MgO	2.92 (1.9)	2.73	1.27 (18.8)	1.17
Al ₂ O ₃	12.3 (0.7)	12.3	10.2 (1.0)	9.91
SiO ₂	62.9 (0.3)	60.8	81.0 (0.5)	76
Fe ₂ O ₃	0.100 (2.5)	0.108	0.084 (7.5)	0.082
K ₂ O	1.20 (0.6)	1.15	2.12 (1.0)	1.97
CaO	3.60 (1.5)	3.66	0.509 (0.6)	0.56
TiO ₂	0.613 (1.9)	0.614	0.439 (1.2)	0.403
MnO	0.108 (1.2)	0.12	0.134 (0.9)	0.148
Fe ₂ O ₃ ^b	11.6 (1.2)	11.7	4.5 (1.3)	4.37
Total	97.9 (0.6)	95.6	101 (0.6)	95.0
V	139 (3.4)	125	79.1 (4.7)	70.4
Cr	120 (6.7)	308	38.1 (15)	35.3
Ni	91.3 (2.5)	92.8	15.3 (8)	19.6
Rb	24.5 (6.3)	26.9	3.99 (1.2)	285
Sr	203 (1.9)	202	36.0 (1.2)	38.7
Y	16.4 (4.2)	17.4	13.3 (4.8)	14.9
Zr	115 (2.1)	111	1.37 (2.7)	124

(R: Relative standard deviation % (n = 5)).

^aRef. 4.

^bTotal Fe as Fe₂O₃.

表3 分析結果 主要元素(重量%) 微量元素(ppm)

Analytical results of major oxides (in mass%) and minor elements (in mass ppm) in clay samples from Nita remains in Aomori City, Aomori Prefecture, Japan, determined by X-ray fluorescence analysis of glass beads with a 1.0 sample-to-flux ratio.

Element	Aomori-01		Aomori-02		Aomori-03		Aomori-04		Aomori-05		Aomori-06		Aomori-07		Aomori-08	
	Na ₂ O	1.91	1.80	1.52	1.39	1.65	1.81	1.81	1.24							
MgO	3.30	3.16	3.13	3.14	3.13	3.40	3.22	3.56								
Al ₂ O ₃	24.3	18.8	22.5	21.0	18.9	19.6	19.7	18.7								
SiO ₂	55.6	64.6	58.8	60.7	63.8	61.2	61.0	61.0								
CaO	0.073	0.037	0.065	0.059	0.053	0.055	0.055	0.052								
K ₂ O	1.04	1.96	1.51	2.02	2.24	1.92	1.83	2.07								
Fe ₂ O ₃	2.00	1.14	1.19	0.774	0.848	1.46	1.37	0.790								
TiO ₂	1.03	1.09	0.981	1.00	1.04	1.01	1.03	1.04								
MnO	0.101	0.057	0.098	0.073	0.049	0.063	0.091	0.149								
Fe ₂ O ₃ ^b	7.36	5.27	6.92	6.12	5.56	6.71	6.97	6.04								
Total	94.8	95.9	94.8	94.4	95.3	95.2	95.2	94.7								
V	110	131	126	135	143	143	149	169								
Cr	N. D.	30.5	26.3	35.4	41.4	36.1	26.1	52.0								
Ni	31.2	35.7	40.4	42.4	34.3	40.5	43.4	54.2								
Rb	47.3	104	94.3	155	175	125	126	151								
Sr	152	130	117	106	125	149	144	110								
Y	16.7	47.2	37.4	48.2	54.8	38.7	32.1	41.8								
Zr	230	213	219	205	221	199	197	233								
Na ₂ O	0.911	0.909	0.979	1.22	1.44	0.901	0.908									
MgO	1.57	1.48	1.52	1.45	1.27	1.68	1.61									
Al ₂ O ₃	20.7	19.7	21.5	18.7	16.9	22.8	21.2									
SiO ₂	57.3	58.5	60.3	63.7	67.6	58.4	60.4									
Fe ₂ O ₃	0.609	0.058	0.061	0.048	0.036	0.093	0.068									
K ₂ O	2.00	2.12	2.06	2.26	2.29	1.97	2.23									
CaO	0.743	0.604	0.684	0.599	0.585	0.688	0.494									
TiO ₂	1.03	1.02	1.03	1.04	1.08	1.02	1.05									
MnO	0.061	0.120	0.090	0.141	0.088	0.099	0.211									
Fe ₂ O ₃ ^b	8.28	8.36	8.01	8.05	6.81	8.61	8.24									
Total	92.9	92.9	96.2	97.2	98.1	96.2	96.5									
V	169	164	167	178	161	172	171									
Cr	56.8	47.6	54.6	48.7	58.1	55.6	58.6									
Ni	65.4	58.0	60.4	54.3	42.3	67.0	55.8									
Rb	143	154	146	185	186	140	159									
Sr	102	101	99.1	102	109	101	96.2									
Y	48.7	38.1	37.7	44.4	41.1	41.3	41.8									
Zr	228	224	227	238	249	223	213									

^aTotal Fe as Fe₂O₃.

N. D., not detected.

表2 分析結果 主要元素(重量%) 微量元素(ppm)

Analytical results of major oxides (in mass%) and minor elements (in mass ppm) in ancient pottery samples from Nita remains in Aomori City, Aomori Prefecture, Japan, determined by X-ray fluorescence analysis of glass beads with a 1.0 sample-to-flux ratio.

Element	AMSN-01		AMSN-02		AMSN-03		AMSN-04		AMSN-05		AMSN-06		AMSN-07		AMSN-08		AMSN-09	
	Na ₂ O	1.25	1.98	1.70	1.52	2.04	2.09	1.85	2.18	1.66								
MgO	1.30	1.13	1.36	1.44	1.45	2.37	1.83	1.48	1.05									
Al ₂ O ₃	23.8	28.5	27.9	21.2	23.5	19.9	17.8	20.3	17.7									
SiO ₂	62.9	57.0	57.9	62.5	60.2	62.6	65.0	64.2	67.6									
Fe ₂ O ₃	0.080	0.044	0.036	0.052	0.101	0.056	0.034	0.346	1.02									
K ₂ O	2.21	0.625	0.600	1.82	1.38	1.02	1.93	1.31	2.27									
CaO	0.826	2.63	1.94	1.07	1.93	2.22	2.15	2.30	0.869									
TiO ₂	1.00	0.965	0.986	1.07	1.01	1.07	0.880	0.999	0.988									
MnO	0.035	0.156	0.164	0.061	0.130	0.083	0.065	0.076	0.034									
Fe ₂ O ₃ ^b	5.83	5.61	6.99	8.00	7.51	5.61	5.87	7.30	5.02									
Total	99.5	99.6	99.4	99.5	99.3	97.0	98.0	98.3										
V	131	83.4	88.2	164	145	133	160	108	120									
Cr	47.7	N. D.	N. D.	43.4	19.0	172 ^c	34.2	N. D.	53.6									
Ni	76.3	22.9	28.1	48.2	39.0	62.2	39.9	37.4	36.6									
Rb	183	17.6	28.0	18.2	95.4	55.5	109	79.9	92.4									
Sr	107	207	155	133	156	155	163	217	102									
Y	39.6	14.9	23.2	53.2	42.1	14.3	16.6	20.0	14.5									
Zr	196	223	244	216	218	143	163	190	191									

AMSN-10 AMSN-11 AMSN-12 AMSN-13 AMSN-14 AMSN-15 AMSN-16 AMSN-17 AMSN-18

Element	AMSN-11		AMSN-12		AMSN-13		AMSN-14		AMSN-15		AMSN-16		AMSN-17		AMSN-18		
	Na ₂ O	0.909	1.51	1.35	1.36	1.33	1.10	0.980	1.69	1.64							
MgO	1.01	0.894	0.477	0.964	1.10	1.03	0.613	1.01	0.982								
Al ₂ O ₃	21.2	20.2	22.4	18.0	18.2	20.3	21.4	20.3	21.1								
SiO ₂	67.9	64.0	66.4	68.6	59.6	64.4	63.2	64.8	64.2								
Fe ₂ O ₃	0.045	0.531	0.817	0.515	0.134	0.403	0.058	0.770	0.552								
K ₂ O	1.58	1.84	0.980	1.85	1.22	1.58	1.34	1.65	1.89								
CaO	0.490	0.949	0.827	0.829	5.16 ^c	1.07	0.565	0.984	1.14								
TiO ₂	0.941	0.844	1.08	0.902	0.863	1.19	0.938	1.02	0.963								
MnO	0.022	0.025	0.010	0.026	0.094	0.041	0.011	0.042	0.033								
Fe ₂ O ₃ ^b	5.78	5.60	4.27	5.49	7.40	5.72	5.80	4.75	4.71								
Total	99.8	96.4	96.3	97.7	98.2	96.8	94.9	97.1	96.9								
V	129	135	123	134	168	139	148	90.8	102								
Cr	28.2	29.0	12.0	28.4	12.2	45.9	42.6	28.8	25.3								
Ni	32.3	36.5	29.3	34.9	42.4	41.2	34.4	30.6	39.2								
Rb	96.6	134	55.9	76.8	63.7	89.8	72.9	113	103								
Sr	75.3	128	69.3	94.1	129	84.6	68.0	117	119								
Y	18.1	34.2	14.7	20.4	11.5	25.4	16.8	24.7	23.2								
Zr	206	192	209	196	132	246	202	229	216								

AMSN-19 AMSN-20 AMSN-21 AMSN-22 AMSN-23 AMSN-24 AMSN-25

Element	AMSN-19		AMSN-20		AMSN-21		AMSN-22		AMSN-23		AMSN-24		AMSN-25	
	Na ₂ O	1.32	1.83	0.388	1.41	1.27	1.25	1.00						
MgO	0.944	0.734	1.44	1.15	0.830	0.946	1.22							
Al ₂ O ₃	20.1	19.4	24.1	24.2	23.5	23.9	23.7							
SiO ₂	64.3	65.9	67.6	64.3	63.2	64.5	65.0							
Fe ₂ O ₃	0.334	1.08	0.059	0.042	0.029	0.032	0.032							
K ₂ O	1.68	1.44	1.64	1.96	1.68	1.64	2.05							

表4 試料の諸属性

報告用No.	試料	推定時期	通源名	出土地点	特徴
土壌No.01	土壌焼成試料	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層	白色粘土
土壌No.02	土壌焼成試料	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層	浅黄色砂質粘土
土壌No.03	土壌焼成試料	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層	淡褐色粘土シルト
土壌No.04	土壌焼成試料	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層	淡褐色砂質粘土
土壌No.05	土壌焼成試料	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層	砂質粘土(混合土)
土壌No.06	採集粘土	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層、1層	黄色砂質土、浮石混じり
土壌No.07	採集粘土	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層、2層	桃褐色粘土質土
土壌No.08	採集粘土	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層、3層	橙褐色粘土質土
土壌No.09	採集粘土	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層、4層	橙褐色粘土質土
土壌No.10	採集粘土	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層、5層	白灰褐色粘土質土
土壌No.11	採集粘土	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層、6層	白灰褐色粘土質土、砂様混じり
土壌No.12	採集粘土	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層、7層	桃褐色粘土質土
土壌No.13	採集粘土	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層、8層	桃褐色粘土質土
土壌No.14	採集粘土	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層、9層	桃褐色粘土質土
土壌No.15	採集粘土	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層、10層	桃褐色粘土質土
土壌No.16	採集粘土	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層、11層	桃褐色粘土質土
土壌No.17	採集粘土	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層、12層	桃褐色粘土質土
土壌No.18	採集粘土	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層、13層	桃褐色粘土質土
土壌No.19	採集粘土	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層、14層	橙褐色粘土質土
土壌No.20	採集粘土	最終開水期	高岡(1)	G区、基盤粘土層、15層	桃褐色粘土質土
土器No.01	磨文土器壺	10C後半	新田(1)		器面に刻文
土器No.02	磨文土器壺	10C後半	新田(1)		器面に刻文
土器No.03	磨文土器壺	10C後半	新田(1)		器面に刻文
土器No.04	磨文土器壺	10C後半	新田(1)		胴部
土器No.05	黒色土器	10C後半	新田(1)		胴部
土器No.06	磨文土器壺	10C後半	新田(2)		器面に馬の絵
土器No.07	磨文土器壺	10C後半	新田(2)		胴部
土器No.08	磨文土器壺	10C後半	新田(2)		胴部
土器No.09	クロコ土師器杯	9C後半～10C初頭	新田(1)		口縁部
土器No.10	クロコ土師器杯	9C後半～10C初頭	新田(1)		口縁部
土器No.11	クロコ土師器杯	9C後半～10C初頭	新田(1)		口縁部
土器No.12	クロかわらけ小皿	12C後半	新田(1)		口縁部
土器No.13	クロかわらけ大皿	12C後半	新田(1)		胴部
土器No.14	手づくねかわらけ大皿	12C後半	新田(1)(2)		胴部
土器No.15	手づくねかわらけ小皿	12C後半	新田(1)		胴部
土器No.16	須恵器壺	平安時代	高岡(1)		
土器No.17	須恵器杯	平安時代	高岡(1)		
土器No.18	須恵器壺	平安時代	高岡(1)		酸化炭焼成
土器No.19	須恵器壺	平安時代	高岡(1)		酸化炭焼成
土器No.20	須恵器壺	平安時代	高岡(1)		

表5 換算値

報告用No.	Si	Al	Fe	Mn	Ca	Ni	K	Br	Y	Cr	Cu	Nb	Ba	Sr	Zr	X(Na ₂ O)	Ca(Na ₂ O)	Mg(Fe)						
土壌No.01	2957	650	1259	470	033	034	081	032	134	013	014	311	48	30	11	76	183	101	40	113	196	1352	0235	0255
土壌No.02	2675	058	1512	464	012	70	188	147	052	022	533	83	0	21	4	23	18	207	15	126	223	0155	0944	0150
土壌No.03	2721	059	1487	489	013	70	139	127	057	022	478	88	0	23	5	28	28	155	23	108	244	0213	0759	0141
土壌No.04	2934	064	1130	618	005	087	077	113	151	022	513	64	43	31	11	48	153	53	94	216	0798	0290	0141	
土壌No.05	2836	061	1254	529	009	088	128	153	115	044	437	145	19	28	9	39	95	156	42	117	218	0395	0520	0166
土壌No.06	2741	065	1357	543	008	073	150	001	003	470	110	0	30	3	31	47	152	17	72	230	0295	0656	0152	
土壌No.07	3148	068	1037	385	005	073	080	140	168	002	578	131	30	27	8	36	164	130	47	105	213	0754	0275	0190
土壌No.08	2898	062	1281	512	008	072	090	119	133	003	530	126	26	30	6	40	94	117	37	76	219	0636	0356	0141
土壌No.09	3009	064	1180	454	006	073	059	110	178	003	507	135	25	21	10	42	155	106	48	72	205	1059	0204	0161
土壌No.10	3132	065	1048	409	004	072	064	128	195	022	373	143	41	21	9	34	175	125	54	70	221	1015	0197	0175
土壌No.11	3004	063	1088	495	005	089	110	141	167	003	572	143	36	29	4	41	125	149	39	93	199	0868	0556	0179
土壌No.12	2999	065	1097	512	007	077	103	141	159	003	329	149	26	26	7	43	126	144	32	68	197	0653	0344	0151
土壌No.13	3018	066	1050	595	012	086	060	098	182	002	300	169	52	26	8	54	151	110	42	64	233	1157	0214	0145
土壌No.14	2855	066	1177	624	007	102	057	074	179	003	305	169	57	20	7	65	143	102	41	75	228	1300	0226	0164
土壌No.15	2944	066	1122	622	010	096	053	077	189	003	457	164	48	32	13	58	154	101	38	78	225	1456	0201	0154
土壌No.16	2929	064	1182	582	007	095	051	075	176	003	371	167	55	23	11	60	146	99	38	57	227	1410	0200	0164
土壌No.17	3064	064	1018	579	011	060	044	093	153	002	507	178	48	19	10	54	185	102	44	80	226	1414	0154	0156
土壌No.18	3223	066	910	485	007	078	043	019	194	022	550	161	58	19	11	42	186	109	41	76	249	1280	0141	0161
土壌No.19	2878	064	1251	626	008	105	051	069	170	004	517	127	56	19	13	67	140	101	41	63	223	1411	0213	0168
土壌No.20	2528	068	1180	597	017	101	037	077	182	003	740	171	59	25	4	56	159	142	42	92	213	1695	0138	0169
土器No.01	3017	066	1084	405	006	147	184	159	087	003	435	133	171	24	17	62	56	155	14	105	143	0260	0665	0264
土器No.02	3098	054	980	419	005	118	157	140	163	027	513	160	34	22	10	40	109	163	17	103	163	0549	0518	0283
土器No.03	3107	058	1112	268	006	092	156	168	113	018	465	108	0	19	14	37	80	217	20	105	190	0349	0555	0344
土器No.04	3217	059	955	357	003	065	085	125	192	045	446	120	54	19	13	37	92	102	14	105	191	0201	0204	0181
土器No.05	3282	054	977	329	002	061	081	103	157	023	543	134	28	17	15	35	77	84	20	65	196	0958	0233	0185
土器No.06	2837	053	982	533	007	251	376	101	103	006	703	168	122	117	8	42	129	111	114	132	0217	1841	0471	
土器No.07	3109	074	1108	413	003	064	079	085	136	018	440	159	46	80	12	41	90	85	25	59	246	0830	0358	0156
土器No.08	3111	079	1192	427	001	039	042	077	117	003	464	146	43	57	9	34	73	68	17	62	026	0365	0219	0091
土器No.09	3180	057	1122	403	002	081	035	068	132	002	465	129	29	54	12	32	97	75	18	90	206	1294	0176	0151
土器No.10	3105	052	1108	407	002	056	070	117	159	024	534	135	40	41	13	37	128	138	31	66	192	0849	0256	0138
土器No.11	3124	065	1229	310	001	030	061	089	085	037	499	123	12	40	11	29	58	65	115	88	209	0562	0354	0096
土器No.12	3122	063	1108	342	003	063	079	129	141	038	515	91	27	29	9	39	113	117	25	95	229	0268	0164	
土器No.13	3055	060	1155	340	003	061	084	126	136	025	533	102	25	47	13	39	103	119	23	105	216	0647	0322	0180
土器No.14	3135	075	1109	395	002	059	043	102	145	015	559	150	63	55	12	34	126	97	20	121	251	0996	0175	0150
土器No.15	3186	043	1080	298	001	046	117	140	123	048	493	92	0	46	13	30	56	136	45	113	202	0480	0443	0153
土器No.16	3173	078	1192	342	003	063	079	129	141	038	515	91	27	29	9	39	113	117	25	95	229	0268	0164	
土器No.17	3022	057	1288	316	001	069	067	105	164	022	582	160	46	39	15	40	148	142	48	96	208	0953	0249	0220
土器No.18	3031	075	1276	354	002	053	057	097	143	001	624	134	36	35	19	41	101	102	24	76	260	0927	0238	0149
土器No.19	3072	072	1237	349	002	058	051	094	139	001	682	129	37	47	10	42	105	101	23	129	249	0955	0218	0166
土器No.20	3072	062	1287	349	004	074	034	075	172	029	684	165	52	49	15	43	126	95	28	107	228	1879	0139	0241

単位: Si ~ P(重量%), Ba ~ Zr(ppm)

第一号
青森市石
津野出土
土器および
須恵器土
器の化学分
析

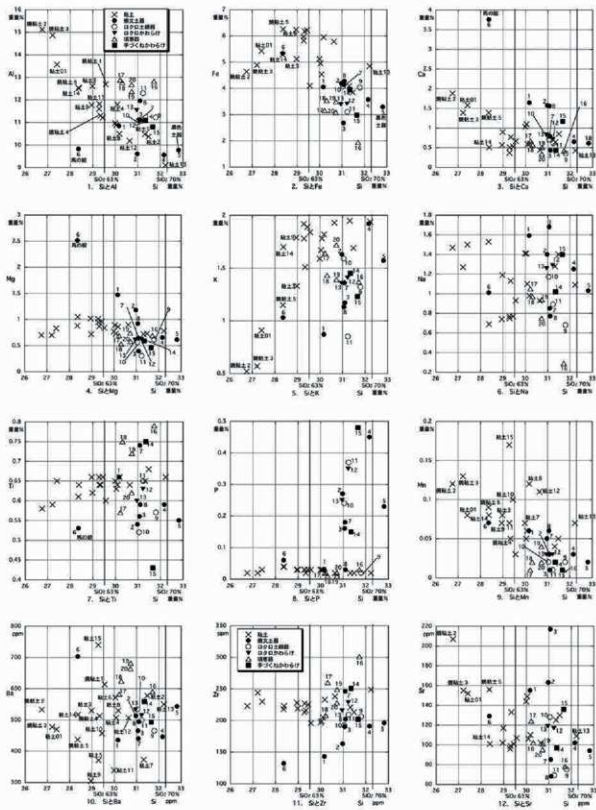


図1 新田遺跡出土土器・周辺粘土試料の化学成分(その1)

新田遺跡群発掘調査報告書Ⅶ
 第3分冊 新田(1)・(2)遺跡本文編、
 石江遺跡群補遺編・分析編5・地括編

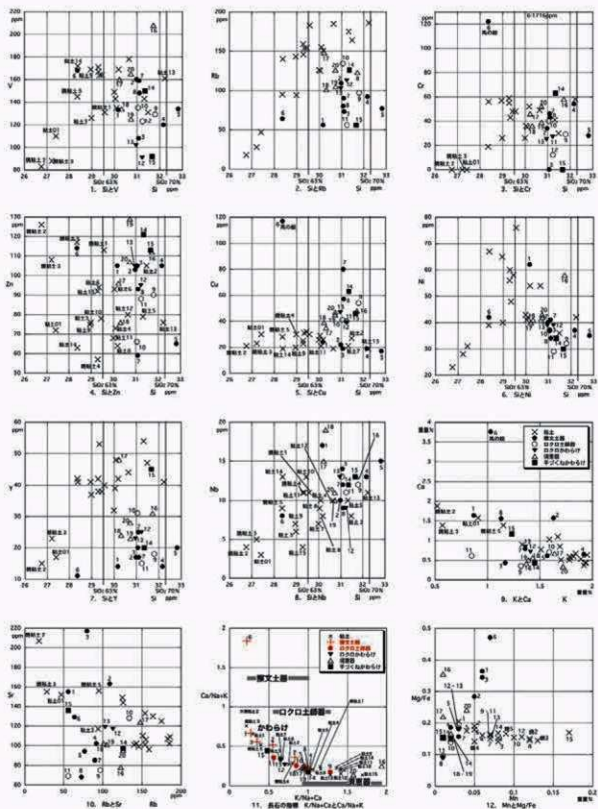


図2 新田遺跡出土土・周辺粘土土試料の化学成分 (その2)

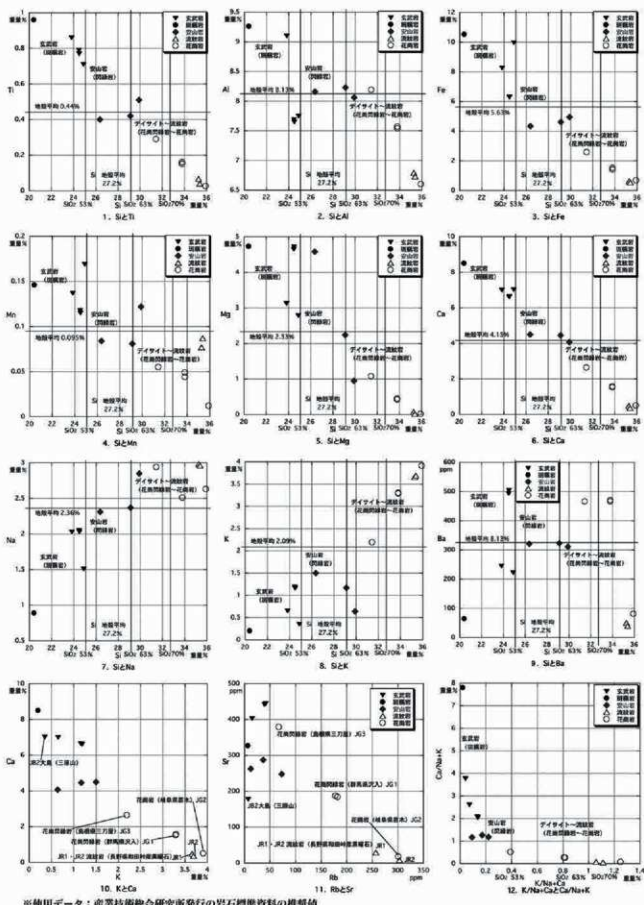


図3 岩石の化学成分（産業技術総合研究所発行の岩石標準資料データベースにもとづく）

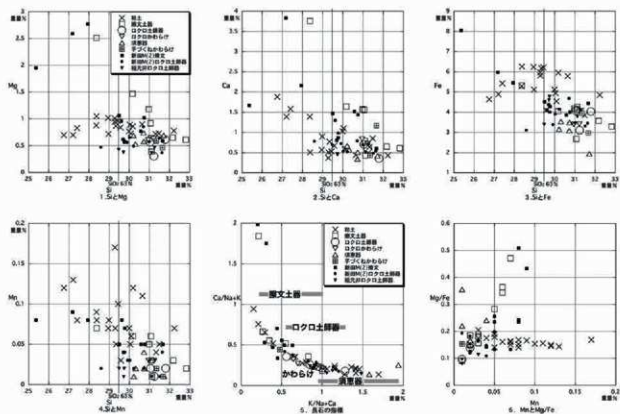


図4 津軽地方の同時代の土器胎土成分との比較

第11節 青森市高間(1)遺跡から発見された昆虫化石と古環境

森 勇一(金城学院大学)

1. はじめに

土の中から発見された昆虫化石を用い、遺跡が立地した当時の周辺環境やヒトと自然との関わり、農業や人為による土地改変の様子、気候変動など、古代の人々を取りまく古環境についての調査・分析は、日本各地で実施されてきた(森, 1994, 1999, 2009, 2012)。青森県内でも、縄文時代前期～中期の三内丸山遺跡(森, 1998ほか)、平安時代における新田遺跡(森・パレオ・ラボ, 2011)、新城平岡遺跡(森・佐々木, 2012)など、多くの報告がある。

本論では、青森市西部に位置する高間(1)遺跡の遺物包含層より発見された昆虫化石と、それらから得られた古環境および新知見について述べる。

2. 試料および分析方法

高間(1)遺跡は、新城川右岸に位置し、木簡や楡屑などの古代の遺物が多数出土した新田(1)・(2)遺跡や、その南方の新城平岡遺跡などとともに石江遺跡群を形成し、主に13世紀代を中心に、一部縄文時代、古代、中近世～近代の遺物や遺構を伴う複合遺跡である。

昆虫分析試料は、平成16～17年、および平成21年度に発掘調査が実施されたC区、E区、F区の遺物包含層より採取され、室内にて水洗浮遊選別されたのち、筆者と同定依頼されたものである。試料の内訳、時期、水洗量などについては、表1に示した。

昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で1点ずつ比較のうえ実施した。昆虫化石は、いずれも節片に分離した状態で検出されており、そのため、本論に記した産出点数は昆虫の個体数を示したのではないが、試料によっては、最少個体数を計数できるものも存在する。同定・計数後の試料は、青森市教育委員会に保管されている。

3. 昆虫化石の分析結果

高間(1)遺跡の分析試料中より抽出された昆虫化石は、63試料計1,170点であった(表2)。昆虫点数が最も多かったのは、試料42(E区SEa-01(SK-96)下層:13世紀代)の175点、最も少なかったのは、試料12(C区SK-49 3層;中世以降)はじめ計9試料の1点であり、1試料あたりの平均産出点数は18.6点であった。発見された昆虫化石のうち、代表的なものについては、図版1～3に実体顕微鏡写真を掲げた。

昆虫化石を分類群ごとにとり、目レベルまで同定できたもの2目46点、科レベルまで分類できたもの17科487点、族レベル1族4点、属レベルは12属139点、種まで同定できたものは32種297点であった。これ以外に、不明甲虫とした昆虫が192点、昆虫であることは確かであるものの分類不能の体節片が5点存在する。検出部位別では、オサムシ科 Carabidae に分類される上翅(Elytron)や前胸背板(Pronotum)が最も多く認められ、このほか、マグソコガネ属 *Aphodius* sp. の頭部(Head)や腿脛節(Legs)、腹部(Abdomen)、アリ科 Formicidae の頭部や胸部(Thorax)などが発見された。

生態別では、地表性で肉食性ないし雑食性のゴミムシ類(計259点)や、同じく地表性で食性の甲虫類(計199点)が多産した。これに加え、動植物質食品などを加害し貯穀害虫や家屋害虫とされる甲虫類(計134点)が目立った。陸生の食性昆虫は計179点であり、水生昆虫はネクイハムシの仲間を含めわずかに8点発見されたのみであった。アリ科も計105点と比較的多く発見された。

特徴的な種についてみると、地表性歩行虫でオーブンランドの獣糞や人糞に多く、堆肥や腐敗植物質にも集まる小型の食性昆虫であるマグソコガネ *Aphodius rectus* が計73点と多産し、同じく獣糞に多く人糞にも来るマグソコガネ *A. pusillus* が15点、主に獣糞に集まるが現在では分布が限られるヒメコガネ *A. botulus* が7点、牛糞や馬糞・犬糞などに集まり灯火にも飛来するヒメフチケマコガネ *A. aurostigma* が2点など、マグソコガネ属だけで合計168点発見された。このほか、人為度の高い人糞や獣糞に集まりガムシ科に属するマグソガムシ *Pachysternum haemorrhoum* が計12点、人為度の高い攪乱環境の指標種であるコブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* をはじめエンマコガネ属に分類される中型の食性甲虫が計5点見いだされた。

食性の歩行虫では、人家周辺の畑作地・ゴミ捨て場などに多く、ハエのサナギや腐肉などを食するエンマムシ科 Histeridae が計13点検出された。このほか、屍体や腐肉などに多いシデムシ科 Silphidae (1点)が発見された。食性および食性昆虫以外の地表性歩行虫では、食肉性で平地のアシナダが茂った川原に生息することが多いオオマルガトギムシ *Amara gigantea* (1点)、低山地の森林内に生息するキンナガトギムシ *Pterostichus planicollis* (1点)、平地にも山地にも住むヒラタキイロチビゴムシ *Trechus ephippiatus* (1点)、平地の水辺に生息するヨツモンコズギワゴムシ *Tachyura latifixa* (1点)などのゴミムシ類が見いだされた。属名や種名が未同定のオ

サムシ科 Carabidae が計 171 点、ハネカクシ科 Staphylinidae が計 61 点産出した。

地表性のハエ類は、ヒトや獣類の汚物に集まり、生活ゴミや発酵物などにも来るオオクロバエ *Calliphora lata* (6 点) やキンバエ属 *Lucilia* sp. (11 点)、キイロシヨウジョウバエ *Drosophila melanogaster* (1 点) を含むシヨウジョウバエ属 *Drosophila* sp. が計 26 点など、計 89 点発見された。

食植性昆虫では、人間が植栽した畑作物・果樹などの葉や根を食するヒメコガネ *Anomala rufocuprea* (33 点)、サクラコガネ属 *Anomala* sp. (12 点)、マメコガネ *Popillia japonica* (6 点)、ドウガネブイブイ *A. cuprea* (1 点)、アオウスチャコガネ *Phyllopertha intermixta* (2 点) などが確認されたのみで、食葉性の人里昆虫は少なかった。種名不明のハムシ科昆虫が計 19 点発見された。

こうしたなかで、本試料中の食植性昆虫に分類された屋内性の貯穀性昆虫類の存在は、きわめて特徴的といえる。穀類の重要害虫として知られるコクゾウムシ *Sitophilus zeamais* が計 34 点、穀粉を食べる貯穀性昆虫であるノコギリヒラタムシ *Oryzaephilus surinamensis* が計 24 点、各種穀物を加害するコクヌスト *Tenebroides mauritanicus* が 1 点発見された。このほか、貯穀や乾燥食品の害虫とされ、倉庫や納屋の中で採集されることが多いキスイムシ科 *Cryptophagidae* (日本家屋害虫学会編, 1995) のウスイロキスイムシ *Cryptophagus dilutus* (計 16 点) や、同じく屋内性で現在では食品・製菓等の工場倉庫で発見されるムナビロヒメマキムシ *Dienerella costulata* (11 点) をはじめ、食菌性で家屋内に発生しやむを得ない (日本家屋害虫学会編, 1995) というヒメマキムシ科 Lathridiidae 甲虫が、計 17 点見つかった。同じような環境に生息する家屋害虫とされ、いずれも動物性食品等を食べるホソヒラタムシ科 *Silvanidae* (1 点)、シバムシ科 *Anobiidae* (1 点)、カツオブシムシ科 *Dermestidae* (3 点)、ヒラタキウムシ科 *Lyctidae* (3 点) なども伴われた。

コクゾウムシやノコギリヒラタムシ・コクヌストなどの貯穀性昆虫は、これまで戦国時代の愛知県清洲城下町遺跡 (森, 2000)、江戸時代後期の愛知県名古屋城三の丸遺跡 (森・上田, 2005)、同じく江戸時代後期の仙台市沼向遺跡 (森, 2010) から発見されたことがあり、古代に遡るものでは青森県新田 (1)・(2) 遺跡・同新城平岡 (4) 遺跡 (森・バレオ・ラボ, 2011; 森・佐々木, 2012) より報告されているが、家屋害虫であるウスイロキスイムシやヒメマキムシ科甲虫などは、わが国最初の発見例といえる。

アリ類では、草地や開けた場所に生息し、石の下などに営巣するトビロシワアリ *Tetramorium*

tsushimae (計 19 点)、草地や林内の石下、落葉層、倒木内などに営巣し、蜜や動物質のものに集まるアメイロアリ *Paratrechina flavipes* (計 13 点) などが発見された。なお、これらのアリは、いずれも蜜に集まる習性があり、とくにトビロシワアリは湿地的環境下のバイオフィラ植物として知られるアカメガシワ *Mallotus japonicus* の蜜腺に集まる性質がある。

水生昆虫は非常に少なく、湿地のミズゴケ類を食するヒメセマルガムシ *Coclostoma orbiculare* (1 点)、水田周辺の止水環境に生息するマメガムシ *Regimbartia attenuata* (1 点)、同じく水田地帯に生息し稲作害虫としても知られるイネネクイハムシ *Donacia provosti* (1 点) のほか、キヌツギミズクサハムシ *Plateumaris sericea* (1 点) など、計 8 点確認されたのみである。

4. 考察

時代が明らかになっている分析試料をもとに、I 期 (縄文時代～古代; 試料 63, 24, 30, 62 の 4 試料)、II 期 (10 世紀代および古代; 試料 50, 51, 61 の 3 試料)、III 期 (古代以降および古代～中世; 試料 5, 22, 23, 25, 29, 60, 15 の 7 試料)、IV 期 (13 世紀代; 試料 1, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 52, 53, 54, 55, 56, 57 の 26 試料)、V 期 (中世以降、近代以降および近現代; 試料 12, 13, 14, 59, 28, 2, 3, 4, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 26, 27, 58 の 17 試料)、VI 期 (詳細時期不明; 試料 6, 17, 18, 19, 20, 21 の 6 試料) の 6 つの時期に区分し、各期の昆虫組成と特徴とそこから得られた古環境について述べる。

縄文時代から古代とされている I 期では、計 6 点の昆虫化石しか発見されておらず、明確な特徴をとらえることはできない。数少ない昆虫の中には、森林性のコガネムシ科昆虫が 2 点、樹葉や草本類の葉っぱを食べるサクラコガネ属に分類される体節片が 1 点含有された。このほか、貯穀性のコクゾウムシが、縄文時代から古代とされた C-3 区の基本層序 a の IV 層から確認されている。他の時期と同量の分析試料を水洗選別してもほとんど昆虫化石が見つからなかったことから、この時期の試料を含む土の堆積速度が速かったか昆虫が保存されにくい環境下の分析試料であったことが考えられる。

II 期の 10 世紀代 (試料 50, 51) および古代 (試料 61) にあたる試料では、人糞や獣糞に集まるマクゾガネや同種を含むマクゾガネ属昆虫が、古代の分析試料中より計 8 点確認された。この出現結果は、本遺跡に隣接する新田 (1)・(2) 遺跡や新城平岡 (4) 遺跡において、10 世紀後半～11 世紀前半を中心に人が集中居住し周辺環境に環境汚染が進行していた (森・バレオ・ラボ, 2011) とする従

来の分析結果ともよく符合する。

Ⅲ期の古代以降中世までの計7試料は、全体に産出昆虫が少なく出現傾向がつかみにくい。古代以降とされる試料23からは、湿地に生息するキヌツヤミズクサハムシが発見され、また人里昆虫で畑作物や果樹などを加害するヒメコガネ、地表性歩行虫で平地にも山地にも生息するとされるヒラタキイロチビゴムシなどが確認され、多様な生態系が存在した可能性が考えられる。なお、古代～中世の試料29からは、貯穀性昆虫であるコクゾウムシが見つかった。

13世紀代とされるⅣ期については、28試料より計785点の昆虫化石が発見され、多くの情報が得られた。昆虫群集には、主に3つの環境指標を示す昆虫が含有されている。一つ目は、汚染環境を示す食糞ないし食屍性昆虫が多量発見されたことである。試料1では、マダソガムシ・エンマコガネ属・マダソコガネ属という3タイプの食糞性昆虫のほか、食屍性昆虫のエンマシ科が発見され、試料41や試料42、試料44からは、マダソコガネ・コクゾウムシ・ヒメコガネ・マダソコガネ・エンマソコガネの4種のマダソコガネと、食屍性昆虫のエンマシ科を産出した。同じ試料からは、散糞や人糞だけでなく生活ゴミなどに多く集まるハエ目も検出されている。しかし、これらの出現率は、いずれも比較的低率であった。二つ目の特徴としては、この時期の食物貯蔵を示唆する昆虫に注目する必要がある。分析試料中に、貯穀性昆虫のコクゾウムシ・ノコギリヒラタムシ・コクヌストなどが含有され、これに加えムナビロヒメマキムシ・シバシバムシ科・カツオブシムシ科・ウスイロキスイムシなどの家屋害虫が伴われた。三つ目の環境指標は、乾燥地表面の存在を示すアリ類が発見されたことである。アリ科の中でも、とくに蜜に集まるトビイロシワアリとアメイロアリが含有されたことは重要である。前者のトビイロシワアリは、荒地や乾燥した地表面上に特徴的に生えるアカメガシワの蜜腺に集まることから知られる。このほか、クロオオアリ *Camponotus japonicus*・クロヤマアリ *Formica japonica* など大型のアリ類が検出された。両分類群とも、平地から山地にかけての日当たりのよい乾燥した地表面上に多いアリの仲間である。地表性昆虫であるオオマルガタゴムシやナガゴムシ属 *Pterostichus* sp. などの産出も畑作物をはじめ乾燥した攪乱地表面の存在を示すものである。

V期の試料は、中世以降近現代に位置づけられる17試料である。これらの試料からは、産出点数は多くないものの、Ⅳ期同様、2つのカテゴリーに分類される昆虫組成が認められた。食糞ないし食屍性昆虫とハエ類、それに貯穀性昆虫の産出である。ア

リ類は、近現代の試料58を除いて、まったく発見されなかった。

Ⅵ期に位置づけられた詳細時期不明の分析試料では、いずれの試料にも食糞性昆虫が含有されたが、ハエ類や貯穀性昆虫などとは伴わなかった。

このように、高間(1)遺跡より得られた昆虫化石群集は、13世紀代とされた分析試料に最もその特徴が現れているといえる。この時期食糞ないし食屍性昆虫の産出点数は計120点に達し、これらの昆虫の60.3%が13世紀代の試料から得られている。生活ゴミや汚物などにたかることが多いハエ類の産出も、同時期が最も多い。この結果は、高間(1)遺跡においてヒトが集中居住し、環境汚染が最も進行した時期が13世紀代であったことを示している。貯穀性昆虫の産出も13世紀代が最も多いことから、集落が一番繁栄し穀物貯蔵が大変盛んであった可能性が考えられる。

同じ時期、SEA-02(SK-97)とされた遺構内のみみから層を水洗淨選別して得られた分析試料(試料43)では、食糞性昆虫や食屍性昆虫は含有されず、またみみから層にも関わらずコクゾウムシやノコギリヒラタムシなどといった貯穀性昆虫はまったく含まれていなかった。この試料には、ムナビロヒメマキムシをはじめヒメマキムシ科の昆虫片と、ウスイロキスイムシ、干肉や毛皮・干肉などに動物質の貯蔵食品を加害する(松崎・武衛, 1993)カツオブシムシ科、およびアリ科・ショウジョウバエ属などが認められた。同じような分析結果は、SEA-06(SK-277)とされた遺構内から採取された試料49からも得られており、本試料では主に植物質の乾燥食品の害虫として知られる(安富・梅谷, 1983)シバシバムシ科の昆虫片と、ウスイロキスイムシが同時に発見された。試料49からも試料43同様に、食糞・食屍性昆虫や貯穀性昆虫は発見されなかった。

試料43から発見されたムナビロヒメマキムシは体長わずかに1.0～1.5mm、複眼がやや退化しわずかに数個の個眼からなる屋内に特化した室内昆虫である。本種はGeorge Lewisの採集品に基づき日本を基産地として1877(明治10)年に初めて記載され、その後ヨーロッパと北米でも発見された(田中, 1986)。バラトヤカビの生えた壁などでよく見つかるが、畳に発生することもあり(田中, 1986)、また甘酒の麹から発生することもあるという(中根, 1979)。クビレヒメマキムシとともにヒメマキムシ科の中で最も多い家屋害虫であるが、近年まではほとんど知られていなかった。試料43では種が同定されたムナビロヒメマキムシ11点以外に、本種かクビレヒメマキムシのどちらかに同定されるヒメマキムシ科甲虫片が計6点確認された。両種とも、現在では食品・製菓等の工場倉庫内で発見されること

が多い家屋害虫とされている(松崎・武衛, 1993)。

試料43および試料49から発見されたウスイロキスムシは体長2.2~2.4mm, 黒い複眼以外は全体黄褐色をしており, 上翅の淡褐色毛は長く後方に伏している。前胸前縁角の張出部は側縁長の約4分の1で, その後端は外後方へ小さく突出し, また前胸側縁の突起は小さいが鋭く, 中央直前にある。ウスイロキスムシの間は, イギリスではPlaster-beetleまたはFungus-beetle, ドイツではSchimmelkäferと呼ばれ, 新築や改築した家の湿った壁に生ずるカビ類の胞子や菌糸を食べることが知られ, また貯穀や乾燥食品の害虫とされるものでもそれらの表面に発生するカビ類を食物とすることが知られている(森本, 1982)。これらの国では換気によって壁が乾燥してくると虫の発生は見られなくなるという。日本に生息するキスムシ属Cryptophagusの多くは, 野外の枯木の上や皮下, ワラの中, 干し草の間などで発見されることが多く, 一部は倉庫や納屋の中で採集できる(森本, 1982)。

こうした特異な生態を有する家屋害虫の発見は, 13世紀代とされるSEa-02 (SK-97) およびSEa-06 (SK-277) の遺構の性格や, その上部に構築されていた掘立柱建物群の構成を考えるうえで重要である。同じ時代の試料中にノコギリヒラタムシやコクゾウムシ・コクヌストなどの貯穀性昆虫が多数含まれ, また大型植物遺体の分析結果からイネやヒエなどが発見されていることから, 中世ははじめのころ, 高岡(1)遺跡で穀物類が貯蔵されていたことは確実である。

一方, 試料43および試料49では貯穀性昆虫は発見されず, またこの時期の昆虫群集の特徴でもある人の集中居住や環境汚染の指標種とされる食糞性昆虫・ハエ類はまったく含有されていなかった。この事実は, SEa-02 (SK-97) やSEa-06 (SK-277) の上部に構築された建造物が, 食糞性昆虫やハエ類などが混入することのないきわめてクリーンな状態に維持されたうえ, 穀物貯蔵に利用されたのでなく, しかしワラや干し草などがあつてカビの発生しやすい湿った建物空間であったことが考えられる。試料43から毛織物や乾燥肉・干魚などの動物質貯蔵食品を食べるカツオブシムシ科, また試料49からは貯蔵食品でもとくに乾燥植物質や乾物類を加害することで知られるシバンムシ科昆虫が発見されたことから, 両試料が採取された場所の周辺に穀類とは異なる乾燥肉や干魚などの貯蔵施設や, 薬品類・毛皮類などを保存する倉庫等が立地していた可能性が指摘されるが, こうした指定は遺跡発掘から得られた考古学的な研究成果とともに考える必要があろう。

5. まとめ

縄文時代~中・近世にかけての高岡(1)遺跡より, 63試料より計1,170点の昆虫化石が発見された。

なかでも, 13世紀代とされる分析試料からは計784点の昆虫化石が確認され, 多くの情報がもたらされた。マダココガネ・コマダココガネ・ヒメコマダココガネ・エンマコガネ属はじめ多数の食糞性昆虫の発見や, 人糞や獣糞などに集まるハエ類や, ハエ類のウジ・サナギなどを捕食するエンマムシ科はじめ食糞性昆虫の産出から, この時期人が集中居住し, 高岡遺跡一帯が大いに栄えていたことがうかがえる。同じ時期, コクゾウムシやノコギリヒラタムシ・コクヌストなどの貯穀性昆虫が多くの試料から得られ, 高岡(1)遺跡において, 穀物貯蔵が行われていたことが明らかになった。

同時代の試料から, 貯穀性昆虫がまったく含まれず, カビの生えた乾物類に特有のムナビロヒメマキムシやウスイロキスムシ・カツオブシムシ科などの家屋害虫が見つかった。この結果より, 高岡(1)遺跡では, 穀物貯蔵とは別に動物質食品や毛皮類・薬品等の貯蔵施設が存在した可能性が考えられる。

謝辞

昆虫分析試料の採取だけでなく, 試料の産出場所や各種遺構などについて, 種々ご教示いただいた青森市教育委員会の木村淳一氏には, 心よりお礼申し上げます。

文献

- 田中和夫(1986) 日本産屋内性マキムシ科について, 家屋害虫, 27-28, 41-54.
- 中根猛彦(1979) 屋内にみられる甲虫類, 浅沼福: 屋内動物(人・家などの害虫及び不快動物の研究と解説), 31-40.
- 日本家屋害虫学会(1995) 家屋害虫事典, 井上書院, 468p.
- 松崎沙和・武衛和雄(1993) 都市古虫百科, 朝倉書店, 236p.
- 森 勇一(1994) 昆虫化石による先史~歴史時代における古環境の変遷の復元, 第四紀研究, 33(5), 331-349.
- 森 勇一(1998) 三内丸山遺跡第6鉄塔地区第VIa・VIb層から得られた昆虫化石, 青森県埋蔵文化財調査報告書(第249集) 三内丸山遺跡IX(第2分冊), 青森県教育委員会, 151-162.
- 森 勇一(1999) 昆虫化石よりみた先史~歴史時代の古環境変遷史, 国立歴史民俗博物館研究報告第81集, 311-342.
- 森 勇一(2000) 愛知県清洲城下町遺跡(中世)から産出した貯穀性昆虫について, 家屋害虫(日本家屋害虫学会誌), 22, 61-67.
- 森 勇一・上田恭子(2005) 三の丸遺跡の埋構の埋土より産出した双翅目のサナギについて, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書(第127集) 名古屋城三の丸遺跡(VII), 愛知県埋蔵文化財センター, 242-246.
- 森 勇一(2009) 遺跡産昆虫から探る人々の暮らし, 特集・

考古学の中の子物たち一、BIOSTORY(生き物文化誌学会誌)、11、誠文堂新光社、16-26。

- 森 勇一(2010) 仙台市沼向遺跡から産出した昆虫化石について、仙台市文化財調査報告書(第360集)沼向遺跡第4~8次調査一宮城県仙台港背後土地両側整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ(第9分冊)、仙台市教育委員会、217-224。
- 森 勇一・バレオ・ラボ(2011) 青森市新田(1)・新田(2)遺跡から発見された昆虫化石と古環境。青森市埋蔵文化財調査報告書(第108集-2)石江遺跡群発掘調査報告書Ⅳ。

青森市教育委員会、89-97。

- 森 勇一(2012) ミシの考古学、雄山閣、237p。
- 森 勇一・佐々木由香(2012) 青森市新成平岡(4)遺跡から発見された昆虫化石と古環境。青森市埋蔵文化財調査報告書(第112集-3)石江遺跡群発掘調査報告書Ⅴ(第3分冊)、青森市教育委員会、271-280。
- 森本 桂(1982) 家屋の中で発見されるキスイムシの1種について、家屋害虫、11-12、60-61。
- 安富和男・梅谷敏二(1983) 衛生害虫と衣食住の害虫。全国農村教育協会、310p。

表1. 青森市高間(1)遺跡の昆虫分析試料

昆虫整理番号	地区	遺構名	付加情報	層位	カード情報	年月日	採取法	土量(cc)	時期
1	A-2	SE-01		中層下	土壌サンプル	090819	水洗選別	200	13世紀
2	C-1	SK-32				040729	水洗選別	200	近代以降か
3	C-1	SK-33				040730	水洗選別	200	近代以降か
4	C-1	SK-36-37				040723	水洗選別	200	近代以降か
5	C-1	SK-38a・38b・39				040728	水洗選別	200	古代以降
6	C-1	SK-40	北壁	1層		040827	水洗選別	230	近代以降か
7	C-1	SK-40	北壁	2層		040827	水洗選別	180	近代以降か
8	C-1	SK-40	北壁	3層		040827	水洗選別	150	近代以降か
9	C-1	SK-40	北壁	4層		040827	水洗選別	70	近代以降か
10	C-1	SK-40	北壁	5層		040827	水洗選別	70	近代以降か
11	C-1	SK-42				040803	水洗選別	200	近代以降か
12	C-1	SK-49		3層		040827	水洗選別	30	中世以降
13	C-1	SK-49		4層		040827	水洗選別	30	中世以降
14	C-1	SK-49		6層		040827	水洗選別	30	中世以降
15	C-1	SK-50		1層		040827	水洗選別	50	中世以前
16	C-1	SK-53		1-6層		040910	水洗選別	200	詳細時期不明
17	C-1	SK-54		2-7-8層		040910	水洗選別	200	詳細時期不明
18	C-1	SK-62		1-3-6-9層		040910	水洗選別	200	詳細時期不明(織文土器出土)
19	C-1	SK-63		4-5-10-13層		040910	水洗選別	200	詳細時期不明
20	C-1	SK-64				040914	水洗選別	200	詳細時期不明
21	C-1	SK-64		5層		040914	水洗選別	200	詳細時期不明
22	C-3	SX-004	沢	1層	土壌サンプル1	050603	水洗選別	400	古代以降
23	C-3	基本層序a		II層		050819	水洗選別	400	古代以降
24	C-3	基本層序a		IV層		050819	水洗選別	200	織文~古代
25	C-3	基本層序b		II層		050819	水洗選別	400	古代以降
26	C-3	5基本層序	西壁	I層	土壌サンプル1	090629	水洗選別	400	近現代
27	C-3	5基本層序	西壁	II層	土壌サンプル2	090629	水洗選別	400	近現代
28	C-3	5基本層序	西壁	III層	土壌サンプル3	090629	水洗選別	400	近世~近代
29	C-3	5基本層序	西壁	IV層	土壌サンプル4	090629	水洗選別	400	古代~中世
30	C-3	5基本層序	西壁	V層	土壌サンプル5	090630	水洗選別	400	織文~古代
31	E	SK-84		フク土5層	土壌サンプル3		水洗選別	190	13世紀代
32	E	SK-85		12層			水洗選別	350	13世紀代
33	E	SK-85		14層			水洗選別	320	13世紀代
34	E	SK-85		15層			水洗選別	290	13世紀代
35	E	SK-85		16層			水洗選別	370	13世紀代
36	E	SK-99		11層	土壌サンプル1		水洗選別	150	13世紀代
37	E	SK-99		12層	土壌サンプル2		水洗選別	100	13世紀代
38	E	SK-99		14層	土壌サンプル4		水洗選別	110	13世紀代
39	E	SK-99		16層	土壌サンプル6		水洗選別	100	13世紀代
40	E	SK-270		1層		050616	水洗選別	50	13世紀代
41	E	SK-358A・358B			W-X	050623	水洗選別	-	13世紀代
42	E	SEa-01(SK-96)		下層		041026	水洗選別	300	13世紀代
43	E	SEa-02(SK-97)		もみらがら	土壌サンプル13	041028	水洗選別	300	13世紀代
44	E	SEa-03(SK-116)		フク土下層			水洗選別	100	13世紀代
45	E	SEa-04(SK-246)		15層	土壌サンプル1	050615	水洗選別	500	13世紀代
46	E	SEa-04(SK-246)		15層	土壌サンプル3	050622	水洗選別	20	13世紀代
47	E	SEa-05(SK-254)		23層	NP-1	050615	水洗選別	140	13世紀代
48	E	SEa-05(SK-254)		23層	土壌サンプル1	050629	水洗選別	500	13世紀代
49	E	SEa-06(SK-277)		17層		051018	水洗選別	200	13世紀代
50	E	SN-23				051018	水洗選別	300	10世紀前半
51	F-1	SI-014		5層	F-2	070906	水洗選別	50	10世紀前半
52	F-2	SD-001a		1層	土壌サンプルA	090526	水洗選別	400	13世紀代
53	F-2	SD-001a		3層	土壌サンプルB	090526	水洗選別	400	13世紀代
54	F-2	SD-001a		4層	土壌サンプルC	090526	水洗選別	400	13世紀代
55	F-2	SD-001a		5層	土壌サンプルDE	090526	水洗選別	400	13世紀代
56	F-2	SD-001a		6層	土壌サンプルDE	090526	水洗選別	400	13世紀代
57	F-2	SD-001a		7層	土壌サンプルFG	090526	水洗選別	400	13世紀代
58	F-3	5基本層序		I層	土壌サンプル1	090721	水洗選別	400	近現代
59	F-3	5基本層序		II層	土壌サンプル2	090721	水洗選別	400	中世~近代
60	F-3	5基本層序		III層	土壌サンプル3	090721	水洗選別	400	古代~中世
61	F-3	5基本層序		IV層	土壌サンプル4	090721	水洗選別	400	古代
62	F-3	5基本層序		V層	土壌サンプル5	090721	水洗選別	400	織文~古代
63	F-3	5基本層序		VI層	土壌サンプル6	090721	水洗選別	400	織文



図版1 青森市高間（1）遺跡から産出した昆虫化石の顕微鏡写真1

1. マグソコガネ *Aphodius rectus* (Motschulsky) 食糞性昆虫 頭部（幅1.9mm）試料32
2. マグソコガネ *Aphodius rectus* (Motschulsky) 食糞性昆虫 前胸背板（幅2.8mm）試料58
3. ショウジョウバエ属 *Drosophila* sp. 発酵食品に集まるハエの仲間 閉蛹（長さ2.1mm）試料1
4. ヒメコマグソコガネ *Aphodius botulus* Balthsar 食糞性昆虫 左上翅（長さ1.7mm）試料44
5. マグソコガネ *Pachysternum haemorrhoum* Motschulsky 食糞性昆虫 左上翅（長さ2.1mm）試料48
6. コプマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* Waterhouse 食糞性昆虫 頭部（幅2.2mm）試料57
7. マグソコガネ *Aphodius rectus* (Motschulsky) 食糞性昆虫 右上翅（長さ3.8mm）試料42
8. コマガソコガネ *Aphodius pusillus* (Herbst) 食糞性昆虫 左上翅（長さ3.0mm）試料42
9. ヒメフチケマガソコガネ *Aphodius urostigma* Harold 食糞性昆虫 左上翅（長さ3.8mm）試料35



図版2 青森市高間(1)遺跡から産出した昆虫化石の顕微鏡写真2

1. キンナガゴミムシ *Pterostichus planicollis* (Motschulsky) 食肉性の地表性昆虫 上翅片(幅2.8mm) 試料42
2. ヒメセマルガムシ *Coelostoma orbiculare* (Fabricius) 水生昆虫 右上翅(長さ2.8mm) 試料34
3. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky 食薬性の畑作害虫 右頭部片(長さ2.0mm) 試料42
4. エンマムシ科 *Hiseridae* gen. et sp. indet. 食屍性昆虫 前胸背板(幅2.8mm) 試料41
5. アオウスチャコガネ *Phyllopertha intermixta* (Arrow) 食薬性の畑作害虫 前胸背板片(長さ1.1mm) 試料36
 現生標本に重ねて撮影
6. オオマルガトゴミムシ *Amara gigantea* Motschulsky 食肉性の地表性昆虫 前胸背板(幅7.0mm) 試料41
7. マメガムシ *Regimbaria attenuata* (Fabricius) 水生昆虫 右上翅(長さ2.3mm) 試料4
8. ヒラタクイロチビゴミムシ *Trechus ephippianus* Bates 雑食性の地表性昆虫 右上翅(長さ2.2mm) 試料23
9. トビイロシワアリ *Tetramorium tsushimae* (Emery) 雑食性の地表性昆虫 頭部(長さ0.7mm) 試料1
10. キンバエ属 *Lucilia* sp. 汚物食昆虫 囲蝸(後気門の部分)(写真の部分の幅2.4mm) 試料47



図版3 青森市高間（1）遺跡から産出した昆虫化石の顕微鏡写真3

1. コクゾウムシ *Sitophilus zeamais* Motschulsky 貯穀性昆虫 左右上翅（長2.1mm）試料1
2. コクゾウムシ *Sitophilus zeamais* Motschulsky 貯穀性昆虫 左上翅（長1.7mm）試料32
3. コクゾウムシ *Sitophilus zeamais* Motschulsky 貯穀性昆虫 前胸背板（長さ1.1mm）試料2
4. ウスイロキシイムシ *Cryptophagus dilutus* Reitter 乾物類を食べる家屋害虫 前胸背板（幅0.8mm）試料49
5. ウスイロキシイムシ *Cryptophagus dilutus* Reitter 乾物類を食べる家屋害虫 頭部および前胸背板（最大幅0.8mm）試料49
6. ウスイロキシイムシ *Cryptophagus dilutus* Reitter 乾物類を食べる家屋害虫 右上翅（長さ1.8mm）試料49
7. ノコギリヒラタムシ *Oryzophilus surinamensis* (Linne) 貯穀性昆虫 右上翅（長さ1.9mm）試料42
8. ムナビロヒメマキムシ *Dinereella costulata* (Reitter) 乾物類を食べる家屋害虫 左右上翅（長さ1.0mm）試料43
9. ムナビロヒメマキムシ *Dinereella costulata* (Reitter) 乾物類を食べる家屋害虫 左上翅（長さ1.1mm）試料43
10. ムナビロヒメマキムシ *Dinereella costulata* (Reitter) 乾物類を食べる家屋害虫 右上翅（長さ1.0mm）試料43

第12節 石江遺跡群で検出された掘立柱建物跡の機能と特徴

中村隼人（日本建築学会）

1. はじめに

石江遺跡群は青森県青森市石江地区及びその近隣地区に所在する遺跡群の総称である。青森市教育委員会及び青森県埋蔵文化財調査センターによる複数回の発掘調査がなされており既刊報告書も多い。本稿の目的は、既刊報告書において復元されている石江遺跡群検出の掘立柱建物跡を再検証し、その特徴を明らかにすることである。

2. 既刊報告書掲載の掘立柱建物跡について

本遺跡群で検出された掘立柱建物跡の復元及びその解釈に関しては故高島成侑氏によるところが大きい。既刊報告書において紹介されている遺跡名と復元棟数、調査機関、報告書発行年度、復元担当者は以下のとおりである。

- 新田（1）遺跡：21棟（青森県埋文2009）高島
 新田（2）遺跡：12棟（青森県埋文2009）高島
 新田（1）遺跡：46棟（青森市2010）高島
 新田（2）遺跡：19棟（青森市2010）高島
 新城平岡（7）遺跡：3棟（青森市2012）中村
 新城平岡（4）遺跡：3棟（青森市2012）中村
 高間（1）遺跡A～E区：19棟（青森市2013）高島
 →23棟（本稿初出）中村
 F～G区：1棟（青森市2013）中村

なお、既刊報告書掲載の復元掘立柱建物跡のうち、高間（1）遺跡A～E区検出の建物跡については本稿中で復元案の再作成を行った。詳細は次項を参照されたい。

2. 高間（1）遺跡A～E区検出掘立柱建物跡

高間（1）遺跡はA～H区までの8調査区で構成される。このうちA～E区検出の掘立柱建物跡については故高島成侑氏が復元案を作成し、これを中村が考察する形で一度報告が行われている（中村隼人2013）。しかし同復元案には少なくない問題がみられた為、本稿執筆に際し、復元案の再作成を行った。再作業の結果、23棟の掘立柱建物跡を検出することができた。下記が詳細である。

高間（1）SB01

SB01は北東-南西方向を棟方向とする梁間二間×桁桁三間の建物である。身舎寸法は梁間14.7尺（4,451mm）、桁行16.5尺（4,987mm）で身舎梁間中

央には棟持柱の可能性を持つ柱を立てる。身舎内部で焼土遺構が検出されており、これが同建物に伴うものだとすると、SB01は床のない建物であったと考えられる（図9）。

高間（1）SB02

SB02は北西-南東方向を棟方向とする梁間二間×桁桁四間の建物である。梁間寸法は両妻ではほぼ同寸法となるが、妻北西側ではこれを二間、妻南東側では三間に割る点で異なる。身舎寸法は梁間12.8尺（3,868mm）、桁行24.2尺（7,344mm）で身舎梁間中央には棟持柱の可能性を持つ柱を立てる。身舎内部で焼土遺構が検出されており、これが同建物に伴うものだとすると、SB02は床のない建物であったと考えられる（図9）。

高間（1）SB03

SB03は北西-南東方向を棟方向とする梁間二間×桁桁四間の建物である。梁間寸法は両妻ではほぼ同寸法となるが、妻北西側ではこれを二間、妻南東側では一間に割る点で異なる。身舎寸法は梁間12.8尺（3,873mm）、桁行25.6尺（7,756mm）で身舎梁間中央には棟持柱の可能性を持つ柱を立てる（図9）。

高間（1）SB04

SB04は北東-南西方向を棟方向とする梁間二間×桁桁四間の建物である。平南側に一間の下屋が付設される。身舎寸法は梁間15.4尺（4,680mm）、桁行35.1尺（10,633mm）で身舎梁間中央には棟持柱の可能性を持つ柱を立てる。（図9）。

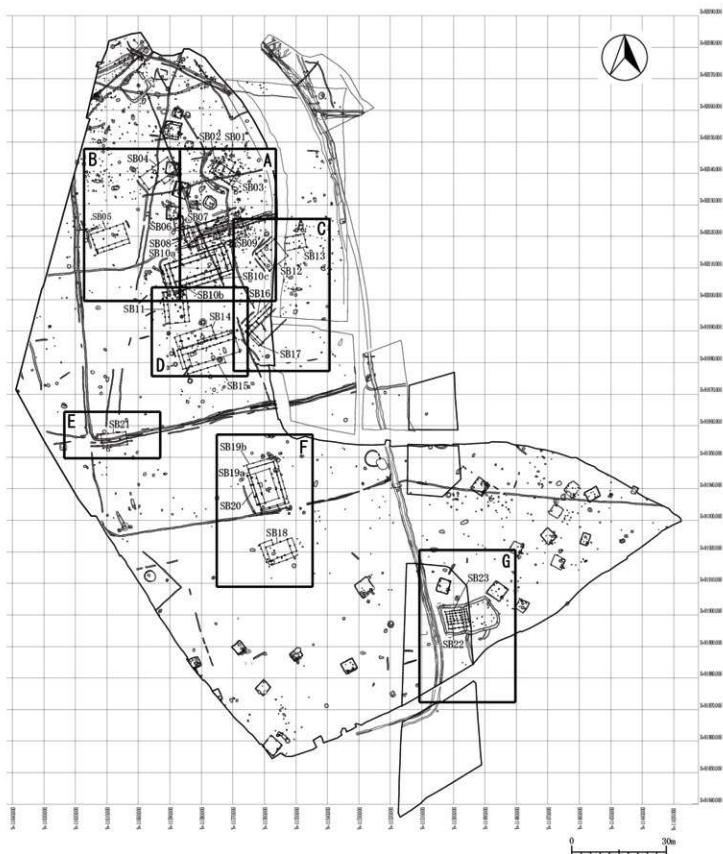
高間（1）SB05

SB05は東-西方向を棟方向とする梁間三間×桁桁五間の建物である。平南側に一間の庇ないしは下屋が付設される。身舎寸法は梁間16.5尺（5,005mm）、桁行35.9尺（10,892mm）で身舎梁間中央には棟持柱を立てる（図10）。

高間（1）SB06

SB06は東-西方向を棟方向とする梁間二間×桁桁七間の建物である。梁間寸法は両妻ではほぼ同寸法となるが、妻西側ではこれを二間、妻東側では一間に割る点で異なる。平南側と平北側に一間の庇ないしは下屋、妻西側に一間の下屋が付設される。身舎寸法は梁間13.8尺（4,191mm）、桁行52.3尺（15,832mm）で身舎梁間中央には棟持柱の可能性を持つ柱を立てる（図10）。

高間(1)遺跡E区掘立柱建物跡遺構配置図(A区・新幹線調査区含む) S=1/1200



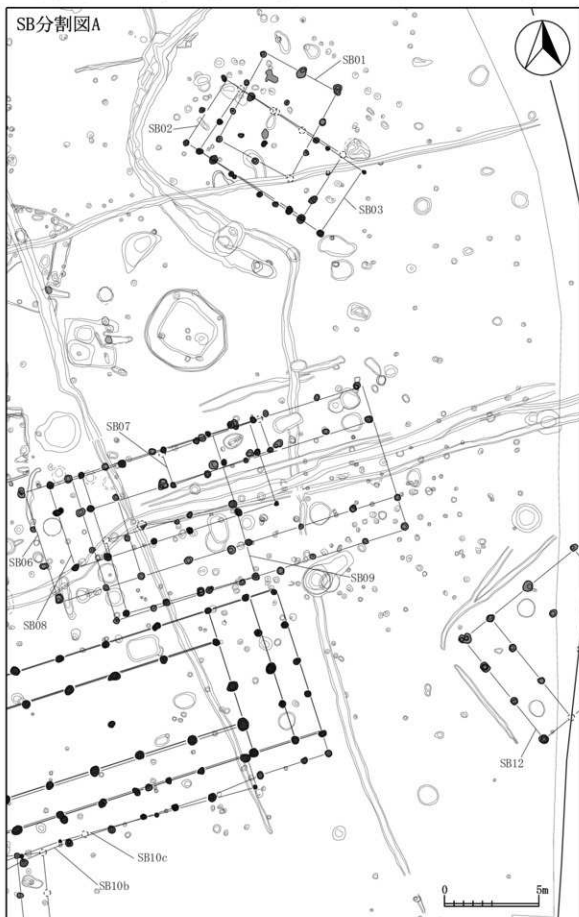


図 2

図-12
石江遺跡群
で検出された
木造土柱建
物の平面図
と特徴

頁一七
石江遺跡群
で検出された
土器立坑遺
物群の概観
と特徴



図 3

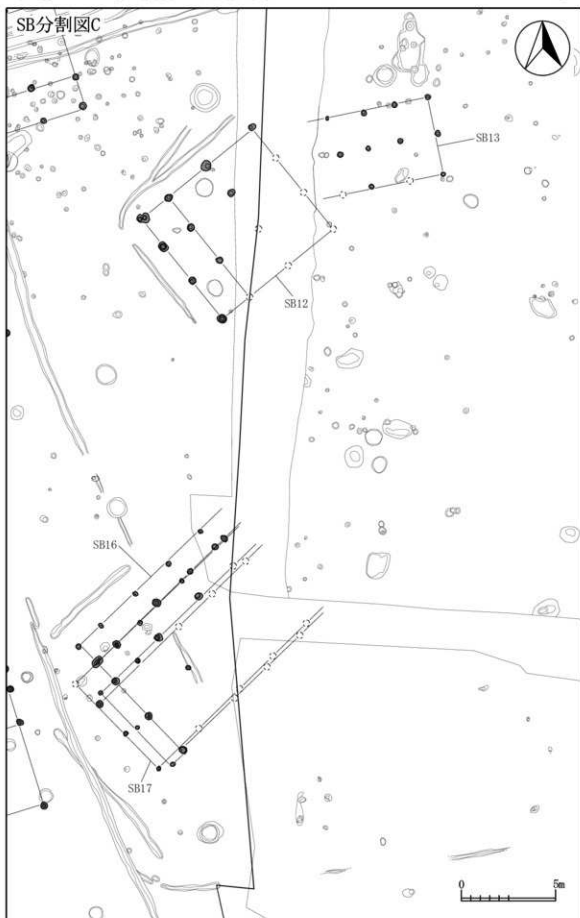


图-12
石江遺跡群
平塚山古墳
本墓丘付墳
跡部心構
之特南

图 4

頁一七
石江遺跡群
で検出された
土器立坑遺
物群の構成
と特徴

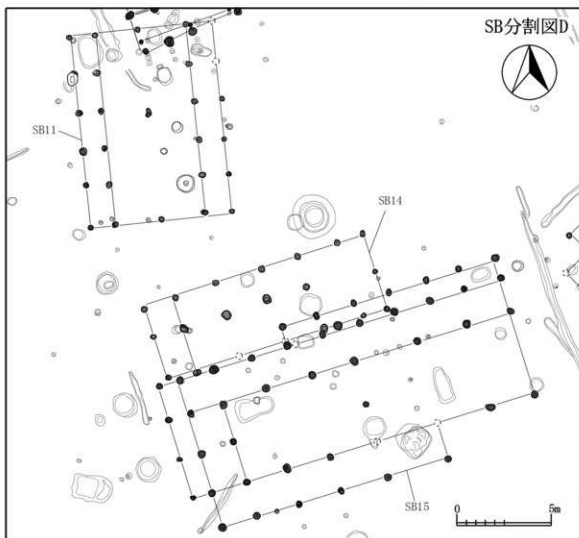


図 5

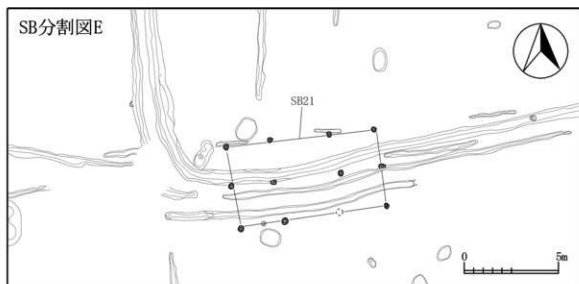


図 6

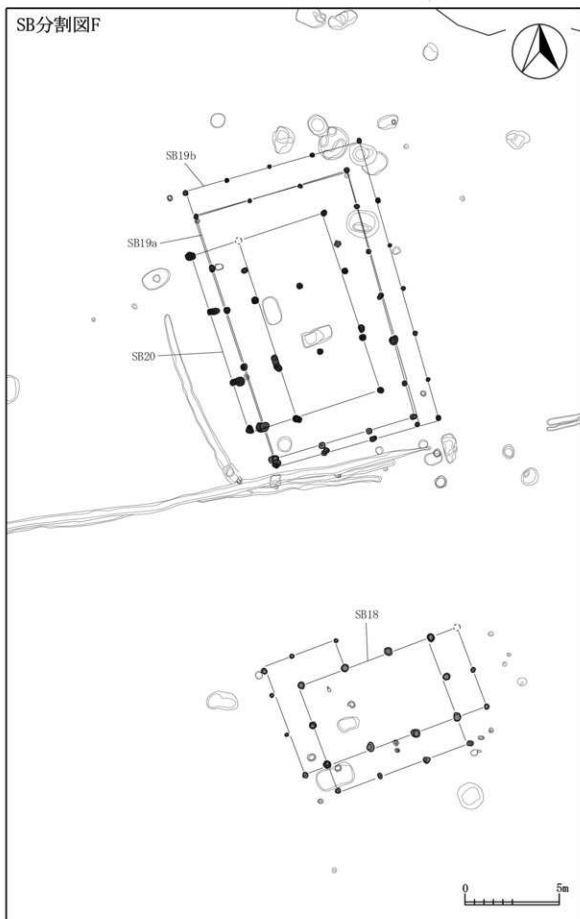


图 7

頁一七
石江遺跡群
で検出された
土器土瓦類
の群像の概観
と特徴

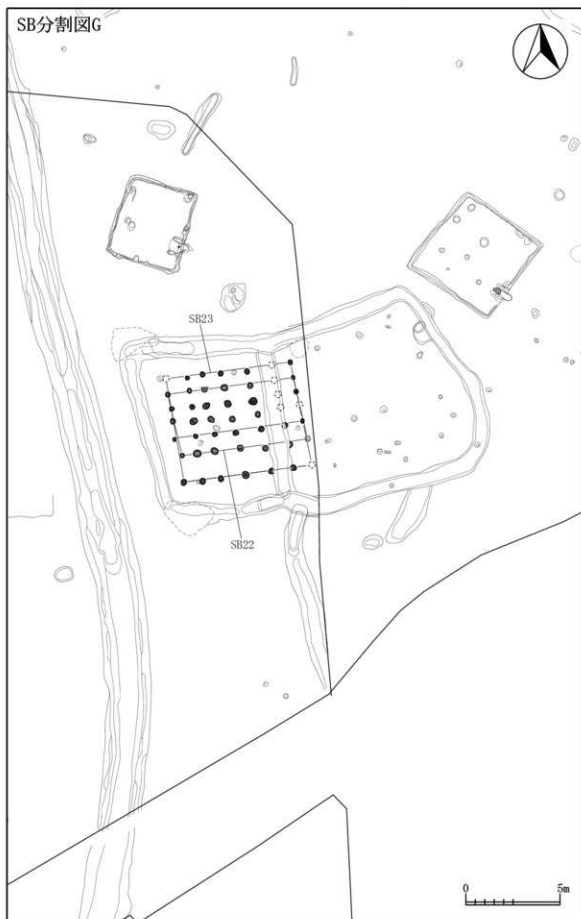
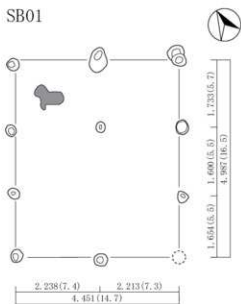
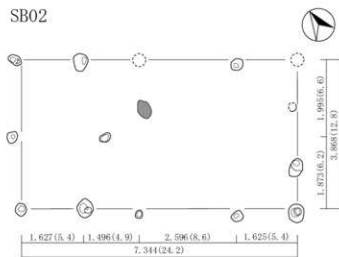


図 8

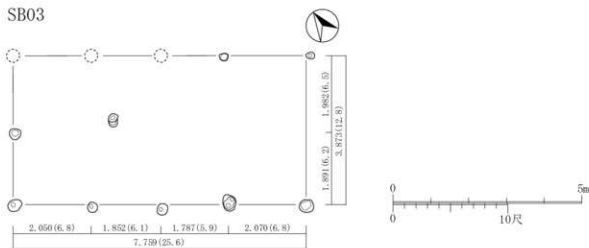
SB01



SB02



SB03



SB04

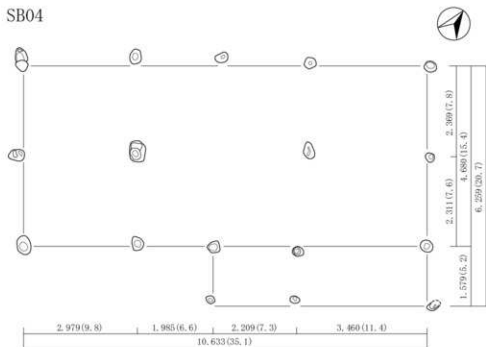
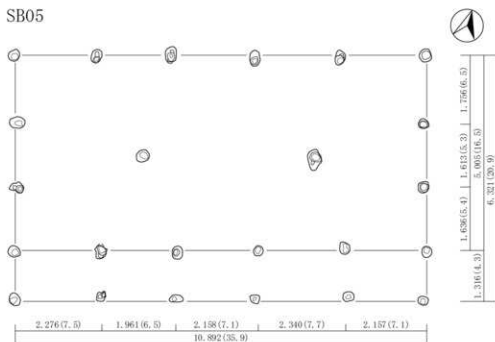
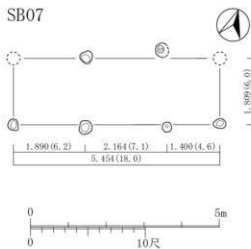


图 9

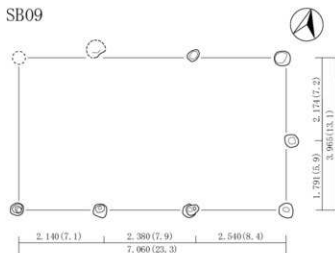
SB05



SB07



SB09



SB08

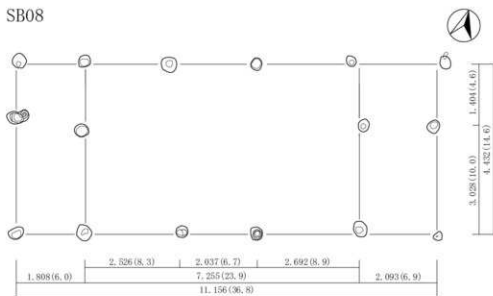


図 10

SB06

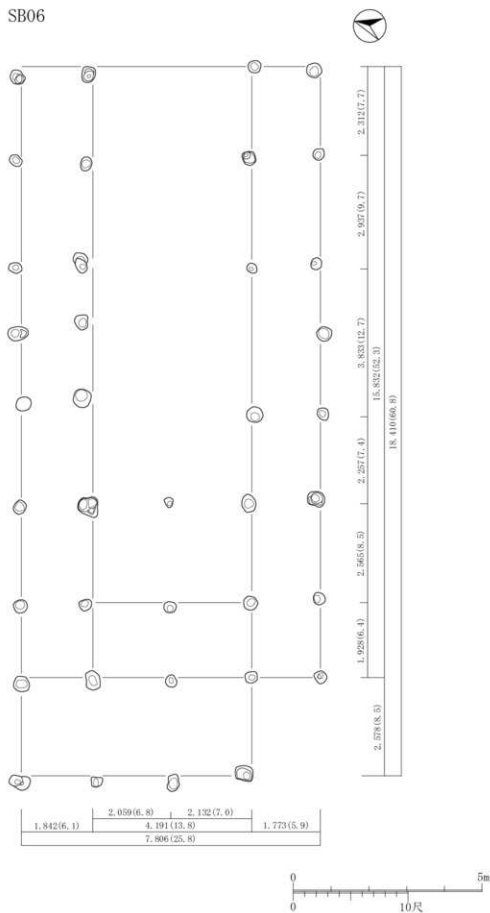


图-12
 石江渡遗址
 平壤出基址
 发掘区柱网
 平面图(局部)
 之特例

图 11

SB10a

表-12
石江遺跡群
で検出され
た遺土柱礎
の平面図
と特徴

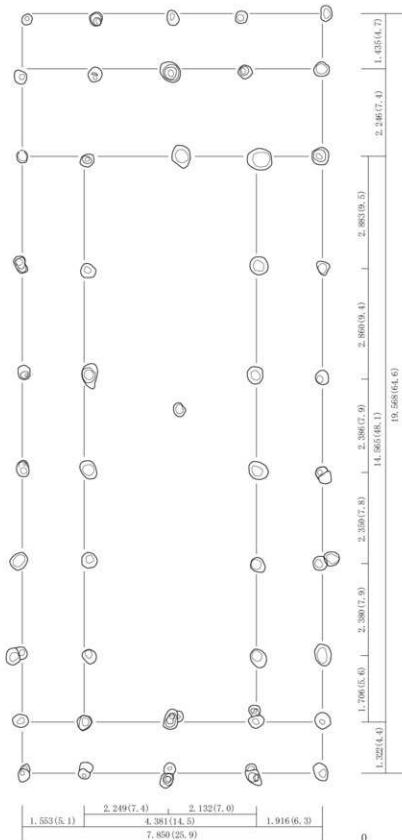


図 12

SB10b

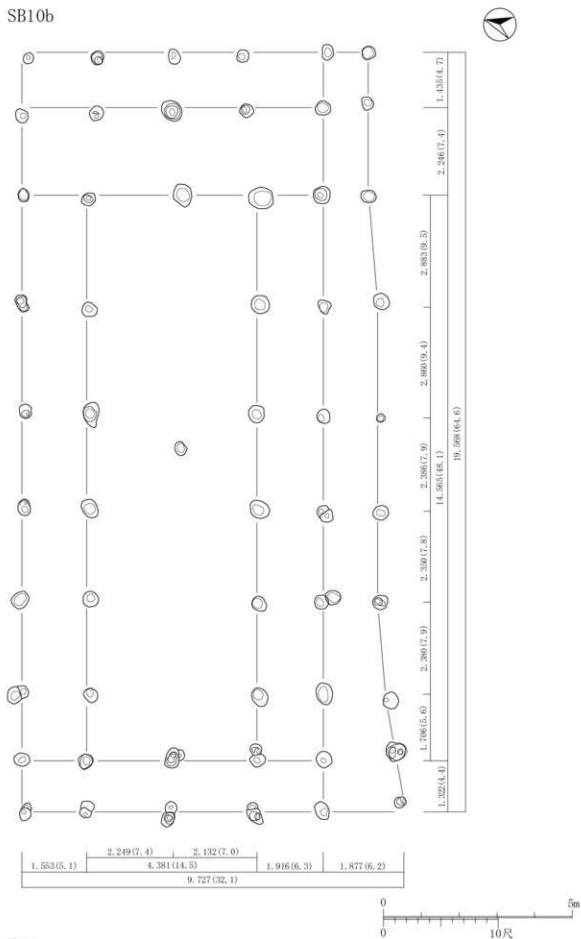


图 13

图-12
 石江渡遗址
 平壤山8号
 水田立柱遺
 跡跡心線圖
 之特例

SB10c

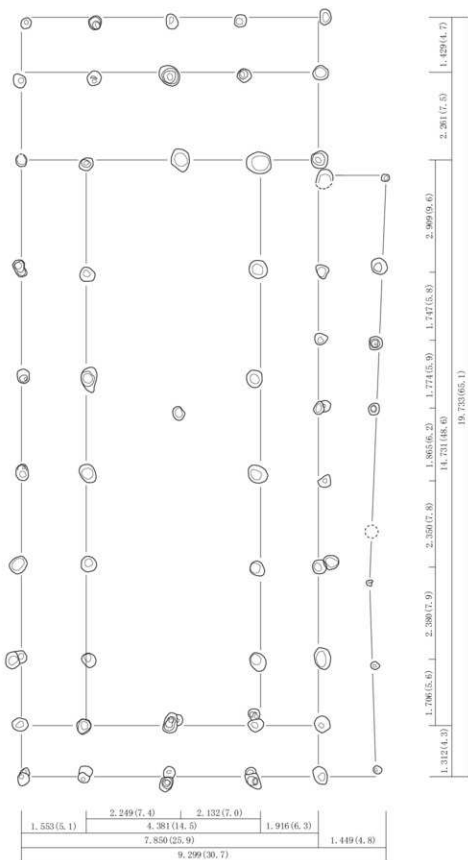
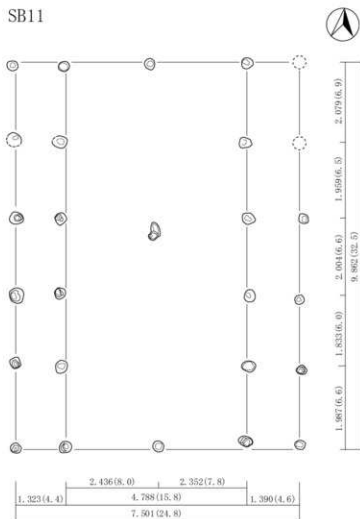
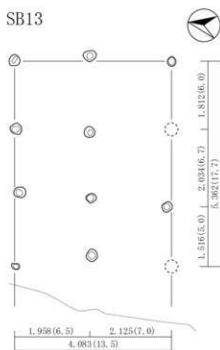


図 14

SB11



SB13



SB12

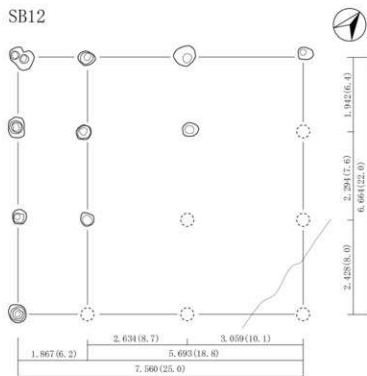
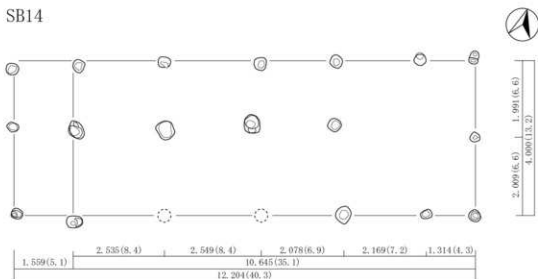


图 15

SB14



SB16

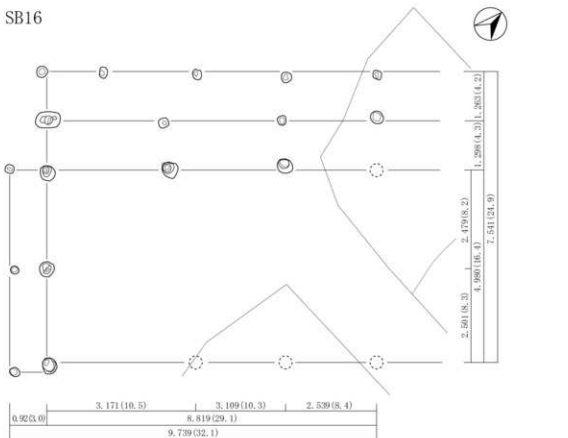


図 16

SB15

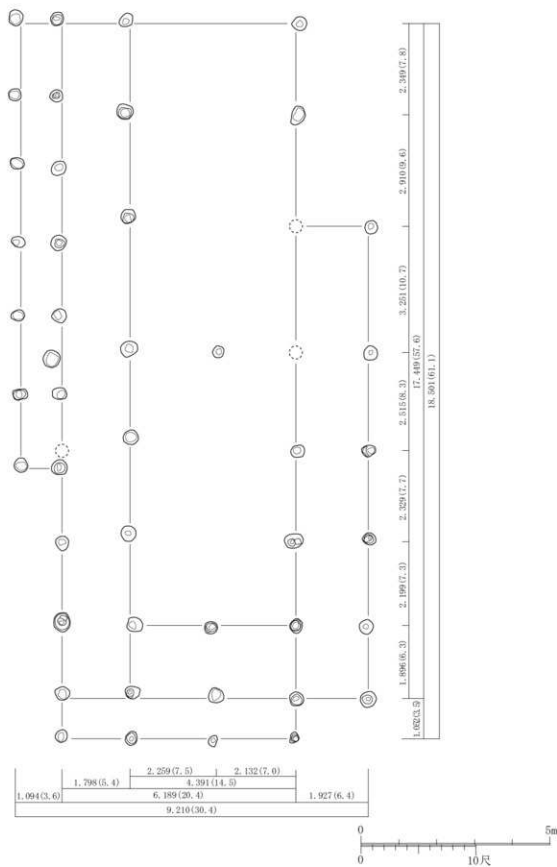
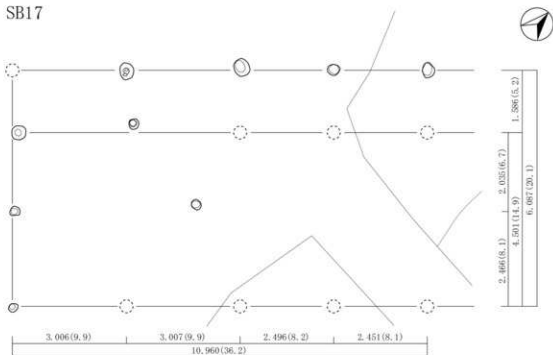


图 17
石江渡遗址
平面上层
发掘区
遗迹之平面

图 17

SB17



SB18

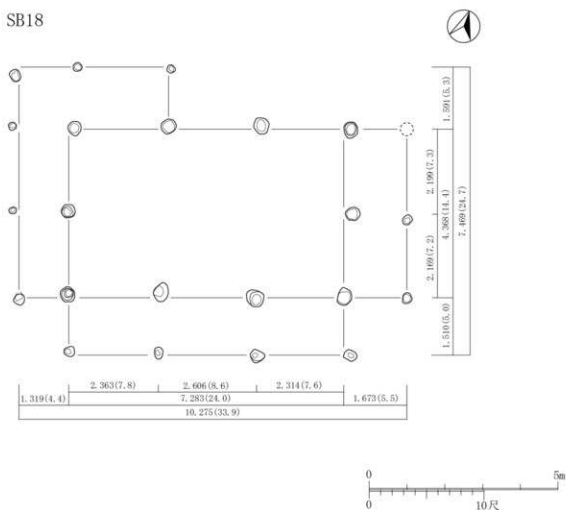


図 18

SB19a

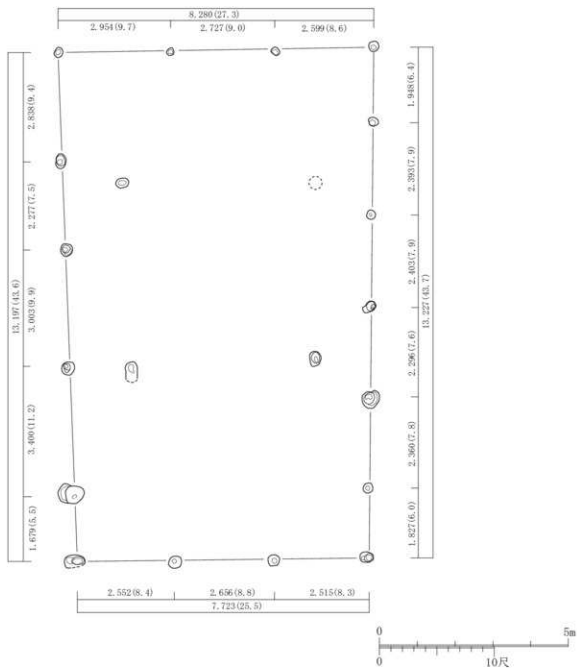


图 19

图-12
石江渡脚
平塚山8尺
大塚山柱礎
後部心構圖
之特視

SB19b

図12
石江遺跡群
で検出された
土器・瓦片等
の分布状況
と特徴

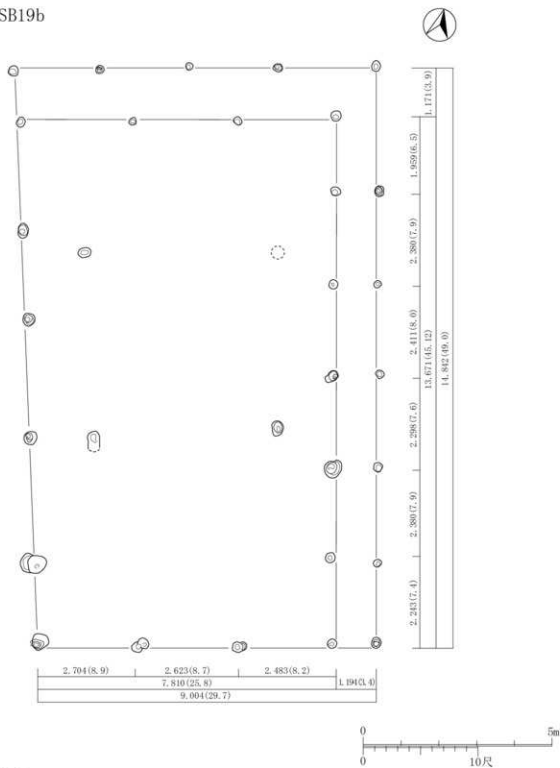
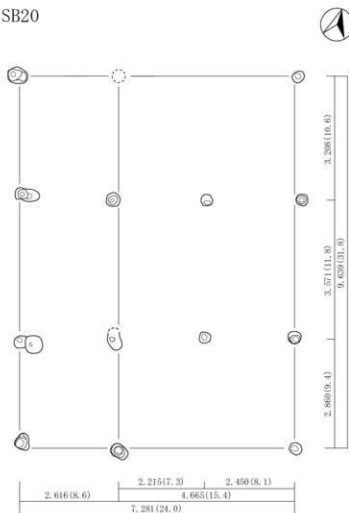


図 20

SB20



SB21

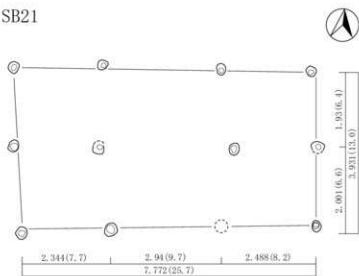
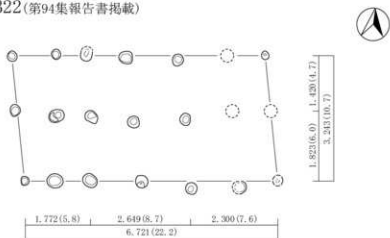


图 21

頁一七
石江遺跡群
で発出された
土器立花埴
物類の構成
と特徴

SB22(第94集報告書掲載)



SB23(第94集報告書掲載)

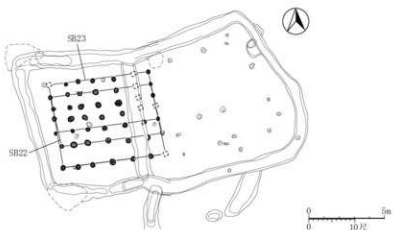
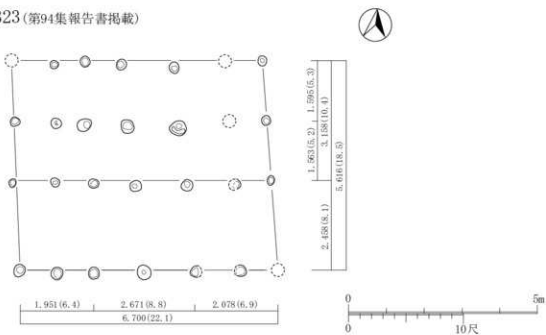


図 22

高間 (1) SB07

SB07は東-西方向を棟方向とする梁間一間×桁桁三間の建物である。身舎寸法は梁間6.0尺(1,809mm)、桁行18.0尺(5,454mm)である(図10)。

高間 (1) SB08

SB08は東-西方向を棟方向とする梁間二間×桁桁三間の建物である。妻東側と妻西側に一間の下屋が付設される。身舎寸法は梁間14.6尺(4,432mm)、桁行23.9尺(7,255mm)である(図10)。

高間 (1) SB09

SB09は東-西方向を棟方向とする梁間二間×桁桁三間の建物である。梁間寸法は両妻でほぼ同寸法となるが、妻西側ではこれを一間、妻東側では二間に割る点で異なる。身舎寸法は梁間13.1尺(3,965mm)、桁行23.3尺(7,060mm)である(図10)。

高間 (1) SB10a, b, c

SB10a, b, cは東-西方向を棟方向とする梁間二間×桁桁六間の建物である。平南側に複数回下屋が増築された痕跡が残るため、これをSB10b及びSB10cとした。最大のSB10cは、平南側及び平北側に一間の庇、妻西側に一間の下屋、妻東側にそれぞれ一間の庇と孫庇ないしは下屋が付設される。身舎寸法は梁間14.5尺(4,381mm)、桁行48.6尺(14,731mm)で身舎梁間中央には棟持柱の可能性を持つ柱を立てる。(図12・13・14)。

高間 (1) SB11

SB11は南-北方向を棟方向とする梁間二間×桁桁五間の建物である。平東側と平西側に一間の庇ないしは下屋が付設される。身舎寸法は梁間15.8尺(4,788mm)、桁行32.5尺(9,862mm)で身舎梁間中央には棟持柱の可能性を持つ柱を立てる(図15)。

高間 (1) SB12

SB12は北西-南東方向を棟方向とする。建物が調査区外に伸びる可能性があるため、全容は不明だが、梁間二間×桁桁三間以上の身舎の平西側に庇ないしは下屋が付設される。身舎寸法は梁間18.8尺(5,693mm)、桁行22.0尺(6,664mm)で身舎梁間中央には棟持柱の可能性を持つ柱を立てる(図15)。

高間 (1) SB13

SB13は東-西方向を棟方向とする。建物が調査区外に伸びる可能性があるため、全容は不明だが、梁間二間×桁桁三間以上の建物である。身舎寸法は梁間13.5尺(4,083mm)、桁行17.7尺(5,362mm)以上で身舎梁間中央には棟持柱の可能性を持つ柱を立てる(図15)。

立てる(図15)。

高間 (1) SB14

SB14は東-西方向を棟方向とする梁間二間×桁桁五間の建物である。妻西側に一間の下屋が付設される。身舎寸法は梁間13.2尺(4,000mm)、桁行35.1尺(10,645mm)で身舎梁間中央には棟持柱の可能性を持つ柱を立てる(図16)。

高間 (1) SB15

SB15は東-西方向を棟方向とする梁間二間×桁桁七間の建物である。梁間寸法は両妻でほぼ同寸法となるが、妻西側ではこれを二間、妻東側では一間に割る点で異なる。平南側に一間の庇ないしは下屋、平北側にそれぞれ一間の庇及び孫庇ないしは下屋、妻西面には一間の下屋が付設される。身舎寸法は梁間14.5尺(4,391mm)、桁行57.6尺(17,449mm)で身舎梁間中央には棟持柱の可能性を持つ柱を立てる(図17)。

高間 (1) SB16

SB16は南西-北東方向を棟方向とする。建物が調査区外に伸びる可能性があるため、全容は不明だが、梁間二間×桁桁三間以上の建物である。平北側にそれぞれ一間の庇及び孫庇ないしは下屋、妻西側に一間の下屋が付設される。身舎寸法は梁間16.4尺(4,980mm)、桁行29.1尺(8,819mm)以上である(図16)。

高間 (1) SB17

SB17は南西-北東方向を棟方向とする。建物が調査区外に伸びる可能性があるため、全容は不明だが、梁間二間×桁桁四間以上の建物である。平北側に一間の庇ないしは下屋が付設される。身舎寸法は梁間14.9尺(4,501mm)、桁行36.2尺(10,960mm)以上で身舎梁間中央には棟持柱の可能性を持つ柱を立てる(図18)。

高間 (1) SB18

SB18は東-西方向を棟方向とする梁間二間×桁桁三間の建物である。平南側に一間の庇ないしは下屋、妻東側と妻西側にそれぞれ一間の下屋が付設される。身舎寸法は梁間14.4尺(4,368mm)、桁行24.0尺(7,283mm)である(図18)。

高間 (1) SB19a, b

SB19a, bは南-北方向を棟方向とする梁間三間×桁桁五間の建物である。身舎寸法は梁間25.5尺(7,723mm)、桁行43.7尺(13,227mm)である。増改築された痕跡が残るため、これをSB19bとした(図

図-12
石江遺跡跡
で検出され
た遺柱柱頭
の断面と
特徴

19・20)。

高間(1)SB20

SB20は南-北方向を棟方向とする梁間二間×桁三間の建物である。ただし両妻中央には柱が立てられず、見かけ上の梁間間数は一間となる。平西側に一間の下屋が付設される。身舎寸法は梁間15.4尺(4,665mm)、桁行31.8尺(9,639mm)で身舎梁間中央には棟持柱の可能性を持つ柱を立てる(図21)。

高間(1)SB21

SB21は東-西方向を棟方向とする梁間二間×桁三間の建物である。身舎寸法は梁間13.0尺(3,931mm)、桁行25.7尺(7,772mm)で身舎梁間中央には棟持柱の可能性を持つ柱を立てる(図21)。

高間(1)SB22

SB22は東-西方向を棟方向とする梁間二間×桁三間の建物である。見かけ上の桁行間数は六間になるが、柱間寸法が狭く異例であることから、柱と床束が交互に配置された床組を持つ建物であると想定した。身舎寸法は梁間10.7尺(3,247mm)、桁行22.2尺(6,721mm)で身舎梁間中央には床束の可能性を持つ柱穴列が並ぶ(図22)。

高間(1)SB23

SB23は東-西方向を棟方向とする梁間二間×桁三間の建物である。平南面に一間の庇が付設される。見かけ上の桁行間数は六間になるが、柱間寸法が狭く異例であることから、柱と床束が交互に配置された床組を持つ建物であると想定した。身舎寸法は梁間10.4尺(3,158mm)、桁行22.1尺(6,700mm)で身舎内部には床束の可能性を持つ柱穴列が並ぶ(図22)。

3. 石江遺跡群検出の掘立柱建物跡

次に石江遺跡群検出の全掘立柱建物跡を類型化し、遺跡ごとの傾向を捉えたい。

分類基準は下記のとおりである。床があった可能性が高い建物跡については太字表記した。なお、梁間二間の総柱建物は基本的に床の無い建物に分類した。また、遺跡名のほかに、掘立柱建物跡の検出棟数、初出報告書、復元担当者名を併記した。

分類基準

I類 : 梁間一間の建物

II有有類: 梁間二間で側周りに棟持柱となる可能性のある柱を持ち、庇ないし下屋が付設される建物

II有無類: 梁間二間で側周りに棟持柱となる可能性のある柱を持ち、庇ないし下屋が付設されない建物

II無有類: 梁間二間で側周りに棟持柱となる可能性のある柱を持たず、庇ないし下屋が付設される建物

II無無類: 梁間二間で側周りに棟持柱となる可能性のある柱を持たず、庇ないし下屋が付設されない建物

III有有類: 梁間三間で側周りに棟持柱となる可能性のある柱を持ち、庇ないし下屋が付設される建物

III無有類: 梁間三間で側周りに棟持柱となる可能性のある柱を持たず、庇ないし下屋が付設される建物

III無無類: 梁間三間で側周りに棟持柱となる可能性のある柱を持たず、庇ないし下屋が付設されない建物

他、不明: 上記類型に当てはまらない建物
全容が不明な建物

【新田(1)遺跡】: 21棟(県2009) 高島

I類 : SB01, SB02, SB05, SB09, SB12, SB13, SB14, SB15, SB16, SB17

II有無類: SB06, SB07, SB10

II無有類: SB03

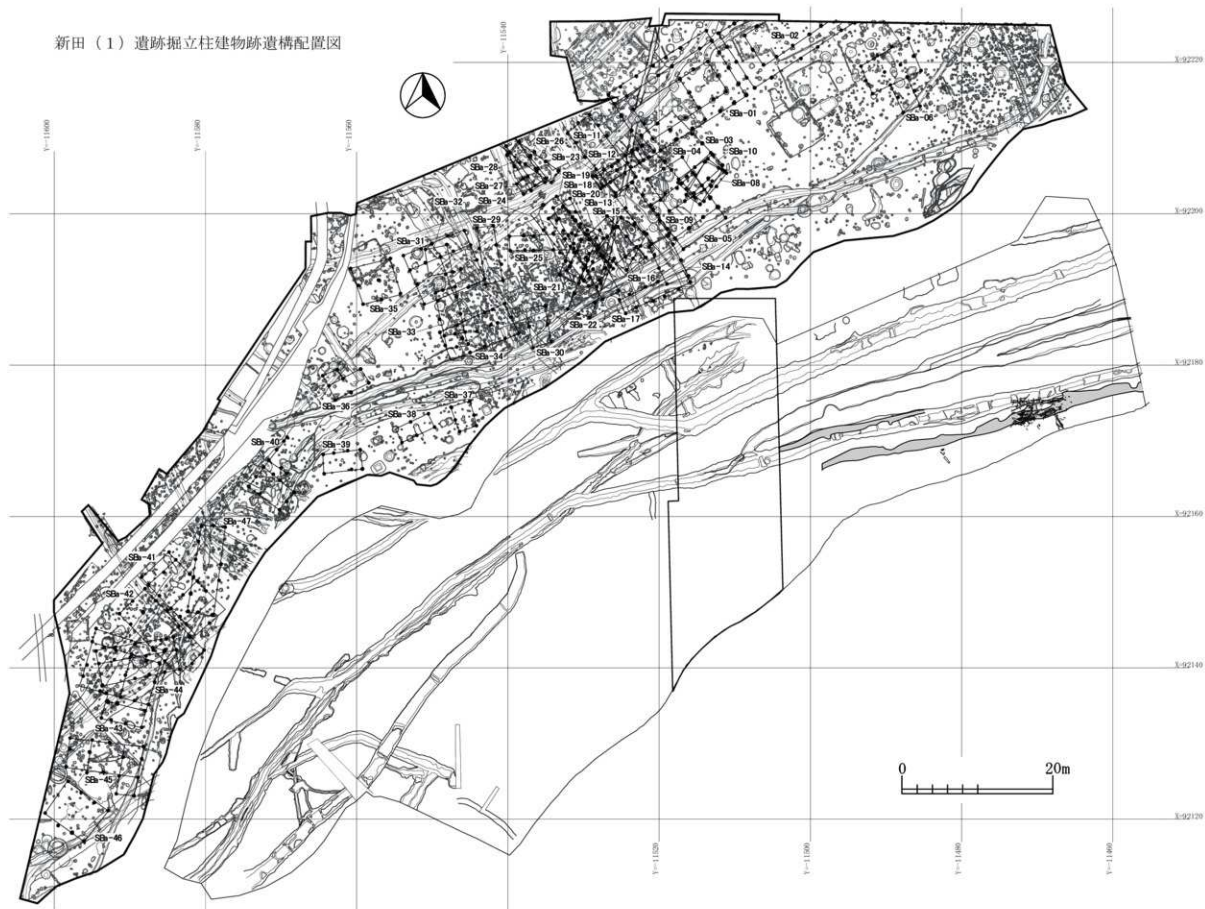
II無無類: SB04, SB08, SB11

他、不明: SB18, SB19, SB20a, b

傾向: Z区で17棟(SB01~17)、A区で2棟(SB18~19)、B区で1棟(SB20a, b)、G区で1棟の掘立柱建物跡が検出された。Z区で検出された17棟はいずれもI類ないしII類である。II類のものは桁行三間、I類のものは桁行二間が多勢を占め、例だけ桁行三間の建物のみみられる。II類の建物群は梁間寸法が4.5尺から6.0尺程度と小さめの寸法を用いるのに対し、I類の建物群の梁間寸法は一例を除き6.0尺から7.0尺と大きめの寸法を用いる。各建物間の規模は総じて小さく、建物間の明確なセット関係は見いだせない。庇や下屋を用い、内部空間を拡張しようとした建物が少ないことと併せ考えると、Z区検出の17棟が住居として用いられた可能性は低い。A・B・G区検出の5棟も同様に最大で梁間二間の小型建物で、建物規模、梁間寸法、庇や下屋による内部空間の拡充に対する意識などもZ区同様である。

間取りや間尺で帰属年代と特定しうる規模の建物は無いが、検出状況から考えると同遺跡検出の掘立柱建物帰属年代は中世として問題ないだろう。

新田（1）遺跡掘立柱建物跡遺構配置図



新田(2) 遺跡掘立柱建物跡遺構配置図

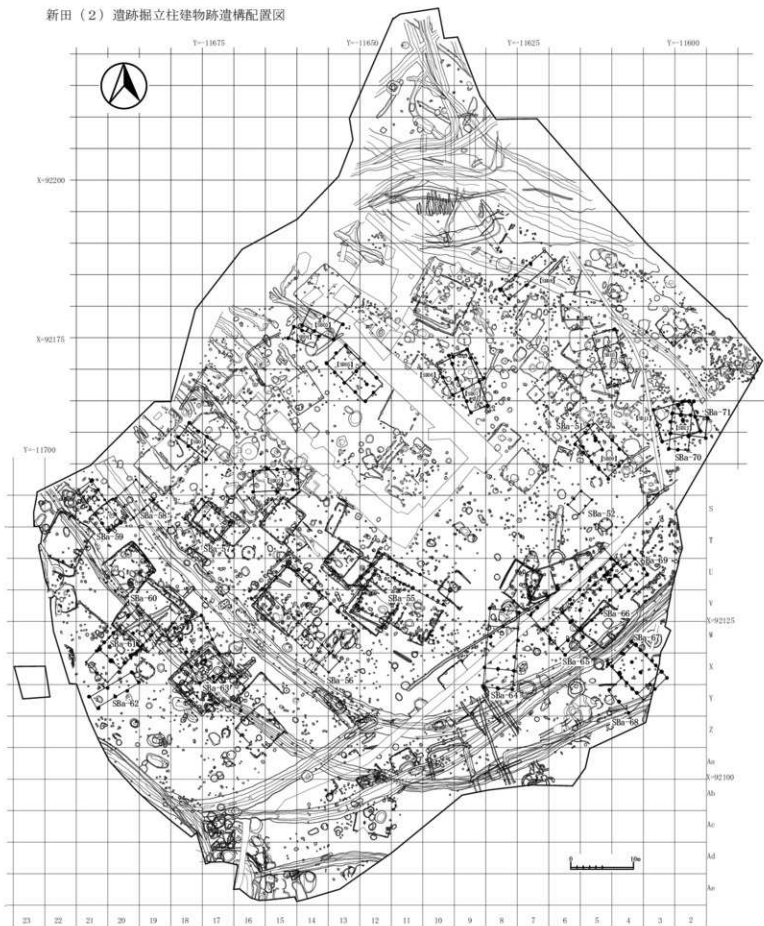


図 24

【新田(2)遺跡】:12棟(県2009)高島

I類 : SB01, SB02, SB03, SB04, SB07, SB08

II有無類: SB05, SB09, SB10, SB11

II無無類: SB06, SB12

傾向: 12棟の掘立柱建物跡が検出された。いずれもI類ないしII類の建物である。II類の建物は、桁行二間から四間の規模となる。梁間二間桁行二間となるSB06以外の全ての掘立柱建物で棟持柱の可能性を持つ柱が確認される。庇や下屋の付設による内部空間の拡大は行ってないが、梁間寸法に7.0尺から10.0尺程度の大きめの寸法を用いるなど、大型の内部空間を嗜好する傾向がみられる。この傾向はI類の建物においても同様で、一例を除き梁間寸法を7.5尺から11.0尺に設定するなどやはり大きめの寸法を用いる。建物間の明確なセット関係は見いだせないが、梁間寸法を長大化させようとする意識が明確なことをふまえると、同遺跡検出のII類の建物は庶民層が暮らした必要最低限クラスの住居であった可能性も考えられる。

間取りによる類推から帰属年代を特定しうる建物は無い。間尺もばらつきが多いが比較的7.0尺から8.0尺代の寸法が多用されるころ考えると、帰属年代の主体には中世中期から後期を想定するのが妥当だろう。

【新田(1)遺跡】:46棟(市2010)高島

I類 : SBa09, SBa10, SBa13, SBa14, SBa17,

SBa18, SBa20, SBa21, SBa23, SBa24,

SBa25, SBa26, SBa28, SBa29, SBa30,

SBa32, SBa36, SBa37, SBa38, SBa39,

SBa44

II有有類: SBa12, SBa31, SBa41, SBa43, SBa45

II有無類: SBa04, SBa19, SBa34, SBa35, SBa42,

II無有類: **SBa01**, **SBa02**, SBa03, SBa11, SBa40

II無無類: SBa08, SBa15, SBa16, SBa22, SBa33,

SBa46, SBa47

III無有類: SBa05

他、不明: **SBa06**, SBa27

傾向: 46棟の掘立柱建物跡が検出された。掘立柱建物跡の検出地域は、遺跡北半(SBa01~SBa35)と、遺跡南西端(SBa41~46)の二か所に集中する。それぞれの集中区で検出される掘立柱建物跡は異なる傾向を持つことから、ここでは二地区を分けて詳述を行う。

遺跡北半の建物集中区で目を引くのは高い精度で造られたII無有類の四面庇建物群(SBa01, 02)とI類(SBa09~15, 17, 18, 20~30)の建物群との明確なセット関係である。建物の規模と施工精度の対比などから考えると、II無有類の中型建物を主屋、I類の小型建物を付属屋とする土地利用の在り

方が想定できる。また、同集中区には、梁間寸法が5.0尺から6.5尺と小さめな寸法ではあるが希少なIII無有類に分類されるSBa05や、II有X類の建物の中で桁行三間以上の総柱建物になるSBa06, SBa19, SBa31, SBa34など、施工難易度は高くはないものの、石江遺跡群内の建物の中では類例の少ない建物が多く確認される。以上のことを合わせ考えると遺跡北半の建物集中区に建てられた建物群は、同遺跡内において特別な機能を果たしていた可能性が高い。

遺跡南西端に集中する6棟はI類のSBa44を除き全てが梁間寸法8.0尺以上の大きめの寸法を持つII有X類の建物跡に限定される。庇や下屋を持たないII有無類の建物もみられるが、いずれも内部に間仕切りを持ち、複数の室によって構成される建物があった可能性が高い。唯一I類の建物であるSBa44も梁間寸法は9.0尺と大きめであるうえ、庇を出し、内部空間の拡充を図っている。以上のことから考えると、遺跡南西端に集中する建物群の用途も住宅系の建築であった可能性が高い。ただし、前述の遺跡北半の主屋建物(SBa01, 02)との対比の中で考えると、遺跡南西端の建物群は規模で劣るうえ、主屋と付属屋というセット関係が確認されない。建物の格としては、遺跡北半の建物群の方が優越していたと考えて問題はないだろう。

なお、間取りと施工精度から考えると、床があると想定した四面庇建物(SBa01, 02)の帰属年代には中世前期を想定してよいだろう。これ以外の建物の帰属年代も中世から近世を主体とすると考えて大過ない。III類のSBa05は近世ないしは近代の建物と考えるべきだろうか。

【新田(2)遺跡】:19棟(市2010)高島

I類 : SBa51, SBa52, SBa55, SBa59, SBa62,

SBa65, SBa69, SBa71

II有無類: SBa57, SBa63, SBa64, SBa66, SBa67,

SBa70

II無有類: **SBa56**, SBa68

II無無類: SBa58, SBa60, SBa61

傾向: 19棟の掘立柱建物跡が検出された。検出される建物群は梁間寸法を7.0尺から10.0尺と大きめにとるII類の建物群と、梁間寸法を7.0尺から8.0尺と比較的大きめにとるI類の建物群に大別できる。II類の建物群の大半は複雑な間仕切りを持たず、間取りは単純である。なお、遺跡内最大の建物であるSBa56は建物南半の部分で細かい桁行寸法で柱穴が確認される。特異な柱配置をみせることから建物南半身舎中央の柱穴列は床束であり、同建物には部分的に床が存在したと想定したい。

なお、同遺跡検出の掘立柱建物跡は比較的建物の棟方向の規格性が低い。

間取りによる類推から帰属年代を特定しうる建物は無い。間尺もばらつきが多いが比較的7.0尺から8.0尺代の寸法が多用されるところ考えると、帰属年代の主体には中世を想定するのが妥当だろう。

【新城平岡（7）遺跡】：3棟（市2012）中村

他、不明：SBa01、SBa02、SBa03

傾向：3棟の掘立柱建物跡が確認された。いずれも建物の過半が調査区外に伸びる可能性が高く、全容は不明である。

【新城平岡（4）遺跡】：3棟（市2012）中村

I類：SBa02

II有無類：SBa05

III無有類：SBa01a、b

傾向：3棟の掘立柱建物跡が確認された。III無有類に分類したSBa01a、bは身舎が梁間三間桁行九間で、この東面及び西面にそれぞれ一間の下屋を有する住宅系の大型建物である。これとセット関係にある小型建物としてII有無類のSBa05を挙げることができる。建物規模と間取り、棟方向と隣棟間隔などから考えるとSBa01a、bが主屋、SBa05が付属屋という対応関係があったと想定して問題ないだろう。

なお、中村隼人（2012）において筆者は、高島成侑（2010）に依拠し、SBa01a、bが14世紀代の建物であると比定したがこれを改めたい。本稿執筆に際し、北東北の古代以降の遺跡で確認される掘立柱建物跡を再検証したが、III無有類の建物は、基本的にA、14世紀後半あたりから確認される主殿建築
B、本堂や本殿などの大型宗教建築
C、16世紀前半あたりから確認される民家建築
のいずれかと考えてよいのではないだろうか。

間取りによる類推と施工精度の程度をふまえ考えるならば、SBa01a、bの用途はC群の建物とすべきだろう。建築の知識を持つ工人が建てたA群ないしB群の建物は一見してそれとわかるほど施工精度が高いが、少なくともSBa01a、bはこの限りではない。建物の四割程度が調査区外に位置するため、詳細は掴みづらいが、桁行寸法とはいえ6.6尺という近世前半に多用された柱間寸法も確認される。以上の理由から、SBa01a、bはC群の建物であったと解釈を改めたい。

【高岡（1）遺跡F～G区】：1棟（市2013）中村

II有無類：SB001新・旧

傾向：1棟の掘立柱建物跡が確認された。詳細は不明である。

【高岡（1）遺跡A～E区】：21棟（本稿）中村

I類：SB07

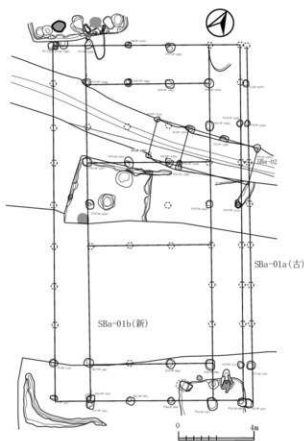


図25 新城平岡(4)遺跡SBa-01
青森市埋蔵文化財調査報告書第112集-P435
図1-371をS=1/200で再掲

II有無類：SB04、SB06、SB10a、b、c、SB11、SB12、SB14、SB15、SB17、SB20

II有無類：SB01、SB02、SB03、SB13、SB20、SB21

II無有類：SB08、SB16、SB18

II無無類：SB09

III有無類：SB05

他、不明：SB19a、b

傾向：21棟の掘立柱建物跡が確認された。II有無類に分類されるSB06、SB10a、b、c、SB15などは中型の住宅建築と考えて問題ないだろう。またこれに準ずる規模になるII X有無類のSB04、05、11、12、16、18も住宅建築と考えてよい。同遺跡は上記の建物を主屋、それ以外の建物を付属屋とする土地利用がなされていたと想定できる。

また、ここで上げたII類の建物では、身舎梁間の一方で梁間中央の柱が欠如し、見かけの間数が一間になる変則的な事例も複数確認される。同様の事例は中世前期以降散見されるが、石江遺跡群では殆ど確認されていない。同遺跡においてこの事例が集中して確認されるのは例外的である。

なお、SB05は石江遺跡群では類例の少ないIII類の建物だが、梁間寸法が5.5尺から6.5尺と比較的小さめであることと、棟持柱の可能性を持つ柱が複数本存在することを合わせ考えると、見かけの間数

図1-12
石江遺跡群
で検出され
た大型住宅
建物の構造
と特徴

が三間になるだけで、実質はⅡ有有類の建物と考えると問題ない。

間取りと間尺から考えると前述のⅡ類の住宅建築の帰属年代には中世中期から後期を想定して良いだろう。一方で、付属屋となる建物群では比較的小さめの寸法も多用されている。これらの建物の帰属年代は、中世中期から近世程度まで幅を広げて考えておきたい。

【高間(1)遺跡A～E区】:2棟(本稿)中村

Ⅱ無有類:SB23

Ⅲ無有類:SB22

傾向:2棟の掘立柱建物跡が確認された。検出されたSB22とSB23は、溝跡に圍繞される配置で検出され、ほぼ同位置に建てられる。ともに建物の施工精度が低く、床組を持つ建物であるなど類似性が高い。二棟は同一用途の建物跡が、ほぼ同位置に建て替えられた事例と考えてよい。間取りと間尺はともに類例のないもので掘立柱建物跡の持つ情報だけをもって、帰属年代や建物用途を特定することは難しい。周辺の遺構や遺物の様相から考えると、両建物の帰属年代には古代を想定するのがふさわしいだろう。

4. まとめ

ここでは各時代ごとに代表的な建物をあげ、それぞれの用途特定を行い、土地利用の実態について推論を行う。また、全時代を通じ津軽地方の周辺集落との比較を行い、建築文化においてどのような特異性を持ちえたかについて言及したい。

古代

特異な建物:高間(1)(市)SB22・SB23

石江遺跡群全体を通じ、明確に古代の掘立柱建物跡といえる遺構はない。ここで上げる高間(1)SB22・SB23も、周辺遺構の状況から帰属年代に古代を類推したに過ぎない。

古代の石江遺跡群においては集落を構成する建物の主体は堅穴建物である。掘立柱建物は副次的な存在にすぎず、棟数も少ない。

特異な建物にあげた高間(1)SB22・SB23は床を持つ建物である。北東北の平均的な古代集落において、稚拙とはいえ掘立柱建物ある事例は殆ど存在しない。建物の用途を断定することは困難だが、宗教建築など特殊な機能を想定するのが妥当だろう。建物施工精度は低く、建築の知識を持つ工人が建てた建物とは考え難い。床を持つ建物の存在を知る在地の民衆が自作した建物であろうか。

中世前期

代表的な建物:新田(1)(市)SbA01、SbA02

集落を構成する建物の主体が堅穴建物から掘立柱建物に移行していく転換期である。

代表的な建物にあげた新田遺跡(1)(市)SbA01、SbA02は、いわゆる四面庇の寝殿造風住宅建築である。正統寝殿造を模した建物で、あるいはここに在地支配層が生活し、対面儀礼が営まれたと考えることもできる。ただし、当然ながら新田(1)遺跡(市)SbA01、SbA02はあくまでも寝殿造「風」住宅であって、対屋や園地が伴う正統の寝殿造建物ではない。ここに富や権力が集中したとは想定しがたいが、中世前期の一時期に遺跡群全体の中で新田(1)遺跡(市)北半の地域が中心的な機能を持っていたことは間違いないだろう。

中世中期から後期

代表的な建物:高間(1)のⅡ有有類の建物

石江遺跡群検出の掘立柱建物の中で最も検出棟数が多い。

代表的な建物にあげた高間(1)遺跡のⅡ有有類の建物の中には、平面形状が四面庇になるものもある。しかしこれらの建物は、中世前期の建物と考えた新田(1)遺跡(市)SbA01、SbA02とは上屋構造が異なる。

新田(1)遺跡(市)の建物は、四方の庇の寸法がほぼ同じであるのに対し、高間(1)遺跡の建物は、妻と平で庇の出が異なる。この特徴から考えると、高間(1)遺跡のⅡ有有類の建物は実質的には平両面に庇を伸ばす二面庇建物で、これに下屋を加えていると考えるべきだろう。平面形それぞれは類似する事例ではあるが、上屋構造は異なる建物になると理解すべきである。

なお、いわゆる四面庇掘立柱建物は中世前期の支配層の住宅の典型である寝殿造の主殿を模したものである。中世中期になり、支配層の邸宅が寝殿造から書院造に移行するに合わせ、寝殿造風の四面庇掘立柱建物の検出も途絶える。そして北東北では大型の掘立柱建物の中にも九間と中門を持つ書院造風建物が出現するようになる。

つまり、中世中期以降の建築が想定される高間(1)遺跡のⅡ有有類の建物は、帰属年代的にも構造的にも支配層の住宅とはならない。建物の利用者は貴人を迎える儀礼空間は必要としない。その一方で、規模の大きい生活空間を求め、これを実現している。以上の背景から類推をするならば、利用者には富裕層が想定できる。

また、簡便ではあるが中世前期に支配層の住宅が存在したのに対し、中世中期以降はこれが存在しないことから考え、中世中期を画期とし、集落の在

り方になんらかの変化が起きた可能性も指摘できる。

なお、高間(1)とともに中世中期以降の掘立柱建物を多く持つ新田(1)・(2)遺跡(市)には、ⅡX有類の住宅建築が確認されない。近接し、同時代に存在した遺跡でありながら、新田(1)・(2)遺跡と高間(1)遺跡では、土地利用の在り方に相違点があったと推論して良いだろう。

近世

代表的な建物：新城平岡(4) Sba01a. b

前述したとおり、新城平岡(4) Sba01a. bは中世末期以降の建物と考えたい。梁間三間桁行五間以上で、平間に下屋が取りつき、内部が間仕切りによって三列以上に分節される建物は近世集落で多く確認される。青森県内ならば、八戸市新井田古館遺跡や田向遺跡など南部地方の近世在方集落で多く確認される。

なお、津軽地方では同じ青森市高田の朝日山(1)遺跡に次いで二列目の遺構となる。

周辺集落との比較

古代においては床を持つ建物が検出されており、建築知識において周辺遺跡よりも優越していたと考えられる。

中世前期段階の一時期においては、工人によって建築されたと考えられる特別な用途の建物が検出されており、建築知識だけではなく、それを実践できる人的環境も持ち合わせている。

一方、中世中期以降の建物は、青森県内の平均的な集落遺跡の様相を示す。Ⅱ類の建物が主体をなし、近世初頭にⅢ類の建物が出現する。内部空間の拡充を図る場合には、桁行間数を長大化させ、庇や下屋を付設させる。主屋と考えられる中型建物の小型建物を付設させるなど特異な点はない。

石江遺跡群検出の掘立柱建物の大半は、全時代を通じ、基本的には特別な建築知識を持たない在地の民衆が自作した平易な建物であったと考えてよい。そのほとんどが床を持たず、建物の内部は土間ないしは土座である。

また、小屋構造に言及するならば、Ⅱ類の建物の多くの変種が確認される。断定はできないが、サス組とオダチ組のいずれもが存在し、一定の割合で横持柱建物も存在していた可能性が高い。

謝辞：本稿をまとめるにあたり青森市教育委員会木村淳一氏、青森県埋蔵文化財調査センター田中珠美氏、葛城和徳氏、青森県庁小向良氏、釧路市教育委員会澤田恭平氏から多くのご意見をいただきました。

た。ここに記し謝意を表します。また、本遺跡群検出の掘立柱建物跡に向き合い、多くの論考を遺された高島成侑先生に本稿を捧げたい。

参考文献

- 秋田県教育委員会(1973)『秋田県の民家』秋田県文化財調査報告書第27集
- 青森県教育委員会(1974)『青森県の民家Ⅰ概要・南部』青森県民家緊急調査報告書
- 青森県教育委員会(1980)『青森県の民家Ⅱ津軽』青森県民家緊急調査報告書
- 青森県教育委員会(1993)『朝日山遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第152集
- 青森市教育委員会(2007)『石江遺跡群発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第94集
- 青森市教育委員会(2010)『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』青森市埋蔵文化財調査報告書第106集
- 青森市教育委員会(2011)『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』青森市埋蔵文化財調査報告書第107集
- 青森市教育委員会(2012)『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』青森市埋蔵文化財調査報告書第112集
- 青森市教育委員会(2013)『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅵ』青森市埋蔵文化財調査報告書第113集
- 小倉強(1972)『東北の民家増補版』相模書房
- 太田静六(1967)『寝殿造の研究』吉川弘文館
- 宮本長二郎(1999)『日本中世住宅の形成と発展』『建築史の空間-開口欣也先生退官記念論集』中央公論美術出版
- 佐々木浩一(2000)『青森県中・近世遺跡の長観-小沢館・境岡館・浜通遺跡・十三湊遺跡・種里城』『青森県史研究』第5号
- 高島成侑(2003)『青森県内中世掘立柱建物跡の建築構造』『海と考古学とロマン』市川金丸先生古稀記念献呈論文集
- 木村淳一(2010)『青森市石江遺跡群の特質』『古代末期の境界世界-城久遺跡群と石江遺跡群を中心として』法政大学国際日本学研究所
- 高島成侑(2010)『新田(1)遺跡および(2)遺跡の掘立柱建物跡』『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』青森市埋蔵文化財調査報告書第106集
- 中村隼人(2010)『同時代の礎石建物と掘立柱建物の比較-青森県内における近世住宅建築の実態-』『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』15号
- 八重樫忠信(2011)『東北地方の四面庇建物』(2011)『前九年・後三年合戦 11世紀の城と館』高志書院
- 中村隼人(2012)『新城平岡(4)遺跡のSba-01について』『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』青森市埋蔵文化財調査報告書第112集
- 中村隼人(2013)『青森市高間(1)遺跡の掘立柱建物跡について』『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅵ』青森市埋蔵文化財調査報告書第113集

第13節 古代相輪の諸相 —新田(1)遺跡出土の相輪状木製品—

山口 博之(山形県立博物館)

1 はじめに

石江遺跡群のひとつ新田(1)遺跡から、仏教に関係すると見られる特徴的な木製品が出土している(青森市教育委員会 2010)。この資料中に「塔身」として報告されている木製品(写真1・2・3)がある(木村 2010 など)。



(写真1)



(写真2)



(写真3)

特徴的な木製品であるがその性格はいまひとつはっきりしなかった。

小稿は、これを相輪状木製品、つまり古代に作成された木製の相輪に類する資料と評価し、類例を探りながら、不明確な部分があることを承知しつつ、その性格と使用について考えようとするものである。

最初に遺跡の評価について簡単に触れておきたい。ここ青森市周辺の津軽半島の陸奥湾沿岸は、中世には外ヶ浜あるいは半土浜と呼ばれ、能の演目の一つである『善知鳥』の舞台ともなった。奥州藤原氏との関係も深く、吾妻鏡文治5年9月17日条には「十七日甲戌。清衡已下三代造立堂舎事。源忠已講。心蓮大法師等注献之。親能朝宗覧之。二品忽催御信心。仍寺領悉以被寄附。可令募御祈禱云云。則被下一紙壁書。可押于円隆寺南大門云云。衆徒等拜見之。各全止住之志云云。其状曰。於平泉内寺領者。任先例所寄附也。堂塔縦雖為荒廢之地。至仏性灯油之勤者。地頭等不可致其妨者也。寺塔已下文注曰。(衆徒注申之。)一関山中尊寺事 寺塔四十余字。禪坊三百余字也。清衡管領六郡之最初草創之。先自白河関。至于外浜。廿余日行程也。其路一町別立笠

率都婆。其面図絵金色阿弥陀像。計当国」と見え、白河関から外ヶ浜の間、20日余の行程の道に一町ごとに笠塔婆を立てたことが記されている。

陸奥湾に近接する新田(1)遺跡は、新幹線新青森駅周辺の開発によって調査された、10世紀後半から11世紀前半を中心とする遺跡である。本州最北端に位置する青森県域では稀な資料が、多種かつ多量に出土して注目された。特徴的な、かついままでの調査では得られていなかった仏教関係資料(仏像の光背、仏手、持物、小像など)や施釉陶器、さらには文字資料を多種大量に含むなど、青森県を含む北奥地域の古代史像を塗り替える遺跡であると見られている。

次に新田(1)遺跡に触れた文献であるが、小稿に関連する先行研究として、新田(1)遺跡の地域的あるいは政治的位置づけについては、鈴木靖民(鈴木靖民 2004)、斉藤利夫(斉藤利夫 2006)、小口雅史(小口雅史 2010)、八重樫忠郎(八重樫忠郎 2012)などがあり、ついで『新青森市史』において位置づけが整理されている(青森市史編纂委員会 2010)。発掘調査についての基本的な整理としては、木村淳一(木村淳一 2008・同 2010)がある。さらに小稿にかかわる仏教関係資料については、須藤弘敏(須藤弘敏 2010a, 同 2010b)の整理と考察がある。

2 相輪状木製品の出土状況

相輪状木製品として小稿で取り上げる資料は、平成15年(2003)に出土したものであるが、その出土状態とその年代について、木村淳一の論考(木村 2010)と発掘調査報告書(青森市教育委員会 2010)、さらに須藤弘敏の論考(須藤 2010a)をもとに整理すればつぎのようにならう。なお、相輪とは塔婆の屋根の頂部に載る金属製の装飾であり、インドのストゥーパの土饅頭から宝傘までの形が変形したものといわれる。葉師寺東塔の相輪(図1)は有名である。



(図1)

(1) 出土位置

新田(1)遺跡は、標高4～5メートルの丘陵上とその周辺の沖積低地に営まれている。相輪状木製品は溝跡から出土している。調査区の北側にあたる丘陵上には堅穴住居跡、土坑、井戸跡、溝跡などを主体とする居住域が展開し、調査区の南側にあたる沖積地からはSD-01溝跡をはじめとする遺構が検出され、おびただしい量の木製品が出土した。注目する相輪状木製品は、第107集-1W-1-37A・C区のSD-08上(SD-01a)遺構から出土している。木村淳一によれば、溝跡からは「楡扇・木製祭祀具(斎串・馬形・鳥形・蛇形・刀形・鐮形・陽物)・仏教関連物(供養具・持物・火輪光背など)・男性神像・独楽・木簡・木筒状木製品・下駄・菰穂・鋤・堅杵・紡織具・編組製品・榎・杭・部材などの資料が出土し」、さらにその素材となった樹種は「在地で採取可能なアスナロがほとんどである。」という(木村2010)。

多種多量な木製品の素材は、搬入されたものではないということは、木製品の生産が在地で行われていたことを示す可能性が高い。この地域で仏教関連の木製品を生産できる体制が整っていたこと、さらにはそうした仏教関連の木製品がこの地では必要とされ、寺院などの遺構も行われていたであろうことを示している。

(2) 年代

つぎに資料の年代であるが、新田(1)遺跡の営まれた時期にかかわる絶対年代の算定が理化学的方法で行われている。SD-08上(SD-01a)とは異なるが、B4区SD-102の中層から出土した板材から算定した年輪年代は1021年の伐採年を示し、共存した他の板材の年輪年代も1017・1022年の伐採年を示す(木村2010)。年代観と共存遺物の相対年代の分析から「溝跡を中心に10世紀後半～11世紀代の土師器や須恵器、多量の木製品がみつかつて」いる遺跡と整理されている(青森市教育委員会2004)。

この年代観からすれば、注目する相輪状木製品は、日本の平安時代にあたる10世紀後半から11世紀にかけての資料ということになる。この時期中国に目を転じれば、北方では907年に契丹(遼)が樹立され、南方では937年に大理国が樹立され、中原では960年に北宋が樹立され、いずれも12世紀代まで存続(大理国は以降も)する。

(3) 出土した仏教関係遺物

須藤弘敏の整理によれば、出土した仏教関係遺物には、①鉄鏡、②仏手、③金剛杵状木製品、④未開敷蓮華状木製品、⑤水瓶形木製品、⑥火輪光断片、⑦神像甲、⑧神像乙、⑨塔身があり、塔身について「多宝塔などの上に乗る塔身のように思われるが、あま

りに素朴な造形であることとその単純な構造と風雨で磨耗してもいいため実際に塔に用いたものとも思われぬ。室内の法会儀礼に用いた可能性もあまり考えられず、その用途は「不明である。」と整理した。さらにこれらの造形は「現在知られる限り青森最古の仏教造形である」と位置づけられるという(須藤弘敏2010a)。単体で出土したのではなく、そのほかの仏教関係遺物とともに出土し、かつ青森最古の仏教造形であることは重要である。

3 相輪状木製品の特徴

須藤弘敏の先行研究では本資料を多宝塔などの上に乗る「塔身」と見ている。多宝塔は、五重塔などの多重塔とともに日本で作られた塔の形式としては古くからある。

塔は多くの場合(相輪塔などはあるが)塔身と相輪から成り立ち、五重塔などの多重塔の場合、軸部・組物・軒を最上重まで組み上げた塔身と、縦に独立してすえられる心柱の上に載せられる相輪からなる。小型多重塔では、法隆寺に伝わったことで有名な百万塔(写真4)を例にとれば、三重小塔は塔身と相輪の2つから構成され、一木で作った塔身内部に陀羅尼を納め、別の部材である相輪で蓋をするような構造となっている。こうした事例に習い、小稿では資料を塔身でなく相輪、つまり塔の上部を構成する構造物と見ておきたい。仮に相輪状木製品と呼んでおく。いうまでもないことだが、相輪は仏塔の象徴であり、下から露盤・伏鉢(覆鉢)・受花(請花・



(写真4)

受華)・九輪(宝輪)・水煙・竜車・宝珠そしてそれらを繋ぐ擦管からなる(図1)。なお、宮城県多賀城市高崎に多賀城廃寺は、古代国家の東北支配の拠点であった多賀城の付属寺院であるが、ここからは、相輪の各部品を繋ぐ擦管が発掘調査によって出土し注目を集めた(伊東信雄ほか1970)。なお、相輪塔あるいは輪塔と呼ばれる、相輪が塔身とは組み合わせず単独で樹立する事例もある。日光輪王寺のものなどが有名であり、金属製の円柱の上に相輪をとりつけ、中に法華経・大日経などの経巻を納めたものである。最澄が初めに延暦寺に建てたという。

次に相輪状木製品の形状と法量さらに材質について整理したい。

(1) 相輪状木製品の形状(写真1・2・3)

素材は木であり、在地で材料の取得が可能な樹種である、ヒノキ科の常緑高木アスナロを使用している。付け加えれば、仏教関係遺物のうち仏手のみ樹種はカツラであるという。

相輪状木製品は一本で作られ6つの部分からなると思っておきたい。実測図で図版上方を指している方を先端として、下から、仮にa、b、c、d、e、fと表記し特徴的な各部位を分けておく。実現した形状を説明すれば次のようになる。

- ① a: 方形に作られ横断面も方形を示す。
- ② b: 台形状に作られ厚みがあり横断面は方形を示す。
- ③ c: 鶏卵の形状を示し中央部は筒状に造られ上下は丸みが強く横断面は円形を示す。
- ④ d: 上面は平坦を意図し下面は樹状に作られ横断面は円形を示す。
- ⑤ e: 台形状をなし横断面は円形を示す。
- ⑥ f: 上下に引っ張られたような細長い宝珠状をなし横断面は円形を示す。

(2) 相輪状木製品の法量

各部位の法量を発掘調査報告書(青森市教育委員会2010)と、実現に際して計測した数値を示せば次のようになる。無論正確なものではないので、正確な数字は本報告書に拠られたい。なお、総高は約29cmである。

- ① a: 縦約3.2cm、横約3.2cm
- ② b: 縦約4.9cm、上端約5.1cm、下端約8.3cm
- ③ c: 縦約6.7cm、横約6cm
- ④ d: 縦約2.2cm、横約4.6cm
- ⑤ e: 縦約2.2cm、上端約3.6cm、下端約4.2cm
- ⑥ f: 縦約8cm、横約2.8cm

(3) 相輪状木製品の部位名称

以上(1)~(3)を考え合わせながら、a、b、c、d、e、

fの各部位について、一応次のように考えておきたい。a=差込のホソ、b=露盤?、c=伏鉢?、d=請花、e=竜車、f=宝珠。この他にc~dのつなぎの円柱部分は擦管と見ておきたい。e=竜車とd=請花の間には宝輪が何層か組み合わせられるのが普通であり、多くの場合九輪(八輪かの場合もあり)だが、本資料では省略されているとみておきたい。問題となるのはc=伏鉢とした鶏卵形の部分であるが、直接的な比較には慎重(用語も含めて)を期さなければならぬが、新田(1)遺跡とほぼ年代を同じくする、遼代中国山西省代県典興宮寺釈迦塔の覆鉢は鶏卵状の球体を示す(徐小英ほか2007)。こうした事例もあることを留意しておきたい。

このように説明を要する資料であり、類例は探り当てていないことをまづ断っておかなければならない。

4 相輪状木製品の類例

塔の上部を構成する相輪と見た場合、新田(1)遺跡の主体時期前後での比較資料としてつぎのようなものがある。管見のぼる限られた情報ではあるが、古代に仏塔の象徴である相輪が樹立されるものは、①多重塔・②多宝塔・③瓦塔・④経筒・⑤石塔・⑥泥等・⑦その他(仏像持物・碑・戒壇・塚など)を上げることができる。

概略を示せば、①多重塔の事例は白鳳期から存在し、②多宝塔は平安期から顕著になる。③瓦塔は、関東地方の事例を参考とすれば、8世紀末~9世紀中葉をピークとする(池田敏安2000)。瓦塔は多重塔を陶器で模したものであるから、塔制は多重塔と傾向を同じくしているもの、相輪は実際の木造の多重塔より大きく造られる傾向がある。④経筒は経塚の造営に伴う遺物となるから、当然平安時代後半にその中心があり、以降の時期に連続してゆく。⑤石塔は白鳳期に多重塔が出現し、奈良時代平安時代を通して展開する。平安時代末に五輪塔、鎌倉時代に入ると寶篋印塔、無縁塔などが出現し、さらには中世を代表する石造物である板碑が登場する。以降種類を増やしてゆく。⑥泥塔は少なくとも奈良時代には盛んに展開する。これまた相輪の部分が大きく造られる傾向がある。なお泥塔については後ほど詳しく述べたい。⑦その他であるが、仏像の持物として相輪状の製品が見られる。山川均によれば、法隆寺金堂多聞天の持物である方形の塔身上に立つ4本の相輪、同じく法隆寺夢殿救世観音青光背頂部に描かれる、多聞天持物と似た塔、さらに法隆寺の楯夫人厨子の扉絵に描かれた、菩薩がさきげ持つ塔がある(山川均2007)。これらの塔はいずれも方形の塔身をもち、上部に3~4本の相輪が立つものである。相輪の形状は、覆鉢の上に5~7枚の宝輪がかさなり、頂部に火輪宝珠と見られるものが、そ

の間に椽管で繋いである。さらに、奈良県長谷寺の国宝「銅板法華説法図」にも存在する。これは法華経見宝塔品にある、釈迦説法時に大塔が湧出したことを表した奈良時代の優品である。中央に六角三重の多重塔があり、塔の上には3本の相輪が立つ。中央の相輪は宝輪が9枚、左右の塔は宝輪が8枚である。水煙と龍車そのうえに宝珠を持つ構成となっている。この他に石造物にも古代に遡る相輪の事例がある（狭川真一氏教示）。こうした事例は中国に先行して存在する。河北省邯鄲市の鄲城の東に位置する「佛造像埋藏坑」から出土した「白石青屏像残片」（石造：東魏・北齊、5～6世紀）、また根津美術館所蔵の如來三尊像（石造：北魏、6世紀）にも、方形の塔身をもち上部に3～4本の相輪が立つ塔の隅刻がある。この他に、考古遺物として陶器製香炉の蓋につく揃みにも相輪状の表現が見られる。検討しようとする時期とは異なっているが、13世紀代の金風製の舍利容器などにも一部には相輪とおぼしきものがある。

以上のように古代には広く相輪状の装飾が行われていたことがわかる。とくに新田（1）遺跡の営まれた10～11世紀代にかけての事例も存在することを確認しておきたい。ただし、木製相輪の事例は、法隆寺百万塔などの事例を除いて判然としない。遺存例の多くは金風製または陶製であり、塔身の上層に加飾するように使われるのである。

さて、新田（1）遺跡の相輪状木製品を考えた場合、それが何に樹立する可能性があるのかを考えなくてはならない。多重塔や仏像の持物、小型宝塔などがまずその候補として考えられるが、これらの相輪状木製品が樹立するべき資料は、新田（1）遺跡の出土資料では明確ではない。次に、こうした資料に樹立する以外の形で使用された可能性を探ってみよう。

まず、先行事例とはなるが、奈良時代の岡山県熊山戒壇陶製相輪大阪府堺市大野寺の土塔（どとう）と奈良県奈良市の頭塔（ずとう）、さらには熊本県熊本市池辺寺百塚の事例を上げながら検討を加えてみたい。

5 岡山県熊山戒壇の陶製相輪とその類型

新田（1）遺跡に先行する、奈良時代の事例とはなるが、陶製の相輪が石積の基壇の上に樹立している事例について整理してみよう。

岡山県赤磐郡熊山町の熊山（標高500m）にある国指定史跡熊山戒壇は、方形3段の石積遺構である。ここから目を南に転じれば瀬戸内海を望むことができる眺望の地である。遺構は江戸時代から良く知られており、この遺構に関係して陶製の相輪が出土している。



（写真5）

石積遺構は熊山一帯に分布し全部で33箇所確認されているが、規模は異なり大きさや石積の段数などはさまざまである。報告書によれば、その所属時期は「須恵器や奈良時代後半の古瓦が出土している」という。もともと良知られている熊山神社境内1号石積（写真5）は、4段の石積みを持つ。1段目が略方形を呈し高さ0.8m各辺約11m、2段目は矩形を呈し高さ0.97m各辺が8～7.6m、3段目は矩形を呈し高さ1.2m各辺が5～5.4m、さらにその上に4段目が載り、破壊のため詳細が不明だが復元は方形に行なわれており、高さ1.25m、各辺は最も残りの良い東側で3.5mを呈している（熊山町教育委員会1974）。1層目は整地の意味合いもあつてか西側に発達するが、東側はもともと標高が高いためもあつてか発達していない。このため、東面は3段（写真6）、西面は4段（写真7）となる。

この3層目には、四方に龕が穿たれている（写真8）。さらに4層目の中央には盗掘のために掘られた2mほどの穴があり、もともと標高が高い石室を破壊しているという。この石室の中に三彩小壺を納めた陶器製の筒型容器が安置されていたと報告されている。

現在、熊山神社境内1号塚は積石塚本体には近寄れないようになっており、龕の構造や、頂部の石室の詳しい様相を知ることができない。しかしながら、このほかの遺構ではこれらの様相を観察できる遺構があり、南山崖3号（C3）を踏査することができた（写真9）。破壊が著しいものの、この遺構も基本的には3段の積石塚であり、2段目の四方に龕（写真10）を持つ。頂部には石室（写真11）がある。おそらく、一号石積にはこの石室と類する遺構が営まれていたと考えてよからう。なお、出宮徳尚によれば方形3段で中段に四方の龕を持つ石積遺構は熊山神社境内1号石積とこの遺構のみであるという（出宮徳尚2005）。

さて、樹立していた陶器製筒型容器であるが、3層の筒型と頂部の火焰宝珠からなる逸品であり、宝輪を欠くものの相輪と見ておきたい。この資料は現在、奈良県天理市天理大学参考館の所蔵となっている。

近江昌司はこの資料について詳細な考察を加え

新田（1）遺跡の相輪状木製品



(写真6)



(写真9)



(写真7)



(写真10)



(写真8)



(写真11)

ている。陶器製筒型容器(写真12)(図2)の構成部分のそれぞれの法量は、基底部9.8cm、第1円管40.5cm、第2円管41.0cm、第3円管37.0cm、蓋37.8cmであり、総高は161.0cmを示し巨大である。所属年代は、製作技法と窯資料との比較検討から8世紀後葉の奈良時代末葉に位置づけられている。また、この陶器製筒型容器が掘り出された当初には、内部に三彩小壺が納入されていたが亡失したという。さらに他遺跡の事例を参考としつつ、第1～第3の各円管接合部には宝輪が3枚かみ合わされ、石積の上に樹立(図3)していたであろうとする。(近江昌司1973)。陶器製筒型容器は石積の上に樹立していた相輪であると見たのである。まさに卓見である。

奈良時代後半という年代観は、新田(1)遺跡を遡るが、石積の基壇の上に、別の素材で作られた相輪が樹立する場合のあったことに注目しておきたい。

熊山戒壇に類似する積石塚は最近報告例が増えて

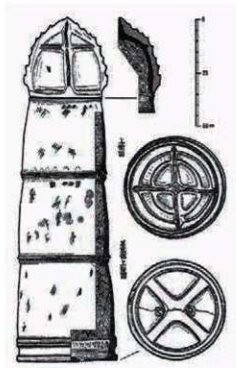
きている。義則敏彦氏のご教示によれば、兵庫県たつの市周辺でも発見されている。さらに国外にまでその分布は拡大するという。齊藤忠は韓国南部に所在する熊山戒壇遺跡に類似する遺跡について4遺跡を報告している(齊藤忠2002)。こうした類型がすべて同様な性格を持つのかどうかは今後の研究に俟つしかないが、さらなる広がりや国内外に確認されていることは留意しておく必要がある。さらに付け加えれば、坂井隆は東南アジアから中国・朝鮮半島までを通覧しながら、こうした石積み塚にも論及し、仏塔の伝播について考察を加えている(坂井隆2008)。東南アジアから中国・朝鮮半島に展開する仏塔の様相を理解する上では重要な視点となる。

こうした塚の類型としては、大阪府堺市大野寺の国指定史跡土塔(どとう)と奈良県奈良市の同じく国指定史跡頭塔(ずとう)の事例を忘れることはできない。土塔は瓦積み基壇の上に版築された、奈良

時代の十三重の土の塔（12層は平面方形、最上重13層は平面円形）であり各層は瓦葺である。最上重には八角形の建物が営まれていた。基壇は一辺が53.1m、高さが8.6m以上と古代の建築物としては巨大である（写真13）。行基ゆかりの大野寺の境内に築かれた（堺市埋蔵文化財センター2006）。最上重には、八角形の建物（写真14）が営まれていたという。復元からすれば、八角形の建物の上に相輪が樹立している（写真14）。



（写真12：近江1973）



（図2：近江1973）



（図3：近江1973）

次に、頭塔であるが、奈良市高畑町にある石積の塔（写真15）であり、一辺32m高さ約1.5mの方形基壇に方形の壇を7段積んでいる。各段に瓦屋根をかけ、各面奇数壇の石積に4体の石仏を配置している。最上重の第7壇上面には心柱の抜き取り痕がある。復元では建物は八角円堂に復元され（図4）、高く相輪が樹立されている（奈良国立文化財研究所2001）。相輪の様相を示している。

土塔、頭塔とも最上重には建屋があり、その上に相輪が樹立していることは、熊山戒壇の相輪樹立（図3）とは違っている。

しかしながら、類似する遺構が広く存在することは重要である。

初めは、大規模な多重基壇（土塔・頭塔）の上に遺物があり、その上に相輪が樹立していたものが建物と基壇規模が変化していく中で、相輪が直接基壇上に樹立（熊山遺跡）するのかも知れない。



（写真13）



（写真14）

さらに、熊山戒壇で出土した資料と類似する陶器製の相輪の類例も追加されている。岐阜県美濃国分寺跡では、相輪状の瓦製の相輪状製品が出土している。法量は基底部の径が14.1cm、高さが22.9cmで



(写真15)



(図4：奈良国立文化財研究所 2001)

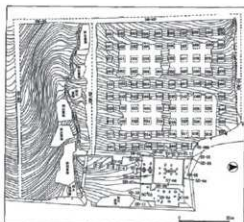
あり、「下部6層までが塔屋で、上部4層が相輪を表現する」土製百万塔と報告されている。さらに興味深いことに、伏鉢と考えられる大型の陶器製資料が存在することである。下端の直径50cm、高さ18cmで、厚さが2.5cmほどであり上部に直径10cmほどの円形開口部があり擦管がさしこまれたのではないかという(大垣市教育委員会2005)。土製百万塔と報告されている資料は、小規模な基壇の上に樹立される相輪とみることではできないだろうか。伏鉢と考えられる陶器製資料が存在することは、陶器製の相輪と伏鉢の組み合わせで、塔や基壇上に樹立していた資料も広く存在していた可能性を考えることもできる。

以上からすれば、相輪が必ずしも仏像や多重塔などの建造物、さらには金属製品などにのみ樹立されるのではなく、石積の塔に直接樹立されることがあり、その素材には陶製などのバリエーションがあることがわかる。

さらに類例を追加したい。

熊本県熊本市池辺寺跡の事例では、平安時代の石積の小規模なマウンドに石製の相輪が樹立されている。相輪が直接、基壇上に樹立している事例がある。しかも小規模となり、数も増加している。石積み群は基壇部との境界に南北に築かれた石垣の西側斜面に広がり、東西45.6m、南北45.6mの正方形区画の中に規則性を持って配置されている(図5)。斜面部の標高は石垣の上部で129m、斜面部西端で141m前後を測り、比高差約12mを示す。東西55m、南北55m、面積3,025㎡の緩斜面にある。石積み群の配置は、1区画2.4m四方の正方形を東西南北それぞ

れ19区画、計361区画基盤目状に設け、区画の中に交互に造られている。石積み群は東北隅の一部を欠失するが、東西10基、南北10基、計100基が整然と配置されていたと考えられている(熊本市教育委員会1990)。



(図5) 熊本市教育委員会1990



(図5：熊本市教育委員会1990)

軽石質の相輪状石製品(写真16・17・18)は、百塚遺跡C地点の西側斜面部から出土したものである。本来、石積み遺構を構成していたものが崩落したとみられる緩斜面中に混在した状態で検出され、石積み遺構の頂部に石製品が乗っており、それが崩落したと考えることができるという。こうしたことから想定図では、石積の塚の上に露盤を据えその上に石製相輪が樹立している状態が復元されている(写真19、図6)。別に作った相輪を、基壇の上に樹立している。

大きな流れとしては、当初は多重基壇上に営まれた堂宇に相輪が樹立されていたものが、多重基壇と堂宇が省略化され、低層の多重基壇に直接相輪が樹



(写真16)



(写真17)



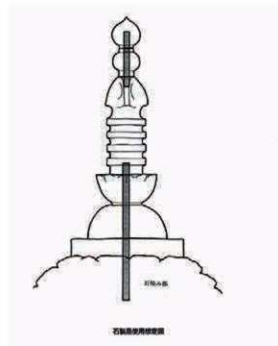
(写真18)

立され、さらには小規模な基壇に直接相輪が樹立される、というように時期を追って変化(省略化)するのかも知れない。また、小規模な基壇が多数作られることの後には、10世紀の奥越王である銭弘椒が営んだ八万四千塔や、泥塔に見られる多作善根の考えがあるのかも知れない。なお、この見通しについては、国外の事例も含めて考えなくてはならないのだが、今後の課題としたい。新田(1)遺跡出土相輪状木製品は単独出土ではあるが、こうした事例に連なる資料とみることはできないであろうか。

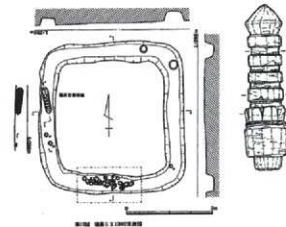
実は11世紀代にも相輪が単独で遺構に伴いながら出土している事例がある。やや様相は異なるが、京都府向日市西陣町遺跡では、11世紀後半の方形周溝状遺構の周溝中から石製の相輪が単独で出土している(図7)(木村泰彦ほか1985)。この遺構は火葬した場所をそのまま墓所とした火葬塚の事例として重要であり、当時の上級貴族から王家の葬法を示すものであるという(狭川真一2011)。西陣町遺跡の遺構については、周囲の柱穴との関連性も含



(写真19)



(図6:熊本県教育委員会1990)



(図7:木村1985)

めて想定復元が行われており、方形周溝の内部に塚が築かれその上に宝塔が立ち、その上に石製の相輪が樹立する形となっている。つまり出土した相輪は宝塔の部品ということになる。この復元案は当然妥当性をもつものであるが、塚のうえに直接相輪だけが樹立する場合も想定できるという(狭川真一氏教

示)。

さらに、藤澤典彦は「平安時代末の真言系の『葬法密』に「掘地作墓、土塔之形也、土塔之上立率都婆……」と記すように、土蓋は塔と認識されていた。土塔と言うとき、イメージされていたのは堺市・家原寺(※筆者注：大野寺)土塔や奈良市・頭塔などであろう。」という(藤澤典彦 2012)。盛り上げたマウンドの土盛り自体が塔と見られていたことがあることがわかる。塚の上に直接石製の相輪が樹立していた可能性があらう。むしろインドを中心とするスツーパーなどの事例では、マウンドの上に相輪のもととなった傘蓋が樹立するのである。こうした知見は泥塔作成にかかわる経典によって知られていた可能性があるのでなかろうか。

次に、塚の上に直接石製の相輪が樹立する背景について、多賀城廃寺でも多数出土した、泥塔の存在とのかかわりから考えてみたい。

6 泥塔と相輪

泥塔は、泥土を型に入れて製した小塔であり一度に多数が製造され供養される。その形状は五輪・多宝・三重などがあり、すでに奈良時代に存在する。平安時代から鎌倉時代にかけては五輪塔の泥塔も造られる。畑大介の整理によれば、泥塔は東北から九州の全国90ヶ所ほどで発見され分布の中心は近畿にある。発見地点は国分寺をはじめとする寺院跡が多く、発見基数は万近くにおよぶものから1、2基に至るまでさまざまである(畑大介 1997)。宮城県多賀城廃寺跡の調査では、破片からぞえて2、694個にのぼる泥塔が発見されている。1遺跡からこのように多数の泥塔が出土した例は全国的にもないという。出土した場所とその数は、講堂跡2、683個、僧房跡2個、金堂跡6個、南大門跡1個、塔跡2個の計2、694個であり、講堂跡からの出土が多い。講堂跡から出土した土塔は宝塔形であり、ほとんど全部が型造りで、縦割りの2枚の型に粘土をはさんでつくったもので、型から出した後に、塔身のところを指の腹でおさえ、屋根のところを指先でつまんで形を整えている。長さ7.0cm～8.5cmの資料が多い(伊東信雄ほか 1970)。

泥塔供養は厳密な「泥塔供養作法」によって進められた。木下密運によれば、「泥塔供作法は『仏説造塔延命功德経』(大正藏經、經部二、第1026)にもとづいて、密教の阿闍梨が次第を作成したもので、流派によって作法の細部にちがいをみるが、大要は異なるものではない」という(木下密運 1971)。さらに木下はその手順について詳述している。「第1に、妙華をとって陀羅尼で加持し壇上に散布する。第2に挺植(ねばつち)で泥団を作るとき阿字観(あじかん)をなす。このとき陀羅尼で21遍加持する。

第3に、泥をこねるとき安頰(そは)字観をなす。泥を水晶、顔紅迦室(はり、顔紫)のように観ずる。第4に、赤土を塗るとき火色観をなす。乾いた赤土をまべんなく塗り、含字(かみじ)観をなす。泥がとけた金の色に見える。第5に陀羅尼で加持して泥団を模(かた)に入れる。第6に、法身真言(ほっしんしんごん、法身偈)の梵文。仏像・塔等を作るときこれを収む)を入れるとき、陀羅尼で加持してから印子(模)に入れる。第7に、塔の模を推打する。第8に、打ちおわって、手で塔階を作る。第9に、塔を模より出す。第10に塔を模より出して安置する。第11に、塔を安置しおわって、手で塔頂を整える(按ずる)。第12に、塔頂に傘蓋を置く。かくして塔を造りおえるのであるが、それぞれの所作をしながら経に説くそれぞれの陀羅尼を唱えるのである。この経にいう塔の形は、インド等に多く見かけられる頭の丸い、塔上に傘蓋のあるスツーパーのことである。」また、この経典は空海の30条策子中にも見られることから、早くから日本の密教家には知られていたという(木下密運 1984)。注目すべきは、泥塔は本来インドのサンチーなどの仏塔(写真20)の形を模しているものであるとすることである。木下の示した泥塔資料には、京都大学所蔵の「京都府法勝寺泥塔」(図8)があり、これはインドのサンチーなどの仏塔とおなじ円形の土饅頭形を呈している。『仏説造塔延命功德経』に説く、本来の形をとどめている資料と見ることができようか。そしてこうしたものの上に相輪が樹立するのである。また、空海の活躍時期から見れば、8世紀末～9世紀には『仏説造塔延命功德経』は知られていたことになる。



京都府法勝寺泥塔(京都大学蔵)

(図8: 木下 1984)



(写真20)

7 まとめにかえて

平成15年(2003)に出土した新田(1)遺跡出土の木製品について、これを10世紀後半～11世紀代の木製相輪に類する資料と考え、その性格と使用について考えてきた。

日本古代に仏塔の象徴である相輪が樹立される資料には、相輪塔あるいは輪塔と呼ばれる、相輪が塔身とは組み合わせず単独で樹立する事例を除けば、①多重塔・②多宝塔・③瓦塔・④経筒・⑤石塔・⑥泥等・⑦その他(仏像持物・碑・戒壇・塚など)を上げることができる。このように日本古代には広く相輪状の装飾が行われていたことがまずわかる。

しかしながら新田(1)遺跡の相輪状木製品を考えた場合、多重塔や仏像の持物、小型宝塔などがその候補として考えられるが、何に樹立する可能性が高いのかはいまひとつはっきりしなかった。相輪は塔身上に樹立する場合がほとんどであるが、考古学資料からすれば、石積みや土積みの基壇の上に相輪が樹立する場合のあることがわかってきている。

そこで、奈良時代の岡山県熊山戒壇陶製相輪、さらには熊本県熊本市池辺寺百塚の事例などを検討し、相輪が必ずしも仏像や多重塔などの建造物、さらには金属製品などにのみ樹立されるのではなく、石積あるいは土積の塔にも営まれることがあることを示した。

新田(1)遺跡の相輪状木製品を考えた場合、このように別に作った相輪を、基壇の上に樹立する場合のあった事例に注目したい。こうした背景には、8世紀末～9世紀には知られていた『仏説造塔延命功德経』により作成される泥塔の存在も重要であろう。泥塔出土分布の中心は近畿にあるものの、東北から九州の全国各地で発見されている。

さらに、11世紀代にも相輪が単独で遺構に伴いながら出土している事例がある。やや様相は異なるが、京都府向日市西陣町遺跡では、11世紀後半の方形周溝状遺構の周溝中から石製の相輪が単独で出土しているのである。

新田(1)遺跡の相輪状木製品が何に樹立するのかを明確には示しえないが、石積みや土積みの基壇の上に相輪が樹立する場合のあることからすれば、<屋内外の>小規模な石組みや塚状の高まりの上に樹立していた可能性を考えることもできよう。こうした様相は従来の考古学研究ではほとんど触れられてこなかったことであった。

文献:

伊東信雄ほか1970『多賀城跡調査報告1—多賀城跡寺跡—』
近江昌司1973『備前熊山仏教遺跡考』『天理大学報』第八十

五編

- 木下密運1971『泥塔供作法について』『六波羅室寺民俗資料緊急調査報告書』第1分冊
熊山町教育委員会1974『熊山遺跡』
木下密運1984『小塔』『新版仏教考古学講座』第3巻
木村泰彦1985『長岡京跡右京第130次』『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集
熊本市教育委員会1990『池辺寺跡1—百塚遺跡C地点・堂床遺跡発掘調査報告書—』
畑大介1997『玉里村立史料館の泥塔について』『玉里村立史料館報』第8号
池田敏宏2000『瓦塔』『古代仏教系遺物集成・関東』
奈良国立文化財研究所2001『史跡須賀野遺跡調査報告』『奈良国立文化財研究所学報』第62冊
斎藤忠2002『仏塔の研究』
鈴木靖民2004『平安後期・北奥の祭祀・交易・経営拠点と交流—青森市新田(1)遺跡の歴史の意義—』『東アジアの古代文化』121号
青森市教育委員会2004『石江遺跡群発掘調査概報 新田(1)高岡(1)遺跡』『青森市埋蔵文化財調査報告書』第81号
出宮徳尚2005『熊山南山崖石積遺構—その実測調査報告—』『吉備地方文化研究』第15号
大田市教育委員会2005『史跡 美濃国分寺跡』
堺市埋蔵文化財センター2006『土積土塔』
斎藤利夫2006『安倍・清原・平泉藤原氏の時代と北奥世界の変貌』『十和田湖が語る古代北奥の謎』
徐小英ほか2007『中国古塔造型』
山川均2007『石造寶篋印塔の日本への将来について』『中日石造物の技術的交流に関する基礎的研究』
坂井隆2008『古代における仏塔の伝播—ボロボドゥールと奈良須賀野の関係について—』『日本考古学』25号
木村淳一2008『日本海城における古代の祭祀—木製祭祀具を中心として—』『石川県文化財情報』19号
青森市史編纂委員会2010『新青森市史—原始・古代・中世編—』通史編 第1巻
木村淳一2010『青森市石江遺跡群の特質』『古代末期の境界世界—城久遺跡群と石江遺跡群を中心として—』
青森市教育委員会2010『石江遺跡群発掘調査報告書III』『青森市文化財調査報告書』第107集—1
小口雅史2010『古代末期の北方世界』『古代末期の境界世界』
須藤弘敏2010a『新田(1)遺跡の仏教関係物について』『古代末期の境界世界—城久遺跡群と石江遺跡群を中心として—』
須藤弘敏2010b『第1節 古代の造形』『青森県史 文化財編 美術工芸』
狭川真一2011『中世墓の考古学』
八重樫忠郎2012『考古学からみた北の中世の黎明』『北から生まれた中世日本』
藤澤典彦2012『墓上の石塔』『中世石塔の考古学』

<中文概要>

本文の考察対象は2003年青森市(日本北部青森県の县庁所在地)新田(1)遺迹出土の木制品。我们认为,这是与10世纪后半期至11世纪的木制相轮相类似的,其性质与使用方法做如下陈述。

众所周之,相轮是佛塔的象征。在日本古代(6世纪末至12世纪末)有关相轮建立的资料中,有①多重塔(照片4)·②多宝塔·③瓦塔·④经筒·⑤石塔·⑥泥塔·⑦其他(佛像所持品·砖·戒坛·冢等等)。此外,作为特例,有时也被称为“相轮塔”或“轮塔”。相轮和塔身并没有组合在一起,而是作为独立的个体。由此,我们首先应该了解日本古代常见的相轮状的装饰。

一般而言,相轮建在塔身的顶端。(图1)。对新田(1)遗迹的中相轮状的木制品(照片1·2·3,约30厘米)来说,认为它是多重塔或佛像的所持品、小型宝塔等建造时的候补。但是现在还不能明确判定。据考古学资料来看,也有可能是在石、土为基壇之上而建造了相轮。

因此,对奈良时代的冈山县熊山戒坛陶制相轮(照片5·12,图2·3),还有熊本县熊本市池边寺百家(照片16·17·18,图6)等事例进行研究。通过研究,我们发现:相轮并不仅仅局限于是佛像·多重塔等的建造物,更不拘泥于用金属制品建造,在以石积或土积建造的塔里也会应用,其材质是陶制、石制等。作为考古资料,陶制品和石制品比较容易遗留,但木制品的遗留品很罕见。因此,也应该考察木制相轮的存在。

在考察新田(1)遗迹的相轮状木制品的时候,我们做以下假设:在积累石头、土的基础上树立木制相轮。在这样的背景下,依据8世纪末~9世纪著名的《佛说造塔延命功德经》一书所建造的泥塔的存在也是很重要的。虽然泥塔出土分布的中心区域是近畿地区,但从东北至九州的全各地都发现了泥塔。即,从熊本县、冈山县,甚至是青森县等边远地区所发生的相轮树立事例的背景来看,泥塔供养风习的广泛展开应该为其奠定了基础。此外,日本古代将土制或石制的冢视为塔。

还有,11世纪也有造构中单独出土相轮的例子。在京都府向日市西阵町遗迹(图7)中,11世纪后叶的方形周沟状造构的周沟中单独出土了石制相轮。这所造构被视为火葬冢,是在火葬场上所建“冢”的一种。通过当时的绘画资料来看,这个冢是土积而成。冢上建造的相轮后来掉落于周沟之内,随着时代变迁冢的土被渐渐剥离。

现在还无法明确地知道新田(1)遗迹的相轮状木制品是建立在什么基础之上的。不过,通过石积、土积的基壇之上建造相轮的例子来考察,可以推断:也有可能是在小规模的石积、土积的基壇之上建造而成的。这些形式也是以往考古学研究中几乎没有涉及过的。

- (二〇五)五、斉藤二〇〇七(一)他、例えば同遺跡についての正式報告書で、林ノ前遺跡出土の土器の年代観に於いて「二〇世紀中葉のある段階に出現し、一〇世紀後半以後のおよそ二〇〇年に満たない短い期間の中で展開する」(『林ノ前遺跡』I)『八戸市内遺跡発掘調査報告書』21、八戸市教育委員会、二〇〇五とあるように、年代的に問題がある(小口二〇〇六)。
- (21) そこで、若手集の土里離れた山間の子飼沢遺跡と葛坪遺跡のよな、防御性集落の一つのバリエーションと考えられてきた、高地性集落期遺跡についても否定され、そうしたものは本地師や狩猟生活に関わるか、あるいは季節的な集落であると思われる。
- (22) 現実問題として、八木自身が認めているように、開郭施設とその内部の堅欠住居の同時性を証明することは一般に難しい。このことは筆者も防御性集落論初期の段階で触れていた(小口一九九五)。
- (23) なお新田(一)(二)遺跡の講について防御性集落と認める説もある(金藤二〇一〇)。
- (24) 『十三盛遺跡—一般国道一〇号五所川原西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第三三集、五所川原市教育委員会、二〇一三。また秋田県埋蔵文化財センター平成二十四年度企画展「講換金十座談会」『谷地遺跡の権威展』講演録における・藤原弘明の発言(黒崎他二〇一三)。ただし、当該遺跡は青森県教育委員会による発掘部分があるが、その県教委側の報告書では、規格性の高い集落の外縁を大きく区画する土境の存在という指摘にとどまっている(鶴城二〇一〇)、『十三盛遺跡—一般国道一〇号五所川原西バイパス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書第五二六集、青森県教育委員会、二〇一三。
- (25) この点、なおその遺跡が官衙的かどうか論争が続いている喜界島の城久遺跡群とは様相が異なる。
- (26) もっともこの自体は、三浦・斉藤らも指摘している。明言はされていないが、あるいは在地産の素材で中央的な祭祀が行われていることと、その浸透かりを示すと解するという点であろうか。
- (27) 八重樫は、こうした祭祀具を作成する技術自体は城隍などから工人(陰陽師や仏師など)が移動して持ち込んだとしつつ、そこに中央から影響を受けた土器がないことから、八木と同じく在地側が意図的に宗教的なもののみを導入したとする。なお小嶋秀孝は、石江遺跡群において、石川黒の小島西遺跡と同様、海に面して大量の畜車を並べた境界祭祀を想定したが、小嶋二〇一〇、石江遺跡群は、当時でも河口からある程度離れた立地である(南北の境界領域の比較—討論のまとめ)『クライナー他二〇一〇』。
- (28) 小嶋は当初、渤海における境界祭祀をふまえて、石江遺跡群の背後には日本の王権の論理があるとしていたが、後に、境界祭祀の背後にあるものは東夷の論理である可能性の方が高いと立場を変えている(『おわりに』小嶋二〇一〇参照)。ただし「境界祭祀」についてはなお検討すべき余地がある。
- (29) 『石江遺跡群発掘調査報告書』東北新幹線建設事業に伴う発掘調査』青森市埋蔵文化財調査報告書第九四集、青森市教育委員会、二〇〇七。
- (30) 鈴木清二〇一〇(四)も、この論文の段階では新田(一)遺跡については、繪羽を含めて祭祀的色彩の強さを指摘していた(現在は三浦・斉藤説とほぼ同じものと思われる。鈴木清二〇一〇参照)。なお当該地域のこの時代の祭祀については、他に新井二〇〇六が詳細な検討行っていて首肯すべき点が多いが、やはり「日本国」との関係にやや比重を置きすぎているように思われる。
- (31) 宇部二〇一〇の段階では石上神社遺跡・水本館遺跡・久米川遺跡・稲村遺跡など、このうら稲村遺跡は、十三盛遺跡の発見によって、それに統合された。
- (32) 十三盛遺跡については、報告書において「一般的に集落である可能性が高いと考えられる」とされている(『十三盛遺跡』五所川原市教育委員会(註二四)前掲)。
- (33) 村井二〇一〇が、石江遺跡群も城久遺跡群も、開港実業遺跡とともに、古代末期で途絶する(二)に注目しているが、発掘調査が進んだ結果、石江遺跡は中世まで長く存続することが明らかになっている。

- (4) 『青森県史』資料「古代1文献史料(前掲註(1))」の第1部6号を参照。以下同。
- (5) 鈴木三浦二〇〇五は、米について「律令国家の戦車管理下に置かれているものであり、この段階では、交易品の主体になったものとは考えたい」とする。もともとおおらく渡道したとは、律令国家の外にある津軽地方の米であろう。北海道と交易の本州側の主体が律令国家なのかという点も、検討が必要である。この問題については後にはやや詳しく触れる。
- また三浦二〇〇六aは、塩について、地元での大量消費を想定しつつも、未発見の製塩遺跡がなお数倍は存在するとの前提から、北海道へかなりの量が送られたことを推定している。
- (6) ただし天野一九九九のように、アイヌ期における鉄の流通量のほうがはるかに多いことを重視して、一〇世紀以後の鉄の分布拡大を過大評価しない見解もある。
- (7) 今後、阿倍比羅夫が北方にもたらした七世紀の時代の鉄器についての分析にも期待したい。
- (8) この他、一〇世紀の諸史料に見える稲妻(例えば『御堂四日記』長和四年七月十五日条(『青』II-10))をサハリン産のクローンとみる有力な見解もある(養島二〇〇五)。また文献資料に類出する「黒檜羽」について、それをマツタロウの羽とみる説も現れた(養島二〇一七)。また「黒檜羽」を「サハリン産ワシタテ」類の羽とする説もある(藤川二〇二二)。
- (9) 『青森県史資料編1(補遺)(前掲註(1))』を参照。
- (10) 小口二〇〇〇他、例えば奥尻島で出土する辨文文化期の自然遺物としてはアシカがもっとも多い(藤田二〇〇五、沢田日本史料「延喜式」中(虎尾俊哉編)集英社、二〇〇七)でもニホンアシカとしている。ただし藤田二〇〇三は、古代において重視された毛皮には模様があるとし、ニホンアシカには模様がないこと、また日本各地に生息していたことから、ニホンアシカではない可能性が高いとする。
- (11) 後世の史料ではあるが『和訓栞』ではアザラシをもと、蝦夷語であるとしている。
- (12) 動物項については前田本・黒川本で異同はない。動物項では両者に微妙な違いがあり、検討を要する。
- (13) 「水野」は「和名類聚抄」や「新撰式」などには見えないものの、古記録・物語類においては一世紀代までの「小右記」「陸奥話記」などには見えず、「二世紀代の『古記』(『青』II-109)や、さらに時代が降る『奥州後三年記』(『あさら』)とある。『青』II-102)などになつてから現れるもの気になるところである。
- (14) ただし中央政府が受領官の現地での政策に介入しないという「王朝国家」期一般の在り

方から、阿倍比羅夫の北方遠征などの場合とは異なり、中央政府側に記録が残らないうち文献史上困難な問題がある。

(15) その場合でも、いわゆる「王朝国家」の主体性と、受領層の主体性と、どちらを重視するのかという問題は残る。

- (16) どのレベルの札幌を基本とみるべきかで議論がある。詳しくは小口二〇〇六、三浦二〇〇五、青藤二〇〇七他参照。小口二〇〇〇では受領官の管政に重点を置いたが、それは青藤一九九六説の対「日本国」という表現に異論を唱えるために強調したもので、その後の一連の青藤の論考からすると、青藤説の真意はむしろ安倍・清原氏の現地で圧政による緊張に重点が置かれていることが明らかである(ただし本文でも触れたように、新田(1)遺跡を「王朝国家」の出現とみる点ではやはり「日本国」の影響については今なお重要視しているものと思われる)。また三浦二〇〇五安倍・清原氏の対立を述べるが、青藤説との違いとして、樋口一九九七を引用しながら、国府という、在地集落との関係は良好であるから、青藤のいうような受領官の代理としての安倍・清原氏との対立ではないという点を強調する。ただしこれは樋口説の誤読ではないか。私見では、安倍・清原氏と受領官との力関係をしっかり見極めてからの話ではあるが、受領官との対立、その代理人としての安倍・清原氏との対立は併存しうると考えられる。なお三浦説の前提には、札幌発生の契機として、土器採相の変化を根拠に九世紀に断された北海道と北東とが、一〇世紀に再び一体化する点が挙げられているが、その「律令的土器様式」論については批判がある(八木二〇〇七、また小口二〇〇〇も参照)。
- (17) 文獻的には、この時代が争乱の時代であったことは証明できるという意見もある(青藤二〇〇七)。
- (18) この他、高麗館遺跡については、有力者の自己顕示性集落とみなした見解もあるし(木村浩二〇〇六)、あるいはまた塚を「観音アザラシテイテイ」の象徴的存在とみる説もある(前川二〇〇三)が、象徴性を示すものではなく方形土城のような存在ではないか(小口二〇〇七)。平塚の居館や直轄集落については単発的集落とみるべきだが、中世の方形居館についてはその起源・系譜をたずねてはきかれも考えた方がいい。
- (19) この時代に存在した集落をすべて「防御性集落」とみるべきだとする三浦介の見解に対する三浦二〇〇五、佐藤二〇〇六・二〇〇七他を参照。筆者も早くからその立場をとってきた。なお弥生の環壕集落については、その防御性について疑問を呈する研究がみられる。例えば石黒一九九〇、広瀬一九九六、小田二〇〇六他参照。
- (20) なおこの遺跡を『陸奥話記』にみえる安倍富忠の拠点とする説があるが(三浦

第二章
石江渡跡群
の歴史的背景
とその展開

- 樋口知志 一九九七「安佐氏の時代」『岩手史学研究』八〇（後）同「前九年・後三年合戦と奥州藤原氏」高志書院、二〇一二年再録。
- 広瀬和輝 一九九六「弥生の防衛集落と豪族居館—弥生・古墳時代の環濠都市の可能性をさぐる」『別冊歴史読本』二二—四一。
- 藤田明良 二〇〇三「都江やつてきた海獣皮—古代中世の木約と葦蓆—」大塚和義編『北太平洋の集住民交易と工藝』思文閣出版。
- 藤原弘明 二〇〇三「議題—五所川原市十三盛遺跡の発掘調査について—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』二七。
- 酒原智幸 二〇〇三「歌枕の用例分析からみる平安中期東北支配の推移—一〇世紀後半までを中心に—」『平泉文化研究年報』3（後に全面改稿して、同「平安期東北支配の研究」『考古』二〇一三年）に再録。
- 前川要 二〇〇三「考古学から見た東北北部における中世社会の確立—環濠集落の終焉として—の柳之御所遺跡」『平泉文化研究年報』3。
- 三浦圭介 一九九一「本州の柳文文化」『考古学ジャーナル』三四—。
- 三浦圭介 一九九四「古代東北地方北部の生業にみる地域差」日本考古学協会編『北日本の考古学』南と北の地域性、吉川弘文館。
- 三浦圭介 一九九五「青森県における古代末期の防衛性集落」『考古学ジャーナル』三八七。
- 三浦圭介 二〇〇六 a「北日本古代の集落・生産・流通—熊田亮介・坂井秀弥編『日本海城歴史大系』2 古代篇II、清文堂出版。
- 三浦圭介 二〇〇六 b「北奥の大防衛性集落と交易・官衙類似遺跡—平泉誕生の前史—」『歴史紀要』六七八。
- 三浦圭介 二〇一〇「津軽蝦夷の特質と交流の本州北部社会と北海道の交流の変遷—」『古代国家と北方社会』吉川弘文館。
- 葦島宏紀 二〇〇五「平安貴族社会とサハリンのクロロン」『北方島文化研究』三。
- 葦島宏紀 二〇一〇「北方社会の史的展開と王権—国家」『歴史学研究』八七二。
- 葦島宏紀 二〇一〇「環濠跡—再考—平安期における「北の財」とエゾ認識—」『環太平洋・アイヌ文化研究』九。
- 村井章介 二〇一〇「古代末期の北と南」『古代末期—日本の境界—城久遺跡群と石江遺跡群』（前掲）。
- 村井章介 二〇一三「外面と鬼界島—中世国家の境界—」『日本中世境界史論—岩波書店（原形は村井二〇一〇—中世国家の境界—外浜・津軽を中心に—）村井章介・青藤利男・小口

雅史編「北の環日本海世界—書きかえられる津軽と磯貝氏」

八重樫忠郎 二〇一〇「考古学からみれば北の中世の黎明—東北芸術工科大学東北文化研究センター編『北から生まれた中世日本』」（前掲）。

八木光則 二〇〇七「蝦夷と—律令—」『9世紀の蝦夷社会』（前掲）。

八木光則 二〇一〇「古代末期の北奥蝦夷社会」『古代末期—日本の境界—城久遺跡群と石江遺跡群』（前掲）。

八木光則 二〇一〇「北奥の古代末期州郡集落—古代中世の蝦夷世界」（前掲）。

山浦清 一九八三「オホーツク文化の終焉と柳文文化」『東京大学考古学研究室研究紀要』2。

山田祐子 二〇一〇「秋田県の古代木製祭祀用具—能代市樋口遺跡を中心として—」古代末期—日本の境界—城久遺跡群と石江遺跡群」（前掲）。

渡辺亮宏 二〇一〇「新田（一）遺跡出土木簡の意義—古代末期—日本の境界—城久遺跡群と石江遺跡群」（前掲）。

註

(1) 北方史に関する体系的な文献史料集としては、東北大学東北文化研究会編『蝦夷史料』（東北史料科集）、吉川弘文館、一九五七、同編『奥州藤原史料』（東北史料科集）、吉川弘文館、一九五九などがあり、それらをふまえて全面的に増補改訂した『青森県古代—資料編—』青森県史資料、青森県、二〇〇三）が刊行され、さらに続く『青森県史資料編古代—補遺—』青森県史資料、青森県、二〇〇三）によって史料の追加と、それを含む全史料の全文デジタル化がなされた。現在では「古代末期までの基本的な文献史料の全貌はこの『青森県史』で網羅的にみることができ。

(2) 本稿は筆者がこれまで折に触れて執筆してきた当該地域の古代末期—中世初期の歴史についての論考を、現時点での見解を踏まえて加除訂正して再編したものである。参考文獻掲載の権限参照。

(3) 例文は法政大学国際日本学研究所のこれまでの刊行物、とくに「アイヌの歴史」周辺」との交易・交流—」法政大学国際日本学研究所、二〇〇五年、「アイヌ文化の成立と変容—交易と交流を中心として—」法政大学国際日本学研究所、二〇〇七年などを参照。なおこの両書は再編増補されて、榎森進・小口雅史・澤登寛編『アイヌ文化の成立と変容—交易と交流を中心として—』上、エミシ・エゾ・アイヌ、下、北東アジアのなかのアイヌ（岩田書院、二〇〇八）として市販された。

- 窪田大介 二〇一三「安倍・清原氏と伝教、中世社会成立期の北上盆地、横手盆地の仏教受容の様相」『第六〇回東洋研究会発表資料』(二〇一三年三月十六日)
- 熊谷公男 一九九四「愛媛官」・鎮守府將軍の成立」羽下徳彦編『中世の地域社会と交流』、吉川弘文館
- ヨーゼフクラインナー・吉成直樹 二〇一〇『古代末期、日本の境界』城久遺跡群と石江遺跡群」森田社
- 黒崎直樹・村上義直・藤原弘明・小山田宏一 二〇一三「座談会」『秋田県埋蔵文化財センター』研究紀要』二七
- 小出輝雄 二〇〇六「環境は戦争用遺構か」『南関東弥生時代中期後半期の検討から』『古代』一一九
- 越田賢二 二〇〇五「北海道―奥尻島の遺跡を通して」『『考古学』九三
- 小嶋芳孝 二〇〇四「縄状鉄製品と蝦夷の宗教」宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会編『イヌ文化の成立』北海道出版企画センター
- 小嶋芳孝 二〇一〇「沿海から見た北東北のシャーマニズムと伝教」『古代末期、日本の境界』城久遺跡群と石江遺跡群』前掲
- 齋藤淳 二〇〇一「津軽海防領域における古代土器の変遷について」『青森大学考古学研究所研究紀要』4
- 齋藤利男 一九九六「蝦夷社会の交流と、エゾ世界への変容」鈴木清民編『古代王権と交流』上「古代蝦夷の世界と交流、名著出版
- 齋藤利男 一九九八「軍事貴族・武家と辺境社会」『日本史研究』四二七
- 齋藤利男 二〇〇六 a「安倍・清原・平泉藤原氏の時代と北奥世界の変容―奥大道路―防衛性集落と北奥の建都」義江彰夫編『十和田湖が語る古代北奥の謎』校倉書房
- 齋藤利男 二〇〇六 b「北方世界のなかの平泉・衣川―日本史における「北」の可能性―」『歴史評論』六七八
- 齋藤利男 二〇〇七「北の古代末期防衛性集落」の成立・発展・消滅と王朝国家」天野哲也・小野裕子編『古代蝦夷からアイヌ』吉川弘文館
- 齋藤利男 二〇一〇「安倍・清原・奥州藤原氏と北の辺境」東北学院大学東北文化研究所編『古代中世の蝦夷世界』高志書院
- 笹田明孝 二〇〇二「北海道原文化期における鉄器の普及―出土率からの平泉―」『物質文化』七三三 後に「出土率から見た縄文文化の鉄」と改題して『北海道における鉄文化の考古学的研究―鉄ならびに鉄器の生産と普及を中心として―』北海道出版企画センター、
- 二〇一三に再録)
- 佐藤哲生 二〇〇六・二〇〇七「青森県における防衛性集落期の生産と課題」(七)『考古学的現状確認と仮説の建設的批判を中心に』『弘前大國史研究』二二、二二三
- 鈴木琢也 二〇〇五「縄文文化における物流交易の展開とその特性」『北海道開拓記念館研究紀要』三三
- 鈴木琢也 二〇〇六「北日本における古代末期の北方交易―北方交易からみた平泉前史―」『歴史評論』六七八
- 鈴木琢也 二〇一〇「北日本における古代末期の交易ルート―十一、十二世紀を中心として―」『古代中世の蝦夷世界』(前掲)
- 鈴木 信 二〇〇四「古代北日本の交易システム―北海道系土器と製鉄遺跡の分布から―」『アイヌ文化の成立』(前掲)
- 鈴木清民 一九九六「古代蝦夷の世界と交流」『古代王権と交流』1(前掲)
- 鈴木清民 二〇〇四「平安後期・北奥の祭祀・交易」経営拠点と交流、青森市新田(1)遺跡の歴史的意義」『東アジアの古代文化』一一二
- 鈴木清民 二〇〇七「広がる古代日本の境界―中国や本州各地産の出土品確認」『朝日新聞』二〇〇七年三月十三日
- 須藤弘敏 二〇一〇「新田(1)遺跡出土の仏教関係遺物について」『古代末期、日本の境界』城久遺跡群と石江遺跡群』(前掲)
- 瀬川拓郎 二〇一〇「中世アイヌ社会とエスニテイの形成」東北芸術工科大学東北文化研究所編『北から生まれた中世日本』高志書院
- 関口明 一九八七「渡島蝦夷と毛皮交易」佐伯有清編『日本古代中世史論考』(後に関口「古代東北の蝦夷と北海道」吉川弘文館、二〇〇三に再録)
- 武廣亮平 二〇〇四「独狩皮」についての考釋―古代北方世界との交流と関連して―」『日本歴史』六七八
- 武廣亮平 二〇〇六「古代・中世前期のアラシ皮と北方交易」『史叢』七四
- 武廣亮平 二〇〇七「北方地域との交流とその展開」『九世紀の蝦夷社会』(前掲)
- 中澤寛博 二〇〇五「古代津軽における須恵器生産と陶」『中央史学』二八
- 中島恒次郎 二〇一〇「城久遺跡群の日本古代中世における社会的位階」津軽石江遺跡群と関連をめぐって」『古代末期、日本の境界』城久遺跡群と石江遺跡群』(前掲)
- 羽柴直人 二〇一〇「北奥における奥六郡・平泉文化の流入過程」『古代中世の蝦夷世界』(前掲)

になった現時点では、それを集落と切り離した、非日常的な交易の場とすることは明らかに誤りである。強力に防御しなければならぬ空間と、そうではない空間が併存したことになるが、この問題は今後改めて考え直さなければならない。

本稿「はじめに」でもふれたように、石江遺跡群の評価は、本報告書によってようやくその全貌が広く公表されることとなり、これまでの成果とあわせて、あらためてここから研究の第一歩を踏み始めるはずである。本稿は現段階での筆者の質しい理解を示したにすぎない。

なお石江遺跡群は続く中世にまで連続する遺跡である。本来ならば中世期についても、当遺跡群で出土した湖美焼や津軽安藤氏の活動等との関連を探りながら、本稿で取り上げるべきところではあるが、諸般の事情で、その責を果たせなかったことを、関係諸氏に末尾ながらお詫びしたい。

参考文献

天野哲也 一九八三「歴史社会における金属器の普及量と所有形態」『考古学研究』三〇—
天野哲也 一九八九「縄文期北海道にもたらされた鉄の量とこれに関連する諸問題」アイヌ期との比較において」『たたら研究』三〇（後二回「タマ祭りの起源」雄山閣、二〇〇三）に再録。
新井隆一 二〇〇六 a 「古代北奥羽の律令の祭祀」『古代文化』五八—
新井隆一 二〇〇六 b 「平安時代前期の蝦夷支配と津軽」青森市野木遺跡の検討より—『北
方島文化研究』4
石黒史人 一九九〇「漆のある集落とない集落」『季刊考古学』三二—
井出清夫 二〇〇二「北日本における古代環壕集落の性格とその背景」計量的分析からのアブ
ローチ」『津軽唐川城跡・古代環壕集落の調査』富山大学人文学部考古学研究室
井出清夫 二〇〇四「古代東北地方北部におけるエミシ社会と交易システム」『日本考古学』
一八
井出清夫 二〇〇七 a 「須置器・鉄生産の展開」熊田亮介・八木光則編『九世紀の蝦夷社会』
高志書院
井出清夫 二〇〇七 b 「十一世紀東北北部における集落区画の意義」天野哲也・小野裕子
編『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館
井上雅孝 二〇〇二「鏡状鉄製品の研究」東北北における古代祭祀具の「形態」『岩手考
古学』一四

井上雅孝 二〇〇七「古代蝦夷社会における古器の受容と展開」鏡状鉄製品の分析を中
心に—『樹山林津・山岸良二編『原始・古代日本の祭祀』同成社。
宇部則保 二〇〇九「九世紀における青森県周辺の地域性」ヨゼフ・クラウナー・吉成
直樹・小口雅史編『古代末期・日本の境界—城久遺跡群と石江遺跡群』森社。
大石直正 一九九〇「外が浜・夷島考」関晃教授還暦記念会編『日本古代史研究』吉川弘文館
小口雅史 一九九五「高麗館船遺跡の調査に寄せて」『浪岡町史編纂調査月報』4
小口雅史 一九九八「日本古代・中世における境界観念の変遷をめぐって」『古文書
に見る「北」と「東」』皆川完一編『古代中世史科学』下、吉川弘文館。
小口雅史 二〇〇〇「エミシからエゾへ—北の防御性集落の時代再論」『青森県史研究』5
小口雅史 二〇〇二「北方形土城をめぐって」『日本古代史研究』日本古代史研究会編『日本古代史研究』吉川弘文館
『神道古典研究所紀要』9（後に前川要編『北東アジア交流史研究—古代と中世』福書房、
二〇〇七）に再録。

小口雅史 二〇〇五「古代北日本の「防御性集落」—歴史評論—」六五七
小口雅史 二〇〇六「防御性集落の時代背景—文献史学の立場から—」三浦圭介・斉藤利男・
小口雅史編『北の防御性集落と激動の時代』同成社。
小口雅史 二〇〇 a 「古代末期の北方世界—北方史グループの研究視角」『古代末期・日
本の境界—城久遺跡群と石江遺跡群』前掲。
小口雅史 二〇〇 b 「北日本の古代末から中世」菊池俊彦編『北東アジアの歴史と文化』北
海道大学出版会
利部修 一九九六「北日本の須置器についての一考察」坂浦秀一先生還暦記念会編『考古学の
諸相—坂浦秀一先生還暦記念会』
葛城和徳 二〇〇二「青森市新田（2）遺跡—黒敷委重墓分」『古代末期・日本の境界—城久
遺跡群と石江遺跡群』前掲。
鎌江宏之 二〇〇七「出土文字資料からみた東西差—南北差—」『九世紀の蝦夷社会』前掲。
木村淳一 二〇〇六「近年の高麗館船遺跡調査をめぐって」『北の防御性集落と激動の時代』
前掲。
木村淳一 二〇〇五「新田（1）遺跡—北限の本拠—」『考古学ジャーナル』五三二
木村淳一 二〇〇二「青森市石江遺跡群の特質」『古代末期・日本の境界—城久遺跡群と石江
遺跡群』前掲。
工藤清泰 一九九二「船—発生の考察—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』9
工藤清泰 二〇〇五「東北北部の環壕集落」『季刊考古学』九三

様に注意が必要であろう)からの力が現地に与えた影響力の評価についてはもう少し慎重になるべきだと思われる。新田(1)遺跡が見事な祭祀遺跡であることはもちろん間違いない。またなんらかの交易の場であった可能性も高い。まずはこうした立場から、その主体となつた勢力の問題、あるいは在地勢力と受領官的勢力との権衡の場であったかも含めて、あらためて再検討すべきかと思われる。

なお者藤説③⑤については、考古学的資料についての認識によつていふものとと思われるが、本報告書本身体部分、必要に応じて関連箇所でも触れられていると思われ、本稿でも行論の都合上簡単に確認しておく。③については、手づくねかわらけの量はろキロもなく、かつ津軽では量的には中崎館遺跡(弘前市)の方が多い。技術的にも浪岡や石江遺跡群の手づくねかわらけは平泉とは異なるという(羽柴②一)。

④については、S B a i 1 建物は、最終的に平泉期の講跡と新田関係が確認されてい、したがって二世紀後半には当てはまらず(十三世紀前半に相違)、時期的に平泉とは重ならないことが明らかにされている。

⑤についてはこれは青木造の技法を示すものではなく、むしろ一木造の一つのパリエーションで、一世紀の北東北における神仏像の製作技法の系譜に連なるものとされる。

近年、平泉研究の急速な進展とともに、その独自性と文化の広大な広がり可能性が指摘されるにつれて、北奥の様々な事象がすべて平泉と直結されて理解される傾向がある。もちろんそうした可能性を追求することはきわめて重要な論点ではあるが、すべてを平泉の直接の影響におく必要もないことは言うまでもない。要はその度合いの究明であろう。

先に触れた、石江遺跡群の祭祀についても、それを、小嶋説のように「境界祭祀」としての側面を強調すればするほど、石江遺跡群と北海道島との連続性が断ち切られていくことになる。これも度合いの問題であろう。外浜が古代末期から中世にかけて境界世界であったことは確かであるが(大石一九〇、小一〇九八、村井二〇二)。

石江遺跡群の時代には、岩木川沿いの低湿地へも集落の進出が行われていたことが、近年ようやく注目されるようになってきている(宇部二〇二)。これまでは、集落は主に微高地上に存在すると考えられていて、こうした低湿地に集落があると考えられていなかった。それにともなつて、北奥の地における物質の流通ルート

も次第に明らかになりつつある。

石江遺跡群が、北方世界における一つの拠点集落であることは確かである。しかしそれが、陸奥国府が現地に置いた出先機関である可能性は全くなく、あるいはまた平泉政権が北方支配の拠点として設置した、在地家族の支配する集落であるとすると説けない。きわめて魅力的な見解ではあるが、それを証明する考古学的事実もまだない。八木は石江遺跡群はもとより高屋敷館遺跡ですら、拠点性は他を圧倒するほどではなく、在地権力がこの地にいたとは考えられない(八木二〇二)。現時点では、同時期の十三盛遺跡や石上神社遺跡、中崎館などについても同様の判断を下すしかない。ただ、石江遺跡群には青森産とはいへ藤文土器も存在する(石江遺跡群の土師器には二種類あり(木村博二〇二)、そのうち回転成形が在地津軽産、手持ち成形が藤文人の手になるというように想定もなされている(中島二〇二)。多様な他者が集う場所であったことは間違いない。

確実に言えることは、この地が、北と南の物質や文化の行き交う場所であり、交易の拠点として機能していたであろう。南の「日本国」の文化を自分なりに改変して取り入れる世界であったことである。実際問題として、平泉以前の五所川原須恵器も、平泉のような強大な権力がなくとも、広く北海道全域に分布しているのであるから。

むすびにかえて

既述してきたように、石江遺跡群の時代には十三盛遺跡も併存していた。十三盛遺跡もまた学問的に様々な問題をかかえた重要な遺跡である。十三盛遺跡でも大量の木製品が出土している。低湿地遺跡であったことが幸いしているが、この大量の木製品ははたして他の集落への輸出品であったのかどうか問題となっている。五所川原市分地地域の発掘担当者である藤原は、自家消費を公式見解としつつ(註24)前掲報告書、藤原二〇三、輸出の可能性についても言明している(黒崎他二〇二)。この地域における今後の類例の発見が待たれるところである。

また石江遺跡群の時代には、近くに巨大な防御施設をともなう高屋敷館遺跡も存在していた。両者の関係について、筆者はかつて、ちょうどチャシと白土城、唐川城と福島城のように、交易あるいは拠点の場と、実際に生活する防御すべき場とが分離するという考え方を提示したこともあったが、石江遺跡群の全貌が明らか

①都や国府・城柵と同様の多種多様な陸路道系の中央的遺物が大量に出土している。「律令的」祭祀がここで行われている。

②国家に対する北方の人たちの貢納の場であったことを推測させる遺物が多数出土している。

③浪岡城に匹敵するか、それをしのぐ量の可能性がある「手づくねかわらけ」が出土している（この時点でキロに上る）。

④「寝殿」として宴会や接客に用いられたと推測される大型掘立柱建物（SB a01）が存在する。

⑤一世紀半ばの京都で仏師定朝によって確立された「寄木造」の技法を持った仏像が、ほぼ同時代にこの遺跡から出土している。

といった諸点である。確かにもこれらが事実なら驚くべき事態である。しかしながら遺跡の発掘当初から、これらすべての点において、筆者の理解との隔たりは大きかった。いまあらためてこれらを個別に検討してみよう。

まずもつとも重要な斉藤説①②の論点について、石江遺跡群で出土している「中央的」ないし「律令的」遺物についてであるが、これは筆者の旧説（小口二〇〇a）を変更する必要はやはりないと考える。そこで論じたように、出土遺物には間違いなく「中央的」ないし「律令的」要素があるが（加藤の源は確実に「日本国」である、どうみても在地性の強さに留意せざるを得ない。例えば檜扇や斎串・木簡、ないし木簡状木製匙などの素材は在地産であり、当初注目を浴びた荷札木簡の存在については、ほぼ否定されている（藤田二〇一〇）。また新田（二）遺跡からは、城柵周辺でよく見られる石帯が出土している。これは北の蝦夷と城柵との間にかつてあった朝貢契給関係を示すものと思われるが（八木二〇一〇）、その石帯を出した住居は、他に比して差がないのである（葛城二〇一〇）。

斎串をはじめとした祭祀遺物については、たしかに量的には注目できるが、中央の律令的祭祀と異なる人形が未発見であることはまず気になれない（八重樫二〇一〇）。他、律令祭祀ならば人形が含まれないことはまず考えられない（八重樫二〇一〇）。もつとも人形については、その後、十三盛遺跡で、五所川原市担当分・青森県教委担当分双方で出土が報告されているが、およそ律令的な人形とはいいがたく、厚みのあるものであったり、神像的なものであったり、形態がかなり異なる。一部は秋田県五城目町の中谷地遺跡に類似があるが、やはり大量の木製祭祀具を出土した能代市樋口遺跡と比較すると、石江遺跡群の祭祀具の在地化が際立つ（山田二〇一〇）。

「律令化」を旨とした結果というよりは、「日本国」の律令的世界との交流の道具として在地側でそれを取り込んだという要素が強いのではないか（八木二〇〇七）。卒都婆その他の祭祀具全般に北奥の特性がみられ、本州島の最北端としての境界祭祀がレベルで行われたとすることは難しい（八木二〇一〇）。周辺の十三盛遺跡や石上神社遺跡からも類似のものが出土していて、量的にはともかく、遺物そのものまた直接石江遺跡群の優越性がみられるわけではない。

また直接石江遺跡群を扱ったものではないが、例えばこの地域の墨書土器の特徴についても、米代川流域を境として、その北と南とで大きな差があることが指摘されている（鐘江二〇〇七）。この面でもやはり北奥の在地性が目立つところであるし、律令色に満ちた胡桃船遺跡（秋田県北秋田市）についてすら、そこに在地色を認める見解がある（八木二〇〇七）。

さらにまた仏教信仰についても、その独自性が注目される。斎藤自身が説くように、北緯四〇度以北の地域では、「日本国」では消えてしまった方丈観念を仏像として表現する独特のスタイルが中世まで色濃く残るといふ（須藤二〇一〇、斎藤二〇一〇）。それに関連して注目されるのが、この地域に集中して見出される錫杖状鉄製品である。これを神仏習合の要素を持った雑密（古密教）系の祭祀具とみる説（井上二〇〇二、二〇〇七）と、北東アジア由来のシャーマニズムと密教系仏教が融合した蝦夷社会固有宗教の祭具（小嶋二〇〇四、あるいは大隈から影響をうけたシャーマニズムそのものに特化した祭祀の祭具（嶋二〇一〇）とする説が対立していた。近年では、蝦夷社会には他にシャーマニズムが存在した証左がないことか、これを北奥に主体をおく、北奥でアレンジされた祭祀具とみる見方もある（八木二〇一〇）。小嶋説にしても「蝦夷社会固有宗教」であることは認められているわけだ、この地の特殊性が際立つ。

なお高岡（一）遺跡のSB01を、仏教寺院の双堂とみる説もあるが（窪田二〇一三）、その可能性はきわめて低い。現時点で確実な寺院仏堂建築は北奥ではないまだ確認されていない（須藤二〇一〇）。やはり当地に「日本国」的な寺院建築を想定するのは難しいであろう。

古くからいような境界交通研究の場において指摘されているように、二つの地域（間に類似のものが存在することがただちに両者を同一文化圏とみなす根拠にはならない。北奥地域でも古墳時代の南の「日本国」の遺物が発見されているのである。交易と交流を主張する際に、この「日本国」（あるいは平泉からの影響についても同

以上のように、筆者は「防御性集落」は交易と交流を背景にした北方世界の特徴を示す重要なものと考えているが、しかしこの概念については、学界でもなお異論が根強くある。とくに蝦夷社会における対立の激化・恒常化という前提が考古資料から証明されていないという問題があり(工藤二〇〇五他)、環壕を区画施設・井出二〇〇七他)ないし宗教的結核(工藤一九九とみるべきだと)という主張がある。もっとも近年の論争の深化のなかで、その両方の側面が存在することが学界の共通認識として定着しつつあるようにも思われる(小沼二〇〇五・井出二〇〇七他)。この時代の集落をすべて「防御性集落」という類型で理解する必要はなく、高屋敷館遺跡や林ノ前遺跡(青森県八戸市)など、壕に明確に防御的機能を認めることができるもののみをそう呼称すべきかとも思われる。

実際、その後、「防御性集落」盛んなりし時代に、本稿の主対象である石江遺跡群の新田(2)遺跡や、五所川原市の十三盛遺跡といった、防御的色彩の強い土塁と壕をともしなわなない大規模集落遺跡が発見されるようになった。

しかし新田(2)遺跡にしろ、十三盛遺跡にしろ、集落を大溝で囲郭しているという事実も重要である。そこでこの時代の壕や溝を総合的にとらえて、全体として「囲郭集落」とする概念も提唱されていて、そこでは「防御性集落」の存在はあらためて否定されることになる(八木二〇一〇、二〇一七)。

この八木説は、それまでの研究が、発掘調査の基本的なデータをきちんと整理しておらず、用語の定義も明確にしていなかったと批判し、また肝心の壕・溝といった囲郭施設とその内部の住居の同時性も確認されていないことを問題視して、あらためて考古学的データの整理から再出発したものである。そして囲郭性集落の可能性の高いものとして、以下の三点を示している。

- ① 古代の遺構より囲郭施設が古い
- ② 古代の遺物外郭施設の底面や埋土に集中あるいは一括投棄されている
- ③ 掘り込みa・白頭山火山灰が埋土に含まれる、または火山灰直上から囲郭施設が掘り込まれる

その上で、これまで類型差のない地城差とされていた、数棟の堅穴住居を囲む小囲郭と集落全体を囲む大囲郭について、それを発展段階差とみなし、小囲郭から大囲郭へとという流れを指摘している。そこでは新田(2)遺跡は大囲郭に分類される。八木説の概略は以上述べてきたとおりであるが、たしかにこれまでの研究史の欠を鋭く突いたもので、学べき点が多いものの、逆にすべてが「囲郭集落」という

まとまりでとらえていいのかわりに、なお検討すべき点があるように思う。高屋敷館遺跡や林ノ前遺跡を、他の防御性を感じない溝の類型として発展段階的にとらえることは是非について、やはりなお躊躇せざるを得ない点が多い。また石江遺跡群と時的に併行する十三盛遺跡(五所川原市)の大溝については、低湿地に立地する故の排水施設とする見解が発掘調査担当者から示されている。

いずれにしても本稿は防御性集落の分析を主目的とするものではないので、八木説の全面的再検討については、機会を改めることとするが、今の段階ではなお、一部の防御性集落の存在を認めた上で論を展開させていくこととする。

四 石江遺跡群の歴史的评价

さて以上のような当該地域の歴史的發展を踏まえると、この石江遺跡群はどのよう歴史的に評価できるのであろうか。既述したように直接関わる文献史料は皆無であるので、出土した注目すべき遺物や遺構から、総体としてどのように判断できるかということになる。

これまでも論じてきたように、当該地域の歴史的發展からすれば、石江遺跡群が存在するあたりが、津軽海峡を挟んで南北交易の結節点に位置する(少なくともそうした役割を担った地域が存在する)遺跡であることは間違いないであろう。

この遺跡群を一躍有名にした、本稿冒頭でも触れた、中央的なし律令的とされる一連の遺物は、当初石江遺跡群を陸奥国府の出入機関(官衙類似遺跡)にも擬定できる可能性を示唆された。その後の調査の進展とともに、この遺跡群が「日本国」から派遣された官人が運営する官衙の施設ではないことは確定した。しかし、そうした理解の根拠となった遺物の評価をなお維持して、そこから石江遺跡群を「外ヶ浜・津軽海峡世界における平泉政権の支配を担う拠点集落」ないし「在地豪族の本拠である環壕集落」とみなす斉藤利男の見解もある(斉藤二〇一七)。この斉藤説は、自らなしたけた最新の平泉研究の見直しをもとに構築された壮大な構想があるものである。しかしながら、その論理構成を支える遺物や遺構の解釈に、必ずしも正鵠を射ていない部分があることも確かであり、やはり現時点ではなお慎重な立場をとらざるを得ないと考え、以下、その論点を示そう。

斉藤説の立論の根拠となったのは、

じめに」でも触れたように、当時は、従前の研究へのアンチテーゼとして、一〇世紀以降の北奥地域古代の諸事象を、あえて南方世界における「日本国」の進出と出たことについての過大評価と考へたい。

その他、例えば九世紀末の闇室である五所川原須恵器窯跡群についても、それを律令国家と積極的に関連付けたための生産基地とみるような立場があるが（斎藤・九六他、もちろん須恵器生産の技法が律令国家に由来するものであることは当然のこととして、五所川原須恵器窯の技法に北奥北のなローカル色があることや（利部一九六他、この時期の北奥北の文化全体における独自の存在（井出二〇〇四）から、筆者も五所川原窯跡群の生産には在地の主体的な力をより強く認めたいと考へる）。

なお新田（一）遺跡をはじめとする石江遺跡群の理解についても同様の見解の対立があることはすでに触れたが、この問題については後に詳しく触れる。

ただ樋口説にしても安倍氏による交易統制を認めているわけで、安倍氏が北方交易に全く関わらなかったとしているわけではなく、また逆に安倍氏の主体性を認める立場においても、受領官の意志・関与を全く認めないわけでもない。それは相対的な問題であるともいえる。北方交易の統括の主体が、安倍氏・清原氏・平泉藤原氏と、中央からの受領層に代わって在庁官人・在地勢力主体へと段階的に発展していくという見方自体は当然のこととして理解できよう。平泉藤原氏の段階にいたっては、『奥州後三年記』中の著名な三日月の場面に「日ごと上馬五十疋の富に於いて、それは一応の完成の域に達する」ということになる。清原氏の豊かな北奥に於ける。其ほか金羽・あざらし・絹布のたぐひ、敷しらずともまいれり」（『書』II-193）とあることで知られ、それを上回る平泉藤原氏の北の富については、『吾妻鏡』文治五年九月十七日条所引の「寺塔」下注文、中に「所謂田金百両・鶯羽百疋・七間中徑ノ水豹皮六十余枚・安達絹千疋・希婦細布二千端・膝部駿馬五十四・白布三千端・信夫毛地摺千端等也」（『書』II-194）という記述でよく知られている通りである。

三 北方交易の展開といわゆる「防衛性集落」の出現

— 石江遺跡群の歴史的背景にあるもの（3） —

さて一〇世紀以降、こうした交易の拠点を舞台に、南北の物資が北奥の地で交わったわけであるが、まだ「日本国」の郡縣制がこの地域にまで及ぶ以前のことであつて、現実には安定的に都人の需要を満たすだけの北方産品を確保できるかどうか難しい状況が続く（小口二〇〇六）。したがって北の世界から得られる利益が莫大であればあるほど、その産品をめぐる争いは激しくなつていく、こうしたことを背景に、在地においては、まさにいろんなレベルでの軋轢が発生していったに違いない。まずは中央政府の代理人としての国守・鎮守府将軍・出羽城介等と在地豪族との間の軋轢が考えられる。この時代には現地で具体的な支配法について中央政府はいつさい介入せず（いわゆる「王國国家」の時代）、中央政府は貢納物確保にのみ関心を示している。そうした状況下では中央の政策の影響というよりは、むしろ現地で政策の影響による軋轢が日常的に存在していたのではないかと、さらには在地豪族と北の世界の現地住民との間の軋轢もあるはずである。このころは北緯四〇度以南の地では民夷融合が進み、安倍氏も據拠しはじめる時期であつて、俘囚長安倍・清原氏がエゾとの緊張・対立の最前線に身を置くようになっていく、そして最後に、今度はエゾ世界内部での集落相互の軋轢も緊張し始めるはずである。

こうした様々の軋轢のなかで、集落が日常的に緊張した状態になり、それが北奥地域の集落に防衛施設を必要とさせ、北緯四〇度以北から道南地方にかけて発生したと考へられているのが、この時代にこの地方特有の、塚で集落を囲んだ「高酸性集落」という形態をとることもある、いわゆる「防衛性集落」である。緊張した社会情勢下では、洋の東西や年代を問わず、その強固な防衛を意図した集落が出現する。

こうしたものとしては弥生時代の環壕集落や高酸性集落が著名であるが、北日本では、それらとよく似た構造を持つものが一〇世紀半ばころに誕生するのである。とくに一九九四年から発掘が始まった高屋敷館遺跡（青森市）の環壕は、幅八メートル、深さ五・五メートルという大規模にしてかつ急峻なもの、大いに注目された。環壕を掘った土は、多くの場合、弥生時代と同じ環壕の外に積み上げられ外土塁を形成する。これらの特異な集落は、三浦圭介によつて津軽型（集落全体を環で囲う）と上北型（集落の主要部のみを囲う）とに類別されているが（三浦一九九五、上記の軋轢の差が類型の違いを生み出した可能性もあるし、あるいはまた周知のように、米を生業の主体とする津軽地方と馬を生業の主体とする上北地方の、村落内の階級差の度合いの違いが、集落全体を囲むのか、集落の重要部だけを囲うのかという違いを生み出した可能性も考へられよう）。

月十九日下弾正台例²²⁶では「独狩」が「独射狩」と表記されており、「トツカリ」音とはいささか遠い。アイヌ語の表音語である「独狩」から表意語である「水豹」への変化についても、詳細不明だがアザラシの語源も問題となる。また武廣自身認めているように、「倭名抄」に「独狩」と「水豹」とが併記されていることは気になる点である。武廣はこれが両者が併記される唯一の例で、かつそこでは「独狩」の実態が理解されていないので問題ないとするが、やや時代が降った「色葉字類抄」では、雑物の項で「独狩」を羆鹿とし、また動物の項で「水豹・羆鹿・独狩」と列記した上で、「独狩」を羆鹿であるとしている。つまり水豹と独狩とが明確に区別されている。羆鹿と同調であるという解釈は、両者が同一のものを指すことを意味するのではなく、同じアシカ類のなかでの区別ともとれようか。既述したように、水豹をゴマアザラシの類に限定すれば、独狩は他のアザラシとしても矛盾はない。

また儀式書類での水豹の用途が六位以下の官人用とされ、他の皮類よりも格下に扱われている点(武廣²²⁶・²²⁸)も若干気になるところであるが、これは羆鹿も同様であるので別な問題として扱うべきか、いずれにしても「独狩」については、アザラシの可能性を認めつつも、なお未詳の海獣としておくのが穏当であろうか。

なお鷹の羽の類については、「御殿行幸服飾部類」に見える「鷹羽」(『書目』²²⁶・²²⁸)をはじめとして古記録などに多数見えるが、既述したように一般の鷹ではなく北方から北海道に飛来するオオウシ・オジロウシなどの立派な目立つ尾羽であるという点で学界に異論はない(ただし註(8)参照)。先に一〇世紀以降の道東・オホーツク海沿岸方面への鉄路²²⁹あるいは北巻²³⁰の拡大に触れたが、鷹羽の主産地はこの方面であると考えられ、そうした北方産品を求めて「日本国」からの進出が顕著になっていたものと考えられている(山浦¹⁹¹³・鈴木²⁰⁰⁶)。

その他、一〇世紀半ばから一世紀にかけての時期に、文献史料にみえる都へ貢納された北方産物の多くが、みな整ってくることも明らかにされている(酒原²⁰⁰³・小口²⁰⁰⁶)。このことは、間接的にはあるにせよ、この時期に「日本国」の支配領域が本州北端にまで達したことも関係していよう(『宋史』日本国伝の寛然の書(『書目』²²⁹)・小口²⁰⁰⁶)。

二 北方世界における交易の主体者

— 石江遺跡群の歴史的背景にあるもの(2) —

前章でみたような、北方世界の交易を行った主体者は誰か。これが次の大きな問題である。七世紀の阿倍比羅夫北征以後、八世紀く九世紀にかけては、新たに「王臣及国司」(『新撰延暦六年正月二十一日太政官省・王臣諸家(前掲延暦二十二年六月二十四日太政官省)らによる出羽国・秋田県などを舞台とした「私交易」が活発に展開されていくことがよく知られている(岡口¹⁹⁷⁸・武藤²⁰⁰⁷)。それが一〇世紀の城柵廃絶を経て、拠点としての城柵に依存しない、津軽らのエミシを主体とした、本州と北海道方面との交流が再編成されていく、というのが近年の学界の論調である(菅島²⁰⁰¹・井出²⁰⁰⁴・²⁰⁰⁷・²⁰⁰⁷・²⁰⁰⁷・²⁰⁰⁷)。

こうした動向の背景には、一〇世紀前半は、中央政府の外交において、積極的孤立主義がとられていた時代であったことも関係しよう(小口²⁰⁰⁶)。中央政府の動向と全く無関係に新しい交流が生じてくる。また製鉄や須恵器生産を行った津軽地域に北海道の蝦夷土器が分布すること(菅藤²⁰⁰⁷)も、津軽が一〇世紀代の本州と北海道の交易の中核的立場にあったことを示している(井出²⁰⁰⁷)。

こうした交流をベースに、かつての私交易の主体である王臣家がこんどは陸奥守・出羽守といった受領官として北方の現地に赴任してくるようになる。こうした受領らは在庁官人を駆使して過酷な収奪を展開するが、その際に右記の津軽らのエミシを主体とした新しいネットワークが利用された。またこうした受領らのなかに、源氏・平氏・秀郷流藤原氏といった、いわゆる「軍事貴族」が目立つてくる時代でもある(菅藤¹⁹⁹⁸)。さらにこの一〇世紀は、後に鎮守府在庁筆頭たる安倍氏(出自は都の受領層)がこの地で勢力を形成する時代でもある(樋口¹⁹⁹⁷)。

この安倍氏が北方交易に果たした役割については、それを「安倍氏種占るかどろか(は別として)主体的とみる(すなわち領守将軍の権限は安倍氏の北方貢納物調達に依存するといふ)古典的な学説(菅谷¹⁹⁹⁴)他と、否定的に見る学説(樋口¹⁹⁹⁷)とが対立している。後者の立場では、安倍氏はあくまで軍事貴族の下での「伴因主」に過ぎず、それに対して軍事貴族の機能を吸収して強大になっていくのが清原氏・平藤原氏なのだとして、そこに段原兼が設定される。その主要な根拠の一つが、青森県の十三湖に面した福島城跡(五所川原市)を城柵類似の施設とみて北方交易の拠点であるとし(鈴木¹⁹⁹⁶・菅藤¹⁹⁹⁷)、そこによつた勢力を「王朝国家の意志をうけた(東国「軍事貴族」とみなす立場である。だが福島城跡を古代の城柵類似の施設みる点については特に根拠があるわけではなく(小口²⁰⁰⁶)、また近年の調査で、すくなくとも外郭部分は中世の構築物であることが確認されている。本稿「は

以上のことは分らない。

それ以外の須臾器・米・塩の北方への供給については、文献からは知られないもの、いずれも北海道島では自給できないものであるから、おのずと「日本国」あるいはこの段階でまだ「日本国」に含まれない本州北端から送られてきたものであることはまず間違いのない。もっとも米・塩については考古学的な検証が難しく、量的にどれほどのものであったか未解明である。

これらのうち考古学的に明証のある五所川原産須臾器については、分布が道内広範囲にわたることから注目を集めてきたが、近年、個体数としてはさほどのものではないことが強調されるようになり、また須臾器そのものの交易というよりは、酒などの容器として付随的にもたらされたものであると考えられるようになってきて(中津二〇〇五、鈴木琢二〇〇五二二、井出二〇〇七)他、その過大評価ははや慎重なようになってきている。例えば鈴木琢也は、須臾器は主要な交易品ではなく、鉄器にもなつて北海道に流入したものとみなしている。なお北海道で見出される須臾器には、明らかに五所川原産ではない、それより古い様相を示すものが相当量存在するが、それらは秋田県城瀬産と推定されるもの、なお今後の詳細な研究が待たれている。たゞやはり須臾器の広範な分布という事実には十分留意する必要がある。こうしたなかで、右にも触れたように、文献からも主要な北方への交易品であったことが知られる鉄が、考古学的にも注目されてきた(天野一九八三一九八九、世田二〇〇三、鈴木信二〇〇四、鈴木琢二〇〇五二〇〇六二〇一)他、とくに近年、一〇世紀以後の鉄製品の顕著な交易拡大、またその時代の太平洋ルートの開発などが指摘されていることは、その年代観を含めて重要な成果である(鈴木琢二〇〇五二〇〇六二二)他。鈴木琢也は、鉄製品が八〜九世紀は道南を飛び越えて道央の石狩川低地帯の石狩川水系河口域や下流域に濃厚に分布し、その種類も刀子、斧、鋤、鎌、釘、紡錘車など実用的な生活用品に加えて武器類などが流入していることから、交易路として出羽と石狩低地帯を結ぶ日本海ルートを設定し、つづいて一〇世紀になるとさらに北海道西部や北西部、オホーツク海沿岸にまで分布が拡大することから、この一〇世紀を画期とみなし、日本海からオホーツク海へ延びるルートが形成され、さらに太平洋ルートによる交易もはじまったとし、一〜一二世紀にはその二つのルートを通じて活発な交易が本格的に展開され、太平洋側を中心とする北海道南部や北海道東部にまで鉄製品の分布が広がることを指摘している。また須臾器についても同様の可能性がある。

さてその一方で、北方から「日本国」側へ向かう産品についてはどうか。奥州産の金・馬については、いまこゝであらためて言うべきこともなからう。近年もつぱら注目されてきたのは、あきらかに本州の産物ではない、種々の獣皮、鷹の羽の類、昆布などである。

早く「阿倍比羅夫北征」に関する一連の史料に鷹皮が散見され、それが当時かなり高価なものであったことは、高麗子麻呂のエピソードで著名であるし(『日本書紀』齊明天皇五年是歲条(『書』II-18)、渡嶋蝦夷の貢納する「雉皮」が延暦二十一年六月二十四日太政官符にみえ「類聚代格」卷一九(『書』II-56)、より具体的には独狩狩・葦鹿・鹿皮などの名が、「日本後紀」弘仁元年九月乙丑条所引の「大同二年八月十九日下彈正台例」にみえる(『書』補遺II追加3)。それらの北方の物産は「延喜式」卷二・三民部下の「交易雜物」の項に、

陸奥国 羆鹿皮、独狩皮、鹿鹿皮、砂金三百五十兩
 羆鹿六百斤、鹿鹿六百斤、羆鹿皮二百斤、
 出羽国 独狩皮、鹿鹿皮、羆鹿皮、
 羆鹿皮、鹿鹿皮、鹿鹿皮、

(『書』III-88)

と規定されるに至り、また水豹や鷹羽などは、やや下つて一〇世紀の儀式書である『新儀式』卷四野行幸事(『書』III-149)・『西宮記』卷九外衛佐事(『書』III-149)などにみえるようになる。

さてこれらの獣皮はそれぞれ具体的にはいかなる動物のものなのであろうか。葦鹿はニホンアシカ、水豹はアザラシ、とりわけ豹紋の明確なゴマフアザラシであることが、問題は独狩(独狩狩)の指し示す動物であるが、これまで北方系の犬、アザラシ、オットセイ、ラッコなどに比定する諸説があるが、断定は難しい。たゞ武蔵亮平が、従来のアザラシ説をさらに深めた研究を発表していることに注目できる(武蔵二〇〇四二〇〇六)他。従来のアザラシ説の最大の根拠は、アイヌ語でアザラシを指す「トツカリ」が「独狩」の音に近いところにあるが、武蔵はさらに、独狩皮と水豹皮の用途が類似していること、独狩と水豹とが併記される(『和名抄』)だけで、しかもそこでは独狩の実態が全く理解されていないこと、つまりアイヌ語の表音語である独狩から水豹へ用字が変化しただと考えられることなどを根拠に、独狩=Aザラシ説をあらためて主張した。

この武蔵説は、従来のアザラシ説よりもはるかに説得力を持つものであるが、なお検討すべき点も残されているように思われる。たゞえば先にふれた「大同二年八

第14節 石江遺跡群の歴史的背景とその展開

小口 雅史(法政大学)

はじめに

二〇〇三年度から新田(一)遺跡や高間(一)遺跡を皮切りに発掘調査が開始された石江遺跡群が、全国的に一気に注目を集めるきっかけとなったのは、二〇〇四年夏に新聞報道された、新田(一)遺跡における「国内最北の木簡出土」である。そこでは古代国家の制度など無縁であろうと信じられてきた本州北辺の地で、律令国家の盛期に普遍的に「日本国」内で用いられた付札風の「荷札木簡」が発見されたことと、都の貴族が正装するとき用いる脛履の北奥の地からの出土、さらには奇串・形代の出土から貴族社会や地方に置かれた国家機関で行われていた陰陽道による律令的祭祀が北奥の地で本格的に実施されていたという推測をも加えて、この遺跡を陸奥国府の祖先機関「官衙類似遺跡」とみなすべきことなどが主要された(鈴木清二〇〇四・二〇〇七、斉藤二〇〇六、二〇〇七、三浦二〇〇六、また養島二〇一〇参照)。まさに北奥地域の歴史像の大転換が提示されたわけだ、以後この遺跡の重要性が学界でもしばしばとりあげられることとなった。

筆者の所属する法政大学国際日本学研究所の研究セクションの一つであった「日本」のなかの異文化、プロジェクトでも、かつてこの遺跡を、北の境界地域の遺跡の代表としてとらえ、やはり南方世界のなかで特異な遺跡として、同じころに注目を集めていた喜界島の城久遺跡群と対比する作業を行ったことがある(トラインナー他二〇一〇)。その段階では、ようやく石江遺跡群についての正式な発掘調査報告書が刊行され始めたことを受けて、「重要な遺跡である」とは確かであるから、世論を盛り上げることは大切である。しかしその目的も達成され、た段階では、「あらためて、これらの遺跡を冷静的に見直す必要も強く感じられた。先入観無しに再評価に取り組んでみたかった、というのが北方グループの共通の思いだったのではないか」と述べて「小口二〇一〇」、遺跡発見当時のダイナミックな論調を、意図的にやや抑制的にとらえようとするスタンスをとっていた。

もちろん、その後それに対して、それを受け入れる論文もあれば、あるいはまた当初の見解を維持すべきであるという反論も現れた。本稿では、それらを踏まえ

て、あらためて現段階での筆者の考えをまとめたいと思うが、これが最終結論となるとは考えていない。というのは、この遺跡の真の評価は、今回刊行される最終報告書をもとに、他の関連する近隣諸遺跡の発掘調査報告書の成果とも擦り合わせながら、あらためて全体的に再検討する必要があるからである。本稿はそのための一つの素材としてとらえていただければ幸いである。

なお筆者は文献史学の研究者であるが、そもそもこの時代の青森地域に直接関係する、かつ在地に密着した文献史料は皆無とも過言ではない。周辺の歴史的理解をもとに、考古学資料を援用しながら推測する部分が多いのが現状である。本稿も様々な可能性のなかから、どれがもっとも史実に近いかという一つの解釈を示しているにすぎない。

一 北方世界における交易と交流

— 石江遺跡群の歴史的背景にあるもの(一) —

北方世界の大きな歴史の流れ全体を通じての特徴として注目されているのが、「交易と交流」である。それは稲作文化中心の「日本国」においてよりもはるかに比重が高いことは近年の多方面にわたる研究によって動かし難い事実として認識されるようになってきた。

本稿に関わる時代について、「日本国」から北方世界への供給品として従来から指摘されてきたものは、鉄・須恵器・布・米・塩などであり(三浦一九九一・一九九四他)、逆にその見返りとして北方世界から「日本国」へ供給されたものとしては、金や馬、さらには津軽海峡を越えた地域からの種々の毛皮類ないし鷹の羽の類、あるいは昆布などである。これらのうち、鷹の羽や昆布は本州側でも採れないわけではないが、北海道産のそれは質が高く珍重された。

「日本国」から北への供給品については中央の文献に記載されることは稀である。わずかに知られているのは、七世紀のいわゆる「阿倍比羅夫北征」時の肅慎との「沈黙交易」に際して比羅夫が用意した「罽布・兵・鉄」(日本書紀) 斉明天皇六年三月条(「書」一〇七)、あるいは「錦袍袴・緋紺袴・袴等」(「書」一〇七) 持統天皇十年三月十二日条(「書」二一七)、やや時代以降が「国家之貨」とされた「罽」(「類聚三代格」 卷一九延暦六年正月二十一日太政官符(「書」二一七)) などであつて、鉄や布類が早くから北方への重要商品として送られていたことが確実視されているが、文献からはこれ

第V章 総括

第1節 縄文時代・弥生時代

本項で対象とする遺跡は、石江土地区画整理事業用地及び東北新幹線建設事業用地内で発掘調査が実施された、新田（1）遺跡、新田（2）遺跡、高間（1）遺跡、高間（6）遺跡、新城平岡（2）遺跡、新城平岡（4）遺跡、新城平岡（7）遺跡の計7遺跡である。

1. 時期区分と呼称

本項における時期の区分と土器型式名は下表のとおりである。

表1 時期区分と型式名

時代	時期区分		型式名	
縄文時代	前期	前半	初頭	表館 早稲田6類
			前葉	深郷田
			中葉	円筒下層a
		後半	後葉	円筒下層b 円筒下層c
			末葉	円筒下層d
			中期	前半
	前葉	円筒上層c 円筒上層d		
	中葉	円筒上層e		
	後半	後葉		榎林 最花
		末葉		大木10併行
		後期		前半
	前葉		十腰内Ⅰ 十腰内Ⅱ	
	中葉		十腰内Ⅲ 十腰内Ⅳ	
	後半		後葉	十腰内Ⅴ 十腰内Ⅵ
			初頭	大洞B
			前葉	大洞BC 大洞C ₁ 大洞C ₂
	後半	後葉	大洞A 大洞A'	
		末葉	砂沢	
		弥生時代	前期	前～中葉
	後葉			宇鉄Ⅱ・井沢
	中期		前葉	田舎館
			後葉	念仏間

2. 各遺跡の概要

①新田（1）遺跡

本遺跡の発掘調査区は、国道7号西バイパスを境に南北2ヵ所の区域に二分される。北側の区域は青森県埋蔵文化財調査センターにより新幹線ルートの橋脚建設予定地3,100㎡を対象に実施された。南側の区域（図1）は、青森市教育委員会により新幹線建設事業用地1,200㎡及び土地区画整理事業用地7,935㎡を対象に実施された。総計12,235㎡より検出した遺構は、堅穴住居跡37軒、土坑345基、溝状土坑16基等であり、ほとんどが古代以降の時期にあたる。このうち、縄文時代の遺構は、堅穴住居跡1軒、土坑33基、溝状土坑16基である。

時期別に見ると、縄文中期の円筒上層c式前後の土坑2基、縄文後期の十腰内V式の堅穴住居跡1軒及び十腰内Ⅰ式の土坑8基ならびに晩期大洞C₂～A式の土坑1基である。北側の区域（沖積地）では、十腰内Ⅰ式の土坑底面からはオニグルミ内果皮（殻）が出土しており、発掘時でも底面から湧水していたことから外果皮の処理及び短期的な貯蔵が考えられている（伊藤2013）。

遺物は、縄文前期の表館式、早稲田6類、深郷田式、円筒下層c式・d式、中期の円筒上層a式・c式・d式、大木10式併行、後期の十腰内Ⅰ式及びⅤ式、晩期の大洞A式などの土器や石器等が出土している。

②新田（2）遺跡

本遺跡の発掘調査は、土地区画整理事業用地の北半を青森県埋蔵文化財調査センターが5,000㎡、南半を青森市教育委員会が4,970㎡の計9,970㎡を実施し（図2）、堅穴住居跡131軒、土坑476基、焼土遺構31基、捨て場遺構1ヵ所を検出した。このうち、縄文時代の遺構は、堅穴住居跡18軒、土坑97基、溝状土坑24基、土器埋設遺構3基、焼土遺構2基、捨て場遺構1ヵ所である。

堅穴住居跡は、縄文前期初頭の表館式が2軒、中期の円筒上層a式前後が1軒、円筒上層c式が4軒、大木10式併行が2軒、後期の十腰内Ⅰ式が2軒、その他時期の特定が難しいものが7軒ある。土坑は、前期初頭が7基、円筒下層式が18基、円筒上層式が8基、榎林式が1基、大木10式併行が2基、十腰内Ⅰ式が36基、時期不明等が25基で、これらのうち47基がフラスコ状土坑であった。焼土遺構は、時期不明が2基である。土器埋設遺構は、円筒上層式が2基、十腰内Ⅰ式が1基確認された。溝状土坑は、円筒下層式や十腰内Ⅰ式期ものも多くみられる。捨て場遺構は、新城川に面した丘陵先端の調査区北西側の標高6～7mの斜面部及び低地に位置し、帯

状に検出された。縄文前期から晩期にかけての多量の土器、石器、土製品、石製品などが出土し、時期によって異なる分布が確認されている。この捨て場遺構の南側付近には、十腰内Ⅰ式の堅穴住居跡及び土坑が、まとまって分布している。

遺物は捨て場遺構を中心に出土し、縄文前期では表館式や早稲田6類、深郷田式、円筒下層d式、中期では円筒上層a～d式、後期では十腰内Ⅰ式が大半を占め、ほかに十腰内Ⅱ式や十腰内Ⅴ式の破片もみられる。晩期では大洞C式の土器片が出土している。

③高間(1)遺跡

発掘調査面積101,205㎡の調査区(図3)より、堅穴住居跡89軒、土坑581基、溝状土坑59基、ビット2,897基等を検出した。

これらのうち、縄文時代に属するものとしては、堅穴住居跡3軒、土坑32基、溝状土坑59基、ビット2基、土器埋設遺構1基となっており、10haをこえる面積の割には集落構造を理解できるだけの資料は乏しい。

縄文前期では円筒下層c式前後の土器片を埋納した土器埋設遺構1基、円筒下層d式の土坑3基及び溝状土坑2基、中期では円筒上層式のテラスを有する堅穴住居跡1軒及びビット1基(分類上はビットとされているが形態は直径80cm内外の土坑)、大木10式併行の堅穴住居跡1軒、後期では十腰内Ⅰ式の堅穴住居跡1軒(分類上は堅穴住居跡とされているが平面形が不整形であるとともに柱穴や炉の検出が認められないため、居住施設としての機能性は不明)、土坑7基(うちプラスチック状土坑1基)、溝状土坑3基、ビット1基を検出した。このうち十腰内Ⅰ式のビット(SP-029)は、削平によりほとんど残存していない状況であるが、底面直上より大型壺形土器の底部から胴下半部にかけての破片が出土しており、再葬土器棺墓の可能性が考えられる(写真1)。以上の遺構は、縄文中期中葉の円筒下層d式が東側(B～E区)、中期末葉の大木10式併行が南西側(F～3区)、後期前葉の十腰内Ⅰ式が北側(D・E区)に分布する傾向が認められる。また、狩猟用落し穴と考えられる溝状土坑59基(うち前期2基、後期3基)が調査区全体にわたり分布している。

遺物は、縄文前期の円筒下層a～d式、中期の円筒上層a～d式、大木10式併行、後期の十腰内Ⅰ式、晩期の大洞C₁～A₁式まで幅広く認められるが、破片資料が多く量的には非常に少ない。

弥生時代では、遺構の検出は認められないものの、弥生前～中期の二枚桶式や五所・井沢式に相当する土器片が古代以降の溝跡や堅穴住居跡の覆土に混入した状態で出土している。



写真1 ビット(SP-029)と土器出土状況

④高間(6)遺跡

発掘調査面積17,644㎡に堅穴遺構5基、土坑64基、溝状土坑3基、ビット117基等が分布している。これらの遺構から縄文時代と特定される遺物は出土していないものの、プラスチック状を呈する土坑1基(D区10.SK-001)や溝状土坑3基(B区STP-001～003)は縄文時代に属するものと考えられる。遺物は縄文中期の円筒上層式及び弥生中期後葉の念仏間式の土器片が若干出土している。

⑤新城平岡(2)遺跡

発掘調査面積3,307㎡の調査区より堅穴住居跡2軒、土坑21基、沢(遺物包含層)1ヵ所等を検出した。これらのうち、縄文時代に属するものは、縄文前～晩期の土器片が出土した土坑8基(SK-01、03、04、08、10～13)である。遺物は沢地形に堆積する遺物包含層からの出土がほとんどで底面付近の11層より縄文後期初頭～前葉、その上位にあたる9層より後期前葉の十腰内Ⅰ式土器が確認されている。この11層と9層の間に位置する10層から後期前葉のものとみられる漆器鉢(図10-113)が出土している。

⑥新城平岡(4)遺跡

発掘調査面積15,857㎡の調査区(図4)より堅穴住居跡(堅穴遺構含む)69軒、土坑142基、溝状土坑18基、土器埋設遺構2基、ビット1,508基等を検出したほか、埋没木の広がりをも1ヵ所確認した。

これらのうち縄文時代と考えられる遺構は、堅穴住居跡14軒、土坑69基、溝状土坑17基、埋設土器遺構2基となっており主に、新城川に程近い遺跡北端部の標高9m前後の丘陵地(A区)に集中している。時期は縄文中期前葉の円筒上層c式と後期後葉の十腰内Ⅴ式に大きく分かれる。円筒上層c式(推定含む)では6軒の堅穴住居跡を検出した。平

面形は楕円形を呈する4軒の住居跡が1カ所まとまっており、うち3軒が東西方向、1軒が南北方向を向いている。ほかに円形のものや形状不明のものがある。住居内からはSI-09の床面より刺突具と考えられる石器4点がセットで出土し(写真2、図6-38~41)、SI-18の住居内土坑より削器(篋状石器)が複数点埋納された状態で出土した(写真3)。土坑は12基を検出し、床面から石冠2点が出土した土坑(SK-26)や、土器が完形状態で出土した土坑(SK-45、53)などがある。埋設土器遺構は2基検出し、いずれも土坑状の掘り込みから正位または横位



写真2 竪穴住居(SI-09)床面出土の石器



写真3 竪穴住居(SI-18)内土坑埋納削器

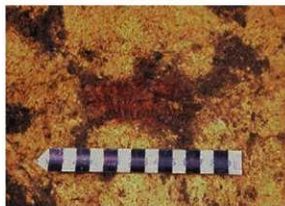


写真4 竪穴住居(SI-21)床面出土の結歯式赤漆塗壺

の状態で土器が出土した。

十腰内V式では、6軒の竪穴住居跡が集中して検出されており、ほとんどが円形を呈する。住居跡の規模は直径4.6~8.1mを測り、円筒上層e式の住居跡(直径2.8~4.6m)と比べかなり大きい。SI-21の床面からは完形もしくは略完形の壺や注口土器のほか、結歯式赤漆塗壺1点(写真4)が出土した。また、SI-06の床面からは、動物的な形状をした香炉形土器の上半部(図11-132)も出土している。土坑は、重複したSK-75・76の2基より壺や鉢形土器の接合資料が出土しているが、周辺に廃棄されていたものが流れ込んだ影響も考えられる。

また、時期の特定が困難な遺構として、土坑55基、溝状土坑17基が認められ、土坑のほとんどは竪穴住居跡と同様に遺跡北端部に集中する。一方、狩猟時の落し穴と考えられる溝状土坑は、遺跡中央から南半にかけて広く分布し、遺跡北端の集落域とは場の使い方が明確に異なっている。

遺物は、集落を含む遺跡北東部(A区、B区、C区)に主に分布し、縄文前期初頭の表館式や早稲田6類、前期中葉の円筒下層e・d式、中期中葉から後葉の円筒上層e式~最花式、後期前葉の十腰内I式、後期後葉の十腰内V式、晩期の大洞BC~A式土器が認められる。これらの中で主体的なのは、竪穴住居跡と同様に、円筒上層e式と十腰内V式であった。

弥生時代では、人為的な遺構は未検出であるが中期後葉の念仏間式に相当する土器片が僅かに認められる。また、遺跡北東部よりトネリコ属やハンノキ属等の樹木からなる埋没林は362・5+11calBC~302・7+10calBCの年代測定値となっており、弥生時代前期後半の年代が示されている。

⑦新城平岡(7)遺跡

発掘調査面積636㎡の調査区から竪穴住居跡1軒、土坑3基、ピット47基等を検出したほか、遺跡東の新城平岡(2)遺跡に続く沢(遺物包含層)1カ所を確認した。

これらのうち、縄文時代に属するものとしては、後期前葉の十腰内I式を主体とするSK-002及びブラスコ状の形態をもつSK-003の土坑2基が認められる。また、底面付近からは中期中葉の円筒上層e式前後や後期前葉の十腰内I式土器が出土している。

V-1
新田
縄文時代・
弥生時代



図1 新田(1)遺跡(南側区域)遺構配置図(S=1/800)

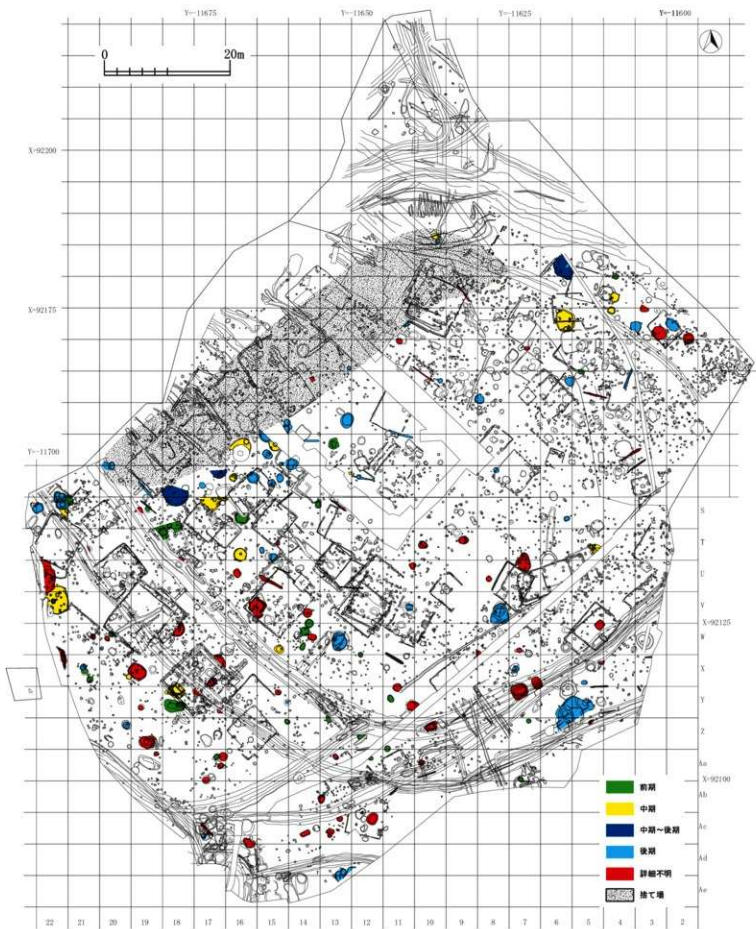


図2 新田(2)遺跡(県教委+市教委)遺構配置図(S=1/600)

V-1
新田(1)遺跡
縄文時代・
弥生時代

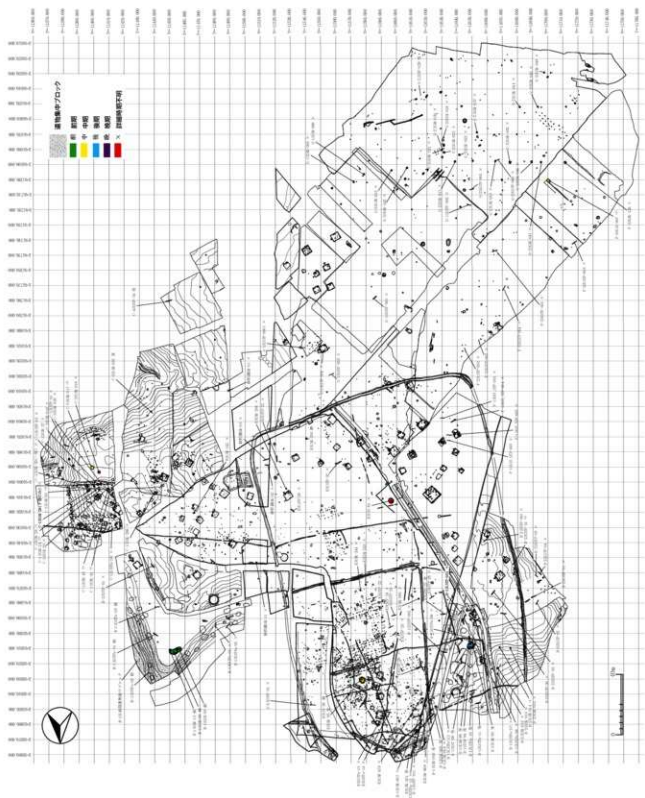


図3 高筒(1)遺跡遺構配置図(S=1/2500)

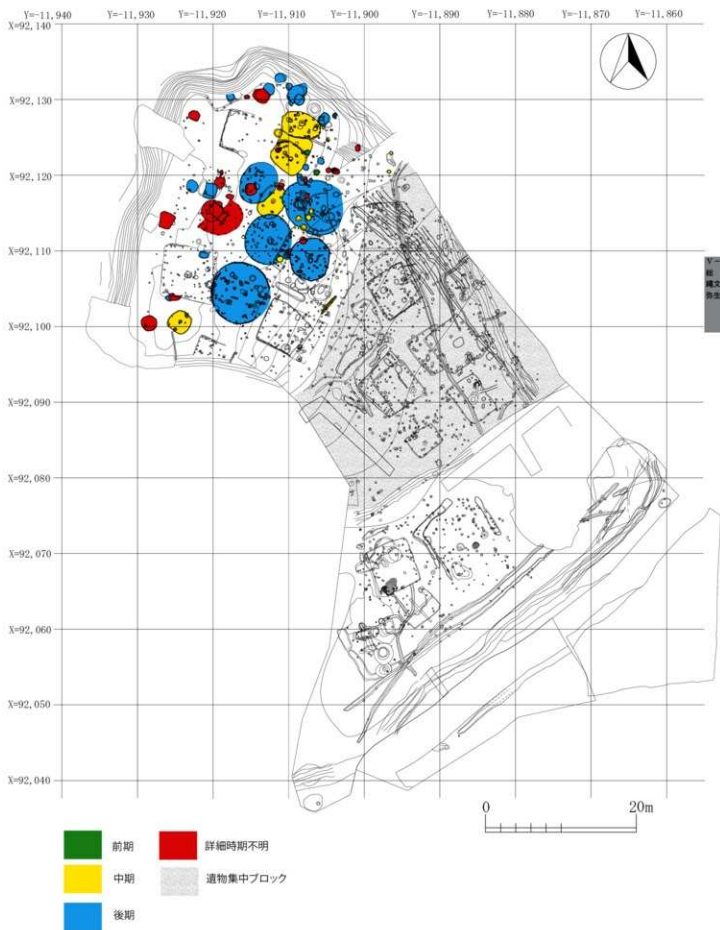


図4 新城平岡(4) 遺跡遺構配置図(S=1/500)

3. 出土遺物

(1) 縄文時代前期(図5-1~26)

前期初頭の土器は、新田(1)遺跡と新田(2)遺跡を中心に出土している。刺突列やコンパス文が施文されているものは表筒式(1~8)、押し引き沈線文が施文されているものは早稲田6類(9~14)に相当するが、判別つかない土器(15)も多数みられる。また、この時期に伴う土器片鍾(24・25)も出土している。

前期前葉では、単軸絡条体により施文される深部田式(16)が新田(1)遺跡と新田(2)遺跡から若干出土している。

前期中葉~後葉にかけては、高間(1)遺跡から円筒下層a式(17・18)と円筒下層b式(19・20)、新田(1)遺跡や高間(1)遺跡から円筒下層c式が出土している。

前期末葉では円筒下層d式の土器片を中心に各遺跡で出土しているが、高間(1)遺跡や新城平岡(4)遺跡での出土が目立つ(23)。また、この時期の土器に伴って半円状扁平打製石器(26)が出土している。

(2) 縄文時代中期(図6~8-27~60)

中期初頭の円筒上層a式は、新田(2)遺跡の捨て場遺構から出土している(27・28)。口縁部に横位の側面圧痕が3条単位で施されており、27は口縁の波頂部がM字状、直下に(状)の隆帯が貼付されている。また、28は馬蹄状圧痕を施す点で円筒上層b式に近い印象を受ける。

中期前葉の円筒上層b式も新田(2)遺跡の捨て場遺構より出土している。ほとんどの土器の口縁が波状を呈しており、口縁直下に2本単位で垂下する縦位や弧状の隆帯と区画隆帯が貼付され、その間隙に馬蹄状圧痕が施されている(29・30)。

同じく中期前葉の円筒上層c式は、新田(2)遺跡の捨て場遺構や新城平岡(4)遺跡の堅穴住居跡で良好な資料が出土している。また、新田(1)遺跡などでも出土し、分布が広がる傾向にある。土器は波状口縁のほかには平坦口縁のものがみられるようになる。口唇部には鋸歯状の隆帯を貼付するものが目立ち、口縁部文様帯の幅が円筒上層b式と比べ広がる傾向がみられ、隆帯文の間隙には刺突文を施すものが多い(31~35)。中には隆帯や縄文が施されず、刺突みの土器も見られる(36)。この時期に伴う遺物としては、刺突文や縄文原体の側面圧痕が施される土偶頭部が新田(2)遺跡で確認されている。石器では、新城平岡(4)遺跡の土坑から石冠(37)、堅穴住居跡の床面から石輪や異形石器(38~41)が1カ所にまとまって出土(写真2)しており、

それぞれを棒に装着すると鉆のような刺突具としての復元が可能となる。

中期中葉では円筒上層d式土器が新田(1)遺跡や新田(2)遺跡、新城平岡(4)遺跡から主に出土し、円筒上層c式と同様の分布となっている。波状口縁と平坦口縁のものがあり、口唇部には鋸歯状の隆帯が口縁から胴部にかけて施され、隆帯自体の幅は円筒上層c式のものに比べ若干細くなっている(47~49・51)。50・52の深鉢形土器や53の台付浅鉢形土器も、この時期の所産と思われる。43~45の土器はいずれも平坦口縁の口唇部に鋸歯状隆帯を貼付するなど、円筒上層c式の特徴を有するが円筒上層d式に併行する可能性がある。54・55に図示した土偶は中期中葉から末葉にかけてのものと考えられる。

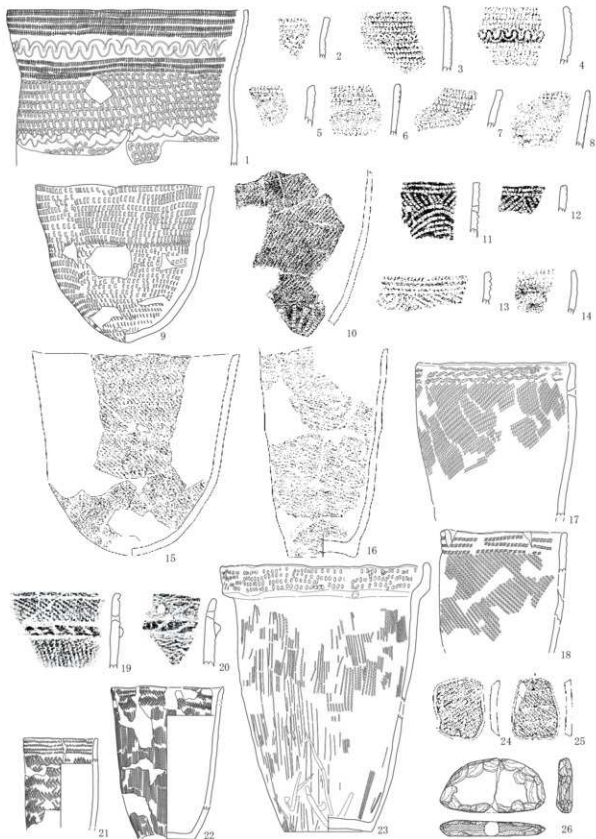
中期後半になると土器の分布が限定的となり、出土量も大幅に減少する。円筒上層e式(56)は新田(2)遺跡や新城平岡(7)遺跡、榎林式(57)や最花式は新城平岡(4)遺跡などから出土し、いずれも破片資料である。

大木10式併行は縄文を全体に施文後、沈線文の区画内の縄文を磨消したものがみられ(58~60)、新田(2)遺跡や高間(1)遺跡で出土している。石江遺跡群の南約500m地点の江渡遺跡では堅穴住居跡から当該時期の良好な資料が出土している(青森市教育委員会 2004)。

(3) 縄文時代後期(図9~11-61~123)

後期初頭の遺物は非常に少なく、弥栄平(2)式と考えられる深鉢形土器が新城平岡(2)遺跡の沢から出土した。また、神附(2)式・蛭沢3群に相当する切斯壺形土器が新田(2)遺跡の捨て場遺構から出土している(61)。方形区画文を基調とした文様が施され、切断部はアスファルトで接着されている。

後期前葉では、十腰内1a式と1b式の2段階分の型式が確認されており前者が大半を占める。十腰内1a式は、新田(1)遺跡や新田(2)遺跡、高間(1)遺跡、新城平岡(2)遺跡、新城平岡(4)遺跡、新城平岡(7)遺跡で出土し、広い範囲で分布している。中でも新田(2)遺跡の捨て場遺構から集中的に出土した。器種は、深鉢(62~68)、鉢(69・70)、浅鉢(71・72)、壺(73・74)、皿(75)、蓋(76・77)がみられる。このほか開口部が側面に位置する方形の土器の立上り部分(78)が出土し、上部に覆いを有する土器と推定される(児玉 2012)。これらの土器には、2本の沈線の両端を繋いでC字状やS字状などの文様を組み合わせた入組文、3本一組の沈線で描く鱗文や渦巻文、沈線や擦糸圧痕による



新田(1)遺跡(市108集-1):2~7, 11~14

新田(2)遺跡(市108集-1):1・8・9

高間(1)遺跡(市113集-1~3):17~20・23・26

新田(1)遺跡(県472集):10・15・24・25

新田(2)遺跡(県471集):16

新城平岡(4)遺跡(市112集-1)21・22

図5 縄文時代前期の遺物(S=1/5)

V-1
新田
縄文時代・
弥生時代

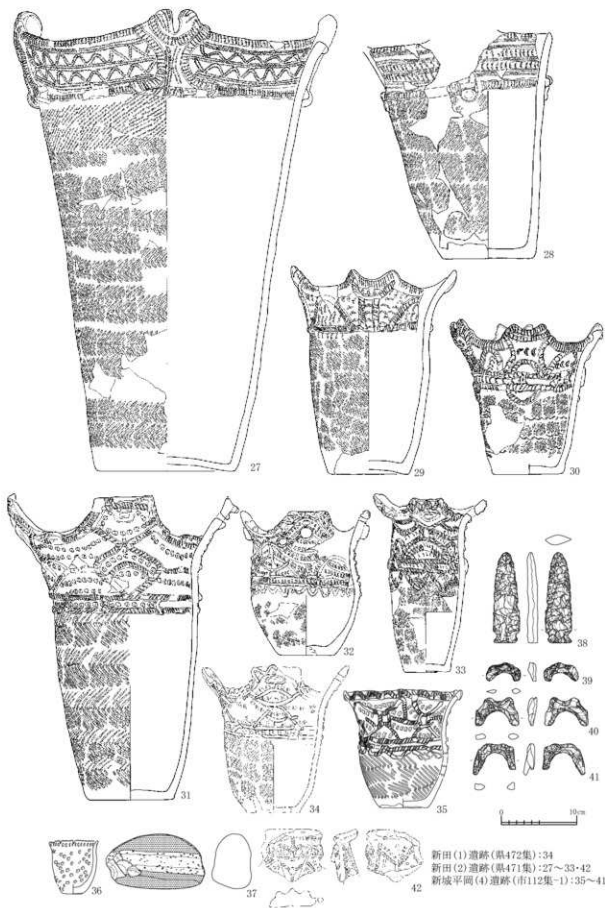
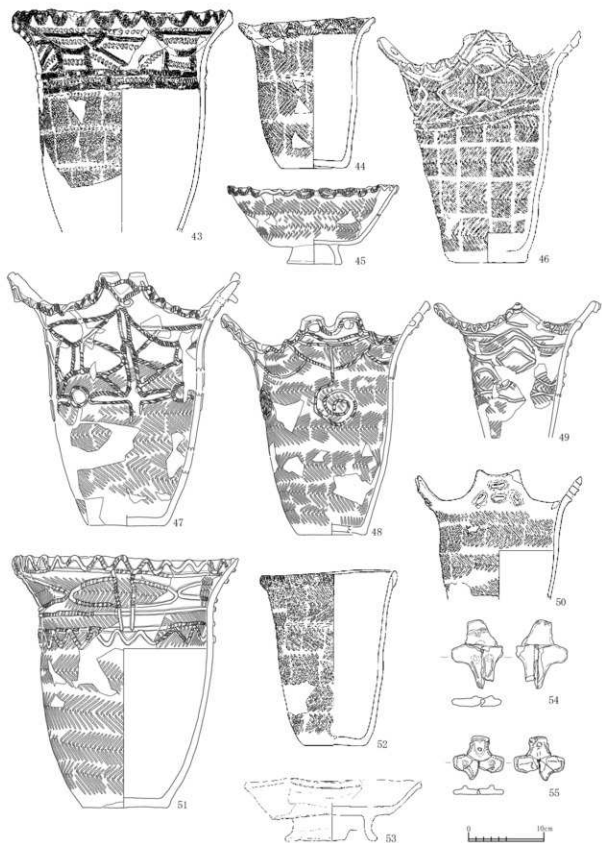
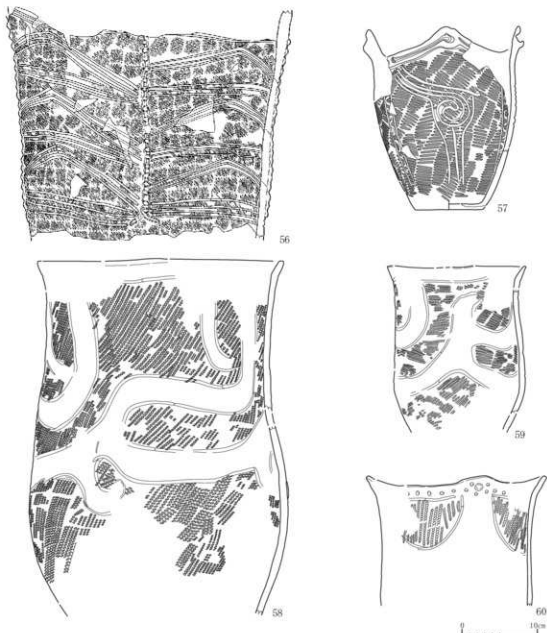


図6 縄文時代中期の遺物(S=1/5)



新田(1)遺跡(県472集):46 新田(2)遺跡(県471集):43・44・50・52・53
 新城平岡(4)遺跡(市112集-1):45・47~49・51・54・55

図7 縄文時代中期の遺物(S=1/5)



新田(2)遺跡(集471集):56 新城平岡(4)遺跡(市112集-1):57 高間(1)遺跡(市113集-3):58~60

図8 縄文時代中期の遺物(S=1/5)

格子目文などが施されている。

十腰内Ib式は、新田(1)遺跡や新城平岡(4)遺跡で出土しており、分布が狭まるとともに出土量も減少する。深鉢(80・81)、壺(79)がみられ、前段階と比べ文様帯の幅が狭くなり文様が横位に展開するもの(79・80)や磨消縄文手法によるもの(81)がみられる。

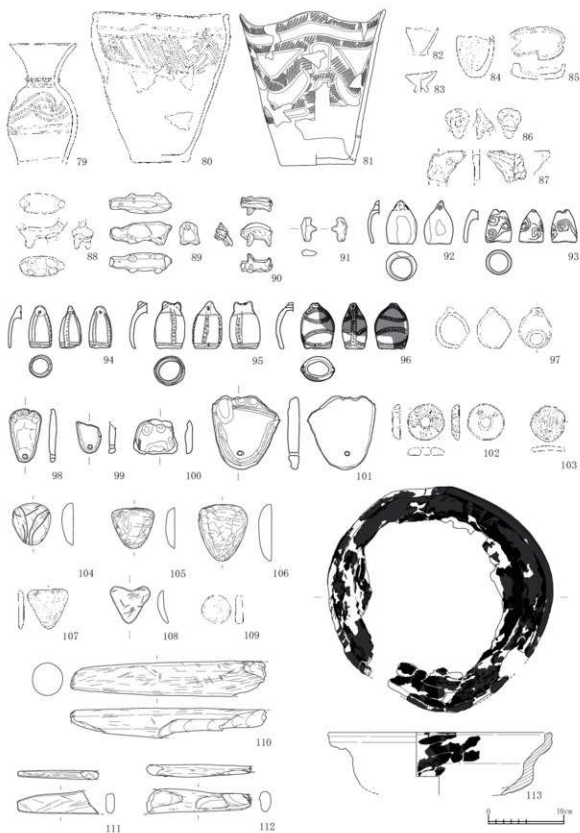
また、後期前葉(主に十腰内Ia式)の土製品や石製品が多数出土しており、ミニチュア土器(82~85)や動物形土製品(88~91)、鐔形土製品(92~96)、靴形土製品(97)、足形付土版(98~101)、有孔土製品(102)、土器片利用土製品(103)、

三角形岩版(104~108)、円形岩版(109)などが認められる。石刀(110~112)は、晩期まで下る可能性も考えられる。新城平岡(2)遺跡からは十腰内I式と推察される口径29.8cmの漆器鉢(113)が出土している。内面には赤色漆の上に黒色漆が、外面には黒漆が目視観察される。光学顕微鏡観察や赤外分光分析によれば(分析サンプルは内面が赤色漆部分と推察される)内面には下位より黒色炭粒が散在する下地層、混ぜものない漆層、ベンガラ成分による赤色漆層、外面には下位より黒色炭粒が散在する下地層、混ぜものない漆層、一部に酸化鉄が混じる水銀朱による赤色漆層、ベンガラ成分による



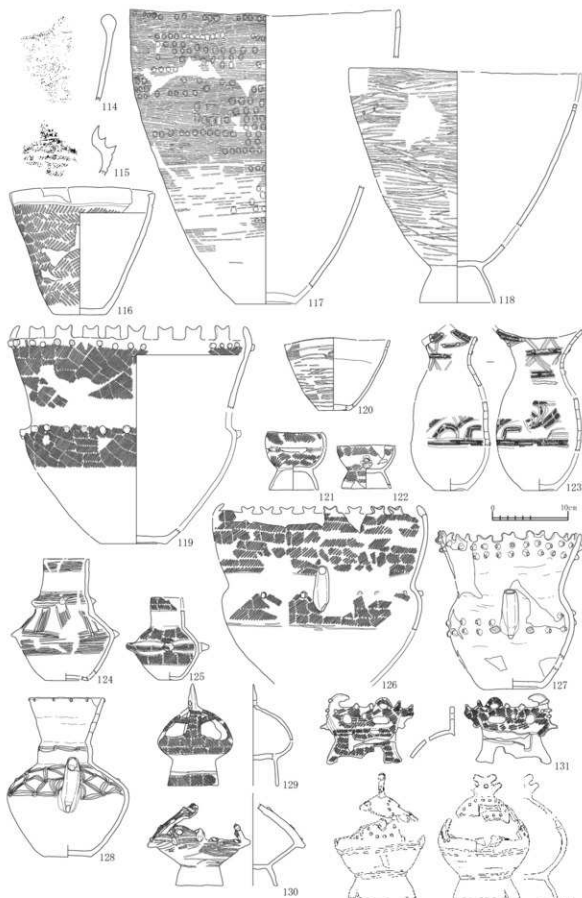
新田(2)遺跡(第471集):61~63・65~78
高間(1)遺跡(市113集-2):64

図9 縄文時代後期の遺物(S=1/5)



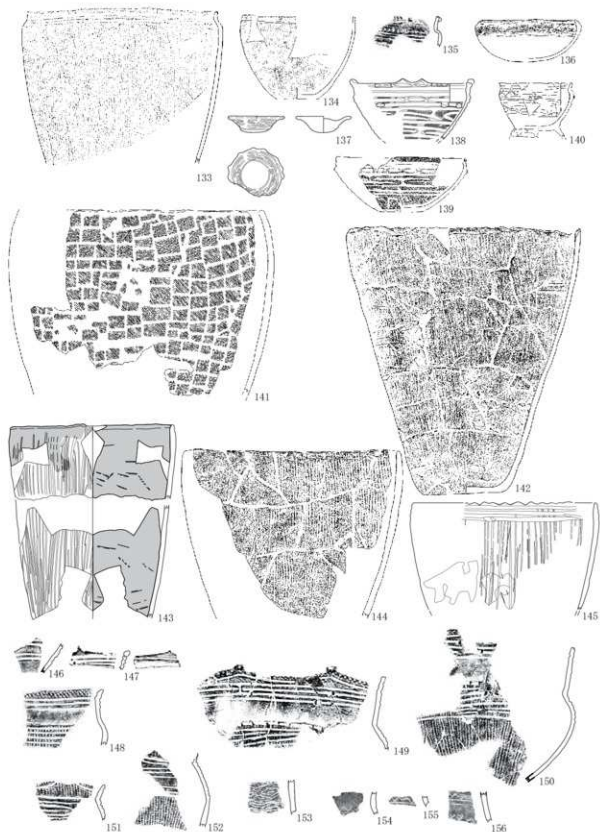
新田(1)遺跡(市108集-1):110 新田(1)遺跡(県472集):79-80
 新田(2)遺跡(市108集-1):92-96-98~101-104~106-111-112 新田(2)遺跡(県471集):82~88-97-102-103-107-109
 高間(1)遺跡(市113集-1):108 新城平岡(2)遺跡(市112集-3):113 新城平岡(4)遺跡(市112集-1):81-89~91

図10 縄文時代後期の遺物(S=1/5)



新田(1)遺跡(県472集):132 新田(2)遺跡(市108集-1):114・115 新城平岡(4)遺跡(市112集-1):116~132

図11 縄文時代後期の遺物(S=1/5)



新田(1)遺跡(市108集-1):137-143 新田(1)遺跡(県472集):139~142・144
 新田(2)遺跡(県471集):133・134・136 高間(1)遺跡(市113集-1):135・146~152 高間(6)遺跡(市116集-1):154~156
 新城平岡(4)遺跡(市112集-1):153 新城平岡(2)遺跡(市112集-3):138・145

図12 縄文時代晩期・弥生時代の遺物(S=1/5)

赤色塗層からなる塗膜層が認められた。

後期中葉の土器は、口縁に突起をもち、波状入組文などの磨消文様や数段の平行沈線にS字状の小沈線を有する十腰内Ⅱ式(114・115)が新田(2)遺跡から出土している。また、同一原体により方向を変えて回転した羽状縄文を施す十腰内Ⅲ式(116)が新城平岡(4)遺跡から出土している。

後期後葉では十腰内Ⅴ式が主体的であり、新城平岡(4)遺跡の堅穴住居跡から良好な資料が出土している。器面全体に条痕文が施された深鉢(117)や鉢(118)、台付鉢(120)、碗形の台付鉢(121・122)、瘤状の突起を有する鉢(119)や壺(123～125)、注口土器(126～128)、香炉形土器(129～132)が出土した。また、堅穴住居跡(SI-21)の床面から結菌式赤漆塗整柵1点も出土した(写真4)。

(4) 縄文時代晩期(図12-133～147)

ほとんどが晩期後半のものである。晩期中葉の大洞C₂式は新田(1)遺跡や高岡(1)遺跡で出土している。屈折する口縁部に平行沈線が巡る深鉢(133)や口縁に刻みや刺突を有する鉢(134・135)、弧状の沈線を配置する浅鉢(136)がある。また、この時期に併行する聖山Ⅰ式にもみられる入組文(137・138)も認められる。

大洞A式は、新田(1)遺跡などから出土しており、横位連続工字文が施された浅鉢(139)やT字状の沈線を配置した台付鉢(140)がみられる。全体に縄文や縦方向の条痕文を施すもの(141～145)は、大洞C₂またはA式に属する深鉢である。143は、外面が口縁付近(写真5)と内面が全体的(写真6・7)に赤色顔料の付着がみられる深鉢で、赤色顔料を煮沸製粉する際の土器であったと考えられる(児玉2005)。晩期後葉の大洞A'式は高岡(1)遺跡から出土しており(146・147)、口縁部には変形工字文が施されている。

(5) 弥生時代(図12-148～156)

弥生時代の遺物は、いづれも土器片で出土量も極めて少なく、前期中葉までの資料は確認されていない。前期後葉の二枚橋式に相当する土器(148～150)は、平垣口縁の甕や波状口縁を有する鉢がみられ、肩部には変形工字文が施されるものもある。また、前期後葉～中期前葉の五所式や井沢式に相当する土器(151・152)も出土している。中期後葉では、念仏間式に相当する土器(153～156)が出土し、重層する菱形文や連続山形文が施されている。

(児玉 大成)

引用・参考文献

- 伊藤由美子 2013 「青森平野西端部における低湿地形型竈穴を備えた縄文集落の変遷について—新田(1)・同(2)遺跡を例にして—」『青森県立郷土館研究紀要』第37号
- 児玉大成 2005 「亀ヶ岡文化を中心としたベンガラ生産の復元」『日本考古学』第20号 日本考古学協会
- 児玉大成 2012 「甕を有する縄文土器—十腰内Ⅰ式の特異な土器について—」『青森県考古学』第20号 青森県考古学会



写真5 赤色顔料付着状況 口縁部外面(図12-143)



写真6 赤色顔料付着状況 口縁部内面(図12-143)



写真7 赤色顔料付着状況 胴部内面(図12-143)

第2節 古代

本項で対象とする遺跡は、石江土地区画整理事業用地及び東北新幹線建設事業用地内で発掘調査が実施された、新田(1)遺跡、新田(2)遺跡、高間(1)遺跡、高間(6)遺跡、新城平岡(2)遺跡、新城平岡(4)遺跡、新城平岡(7)遺跡の計7遺跡である。

構成としては、①前提となる概念や資料の提示、②新城平岡(2)・(4)・(7)遺跡の消長、③高間(1)遺跡の消長、④新田(1)・(2)遺跡の消長、⑤石江遺跡群全体の古代に関する総括とする。なお、図・表番号については第1節同様本項のみの通番号とした。

1. 前提となる考え

本項の記述に対し、解釈上様々な差違が生じることが想定される。全てについて触れることは難しいが、前提となるいくつかの考えについて提示する。

A. 遺構に関する情報について

筆者は、本報告書の作成年度の最中に船木義勝氏が主宰する北東北古代集落遺跡研究会に参加し、明治大学大久保忠和考古学振興基金2011年度～2013年度奨励研究の共同研究『古代末期の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』として、青森県津軽地方の堅穴建物跡について中泊町博物館齋藤淳氏とともに集成作業を行った。成果報告書の刊行は本報告書よりも後になる予定だが、集成作業の成果等に関する記述については本報告書作成より前に完了しているため、内容について一部齟齬が生じる箇所が存在する。本遺跡群の成果に関する情報については、本報告書に記載される事

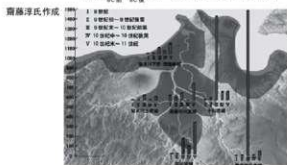
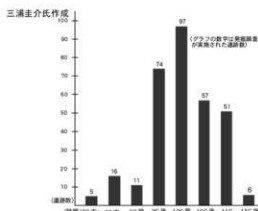


図1 津軽地域の堅穴建物跡の増減数(船木2009を一部改変) 項が優先することを予め断っておきたい。

作業では、8世紀代の資料4軒を含む155遺跡4,029軒の堅穴建物跡を集成した。時期不明資料が定量存在する点や小地域によって調査件数の多寡が生じるため全てを実態と判断することはできないが、一定量の傾向は確認できた状態である。

集成の結果、地域全体として後述する時期区分中5期としたB-Tm火山灰降灰前までの10世紀前半までが増加傾向で、その後6期の時点で減少し、7期とした10世紀後半の時点で若干増加し、11世紀とした8期の時点で激減している状態である。

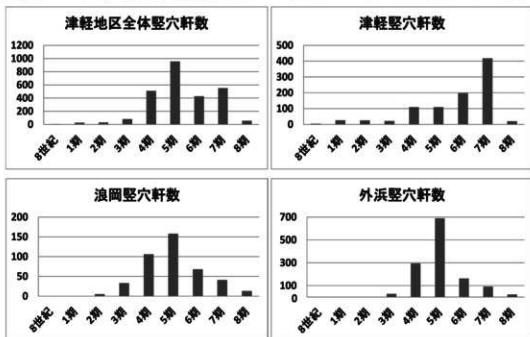


図2 北東北古代集落研究会での集成による津軽地域の堅穴建物跡の増減数

後述するが本地域では10世紀前半に十和田a火山灰(To-a)、白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)の二種類の火山灰が降灰し、その火山灰を指標とした年代決定がなされ、関連した研究が行われている。ただ、火山灰が介在しない時期の年代としては明確な紀年銘資料や施釉陶器等の情報が非常に少なく、二次的な要因が多分にあり不明瞭な点も否めない。前述のとおり時期不明の資料も多数含む状況ではあるが、図1に掲載した従前の集成内容(上段三浦圭介氏、下段齋藤淳氏)と比較すると地域全体として6期から7期にかけての増加の傾向が確認できた点と、さらに小地域(①津軽平野、②浪岡地区、本遺跡群が該当する③外浜地区)の単位での消長を比較すると、①津軽平野地区が4期に増加となるが他地域ほど際立った増加とはならず、5期まで定数を占める状況で、それが他地域では減少に転ずる6期の時点で増加する傾向が見られ、さらに7期の時点で増加傾向となる。②浪岡地区と③外浜地区は量の差があるが、傾向としてはほぼ類似した傾向で10世紀前半をピークに減少に転じる状況である。

研究会を主宰する船木氏は、近年白頭山-苦小牧火山灰に関する検討を加え、白頭山-苦小牧火山灰の噴火に伴う気候変動が起因となって天慶二年の出羽天慶の乱に結びついたという論考などを発表している(船木2011)。確かに白頭山の噴火が大規模なものであり、地球規模の気候としても変動する要因があったことは否定しない。松本建速氏が補正し紹介した阪口豊氏の古気候曲線についても寒冷側のピークとなっている(松本2012)。ただ、後述する土器の部分でも同じ視点で述べると、その影響が發揮・発現するのが短絡的に北東北のみに限定されると判断される場合、その論旨に疑問を持たざるを得ない。

十和田a火山灰は秋田県の米代川流域では泥流が発生し、集落を埋没させた直接的被害が発生している(小口2012)また、小口の文献でも紹介されていたが、伊藤博幸氏は陸奥側の岩手県奥州市常磐広町遺跡では降灰に伴い慌てて生育途中の稲株を刈り取ったことを推測し、降灰後に水田は放棄した事例を紹介している。同じく奥州市の中半入遺跡では火山灰降灰に伴いほとんどの水田が放棄されたものとしているが、比較的火山灰の降灰が薄い地点は火山灰を除去し、水田耕作を再設定していると解釈している(伊藤2010)。火山灰の降灰に関する直接的な被害については放棄など断念する地点が存在する一方、可能な部分では復旧を図ろうという人の行為が存在するのをもた事実である。

白頭山-苦小牧火山灰については船木氏の研究に取りまとめられているように二度の噴火が日本に降灰が及んでおり、一度目のPhaseは年輪年代の成果から冬期で確定したとしている(船木2011)。な

お、宮本毅氏ほかによればこのPhase1については噴煙柱が最大で、Phase1のユニットCに相当する炭化樹幹の最外年輪の木材組織の観察から木が成長を止めていた冬～春先にかけてであったとした。また、ユニットDに相当するPhase2とは連続性が認められず、ある期間をあげて起こったことが想定されている(宮本ほか2004)。船木氏はPhase2をAD939春～晩夏・初秋とし天慶二年(939)4～8月の天慶の乱と関連した考察を行っている(船木2011)。

ただし、直接の降灰に関する影響は距離的な影響で日本国内では北東北～北海道に限定的で、その堆積量も最大5cm程度とされる。実際の遺跡の調査で確認される層厚は厚いもので1cm弱程度で不均一なものである。このことから、十和田a火山灰に比べると降灰に関する直接的な影響は弱いように思える。当然泥流などが発生する二次的な被害が発生する要因もない。弘前大学榮正敏氏の成果によると青森県内の遺跡から検出した白頭山-苦小牧火山灰はPhase2の段階の資料のみであるという(柴・岩下2005)。現在でも黄砂が飛来することによって黄色砂の堆積を視覚的に認知する機会はあるが、冬期間と想定されるPhase1の段階ならともかく、Phase2の段階の視覚的な影響がどの程度作用可能かどうかについては判断し得ない。

また、白頭山の噴火など地球規模の大規模な噴火では寒冷化や干ばつなど気象条件の変動を引き起こす要因がある⁹⁾。田家康氏によると古代から近世にかけての気候変動をもたらした大きな要因として太陽活動の変化と火山噴火の2つがあるとしている。そして、火山活動の影響が大きいとする論文の実例をあげながらも二つの要因の気候変動と日本の気候は無縁ではないとしている(田家2013)。現在でもロシアのカムチャツカ半島では白頭山ほどではないが火山活動が活発化し、3つの火山で噴火活動が継続している。日本に直接の火山灰の降灰がない位置関係であるため、認知等が成されていないのが現状である。しかし、アメリカ大陸などでは2013年の夏は低温が続いていた状態で、冬も寒波が襲来している¹⁰⁾。イギリスでは洪水警報が発令される事態である。その一方オーストラリアでは気温が50度¹¹⁾など地球全体の平均気温は上昇の傾向である中、各地域の状況は一定ではない事態が続いている。太陽活動も弱まる時期に入っており、火山活動を含めて異常気象の発生要因は今後も増えることが想定される。ただ、そのような中でも前述のように一律に被害が生じる訳ではないので、その評価は分かるところである。このような前提に立った場合、B-Tm火山灰については直接的な降灰の影響より、間接的な環境の変化が生じたことの方が影響が大きいことが想定される。その場合、その原因を火

山の噴火と直接捉えた認知が存在したかどうかについて具体的に検討に至った史料や資料については筆者は知見を得ていない。環境の変化と捉えた場合、人間の手では変更の効かない自然環境の変化であるため、受け入れるしかない一方、人間側が乗り越えようとする痕跡は発生することが想定される。その痕跡が全国あるいは東アジア周辺などで確認されることが一つの意義であると考えられる。近年、樹木年輪の酸素同位体比測定や年輪幅を組み合わせた新しい分析が進められており、9世紀から12世紀の夏季の平均気温が明らかにされている(Cook, E. R. ほか 2012, 水野 2013)。結果によると13世紀前半代の寛喜年間(979-984)に近接した時期は極端な平均気温の低さが際立っているが、前述の松本氏のデータとは異なり10世紀中葉前後に目立った低下は見られていない状態である。また、北東北古代集落研究会の集創作業で男鹿市教育委員会の五十嵐祐介氏は、堅穴建物跡の深さが白頭山-苫小牧火山灰降灰後の6期に深くなっていることに着目している。寒冷化に伴う堅穴建物跡の構造の改変が特定の地域なのか、広範囲な傾向なのかは今後の成果の報告を待ちたい。

松本氏は前述の文献中で東北北部における集落の増加と衰退は自然環境より古代国家内に見られた私的開発の枠組みの社会環境の変化のなかで解釈すべきと述べている(松本 2012)。

考古学的資料から見ると10世紀半ばは土器の生産体系上転換期の時期にあると判断できるが、その画期について単に自然環境の変化だけでなく人間社会の転換点でもあり、その評価は一様にはならないと考える。

降下火山灰の堆積について、平成25年度の発掘調査で風倒木痕跡から十和田A火山灰(To-a)と白頭山-苫小牧火山灰(B-Tm)火山灰が検出し、サンプルとして一定量を確保した。残りの試料については乾燥させ、フルイにかけ高間(6)遺跡の調査済の荒廃した調査区内に散布を試みた。なお、地山まで掘削された面であったため識別するのにカラーズプレーで着色し、区別できるようにした(結果的に玉状に変化してしまった試料が多く、実態にそぐわない状態となった)。

観察条件が整わない情報であったためメモ的な取り扱いであるが、①地山は散布直後に吹いた風でほとんど飛散し、視認可能な試料は残らなかった。②水を撒いた地点ではある程度残存し、更に水を撒くと地形に沿って溜まる部分と堆積しない部分に分けられた。③植物の生育する坑では植物の葉の部分に堆積し、残りの部分は視認不可程度の散逸で確認が難しい状況となった。④植物を除去した坑の部分では定量の残存が認められた。ただ、植物の生育状況により土のしまり具合が弱く、灰の一部はその部

分に入り込んだ形となった。観察の翌日である平成25年8月9日には一日の降水量が7.2mm、1時間あたり最大降水量が3.6mmの降水量があった。一週間後の8月15日に観察した結果、項目④の坑の地点でくわすかに残存が観察された以外は残存していない状況に変化していた。わずかに一週間の間での出来事であるが、露頭に堆積した火山灰は流動してしまふ結果となった。To-a火山灰は『扶桑略記』延喜十五年七月十三日条に記録されて内容を適用されるケースが多い状況である。記事によると桑の葉に灰が積もり枯れたという記録が残されている。前述のとおりPhase1が冬期～春先にかけてと規定された場合、植物の繁茂は想定できず、雪の上に堆積し、降灰したと明確に視認できることが想定される。また、Phase2については前述の条件を想定した場合、To-a火山灰同様、今回観察を行った地点のように植物が生育した環境下での降灰が想定される。その場合、植物の生育が制限されるような状態や露頭条件であれば直接の堆積は認められるであろうが、山間部や荒地の場合、今回の観察で得られたような植物が生育した条件下での降灰で、堆積が一定ではないことが十分想定可能である。また、火山灰降灰時には気象状況が不安定になる事象が想定され、前述のとおり寒冷化や干魃を引き起こす要因がある。干魄の場合、水の影響は弱まることで想定され、植物の繁茂以外にも乾燥と風の影響で火山灰の堆積が視認できない状況は十分考えられる。この場合、視認可能な状況に至るには水の影響

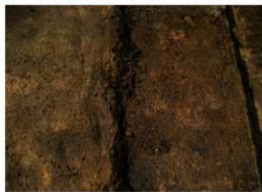


写真1 高間(6)遺跡内における火山灰の散布実験①



写真2 高間(6)遺跡内における火山灰の散布実験②

による液性流動や沈殿が必須のように思え、堆積後の二次的な要因が増すことが想定される。目視可能な程度の堆積量が見込まれる状況は、直接降灰が可能な状態であることや、火山灰が流動しやすい植物の繁茂が抑えられた環境すなわち人的介入が一定期間継続していることが考えられる。そのような場合、単純な自然堆積だけでなく、成層に人的な二次的影響が生じる恐れが想定される。前述の伊藤氏のような降灰後放棄された事例以外に降灰後も生活が継続する場合当然堆積の攪拌や再堆積が生じることが想定され、火山灰検出を年代決定に即結びつけてしまう状況には懸念がある。

実際の堆積状況は、黒色土が発達した環境が基本となるため今回視認した事例を単純に適用することは難しい。しかし、筆者のこれまでの青森市内の遺跡調査の経験から見て、B-Tm火山灰は自然堆積層が良好に残存する地点でも部分的な堆積であることが多く、降下火山灰が堆積できないケース（遺構確認面より上面に火山灰が確認された場合表土除去に伴い情報が失われるケースがある）は遺跡ごとに異なるものである。火山灰介在の取り扱いについて、対象遺跡の地形や周辺環境の理解は必須であると考える。

B. 遺物に関する情報について

ここでは遺物の呼称について若干触れておきたい。青森県内の報告書では須恵系・土師器といった区分で報告される事例が多いが、酸化焙焼成の無調整の土師器について岩手県等では「あかやき土器」、「赤焼土器」とし、秋田県等では「赤褐色土器」と呼称している。ヘラミガキ調整・黒色処理される黒色土器について「土師器」の呼称を用いることが多い状態である。また、宮城県では「須恵系土器」（桑原 1976）、関東地方でも「須恵系土師質土器」や「ロク土師器」（津野 1988 註 8 中で紹介）など地域単位で様々な呼称が存在している。東北地方の用語の取り扱いの整理については井上雅孝氏の成果の中でまとめられている（井上 2010）。赤焼土器と称される赤褐色の色調を持つ資料は、東北では 9 世紀前葉時点、筆者はあまり情報を持ち得ていないが、関東の須恵系土師質土器について末木啓介氏の成果の中で 9 世紀中葉以降に地域内生産開始される（末木 2006）など土器生産における面期の指標として意味のある内容である。また、秋田県では「赤坏」と墨書された「赤褐色土器」も出土しており、色に関する認知があったと捉えられている（津野 1988）。後述する器種名称についても当てはまる話であるが、当時の認知されていた状況と現在の考古学で認知されている呼称とは必ずしも一致は難しく、その整合性については調整が難しいものと考えられる。ただ、

同一系語の資料を比較する際に用語の区別によって検索が困難であったり、混在する状況はあまり好ましいものではなく、ましてや現代の研究者が作り上げた用語区分であるということすら忘れ、用語に関する研究が深化していく事態は、そもそもの対象が何であるかということを失っているようにも思える。

ヘラミガキ・黒色処理される土師器については、確かに古墳時代以降東日本では一般的に用いられる製作手法であるが、都城側で製作されるようになった段階での金属器鉋板製の器形作出の調整（外面底部下半をヘラ削りし、丸めようとする行為）が存在する。このような資料は、元々の東日本の土師器の祖型をくむ物ではなく、都城の製作体系に基づく器種であり、非黒色土と見てなすべき資料である。本項では黒色土処理資料を「土師器」、黒色処理された資料を「黒色土器」と呼称し、成形手法のロクロ・非ロクロを必要に応じ付加する形とする。

また、器種について本報告書の中では土師器・黒色土器の食膳具として「坏」ではなく、「椀」を用いている。この使用理由については若干触れることとする。前述で触れたが当時の社会で使用された器の名称について当時の段階でも区分が不明瞭な部分があり、現在の考古学で使用されている名称上でも必ずしも一致していない。その内容はこれまでの研究で十分まとめられており、文献側では荒井秀規氏（荒井 2004）、考古学側では西弘海氏（西 1979）や津野仁氏（津野 1988）等の業績がある。

津野氏の成果として「坏」は浅身の資料とされ器名墨書の事例として「酒杯・土酒杯」、「赤坏」、「塩坏」、「清坏」、「油坏」、漆紙文書等で「田坏」が紹介され、「椀」は坏より深身の資料とされ器名墨書の事例として「水椀」がその他漆紙文書等で「飯椀」が紹介されている。「坏」・「椀」の区分は口径 19 cm 程に求められ、地方でも蓋の有無は別として宮廷と同様の器種区分がされていたとし（津野 1988）、荒井氏もこの考え方に同調する記述が見られる（荒井 2004）。ただ、この法量区分については 8 世紀代の資料が中心で、前掲の津野氏の文献中で、9 世紀後半以降の資料は坏が口径 12 cm 代、椀が 15 cm と近接した取り扱いとなっている。

「椀」については前述の黒色土器に関する記述で述べたとおり金属器の「鉋」写しが強く働いた資料が多く、その他地域によっては内面黒色処理・外面赤彩など漆器写しの「椀」資料なども存在しているが、9 世紀前葉には磁器を写した施釉陶器をさらに写した瓷器系の椀・皿が出現するようになり、9 世紀第 3 四半期時点で海老沢窯・西海老沢窯（秋田県男鹿市）や山海窯（山形県酒田市）などで瓷器の椀・皿写しの器形が生産されるようになる。当然土師器

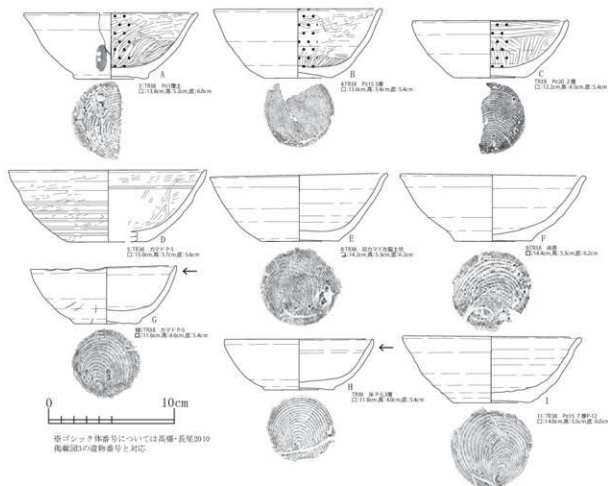


図3 青森県三沢市平畑(1)遺跡に見られる椀形土器

の食膳具の生産体系の中にも類似の器形が写されるようになり、椀・皿形盤の資料が定量存在するようになっていく。

また、供膳具としての位置づけから食膳具として口にあててを前提とした製作手法が用いられており、百瀬正恒氏のご教示によると平安京の椀の製作手法として行われている口唇部内面の面取り手法が三沢市平畑(1)遺跡の緑釉陶器と共伴した資料の中にも含まれていることが判明した。資料について八戸市埋蔵文化財センター宇部則保氏によって作図された資料が青森県埋蔵文化財調査センターの研究紀要上で掲載されている(高橋・長尾2010)が、三沢市教育委員会長尾正義氏のご厚意によりこちらでも資料を実測・掲載する機会を得た。図3に資料を掲載し、宇部氏の実測資料と同一のものについてはゴシック体の番号を付加し対比できるようにした。口唇内面が面取された資料はG(紀要掲載番号10)とHが該当し、他の資料より小ぶりの資料となっている。秋田市教育委員会伊藤武士氏のご教示によると秋田城の資料でも量的に少ないものの9世紀第3四半期以降に見られるとのことで、転換期の一つの要素であると判断できる。石江遺跡群の資料については9世紀後半以降の変遷過程で理解可能な資料であり、基本的に深身の椀形盤が基本となり、呼称

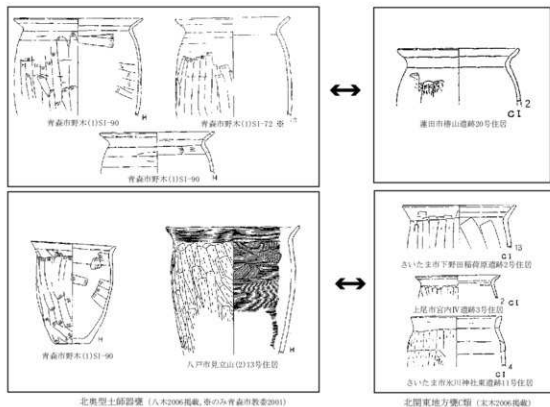
についても「椀」を用いた。椀は深身であるとともに大小のセット関係が見られる資料も存在する。口縁部内面の面取りについては新田(1)・(2)遺跡など10世紀後半以降の資料でも確認でき、食膳具的意味合いが強くなる。ただし、後述する高岡(1)遺跡では浅身の椀形盤の資料が定量存在し、そのタイプで変遷するなど同時期の新城平岡(4)遺跡の南側の資料とは異なる傾向が確認されるなどの差違がある。また、黒色土器の資料で外面の口縁部の黒色化した部分を内面と同様にヘラミガキする資料がある。口当たりを意識した資料で本市の調査で野木(1)遺跡(報告書刊行時遺跡名称野木遺跡)などでも見られた調整手法である。食膳具として理解可能な資料でもあるが、他県の報告書の図面では9世紀中葉以前にも存在している可能性がある。「酒杯」・「水椀」とも液体を口にも含む形であるため一概に言えない部分がある。「椀」の用語について土備(つちへん)の「埴」を用いる研究者もいるが、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所企画調整部文化財情報研究室が作成した『遺跡情報交換標準の研究第3版』(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所2013)では「埴」は許容できない表記とされ別の表記を用いるべき扱いとされており、本報告でも△以上の「環」・「椀」を使用した。

次に煮炊具についてであるが、日本海側の出羽側が丸底ロクロの「出羽型甕」（元々は北陸地方に祖型有）、太平洋側の陸奥側が平底ロクロの「陸奥型甕」とし、城柵以北の領域外の地域で多く出土する非ロクロ甕について「北奥型」（八木・神原 1999）と区分され、伊藤博幸氏によって取りまとめられている（伊藤 2006）。8世紀代までのミガキ・ハケメ調整主体の器形から伝統的な製作手法で転換したのとして理解されてきたのが現状であるが、筆者は関東地方に類似の器形・調整手法が認められることを確認した。以下にその概要を記すが、筆者のフィールドは元々関東地方になく、誤認等も含まれる可能性があることを予め断っておく。

末木啓介氏によると北関東の埼玉県では武蔵型甕という非ロクロの煮炊具が使用されているが、9世紀第三四半期（BⅡ類）時点で常総型甕の影響を受けた「甕C類」が主体を占めないまでも定量存在する。甕C類は体部外面上位から中位までが縦方向のヘラ削り体部下半に横方向のヘラ削りが施され、縦方向のヘラ削りが見られず複雑なナデ調整のものがあるという（末木 2006）。図4に埼玉県下のC類とされた資料と類似する青森市・八戸市から出土した非ロクロ甕を図示した。上段の頸部を段状気味に作出する資料は外面のヘラの調整を体部上半までに留めるロクロ甕を意識した調整手法で、下段の「く」字状のタイプはヘラ削りを頸部直下まで寄せるを基本とするタイプとして類似した調整手法である。ただし、関東地方の知見がある担当者の意見として「器

壁がもつと薄く精緻であり、比較にならない」というコメントもある。時期が下った時点の事例ではあるが、同時期の京都と平泉、そして外浜のかわらけの器壁厚が北にいくに従って厚くなる傾向がある。このような前提の場合、器壁の厚さが系譜列そのものを全て否定する要因とはならず、むしろ類似した器形に対する類似した調整手法に對し着目しておきたい。確かに北半部側に多く認められる甕であるので、領域外の甕としての認識が基本となるのは致し方ないが、その要素について単純に北起源のものだけで独自に変遷したのではなく、他の情報が入り込む余地があることを留意すべきである。ただし、間をつなぐ様相は不明であり今後の検討課題である。前述まででも指摘した話であるが、現代社会でも様々な新しい用語が作られ、新たな区切りが生まれる。時としてその用語に区分された概念を超えた思考を止めてしまうことは十分あり得る話である。

前述でも若干触れたが、土器は形を写すものであり、影響を受ける対象として上位に相当するものを主立った対象とすることがあり、ロクロ技術に對しても写す対象となる。ロクロ技術の模倣については秋田県城や津軽地域でも面取りの角張った口唇部を持ちながら非ロクロの回転ナデを用いた程度の資料も見られるなど模倣の結果と認定できる資料がある。そのような資料については調整手法までロクロ技術を模倣したようなものや非ロクロの調整手法で埋めてしまい結果的に非ロクロとされてしまう資料も含まれる。坂井秀弥氏によって明らかにされたロ



北奥型土師器甕（八木2006掲載、幸のろ青森市教委2001）

北関東地方甕C類（末木2006掲載）

図4 北奥型土師器甕と北関東地方甕C類の器形と調整手法の対比（縮尺不同）

クロ甕の製作技法でも一次成形時は粘土紐の積み上げであり、二次成形時にロクロ使用が伴う(坂井1990)。技術的な成熟度の差があるが、回転力の伴っていない資料について非ロクロ扱いで報告される事例がそれなりに存在している。本報告書では野木(1)遺跡の報告書(青森市教育委員会2001)中で使用した「ロクロ系」という用語をそのまま使用し、回転力が不十分でもロクロ甕を志向する調整手法が認められたものについてロクロ系甕と取り扱った。

近年、岩手県の丸山浩治氏による十和田a・白頭山一苦小牧火山灰を指標とした古代集落の研究の一環として土師器煮炊具についての土器編年等が発表されている(丸山2008, 2011, 2012, 2013)。火山灰が関連した堅穴建物跡と土師器煮炊具に対し悉皆的な取りまとめをされ意欲的な研究であると判断できる一方、「当該期の社会動向にTo-a・B-Tm両噴火イベントが影響していると考えており」(丸山2013, P.23 33行目)という前提のバイアスが加わった考察がなされている。科学論はK.ポパーのいう反証可能性(関1990)を持ち得ることによって科学となり得るものであり、反証可能性を検討せず持論への誘導となる話は科学とはなり得ない。前述した船木氏の研究などを含めある種の「環境決定論」的な考察は、東日本大震災以来増加傾向にあるのかも知れないが、自然環境は複数の要因が多岐にわたり入り組んだものであり、一定ということではなく、それに対する人の働きかけについても社会状況や技術力・心的状況等多岐な要因による反映があることが想定され状況ごとに一定でないことが想定され得

る。現代の日本のように安全で寿命を全うすることがある種の「当たり前」のような認知がある中で自然災害への認識は、大きな反応となるのは致し方ないのかもしれないが、ある種予測不可能な不可避の条件でもあり、そのような動向も踏まえた社会そのもののあり方を捉えるべきである。

丸山氏の論に対して一つ反証の事例を挙げるとすれば、土師器煮炊具の非ロクロ短反型甕の波及と口縁短化傾向についてである(丸山2012, P.44 13~26行目)。氏の内容によると短反型甕の津軽地方への波及は「To-a火山灰噴火後の動向に類する動きがB-Tm火山灰噴火後の津軽で生じた結果と推定(丸山2012, P.44 22行目)」しているが、この短頭化についてそもそも前段階の時点でも既に発生しているし、他の要因が介在することが十分ある。

まず、短頭化の傾向については前述でも土器は上位の技術を模倣する傾向にあると述べたが、図5で表示した青山学院大学岩井浩人氏の提示した津軽南域の土器変遷の編年図上でI期(9世紀前半)とした土師器非ロクロ甕の頭部幅とロクロ甕の頭部幅の関係と、II期(9世紀後半)とした非ロクロ甕の頭部幅とロクロ甕の頭部幅には相関性が見られ、頭部幅が短頭化した状況が確認できる。この短頭化の傾向は、全ての器形で現れる現象ではないが、後述する石江遺跡群でも頭部幅のある器形は時期の下る段階でも存在し、器形のバリエーションの一つであると考えられる。丸山氏の指摘する該期の10世紀の前半時点では器種として量的に多くないが羽釜や甕、そして陸奥地域や羽田地域では煮炊具そのものが見え

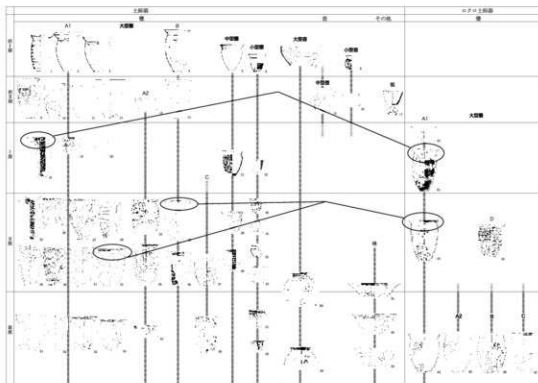


図5 岩井編年にみられる津軽地域の煮炊具の頭部の短頭化の事例(岩井2009, 第5・6図について岩井氏から原因提供)

なくなり始める時期へと近づく段階であり、鉄鍋など頸部を持たない器形そのものが認知されている段階でもあると考える。丸山氏も非クロコ甕は体制外と認知(丸山2013 P.46 1行目)している時点で土器の様式的理解が弱くなっていることが想定できるが、非クロコ甕の器形や製作技術等についてかならずしも領域外のものに全てを求めるべきでなく、写しを含めて器種のリネーションについて後述する信州地方や関東地方の動向とも比較可能な要素がある。その意味で10世紀中葉時点で大きく変化する転換期の評価を単にB-Tm火山灰の直接的罹災とするか、社会動向そのものの転換点を含めた中での変化と捉えるかは意味合いが似ているようで全く異なるものと判断できる。

なお、丸山氏の研究の中で短化する甕が丸山氏のIV期(T_{0-a}降灰後からB-Tm降下前・915～940年頃)では津軽では見られず(※石江遺跡群内では一部有)八戸市周辺と野辺地～小川原湖北岸の上北地方と秋田県の米代川流域沿いに短頸の甕が多くでる共通性が認められるという(丸山2013)。この点は奥入瀬川左岸に所謂「出羽甕」を出土する集落が点在する様相(宇部2013)や三沢市平畑(1)遺跡から緑釉陶器とともに日本海側の窯跡の可能性のある須志壺の出土(高橋・長尾2010)や「奥地」を陸奥側とする瀨原智幸氏の意見(瀨原2008)などもあり、日本海側から太平洋側へ抜けるルートが前段からある中での動態であることが想定できる。

一方、津軽地方では出羽甕が境岡館遺跡の事例程度で、8世紀代から継続する浅瀬石川流域の調査事例が増加しないため、今後事例が増加する可能性が残るが、クロコ甕は平底の資料が多いのが現状で、丸底気味の場などは一部出土するが出羽甕とは親和性が低い状態である。反対に浪岡地域などを中心に土鈴の分布等陸奥的な要因が津軽地域には定量的存在しており、現在の地理感とは異なる物流や情報の流れについて考慮する必要がある。

なお、本項で述べる時期区分については北東北古代集落研究会で用いた以下の時期区分を参照し、適用した。新田(1)・(2)遺跡については時期区分が農の変遷を主体としたものとしたため別区分とした。各期の目目は火山灰が介在する時期以外は不明瞭なのが実情である。

- 1期 9世紀前葉
- 2期 9世紀中葉
- 3期 9世紀後葉
- 4期 9世紀末～10世紀初頭(元慶～To-a降灰)
- 5期 10世紀前葉(To-a～B-Tm降灰)
- 6期 10世紀中葉
- 7期 10世紀後葉
- 8期 11世紀

2. 新城平岡(2)・(4)・(7)遺跡

青森市埋蔵文化財調査報告書第112集の第1・2分冊で新城平岡(4)遺跡、第3分冊で新城平岡(2)・(7)遺跡の事実記載・各種図面・写真・観察表等の情報を掲載した。また、本報告第2分冊中で鉄関連遺物に関する報告、本分冊中で掲載から漏れた新城平岡(4)遺跡の未報告資料について掲載した。その他分析については、第112集第3分冊および本分冊中で報告している。

竪穴建物跡の長短軸の相関状況と主軸方位の状況について図7に図示した。削平のため軸線が不明瞭な資料も含まれるが、ほぼ正方形に近いタイプと長方形気味の形状の2タイプに分かれる傾向にある。主軸方位は南東方向が主体であるが、厳密な規格性は見られず緩やかな規範の中である程度の方向性を持つ傾向が強い。一部北向き資料が存在するが、南東軸の対面である北西軸を持つものと90度振った北東軸側のもが多く見られる傾向である。

新城平岡(4)遺跡については第112集-1第1章第2節中にも触れたが、土地区画整理事業の発掘調査以前は高岡(5)遺跡と西バイパス(1)遺跡の二つで登録されていた。南側の丘陵が高岡(5)遺跡、調査区としてはG～I区が該当する。北側の砂が堆積する丘陵が西バイパス(1)遺跡、調査区としてはA～D区が該当する。

南側に新城小学校、南西側に青森県立青森西高等学校が所在し、新城平岡(4)遺跡の南側は南西側



図6 新城平岡(2)・(4)・(7)遺跡

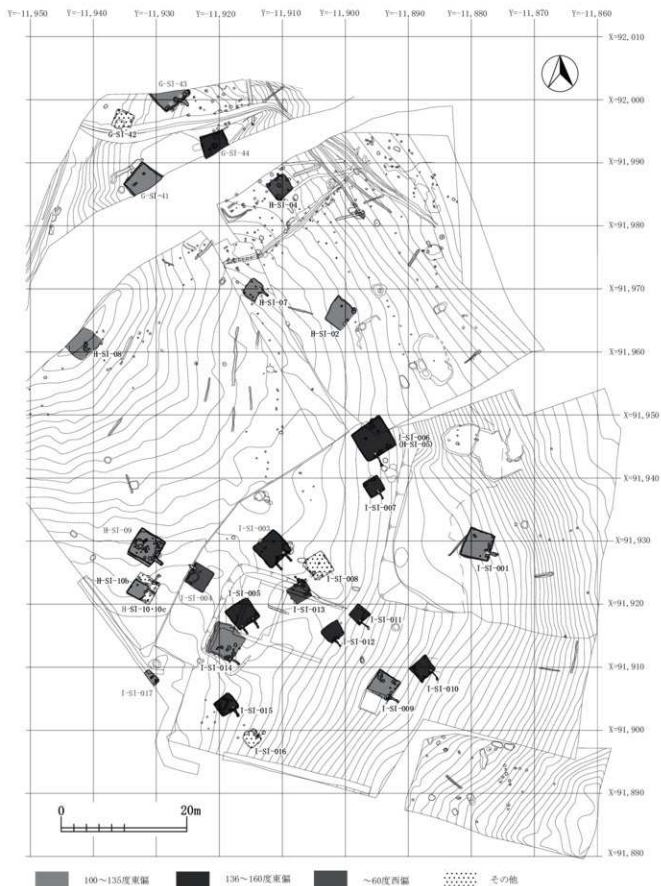


図8 新城平原(4)遺跡G~I区区別建物跡主軸方位別分布状況

土師器甕

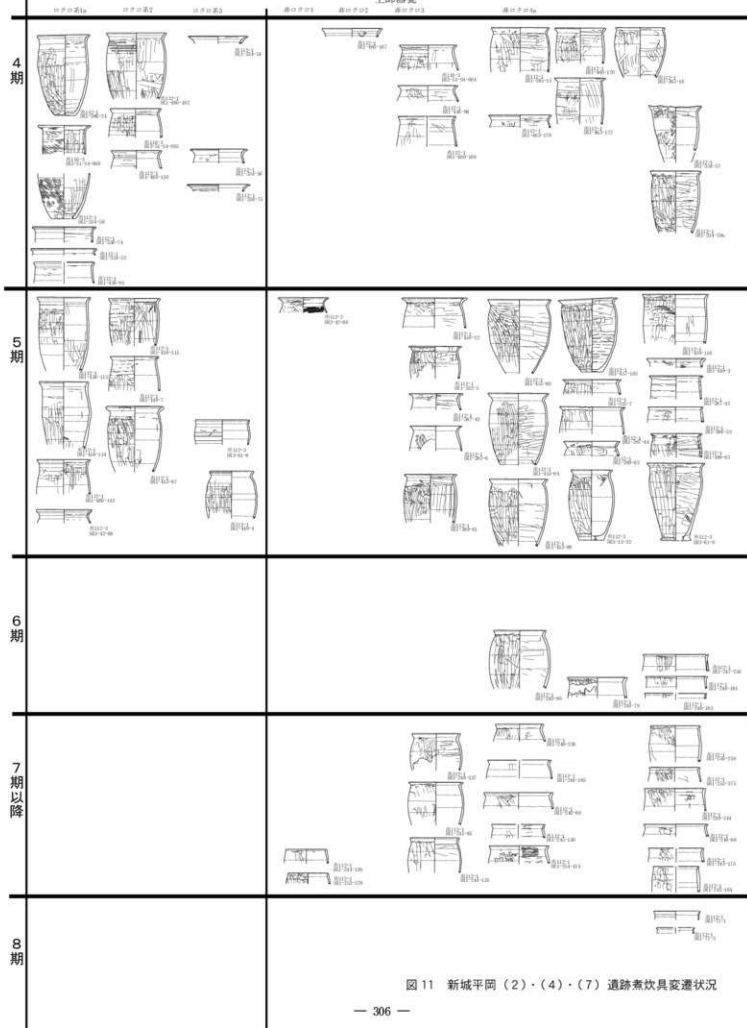

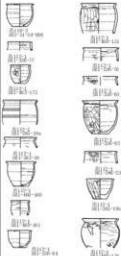


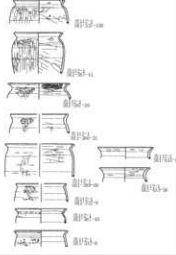



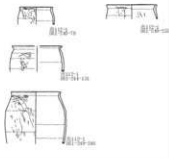
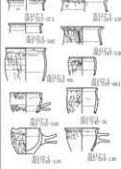







図11 新城平岡(2)・(4)・(7)遺跡煮炊具変遷状況

	土師器小壺 土師器小壺	土師器壺・羽釜・甌 土師器壺・羽釜・甌	擦文土器 擦文土器	貯蔵具 貯蔵具
 <p>土師器小壺</p>				
				
				
				

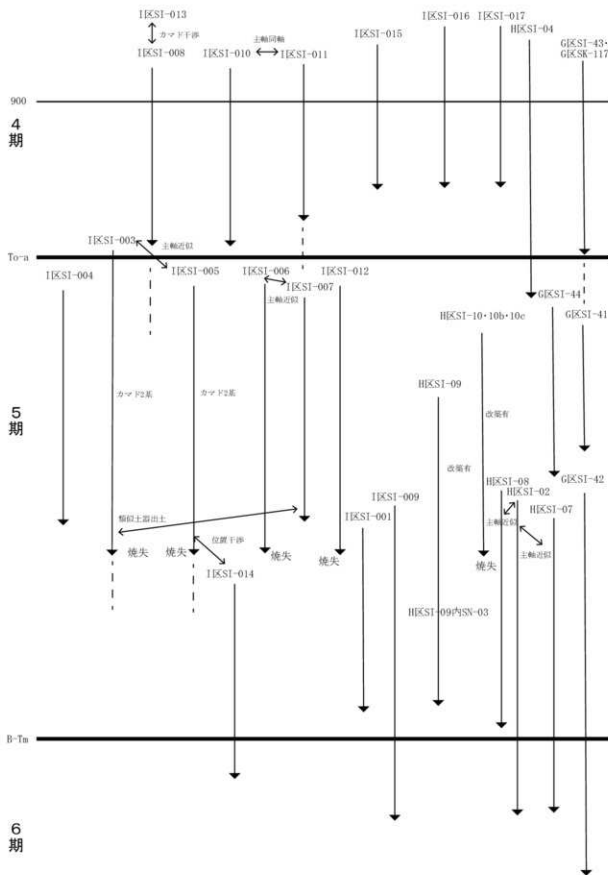


図12 新城平岡(4)遺跡G~I区竪穴建物跡消長関係

5
期

B-Tm

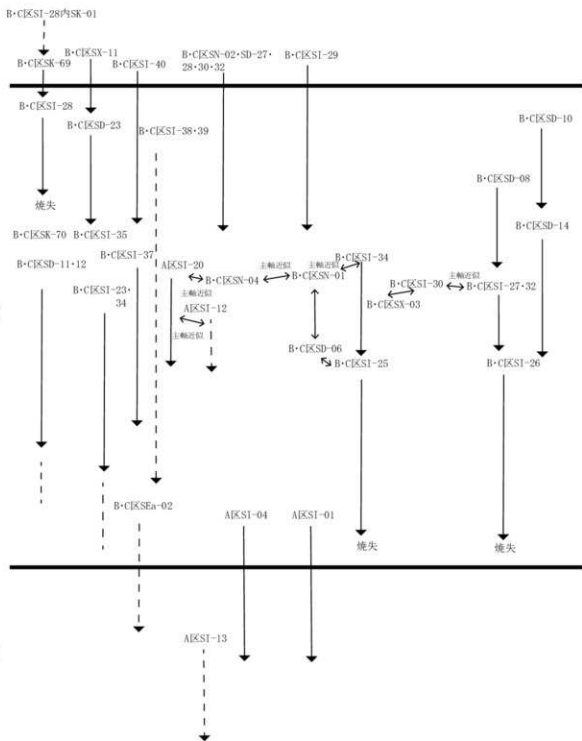
6
期7
期8
期

圖 13 新城平岡 (4) 遺跡 A~C 区竪穴建物跡消長關係

の青森西高等学校のグラウンド側に延びていく傾向である。青森西高等学校内には西高校遺跡とした遺跡が所在しており、土師器片なども採集されている。南側の新城小学校のグラウンド部分は改築に伴い当委員会が工事立会を実施しているが、遺構等は検出していない。新城小学校の南側に新城平岡(7)遺跡が所在し、青森西高等学校のグラウンド方向に遺構が延びている状況である。新城平岡(7)遺跡と新城平岡(2)遺跡との間に沢が入っている状況であるが、本分冊第IV章第6節図1に掲載されている青森西部の地質図を確認すると沢は調査部分の西側で合流した形状となっており、実質的に新城平岡(4)遺跡の南側と新城平岡(2)・(7)遺跡は同一丘陵上に立地している可能性がある。その同一丘陵上の資料は比較可能な同時期の資料が含まれている状態である。

集落そのものは新城平岡(4)遺跡の南側で4期とした9世紀末の時点で開始しており、続く5期の時点で新城平岡(2)・(7)遺跡を含む地点で鉄生産を含む集落が最盛期を迎える状況となる。同時期の高岡(1)遺跡とは遺物の器種構成上浅身の坏が新城平岡側では伴っておらず、有台の黒色土器碗が新城平岡側で伴っているなど組成上の差が生じている。皿も伴っているが明瞭な組成比を占めるほどではない状態である。

6期の時点でも南側の地点で一部継続していたものと見られるが、一部断絶が見られ、7期に限りなく近い段階で新城平岡(4)遺跡の北側のA～C区内で堅穴建物が建てられるようになっている。ただ、

ここで注意しておきたいのは7期に北側の堅穴建物が建てられる段階で遺跡の東側に展開する新田(2)遺跡で溝の囲郭の変遷が進められていた状態であるということである。この点が第112集-1図1-222および224で提示したB区の北西部分に配置するSD-10(南東側のC区にも同一名称のSD-10が配置しているが連続性は認められない)やSD-08・14などの流路はB・C区を囲郭というよりは東側からの範囲を区切る溝跡としての機能が想定される。

図8・9に各地区の堅穴建物跡の主軸のまとまり、図10に食膳具、図11に煮炊具の変遷状況(構築～廃棄の資料を含む幅があり、厳密な編年ではない。)を提示し、その情報を踏まえ図12にG～I区、図13にA～C区の堅穴建物跡の消長関係を提示した。前述で食膳具は若干触れたが、煮炊具についてはハケメ調整の煮炊具が新城平岡(2)遺跡のごく一部に限られ、後述する高岡(1)遺跡の様相とは異なる。また、5期の時点で円筒状で把手の付く甔が伴っている。また、新田(1)・(2)遺跡で見られる土師器甕の体部下半を切り取ったような幅広の甔についても若干量であるが存在している。しかし、新田(1)・(2)遺跡では7期以降も土師器食膳具が多量出土しているのに対し、新城平岡(4)遺跡では非常に出土量が限られるという特徴がある。擦文土器は新田(1)・(2)遺跡同様7期以降の資料に伴い、新城平岡(4)遺跡A区では平行沈線主体のV類のタイプが伴っている。

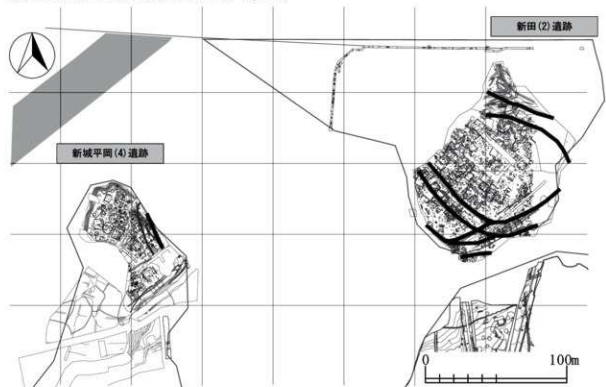


図14 新城平岡(4)遺跡B区溝と新田(2)遺跡囲郭溝との対比

3. 高間(1)遺跡

青森市埋蔵文化財調査報告書第94集で東北新幹線事業に係る部分の調査成果について報告し、第113集で事実記載・各種図面・写真・観察表等の情報を掲載した。また、本報告第1分冊中で試掘・確認調査に関する報告、本報告第2分冊中で鉄関連遺物に関する報告、本分冊中で胎土分析や掘立柱建物跡の再検討結果について掲載している。

竪穴建物跡の長短軸の相関状況と主軸方位の状況について図15に図示した。削平のため不明瞭な資料も含まれるが、新城平岡に比べると正方形基調と長方形基調との境界が不明瞭なものとなっている。また、1軒のみ特大の60㎡を超える建物がある(F-1区07__SI-004)。際だった階層差を示す出土品は見られないが、規模については他の竪穴建物とは差が際立っている。建物の主軸方位は新城平岡同様南東向を基調としているが、東寄りものが若干多く見られる。また北向き等他の軸線については新城平岡に比べると限定された傾向である。

高間(1)遺跡を理解する上で、欠くことの出れない情報は青森市埋蔵文化財調査報告書第75集で報告した江渡遺跡の成果である。調査の結果、非五所川原産の須恵器と土師器食膳具とともにハケメ・ヘラミギキ調整で刻線や鋸歯状の文様が施される土師器煮炊具が出土した。また破片資料であるが、外面に沈線文が施される非黒ロクロ黒色土器がSI-04から出土している。発掘調査報告書時には沈線文が施された黒色土器とハケメ・ミギキ調整と刻線文などが施される土師器の評価と9世紀第3四半期併行とみなされる須恵器坪や土師器ロクロ小甕などの評価から9世紀第2四半～第4四半期を主体とした集落の継続を想定した(青森市教育委員会2004)。その後、ハケメ・ミギキ調整・刻線文の施される土師器の擦文土器の前段階としての評価や他の遺跡の事例等から9世紀後半を中心とする年代観がもたれるようになってきている。

ここでは、江渡遺跡の評価について改めて検討したい。まず、食膳具の状況から踏まえると9世紀第3～4四半期にかけての遺物が主体を占めているが、破片化したSI-04出土の非黒ロクロ黒色土器の資料については同時期というよりは前段階の資料として評価した方が無難である。竪穴の主軸としても編年資料として引用される機会の多いSI-02の竪穴は南東側の軸線であるのに対し、SI-04とSI-10は北西向きとなっており、建物の主軸方位としては古相を示す内容となっている。加えて第75集第VI章第11図に提示した竪穴建物間遺物構成図を改めて見るとSI-04の資料はSI-02と遺構間接合がある廃棄資料中心となっており、SI-10については非黒ロクロのミギキ・削り調整の

伴う環と椀形の深身のタイプの土師器食膳具が伴っている。この器形について他の遺構から出土した食膳具に比べると深身である以外に直立気味の形状となっており、習熟度の低い要素がある。煮炊具に關する頭部幅の長さや屈曲度の強い資料もSI-10には含まれ、北西向きで側面が古相と判断しても差し支えないと考える。よって、SI-02の下限が9世紀第3四半期に入るとは問題ないが、それより前段のSI-04・10については第3四半期より更に古相となる可能性を残しておきたいと考える。

青森平野内では海岸部に近い東部の露草遺跡や沢田遺跡で8世紀代の資料が出土している(青森市2006)。しかし、遺跡の周辺は開発が進み、近年確認調査が一部実施されているが、新たな発掘調査は行われていない。ただ、近隣の小柳遺跡では近年確認調査で非戸跡や溝跡を確認し、新田(1)・(2)遺跡と比較可能な10世紀後葉以降の資料が確認されている。調査成果は青森市埋蔵文化財調査報告書第110集『市内遺跡発掘調査報告書2012』で報告されている。(青森市教育委員会2012)。沢田遺跡も時期の下るA地点の資料について筆者は遺物を実見する機会を得ていないが短頸の非黒ロクロ土師器甕なども出土しており、時期的に併行する可能性がある。このことから、8世紀代に営まれた集落周辺で9世紀、そして10世紀代にかけて集落が継続された可能性が高い地点が青森市内の陸奥湾に面した部分に存在しているものと考えられる。

以上、江渡遺跡の事例について単に南側からの北上という論理で考えるのではなく、8世紀代に陸奥湾沿岸の二列の浜地に立地する露草遺跡や沢田遺跡から継続する集落が継続し、その集落と9世紀後半以降北上する新興の集落との接触という脈絡が考慮される。江渡遺跡は青森平野の西側であるが、近隣では岡町(2)遺跡で8世紀代の資料と考えられる土師器甕が出土しており(青森県教育委員会1998)、周辺の土地利用は前段に存在していたことは確実と判断される。また、項目1の部分で触れた津軽地域で竪穴建物跡の軒数の推移をみて分かるように8世紀代から継続する浅瀬石川流域を中心とする①津軽地域と、本市の資料が含まれる③外浜地区との間の②浪岡地区は、2期には竪穴建物跡が存在しているが、土器を見た場合、江渡遺跡と比較可能な非黒ロクロ黒色土器坪やヘラミギキ・ハケメ調整のある甕はなく、外浜地区への浪岡地区側からミギキ・ハケメ調整の直接的流入は考えにくい。海路や山越えを含めた陸奥圏からの流入要因も残るが、江渡遺跡の資料については、2期の可能性を含む3期の資料群としての位置づけとする。

江渡遺跡で見られた土師器甕の器形・調整手法(ハケメ)について、高間(1)遺跡では10世紀代まで下る資料群の中で定量存在し、6期の資料からも

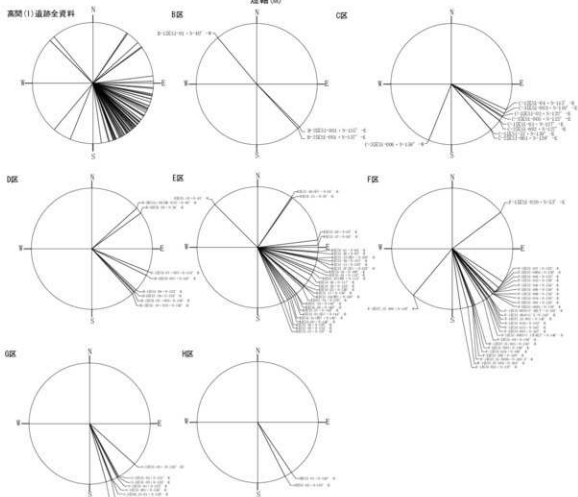
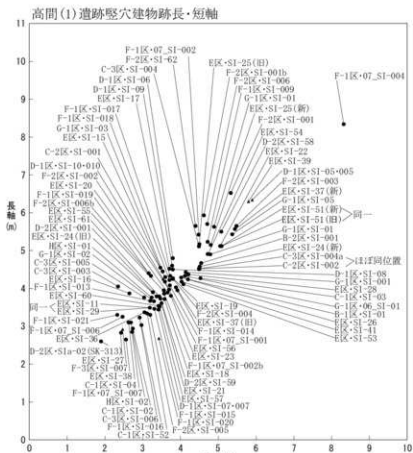


図15 高間(1)遺跡竪穴建物跡長短軸相関図および主軸方位



圖 16 高間 (1) 遺跡豎穴建物跡主軸方位別分布狀況

出土する事例が認められる。撤土器は5期の時点で沈線文とキザミの伴う資料が出土しているが、あくまでも客体的な位置づけで元々の土器変遷に影響を生じさせていない。高間(1)遺跡では、江渡遺跡からの系譜を持つ沈線文とキザミを持たない資料も変遷が確認されており、江渡遺跡と高間(1)遺跡の集団間には親和性がある。筆者自身としては、江渡遺跡の資料群を撤土器の系列に位置づけるかどうかについては留保し、むしろ古相の土師器からの変遷要素の名残としての位置づけとしておきたい。

高間(1)遺跡では鉄生産が10世紀前半代にかけて新城平岡(2)・(4)遺跡同様行われているが、各遺跡を比較すると高間(1)遺跡では生産規模や炉の変遷回数が多く連続した生産を志向している状況である。また、撤土器(第113集-3図3-46-F094、第113集-3図3-89-F185~F187)、櫛(第113集-3図3-89-F190)、羽釜(第113集-3図3-89-F184)など単に元々の祖系列からの変遷のみでなく、他の新たな要素の流入が含まれる。図17の左上段に再掲載したF-2区SK-106から出土した炭化した木器碗(第113集-3図3-143F269)については口唇部側が欠損しているが外面に明瞭な稜段がある稜段で、上り復元式はあるが足高の資料である。土器では10世紀中葉以降に増える足高の資料であるが、木器では10世紀前半の時点で確実に存在している。

土器生産については、C-3区S I-004・004aのPit1がクロピットである可能性が高く、周辺にSK-032などの焼成坑とSK-022などの製土坑が存在する。本報告第IV章第10節の松本氏の胎土分析の結果、高間(1)遺跡の地山の粘土と新田(1)遺跡の土師器との相関は確認出来なかったが、新田(1)遺跡の資料は時間的に下るもので、高間(1)遺跡内でクロコ土師器の生産の可能性は残されるものであり、高間(1)遺跡の遺物、新田(1)遺跡内採取の粘土について再分析をする機会を得たいと思う。その結果によって両遺跡内での土器生産のあり方について再検討する必要性は残される。また、松本氏の分析結果では図17に再掲した当該具痕が薬筒文の資料について胎土分析の結果上では五所川原領域であることが報告されている。この資料群について高間(1)遺跡のみで3~4個体分が出土し、焼成の甘いものが多く、一部は酸化焼成となっているものがある。製品の状態を踏まえると比較的近距离での流通圏の資料と判断できる。問題は口縁部の器形の作出や内面の当て具痕の調整、さらにタタキ目の条数がいずれも五所川原製品とは異なることである。考慮しなけれ

ばならないのは①五所川原窯で製作技法の異なる製作集団が作成した資料が高間(1)遺跡に流通した。②五所川原領域と近似する胎土のエリア内の異なる窯で五所川原窯の製作技法と異なる製品が製作され高間(1)遺跡に流通した。③特注品として五所川原窯でイレギュラーに製作された。などの要因が考えられるが絞り込みは現時点で難しい。今後の類似した資料の確認が望ましいが、②について立正大学の坂詰秀一氏は「東北北部における須恵器の生産」の中で青森県における窯跡として五所川原の前田野目窯跡と併記して三内窯跡を挙げ「青森市三内に所在する。1970年頃に大高興氏が発見し、江坂輝彌・平山久夫氏が確認した。出土した須恵器は壺・坏などであり、年代は前田野目窯に近い。」(坂詰1975)という記述がある。しかしながら、窯跡の位置は現在では知る人もなく、三内遺跡や三内丸山遺跡等窯跡があったとされる地点の周辺の遺跡で三内窯と規定しようとする五所川原産の明瞭な資料が出土したという報告もなく、詳細は不明な状態である。五所川原領域に存在する前田野目層と青森市域に存在する岡町層は地質学的に同一の層であり、仮に利用した場合近似の結果が得られることがある。ただ、松本氏による五所川原産の須恵器に使用される胎土は前田野目層より五所川原市大溜池床の低位段丘を構成する粘土の方が類似性が高いと報告されており(松本2006)、前田野目層そのものは地域的に広範囲に分布するが、分析事例に限られ、今後の検討課題として残るものである。

図17の右上段に再掲したが、第113集-1図1-76B058に掲載した硬質土師器の広口壺は底面がタタキ調整、頸部直下に「十万」の合わせ字が刻書され須恵器の製作技法を意識した内容である。ただ、器壁が厚く、砂粒の混入量も高くヘラ削りも頸部直下まで及び土師器的な手法も見える。類似の胎土の質感を持つ資料は報告書の事実記載でも述べたが青森市野木(1)遺跡でも類似の資料が出土している。

その他、非五所川原産の須恵器については長頸瓶がE区S I-51などから出土(第113集-2図2-317E181・E182)しており、明らかに五所川原窯以外の資料も流通している。

図16に堅穴建物跡の主軸のままとり、図18に食膳具、図19に煮炊具の変遷状況を江渡遺跡の資料と合わせ提示し、その情報を踏まえ図20堅穴建物跡の消長関係を提示した。前述の頸部の短頸化と内傾気味の資料についてB-Tm降灰前の5期の資料として非クロコでは4hとしたE204の資料が該当し、類似するクロコ系の資料としてはクロコ系5としたE265の資料が存在する。非クロコ4eとしたタイプが直傾気味の器形であり、一部ではそ

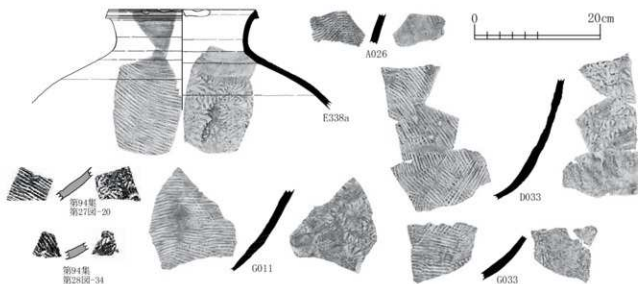
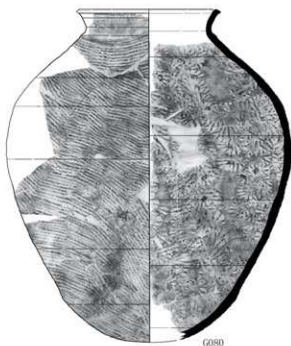
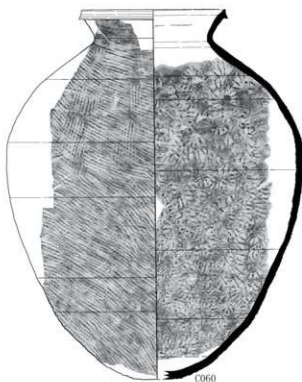
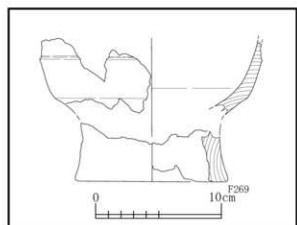


図17 高間(1)遺跡炭化木器碗(左上)、酸化焼成壺(右上)、および蓮藕文のある須恵器

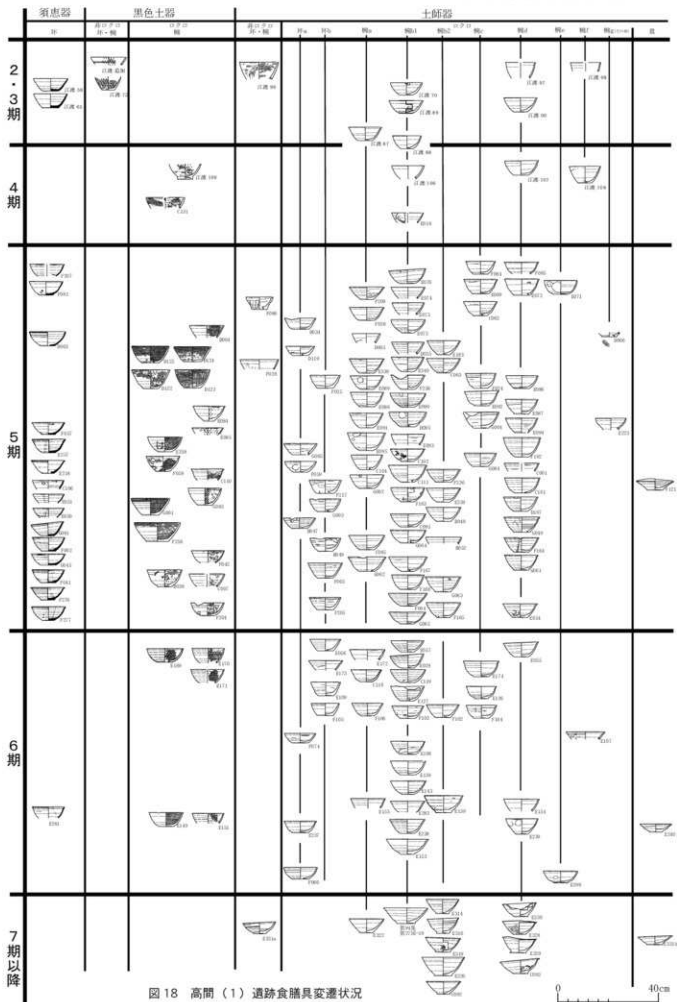


図18 高間(1) 遺跡食膳具変遷状況

0 40cm

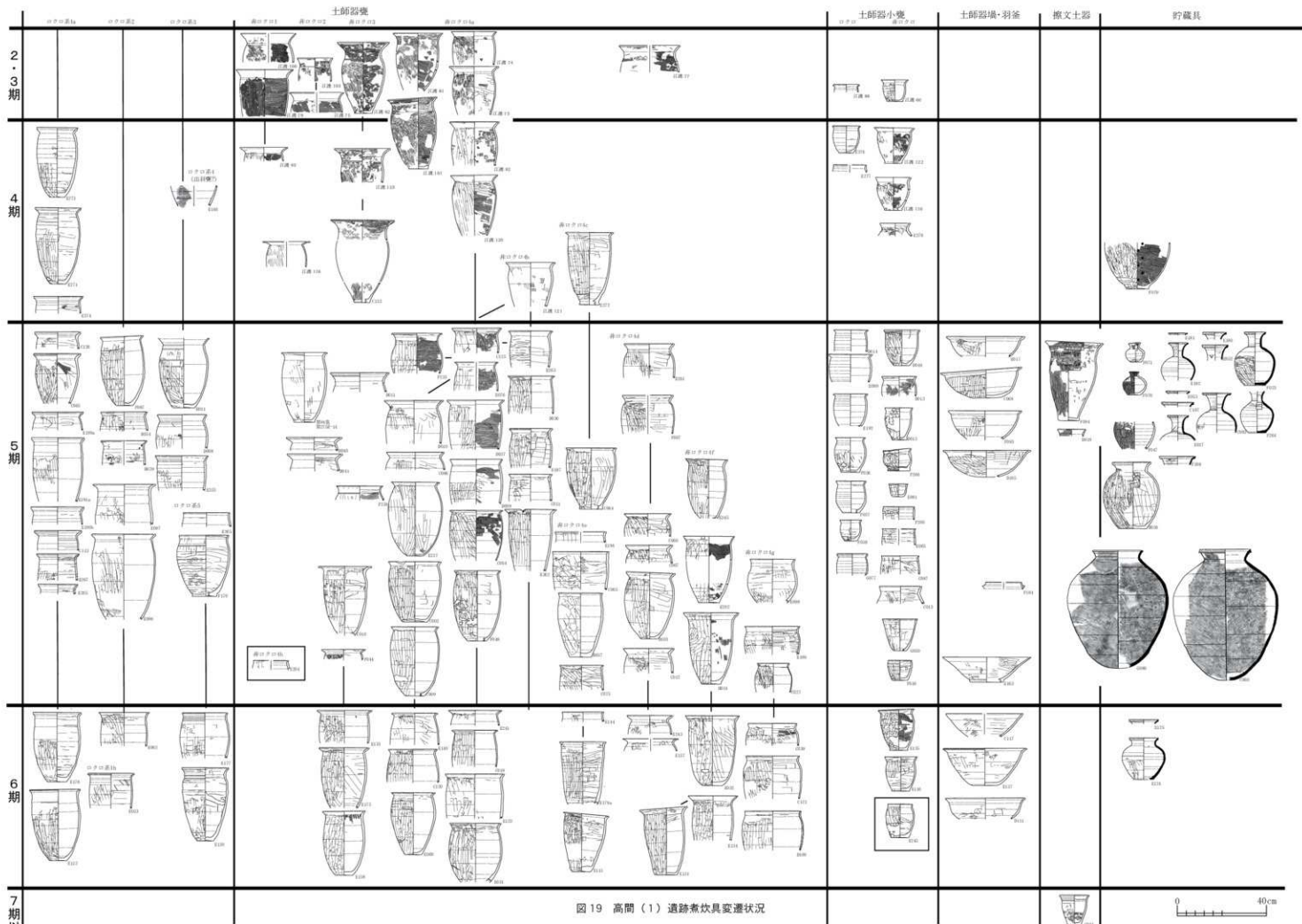


図 19 高間 (1) 遺跡煮炊具変遷状況

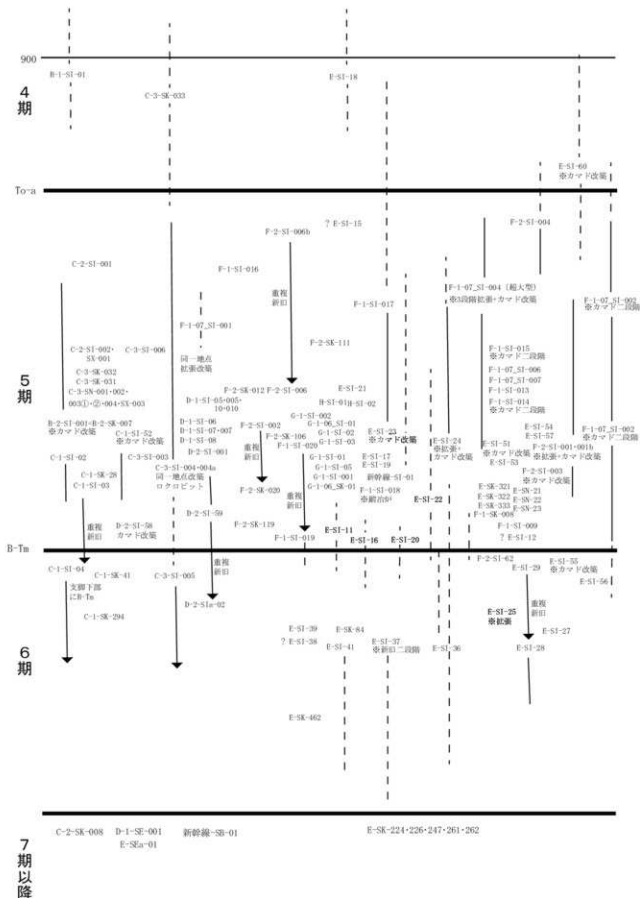


図 20 高間 (1) 遺跡竪穴建物跡消長関係

のような器形のバリエーションが存在する。変遷を確認すると5期に集中する傾向であるが、前代からの継続が想定される遺構内には遺物の残存率が低くなる傾向であるため、時期特定のできない資料が含まれる。ただ、5期に集中する傾向は外浜地区の傾向に即した内容である。5期の終わり近くから北側の新田(2)遺跡に近い地点で東向きのカマドを持つ竪穴建物群が存在し、6期に継続する。新田(2)遺跡でも近接した時期に竪穴建物跡が数軒存在し、高間(1)遺跡の動向に連動した要素が窺える。7期以降は竪穴建物跡は残らないが、新幹線調査区でSB-01とした掘立柱建物跡(第四章の中村氏の考察中ではSB-22・23・・・双堂とする意見もあるが今回の考察の結果二棟の変遷する建物跡と認定された。)が存在し、土坑が点在する。また、D-1区ではSE-001が所在し、同時期の新田(1)・(2)遺跡内で溝を囲郭する集落の外側で、性質の異なる施設が設置されていたようである。

4. 新田(1)・(2)遺跡

青森市埋蔵文化財調査報告書第94集で東北新幹線事業に係る新田(1)遺跡に関する調査成果について報告し、第106集で土地区画整理事業に係る新田(1)遺跡の遺構情報、第107集で新田(1)遺跡の遺物情報、新田(1)遺跡の遺構情報、第108集第1分冊で新田(1)・(2)遺跡の縄文時代の遺物について報告し、本報告本分冊中で土地区画整理事業の新田(1)・(2)遺跡に関する本文及び家電量販店関連の調査結果を掲載した。分析結果については第106集の第1分冊、第108集の第2分冊、第112集の第3分冊、第113集の第4分冊および本分冊第四章中に掲載している。

その他、東北新幹線建設に係る青森西バイパスの北側の新田(1)遺跡について(青森県埋蔵文化財調査報告書第472集)、土地区画整理事業の新田(2)遺跡の北側の部分について(青森県埋蔵文化財調査報告書第471集)を青森県教育委員会(調査担当:青森県埋蔵文化財調査センター)が行い、出土品や調査成果に関する情報は全て当委員会に譲与されている。

前述の新城平岡(2)・(4)・(7)遺跡、高間(1)遺跡の部分で掲載した竪穴建物跡の長短軸の相関図および主軸方位については新田(1)・(2)遺跡の本文中で掲載しているため割愛する。

また、遺跡の変遷に関し、時期によって新田(1)遺跡と新田(2)遺跡の溝跡が連結し変遷している。その為、古代の遺跡としては両遺跡をまとめた形で述べることにする。ただ、新田(1)遺跡は古代以降の土地利用も継続し、頻度も新田(2)遺跡に比べると重複が著しく、古代の竪穴建物跡について継

続した土地利用によって削平などの改変を受け、情報が不明瞭な部分が多い。そこで、変遷関係の把握については新田(2)遺跡を中心に検討することとした。また、県埋文調査の新田(1)遺跡は溝跡の検出主体で古代の竪穴建物跡は検出しておらず、間に国道7号西バイパスがあり、間が空く形である。変遷状況の提示に際しては市教委調査の新田(1)遺跡と県埋文・市教委調査の新田(2)遺跡を対象としたものとし、県埋文調査の新田(1)遺跡については溝跡の関連性について触れる形とした。

新田(2)遺跡区については、溝の囲郭が発生する以前の10世紀前半の時点で既に竪穴建物跡が存在しており、前述の高間(1)遺跡の北側に集落が移動する時期の前後に土地利用が開始している状態である。竪穴建物跡の重複について図21に重複数、表1に重複数あたりの変遷状況について表示した。新田(2)遺跡については工場と事務所等鉄筋の基礎を持つ建物が調査前に建っていた影響で欠落している部分が多いが、新田(1)遺跡に比べると竪穴の重複状況は把握可能な状況である。ただ、標高の高い地点は浅く削平を受け、時期が下る資料や中央の標高の高い地点の情報が限定的である。

重複数として最大6認定し、一部は近隣で複数回建替えが繰り返された遺構との重複も確認できる。6期と7期の境界が不明瞭であるため、明確とは言えないが10世紀中～後葉の時点では溝の掘削は開始している。この時点については後述するが新田(1)遺跡側では方形基調の囲郭が成される東側のエリアと新田(2)遺跡側の弧状を呈する囲郭エリアに分かれる。新田(2)遺跡の弧状の溝は、二重の溝が同時併存ということではなく、県SD04+市SD-004+SD-020の流路と県SD59が初期のもので、県SD02+市SD-007と県SD73が次段階のものとなる。なお、この溝の流路についてはいずれも新田(1)遺跡B-3・5区の調査区に延びており、新田(1)遺跡調査の溝跡と連結する。新田(1)遺跡側の部分ではB-3区の一部が後代の開発によって丘陵部分が一段低い沖積地上のレベルまで削平された地点があり、さらにC区との境界には現代の用水が掘削されているため、一部不明瞭な部分が存在するが、県SD04+市SD-004・・・の溝跡と県SD59の溝跡については新田(1)遺跡C区SD-13の合流点で合流している。また、県SD02+市SD-007・・・と県SD73は新田(1)遺跡C区SD-04とSD-15の地点が合流点にあたる。この合流点にはSKa-01とした土坑が溝より古い段階の遺構として検出されている。土坑扱いではあるが、一段高い丘陵レベルから掘削された場合2m近い深さになるため、実質的には井戸跡である。この遺構が

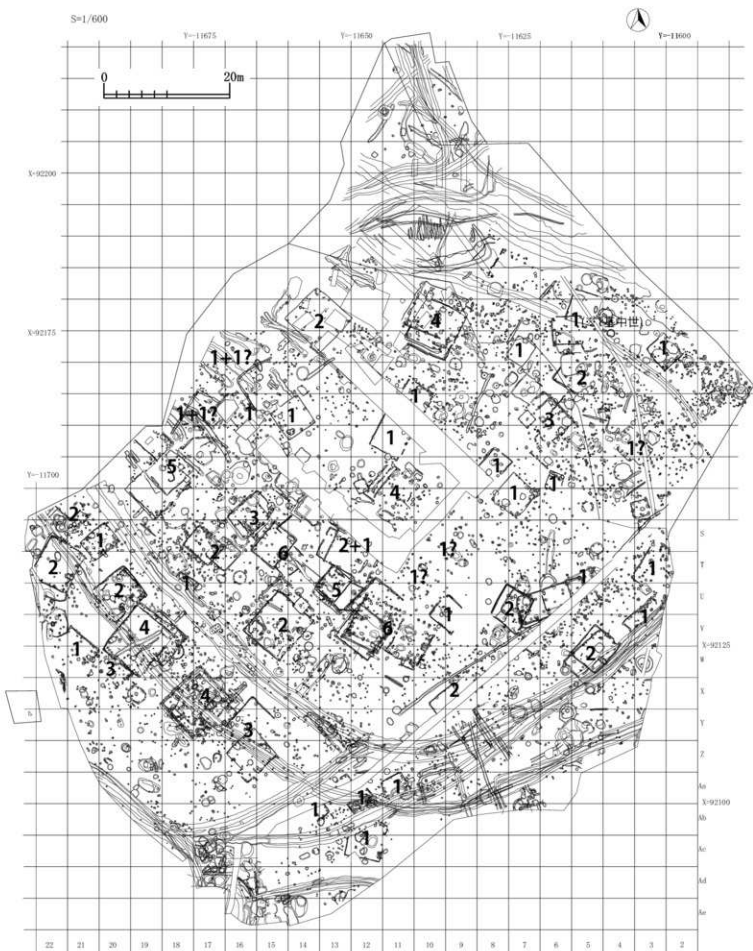


圖 21 新田 (2) 遺跡竪穴建物跡重複數

重複数1	備考	重複数2	備考	重複数3	備考	重複数3+4	重複数5	重複数6
市(1)B-25I-03		市(1)新幹線S-05—拡張		市(1)B-15I-09		市(2)S-000	県(2)S-16	市(2)S-067
市(1)B-35I-01		市(1)B-15I-04—改築	東屋敷のみの壁面変更	市(1)B-15I-08		市(2)S-005a	↓	市(2)S-068
市(1)B-35I-02		市(1)B-45I-14—S-13		?		市(2)S-007	↓	
市(1)B-45I-12		市(1)B-45I-17—拡張				市(2)S-005a	↓	
市(1)B-45I-16	ISD-9A2に類似し	県(2)S1-22—拡張	野方(内)に由来	市(1)B-15I-10	新平のたぬり印-8の類似が不明	市(2)S-006	↓	市(2)S-074
市(1)B-45I-18	ISD-79Aに類似し	県(2)S1-37—SI-35		市(1)B-45I-07—3	新西宮で3回出現	市(2)S-008	↓	市(2)S-075
市(1)B-45I-19	ISD-79Aに類似し	県(2)S1-18—SI-13	不明(類似147)	市(1)B-45I-20			↓	
市(1)B-45I-21	西宮の東屋敷—新田	県(2)S1-04—SI-03	ISD-04-市(2)S-05	市(1)B-45Ia-01		市(2)S1-010c	↓	市(2)S-076
市(1)B-45I-27	ISD-79Aに類似し	県(2)S1-02-46—SI-02-4	市(2)S1-030—拡張	↓		市(2)S1-010b	↓	市(2)S-060c-d
市(1)B-55I-001		市(2)S1-034—SI-04	市(2)S1-034—SI-04	市(1)B-45Ia-21		市(2)S1-12c	↓	市(2)S-070
市(1)B-65I-031		市(2)S1-036—SI-041	市(2)S1-036—SI-041	県(2)S1-09A		市(2)S1-011	↓	市(2)S-060
市(1)B-61I-01-01-05		市(2)S1-038—SI-039	市(2)S1-038—SI-039	県(2)S1-09B		市(2)S1-012	↓	市(2)S-059
県(2)S1-19		市(2)S1-049—SI-048	市(2)S1-049—SI-048	県(2)S1-09C		市(2)S1-010	↓	市(2)S-057
県(2)S1-25		市(2)S1-056—SI-031	市(2)S1-056—SI-031	県(2)S1-06			↓	市(2)S-052
県(2)S1-27				県(2)S1-40—SI-47	新平のたぬり印-44との類似が不明		↓	市(2)S-051
県(2)S1-28				ISD-79A-44			↓	市(2)S-053
県(2)S1-29							↓	市(2)S-054
県(2)S1-30							↓	市(2)S-058
県(2)S1-32								
県(2)S1-45								
県(2)S1-46								
県(2)S1-47	中津の堀穴と重複							
市(2)S1-003								
市(2)S1-019								
市(2)S1-020								
市(2)S1-022								
市(2)S1-023								
市(2)S1-026								
市(2)S1-037								
市(2)S1-046								
市(2)S1-050								
市(2)S1-051								
市(2)S1-063								
市(2)S1-079								
市(2)S1-081								

※太字は別欄に表記有

表1 新田(2)遺跡竪穴建物跡重複変遷表

らは「南」や「元」(梵字のパンの可能性を残す)の墨書土器が出土している。共伴したSD中で写真3〜5に提示した食膳具が出土しており、内外面とも表面に茶褐色の付着物が確認されている。質感としてはなめらかなしっとりした質感で、付着した部分はその後の使用によって一部は元々の器面の色調が露出した部分がある。青森県内の土器器面の資料との写真を写真3・4で掲載したが、共伴資料の中で、色調や質感が異なる資料が含まれ、埋没環境下での変質等ではないことが確認できる。他の資料として写真6に提示した第107集-1図P-1-093-2435に図示したSD-8最上層出土資料のように赤みを帯びる資料も含まれる。このような質感の資料は新田(1)遺跡の資料のみでなく、五所川原市の十三盛遺跡の出土品なども確認でき、10世紀後半以降の時期が下った資料に多く見られる傾向である。青森県内の土器器面への塗布事例としては、青森県埋蔵文化財調査センターの岡本洋氏らが八戸市洞野遺跡から出土した内面に漆状の付着物のある8世紀代の球胴甕を分析した例がある。分析の結果、アサ油が付着したと同定されており、植物油の利用が指摘されている(岡本ほか2013)。東北芸術工科大学北野博司氏はかま土器表面塗膜剤としての柿渋同定に関する基礎研究の中で、柿渋が普及する11世紀以前から木製食器や土器の塗装剤として漆類似の樹液が利用されていたことは十分考慮されるべきとし、検討を行っている。

その内容によらずと皮膜層を形成するような資料は東北部や北陸地方では8世紀頃から存在し、地域差が存在するとのことで、山形市今堀遺跡の9世紀代の土師器・須恵器等について塗膜分析を行ったが、残念ながら柿渋の同定には至っていない(北野ほか2004)。青森県埋蔵文化財調査センターが調査を実施した五所川原市十三盛遺跡で新田(1)遺跡と同時期の曲物容器の側板内面に塗布されていた黒色付着物について赤外分光分析が(株)パネオ・ラボによって実施されているが、結果として柿渋などに含まれるタンニンが含まれていない状態であった(青森県教育委員会2013、青森県埋蔵文化財調査報告書第526集第2分冊第4章第12節)。青山学院大学岩井浩人氏のご教示によると類似の塗布資料は秋田市秋田城跡の9世紀第1四半期の資料や秋田県能代市樋口遺跡の資料なども認められるということで、防水機能等の機能を含め塗布する行為そのものは普遍的に存在しているようである。筆者は市販品の柿渋であるが、高間(1)遺跡内で採取した粘土と市販品の信楽赤の粘土を焼成したテストピースに塗布してみることにした(写真7参照)。塗布実験の結果、柿渋そのものは水溶性であるため、濃度の低い状態では器面に若干浸透し、色調を変色させる程度の状況であるが、濃度の高い(または重ね塗りを行うと表面が硬化し光沢を帯びる状態に変化する。その色調は塗布する胎土の状態によって残り方が異なっており、淡茶褐色〜赤茶褐色を呈している。



写真3 第107集-1図P-1-001-0012(左)と
図P-1-001-0010(右)の外側側



写真4 第107集-1図P-1-001-0012(左)と
図P-1-001-0010(右)の内面側

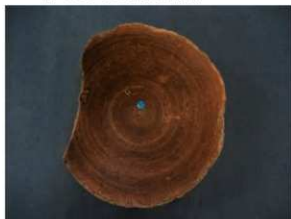


写真5 第107集-1図P-1-001-0012の内面



写真6 第107集-1図P-1-093-2435の内面



写真7 テストピースへの柿渋塗布実験状況



写真8 県第471集図141-10/ハケメ調整のある甌



写真9 県第471集図141-11/ハケメ調整のある甌



写真10 県第471集図141-11/ハケメ調整のある甌の内面(ミガキ調整)

塗布物が検出と分析されない可能性は残るが、何らかの塗布する行為は認められるものであり、前述のとおり10世紀後半以降の時期の下った資料に多く見られる傾向については、木製漆器の増加に対する土器生産の変質と対抗措置あるいは写しを一つの要因として挙げよう。この点が他地域では食膳具としての土器の減少が起こる中、容器としての土師器食膳具が11世紀代にかけてある程度の量を保持し続けた要素でもあり、新田(1)・(2)遺跡内で6,000点以上の木製品や自然木が出土しながらも木器椀・皿は数点レベルしか出土していない状況が、単なる朽ちて欠損という論理(燃料材としての使用は残るが)だけでは説明できないことを裏付けているものと考え。煮炊具については関東の武蔵野で見られる「コ」の字状の形態の口縁部を持つ資料がかなり変形した状態ではあるが、新田(1)・(2)遺跡から出土している(図22)。また、図23に長野県千曲市屋代遺跡群の9世紀後半～11世紀後半までの煮炊具の土器編年表の一部を掲載し

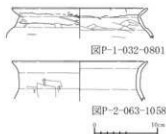


図22 新田(1)・(2)遺跡出土「コ」字状の口縁部

た。その中で、椀について広口のタイプが10世紀前半から出土し、11世紀前半まで確認されている。また、羽釜について10世紀前半・中葉は?マークとされているが、10世紀後半以降は明確に組成を占める状況となっている。長野県立歴史館原明芳氏のご教示によると底面側が広い椀は、10世紀後半以降に羽釜の増加と対応して増加傾向となるといふ。新田(2)遺跡でも同形態の椀は確認でき、羽釜についても在地の甕と同様の頭部を有する変形タイプであるが、鈔付きの大型品が10世紀後半以降の段階で伴う。羽釜は高間(1)遺跡で10世紀前

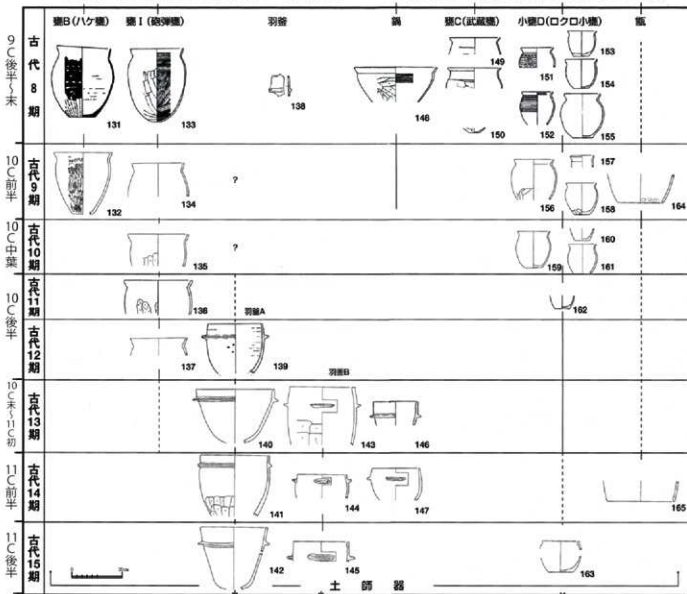


図23 (参考) 長野県千曲市屋代遺跡群古代煮炊具の変遷(一部)(長野県埋蔵文化財センターほか2000)

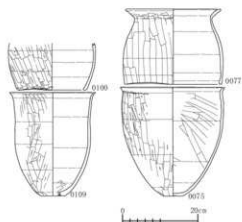


図24 新田(2)遺跡出土甌と土師器甕との組み合わせ例

半期にも伴っているが、基本的には小型品で、10世紀後半以降のタイプとは異なる。この大型品の甌と羽釜の存在は土師器煮炊具の形状についての変形の要因を増すこととなり、時期が下ると「U」字気味に開くタイプの器形が存在している。この器形は単独使用より広口甌の組み合わせを踏まえた使用法を考慮すべきである(図2.4参照)。三浦圭介氏は所謂防衛性集落の時期として該期の土器を「古代後期東北北部型土師器」と呼称している(三浦1994)。しかしながら、前述した「北典型」とされた土師器甕同様に、用語ができるとその用語で区分された概念形成の特徴を超えた思考がされにくい状況となっている。確かに撤文土器など他地域では存在しない要素や形態差などの地域差の要因が含まれるのは事実であるが、丸山氏の非クロコ甕の位置づけ同様、様式的に信州地方や関東地方で見られる土器組成の特徴と比較しても大きな差がない転換が生じた事態を看過することとなっている。

近年、本県の古代の土器編年について法量や特定の部位の計測情報を優先した研究が行われているが、それぞれの系譜を無視した混在された状態で、得られた数値が元々の容器としての機能を充足すべきサイズに起因するのか、時期的・地域的な要因を示すのか混在した状態で解釈する事例もあり、数値のみが独り歩きしている場合もある。

その点で、対象とする時代は異なるが、青森県教育委員会の岩田安之氏の行った縄文時代前期の円筒土器を対象とした頻度・系統のセリエーションと流行のタイムラグに関する考え(岩田2011)は系列ごとの変遷・技術転換や時間差等を考慮する上で非常に有効であると考えられる。

本項で触れた他地域の要素を持つ土器は、厳密にその地域からの直接的影響や搬入を認めるものではなく、影響を指摘するものであり、本州北端にあたる青森市の遺跡から出土した事例はある意味「伝言ゲームの末端」に相当する変換が生じてしかるべきである。その系譜列について時間的制約により岩田

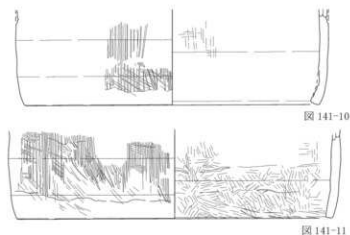


図25 新田(2)遺跡出土ハケム調整のある甌

氏の論に基づく検討を提示できなかったが、煮炊具は、類似する器形ごとに胎土の選択性や調整手法の類似性が認められており、系譜単位の変遷やタイムラグに関する要素は垣間見られた。それを踏まえて本項の新城平岡(2)・(4)・(7)遺跡と高岡(1)遺跡の煮炊具の変遷に関して、なるべく類似するタイプごとに近接するようにして図示した。

前述の甌について県埋文調査の新田(2)遺跡SK108でハケム調整の施される甌が報告されている(青森県教育委員会2009, 青森県埋文文化財調査報告書第471集団141-10~12、図25に図141-10・11を再実測掲載)。報告者は撤文土器の甌として報告しているが、撤文土器には甌は組成上存在せず、土師器甌の器形とほぼ同一の資料と判断できる。製作手法については県報告図141-10については内面が剥落しているが、内面情報の残る県報告図141-11については内面がヘラミガキにより調整されており、外面のハケム同様撤文土器の製作手法と考えられる。ただし、県報告図141-11の外面下部は横方向のヘラ削りが施されており、この手法は土師器の製作手法と位置づけるべき、所謂「折衷土器」の範疇になる。同様の事例は、図26に図示した県報告図158-16SD27から出土した土師器甕の器形に類似した外面ハケム調整の甕(遺物観察表には土師器・撤文土器側のいずれの項目にも記載無)や頸部に沈線文が施される土師器甕(市教委新田(2)

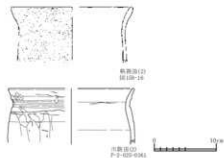


図26 新田(2)遺跡出土折衷土師器甕

	仕立位置	系列1	系列2a	系列2b	系列2c	系列4	系列5	系列6	系列7	系列8	系列9	系列10	系列11	系列12	楕・広口楕(黒色合)広口楕(黒色合)楕	楕	別称	コクの小楕	深コクの小楕	短千打	軍艦型の高島	脚文上辺線		
SI-019 /SI-009																								
SI-030																								
SD-001 /SD-020																								
SD-007																								
SD-007b /SD-003																								
SD-019																								
SD-002 /SD-035																								

図 28 新田(2) 遺跡煮炊具変遷状況



図P-2-025-0361)などがある。このほか内面の調整をハケメで行うものも見られる(市教委新田(2)図P-2-002-0029等)が高間(1)遺跡で見られる江渡遺跡からのハケメ調整の系譜列からの変遷も介在するため判断が難しいが、前段のものに比べるとハケメの条線幅が広がる傾向があり、擦文土器に施されるものと近似性がある。

話が若干横道に逸れた状態であるが、溝の変遷は新田(1)遺跡のC区内で合流する可能性が含まれるが、大きくは新田(1)遺跡のSD-08(調査時のSD-01a等を含む)やSD-01・04など丘陵と平行する流路との関連が強くなる。

新田(2)遺跡内では、SD-004からSD-007への変遷後SD-004を埋めた上に竪穴建物跡を建て複数時期変遷する。また果側のSD59からSD73への変更後については、溝をまたがってSI47が建てられているが、西側のSD-004のように複数棟建てられる状況ではない。これは立地の傾斜が北側に向かって下がる傾向にあることと砂地の堆積エリアが北側に延びているため、建物の立地としては不向きであることが考えられる。市教委のSD-007側の外側にはSD-007の埋没前から竪穴建物跡が建てられていた状態であるが、果側のSD73の外周側には竪穴建物跡が検出しておらず、前述の影響が考慮される。

図27に市教委調査の食膳具に関する消長、図28に煮炊具を中心とする消長を図示したが、煮炊具については前述のとおり甌や羽釜の組成が加わる状態、食膳具については非クロコ資料を含む非黒色の土師器主体の構成である。非クロコ資料については青森県埋蔵文化財調査センターの新山隆男氏によって新田(1)遺跡の資料を主体とする取りまとめが公表されている(新山2011)。クロコ器形を写す器形の資料と独自の器形に基づく資料等があり、底面の圧痕として新出の独自の編物痕なども見られる(木村2010)。厳密な意味での小皿は伴わず、大ぶりの碗形主体で、浅身の坏形が別途存在する。

また、食器として利用された資料が転用され様々な形状に転用される事例が多く確認されている。第107集-1の12・13頁中に図示したSD-011下層から出土した0273-0306については単に割れた糜粟資料以外に意図的に打欠き円盤状に作出した資料が含まれる。その他の資料でも皿状に転用された資料や匙状に打欠き作出された資料(第107集-1図P-1-022-0573等)や灯明具として転用された資料、さらに須恵器製の体部片を打欠き、鏡面碗状に転用した資料(第107集-1図P-1-051-1277・第107集-2図P-2-013-0182)などもある。土器組成上転用利用の頻度が増した時期にあ

たり、構成要素の一つであったことが想定され得る。

木器について極・皿の出土量は限られる状態であるが、松本建彦氏によると遍歴する職能民として木地師の事例を挙げ、大鰐町大平遺跡(青森県教育委員会1980)や大鰐町砂沢平遺跡(青森県教育委員会1980)、平川市古館遺跡(青森県教育委員会1980)などを挙げている。石江遺跡群でも県埋文調査の新田(2)遺跡のSI30から盤が出土しており(青森県埋蔵文化財調査報告書第471集図103-9・10)、市教委調査のB-4区SE-102からは挽物の粗形が出土しており、粗形と木材は異なるがアスナロの削屑も出土しており、木器加工の職能民が存在したものと考える。(仏)手や火焔光背や水瓶等の様々な仏教関連遺物等の資料は美術史の方々から「厳密な精緻さはないもののそのものを知っており、表現しようとした意識について」のご指摘は頂いている。転用碗であるが、碗についても遍歴する識字層としての仏教関係者の存在を想起させる要素がある(※2012年12月2日開催六ヶ所村フォーラムでの埼玉県埋蔵文化財調査事業団田中広明氏のご講演内容)。その他、八重樫忠郎氏は木製祭祀遺物を城柵に連なる工人すなわち陰陽師や仏師等の宗教関連の人々が訪れて作ったものとしている(八重樫2012)。情報は様々な背景の下、もたらされた可能性がある。

新田(1)遺跡を含めた溝の重複・変遷関係を図29にまとめ、土器変遷・新田(2)遺跡の竪穴変遷をもとに新田(1)・(2)遺跡の変遷過程について取りまとめたのが図30～図33で、細分は可能であるが7段階分のものを提示した。

A:(1)13-0007-0102+(1)B-4区・新幹線B-1区SD-86

この時点の以前に新田(2)遺跡側では竪穴建物跡が存在している。SD-86の掘削時に対応する竪穴建物跡について新田(1)遺跡内では削平により不鮮明であるがB-1区のSI-09等のものが対応するかどうかということになる。SD-86の溝は一段下がったA区内では延長線上の溝跡が存在せず、沖積地だったの溝掘削は未着手の可能性もある。

B:(1)B-4区SD-94a[13-0007-0102]+(1)A区SD-05+(1)SD-01

(2)県SD04+(2)SD-004+(2)SD-020+(1)B-5区SD-13+(1)C区SD-13+(1)C区SD-08(SD-01a)+A区SD-08

+(2)県SD59+(1)B-6・3区SD-60+(1)C区SD-13c

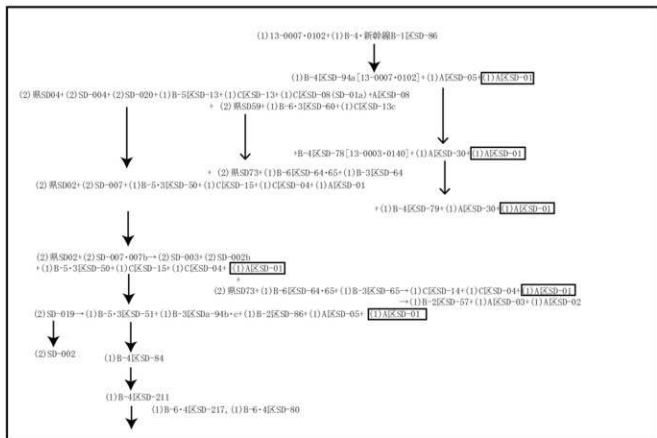


図29 新田(1)・(2)遺跡漏跡消長

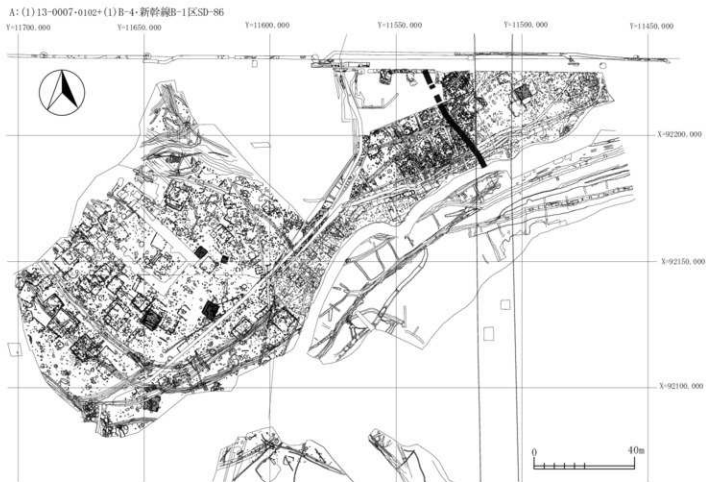
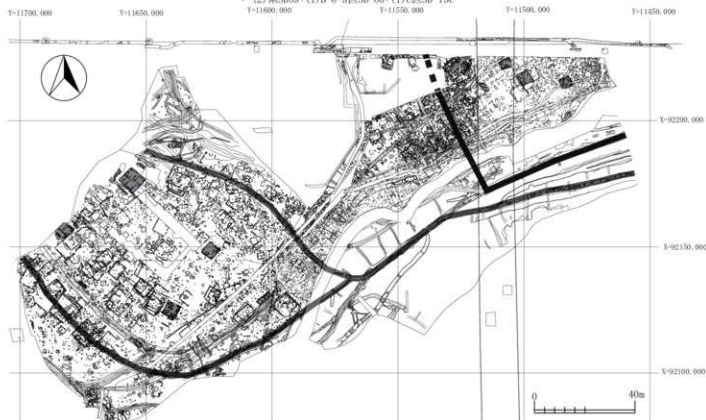


図30 新田(1)・(2)遺跡変遷状況①

B: (1) B-4[KSD-94a [13-0007-0102]] + (1) A[KSD-05] + (1) A[KSD-01]
 (2) 鼎SD04 + (2) SD-004 + (2) SD-020 + (1) B-5[KSD-13 + (1) C[KSD-13 + (1) C[KSD-08 (SD-01a)] + A[KSD-08
 + (2) 鼎SD69 + (1) B-6-3[KSD-60 + (1) C[KSD-13c



C: (2) 鼎SD04 + (2) SD-004 + (2) SD-020 + (1) B-5[KSD-13 + (1) C[KSD-13 + (1) C[KSD-08 (SD-01a)] + A[KSD-08
 (2) 鼎SD73 + (1) B-6SD-64-65 + (1) B-3[KSD-64 + (1) C[KSD-04 + (1) A[KSD-01
 (1) B-4[KSD-78 [13-0003-0140]] + (1) A[KSD-30] + (1) A[KSD-01]



圖 31 新田 (1)・(2) 遺跡変遷状況②・③

この段階については新田(1)遺跡のSD-94aと沖積地上のA区SD-05の軸線が同一であるのとSD-01と直交する点について一単位として認定できる点である。該当部分のSD-01は、底面を段状に高低を生じさせ水が一定量になると流れ出す調整が可能な造りとなっている。このような段状の掘削はSD-08でも一部見られるが、SD-04とした溝跡より以西では見られない状態で、初期の時点で行われた掘削である可能性が残る。なお、この直交する溝跡の北側について埋文調査の新田(1)遺跡のA区検出のSD04との関連が考慮され、図34に位置関係を提示した。この配置としては方形区画の位置関係であり、B-1区のS1-05やS1-09・08等の変遷する建物の軸線とも相関がある。北西の季節風の軸線とも比較可能な内容であり、五所川原市の十三盛遺跡でも集落配置の方向性として考慮可能な軸である(五所川原市教育委員会2013)。この方形区画に対し、新田(2)遺跡側では前述の通り弧状を主体とする囲郭が巡らされ、新田(1)遺跡のC区でつながる形になる。しかし、その結東点は円形を指向したのではなく、新田(1)遺跡SD-08の流路側へ向いた流れとなっている。SD-08とSD-01については直接の新田関係を重複関係では確認できない状態にあるが、C区側のSD-08(調査時SD-01a)は砂の堆積する層の上から火焰青膏等が出土していることなど、時期を経て埋没までは相応の時間がかったものと考えられる。

また、この時点までで食膳具が一括廃棄された新田(1)C区のSKa-01の使用は廃絶する。

C:(1)B-4区SD-78[13-0003・0140]+(1)A区SD-30[+A区SD-01]

(2)泉SD-04+(2)SD-004+(2)SD-020+(1)B-5区SD-13+(1)C区SD-13+C区SD-08(SD-01a)+A区SD-08

(2)泉SD73+(1)B-6区SD-64・65+(1)SD-64+(1)C区SD-04+(1)A区SD-01

新田(1)遺跡の前段階の方形の区画がSD-78のややいびつな囲郭に変更となり、SD-04と合流する形となる。新田(2)側は泉側のSD59が埋め戻されSD73側に広がる状態であるが、南側はSD-004が保持され、B-5区S1-0001などの堅穴建物が継続する。

D:(1)B-4区SD-79+(1)A区SD-30+A区SD-01

(2)泉SD02+(2)SD-007+(1)B-5・3区SD-50+(1)C区SD-15+(1)C区SD-04+(1)A区SD-01
+(2)泉SD73+(1)B-6区SD-64・65+(1)B-3区SD-64

新田(1)遺跡側の囲郭は前段階より更に曲線的になり、SD-04と合流する流路となる。新田(2)遺跡側ではSD-004側の流路が廃絶し、SD-007から新田(1)SD-50を通りC区SD-04側につながる流路となる。囲郭の単位は前段階より狭まったエリアを開いている。

E:(2)泉SD02+(2)SD-007b→(2)SD-003+(2)SD-002b
+(1)B-5・3区SD-50+(1)C区SD-15+(1)C区SD-04+A区SD-01
+(2)泉SD73+(1)B-6区SD-64・65+(1)B-3区SD-64→(1)B-3区SD-65→(1)C区SD-14
+(1)C区SD-04+(1)A区SD-01
→(1)B-2区SD-57+(1)A区SD-03+(1)A区SD-02

前段から新田(1)遺跡側では丘陵部の溝が不明瞭になり、沖積地との境界部分の溝の流路替えが行われている。この段階で「西」刻書の木器桶の破棄が発生する。新田(2)遺跡についてはSD-007がさらに外周側へ流路替えしており、囲郭の外周側にも堅穴建物が存在する。

F:(2)SD-019+(1)B-5・3区SD-51+(1)B-3区SDa94b・c+(1)B-2区SD-86・[(1)A区SD-05+(1)A区SD-01]

この時点での囲郭は、新田(2)から新田(1)にかけて丘陵上を溝が走るようになる。ただし、SDa94b・cは継々にクラックし、SDa-94aと同様に沖積地上のSD-05を通してSD-01に接続する流路となる。溝の囲郭として北側の領域が内側、南側が外側となるが、新田(1)遺跡のSDa-94b・cの南側に小規模な堅穴建物が数棟存在し、付近では鉄滓が大量廃棄されたB4-SN-14等も所在しており、鉄生産に関する工房が機能した可能性がある。新田(2)遺跡は建物がやや大型のタイプが増える傾向となる。

G:(1)B-4区SD-84[与(1)B-7区SD-005]→(1)B-4区SD-211・(1)B-6・4区SD-217, (1)B-6・4区SD-80
(2)SD-002, (2)SD-035

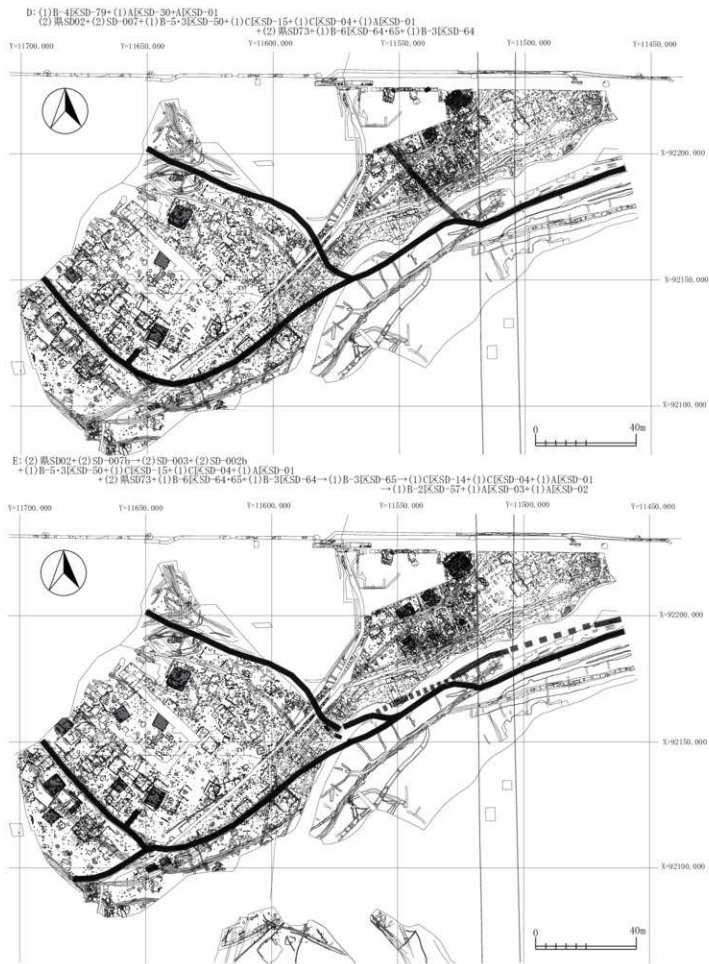
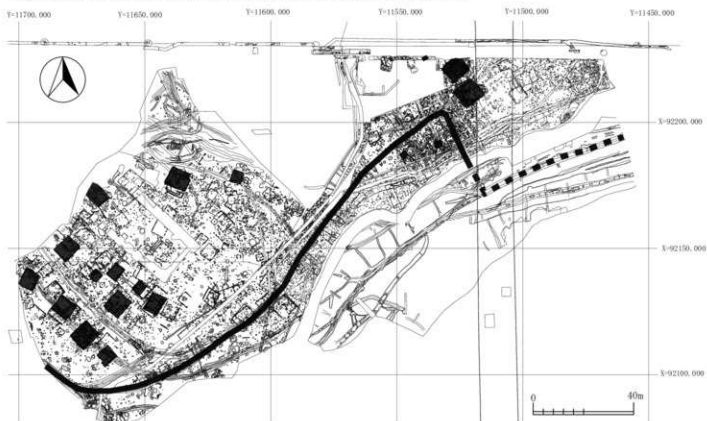


図32 新田(1)・(2)遺跡変遷状況④・⑤

F: (2)SD-019+ (1)B-5-3[KSD-51+(1)B-3[KSDn-94b-c+(1)B-2[KSD-86+(1)AKSD-05+ (1)AKSD-01]



G: (1)B-4[KSD-84→(1)B-4[KSD-211
(2)SD-002, (2)SD-035
(1)B-6-4[KSD-217, (1)B-6-4[KSD-80]

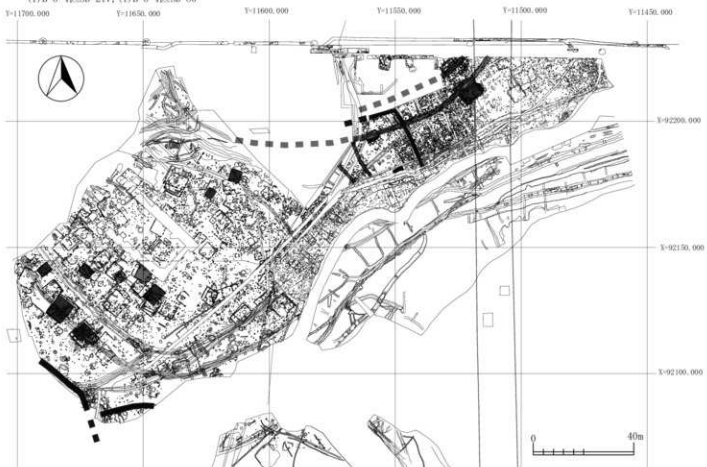


図33 新田(1)・(2)遺跡変遷状況⑥・⑦

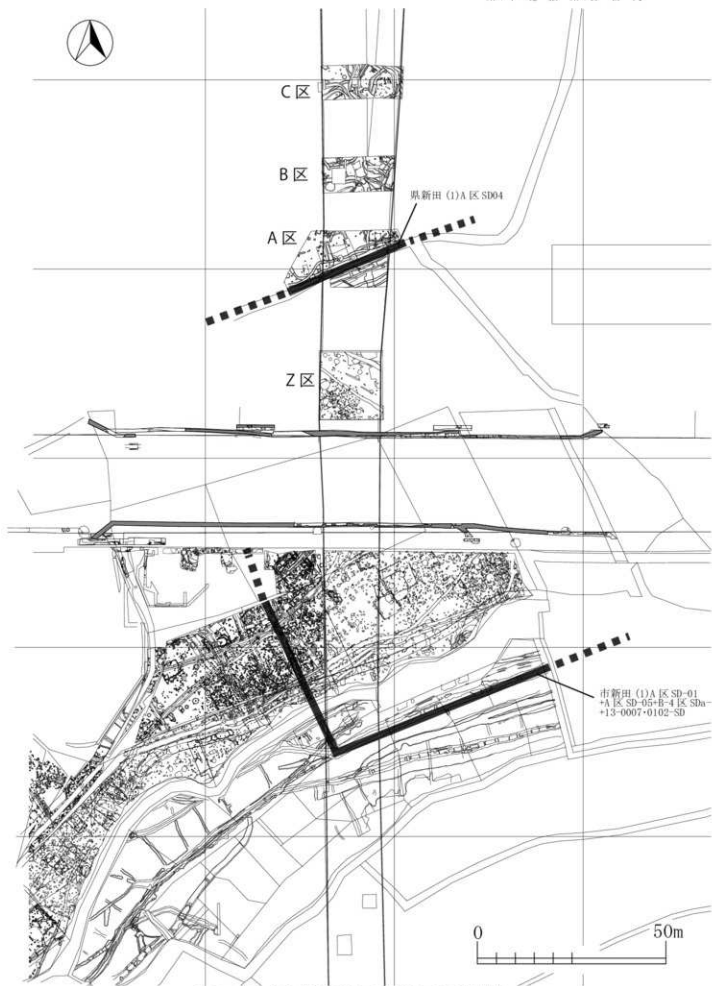


図34 新田(1)遺跡市調査区と県調査区との関連状況

実質的には二段階以上の変遷であるが、図上では一まとめにして提示した。新田(2)遺跡側では外周のSD-002やSD-035の機跡が段階となり、北側についても更に外周側の溝跡が機能していた可能性が高い。新田(1)遺跡についてはこれまでの囲郭の形状とは全く異なるB-4区SD-84とB-7区SD-005が併行して弧状を呈している。SD-84を埋める形でB-4区にSI-16の堅穴建物が建てられており、その建物を囲郭するようにSD-211とB-6・4区SD-217が巡っており、SD-217の西側には類似した軸線のB-6・4区SD-80が存在する。集落全体を囲郭という状態より屋敷地を囲郭する形態に変化している。この点是小囲郭から大囲郭に変化したと考える八木光則氏の考え(八木2011)に対し、八木氏が例に挙げた倉越(2)遺跡と内壱沢夷敷館遺跡の関係同様、逆行する流れである。

実年代の付与について、緑釉陶器はB-2区SD-57aから破片化し混入した状態で出土しており、生産年代と廃棄年代について時間幅が存在する。また灰軸陶器については遺構外であり、遺跡の継続幅としては問題ない資料であるが、遺構の帰属時期を規定可能なものとはならない。

溝跡は前述のとおり、同一遺構の再掘削等も含め複数の段階を同一遺構で継続した資料も含まれ、出土した資料について混在の要因が高くなる。一つの遺物を中心に時期決定をすることは問題があり、一定期間の継続幅の資料として見なすべきである。また、堅穴建物跡についてはカマドの構築材等明確な原位置を認定できる資料に限られ、その後の土地利用によって攪拌等がなされている事例が多い。その意味で、提示した遺物の消長はあくまでも特定の段階の幅として理解していただきたい。

紀年銘資料はなく、施軸陶器も根拠とならない状態であるが、青森市埋蔵文化財調査報告書第94集で光谷拓実氏による年輪年代測定(光谷2007)と第108集第2分冊で箱崎真隆氏らによる検証と追加資料の検討によって、試料の取り違いのある可能性のある資料の存在と他の試料が概ねの整合性のあることが確認された(箱崎ほか2011)。一部の資料についてウィグルマッチングの年代測定も実施し、ウィグルマッチング側が相対的に古くなる傾向(最小21年最大49年)が得られている(パレオ・ラボ2011)。その他放射性炭素年代測定の結果としては単体の試料として炭化種子や土器内面付着炭化物や炭化材や生材等についても実施しているが、得られた年代については安定したデータが限られた。しかし、土器付着物については実年代よりかなり差がある数値が得られており、信憑性に限りがある。

年輪年代の伐採年で得られた内容については相対的な整合性が取られており、使用年代を踏まえた継続幅を考慮した場合少なくとも11世紀第2四半期後半の伐採年の資料が含まれることから最低でも11世紀中葉までの継続が考慮される。

堅穴建物重複関係が6、溝の変遷過程が7段階以上と長期間にわたることが確認されたが、その変遷について全てを事細かに照合するところまで至れなかった。しかし、各溝の消長関係や建物の継続関係は一括したのではなく、段階を経た行為の継続で、6～7期以降8期を通して継続した集落であると評価できる。

5. 石江遺跡群全体の古代について

前段までは遺跡ごとに古代の様相について触れてきたが、古代の項目の最後として石江遺跡群全体としてのまとめを取り扱うこととする。

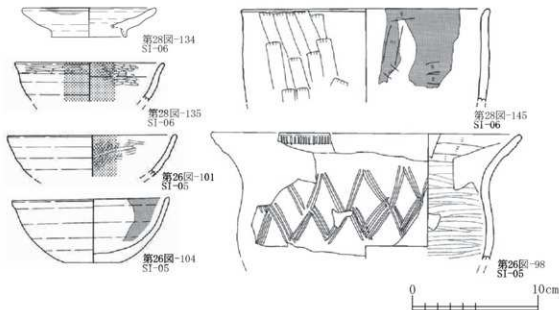


図35 青森市野尻館遺跡出土遺物

高岡(1)遺跡の部分でも触れたが、青森平野内で8世紀代の集落は海岸部に近く、4期(9世紀後半)以降増加した集落とは基本的に立地場所が異なる扱いである。現在では調査が行われる可能性が低いと、青森市東部では一定期間継続したものと推測され、新田(1)・(2)遺跡と比較可能な7期(10世紀後半)以降の集落も存在する。

その脈絡を汲む遺跡は、ある種の伝統的な製作手法を継ぐ要素があり、江渡遺跡-高岡(1)遺跡の中で比較可能な資料の変遷が追える状態である。ただ、全てが排他的な状態ではなく、新たな要素を追加し、継続させている状況が想定される。西側の新城平岡(2)・(4)・(7)遺跡で展開した集落とは同時期ながら系譜が異なる様相で、鉄生産に伴う集落としては共通でありながらも土器組成等に細かな差違が生じる集落が併存している。

6期(10世紀中葉)以降集落の再編により新城平岡(2)・(4)・(7)遺跡エリアや高岡(1)遺跡の南側のエリアでは堅穴建物跡が消え、新田(2)遺跡を含めた高岡(1)遺跡の北側のエリア、そして新田(1)遺跡のエリアにシフトしていく。新田(1)・(2)遺跡エリアに移動した段階で溝で囲郭する集落が展開する。その溝の囲郭の方向性は、やがて西側の新城平岡(4)遺跡の北側(A~C区)地点側の地点でも影響を受け展開するようになる。

同時期の高岡(1)遺跡内では堅穴建物跡が建てられず土坑や井戸跡などが部分的に存在する一方東北新幹線の調査区からSB-01(SB-2・2・3)が検出し、溝を囲郭した外側から構造の異なる施設を検出している。双堂の建物であったなら関東地方では村落内寺院(須田2006)等の位置づけ事例もあり、考慮することもできるが、今回中村氏の検討結果としては段階を経た二時期の掘立柱建物跡となる。ただ、東のある掘立柱建物で、床の張られた施設となり、その位置づけは、堅穴建物で溝を囲郭する集落の外側に存在した建物としては異質な存在である。柱穴から土師器軸が出た以外取り立てて際立った遺物もなく、特殊性は認定できない。浪岡地区でも規模は異なるが、山元(1)遺跡で方形の溝を巡らす中に掘立柱建物が存在した可能性があるエリアがある(青森県教育委員会2005)。

青森平野南部の椀内川沿いの標高11~15mの地点に所在する野尻館遺跡では、囲郭溝の中から10世紀中葉~11世紀代にかけて主体となる堅穴建物跡5軒と溝跡などを検出している(青森市教育委員会2012)。黒色土器の組成率が高く宮田館遺跡など青森平野の東部の組成傾向に近似するものと考慮される。土師器食器類の中で第28図-134に掲載されたSI-06から小皿が出土している(図35に再実測を掲載)。共存しているのは黒色土器

と土師器の椀と頸部のあるタイプと無頸のタイプの土師器甕などである。出土層位について詳細な情報がないため、重複するSI-07(把平手小甕把手部出土)との関係について可能性が残る資料である。また、SI-05からは椀文土器の中で津軽平野で出土量が多いIV類のタイプ(第26図-98)が出土している。青森平野側ではIV類は出土例が少ない状態であるが、青森市南部の椀内川の水系にある野尻館遺跡では小皿(有台に見えるが見込部分の器壁が薄く元々は中実のタイプが欠損した可能性が残る。図35に再実測を掲載)の存在と椀文土器のIV類のタイプの存在が確認されている。近隣には牛館川水系であるが新野野遺跡が所在し、無台の資料であるが小皿が伴っているが、椀文土器は出土していない(青森市教育委員会2008)。同時期ないしは近接した時期の集落単位で土器組成上の小皿の存在の有無や椀文土器の有無などの差違が生じている状態である。このようなケースは陸奥湾沿岸としては蓬田村の蓬田大館遺跡(櫻井ほか1987)と玉松台遺跡(蓬田村教育委員会2000、調査時玉松台(2)遺跡、遺跡統合による名称変更)などでも見られる。玉松台遺跡の資料については椀文土器が出土した蓬田大館遺跡より北側の立地にもかかわらず、土師器主体の遺物構成で椀文土器が試掘調査の中で出土していない。玉松台遺跡は試掘、蓬田大館遺跡もトレンチ主体の調査であり、全面調査をした場合現状と異なる可能性を残すが、新野野遺跡と野尻館遺跡は2km、蓬田大館遺跡と玉松台遺跡は1.2kmと比較的近接した位置関係の中、様相差が見られる状況は地点地点で存在した集団の背景差が存在する可能性を残すものである。

新田(1)・(2)遺跡の事例を見ると所謂防衛性集落の時代に溝を徹底し掘り返しながら変遷している。提唱者の三浦圭介氏は新田(1)・(2)遺跡も防衛性集落の一つとして位置づけしている(三浦2005)。

確かに溝そのものの囲郭は、囲う行為そのものに意識があるようであるが、新田(2)遺跡の溝跡の結束部分は新田(1)遺跡側の溝の流路方向を意識したもので、溝については一部で段掘りがなされた水が流れることを前提としたものである。土壘も認められず、溝の囲郭の外周にも堅穴建物が存在している段階もあり、これを防衛として規定できるかどうかについては疑問が残る。補遺編の中で述べたが三浦氏が上北型の典型的例とした野辺地町向田(35)遺跡の首長層の空間とした第36号堅穴建物跡の溝跡については出土した遺物の中に中世陶器が含まれており、厳密に古代の遺構に帰属したと言えない状態、防衛性集落とされている遺跡については前述でも触れたが本遺跡や蓬田大館遺跡、野尻館遺跡な

ども平泉期～鎌倉時代にかけてないしはそれ以降の土地利用が継続しており、その時点での新たに変わった土地利用の痕跡や影響が残っている。

新田(1)・(2)遺跡で見られた溝の事例の問題については、工藤清泰氏(工藤1997)や船木義勝氏(船木2009)等結果と評する論者に対しても同様に当てはまる内容である。確かに溝を介した境界祭祀の行為そのものは新田(1)・(2)遺跡内で行われた可能性が高いと判断できる。しかし、場を内に規定するのなら、外側に存在可能なあり方について説明可能でなければ論として成り立たない。

このほか八木光則氏は、所謂防御性集落とされる集落について「囲郭集落」と呼称し、防御のみとは言いがちな部分と、城柵の終焉と北方交易の隆盛という脈絡の下、様々な変化を呼び起こす外圧が生じ、地域の衰退と外圧に対する危機意識それに抗するアイデンティティから生まれたものという考えを挙げ、囲郭施設が大なり小なりの防御機能をもつことはいままでもないが、そういった施設をもつことがただちに集落間の抗争に結びつくものではないとしている(八木2011)。論としては他の論よりも整合性が図られた内容となっている。ただ、前述の囲郭の変遷以外に2005年に規定した2m以上の「堀」と1.8m以下「大溝」の分類の定義について再び触れているが、新田(1)・(2)遺跡で見られる溝は深さ2m以上の溝が結果的に水の流れを持つ、地点に接続する流れについては定義から外れる

内容であることを指摘しておきたい。

本項で再三触れているのだが、様々な概念は現代の研究者が名称を付け区切った概念の集合であり、その最もらさをもって学史に残り変遷を経ている状態である。しかしながら、その枠組を外した視点で見ると必ずしも言い切れないことが多々ある。

溝の変遷で仮に防御的な位置づけであれば同一の地点をより強固に改修し内部の空間を強化する…当然居住空間は同一地点に制限され同一地点での空間利用が継続される→調査の結果としては同一地点で重複が見られる部分がある。一方、継続幅が短い空間が存在する可能性が高く、溝の囲郭は意図的に北東側に範囲をずらす形となる。囲郭範囲も一時広くなる要因があるが、それを狭める段階も存在する。同じ場所についても一度埋め戻した上で改めて掘り返す行為が認められる。そのようなケースが認められる時点で新田(1)遺跡について単に防御という要因のみでは説明できない行為が介在することが考えられる。

信州地方では10世紀第3四半期から開発が奥地へ進み、地域に限られるが用水が掘られる集落が増加するという(原氏のご教示)。奥地への展開は関東地方でも10世紀段階で継続されており(岩井氏のご教示)、松木氏が述べた10世紀前半の集落増加を古代日本国内で見られた私的開発の枠組のなかで解釈すべきであろうという流れは土器組成上からみて10世紀後半以降も東日本の土器の構成と比



図36 木製祭祀員の集中エリアと方向性について

較可能な様相が残ると筆者は考える。

現代社会では地域単位の結束が薄れており、忘れがちな話でもあるが「結（ゆひ・ゆい）」という共同労働形態がある。古島敏雄氏によれば「ゆい」と云ふのは相互の間の労働の交換であり、提供労働の量質を問はないで、関係者の可能な余剰労働を相互に交換するものと考へられてゐる。」とし長治二年（1105年）ごろ成立した堰河百首の中で、「のこりたはそしるにすまひあすはたたゆひもやとはてさなへとりき」（日文研データベース http://tois.nichibun.ac.jp/database/html2/waka/waka_i025.html）という和歌に現れている事例を指摘している（古島1954）。ただし、この労働形態については法政大学小口雅史氏のご教示によるとこの言葉の用例そのものは水稲耕作に限定される内容であるという。ただ、「ゆひ」という言葉そのものは万葉集まで遡れる内容であり、結び付ける行為を意図するもので、一つの組織における労働結合という推測をしていることから明らかのように、「ゆひ」という言葉に労働結合という意味があった可能性はあるというご教示を得ている。

有賀喜左衛門氏の著作によると「ユイという言葉はその頃（昭和初期）でも厳密に農業上の共同作業に限られていたわけではない。何か共同にすることをユイデスル、ユイヌルなどといっていたし、農夫みなどに一緒に風呂や温泉に行つてあそんでいるとき按摩をし合うことをユイアンマということもあったからユイの言葉はもっと広い意味を持っていたことは明かであるが、いつの間にか農業上の共同作業をする場合に多く使用されていたので、農業上のそれがユイの本来の意味であるように考えられていた。」（有賀1968 340頁 5-10行目）というように解釈の転換に関する記述が見られる。有賀氏の著作を見ると地主大手作に末家や出入りの労力を結集する形が古い形で、その労働形態と同様に小農間で行われていたほぼ等量の労力交換（現在のゆい・ユイ・結の印象）は古い時代から併存していたと考えており、建武五年（1338年）の上総国新堀郷給主得分注文を引用し、大手作のユイに従属する形において小農的ユイが存在したと解釈している（有賀1968）。

現時点で直接溝を共同労働として掘削する行為に結び付けることは難しいが、溝の掘削範囲はそれ相応に大きく、労働力として必要とされる人員は相応の人力が必要とされたことが想定される。労働の担い手、労働の行為の背景が社会様相の一つと考える。

新田（1）遺跡の調査は発掘当初この地域としては例を見ない木簡や木製祭祀具の出土が相次いだことから一時「国家の出先機関（鈴木2004、斉藤

2004）」のような評価がなされた時期があった。それに対する石江遺跡群全体としての調査未了時の十分な検討を経た内容でない点や周辺類例の少なさ（その後十三盛遺跡など同時期の比較可能な資料が追加されることとなり、更なる検討が可能となった）や在地主体の遺物構成の中で執り行われた祭祀形態などを含め、筆者は鹿兒島県域久遺跡群と石江遺跡群を中心とした古代末期の境界世界に関する研究会の成果に際し、前代からの変遷を経た在地の一勢力の拠点であるとし、祭祀行為が宗教的要素を取り入れていることは自然発生的に体得したものではなく、情報を入手し執り行わせる行為が存在していると報告した（木村2010）。基本的な考えに変更はないが、前述の新田（1）・（2）遺跡の変遷に際し、新田（1）遺跡側で図3-4に図示した方形区画のエリアと新田（2）遺跡の自然地形の弧状の区画エリアとの対比がある。新田（1）遺跡側はその後自然地形の区画へと変化しているが、木製祭祀具の廃棄について流路の下流ということだけでなく、流路の流れが弱い堆積が進んだ時点で廃棄行為が続いている状態で、図3-6に提示したとおり、新田（1）遺跡はSD-01に廃棄が集中し、方形区画のあったエリアに近接した位置関係で、新田（2）遺跡は県SD73に集中し、弧状の区画側から廃棄された状況が確認される。SD73と新田（1）遺跡の方形区画は時期的に併行しないが、新田（1）遺跡側での様相は新田（2）遺跡側と祭祀の行為者が異なる可能性を残しうる内容である。

祭祀行為の内容について筆者は前述の報告で木製祭祀具として人形が欠落する点を指摘したことがあつた。木製祭祀具の形代の構成としては馬形が最も多く、次いで武器形（刀形・剣形・鏃形）が多く、所謂防衛性集落と呼ばれた時期の状況を反映するものか、時期の下った影響のものか、祭祀行為者そのものが国家の領域外の勢力による影響なのか、変質した要素が見受けられる。同時期の五所川原市十三盛遺跡では立体タイプであるが人形が出土している（青森県埋蔵文化財調査報告書第526集第1分冊182頁図130-1）、なお、五所川原市教育委員会調査の十三盛遺跡の調査報告書でも人形が出土したと報告されている（五所川原市埋蔵文化財調査報告書第33資料1分冊90頁図III-2-56-314）が、この資料については本遺跡では新田（1）遺跡SD-01から出土した神像（第107集-1図W-1-1-172）と比較可能なサイズで、十三盛遺跡の資料は本遺跡新田（1）遺跡B-1区SE-12出土の神像（第107集-1図W-1-47-1037）に見られるような手の表現が見られ合掌する形状である。十三盛遺跡の五所川原市教委調査分については人形と人形というように神像はないし

は仏像の一つとして評価すべきであるとする。今後出土する可能性は否定はしないが、明瞭な形で板状の人形については現時点でも明瞭に存在していない状態である(立体人形に関連する高間(1)遺跡では10世紀前半段階で土製人形が存在する〔第113集-2図2-323-E256〕)。

この他、灯明具が多量に出土し、炭化した付着物が多量こびりついた資料が溝跡から定量出土している(第107集-1図P1-008-0170・図P1-011-0252・図P1-024-0620等。これらの資料は第108集-2第1章第3節の放射性炭素年代測定単体資料として分析されている。)、時間的に併行する新潟県上越市一之口遺跡東地区で検出したSD1¹でも溝で食膳具を灯明使用した水際の祭祀を行われており(新潟県教育委員会1994)、木製祭祀具や馬の頭骨などの出土例も含め新田(1)・(2)遺跡内で水際の祭祀行為が執り行われたことは間違いないと考える。

その行為者については、方形区画や関東系の煮炊具の変形したタイプの器器を導入した担い手だけでなく、前述した厳密な精緻さがない仏教関連遺物の様相や第IV章第12節で中村氏が取り上げた高間(1)遺跡の古代に帰属する掘立柱建物跡のあり方(調査時SB-01、中村氏の考察中でSB-2・2・23について「建築の知識を持つ人が建物とは考え難い。床を持つ建物の存在を知る在地の民衆が自作した建物であろうか。」と記述)などをみても共通する要素〔つまり情報は知っているが精度が足りないということ〕が認められる。堅穴建物跡主体の集落と周辺地域と比較しても遜色無い土器構成、弧状の囲郭の段階でも明瞭に執り行われている事態を考慮すると従前の考え方に大きく変わらない状態であるが、状況は複雑であり、有頸の羽釜の存在や掘文土器手法で作られた甔の存在等、多系譜の接触と転換が存在しており、人の動きが高発な動態であったことが想定される。

本項で触れられた内容が筆者の力量不足により部分的かつ不十分な状態であった。今後様々な方の再検討がなされることが想定されるが、短絡的な帰結とならないよう祈念するものである。

(木村 淳一)

註

- 1) 近藤純正「3. 気候変動と人々の暮らし-歴史に学ぶ-」
<http://www.asahi-net.or.jp/~rk7j-kndu/kisho/kisho03.html> を参照した。
- 2) <http://www.accuweather.com/en/weather-news/volcano-cooltemp-midwest/17180569> を参照した。その他、寒波についてはドイツの気候変動ポツダム研究所は「極寒」の南下による影響で温暖化の影響を指摘している。<http://www.afpbh.com/articles/~2780499?pid=6596271> を参照した。
- 3) <http://www.pressvz.jp/detail/2014/01/08/344414-us-cold-kills-21-colder-than-south-pole/> などでも報じられている。

4) <http://www.walesonline.co.uk/news/wales-news/wales-weather-welsh-coastline-avoids-6463957> などでも報じられている。

5) <http://www.couriermail.com.au/news/queensland/queensland-outback-temperatures-nudge-50c-as-heatwave-grips-state/story-fukt21jb-1226794011078> などでも報じられている。

6) 気象庁ホームページ「気象統計情報」過去の気象データ) 青森県・青森市を選択 http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/hourly_sl.php?prec_no=316&block_no=475754&year=2013&month=8&day=9&view= 情報は観測地点の情報であり、石江地区の現地の状況とは全く同じではない。

7) その他、大量の雨で既存の堆積土が洗い出され砂鉄が沈殿するような堆積状況など二次的な要因は多岐にわたる。

8) 新青森市史通編(青森市2011)で筆者は津軽地方に存在しないと執筆したが、八木氏の新青森市史通編の書評(八木2011)の指摘通り、境川遺跡の事例を見逃した結果で誤りである。また、同様に引用参考文献の少なさについて筆者が提出したリストが全て掲載されていなかったのが事実である。

9) 漆油に含まれるタンニンの成分が防水に機能すると規定した場合、漆油に限定されたものではなく、タンニンの含まれる他の成分の利用も考慮に入れる必要がある。当委員会元大成氏は小牧野遺跡から採取した胡桃の果皮からタンニンを抽出し、触媒である樹脂を加えインク作りを実施し、ホームページ上で公開している。<http://amblb.jp/stonecircle/entry-11627970053.html> 等

なお、引用・参考文献は本章末に一括して掲載した。

第3節 中世以降

本項で対象とする遺跡は、石江土地区画整理事業用地及び東北幹線建設事業用地内で発掘調査が実施された、新田(1)遺跡、新田(2)遺跡、高間(1)遺跡、高間(6)遺跡、新城平岡(2)遺跡、新城平岡(4)遺跡、新城平岡(7)遺跡の計7遺跡である。

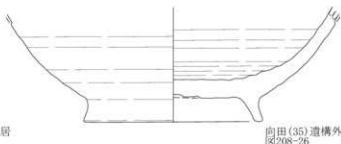
構成としては、追加情報について触れた後に、各遺跡を通した様相について触れることとする。

1. 追加情報

筆者は、平成25年12月21日に平泉町文化遺産センターで開催された「平泉出土品を中心とした渥美地製品検討会」に参加した。その際、日本考古学協会員・野辺地町文化財保護審議会委員の瀬川滋氏のご厚意のもと向田(35)遺跡の資料および石江遺跡群から出土した渥美・常滑焼、さらに野尻館遺跡のかわらけ・中国産陶磁器を持参し、東海地方の研究者や平泉町重樫忠郎氏に資料を実現していただき、ご教示を賜った。

野辺地町向田(35)遺跡の第36号住居跡出土資料については東海地方産の可能性の有るものが明確に産地特定まで至らない中世陶器、遺構外出土で羽柴氏が東海地方産とした片口鉢(羽柴2011)については図1に再掲した第107集-1図P1-1-037-0958新田(1)遺跡の東産産の山菜樹(12世紀末~13世紀前半)の資料と比較可能

青果埋報第373集向田(35)遺跡

向田(35)第36号住居
図106-1向田(35)遺構外
図208-26青市埋報第107集-1新田(1)遺跡
遺構外テストトレンチ9周辺
耕作土下層図P-1-037
0958

青市埋報第111集野尻館遺跡

第62図-4
SD-01第62図-5
SD-01第62図-6
SD-01

図1 再実測資料について(S=1/3)

な東遠産の片口鉢であると鑑定された。瀬川氏のご厚意で野辺地町に譲与された向田(35)遺跡の資料については図1に再実測した図面を掲載した。

石江遺跡群の資料については前述の東遠産の山茶碗の資料(転用碗でもある)以外に第107集-1図P-1-125-MA488で瓦質土器と報告した叩き目のある陶器については産地不詳の東海系の技法を有する陶器、新田(1)遺跡と高間(1)遺跡で同一個体と考えられる複数破片について、口縁部資料のある第113集-2図2-380E1174の器形から渥美焼の編年の2b期(12世紀末~13世紀初頭)の新しい段階に属すると鑑定された。2b期は当日並べられた平泉町の資料の中には存在しない新しい段階の資料にあたり、13世紀前半に継続した新田(1)・高間(1)遺跡のエリアに分布している状況など後発の資料である様相が確認された。

新田(1)遺跡の本文部分でも触れたが、奥州藤原氏の全盛期に外浜までの支配エリアが広がり、新田(1)・(2)遺跡で該期の掘立柱建物跡と認定される資料も存在し、珠洲焼の1期の資料やかわらけ等の存在は確認している。ただ、その成果は全て平泉期に属するものではなく、渥美焼や山茶碗について鎌倉時代に帰属する資料が存在することは掘立柱建物跡の変遷状況の確認だけでなく、遺物の面からも裏付けが取れた次第である。裏を返すと全てが鎌倉時代に属するものでもなく、平泉期の資料も存在する。情報量が限られる中、歴史的に大きく位置づけを行う方々も存在するが、12世紀後半のみでな

く13世紀代も継続した事実を強調しておきたい。

その他、野尻館遺跡のかわらけは13世紀前半代、青磁小皿については白磁小皿の器形でありながら、青磁の資料で具体的産地は不詳のままである。12世紀代の溝縁の可能性を残す。(再実測図について図1に掲載した。)

2. 石江遺跡群の中世以降の様相について

12世紀後半以降新田(1)・(2)遺跡のエリアで掘立柱建物が見られるようになり、古代の時点で利用していた溝跡が一部再利用された可能性が残る(新田(2)遺跡SD-002)。初期の段階では新田(1)遺跡のB-4区SD-201というこれまでの古代の溝跡とは軸線的全新異なる溝が掘削され、手づくねかわらけと珠洲焼の1期の四耳壺の破片などが出土している。その後、溝の囲郭がB-1区SD-81・B-2区SD-54・B-1区SD-126(110)→B-2区SD-55・B-1区SD-111と変遷するが、ロクロかわらけは新しいSD-54・55個に帰属する資料が多い状況である。

13世紀前半ごろには新田(1)遺跡側でSBa-02・SBa-01が建てられるが、SBa-01は大型の柱穴で桁行7間、梁間5間に四面庇で、さらに北側に又庇が付属する建物である。中村隼人氏のご教示によると床が張られた建物で、ずば抜けたものではないが、同時期に継続した高間(1)遺跡の屋敷群の建物と比べても格が高い取り扱いとなる。前段のSBa-02についても床のある可能性



文永の碑とて
 石神の石か
 やがて赤石此
 寺の石なり
 人の手
 寺新 聖美乃社



背面



正面



左側面



右側面



図2 菅江真澄の「文永の碑」と石江神明宮(石神の祠の図については『影印本栢家の山』(秋田県立博物館 2002 年より))

があり、S B a - 0 2 → 0 1 までは床の存在した施設が新田(1)遺跡に存在した可能性がある。

この点が古代の時点でも既に新田(1)遺跡の東側のエリアでは方形の溝区画と大型の竪穴建物が存在していた部分に相当し、隣接する新田(2)遺跡との場の違いが存在していたが、中世に入っても大規模に囲郭される高岡(1)遺跡のエリアと新田(1)遺跡のエリアは同時併存ながら格の違いが存在するようである。その影響が新田(1)遺跡側では12世紀後半以降、13世紀前半～後半の中国産陶磁器が出土したり、東遠産の山茶碗が出土する場であり、高岡(1)遺跡側は非常に遺物量が少なく、漆器碗と若干のかわらけと美濃産の破片が若干量出土する程度という差となる反映となる。

高岡(1)遺跡は、既報告書の報告書中でも触れたが、南北228m、東西158mの南北が二町分、東西方向が一町半より少し狭い程度の範囲を囲繞したもので、金沢市畷田・寺中遺跡では12世紀後半～14世紀代に継続した遺跡群で南北約220m、東西約170mの二町×一町半程度の囲繞が確認されており(向井2010)、時期的に併存するものである。その囲繞されたエリア内には雨落ち溝が伴う掘立柱建物が存在しており、井戸跡のS E a - 0 4(調査時SK-246)からは17枚の梵字のある塔婆婆(第113集-2図2-354～355、E786～E802)が出土し、共伴資料として光背の一部が出土している(図2-353-E784・図2-353-E785)。塔婆婆一枚には寛喜三年(西暦1231年)の年号があり、寛喜の大飢饉の影響が残る時期の資料となる。本遺構から出土した塔婆婆は17枚であるが、(財)元興寺文化財研究所の狭川真一氏のご教示によると梵字の組み合わせからセットとしてもつと数が存在した中の残りである可能性のご指摘を受けた。資料的に他の遺構からの出土が認められなかったため、他の資料についての情報は不明であるが、紀年銘資料としては第一級の資料であり、屋敷群との対比(第113集-2高島氏設定S B a - 13とは近接しすぎており、高島氏設定S B a - 12の段階、本報告中村氏設定S B - 15の段階ではやや近接するもの併設可、前段S B - 14でも成り立つ関係にある。)から二段階目ごろの位置づけとなる。建物は主軸を替え変遷し、遺物の出土が少ないため情報は限られるが、北側のS E a - 0 2 (SK-97)から出土した漆器碗が13世紀中～後半にかけての資料であることから13世紀後半まで継続した可能性がある。

一部の資料で筆者が触れていたが、江戸時代の紀行家菅江真澄の「すみかの山(栖家能山)」で石碑の外れに小さな祠があり、その前に苔のむした石碑があり、文永と刻まれているという話であると云う

伝聞が記載されている。「すみかの山」における真澄のスケッチでは明白に「文永」と刻まれた石碑が描かれており、平凡社刊行の内田武志・宮本常一編訳の『菅江真澄遊記3』(菅江真澄著、内田・宮本編訳1967)の中では「文永の碑があった。そのほかの文字は苔にかき消されて読み解けなかった」と訳されている。しかし、ほとんど文字は苔によりそれとは読み取れなかったと読んだ方が妥当に思え、真澄の図は多少の誇張が入った図であることが推測される。実際の石碑や石江神明宮に現存する(幅69cm、高さ122cm、奥行28cm)が、菅江真澄の訪れた情報などを知らぬまま苔のむした石碑が地元の厚意で洗浄され、新たな文字が記入されてしまい、残念ながら元々の文字が確認できる状況ではない。しかしながら、真澄の描いた石碑の主頭状の形状と現存する石碑の主頭状の形状は類似するので、真澄の見た石碑ではほぼ間違いのないと思われる。新たに掘り込まれた文字の周辺は研磨がなされており、元々の文字の痕跡は確認できない。また、周辺に細かな文字が記入されていた可能性はあるが、風化が顕著で背面も含め確認できない状況である。菅江真澄が知り得た文永年間は、鎌倉時代の13世紀後半に該当するので、青市埋文報第94集等で触れた石江神明宮の変遷状況も含め神社の移転によって石碑も移動してきたことになる。なお、聞き取り調査では元々の神社は新田(1)遺跡周辺にあったという話があり、『石江史実』(佐藤1985)にも記載されていることから、新田(1)遺跡周辺側からの流入である可能性も有する。

高岡(1)遺跡では14世紀以降不明瞭であるが、新田(1)・(2)遺跡では14世紀代も継続し、遺物的には14～15世紀後半まで量が多く、高島氏の分類では15世紀後半～16世紀後半までの建物が集中する傾向となる。15世紀代の資料としては新城平岡(4)遺跡内の掘立柱建物跡(柱穴から永楽通寶が出土、第IV章第12節の中村氏の再検討では中世末期以降の資料と解釈)や土坑墓、さらに周辺では新城古銭(青森市教育委員会1992)や青森西高等学校の敷地内に戦後まもなくの米軍撮影の空中写真の中で方形形居館の痕跡が確認されていること(青森市2005)などもあり、周辺の土地利用は継続した状況である。17世紀代の資料は新城平岡(7)遺跡で唐津の皿(第112集-3図3-73-40・41)が出土しており、新田のエリアで少数ながらも建物跡が存在した扱いである。以降明確な建物の存在は不鮮明になるが、菅江真澄が訪れる18世紀後半の時点でも周辺の土地利用は継続されていたものとする。

(木村 淳一)

なお、引用・参考文献は本巻末に括弧で掲載した。

引用・参考文献

- 天野由也・小野篤子編 2007『古代朝鮮からアムスベ』吉川弘文館
- 寛井秀規 2004『延喜主計士の土器について(上)』『延喜式研究』第20号 pp. 50-131
- 寛井秀規 2005『延喜主計士の土器について(下)』『延喜式研究』第21号 pp. 42-87
- 新井浩一 2006『古代北東部の律令的整理』『古代文化』58 pp. 103-116
- 新井浩一 2013『奥州天台寺と古代北東部の太平洋沿岸交通-漆の交易路に注目して-』『環太平洋・アジア文化研究』第10号 pp. 69-86
- 有賀倉左衛門 1968『六・ユエの意味とその変化』『有賀倉左衛門著作集Ⅴ 村の生活組織』pp. 239-258
- 安藤壽太郎 1959『日本古文化制作研究』財団法人農林協会
- 飯村均 2009『中世東部のムラとマツ』東京大学出版会
- 津上嘉彦・山中圭一・唐澤敦光 1994『文化記号論』講談社
- 池田英典編 2008『古代中国の世界編年-キタジマの世界』高志書院
- 石川真古学研究会・北陸古代土器研究会 1988『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』
- 五十嵐社会 2008『聖穴地物跡の屋内空間-聖穴外屋外空間の構造-』『秋田考古学』第52号 pp. 45-59
- 磯貝真寿男 1994『日本中世史研究と契機論』『日本史研究』388 pp. 25-48
- 伊藤英夫・山田昌久 編 2012『木の考古学』南海社
- 伊藤武志 2010『平安時代におけるムロミの出土と展開』『北方世界の考古学』
- 伊藤博幸 2006『陸奥型埴輪・古型埴輪・北型埴輪-東北地方の平安朝後の製作技法論を中心に-』『陸奥型埴輪の歴史-古型埴輪型古志輪記念論集』pp. 171-182
- 伊藤博幸 2010『古代陸奥の歴史的發展の変容について-開墾による森林破壊と自然破壊-』『環境歴史学の発展』pp. 65-95
- 伊藤博幸 2011『東北北部における後述土器について-分類に関する基礎的検討と課題-』『陶磁と古代朝鮮』pp. 237-251
- 伊藤由美子 2013『青森平野西部部における低地型貯蔵穴を備えた縄文集落の変容について-新田(1)・(2)遺跡を例として-』『青森県立郷土館研究紀要』第37号 pp. 13-22
- 井上克良 1982『東北地方北部の火山図』『考古学土記』第7号 pp. 1-41
- 井上尚明 2006『武蔵国における村落寺院について』『埼玉の考古学Ⅱ』pp. 665-693
- 井上雅孝 1999『3石手集』『考古学論叢』第5号 pp. 23-27 立正大学考古学会
- 井上雅孝 2002『風刺状鉄製品の研究-東北における古代祭祀の一形態-』『岩手考古学』第14号 pp. 45-68
- 井上雅孝 2006『古代鉄製品から見えた蝦夷の信仰と儀式-風刺・三結鉄・鉄鏃・風刺状鉄製品-』『立正大学』第99号 pp. 155-172
- 井上雅孝 2009『奥州平野から出土する土器の研究-12世紀代における中世土器様式の成立と展開-』平成20年度高学術奨励基金調査研究助成
- 井上雅孝 2010『早稲むらの谷の承継と成立』『わたらの生活文化』pp. 196-195
- 井上雅孝・若島武史 2011『北上川東岸に出土する前期期の土器様相-11世紀末葉に存在する左回転土器について-』『岩手考古学』第22号 pp. 51-70
- 岩井浩介 2010『早稲田遺跡出土資料の再検討』『青森県考古学』第18号 pp. 49-58
- 岩井浩介 2009『津軽南城に出土する土器様相』『秋森 田村某一先生喜寿記念論文集』pp. 187-213
- 岩井浩介 2012『野尻遺跡群における聖穴住居の規模構成の変容』『青山考古』第28号 pp. 85-93
- 岩手日報社 2001『むくわて未来への遺産 古代・中世を歩く 喜良〜安土城山時代』
- 入間田宜夫 2005『北の交流によって生まれた中世日本』『歴史地理教育』2005年3月号 pp. 76-81
- 入間田宜夫・坂井秀孝 編 2011『前九年・後三年合戦 11世紀の城と郷』高志書院
- 岩田宏之 2011『観度のセリエーション、系統のセリエーション、流行のタイムラグ-青森県縄文時代前期後半-中期における土器の分析-』『考古学と縄文考古学-佐々木達夫先生追悼記念論文集』pp. 200-213 金沢大学考古学研究会
- 内田武志・宮本常一 1975『菅江高森全集』第3巻 未来社
- 宇野浩夫 1982『井戸考』『史料』65-65 pp. 623-661
- 宇野浩夫 1989『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』高志書院
- 宇野浩夫 2013『九・一〇世紀における青森県周辺の地域性』『古代末期の環境世界』pp. 311-345
- 宇野浩夫 2013『古代青森川流域河辺の土器様相』『研究紀要』第2号 pp. 11-31 八戸市埋蔵文化財センター・土器研究会
- 蝦夷研究会 2004『古代蝦夷と律令国家』高志書院
- 岡本洋一・浅田智晴・加藤雅博・藤根久 2013『古代北陸の律利用-青森県の漆付土器群-』研究紀要』第18号 pp. 25-28 青森県埋蔵文化財調査センター
- 小川貴男 1979『回廊系切り技法の展開』『考古学研究』26-1 pp. 21-41
- 小川穂史 1984『日本古代・中世における境界意識の変遷をめぐって』『特定研究報告書』埋蔵文化センター研究』pp. 124-142 弘前大学人文学部人文科学特定研究委員編
- 小川穂史 1995『古代・中世における北方世界の史的展開-境界の地・津軽と南北交流の変遷-』『通都の風貌と交流の文化論-ましままな道と素材として-』pp. 159-190
- 小川穂史 2003『古代北東北の広域ツラをめぐる諸問題-十和田と白根山(長白山)を中心に-』『日本学術の展開』pp. 423-456
- 小川穂史 2010『青森市石江遺跡群の位置づけをめぐって』『北方世界の考古学』pp. 305-307
- 小川穂史 編 2011『陶磁と古代朝鮮』高志書院
- 小川穂史 2012『火山灰と古代東北』『北から見た中世日本』pp. 7-26
- 小栗明彦 1998『奈良時代古墳群論』『新干原考古学古志輪記念論文集』pp. 109-1086
- 小野野 2013『現代社会と考古学の交錯-科学論の観点から-』『考古学研究』69-3(2019) pp. 10-16
- 尾野壽壽 2008『陶磁器-古代の反陶磁器生産と来世古志輪群』『東洋古志輪群』pp. 77-92 豊田市教育委員会
- 堀江宏之 2003『9世紀の律令-エミシと逸人』『弘前大学国史研究』第114号 pp. 18-29
- 実跡研究会 編 1997『古代の土器生産と地成環境』高志書院
- 実跡研究会 編 2010『古代農業の基礎環境』高志書院
- 北日本埋蔵文化センター・流通センター 2007『五所川原埋蔵文化の年代と流通の実態』
- 北野博司・松井敏也・村木志伸・山田博之 土器表面塗染剤としての焼粘土の同定に関する基礎研究』『東北芸術工科大学紀要』No. 11 pp. 28-38
- 北野博司 2006『磁を研ぐ』『陶磁器の歴史学-古志輪型古志輪記念論文集』pp. 334-345
- 木村洋一 2002『青森・高田(六)遺跡』『本物研究』第二四号 p. 90
- 木村洋一 2003『青森・新田(四)遺跡』『本物研究』第二五号 pp. 120-143
- 木村洋一 2004『青森・新田(一)遺跡』『本物研究』第二六号 pp. 158-181
- 木村洋一・相馬俊也 2005『青森・高田(一)遺跡』『本物研究』第二七号 pp. 156-158
- 木村洋一 2005『新田(1)遺跡-北限の木柵-』『考古学ジャーナル』No. 531 pp. 26-30
- 木村洋一 2006『青森・高田(一)遺跡』『本物研究』第二八号 pp. 130-138
- 木村洋一 2007『青森・新田(一)遺跡』『本物研究』第二九号 pp. 93-94
- 木村洋一 2007『青森・新田(四)遺跡』『本物研究』第二九号 pp. 95-103
- 木村洋一 2010『青森市石江遺跡群の特質』『古代末期・日本の境界』pp. 251-282 九州産業大学
- 2000『九州遺跡学』
- 工藤康隆 1997『考古学研究における断片性-中世・古代への視点から-』『青森県史研究』pp. 120-145
- 窪田大介 2011『古代北東北伝教研究』佛教大学
- 熊谷公男 1994『久遠宮-鎮守府軍府の成立』『中世の地域社会と交流』pp. 2-44
- 熊谷公男 2011『元慶の乱の再検討』『古代中世の蝦夷世界』pp. 13-53
- 熊谷公男・八木出典雄 2007『9世紀の蝦夷社会』高志書院
- 倉田直樹 2005『延喜宮式に記載の土器、陶器と倉吉郡出土の土器・陶器』『特別展「再現-延喜宮式-平安の倉吉を探る-』pp. 70-76 倉吉歴史博物館
- 桑原節郎 1976『須恵系土器について』『東北考古学の諸問題』pp. 443-469
- 小井川和夫 1984『いわむらや赤土器について』『東北歴史資料館研究紀要』第10号 pp. 59-74
- 考古学と中世史研究会 2012『第10回考古学と中世史シンポジウム 水の中世-開発・生活・災害-資料集』
- 国士郎大学考古学 編 2009『古代社会と地域間交流Ⅵ 六一書局』
- 国士郎大学考古学 編 2012『古代社会と地域間交流Ⅶ 六一書局』
- 国立歴史民俗博物館 2007『国立歴史民俗博物館研究報告第137集(共同研究) 高麗年度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究』
- 古代の土器研究会 1994『古代の土器研究-一律令の土器様式の西・東3 集陶器論-』
- 小松正夫 編 2010『北方世界の考古学』『いわいん舎』
- 小森俊成 2005『京から出土する土器の編年的研究』京都編纂工房
- 近藤純正 2011『身近な気象の科学(オンパレード版)』東京大学出版会
- 菅澤洋 2010『野尻遺跡群の土器編年について』『研究紀要』第15号 pp. 1-14 青森県埋蔵文化財調査センター
- 菅澤洋 2011『陶磁器の歴史的特徴について-生産と交流の観点から-』『アイヌ史を問う-函館-生活・文化・地域交流』pp. 88-101
- 菅澤洋 2011『古代北東-北海道の地域間交流-土器編年と蝦夷(系)土器群』『陶磁と古代朝鮮』pp. 131-185
- 菅澤洋 2011『青森県の古代生活』『日本考古学協会2011年度植木大会研究発表資料集』pp. 670-684
- 菅澤洋 2012『北奥における蝦夷(系)土器の様相について』『青森県考

古学』第20号pp.67-80

森藤利男 2004『高地性防衛集落・環濠集落出現の背景と古代東北北部における生産・流通との関係―八戸市八戸・前通遺跡・青森市新田(1)遺跡の発見を受けて新たな「防衛集落」論をいかに構築するか?』『シンポジウム観覧からアイズへ』pp.53-59

森藤利男 2011『安信・浪跡・奥州藤原氏と北の辺境:『古代中世の蝦夷地世界』pp.155-200

藤原浩高 2010『五月女遺跡出土の弥生・奈良時代の土器について』『研究紀要』第15号pp.25-34 青森県埋蔵文化財調査センター
坂井秀一 1975『東北北部における須恵器の生産』『北奥の古代文化』pp.69-87

坂井秀一 1990『東北古代テラコタ器類の二系譜と須恵器との関係-九取の出現、平造の集約-』『新編考古学研究会報』第6号pp.30-36

坂井秀一 2008『古代地域社会の考古学』同成社
櫻井清彦 1975『東北地方北部における土器類と祭祀に関する諸問題』『北奥の古代文化』pp.33-48

櫻井清彦・菊池徳夫 編 1987『蓬田大館遺跡』早稲田大学文学部考古学研究室報告書

松岡正信 1996『ロクロ使用開始前後成像について-群馬県内の実体把握を目的として-』『研究紀要』7pp.115-128 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
佐藤正敏 1985『石川史学』

佐藤正敏・若下紗弥佳 2005『青森県に分布する白河川小笠小テララに含まれる火山ガラスの化学組成』『白河研究』第2号pp.65-71

津浦康 2006『異常気象が現れたときの物季節の変化』『地球環境研究センターニュース』Vol.16No.12pp.14-15

末本啓介 2006『足立郡における9世紀後半から10世紀の遺構について』『埼玉の考古学』第1号pp.645-664

菅江高津彦, 内田武志, 宮本繁一編訳 1967『菅江高津彦選集』3 平凡社
鈴木忠生 1982『文献史料から見た古代奥州での天災』『考古風土記』第7号pp.42-48

鈴木忠雄 1983『古代北武蔵における土器製作手法の両期』『土曜考古』第7号pp.13-21

鈴木清民 2004『平安後期の北奥羽社会-北の編みからのおねり-』『歴史地理教育』2004年10月号pp.68-73

鈴木清民 2004『平安後期・北奥の祭祀・交易・経済拠点としての安房-青森市新田(1)遺跡の歴史地理学』『東洋学の古代文化』第12号pp.15-33

鈴木清民 編 2008『古代日本の異文化図説』朝倉書店

鈴木忠之 2002『中世土器の象徴性-「かろめ」の器としてのかわらけ-』『日本考古学』第14号pp.71-87

須田健 2006『古代村落寺院とその信仰-「かろめ」の信仰と社会』pp.35-77

関根秀 2003『古代東北の概観と北海道』岩田弘文館

開明 1990『ボバーの科学論と社会論』東京弘文館

全国シンポジウム「中世農業の諸相-生産技術の展開と編年-」実行委員会 2005『全国シンポジウム中世農業の諸相-生産技術の展開と編年-発表要旨集・資料集』

高橋一夫 2010『常陸型壺と武蔵型壺』『埼玉考古』45pp.39-50

高橋正敏 2003『古代中期の広域流通過程を考へる-第21回中世土器研究会に参加して-』『中世土器研究』107号pp.1-6

高橋正敏・長尾正樹 2010『三沢市平塚(1)遺跡から出土した緑釉陶器について』『研究紀要』第15号pp.35-48 青森県埋蔵文化財調査センター

高橋正敏 編 1995『高橋正敏遺著 第二巻 古代-高と日本史1』財団法人高橋正敏事業団

高橋正敏 2011『秋田県内出土の類土器-類土系土器』『秋田考古学』第55号pp.51-74

高橋正敏 2012『十和田山火噴火と災害復興』『北から生まれた中世日本』pp.89-106

竹田和夫 編 2011『古代・中世の境界意識と文化交流』勉誠出版

武蔵正平 1994『エシンの移転と律令国家』『古代国家と東国研究』

田嶋明男 2013『第4章総合的検討と課題 第1節 平安期土器の年代性と秋田産土器の流通』『加賀川江流遺跡』pp.93-104 山形県教育委員会

田中広明 2003『古代集落の再編と終焉』『中世東国の世界1-北国東』pp.11-32

田中広明 2011『坂東と徳川の陶磁』『東国の地域考古学』pp.245-272

田中広明 2006『中国東北部白狼山の10世紀巨大噴火とその歴史地理学』『東北アジア研究センター-新書第16号-東北大学東北アジア研究センター
野野道雄 2008『カマド式遺構の編成と今後の研究課題について』『研究紀要』第13号pp.33-40-青森県埋蔵文化財調査センター

中世土器研究会 編 1995『概観中世の土器-陶磁器』高橋社
中世都市研究会 編 1995『古代から中世へ』新人物往来社

辻秀人 2007『古代東北-北海道におけるホ-スト-文化交流の過程』平成15年度-平成18年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究代表者報告書
津野仁 1988『古代日本の土器類考古学』古代文化』80巻11号pp.37-42
田家康 2013『筑紫で読み解く日本の歴史』日本経済新聞出版社

東海上部研究会 2009『灰緑陶器のブラインドテストNo.1・2・3』

東海上部研究会 2013『第2回東海上部研究会 奥美楽部年報の再構築』

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所文化財情報研究室 2013『遺跡情報交換標準の研究』第3版

東北古代土器研究会 2008『研究報告3 東北古代土器集成-須恵器-宗跡編-(徳美)』

東北古代土器研究会 2008『研究報告4 東北古代土器集成-須恵器-宗跡編-(出羽)』

虎尾俊哉 1995『律令国家の地方文化』吉川弘文館

中井洋史 2004『権威のなごの京都:うごこ(モノ)権威と価値形成-日本中世の土器類における「うごこ(モノ)美意識」の価値形成とは何か?』pp.323-335

永井久美男 1994『中世の出土土器-出土土器の調査と分類-』高橋正敏編調査会
中島信次郎・城戸博利 1991『畿内国から来た食器-大宰府功治跡第89号調査出土資料-』『中世土器の基礎研究』3pp.173-180

中島信次郎 2001『遺物出土背景立案のための分析』『博多研究』第9号pp.69-93

中嶋文夫 2008『古代の土器-青森県内西部から出土した土器-』『青森県考古学』第16号pp.65-78

長森英明・笹田賢治・吉妻 2013『青森県内各地の地質』『地域地質研究報告』第3号pp.1-14 青森県地質調査所(5)第22号』独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター

新田勝夫 2011『青森県内における平安時代の非ロクロ成形について』『研究紀要』第16号pp.33-44 青森県埋蔵文化財調査センター

新田勝夫 2012『青森県内における奈良・平安時代の民(民林)形土器について』『研究紀要』第17号pp.31-40 青森県埋蔵文化財調査センター

西田寿夫 2002『土器の彫形分類と用途に関する考察』『日本考古学』第14号pp.89-104

西弘海 1986『奈良時代の食器類の器名とその用途』『土器製作の成立とその普及』pp.55-92

日本考古学協会 2001『日本考古学協会 2001年度年大会発表要録資料集 都部・早稲一成立とその構成』

日本植生学会 2011『日本植生学会第26回大会講演要録』

沼田善治 1999『北上盆地の古代集落における火葬信仰(1)』『北上市埋蔵文化財センター研究』第1号pp.23-38

崎崎真隆・大山純史・星野治・佐々木山吉 2011『第4部 新田(1)遺跡出土木材の年輪年代測定と放射性炭素年代測定から推定される遺構内の年代測定』『石江遺跡群発掘調査報告書』第2分冊pp.62-71

羽柴直人 2001『早瀬遺跡群のロクロかわらけについて』『岩手考古学』第13号pp.41-62

羽柴直人 2007『12世紀北奥の交通路について』『村越先生寿賀記念論集』pp.101-116

羽柴直人 2010『東日本初期武家政権の考古学的研究-早瀬勢力圏の位置付けを中心に-』総合研究大学院大学博士(文学)論文

羽柴直人 2011『北奥における奥六部-文武の流入過程』『古代中世の蝦夷地世界』pp.227-256

塚本 編 2002『研究報告集報告書4 ムラ研究の方法-遺跡-遺物から何を読みとるか?』帝京大学山梨文化財研究所

バレオ・ラボANS年代測定グループ伊藤茂・丹生綾子・尾野大真・廣田正史・瀬谷美・小林統一・Zsuzsanna Lontai・Irene Jorjollani・佐々木山吉・藤原久・乳智賢 2011『第3 巻 放射性炭素年代測定』『石江遺跡群発掘調査報告書IV』第2分冊pp.47-61

福富正和 2011『平安時代の須磨高台供養墓に関する若干の考察-福岡地域出土資料を中心に-』『岩手考古学』第22号pp.37-50

藤澤良祐 2008『中世瀬戸内海の研究』高志閣

藤原啓幸 2008『19世紀の「奥地」と文藝の風』『古代文化』第60巻第3号pp.1-14

藤原啓幸 2013『平安前期東北配の研究』瑞雲房

船木義勝 2009『壺と土器』結果表現の諸相-青森市高屋敷遺跡の基本的考察-』『秋田県考古学』第53号pp.23-46

船木義勝 2011『火山噴火災害と「天変地異」の乱』『秋田考古学』第55号pp.23-36

船木義勝 2011『白狼山(長白山)130世紀噴火がもたらした「天変地異」の乱』『みちのく考古学』40周年記念論集』pp.28-43 みちのく考古学研究会

吉川一明 2006『IV. 多量器類の11世紀-12世紀の土器について』『宮城県多量器類調査研究所年報』2006pp.72-79

吉島敏雄 1954『日本農業技術史』時局社

文化庁文化財部記念物課 2011『発掘調査のてびき-集落遺跡発掘編/整理・報告書編-』

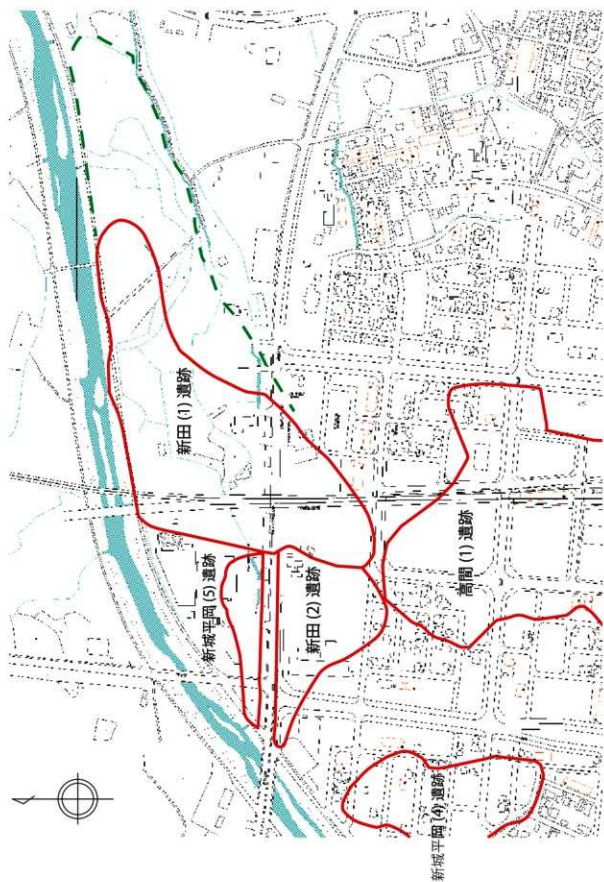
北陸古代土器研究会 1997『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器類編』北陸中世土器研究会 1996『第8回北陸中世土器研究会 中世北陸の木野器』

北海道考古学 2009『2009年北海道考古学会研究大会資料集 歴史文化における地域交流と交易』

北海道大学・天野哲也 2004 『シンボジウム「蝦夷からアイヌへ」』
本郷和夫 天野 2011 『謎とき平海城』 文藝春秋 文藝新書
埋蔵文化財研究会 1996 『第39回埋蔵文化財研究会集合同年報』 本郷和夫・張生剛らによる平安期にかけての木製食器
本郷和夫 2006 『蝦夷の考古学』 同人社団
本郷和夫 2011 『蝦夷とは誰か』 同人社団
本郷和夫 2011 『東北北部における古代集落とその居住者』 『東国の地域考古学』 19, 325-338
本郷和夫 2012 『古代の東北北部における集落の盛衰を読む』 『北から生まれた中世の中心』 19, 27-48
本郷和夫 2013 『本州東北部にアイヌ語系地名を残したのは誰か?』 『考古学研究』 60-1(237) 頁. 55-75
本郷和夫 2013 『東国の土器と官衙遺跡』 六一書房
丸山清治 2011 『ツアラを指標とした古代集落研究の方法 - 青森県の平安時代集落事例に -』 『弘前大学大学院地域社会研究紀年報』 第8号 19, 7-27
丸山清治 2012 『ツアラを指標とした古代土器編年とその地域差 - 青森県における9世紀後半～10世紀の土器群 -』 『紀要』 XXXI 頁. 25-48 (公財) 財団法人青森県埋蔵文化財センター
丸山清治 2013 『To a - B to ツアラを指標とした古代集落研究』 『紀要』 XXXII 頁. 27-48 (公財) 財団法人青森県埋蔵文化財センター
三浦京子・黒沢はるみ 1989 『平安時代の青森土器について - 土器とは何か -』 『研究紀要』 6 頁. 49-60 財団法人青森県埋蔵文化財調査委員会
『研究紀要』 1990 『日本海北部における古代後半から中世にかけての土器群』 31-39
『シンボジウム「土器からみた中世社会の成立」』 19, 29-42
三浦京子 1994 『古代東北地方の土器の形成と地域』 『北日本の考古学』 19, 149-174
三浦京子 2005 『平安後期の北奥世界 - 林ノ前遺跡 - 新田(1) 遺跡の意義 -』 『東アジアの古代文化』 125号 19, 76-99
三浦京子 2006 『北奥の巨大防衛性集落と交易 - 官衙類似遺跡』 『歴史評説』 678 頁. 70-84
三河真子 2007 『古代土器への使用方法 - 青森県八戸地域のスズ・コグ観察より -』 『青森県考古学』 第15号 19, 51-74
水口山由紀子 1991 『武蔵国における中世成立期の煮炊土器小考』 『埼玉考古学論集』 19, 961-974
水野卓二 2013 『発掘調査レポート』 『新刊発見! 日本の歴史』 6, 27
光谷和幸 2007 『第1回年輪年代法による新田(1)、高岡(1) 遺跡出土木材の年代測定』 『石江遺跡群発掘調査報告書』 19, 281-285
藤島泰紀 2010 『北方文化の史的展開と玉権』 『東洋学』 87(2) 頁. 38-48
宮澤公雄 編 1998 『研究報告集』 遺跡・遺物から何を読みとるか? 中央大学山梨文化財研究所
宮田健一 2008 『土器付着現代物による古文化の研究』 平成18～19年度科学研究費補助金若手研究(C) 研究成果報告書
宮本敏・中川光生・田中勇三・吉田まさ枝 2004 『白濁山10世紀噴火の噴火履歴』 『東北アジア研究センター』 第16号 19, 15-43
向井裕浩 2010 『中世加賀の町場と区画』 『都市を区画する』 19, 75-87
村井章介・斎藤利男・小口雅康 2002 『北奥の日本世界 - 書きかえられる津軽安藤氏』 山川出版
村井章介 2011 『見直される境界空間』 『根津美術館紀要』 第3号 19, 65-111
村田洋 2012 『東北地方出土平安時代陶磁器編年集成』 青森県・秋田県。『紀要』 XXXI 頁. 85-96 (公財) 財団法人青森県埋蔵文化財センター
村田洋 2013 『東北地方の平安時代陶磁器編年集成(2) - 青森県・秋田県における出土状況の整理 -』 『紀要』 XXXII 頁. 69-82 (公財) 財団法人青森県埋蔵文化財センター
望月精司 1999 『北陸型青森式土器の出現と成立過程 - 加賀地域及び小松市周辺遺跡の事例検討を中心として -』 『北陸の考古学』 16(石川県考古学研究会誌第42号) 19, 147-166
望月精司 2007 『北陸西部地域における縄文時代の移民集落 - 移民式土器具と板状物類群 - 集落経営の観点から -』 『日本考古学』 第23号 19, 67-88
森隆 1991 『近江系陶磁器の編年と器形の系譜に関する若干の試論』 『考古学雑誌』 76-4 19, 388-417
森勇一 2012 『ムシの考古学』 越山閣
八重樫忠房 2012 『考古学からみた北の中世の黎明』 『北から生まれた中世日本』 19, 175-199
八木光則・神原雄一郎 1999 『III 考古』 『前野遺跡』 19, 132-136 盛岡市教育委員会
八木光則 2006 『陸奥北平上における横綱土器群の導入』 『陶磁器の社会史 - 古岡藤樹先生古稀記念論集』 19, 155-170
八木光則 2006 『北奥の赤地土器』 『考古学の諸問題 - 飯沼秀一先生古稀記念論文集』 19, 743-758
八木光則 2007 『書評松本達彦「蝦夷の考古学」』 『日本考古学』 第23号 19, 115-120

八木光則 2010 『古代蝦夷社会の成立』 同成社
八木光則 2011 『北奥の古代末期陶磁器』 『古代中世の蝦夷社会』 19, 55-90
八木光則 2011 『書評』 総合 青森県史編纂委員会編『新青森市史 通史編 第1巻 原典・古代・中世』 読んで『法政史学』 76 19, 48-68
八木光則 2011 『杜松台考』 『中世土器研究論集』 19, 17-36
柳澤和明 2003 『京都府稲葉郡群から多賀城にもたらされた須恵器群』 『中世土器の基礎研究』 X 19, 29-50
山内清芳 1979 『日本先史土器の調査』 史学考古学会 示入社
ヨーゼフ・クワイナー・吉成直樹・小口雅康 2010 『古代末期の境界世界 - 城久遺跡群と石江遺跡群を中心として -』 法政大学国際日本学研究所
義江彰夫・入間田宣史・斎藤利男 編 2006 『十和田湖が語る古代北奥の謎』 校倉書房
吉岡康徳 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
志摩宗太郎 1979 『94』 幼 幼 『日本歴史大辞典』 919, 430-431 河出書房新社
和泉秀一 2007 『秋風 - 日本列島北方の在来民族』 十和田市史
渡辺晃史 2010 『新田(1) 遺跡出土木製の遺物』 『古代中世の境界世界 - 城久遺跡と石江遺跡群を中心として -』 19, 289-300
渡辺一 2006 『古墳時代の農業生産の研究』 青本書店
Cook, E.R., P., Krusic, K.J., Anohshvili, B.M., Buckley, T., Nakazuka, M., mmo and IMAGES Asia2k Members 2012 Tree-ring reconstructed summer temperature anomalies for temperate Asia since 800 C.E. Climate Dynamics, 39, 10, 1097-1098382-012-1611-x
愛知県 2012 『愛知知史 別編 農業 2 中世・近世 瀬戸湾』
愛知県 2007 『愛知知史 別編 農業 3 中世・近世 瀬戸湾』
青森県 2001 『青森県史 自然編 地学』
青森県 2003 『青森県史 考古 4 中世・近世』
青森県 2005 『青森県史 資料編 考古 3 弥生～古代』
青森県 2008 『青森県史 資料編 考古 2 出土文字資料』
青森県 2010 『青森県史 文化財編 美術工芸』
青森県 2013 『青森県史 資料編 考古 2 縄文前期・晩期』
青森市 2005 『新青森市史 資料編 2 古代・中世』
青森市 2006 『新青森市史 資料編 1 考古』
青森市 2011 『新青森市史 通史編 原典・古代・中世』
秋田県立博物館 2002 『印刷本精舎の山(写本)』
奥沢町教育委員会 青森県土木現業所 1979 『奥沢町青森遺跡区図録』
青森県教育委員会 1977 『石上神社遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第35集
青森県教育委員会 1978 『青森市内三内跡遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第37集』
青森県教育委員会 1980 『大平遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第32集
青森県教育委員会 1980 『大野町砂丘平遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第33集
青森県教育委員会 1980 『龍岡古館遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第54集
青森県教育委員会 1987 『関根遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第302集
青森県教育委員会 1990 『中岡館遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第129集
青森県教育委員会 1994 『内真部(4) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第198集
青森県教育委員会 1993 『山元(3) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第150集
青森県教育委員会 1994 『稲刈村久米田遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第363集
青森県教育委員会 1995 『水木遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第173集
青森県教育委員会 1998 『河川(2) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第232集
青森県教育委員会 1998 『開川(4) 遺跡・堤川(12) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第234集
青森県教育委員会 2002 『清水遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第331集
青森県教育委員会 2003 『宮元遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第399集
青森県教育委員会 2004 『宮元(2) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第380集
青森県教育委員会 2004 『向田(35) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第373集
青森県教育委員会 2005 『倉越(2) 遺跡・大池遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第389集
青森県教育委員会 2005 『高島遺跡群跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第383集
青森県教育委員会 2005 『山元(1) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第365集
青森県教育委員会 2006 『林ノ前遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第415集
青森県教育委員会 2007 『赤平(2) 遺跡・赤平(3) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第438集
青森県教育委員会 2008 『ふくへ(2) 遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第457集
青森県教育委員会 2009 『新田(2) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第471集

- 青森県教育委員会 2009『新田(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第472集
 青森県教育委員会 2009『米山(2)遺跡Ⅱ・宮田館遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第473集
 青森県教育委員会 2009『青森県道線分佈調査報告書21』青森県埋蔵文化財調査報告書第476集
 青森県教育委員会 2009『西倉山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第477集
 青森県教育委員会 2010『青森県道線分佈調査報告書22』青森県埋蔵文化財調査報告書第493集
 青森県教育委員会 2011『坂元(1)遺跡・坂元(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第505集
 青森県教育委員会 2012『中平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第518集
 青森県教育委員会 2012『臨島城跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第522集
 青森県教育委員会 2013『十三遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第526集
 青森県教育委員会 2001『新野町野跡発掘調査報告書Ⅱ・野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第54集
 青森県教育委員会 2003『雲谷山(4)～(5)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第65集
 青森県教育委員会 2003『沢尻(3)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第67集
 青森県教育委員会 2003『市内遺跡発掘調査報告書11』青森県埋蔵文化財調査報告書第69集
 青森県教育委員会 2004『市内遺跡発掘調査報告書12』青森県埋蔵文化財調査報告書第74集
 青森県教育委員会 2004『江渡遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第75集
 青森県教育委員会 2007『合子沢松(3)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第93集
 青森県教育委員会 2007『石江遺跡群発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第94集
 青森県教育委員会 2008『新野町野跡発掘調査報告書Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第98集
 青森県教育委員会 2010『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第106集
 青森県教育委員会 2011『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第107集
 青森県教育委員会 2011『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第108集
 青森県教育委員会 2012『市内遺跡発掘調査報告書20』青森県埋蔵文化財調査報告書第110集
 青森県教育委員会 2012『野尻部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第111集
 青森県教育委員会 2012『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第112集
 青森県教育委員会 2013『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第113集
 青森県教育委員会 2013『市内遺跡発掘調査報告書21』青森県埋蔵文化財調査報告書第114集
 八戸市教育委員会 1990『沼ノ沢平遺跡発掘調査報告書Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第50集
 八戸市教育委員会 2000『東北縦貫自動車道開拓埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第51集
 八戸市教育委員会 2006『保森館遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第84集
 八戸市教育委員会 2011『八戸市内遺跡発掘調査報告書28』八戸市埋蔵文化財調査報告書第134集
 弘前市教育委員会 2001『早稲田遺跡・福富遺跡発掘調査報告書』
 弘前市教育委員会 2006『保森館遺跡発掘調査報告書』
 五所川原市教育委員会 2003『五所川原須磨寺跡跡群』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集
 五所川原市教育委員会 2013『十三遺跡跡群』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第33集
 浪岡町教育委員会 2004『野尻(4)遺跡』浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第10集
 野辺地町教育委員会 2003『明成(4)遺跡・明成(5)遺跡・野辺地製田(11)遺跡』野辺地町文化財調査報告書第9集
 野辺地町教育委員会 2007『二十平(1)遺跡』野辺地町文化財調査報告書第15集
 白石町教育委員会 1995『根岸(2)遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第4集
 白石町教育委員会 1995『根岸(2)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』文化財調査報告書第5集
 蓬田村教育委員会 2000『五松台(3)遺跡』蓬田村文化財調査報告書第2集
 富山大学文学部考古学研究室 2002『津軽川山城跡』富山大学考古学研究室報告書第7冊
 秋田県教育委員会 2001『中谷地遺跡』秋田県文化財調査報告書第316集
 秋田県教育委員会 2006『樋口遺跡』秋田県文化財調査報告書第411集
 秋田県教育委員会 2007『鴨巻船跡・鴨巻山遺跡・鴨巻川遺跡』秋田県文化財調査報告書第422集
 秋田県教育委員会 2008『駒込中台(1)遺跡』秋田県文化財調査報告書第425集
 秋田県教育委員会 2008『地蔵堂遺跡』秋田県文化財調査報告書第434集
 大館市教育委員会 2012『大館野跡発掘調査報告書』大館市文化財調査報告書第5集
 大館市教育委員会 2013『福田道下遺跡発掘調査報告書』大館市文化財調査報告書第8集
 横手市教育委員会 2009『大島井山遺跡』横手市文化財調査報告書第32集
 金ヶ崎町教育委員会 2012『平成23年度前九年合戦・安田氏研究事業資料「安田氏のうつろい様相絵・島南庵跡跡の出土土器を中心に」』
 岩手県埋蔵文化財センター 1985『黄金堂遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第86集
 盛岡市教育委員会 1999『前野遺跡・浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書1』
 北上市教育委員会 2006『上須ヶ原遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告書第79集
 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査事務所 2010『多賀城跡 政庁跡補遺編』
 日光二荒山神社 1963『日光男体山・山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店
 (財)長野県埋蔵文化財センター 1990『中央自動車道長野県埋蔵文化財発掘調査報告書4-松本市市内の1-総論編』(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4
 (財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター 1999『上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書26-更埭市内 その5-更埭菜里遺跡・屋代遺跡群(含む大塚遺跡、窪所原遺跡)-古代Ⅱ・中世・近世編-』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書42
 (財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター 2000『上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書27-更埭市内 その6-更埭菜里遺跡・屋代遺跡群(含む大塚遺跡、窪所原遺跡)-総論編-』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書54
 新潟県教育委員会 1994『北陸自動車道土越市春日・木田地発掘調査報告書Ⅳ-1之口遺跡跡地区』新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集
 財団法人石川県埋蔵文化財センター 2007『平成19年度境日本海文化史調査研究集日本海地域における古代の歴史-本報製紙業を中心として-発表要旨・資料集』
 財団法人石川県埋蔵文化財センター 2012『石川県埋蔵文化財情報』第27号
 田原市博物館 2013『龍美苑 国宝を生んだその美と技(展示図録)』
 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010『反方遺跡・反方の塚跡・南春日町丹山遺跡・勝持寺81境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-8
 大宰府市教育委員会 2000『大宰府桑坊跡Ⅴ』大宰府市の文化財第49集



※参考図 石江遺跡群の周辺の立地状況について

結 語

石江土地区画整理事業用地及び東北新幹線建設事業用地内で発掘調査が実施された遺跡は、新田（1）遺跡、新田（2）遺跡、高間（1）遺跡、高間（6）遺跡、新城平岡（2）遺跡、新城平岡（4）遺跡、新城平岡（7）遺跡の計7遺跡である。石江土地区画整理事業は、平成13・14年度の試掘・確認調査の成果をうけ、平成15年度から本調査が実施され、10年を超えた平成25年度に最後の調査区の調査を終了し、本報告をもって埋蔵文化財に関する全ての業務が完了することとなる。

開発事業に対する円滑な調整をはかるため、莫大な費用・人力が投下され、開発行為で破壊される埋蔵文化財包蔵地の情報を記録・保存する作業は、本市はもとより全国各地で執り行われており、これまで知られることの無かった新たな知見を得る成果が数多く報告されている。その反面、数多くの遺跡が失われているのもまた事実である。発掘調査報告書は、ある意味、遺跡の死亡診断書のような記録情報である。近年、コストの軽減や発掘調査の迅速化と報告書刊行の迅速化が促される状況ではあるが、失われる情報に対して適正な対応が必要であると考える。

本事業は、開発事業に対する調整の結果、工事工程に即した調査対応が優先され、発掘調査報告書の刊行が調査時から年月を経た時点で本格的な刊行となった。結果的に、調査時に新田（1）遺跡で木簡や木製祭祀具等の出土で注目された状況から一呼吸空いた時点での報告ができ、五所川原市十三盛遺跡に代表される本遺跡と同時期の類似の遺跡の成果などと比較可能な状況の下、製作を進められることとなった。

本報告の総括の中で一部触れたが、考古学などの歴史学は過去に起こりえた歴史行為を現在の時点で再解釈を行い、意味づけする行為が成されている。それは現在の学問領域の価値判断により成されるものであり、今後解釈が変わる恐れが十二分にある。その意味で、研究の最前線に即した迅速な公表も確かに重要であるが、これから先の研究素材となり得る基礎情報の蓄積として系統立った整理を行うこと、開発事業との円滑な推進のための調整に即したこのような報告書の刊行スケジュールについても妥当性があるものと考えられる。

本報告で、石江遺跡群の土地区画整理事業の埋蔵文化財に関する事業は終了するが、区画整理事業エリアは東北新幹線新青森駅と北には国道7号青森西バイパス、南にはJR奥羽本線が東西方向に走っている。東北新幹線新青森開業後、しばらく低調な開発速度ではあるが、本報告に一部成果を取めた家電量販店の建設等付近の開発はわずかながらではあるが、進行しつつある状態である。その他、国道7号西バイパス沿いの電線の地中化の工事等が進められており、青森県文化財保護課の立会いによって工事が進められている。立会い工事の場合、その場その場の対応が必要とされるため、遺構面まで実質的に及んでいるかどうかも部分的な判断による場合があり、周辺地帯の調査状況との比較で確認すると遺構を確認可能である地点でも、その場のみの視点で見ると検出しないという事例も存在し得ることが想定される。県文化財保護課の立会い調査の結果に関する情報は公開されていない状況なので、遺構等に関する影響がない状態で進められたと判断するが、周辺地域と同様の開発は継続しており、今後も同様の措置が行われることが想定される。

また、国道7号青森西バイパスの北側は新城（新田）川に沿って、遺物が採集可能な地点は現在の周知の埋蔵文化財包蔵地の東側に延びる傾向が見られる。青森市東部の露草遺跡や沢田遺跡等開発が進行してしまった地点で様子がかんがえにくい状況が、今後青森市西部地区の海手側の地帯でも展開することが予想される。不時発見での届け出が現実的にはほとんど起こりにくい現状では、地域の歴史の情報を得る機会を失うことにつながるものであり、懸念されるものである。

現時点で、本遺跡群の成果は、報告書の配布機関での閲覧、鳥根大学附属図書館と独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所が進める全国遺跡資料リポジトリプロジェクト（広域版）<http://rar.nii.ac.jp/list/f/jp:02:02201>での発掘調査報告書のPDF公開、他機関の博物館への遺物の貸出等が主立ったものとなっており、市民への還元については青森市史通史編での情報、市民センターで実施している寿大学・大学院という市民講座で情報を伝える程度である。

今後、市内の他の既報済の資料を含め、青森市の地域の歴史を知る上での資料整備と様々な利用のあり方について努めていきたいものである。

（木村 淳一）

石江遺跡群総括一覧表

新田(1)遺跡			遺跡 コード	市町村	遺構番号
				02201	01078
事業名	東北新幹線建設事業	調査主体 青森県教育委員会		報告書 青森市埋蔵文化財調査報告書 第94集	
調査期間	平成16年(2004)6/11~12/10	面積 1,200㎡		所在地 青森県青森市大字石江字高間57-3外	
主な遺構	SI 1 SK 31(溝状1) SN 1 SX 1 SD 20 SP 1(←第116集-3で2棟扱い) SP 385	主な遺物 縄文土器、土師器、瀬文土器、かわらけ、木製品		特記事項 木簡、馬具、漆器、瓦	

新田(1)遺跡			遺跡 コード	市町村	遺構番号
				02201	01078
事業名	東北新幹線建設事業	調査主体 青森県教育委員会 (調査担当:青森県埋蔵文化財調査センター)		報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書 第47集	
調査期間	平成17年(2005)9/26~11/25 平成18年(2006)10/10~11/22 平成19年(2007)4/23~10/26	面積 3,100㎡		所在地 青森県青森市大字新田字忍33外	
主な遺構	SI 1 SK 49 STP 5 カマド状遺構 5 SD 81 SE 11 SX 21 SP 494 竪立柱建物跡 21	主な遺物 縄文土器、石器、土師器、須恵器、瀬文土器、製塩土器、土製支脚、銅鏡、木製品、漆器、土製品、石製品、鉄製品、陶磁器、古銭		特記事項 ・平安時代の環釧から、富巾・木簡等の木製品が出土した。 ・平安時代の環釧から、銅鏡の破片(八枚鏡)が出土した。 ・中世の井戸から、下駄・杵などの木製品が出土した。	

新田(1)遺跡			遺跡 コード	市町村	遺構番号
				02201	01078
事業名	石江土地地区画整理事業	調査主体 青森県教育委員会		報告書 青森市埋蔵文化財調査報告書 第106集-1・2・3、第107集-1、第108集-1・2、第116集-1・2・3	
調査期間	第106集・第107集・第108集 平成15年(2003)6/17~11/28 平成16年(2004)6/29~12/16 平成17年(2005)9/27~11/11 平成18年(2006)4/18~7/28 平成19年(2007)4/23~11/30	面積 7,935㎡		所在地 青森県青森市大字新田字忍42-3・石江字高間56-3外	
主な遺構	第116集-1 平成17年(2005)9/17・18、11/1 平成18年(2006)11/27 平成19年(2007)7/11~7/18、8/8、8/31、9/4	面積 175㎡		所在地 青森県青森市大字新田字忍42-7外	
	第116集-3 平成25年(2013)7/9、7/18、8/26~8/30、10/21~10/23	面積 72.8㎡		所在地 青森県青森市大字新田字忍42-6外	
	第106集・第107集・第108集 SI 35 SK 271(新幹線調査部分6基含む) SE 46 SD 148 SN 67 SX 73 STP 10 SM 3 SF 3 SP 6211(竪立柱建物跡 38a 46)	主な遺物 縄文土器、石器、土師器、須恵器、瀬文土器、鉄製品、木製品、土製品、石製品、人骨等		特記事項 平安時代の遺跡・井戸跡から木簡・木製祭祀具など出土した。	
	第116集-1 SK 3 SE 3 SD 1 SX 4 SP 11	主な遺物 縄文土器、土師器、白磁碗、須恵器、瀬文土器、土製支脚、円筒土器			
	第116集-3 SI 1 SK 6 SN 1 SP 114 SD 3	主な遺物 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瀬文土器、かわらけ、陶器、珠州枕、鉄製品、土製支脚、石製品、焼成粘土塊			

新田(2)遺跡			遺跡 コード	市町村	遺構番号
				02201	01422
事業名	石江土地区画整理事業	調査主体 青森県教育委員会	報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第106集-1、第107集-2・3、第108集-1・2、 第116集-1・2	
調査期間	第106集・第107集・第108集 平成19年(2007)4/23～11/30	面 積 4,970㎡ 314㎡	所在地	青森県青森市大字新田字忍39-1	
	第116集-1 平成17年(2005)9/27、11/11・12 平成18年(2006)11/2、11/6、11/15～ 11/28 平成19年(2007)6/6～6/18、7/11～ 7/18、8/30			青森県青森市大字新田字忍38-2外	
主な遺構	第106集・第107集・第108集 SI 85 (報告時66軒、1軒統合) SK 242 SE 7 SX 106 STP 13 SN 27 SD 50 SP 2232 (雁立柱建物跡 SBa 19)	主な遺物 縄文土器、石器、土師器、須恵器、弥文土器、鉄製品、木製品、土製品、石製品、かわらけ 土師器、須恵器、珠州焼	特記事項	平安時代の漆器から木製祭具など出土した	
	第116集-1 SI 2 SK 12 SE 2 SX 6 SN 1 SD 18 SP 108				

新田(2)遺跡			遺跡 コード	市町村	遺構番号
				02201	01080
事業名	石江土地区画整理事業	調査主体 青森県教育委員会 (調査担当：青森県埋蔵文化財調査センター)	報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第471集	
調査期間	平成19年(2007)5/8～11/9	面 積 5,000㎡	所在地	青森県青森市大字新田字忍39-1外	
主な遺構	SI 46 SK 234 STP 10 SN 4 跡不明 1 SD 67 SE 11 SX 2 SB 12 SP 1827 雁立柱建物跡 SB12	主な遺物 縄文土器(前～晩期)、石器、土製品(蹄形土製品・円盤状土製品)、石製品(石刀)、ミニチュア土器、土偶、土師器、須恵器、弥文土器、石筆、羽口、支脚、土鏡、土瓦、砥石、鉄製品(刀子、鎌、針、網杖状鉄製品)、木製品(漆器碗、箸、下駄、曲物、形代、杖)、古銭、獣骨、珠州、信楽、青磁、白磁	特記事項	縄文時代：丘頂先端の斜面から中～後期を主体とする層で縄遺構を検出。 平安時代：風葬を並ぶように並ぶ漆器(SD73)から木製品をはじめとする多量の遺物が出土。	

新城平岡(2)遺跡				遺跡 コ ー ド	市町村	遺構番号
					02201	01069
事業名	石江土地区画整理事業	調査主体	青森市教育委員会	報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書 第112集-3、第116集-2	
調査期間	平成21年(2009) 4/21~10/15 平成23年(2011) 7/18~9/17	面積	3,307㎡	所在地	青森県青森市大字新城字平岡259-1	
主な遺構	SI 2 SK 21 SN 3 SA 1 STP 1 SX 4 SD 2 SP 1 PC 1 SP 69	主な遺物	縄文土器、石器、漆器、土師器、須恵器、鉄製品、鉄洋、土製品、石製品	特記事項	民地形から縄文時代の漆器出土	

新城平岡(7)遺跡				遺跡 コ ー ド	市町村	遺構番号
					02201	01422
事業名	石江土地区画整理事業	調査主体	青森市教育委員会	報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書 第112集-3	
調査期間	平成22年(2010) 5/7~7/9 平成23年(2011) 7/18~9/17	面積	636㎡	所在地	青森県青森市大字新城字平岡319-1外	
主な遺構	SI 1 SK 3 SE 1 SX 2 SB 3 PC 1 SP 47	主な遺物	縄文土器、石器、土師器、須恵器、鉄洋、土製品、石製品、陶器	特記事項		

新城平岡(4)遺跡				遺跡 コ ー ド	市町村	遺構番号
					02201	01074
事業名	石江土地区画整理事業	調査主体	青森市教育委員会	報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書 第112集-1・2、第116集-2	
調査期間	平成15年(2003) 6/16~10/1 平成17年(2005) 9/2~10/5 平成18年(2006) 7/7~11/15 平成19年(2007) 4/23~6/20 平成20年(2008) 4/21~9/30 平成21年(2009) 7/4~8/5	面積	15,857㎡	所在地	青森県青森市大字新城字平岡386-2外	
主な遺構	SI 69 SK 142 STP 18 SE 2 SN 15 SC 2 SF 2 SP 1508 SB 4 埋設林 2 地設林 1 SX 34	主な遺物	縄文土器、石器、土師器、須恵器、縄文土器、鉄製品、木製品、土製品、石製品、陶器、古銭	特記事項	弥生時代の埋設林、近代の木札、詳細時期不明の「十三仏」等の聖塔婆	

高岡(1)遺跡			遺跡 コ ー ド	市町村	遺構番号
				02201	01070
事業名	東北新幹線建設事業	調査主体	青森市教育委員会	報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書第94編
調査期間	平成16年(2004)6/11~11/12	面積	2,700㎡	所在地	青森県青森市大字石江字高岡109-2外
主な遺構	SI 1 SB 1 (第116集-3で2認定) SK 11 (廣状4) SX 1 SD 8 SP 14	主な遺物	縄文土器、土師器、須恵器	特記事項	

高岡(1)遺跡			遺跡 コ ー ド	市町村	遺構番号
				02201	01070
事業名	石江土地区画整理事業	調査主体	青森市教育委員会	報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書第113集-1~4、第116集-1・2
調査期間	第113集 平成15年(2003)9/16~11/12 平成16年(2004)6/11~11/19 平成17年(2005)4/21~11/11 平成18年(2006)6/20~11/16 平成19年(2007)6/21~11/30 平成20年(2008)4/21~7/11 平成21年(2009)4/22~10/15	面積	98,505㎡	所在地	青森県青森市大字石江字高岡101外
	第116集-1 平成18年(2006)12/1~12/13 平成19年(2007)6/25~6/29、7/4~7/6、7/20、7/25 平成20年(2008)11/4~11/6 平成21年(2009)11/10~11/12		812㎡		青森県青森市大字石江字高岡104-22外
主な遺構	第113集 SI 88 SK 570 SN 32 SA 4 STP 59 SX 60 SD 143 SE 14 SM 7 SC 1 SP 2883 (竪立柱建物跡20、第116集-3で2認定)	主な遺物	縄文土器、石器、弥生土器、土師器、須恵器、縄文土器、かわらけ、陶磁器、鉄製品、鉄滓、木製品、土製品、石製品。(焼夷弾)	特記事項	井戸跡から塔婆(17点出土うち1点は、「寛政三年二月十七日」の紀年銘有)
	第116集-1 SI 1 SK 2 SD 5 SX 5 SP 20		土師器		

高間(6)遺跡				遺跡 コ ー ド	市町村	遺構番号
					02201	01075
事業名	石江土地区画整理事業	調査主体	青森市教育委員会	報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書第116集-1	
調査期間	平成17年(2005) 7/29~10/28 平成18年(2006) 6/14~11/16 平成19年(2007) 11/21~11/29 平成20年(2008) 4/23~6/20 平成21年(2009) 7/16~10/5 平成22年(2010) 5/14~10/13 平成25年(2013) 7/17~8/9	面積	17,644㎡(全体面積積, 488㎡)	所在地	青森県青森市大字石江字高間121外	
主な遺構	SI 5 SK 64 SN 4 SX 15 SD 5 STP 3 SB 3 SP 117	主な遺物	縄文土器、石器、弥生土器、木製品、土師器、陶磁器、土製品、金属製品	特記事項		

再補遺

脱稿後、平成26年1月中旬に愛知学院大学文学部教授藤澤良祐氏に古瀬戸の資料を中心に資料を鑑定頂き、同席した平泉町八重樫忠郎氏・岩手県立博物館羽柴直人氏からも陶磁器等についてご教示を頂く機会を得た。

第三章の補遺編に含める内容であるが、紙幅の都合上、巻末の本項に所収した。

報告書番号	図版	番号	種別	器種	時期	備考
第107集-1	図P1-116	MA142	古瀬戸 ¹⁾	天目茶碗	後期Ⅱ	
第107集-1	図P1-116	MA143	不明	天目茶碗		
第107集-1	図P1-116	MA144	古瀬戸 ¹⁾	天目茶碗	後期	
第107集-1	図P1-116	MA145	古瀬戸 ¹⁾	平碗	後期Ⅲか・IV古	
第107集-1	図P1-116	MA146	古瀬戸 ¹⁾	袴腰形香炉 ¹⁾	後期	
第107集-1	図P1-116	MA147	古瀬戸 ¹⁾	壺か瓶	後期ⅠかⅡ	火熱による軸発泡
第107集-1	図P1-116	MA148	古瀬戸 ¹⁾	壺か瓶	後期ⅠかⅡ	火熱による軸発泡
第107集-1	図P1-116	MA149	古瀬戸 ¹⁾	梅瓶	後期ⅠかⅡ	
第107集-1	図P1-116	MA156	須恵器	壺		
第107集-1	図P1-124	MA468	古瀬戸 ¹⁾	天目茶碗	後期	
第107集-1	図P1-124	MA469	古瀬戸 ¹⁾	天目茶碗	後期	
第107集-1	図P1-124	MA470	瀬戸 ¹⁾	天目茶碗	近世	
第107集-1	図P1-124	MA471	中国産陶器	天目茶碗		
第107集-1	図P1-124	MA472	不明	天目壺?		
第107集-1	図P1-124	MA473	不明	天目壺?		
第107集-1	図P1-124	MA474	古瀬戸 ¹⁾	天目茶碗	後期Ⅲ	
第107集-1	図P1-125	MA475	古瀬戸 ¹⁾	緑軸小皿	後期IV古	
第107集-1	図P1-125	MA476	古瀬戸 ¹⁾	壺か瓶	後期ⅠかⅡ	火熱による軸発泡
第107集-1	図P1-125	MA477	古瀬戸 ¹⁾	小壺	後期	
第107集-1	図P1-125	MA478	古瀬戸 ¹⁾	平碗	後期IV古	
第107集-1	図P1-125	MA479	古瀬戸 ¹⁾	平碗	後期Ⅱ	
第107集-1	図P1-125	MA480	古瀬戸 ¹⁾	筒形香炉 ¹⁾	後期Ⅲか・IV古	
第107集-1	図P1-125	MA481	瀬戸・美濃	丸皿か端反皿	大窯2か大窯1	火熱による軸発泡顕著
第107集-1	図P1-125	MA482	古瀬戸 ¹⁾	壺か瓶	後期ⅠかⅡ	火熱による軸発泡
第107集-1	図P1-125	MA483	古瀬戸 ¹⁾	緑軸小皿	後期Ⅲか・IV古	
第107集-1	図P1-125	MA484	古瀬戸 ¹⁾	壺か瓶	後期ⅠかⅡ	火熱による軸発泡
第107集-1	図P1-125	MA485	古瀬戸 ¹⁾	壺か瓶	後期ⅠかⅡ	火熱による軸発泡
第107集-1	図P1-125	MA486	古瀬戸 ¹⁾	緑軸小皿	後期IV古	
第107集-1	図P1-125	MA491	青磁	碗	15C	発色が悪く黄白色気味
第107集-1	図P1-125	MA492	中国産陶器	小壺		
第107集-1	図P1-126	EM32	白磁	碗	12C	
第107集-3	図P2-070	MA23	古瀬戸 ¹⁾	壺か瓶	後期ⅠかⅡ	火熱による軸発泡

報告書抄録

ふりがな	いしえいせきぐんはつかつちょうきさほうこくしよなな	いっかつこくしよ、かつこくにほんがへん、いしえいせきぐんはつちょうきさほうこくしよなな
書名	石江遺跡群発掘調査報告書Ⅶ	新田(1)・(2)遺跡本文編、石江遺跡群補遺編・分析編5・総括編
副書名	石江土地地区画整理事業に伴う発掘調査	
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書	
シリーズ番号	第116集-3	
編著者名	木村淳一、児玉大成、井上奈穂子、小口雅史、松本建速、市川慎一郎、中村利廣、山口博之、中村隼人、森勇一、能城修一、竹内孝、中村和之、大山幹成、岡田文男、(株)吉田生物研究所、(株)パレオ・ラボ	
編集機関	青森県教育委員会	
所在地	〒038-8505 青森県青森市柳川二丁目1番1号 TEL017-761-4796	
発行年月日	西暦 2014年2月28日	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系 (JGD2000)		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
高間(1)遺跡	青森県青森市大字石江高間004-38外	02201	01070	40° 49' 48"	140° 41' 33"	※1	98,505	
高間(6)遺跡	青森県青森市大字石江高間021外	02201	01075	40° 49' 44"	140° 41' 42"	※2	17,644	
新田(1)遺跡	青森県青森市大字新田字227-7外	02201	01078	40° 49' 59"	140° 41' 33"	※3	7,935	
新田(2)遺跡	青森県青森市大字新田字222-11外	02201	01080	40° 49' 59"	140° 41' 32"	※4	4,970	土地地区画整理事業
新城平岡(2)遺跡	青森県青森市大字新城字岡200-1	02201	01069	40° 49' 41"	140° 41' 15"	※5	3,307	
新城平岡(4)遺跡	青森県青森市大字新城字平岡366-2外	02201	01074	40° 49' 52"	140° 41' 18"	※6	15,857	
新城平岡(7)遺跡	青森県青森市大字新城字平岡319-1外	02201	01422	40° 49' 42"	140° 41' 13"	※7	636	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
高間(1)遺跡	集落跡	縄文・弥生・平安・中世・近世・近代・現代	竪穴建物跡 土坑 井戸跡 溝跡	88軒 570基 14基 143基	縄文土器・石器・弥生土器・土師器・須恵器・弥生土器・かわかけ・陶磁器・木製品・石製品・金銅製品	井戸跡から寛政三年(1231)の紀年銘がある香塔塔。本製大粒灰青が出土		
高間(6)遺跡	散布地	縄文・弥生・平安・近世・近代・現代	竪穴遺構 土坑 廃土状遺構・伊跡	5基 64基 4基	縄文土器・石器・弥生土器・土師器・陶磁器・木製品・土製品・金銅製品	近代以降の木簡1点出土		
新田(1)遺跡	集落跡	縄文・平安・中世・近世	竪穴建物跡 土坑 井戸跡	36軒 271基 47基	縄文土器・石器・続縄文土器・土師器・須恵器・弥生土器・かわかけ・陶磁器・木製品・石製品・金銅製品	本製簡紀尺(1尺)・大粒灰青などの仏教関連遺物と物品・木簡等が出土		
新田(2)遺跡	集落跡	縄文・平安・中世・近世	竪穴建物跡 土坑 井戸跡	85軒 242基 7基	縄文土器・石器・土師器・須恵器・弥生土器・かわかけ・陶磁器・木製品・石製品・金銅製品	本製簡紀尺が出土		
新城平岡(2)遺跡	集落跡	縄文・平安・近代	竪穴建物跡 土坑	2軒 21基	縄文土器・石器・土師器・須恵器・陶磁器・石製品・土製品・金銅製品	縄文時代後期の漆器跡が出土		
新城平岡(4)遺跡	集落跡	縄文・弥生・平安・中世・近世・近代	竪穴建物跡 土坑 井戸跡	69軒 142基 2基	縄文土器・石器・土師器・須恵器・弥生土器・陶磁器・木製品・石製品・土製品・金銅製品	弥生時代の埋石板を出土した跡が不明(十三区)等の後継墓が出土		
新城平岡(7)遺跡	集落跡	縄文・平安・中世・近世	竪穴建物跡 土坑	1軒 3基	縄文土器・石器・土師器・須恵器・陶磁器・土製品			
要約	青森市西部に所在する石江遺跡群のうち、新田(1)遺跡と新田(2)遺跡に関する本文、青森県教育委員会(調査担当青森県埋蔵文化財調査センター)が報告した新田(1)遺跡と新田(2)遺跡の追加資料を含む補遺資料、石江遺跡群に関する分析、総括を収めた。 本報告をもって石江土地地区画整理事業に関する埋蔵文化財調査事業は完了した。							

調査期間

- ※1 第1次 2008098～1102、第2次 2009001～1119、第3次 2009021～1111、第4次 2009029～1116、第5次 2007021～1130、第6次 2009021～0711、第7次 20090122～1015
 ※2 第1次 20080729～1020、第2次 2009001～1116、第3次 2007121～1129、第4次 2009010～0620、第5次 2009070～1005、第6次 20100210～1013、第7次 20101217～0809
 ※3 第1次 2008017～1128、第2次 2009029～1216、第3次 2009027～1111、第4次 20090109～0728、第5次 20070123～1130
 ※4 2008023～1130
 ※5 第1次 2009001～1015、第2次 20110718～0917
 ※6 第1次 20100006～1001、第2次 20100002～1005、第3次 20080707～1115、第4次 20070120～0620、第5次 20090121～0930、第6次 20090704～0805
 ※7 第1次 20100007～0706、第2次 20110718～0917

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財 1982 『三内遺跡発掘調査報告書』

- * 2 1985 『青森市遺跡調査報告書』
- * 3 1987 『三内遺跡発掘調査報告書』
- * 4 1979 『三内九山遺跡発掘調査報告書』
- * 5 1971 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 6 1971 『三内水鏡遺跡発掘調査報告書』
- * 7 1971 『大内遺跡調査報告書』
- * 8 1973 『新内遺跡発掘調査報告書』
- 1979 『新内遺跡』
- 1983 『新内遺跡発掘調査報告書』

青森市の埋蔵文化財 1983 『山形野遺跡』

- 1985 『森森遺跡発掘調査報告書』
- 1986 『山形野遺跡発掘調査報告書』
- 1987 『新内遺跡発掘調査報告書』
- 1988 『三内九山1遺跡発掘調査報告書』

青森市の埋蔵文化財調査報告書

- * 第16集 1991 『山形(1)遺跡発掘調査報告書』
- * 第17集 1992 『埋蔵文化財出土資料調査報告書』
- * 第18集 1993 『三内九山(2)遺跡発掘調査報告書』
- * 第19集 1993 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第20集 1993 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- * 第21集 1994 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第22集 1994 『三内遺跡発掘調査報告書』
- * 第23集 1994 『三内九山(2)-3三内遺跡発掘調査報告書』
- * 第24集 1995 『新内遺跡-横穴(2)遺跡発掘調査報告書』
- * 第25集 1995 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第26集 1995 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第27集 1996 『新木(1)遺跡発掘調査報告書』
- * 第28集 1996 『三内九山(2)遺跡発掘調査報告書』
- * 第29集 1996 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第30集 1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- * 第31集 1997 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第32集 1997 『新木(1)遺跡発掘調査報告書』
- * 第33集 1997 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第34集 1997 『新木(2)遺跡発掘調査報告書』
- * 第35集 1997 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- * 第36集 1998 『新木(1)遺跡発掘調査報告書』
- * 第37集 1998 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第38集 1998 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第39集 1998 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第40集 1998 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- * 第41集 1998 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第42集 1998 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第43集 1999 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第44集 1999 『新木(2)遺跡発掘調査報告書』
- * 第45集 1999 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- * 第46集 1999 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第47集 1999 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第48集 2000 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第49集 2000 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第50集 2000 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- * 第51集 2000 『新木(1)-貫石(2)遺跡発掘調査報告書』
- * 第52集 2000 『大内武野田(1)遺跡調査報告書』
- * 第53集 2000 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第54集 2001 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第55集 2001 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- * 第56集 2001 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第57集 2001 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第58集 2001 『大内武野田(1)遺跡発掘調査報告書』
- * 第59集 2001 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第60集 2002 『小牧野遺跡発掘調査報告書』

青森市の埋蔵文化財調査報告書

- * 第61集 2002 『大内武野田(1)遺跡発掘調査報告書』
- * 第62集 2002 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第63集 2002 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第64集 2002 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第65集 2002 『新木(1)-貫石(2)遺跡発掘調査報告書』
- * 第66集 2002 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第67集 2002 『新木(2)遺跡発掘調査報告書』
- * 第68集 2002 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第69集 2002 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第70集 2002 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- * 第71集 2004 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第72集 2004 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第73集 2004 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第74集 2004 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第75集 2004 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第76集 2005 『新木(2)遺跡発掘調査報告書』
- * 第77集 2005 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第78集 2005 『三内九山(3)遺跡発掘調査報告書』
- * 第79集 2005 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第80集 2005 『新木(2)遺跡発掘調査報告書』
- * 第81集 2005 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第82集 2006 『大内武野田(1)遺跡発掘調査報告書』
- * 第83集 2006 『新木(2)遺跡発掘調査報告書』
- * 第84集 2006 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第85集 2006 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- * 第86集 2006 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第87集 2006 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第88集 2006 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第89集 2006 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第90集 2007 『新木(1)遺跡発掘調査報告書』
- * 第91集 2007 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第92集 2007 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第93集 2007 『新木(2)遺跡発掘調査報告書』
- * 第94集 2007 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第95集 2008 『新木(1)遺跡発掘調査報告書』
- * 第96集 2008 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第97集 2008 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第98集 2008 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第99集 2008 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第100集 2008 『新木(1)遺跡発掘調査報告書』
- * 第101集 2008 『大内武野田(1)遺跡発掘調査報告書』
- * 第102集 2008 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第103集 2008 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第104集 2008 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第105集 2008 『新木(2)遺跡発掘調査報告書』
- * 第106集 2008 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第107集 2009 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第108集 2009 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第109集 2009 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第110集 2009 『新内遺跡発掘調査報告書』
- * 第111集 2009 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第112集 2009 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第113集 2009 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第114集 2009 『新木遺跡発掘調査報告書』
- * 第115集 2009 『大内武野田(1)遺跡発掘調査報告書』
- * 第116集 2004 『新木遺跡発掘調査報告書』

青森市埋蔵文化財調査報告書第116集-3

石江遺跡群発掘調査報告書Ⅶ

—石江土地区画整理事業に伴う発掘調査—

第3分冊 新田(1)・(2)遺跡本文編、石江遺跡群補遺編・
分析編5-地括編

発行年月日 2014年(平成26年)2月28日

編 集 青森市教育委員会
〒038-8505 青森県青森市柳川二丁目1番1号
TEL. 017-761-4796

印 刷 青森コロニー印刷
〒030-0943 青森県青森市幸畑字松元62-3
TEL. 017-738-2021